

RED DATA BOOK 2016 IBARAKI

茨城における
絶滅のおそれのある
野生生物

動物編

2016年改訂版
(茨城県版レッドデータブック)



茨城県

茨城における 絶滅のおそれのある 野生生物

動物編

2016年改訂版
(茨城県版レッドデータブック)

茨城県

はじめに



茨城県は、広大な関東平野の一部をなし、霞ヶ浦などの湖沼や利根川などに代表される河川、筑波山や八溝山などの緑の山野、190 kmにも及ぶ海岸線などにより、変化に富んだ良好な自然環境が形成されています。

また、本県は、温帯から暖帯に移り変わる位置にあるため、北方系や南方系の多種多様な動物が生息しており、昨年5月には水鳥などの生息地である潟沼が、国際的に重要な湿地としてラムサール条約に登録されました。

野生生物は、生態系の重要な構成要素であることはもとより、私たち人間の豊かな生活に欠くことのできないものですが、開発や森林の伐採、里地里山の手入れ不足や乱獲、さらには地球温暖化などにより、絶滅が心配される種も多く見られるようになっております。

県では、これまで、「茨城県環境基本計画」や「茨城県希少野生動植物保護指針」を策定し、野生生物の保護や生息環境の保全に努めてきたところです。

また、「豊かな自然を守り、環境と調和した生活を送ることができる県」を目指すうえで、生物多様性の保全や生態系の持続可能な利用がこれまで以上に重要となる中、県では、一昨年の10月に「茨城の生物多様性戦略」を策定し、希少生物の保護・保全などに取り組んでおります。

そして、県内の野生動物の現状を的確に把握し、より一層の保全・保護対策を進めるため、絶滅のおそれのある種の見直しに向けて、最新の知見に基づく評価・検討を進め、平成25年3月の茨城県版レッドデータブック植物編の改訂に続き、この度、平成12年3月に作成した動物編の改訂をとりまとめました。

人と自然との共生を図りながら、豊かな生物多様性の恵みを享受し、次の世代に引き継いでいくことは、私たちの果たすべき重要な責務であります。

多くの県民の皆様にご覧いただき、県内の希少野生動物の現状やその保全の大切さについて理解を深めていただくとともに、生物多様性保全のための基礎資料として広く活用いただければ幸いです。

平成28年3月

茨城県知事 橋本 昌

目次

CONTENTS

はじめに

総論

- 1 レッドデータブック動物編の改訂について… 1
- 2 茨城の地勢と動物相…………… 7
- 3 絶滅危惧種の選定…………… 12
- 4 選定種一覧…………… 16

各論

- 1 哺乳類
 - 1) 概要…………… 35
 - 2) 対象種の解説…………… 37
 - 3) 文献一覧…………… 44
- 2 鳥類
 - 1) 概要…………… 46
 - 2) 対象種の解説…………… 48
 - 3) 文献一覧…………… 82
- 3 爬虫類
 - 1) 概要…………… 84
 - 2) 対象種の解説…………… 85
 - 3) 文献一覧…………… 88
- 4 両生類
 - 1) 概要…………… 89
 - 2) 対象種の解説…………… 91
 - 3) 文献一覧…………… 97
- 5 淡水・汽水魚類
 - 1) 概要…………… 99
 - 2) 対象種の解説…………… 102
 - 3) 文献一覧…………… 119
- 6 昆虫・クモ類
 - 1) 概要…………… 121
 - 2) 対象種の解説…………… 130
 - 3) 文献一覧…………… 257
- 7 その他の無脊椎動物
 - 1) 概要…………… 270
 - 2) 対象種の解説…………… 275
 - 3) 文献一覧…………… 320

和名索引 …………… 323

總論

1 レッドデータブック動物編の改訂について

1) 希少野生動植物の保護

地球上には、多種多様な野生動植物が生息・生育している。これらの野生動植物は、生態系の重要な構成要素であるだけでなく、人類の豊かな生活に欠くことのできないものである。

しかしながら、人間活動による生息地の破壊や減少、さらには乱獲や外来生物による生態系の攪乱等により、多くの野生動植物が絶滅の危機に瀕している。

急激な動植物種の減少は生態系のバランスに変化をもたらし、私たちの生活基盤にも影響を及ぼすことが懸念される。多種多様な動植物種を保存し、人と野生生物との共存を図っていくためには、野生動植物の生息・生育環境の保全や乱獲の防止、絶滅のおそれのある種の保護・管理など、生物多様性の保全に向けた様々な取り組みが必要である。

野生動植物を人為的に絶滅させないためには、絶滅のおそれのある種を的確に把握し、一般への理解を広める必要がある。そのための基礎的情報源として、国や地方自治体においては、「レッドリスト」や「レッドデータブック」が作成されている。

また、平成5年4月には「絶滅のおそれのある野生動植物種の保存に関する法律」（「種の保存法」）が施行され、希少野生動植物種指定による捕獲・譲渡の禁止や保護増殖事業の実施等、各種の措置を講じていく仕組みが整備された。現在は、この法律をはじめ、レッドデータブック等の活用により、希少野生動植物の保護が図られているところである。

このような中、平成20年6月には、生物多様性の保全と持続可能な利用を総合的・計画的に推進することで、豊かな生物多様性を保全し、その恵みを将来にわたり享受できる自然と共生する社会を実現することを目的として、「生物多様性基本法」が施行され、わが国における生物多様性施策を進めるうえでの基本的な考え方が示された。

また、平成22年10月に名古屋で開催された「生物多様性条約第10回締約国会議（COP10）」で採択された「愛知目標」や平成24年9月に閣議決定した「生物多様性国家戦略2012－2020」においても、絶滅危惧種の絶滅・減少の防止のため、生息・生育環境の整備の推進が目標の一つとして位置付けられるなど、希少野生動植物の保護の重要性が高まってきていることから、平成26年10月に「茨城の生物多様性戦略」を策定し、平成27年4月に設置した生物多様性センターにおいて、生物多様性の保全及び生態系の持続可能な利用に関する施策を推進している。

2) 茨城県版レッドデータブック動物編改訂の必要性

茨城県には、ニホンモモンガや（ツクバ）ハコネサンショウウオをはじめ、多くの希少な野生動物が生息している。これらの保護を図るためには、野生動物の現状を的確に把握し、適切な施策を講じることが必要であることから、本県では、平成12年3月に「茨城における絶滅のおそれのある野生生物〈動物編〉」を作成し、希少野生動物保護対策の基礎資料として活用を図ってきたところである。

また、平成16年3月には、「茨城県希少野生動植物保護指針」を策定し、県内に生息・生育する希少野生動植物の保護のあり方について基本的な考え方を整理するとともに、開発事業を行う際の手続きや今後実施すべき保護施策について取りまとめを行った。

野生動物の生息状況は常に変化しており、レッドデータブックにおける評価は、一定期間の後には見直す必要がある。県内でも、各地の動物調査が進み、生息地の環境の変化や新たな生息地の発見など、多くの情報が集積されてきたことから、平成25年6月に専門家からなる「茨城における絶滅のおそれのある野生動物種の見直し検討委員会」（委員長 山根爽一 茨城大学名誉教授）を設置し、県内の野生動物の現状についての詳細な検討に基づいて、平成27年3月に新たなレッドリストとして取りまとめた。

今回作成したレッドデータブックは、改訂したレッドリストについて、個々の種の生息状況や減少の理由について解説を加えたものである。さらに、国の第4次レッドリストの評価や最新の知見により、一部見直しを行い、追加変更したものである。

県内における絶滅のおそれのある野生動物の現状と保護の大切さについて考えるきっかけとするほか、各種開発や計画等において希少動物保護への配慮を促すなど、絶滅のおそれのある種の保存をはじめとする生物多様性の確保に関する施策を推進していくための基礎資料として活用を図っていくこととしている。

レッドリスト・レッドデータブックについて

レッドリストとは、絶滅のおそれのある野生動植物種を選定し、生物学的観点から個々の種の絶滅の危険度を評価してリスト化したものである。

また、このレッドリストに掲載された種について、絶滅のおそれのある原因や生息状況等について詳しく解説し取りまとめたものがレッドデータブックである。

昭和41年に国際自然保護連合（IUCN）が世界の絶滅のおそれのある野生動物をレッドリストとして初めて公表したのが始まりで、この第1版の表紙が赤い色をしていたことから、レッドデータブックやレッドリストと呼ばれるようになった。

国内では、平成元年の（財）日本自然保護協会と（財）世界自然保護基金日本委員会による「我が国における保護上重要な植物種の現状」の発刊を契機にレッドデータブックの整備を行っている。新たな情報や知見を反映するための改訂も行われており、平成24年度には新たな第4次レッドリストが取りまとめられ公表された。

また、地方自治体においても、それぞれの地域性を配慮しながら、独自のレッドリストやレッドデータブックが整備されている。

3) 検討委員会及び協力者

茨城県版レッドデータブック動物編の改訂にあたっては、「茨城における絶滅のおそれのある野生動物種の見直し検討委員会」において、各種ごとの詳細な検討を行うとともに、多くの関係者からのご協力をいただいた。

○茨城における絶滅のおそれのある野生動物種の見直し検討委員会（敬称略）

※所属は平成28年3月現在

・検討委員会

委員長	山根 爽一	茨城大学名誉教授
副委員長	山崎 晃司	東京農業大学地域環境科学部
副委員長	久保田正秀	(一財)自然環境研究センター
	佐々木泰弘	茨城県立太田第一高等学校
	池野 進	日本野鳥の会茨城県
	早瀬 長利	茨城県生活環境部環境政策課
	加納 光樹	茨城大学広域水圏環境科学教育研究センター
	大桃 定洋	筑波昆虫談話会
	森野 浩	茨城大学名誉教授
	小菅 次男	茨城生物の会

・哺乳類

分科会長	山崎 晃司	(検討委員会副委員長兼務)
	竹内 正彦	(独)農研機構中央農業総合研究センター

・鳥類

分科会長	池野 進	(検討委員会委員兼務)
	石井 省三	日本野鳥の会茨城県

・爬虫・両生類

分科会長 早瀬 長利 (検討委員会委員兼務)
小菅 次男 (検討委員会委員兼務)

・淡水・汽水魚類

分科会長 加納 光樹 (検討委員会委員兼務)
増子 勝男 茨城県立土浦第一高等学校
稲葉 修 南相馬市博物館
諸澤 崇裕 (一財) 自然環境研究センター

・昆虫・クモ類

分科会長 大桃 定洋 (検討委員会委員兼務)
山根 爽一 (検討委員会委員長兼務)
久保田正秀 (検討委員会副委員長兼務)
塩田 正寛 水戸昆虫研究会
佐々木泰弘 (検討委員会委員兼務)
成田 行弘 茨城生物の会
井上 尚武 茨城県立高萩高等学校
久松 正樹 ミュージアムパーク茨城県自然博物館
渡辺 健 茨城県病害虫防除所
勝間 信之 (株) 環境研究センター
小野 展嗣 (独) 国立科学博物館
廣瀬 誠 茨城県環境アドバイザー
菅波 洋平 前高萩市教育委員会

・その他無脊椎動物

分科会長 森野 浩 (検討委員会委員兼務)
坂寄 廣 茨城生物の会
池澤 広美 ミュージアムパーク茨城県自然博物館
稲葉 修 (淡水・汽水魚類委員兼務)
桐原 幸一 茨城生物の会
芳賀 拓真 豊橋市自然史博物館
茅根 重夫 茨城生物の会

○総論執筆者 (敬称略)

山根 爽一 石井 和浩

○各論執筆者 (敬称略)

・哺乳類

安井さち子 藤本 竜輔 山崎 晃司 竹内 正彦

・鳥類

池野 進 石井 省三

・爬虫・両生類

小菅 次男 吉川 夏彦 早瀬 長利

・淡水・汽水魚類

加納 光樹 金子 誠也 諸澤 崇裕 稲葉 修 棗田 孝晴
碓井 星二 増子 勝男

・昆虫・クモ類

岸本 了	渡辺 健	内船 俊樹	大桃 定洋	井上 尚武
成田 行弘	柳田 紀行	櫻井 浩	西山 明	公文 暁
疋田 直之	廣瀬 誠	塩田 正寛	佐々木泰弘	有賀 俊司
林 恵治	佐藤 和明	勝間 信之	久松 正樹	小野 展嗣

・その他無脊椎動物

池澤 広美	茅根 重夫	森野 浩	芳賀 拓真	坂寄 廣
中山 聖子	桐原 幸一	稲葉 修	諸澤 崇裕	

○協力者（敬称略）

・哺乳類

小松茉莉奈	長岡 浩子	大曾根 勝	斉藤 理	家根橋圭佑
-------	-------	-------	------	-------

アクアワールド茨城県大洗水族館

・爬虫・両生類

須賀 英明

・淡水・汽水魚類

猿渡 敏郎	萩原 富司	丸山 隆	斉藤 裕也	篠原 現人
山崎 裕治	宮崎 淳一	相木 寛史	渋川 浩一	福井 正人
渡辺 敬晴	田中 宏典	川口 貴光	荒山 和則	根本 隆夫
須能 紀之				

・昆虫・クモ類

廣瀬 誠	櫻井 浩	柳田 紀行	小菅 次男	高橋 晴彦
平井 剛夫	高橋 敬一	公文 保幸		

・その他無脊椎動物

益田 芳樹	亀田 勇一	倉持 利明	外山 健夫	中山 聖子
佐藤 慎一	根本 隆夫	秋山 昌範	堤 徳郎	川名美佐男
福田 宏	吉村 武雄	須賀 英明	長谷川和範	山西 良平
大越 和加	駒井 智幸	加納 光樹	金子 誠也	広瀬 雅人
西 浩孝	国立科学博物館			

○写真、図提供者（敬称略）

・哺乳類

安井さち子	藤本 竜輔	小菅 次男	吉武和治郎	林 典子
古橋 光洋	山崎 晃司	染谷 保	桃井 尊央	

アクアワールド茨城県大洗水族館

・鳥類

中村 栄	杉山 好子	岸 久司	明日香治彦	斎藤 玲子
石川 皓	伊澤 泰彦	小玉 和夫	飯田 直己	牛山 武美
徳元 茂	若山 侑蔵	石田 光史	池田 昇	小柳 恵
西野 正義	野尻 智治	山根 靖正	仲田 立	根本 信二
神田愛恵子	多田 恒雄	榎田 昭	杉山みどり	塚本 英夫
中西 榮子	小泉 金次	川崎 慎二		

・爬虫・両生類

根本 正壱	稲葉 修	小菅 次男	池澤 広美	早瀬 長利
吉川 夏彦	染谷 保			

・淡水・汽水魚類

加納 光樹	諸澤 崇裕	稲葉 修	金子 誠也	増子 勝男
荒山 和則	渋川 浩一	渡辺 重行	川口 貴光	

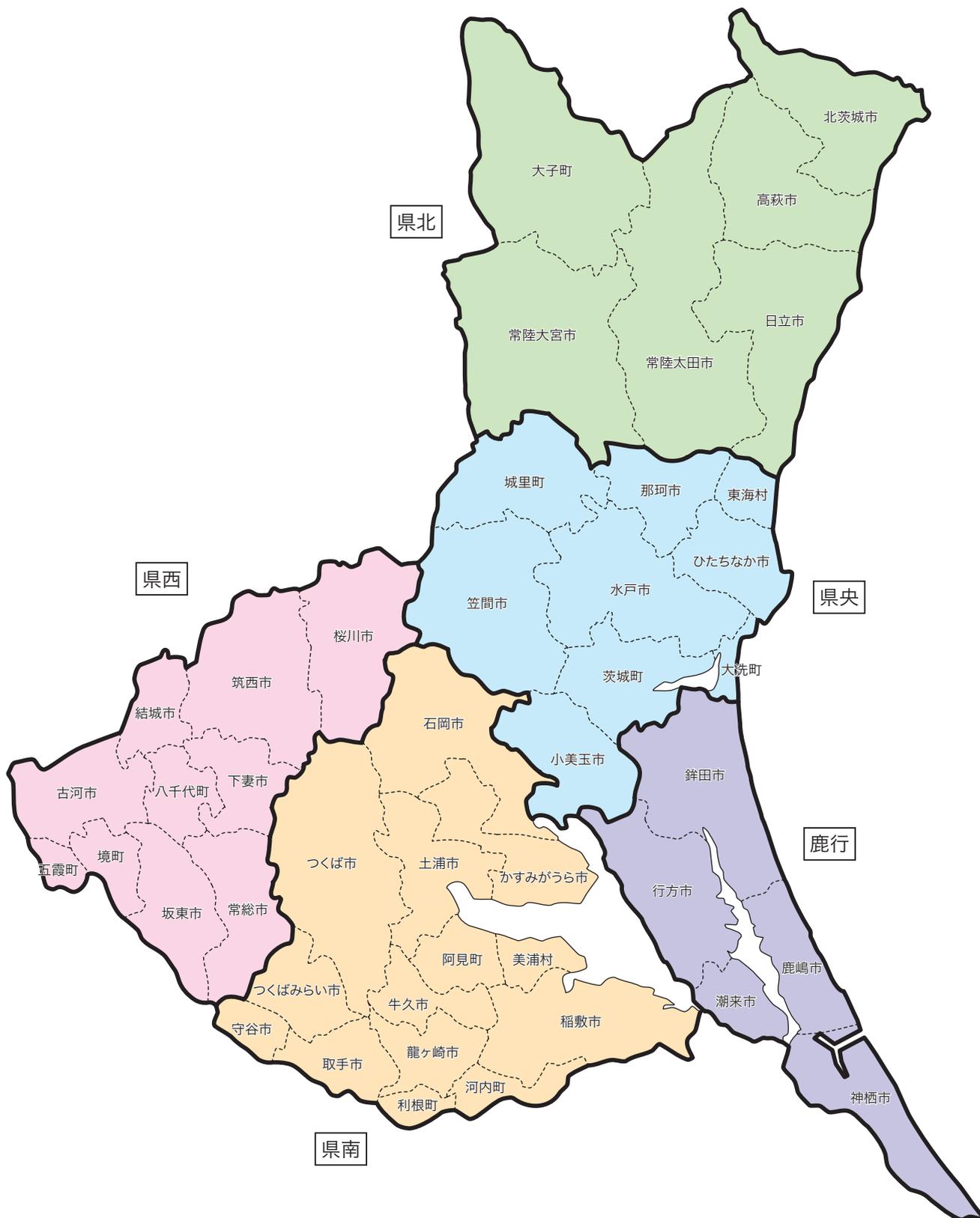
・昆虫・クモ類

東城 幸治	染谷 保	今井初太郎	岸本 亨	佐々木泰弘
井上 尚武	成田 行弘	小菅 次男	櫻井 浩	柳田 紀行
森田 誠司	公文 暁	西山 明	平井 剛夫	渡辺 健
大桃 定洋	廣瀬 誠	塩田 正寛	林 恵治	佐藤 和明
釣巻 岳人	勝間 信之	村上義千代	久松 正樹	荻沼 正和
小野 展嗣	神奈川県立生命の星・地球博物館			

・その他無脊椎動物

池澤 広美	益田 芳樹	藤元 香世	茅根 重夫	岩田 文男
外山 信夫	芳賀 拓真	亀田 勇一	福田 宏	長谷川和範
諸澤 崇裕	稲葉 修	小松 浩典	近藤 智彦	大越 和加
井上 久夫	小池 涉	森野 浩	根来 尚	中山 聖子
広瀬 雅人	西 浩孝	国立科学博物館	富山市科学博物館	

4) 茨城県の地域区分図



2 茨城の地勢と動物相

1) 地 勢

本県は関東地方の北東部に位置し、南部には関東平野の延長である平地や低い丘陵が、北部には比較的低い山地が広がる。県土の総面積は 6,096 km²であるが、そのうち丘陵や湖沼・河川も含めた平地が約 70%を占め、山地は約 30%を占めるに過ぎない。平野部が広いため可住地面積は広くおよそ 65%を占める。東側は太平洋に面しており、その海岸線の延長は 190 km に及ぶ。

北部の山地は、宮城県に発する阿武隈高地の南端部にあたる多賀山地と久慈山地、及び八溝山地からなる。県内の最高峰は八溝山（標高 1,022 m）で、その他は 200～800 m の比較的低い山地を成す。多賀山地は久慈川の支流である里川の東側に位置し、その南端は高萩市や日立市に至り、最高点は栄蔵室の 881.6 m である。久慈山地は太子町から常陸太田市に至る里川と久慈川に挟まれた山地で、袋田の滝や多くの溪谷を含み、最高点は男体山の 654 m である。八溝山地は福島県の白河市南部に始まるが、県内では八溝山塊を始め、その南の栃木県沿いに連なる鷲の子山塊、鶏足山塊、筑波山塊（筑波山、877 m）からなる。

県西・県南の平野部には、常総台地とも呼ばれる関東ロームの赤土に覆われた洪積台地が広がり、古くから人々に生活の場を提供すると共に、果樹栽培や畑作に利用されてきた。洪積台地より低い平地は沖積低地で、そこでは稲作が行われてきた。また、丘陵の浸食によって谷ができた谷津田があちこちに形成され、豊かな里地・里山的自然を作っている。

本県には日本の湖沼で 2 番目の面積をもつ霞ヶ浦（西浦・北浦・外浪逆浦などを合わせた水域の総称）をはじめ、牛久沼、菅生沼、汽水湖の潤沼などがある。その面積の合計は 487 km²で県土の 8%を占める。また、河川には多賀山地の大北川、久慈山地と八溝山地を分ける久慈川とその支流の里川、栃木県に発し水戸市を経てひたちなか市で太平洋にそそぐ那珂川、県西・県南の平野部を流れる小貝川と鬼怒川、千葉県境に沿って流れる利根川などがあり、湖沼と共に豊かな陸水環境を作る。なお、久慈川水系茂宮川の河口には県内で数少ない干潟が発達し、独特の生物相を発達させている。

本県の海岸線のうち福島県境から日立市にかけての北部は切り立った崖が多く、大洗付近ではなだらかな岩礁を形成している。それより南の鉾田市から神栖市にかけての海岸には砂浜が広がり、夏には海水浴場として賑わい、また、アカウミガメの産卵地としても知られる。沖合では南下する親潮（千島海流）と北上する黒潮（日本海流）がぶつかり、共に東に向きを変える。沿岸の表層海水温は夏には 20℃を超えるが、冬には 10℃以下となる。

本県の気候は、冬季は少雨乾燥、夏季には多雨多湿の太平洋側気候を呈する。また、沿岸部は海洋性気候のため夏は冷涼で冬は暖かいが、内陸部は内陸性気候で逆の傾向を示す。年平均気温（1981～2010 年の平均値）は山地を除いて 12～14℃の間にあり、北部の太子町で 12.2℃、県央の水戸市で 13.6℃、県南の土浦市で 14.4℃、太平洋岸の鹿島市では 14.5℃などとなっている。8 月の平均気温は 23～26℃、1 月は県北の山地を除くと 2～4.5℃の間にある。また、近年の地球温暖化の進行に伴って、各地で猛暑日や熱帯夜の日数が増加してきた。年間降水量はおよそ 1,200～1,600 mm の範囲にあるが、北部山地と鹿行地方は多く内陸部では少ない。筑波山頂付近では 1,100 mm と少ない。本県は豪雪地帯に指定される地域を持たない県として、太平洋側では最北端に位置するが、南岸低気圧や北東気流の影響を受けて、特に、南西部の山間地では大雪に見舞われることがある。

2) 動物相

本県は太平洋に面した日本列島のほぼ中央に位置し、沿岸では南下する親潮と北上する黒潮がぶつかることもあって、北方系と南方系の海洋生物が混在する。陸地においても茨城を分布の北限あるいは南限とする動物が多い。県土の相当部分が平野部で、最高点も 1,000 m をわずかに超える程度で低いいため、おおざっぱに見て、我が国中部の平野部から低山地にかけての典型的な動物相と共通する点が多い。平野部には霞ヶ浦や潤沼などの大きな海跡湖をはじめ、那珂川や久慈川などの河川もあって、豊かな水生動物相が見られる。特に、汽水湖である潤沼の湖岸に発達するヨシ原の湿地には、20 世紀

後半に発見され、新種として記載された希少生物のヒヌマイトトンボが生息する。

○ 哺乳類

本県の哺乳類相の特徴としては、隣県の栃木県や福島県と異なり、近世・近代以降ツキノワグマやニホンカモシカ、ニホンジカ、ニホンザルといった大型の動物が分布しなかったことがあげられる。これらの動物は古い時代には県内にも分布していた形跡はあるが、少なくとも最近の100年以上にわたって生息が確認されていない。その中で、ニホンイノシシは分布、個体数ともに増加の傾向が見られる。また、近年、ツキノワグマとニホンカモシカが県北に再出現したことが確認されている。

中型の動物としては、タヌキとキツネが低山地を始め、平野部から丘陵地帯にかけて生息している。これらの両種は宅地開発や道路の建設などにより、生息地が失われたり分断されている一方で、人為的な餌資源や廃屋などを利用するしたたかさを見せる。外来種のハクビシンとアライグマは近年、県内でも分布を拡大し、個体数も増加しつつある。

小型の動物としては、ヤマネやニホンモモンガが県北の山地に生息するが、その個体数はかなり少ないと推測される。従来は普通に見られたニホンリスとムササビも林の分断化や大径木の減少などにより、近年その数を減じている。ネズミ類、コウモリ類共に調査が十分ではなく、分布域や生息密度についての情報は極めて限られている。

○ 鳥類

本県の山塊は総じてなだらかで、古くから人々が関わってきたため原生の自然は少ないが、霞ヶ浦や酒沼の湖岸、利根川下流域の湿生草地などは、近年まで原生状態が比較的よく保存されてきた。日本鳥類目録改定第7版（日本鳥類学会）によると、2015年5月現在、本県からは393種知られるが、陸水環境の豊かさを反映して陸鳥よりも水鳥が多い。鳥類は地球規模で移動するので、毎年1～2種が新たに加わり、県産鳥類の種数は徐々に増える傾向にある。一方、都市開発や道路建設による生息地の消滅・減少、高齢化など社会構造の変化に伴う里地・里山の荒廃などにより、かつてはごく普通に生息していた種や渡りの途中で飛来する鳥類の種数・個体数が共に減少している。

鳥類が必要とする餌資源量は季節によって変動するので、鳥たちはそれに対応する必要がある。特に、1年を通して人里や低山地の比較的限られた地域内に留まって暮らす留鳥は、季節によって餌の種類を変えているが、多くの鳥にとって、里山は環境の劣化が進んで安住の地でなくなりつつある。一方、豊富な餌資源を求め、季節によって移動する渡り鳥がある。渡り鳥には、ツバメのように夏に低緯度地方から日本各地に飛来して繁殖する夏鳥と、オオヒシクイのように、冬季に寒さを避けるため高緯度地方から日本に飛来し越冬する冬鳥がある。さらに、移動の途中に一時的に立ち寄るシギ・チドリ類のような旅鳥がある。これら渡り鳥にとっても、移動先の環境が開発などによって年々悪化している。

八溝山、花園山、筑波山など、比較的高い山地のブナ林などで夏に見られる鳥には、ミソサザイ、コマドリ、コルリ、アカハラ、コノハズクなどがあるが、コマドリやコノハズクは個体数が少なく絶滅の危機にある。標高が数百メートルあるいはそれ以下の低い丘陵には、カワガラス、トラツグミ、オオルリ、サンコウチョウなどが生息する。原生的な林に生息するクマタカやアカジョウビンは、人の干渉を受けにくいいため、少数ではあるが個体数は比較的安定している。しかし、鳴き声に人気のあるコマドリは高い密猟圧に曝されている。

平野部の洪積台地や沖積低地にある平地林や社寺林、人家の周りの畑や水田は、野鳥のよい生息場所になっており、スズメを始め、ウグイスやシジュウカラ、ホオジロ、コゲラ、サシバ、オオタカなどが見られる。サシバ、アオバズク、アマサギなどは農耕との関わりが深い。従来、人里でよく見られたアオバズクやカクコウは昆虫食だが、近年著しく個体数を減らしている。

低地の干潟や湿地は、人目には無価値に見えるが、シギやチドリ類にとっては春と秋の渡りの中継点として大切な栄養補給の役割を果たす。県南地域の人工的な湿地である水田は、ツルシギやムナグロなどの重要な中継地となっていたが、減反政策による変貌が著しく、収穫後に水位の下がったハス

田が辛うじて中継地や越冬地の役割を果たしている。

霞ヶ浦や潤沼などの湖沼や大小の農業用溜め池には、冬になるとカモ類を始め多くの水鳥が集まる。霞ヶ浦湖岸の稲敷市稲波干拓地は、関東地方で唯一のオオヒシクイの越冬地であるが、民間団体の努力に支えられて近年飛来数が増加し念願の100羽を超えた。一方で、大きな湖沼に住む魚食性のカワアイサは1970年代の3桁から近年は数羽に激減した。

太平洋に面した日立市十王町海蝕崖はウミウの生息地として知られるが、毎年春と秋に許可を得て捕獲し鵜飼用として全国に出荷されている。また、冬になるとウミネコやカモメ類、クロガモなど多くの鳥でにぎわう。鹿島灘の砂浜には、夏になるとカモメの仲間のコアジサシが繁殖のために飛来するが、人間活動の影響を受けて雛が孵らないことも多い。

○ 爬虫類

日本にはカメ目が5科15種（ウミガメ科については、県の海岸で産卵の確認されているアカウミガメのみ含める）、トカゲ目はトカゲ亜目が6科49種、ヘビ亜目が9科57種知られている。本県では、これらのうちカメ目4科5種、トカゲ亜目3科3種、ヘビ亜目2科8種が記録されている。この中には、外来種のうち繁殖が確認され、分布域、個体数とも増加傾向にあるミシシippアカミミガメを含む。

カメ目では、従来クサガメとイシガメは普通種だったが、近年は減少が著しい。若齢個体がミドリガメの名で売られている外来種のミシシippアカミミガメが、近年県内各地に分布を広げて繁殖し生息数を増やしており、在来種の生息を圧迫していると懸念される。スッポンは、霞ヶ浦周辺で時々捕獲されるが、それ以外の場所では生息地が減少している。

ウミガメ類では、アカウミガメが産卵のため鹿島灘から日立市にかけての砂浜海岸を訪れる。2011年3月に発生した東日本大震災で本県の海岸も津波に襲われ、海岸の環境が大きく変化した場所もあるが、幸い県内の砂浜海岸は現在も産卵場として使われている。

トカゲ亜目では、ニホンヤモリ、ニホントカゲ、ニホンカナヘビの3種が確認されている。トカゲとカナヘビが減少傾向にある中、ニホンヤモリは近年、県内での分布域は拡大し生息数も増えている。ヘビ亜目では8種が確認されているが、どの種も生息数は減少傾向にある。中でも、ヒバカリとシロマダラ、タカチホヘビの3種は、生息の確認地点が少なく個体数も少ない。

○ 両生類

日本産の両生類は、有尾目（サンショウウオ目）が3科32種、無尾目（カエル目）は5科48種が知られる。これらのうち、茨城県には有尾目が2科5種、無尾目は4科10種の分布が確認されている。有尾目のサンショウウオ科では、近年、分類学上の大きな変更があった。従来、日本のハコネサンショウウオ属（*Onychodactylus*）はハコネサンショウウオ1種とされてきたが、吉川夏彦博士らのDNA解析の研究によって6種に細分された。それによると、本県に生息し従来ハコネサンショウウオとされてきた集団は3種に分けられることになった。中でもツクバハコネサンショウウオは、日本のハコネサンショウウオ属の中で分布範囲がもっとも狭い種のひとつである。

サンショウウオ類は溪流や湧き水などのきれいな水に住むため、近年の開発行為などによる生息適地の破壊や水質の悪化によって、どの種も個体数が激減している。イモリやクロサンショウウオ、トウキョウサンショウウオは、山間部の林道や水田圃場整備等の影響を強く受けている。

無尾目のうち、アズマヒキガエル、トウキョウダルマガエル、ツチガエル、シュレーゲルアオガエルは平地や低山地に生息し、アカガエルは山地の池など、タゴガエルとカジカガエルは山地の源流部や溪流に住む。いずれも、近年の開発行為や河川改修、水質の悪化などによって、生息地も個体数も減少しつつある。なお、モリアオガエルは、隣接する千葉県と栃木県、福島県には生息するが、これまで本県での生息は確認されていない。

○ 淡水・汽水魚類

本県では、自然分布する淡水魚類と汽水魚類が70種ほど記録されている。ほとんどの種で開発行為や水質悪化などにより生息地が消失・劣化し、分布域、個体数ともに減少傾向にある。

県北の河川上流域にはニッコウイワナとヤマメが生息するが、河川改修、森林伐採による土砂の流入、堰堤の設置などによって生息適地が減少している。ギバチやシマドジョウなどが棲む中流域も、河川改修の他、生活排水の流入による水質汚濁が深刻な影響を与えている。

下流域から河口域では、生活史の中で海と河川を往来するニホンウナギ、ニホンイトヨ、クルマサヨリなどの回遊が堰堤や水門によって阻害されている。河口域では塩性湿地や干潟の劣化・消失が汽水性ハゼ類の生息地を奪っている。

湖沼やため池と周辺の小河川や水路には、フナ類やジュズカケハゼ、タナゴ類が生息する。霞ヶ浦流域ではタナゴ、ヤリタナゴ、アカヒレタビラなどのタナゴ類が豊富であるが、外来種のタイリクバラタナゴとオオタナゴ以外は減少が目立つ。これらの場所も埋立てや護岸工事、水質汚濁などの影響を受けており、特に、水生植物群落の衰退が様々な魚種の成育や繁殖場所の減少をもたらす原因となっている。オオクチバスやブルーギル、チャンネルキャットフィッシュなどの外来魚による高い捕食圧は、コイ科やハゼ科の生存を脅かしている。水田地帯では圃場整備によってミナミメダカの生息地が減少傾向にある。丘陵地や雑木林の開発は、ホトケドジョウやスナヤツメ北方種など、清流に棲む魚類の生息を困難にしている。

○ 昆虫・クモ類

本県の昆虫（節足動物門、昆虫綱）やクモ類（節足動物門、クモ綱、クモ目）については、これまで在野の研究者や専門家が各地で精力的に採集・調査を行ってきた。しかし、調査対象には偏りがあり、チョウ目（チョウ・ガ類）とトンボ目、コウチュウ目は比較的によく調べられてきたが、その他の多くの目については知識が不足しており今後の調査の進展が待たれる。

これまでに本県から記録された昆虫類は6,000種以上に及ぶが、そのおよそ半分の3,000余種はコウチュウ類である。以下、記録されたおおよその種数で多い順に並べると、チョウ目1,610種（チョウ類110種、ガ類1,500種）、ハチ目642種（ハチ類565種、アリ類77種）、カメムシ目430種、トビケラ目170種、バッタ目108種、トンボ目91種、アミメカゲロウ目63種、カゲロウ目とカワゲラ目、それぞれ50種などである。また、クモ類は340種ほどが記録されている。

本県は霞ヶ浦、涸沼などの湖沼や大小の河川、溜め池、沼などの陸水環境が豊かであり、そこに棲むカゲロウやトンボなどの水生昆虫も豊富である。1971年には、涸沼湖岸の汽水域に広がるヨシ原から新種のイトトンボが発見された。これは20世紀に日本から発見された最後のトンボの新種であり、朝比奈正二郎博士によってヒヌマイトトンボと命名された。しかし、利根川下流域も含めその生息地と生息数は少なく、環境の保全が不可欠である。水辺環境にはババアメンボ、ホッケミズムシなど、水生のカメムシ類も生息するが、いずれも環境悪化による減少が見られる。

カゲロウやトンボ類を始めとする水生昆虫は、幼虫の生息する水辺環境の影響を直接受ける。戦後急増した工場用地造成や都市開発、道路の建設などによる溜め池や沼などの埋め立て、山地においては、林道や堰堤の造成による地形改変や水の汚濁、低地の河川や湖沼においては河川改修や護岸工事、水質の悪化などによって、これらの昆虫の生息環境は著しく劣化した。

茨城県の東側は延長190kmに及ぶ海岸線に面している。旧水戸射爆場の跡地や波崎にかけての海浜には、ヤマトマダラバッタやヒメマダラナガカメムシ、ハリサシガメなどの海浜性昆虫が生息するが、射爆場跡地の大規模開発などによって生息適地が著しく減少した。

コウチュウ類の生息場所は、森林、草原、水辺など多岐にわたるが、近年の生息環境の悪化によって個体数が減りつつある種が多い。チョウ類も森林や草原など、多様な環境に生息するが、広葉樹林やその林縁に棲むシジミチョウ科のゼフィルス類やスジボソヤマキチョウなどは、個体数の減少が著しい。県内では絶滅したと思われたウスバアゲハ（ウスバシロチョウ）は、近年、福島県の個体群が

拡散，南下して県北地域に侵入してきた。一方，近年は，ナガサキアゲハ，ツマグロヒョウモンなどの南方系種が本県に定着し，その分布を広げている。スマレ類を食草とするツマグロヒョウモンは，庭先で栽培される園芸品種のビオラやパンジーなども餌資源としており，これらの栽培植物も分布拡大の一要因になっている。ガ類の生息地も多岐にわたるが，初版時に比べると減少傾向にある種が多い。コエゾゼミとアカエゾゼミは，山地の広葉樹林の中でも標高 500 m 以上に存在する自然度の高いブナ林に生息する。地球温暖化が進む中で，冷涼な気候帯に生育するブナそのものの生存が危ぶまれており，今後のなりゆきを注視しなければならない。一方で，南方系種のクマゼミが，近年，本県にも定着し，県央部まで分布が拡大してきた。

ハチ類のうちカリバチやハナバチ類は比較的良好に調べられてきた。特に，ハナバチ類は近隣県に比べて多い約 150 種が記録されている。一方で，同定のむずかしいハバチ類，コマユバチやヒメバチ類などの寄生蜂は調査が進んでいない。

クモ類の調査は地域による偏りが大きく，県北の山間地域では進んでいるものの，県央，県南などでは情報が不足している。クモ類の多くは草原や藪に生息するが，このような環境を安定して維持するのは容易ではない。また，イソコモリグモのように砂浜海岸に住む種は，開発だけでなく，レジャーなど人間活動の影響に晒され，生存が危ぶまれている。

○ その他無脊椎動物

無脊椎動物は，分類学的には上記の昆虫類やクモ類を除いても，極めて多くのグループを含む。しかも，分類・同定のむずかしいグループが多く，専門的知識をもった研究者でないと扱いにくいいため，調査の行き届いた分類群は限られる。本改訂版では，対象として汽水性の動物を加えたのが大きな変更点である。そして，初版で扱った海綿動物門と扁形動物門，苔虫動物門，軟体動物門，節足動物門甲殻類の 5 門に加え，刺胞動物門と紐形動物門，環形動物門の 3 門を加え，8 つの門を対象とすることになった。軟体動物については，陸生巻貝類の専門家による地道な研究の成果が取り入れられて，充実した内容となった。貝類の生息場所である潤沼・霞ヶ浦や干潟，河川などの陸水環境はもとより，筑波山塊，八溝山塊などの自然林の保全の必要性が改めて認識される。

(山根爽一)

3 絶滅危惧種の選定

対象種を選定するにあたっては、環境省のレッドリスト（2014）および本県のレッドデータブック（2000）において選定されている種、県の特定期動植物分布調査により選定調査された種、その他必要と思われた種について評価検討を行い選定した。なお、ここで対象とする「種」は、原則として種または亜種として、変種、品種、交雑種および外来種は対象外とした。

1) カテゴリーの定義

カテゴリーの定義については前回と同様、環境省と同じカテゴリーを用いた（表1）。ただし、国において改訂があったため、それに準じて変更をした。しかし、各対象種のカテゴリー分類にあたっては、国の示すような定量的データの不十分なものが多いため、県内の実情に沿って各委員の経験や定性的知見から総合的に判断した。

○表1 茨城県レッドリスト〈動物編〉のカテゴリー定義およびその基本概念

絶滅	本県ではすでに絶滅したと考えられる種 (飼育下でのみ生息している野生絶滅を含む)
絶滅危惧Ⅰ類	絶滅の危機に瀕している種。現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、野生での存続が困難なもの
絶滅危惧ⅠA類	ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの
絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠA類程ではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの
絶滅危惧Ⅱ類	絶滅の危険が増大している種。現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、近い将来「絶滅危惧ⅠB類」のランクに移行することが確実と考えられるもの
準絶滅危惧	存続基盤が脆弱な種。現時点での絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」として上位ランクに移行する要素を有するもの
情報不足	評価するだけの情報が不足している種
①注目種	最近県内での生息が確認された種であるが、県内の分布域がまだ十分に調査されていない種
②現状不明種	最近の情報がなく、生息状態が不明の種

2) 選定理由一覧

No.	選定理由
①	生息環境の悪化
②	大部分の個体群における個体数の減少
③	生息地の局限
④	捕獲による減少
⑤	移入種との競合
⑥	交雑可能な別種の侵入

3) 前回のレッドデータブック (2000) との比較

今回は、前回は大きく上回る 397 種が絶滅のおそれがあるとされた。また、前回から 41 種がレッドリストから削除された。これは、県内各地での開発が進んだこと及び前回のレッドリストが公開され、それを基にさらに調査が進んだことにより生息状況や分布域が明らかになってきたことなどによるものと思われる。さらに、63 種を情報不足として指摘し今後の調査課題とした。

○前回 (2000) との比較表

		2000 該当種 (263 種)				追加種	総計
カテゴリー		絶滅種	絶滅危惧種	危急種	希少種		
2016 該当種 (397 種)	絶滅	1	2	1		2	6
	絶滅危惧ⅠA類		17	4	11	18	50
	絶滅危惧ⅠB類		11	18	17	15	61
	絶滅危惧Ⅱ類		5	21	34	58	118
	準絶滅危惧			14	56	92	162
	総計		1	35	58	118	185
	情報不足①注目種		1	3	6	35	45
	情報不足②現状不明種		1		2	15	18
	総計		2	3	8	50	63
	2000 からの削除種		2	6	33		41

○ 2000 年版から削除された種 (41 種)

・ 哺乳類 1 種

種名 (和名)	茨城県 2000	理由
ヤマコウモリ	危急種	生息状況等が確認されていない

・ 鳥 類 15 種

種名 (和名)	茨城県 2000	理由
マガン	危急種	偶発的, 一時的のみの確認とされた
ミサゴ	危急種	生息状況等が安定しているとされた
クロハラアジサシ	危急種	偶発的, 一時的のみの確認とされた
カンムリカイツブリ	希少種	生息状況等が安定しているとされた
シノリガモ	希少種	生息状況等が安定しているとされた
ツミ	希少種	生息状況等が安定しているとされた
ハイイロチュウヒ	希少種	生息状況等が安定しているとされた
コチョウゲンボウ	希少種	生息状況等が安定しているとされた
ウズラシギ	希少種	生息状況等が安定しているとされた
コミミズク	希少種	生息状況等が安定しているとされた
オオコノハズク	希少種	生息状況等が安定しているとされた
コルリ	希少種	生息状況等が安定しているとされた
イソヒヨドリ	希少種	生息状況等が安定しているとされた
オオルリ	希少種	生息状況等が安定しているとされた
サンコウチョウ	希少種	生息状況等が安定しているとされた

・ 爬虫類 1 種

種名 (和名)	茨城県 2000	理由
ニホンヤモリ	危急種	生息状況等が安定しているとされた

・ 昆虫類 19 種

種名 (和名)	茨城県 2000	理由
ブチヒゲカメムシ	絶滅危惧種	生息状況等が確認されていない
スギタニルリシジミ	希少種	生息状況等が安定しているとされた
フトキバスナハラゴミムシ	絶滅危惧種	生息状況等が確認されていない
ハスジチビヒラタエンマムシ	危急種	生息状況等が確認されていない
キイロフナガタコメツキ	危急種	生息状況等が確認されていない

ミネトワダカワゲラ	希少種	同定の変更等があった
カヤキリ	希少種	生息状況等が安定しているとされた
アカスジカメムシ	希少種	生息状況等が確認されていない
ミヤマヒサゴコメツキ	希少種	生息状況等が確認されていない
オオシマオビハナノミ	希少種	生息状況等が確認されていない
タマカイガラヒゲナガゾウムシ	希少種	生息状況等が確認されていない
ツヤコハナバチ	希少種	生息状況等が確認されていない
ケナガチビコバチ	希少種	生息状況等が確認されていない
ナワヒメハナバチ	希少種	生息状況等が確認されていない
オモゴヒメハナバチ	希少種	生息状況等が確認されていない
ヤマテマメヒメハナバチ	希少種	生息状況等が確認されていない
ヤマブキヒメハナバチ	希少種	生息状況等が確認されていない
ニホンセセリモドキ	希少種	生息状況等が確認されていない
ホソオビアシブトクチバ	希少種	生息状況等が確認されていない

・クモ類 1種

種名（和名）	茨城県 2000	理由
ハンゲツオスナキグモ	希少種	生息状況等が安定しているとされた

・その他無脊椎動物 4種

種名（和名）	茨城県 2000	理由
ヒタチチリメンカワニナ	希少種	同定の変更等があった
カントウベッコウ	希少種	同定の変更等があった
ニホンマメシジミ	希少種	同定の変更等があった
マメシジミ	希少種	同定の変更等があった

4 選定種一覧

- ・各分種類（昆虫類については目，その他無脊椎動物については門）についてはカテゴリー別に記載した。
- ・選定理由については，選定理由一覧（p.13）の番号で示した。
- ・環境省，茨城県および近隣の県のカテゴリーはそれぞれのレッドリストに従った。

○分類群およびカテゴリー別集計表

今回選定した絶滅のおそれのある野生動物の種類数は下表のとおりである。

分類群 2016 カテゴリー	哺乳類	鳥類	爬虫類	両生類	淡水・ 汽水 魚類	昆虫類	クモ類	その他 無脊椎 動物	総計
絶滅						5		1	6
絶滅危惧ⅠA類		7			6	27		10	50
絶滅危惧ⅠB類	2	21		2	2	31		3	61
絶滅危惧Ⅱ類	3	21	1	2	9	61	1	20	118
準絶滅危惧	3	10	2	4	9	97	9	28	162
絶滅及び 絶滅危惧 計	8	59	3	8	26	221	10	62	397
情報不足① 注目種	3	9		3	7	11		12	45
情報不足② 現状不明種	2		3			2		11	18
情報不足 計	5	9	3	3	7	13		23	63
2000 からの 削除種	1	15	1			19	1	4	41

選定種一覧

種名	選定理由	環境省 2014	茨城県 2000	福島県 2002・2003	栃木県 2011	埼玉県 2008	千葉県 2011
----	------	-------------	-------------	------------------	-------------	-------------	-------------

1 哺乳類

絶滅危惧ⅠB類 2種

コテングコウモリ	③	—	絶滅危惧種	希少	準絶滅危惧	絶滅危惧Ⅱ類	
ユビナゴコウモリ	③	—	—	未評価	情報不足	絶滅	一般保護生物

絶滅危惧Ⅱ類 3種

カワネズミ	①③	絶滅のおそれのある地域個体群 (九州) LP	—	未評価	絶滅危惧Ⅱ類	地帯別危惧	
ヤマネ	③	—	絶滅危惧種	希少	要注目	準絶滅危惧	
ニホンモモンガ	③	—	—	未評価	要注目	準絶滅危惧	

準絶滅危惧 3種

ニホンリス	①⑤	絶滅のおそれのある地域個体群 (中国、九州) LP	希少種			地帯別危惧	要保護生物
ムササビ	①③	—	希少種			地帯別危惧	
スナメリ	①③	(水産庁) 希少種	—				一般保護生物

情報不足①注目種 3種

ヒナコウモリ	③	—	—	準絶滅危惧	情報不足		情報不足
ツキノワグマ	③	絶滅のおそれのある地域個体群 (下北半島、紀伊半島、四国、東中国、西中国) LP	—	注意		絶滅危惧Ⅱ類	
ニホンカモシカ	③	—	—	注意		地帯別危惧	

情報不足②現状不明種 2種

カヤネズミ	①	—	希少種	希少		準絶滅危惧	
ホンドオコジョ	③	準絶滅危惧	NT	絶滅危惧種 ：オコジョ	希少	情報不足	準絶滅危惧

2 鳥類

絶滅危惧ⅠA類 7種

シラコバト	①②③	絶滅危惧ⅠB類	EN	希少種			絶滅危惧Ⅱ類	重要保護生物
オオヨシゴイ	①②	絶滅危惧ⅠA類	CR	絶滅危惧種	絶滅危惧Ⅰ類		絶滅	消息不明・絶滅生物
ヒクイナ	①②③	準絶滅危惧	NT	危急種	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧ⅠA類	最重要保護生物
オオジシギ	①②	準絶滅危惧	NT	希少種	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧ⅠA類	最重要保護生物
オジロワシ	②③	絶滅危惧Ⅱ類	VU	絶滅危惧種	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧ⅠA類	重要保護生物
アカショウビン	①②	—		危急種	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧ⅠB類	
イワヒバリ	①②	—		希少種		準絶滅危惧	準絶滅危惧	要保護生物

絶滅危惧ⅠB類 21種

オオヒシクイ	②	準絶滅危惧	NT	危急種：ヒシクイ				
コクガン	①②	絶滅危惧Ⅱ類	VU	—	希少			重要保護生物
サンカンゴイ	②	絶滅危惧ⅠB類	EN	絶滅危惧種		絶滅危惧Ⅰ類		最重要保護生物
ササゴイ	①③	—		絶滅危惧種	準絶滅危惧		絶滅危惧Ⅱ類	
クロサギ	①③	—		危急種	希少			要保護生物
クロツラヘラサギ	①③	絶滅危惧ⅠB類	EN	—				最重要保護生物
カッコウ	①②	—		希少種				要保護生物
キリアイ	①②	—		希少種				重要保護生物
タマシギ	①②③④	絶滅危惧Ⅱ類	VU	希少種	希少	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧Ⅰ類	最重要保護生物
オオワシ	②③	絶滅危惧Ⅱ類	VU	危急種	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅰ類		重要保護生物

種名	選定理由	環境省 2014	茨城県 2000	福島県 2002 - 2003	栃木県 2011	埼玉県 2008	千葉県 2011	
チュウヒ	①③	絶滅危惧ⅠB類	EN	危急種	準絶滅危惧	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧ⅠB類	最重要保護生物
イヌワシ	①②	絶滅危惧ⅠB類	EN	絶滅危惧種	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧Ⅰ類	情報不足	
クマタカ	①③	絶滅危惧ⅠB類	EN	絶滅危惧種	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧ⅠB類	
コノハズク	①②③	—		絶滅危惧種	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	準絶滅危惧	
アオバズク	①②	—		希少種	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	地帯別危惧	最重要保護生物
ヤマセミ	①②③	—		希少種		準絶滅危惧	地帯別危惧	重要保護生物
オオセッカ	①②③	絶滅危惧ⅠB類	EN	危急種	未評価	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧ⅠA類	最重要保護生物
コヨシキリ	①②③	—		希少種	準絶滅危惧	準絶滅危惧	絶滅危惧Ⅱ類	一般保護生物
ゴジュウカラ	①③	—		希少種				
コマドリ	①②④	—		危急種				
ホオアカ	①②	—		希少種		準絶滅危惧	絶滅危惧ⅠA類	要保護生物

絶滅危惧Ⅱ類 21種

ウズラ	①②③	絶滅危惧Ⅱ類	VU	—	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧ⅠB類	最重要保護生物
トモエガモ	①②	絶滅危惧Ⅱ類	VU	希少種	希少	準絶滅危惧	絶滅危惧Ⅱ類	重要保護生物
ヒメウ	①	絶滅危惧ⅠB類	EN	—	絶滅危惧Ⅱ類			要保護生物
ヨシゴイ	①②	準絶滅危惧	NT	希少種	絶滅危惧Ⅱ類	準絶滅危惧	絶滅危惧Ⅱ類	最重要保護生物
アマサギ	①②	—		—		準絶滅危惧	情報不足	
ジュウイチ	①	—		希少種				
イカルチドリ	①④	—		希少種			準絶滅危惧	要保護生物
シロチドリ	①②③	絶滅危惧Ⅱ類	VU	希少種		絶滅危惧Ⅱ類	絶滅のおそれのある地域個体群	最重要保護生物
セイタカシギ	①	絶滅危惧Ⅱ類	VU	希少種	希少			最重要保護生物
オオハシシギ	①	—		—				
オオソリハシシギ	①②	絶滅危惧Ⅱ類	VU	—				要保護生物
アカアシシギ	①②	絶滅危惧Ⅱ類	VU	希少種	希少			重要保護生物
ツバメチドリ	①②	絶滅危惧Ⅱ類	VU	希少種			絶滅危惧ⅠA類	最重要保護生物
コアシサシ	①②③④	絶滅危惧Ⅱ類	VU	希少種	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧ⅠB類	最重要保護生物
ハチクマ	①②	準絶滅危惧	NT	希少種	絶滅危惧Ⅱ類	準絶滅危惧	絶滅危惧Ⅱ類	重要保護生物
サシバ	①②	絶滅危惧Ⅱ類	VU	—	準絶滅危惧	準絶滅危惧	絶滅危惧ⅠB類	最重要保護生物
オオアカゲラ	①②	—		希少種	希少	準絶滅危惧	準絶滅危惧	
ハヤブサ	①②③	絶滅危惧Ⅱ類	VU	危急種	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧Ⅱ類	重要保護生物
サンショウクイ	①②③	絶滅危惧Ⅱ類	VU	希少種	準絶滅危惧	準絶滅危惧	絶滅危惧Ⅱ類	消息不明・絶滅生物
コシアカツバメ	①②	—		希少種	希少		絶滅危惧Ⅱ類	重要保護生物
コジュリン	①②	絶滅危惧Ⅱ類	VU	希少種	未評価	準絶滅危惧	絶滅危惧Ⅱ類	最重要保護生物

準絶滅危惧 10種

オシドリ	①	情報不足	DD	希少種		準絶滅危惧	絶滅危惧ⅠB類	重要保護生物
カワアイサ	①②	—		—				
カイツブリ	①④	—		—				要保護生物
ケリ	①②	情報不足	DD	希少種	絶滅危惧Ⅰ類	準絶滅危惧	絶滅のおそれのある地域個体群	最重要保護生物
アオシギ	①③	—		希少種	未評価	絶滅危惧Ⅱ類		消息不明・絶滅生物
オグロシギ	①②	—		—				重要保護生物

種名	選定理由	環境省 2014	茨城県 2000	福島県 2002・2003	栃木県 2011	埼玉県 2008	千葉県 2011	
ツルシギ	①②	絶滅危惧Ⅱ類	VU	—	希少		重要保護生物	
ハマシギ	①②	準絶滅危惧	NT	—			重要保護生物	
オオタカ	①④	準絶滅危惧	NT	危急種	絶滅危惧Ⅰ類	準絶滅危惧	絶滅危惧Ⅱ類	重要保護生物
マミジロ	①②	—		希少種	希少	準絶滅危惧		

情報不足①注目種 9種

ミソゴイ	①③	絶滅危惧Ⅱ類	VU	絶滅危惧種	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧ⅠB類	最重要保護生物
ヨタカ	①②③	準絶滅危惧	NT	希少種		準絶滅危惧	絶滅危惧Ⅱ類	消息不明・絶滅生物
ヒメアマツバメ	①②	—		危急種			絶滅のおそれのある地域個体群	要保護生物
ウミガラス	①②③	絶滅危惧ⅠA類	CR	—				
ケイマフリ	①②	絶滅危惧Ⅱ類	VU	—				最重要保護生物
ハイタカ	①②	準絶滅危惧	NT	希少種	準絶滅危惧	準絶滅危惧	情報不足	重要保護生物
アリスイ	①②	—		希少種			準絶滅危惧	
コサメビタキ	①②③	—		希少種	絶滅危惧Ⅱ類	準絶滅危惧	地帯別危惧	最重要保護生物
ノジコ	①②③	準絶滅危惧	NT	—	注意	絶滅危惧Ⅱ類		

3 爬虫類

絶滅危惧Ⅱ類 1種

アカウミガメ	①③	絶滅危惧ⅠB類	EN	危急種	希少			最重要保護生物
--------	----	---------	----	-----	----	--	--	---------

準絶滅危惧 2種

タカチホヘビ	①③	—		希少種	未評価	情報不足	絶滅危惧Ⅱ類	
シロマダラ	①③	—		希少種	希少	情報不足	地帯別危惧	重要保護生物

情報不足②現状不明種 3種

ニホンシシガメ	①②⑤	準絶滅危惧	NT	—	未評価	情報不足	絶滅危惧Ⅱ類	最重要保護生物
ニホンスッポン	①②④	情報不足	DD	—		情報不足	準絶滅危惧	情報不足
ヒバカリ	①②④	—		—	希少	要注目	絶滅危惧Ⅱ類	一般保護生物

4 両生類

絶滅危惧ⅠB類 2種

ツクバハコネサンショウウオ	①③④	—		危急種：ハコネサンショウウオ				
ハコネサンショウウオ	①③	—		危急種			準絶滅危惧	

絶滅危惧Ⅱ類 2種

バンドイハコネサンショウウオ	①③	—		危急種：ハコネサンショウウオ				
クロサンショウウオ	①③	準絶滅危惧種	NT	絶滅危惧種		要注目	情報不足	

準絶滅危惧 4種

トウキョウサンショウウオ	①②③	絶滅危惧Ⅱ類	VU	危急種	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	最重要保護生物
アカハライモリ	①②	準絶滅危惧	NT	—	準絶滅危惧	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧ⅠA類	最重要保護生物
タゴガエル	①②	—		希少種			準絶滅危惧	重要保護生物
カジカガエル	①③	—		希少種	希少	要注目	地帯別危惧	重要保護生物

情報不足①注目種 3種

アズマヒキガエル	①②	—		—		要注目		要保護生物
----------	----	---	--	---	--	-----	--	-------

種名	選定理由	環境省 2014	茨城県 2000	福島県 2002 - 2003	栃木県 2011	埼玉県 2008	千葉県 2011
ツチガエル	①②	—	—	準絶滅危惧	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	最重要保護生物
トウキョウダルマガエル	①②	準絶滅危惧	NT	—	未評価	準絶滅危惧	重要保護生物

5 淡水・汽水魚類

絶滅危惧ⅠA類 6種

ニシン湖沼系群	①②③④	絶滅のおそれのある地域個体群	LP	—				
ゼニタナゴ	①②③④	絶滅危惧ⅠA類	CR	絶滅危惧種	絶滅危惧Ⅰ類		絶滅	消息不明・絶滅生物
ニッコウイワナ	①②③④⑥	情報不足	DD	絶滅危惧種：イワナ(天然個体群)		要注目	準絶滅危惧	
ヤマメ無斑型	①③⑥	準絶滅危惧	NT	絶滅危惧種：無斑型ヤマメ			準絶滅危惧	
ゴクラクハゼ	①②③	—	—				情報不足	
マサゴハゼ	①②③	絶滅危惧Ⅱ類	VU	—				

絶滅危惧ⅠB類 2種

タナゴ	①②③④	絶滅危惧ⅠB類	EN	危急種	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅	最重要保護生物
アカヒレタビラ	①②③④	絶滅危惧ⅠB類	EN	危急種	準絶滅危惧	絶滅危惧Ⅰ類	情報不足	重要保護生物

絶滅危惧Ⅱ類 9種

スナヤツメ北方種	①②③	絶滅危惧Ⅱ類	VU	希少種：スナヤツメ	準絶滅危惧	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧ⅠB類	最重要保護生物
ヤリタナゴ	①③④	準絶滅危惧	NT	危急種	準絶滅危惧	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧ⅠA類	地域により重要保護/要保護/対象外
ホトケドジョウ	①②	絶滅危惧ⅠB類	EN	希少種	希少	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧ⅠB類	要保護生物
ギハチ	①②	絶滅危惧Ⅱ類	VU	危急種	希少	準絶滅危惧	絶滅危惧Ⅱ類	重要保護生物
ウツセミカジカ	①②⑥	絶滅危惧ⅠB類	EN	希少種：回遊型カジカ		要注目(カジカ小卵型)		
シロウオ	①②	絶滅危惧Ⅱ類	VU	希少種	未評価			一般保護生物
ミミズハゼ	①②	—	—	—				
ジュズカケハゼ	①②③	準絶滅危惧(広域分布種)	NT	—	未評価	絶滅危惧Ⅱ類	準絶滅危惧	最重要保護生物
ヒモハゼ	①②③	準絶滅危惧	NT	—				

準絶滅危惧 9種

ニホンウナギ	①②④	絶滅危惧ⅠB類	EN	—				
キンブナ	①②	絶滅危惧Ⅱ類	VU	—	未評価	準絶滅危惧	準絶滅危惧	要保護生物
シマドジョウ	①②⑤	—	—	—		準絶滅危惧	準絶滅危惧	要保護生物
ミナミメダカ	①②③⑤⑥	絶滅危惧Ⅱ類	VU	希少種：メダカ	準絶滅危惧			
クルマサヨリ	①②③	準絶滅危惧	NT	—			情報不足	要保護生物
カジカ	①②③	準絶滅危惧	NT	—	準絶滅危惧	要注目	準絶滅危惧	
オオヨシノボリ	①②③	—	—	希少種				
エドハゼ	①②③	絶滅危惧Ⅱ類	VU	—			絶滅危惧ⅠB類	一般保護生物
ピリngo	①②③	—	—	—			絶滅危惧Ⅱ類	一般保護生物

情報不足①注目種 7種

カワヤツメ	①③	絶滅危惧Ⅱ類	VU	危急種	未評価		情報不足	
ミツバヤツメ	①③	絶滅のおそれのある地域個体群(栃木県ミツバヤツメ)	LP	—		絶滅危惧Ⅰ類		
ミヤコタナゴ	①②③④	絶滅危惧ⅠA類	CR	—		絶滅危惧Ⅰ類	野生絶滅	最重要保護生物
ニホンイトヨ	①②③	絶滅のおそれのある地域個体群	LP	危急種：降海型イトヨ				
カワアナゴ	①	—	—	希少種			絶滅危惧Ⅱ類	

種名	選定理由	環境省 2014	茨城県 2000	福島県 2002・2003	栃木県 2011	埼玉県 2008	千葉県 2011
ボウズハゼ	①②③	—	希少種	未評価			
イドミミズハゼ	①③	準絶滅危惧	NT	—			

6 昆虫類

○カゲロウ目

準絶滅危惧 1種

アカツキシロカゲロウ	③	準絶滅危惧	NT	—				一般保護生物
------------	---	-------	----	---	--	--	--	--------

○トンボ目

絶滅 3種

メガネサナエ	①②③	絶滅危惧Ⅱ類	VU	危急種			絶滅危惧Ⅰ類	
オオキトンボ	①②③	絶滅危惧ⅠB類	EN	絶滅危惧種		絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧Ⅰ類	消息不明・絶滅生物
ベッコウトンボ	①②③	絶滅危惧ⅠA類	CR	絶滅種		絶滅	絶滅	消息不明・絶滅生物

絶滅危惧ⅠA類 4種

コバナオイトトンボ	①②③④	絶滅危惧ⅠB類	EN	—	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅	消息不明・絶滅生物
ベニイトトンボ	①②③	準絶滅危惧	NT	希少種		絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧Ⅰ類	最重要保護生物
オオセズイトトンボ	①②③	絶滅危惧ⅠB類	EN	希少種			絶滅危惧Ⅰ類	最重要保護生物
ヒヌイトトンボ	①②③	絶滅危惧ⅠB類	EN	絶滅危惧種	絶滅危惧Ⅰ類		絶滅危惧Ⅰ類	最重要保護生物

絶滅危惧ⅠB類 2種

オオモノサシトンボ	①②③	絶滅危惧ⅠB類	EN	—		絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧Ⅰ類	最重要保護生物
キトンボ	①②③	—		希少種		準絶滅危惧	絶滅危惧Ⅱ類	消息不明・絶滅生物

絶滅危惧Ⅱ類 8種

オツネトンボ	①②③	—		—				最重要保護生物
ネアカヨシヤンマ	①②③	準絶滅危惧	NT	—		情報不足	準絶滅危惧	重要保護生物
モイワサナエ	①②③	—		—		準絶滅危惧		
タカネトンボ	①②③	—		—				重要保護生物
ハネビロエソトンボ	①②③	絶滅危惧Ⅱ類	VU	—	準絶滅危惧	準絶滅危惧	絶滅危惧ⅠA類	最重要保護生物
キイロヤマトンボ	①②③④	準絶滅危惧	NT	危急種	未評価	情報不足	絶滅危惧ⅠA類	
リサアカネ	①②③	—		—				重要保護生物
ヒメアカネ	①②③	—		—		準絶滅危惧	準絶滅危惧	最重要保護生物

準絶滅危惧 20種

アオハダトンボ	①②③	準絶滅危惧	NT	—			準絶滅危惧	消息不明・絶滅生物
キイトトンボ	①②③	—		—			準絶滅危惧	要保護生物
オゼイトトンボ	①②③	—		希少種		要注目	絶滅	
セスジイトトンボ	①②③	—		—				要保護生物
ムスジイトトンボ	①②③	—		—			情報不足	重要保護生物
モートンイトトンボ	①②③	準絶滅危惧	NT	—		要注目	絶滅危惧Ⅱ類	重要保護生物
ムカシトンボ	①②③	—		希少種		準絶滅危惧	準絶滅危惧	
サラサヤンマ	①②③	—		—		準絶滅危惧	準絶滅危惧	一般保護生物
アオヤンマ	①②③	準絶滅危惧	NT	希少種	準絶滅危惧	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧Ⅱ類	重要保護生物
マダラヤンマ	①②③④	準絶滅危惧	NT	—		準絶滅危惧	絶滅危惧Ⅰ類	

種名	選定理由	環境省 2014	茨城県 2000	福島県 2002 - 2003	栃木県 2011	埼玉県 2008	千葉県 2011	
ルリボシヤンマ	①②③	—	—			準絶滅危惧		
キイロサナエ	①②③	準絶滅危惧	NT	希少種		準絶滅危惧	準絶滅危惧	重要保護生物
ナゴヤサナエ	①②③	絶滅危惧Ⅱ類	VU	—	準絶滅危惧	情報不足	準絶滅危惧	最重要保護生物
トラフトンボ	①②③	—	—		絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅰ類		最重要保護生物
コノシメトンボ	①②③	—	—					一般保護生物
ミヤマアカネ	①②③	—	—					
ネキトンボ	①②③	—	—	未評価	要注目			最重要保護生物
ハッチョウトンボ	①②③	—	希少種		要注目	絶滅		
ハラビロトンボ	①②③	—	—					重要保護生物
ヨツボシトンボ	①②③	—	—		準絶滅危惧	準絶滅危惧		最重要保護生物

○カワゲラ目

準絶滅危惧 2種

トワダカワゲラ	①③	—	—		要注目		
フライソニアミメカワゲラ	①③	準絶滅危惧	NT	—	絶滅危惧Ⅱ類	準絶滅危惧	

情報不足①注目種 1種

シノビアミメカワゲラ	①③	—	—				
------------	----	---	---	--	--	--	--

○ガロアムシ目

準絶滅危惧 1種

ガロアムシ	①③	—	希少種			絶滅のおそれのある地域個体群	
-------	----	---	-----	--	--	----------------	--

○バッタ目

絶滅危惧ⅠA類 1種

クロツヤコオロギ	①②③	—	絶滅危惧種				重要保護生物
----------	-----	---	-------	--	--	--	--------

絶滅危惧ⅠB類 4種

オオクサキリ	①②③	—	絶滅危惧種		準絶滅危惧		最重要保護生物
カスミササキリ	①②③	—	絶滅危惧種			絶滅危惧ⅠB類	最重要保護生物
クツムシ	①②③④	—	危急種		要注目	絶滅危惧ⅠB類	要保護生物
ハマスズ	①②③	—	絶滅危惧種				最重要保護生物

絶滅危惧Ⅱ類 3種

リュウキュウチビスズ	①②③	—	絶滅危惧種：ヤマトチビスズ				重要保護生物
ヤマトマダラバッタ	①②③	—	危急種				最重要保護生物
カワラバッタ	①②③	—	—		要注目	準絶滅危惧	

準絶滅危惧 7種

コガタコオロギ	①③	—	希少種			準絶滅危惧	重要保護生物
マツムシ	①③	—	希少種		要注目	準絶滅危惧	一般保護生物
カヤコオロギ	①②③	—	希少種			絶滅危惧Ⅱ類	最重要保護生物
ナギサスズ (ウミコオロギ)	①③	—	危急種				
セグロイナゴ	①②③	—	—			準絶滅危惧	最重要保護生物
ショウリョウバッタモドキ	①③	—	希少種			準絶滅危惧	
イナゴモドキ	①③	—	—			絶滅危惧ⅠB類	最重要保護生物

種名	選定理由	環境省 2014	茨城県 2000	福島県 2002・2003	栃木県 2011	埼玉県 2008	千葉県 2011
----	------	-------------	-------------	------------------	-------------	-------------	-------------

○カマキリ目

絶滅危惧Ⅱ類 1種

ウスバカマキリ	①②③	情報不足	DD	—		絶滅危惧Ⅱ類	情報不足	
---------	-----	------	----	---	--	--------	------	--

○カメムシ目

絶滅危惧ⅠA類 6種

ハバアメンボ	①②③	準絶滅危惧	NT	絶滅危惧種		準絶滅危惧	準絶滅危惧	
ホッケミズムシ	①②③	準絶滅危惧	NT	—				
ヘリカメムシ	①②③	—		絶滅危惧種				
アズキヘリカメムシ	①②③	—		危急種		準絶滅危惧	準絶滅危惧	要保護生物
イシハラカメムシ	①②③	—		絶滅危惧種			準絶滅危惧	
フタテカメムシ	①②③	—		絶滅危惧種				要保護生物

絶滅危惧ⅠB類 6種

エサキアメンボ	①②③	準絶滅危惧	NT	絶滅危惧種		準絶滅危惧	準絶滅危惧	重要保護生物
ミヤケミズムシ	①②③	準絶滅危惧	NT	—			絶滅危惧ⅠA類	
コエゾゼミ	①②③	—		危急種				
アカエゾゼミ	①②③	—		危急種		準絶滅危惧	準絶滅危惧	
ハリサンガメ	①②③	準絶滅危惧	NT	危急種				
ヒウラカメムシ	①②③	—		危急種				

絶滅危惧Ⅱ類 5種

ハネナシアメンボ	①②③	—		希少種		準絶滅危惧	準絶滅危惧	重要保護生物
コオイムシ	①②③	準絶滅危惧	NT	希少種	注意	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧ⅠA類	
シモフリクチフトカメムシ	①②③	—		—		要注目	準絶滅危惧	
ヨツボシカメムシ	①②③	—		危急種				
フトハサミツノカメムシ	①②③	—		—		要注目	準絶滅危惧	

準絶滅危惧 10種

ヒメハルゼミ	①②③	—		希少種				一般保護生物
ハルゼミ	①②③	—		希少種		準絶滅危惧	準絶滅危惧	最重要保護生物
タガメ	①②③	絶滅危惧Ⅱ類	VU	希少種	絶滅危惧Ⅱ類	準絶滅危惧	絶滅危惧ⅠA類	最重要保護生物
ベニモンマキサシガメ	①②③	—		希少種			準絶滅危惧	
ヒメダラナガカメムシ	①②③	—		—				一般保護生物
ナカボシカメムシ	①②③	—		—				
オオクチフトカメムシ	①②③	—		—				消息不明・絶滅生物
チャイロクチフトカメムシ	①②③	—		—				
モンキツノカメムシ	①②③	—		希少種				
オオツノカメムシ	①②③	—		—		要注目		要保護生物

○アミメカゲロウ目

準絶滅危惧 3種

キントキクサカゲロウ	①②③	—		—				
クシヒゲカゲロウ	③	—		—				
オオウスバカゲロウ	①②③	—		—		絶滅危惧Ⅰ類		

種名	選定理由	環境省 2014	茨城県 2000	福島県 2002 - 2003	栃木県 2011	埼玉県 2008	千葉県 2011
----	------	-------------	-------------	--------------------	-------------	-------------	-------------

情報不足①注目種 2種

アヤホソバヒメカゲロウ	②③	—	—				
ナナホシクサカゲロウ	②③	—	—				

○ヘビトンボ目

情報不足①注目種 1種

ヤマトセンブリ	①③	情報不足	—		準絶滅危惧		
---------	----	------	---	--	-------	--	--

○コウチュウ目

絶滅危惧ⅠA類 9種

ワタラセハンミョウモドキ	①②③	絶滅危惧ⅠB類	EN	絶滅危惧種		絶滅危惧Ⅰ類		
コバヤハズカミキリ	①②③	—		絶滅危惧種				
ヒメビロウドカミキリ	①②③	準絶滅危惧	NT	絶滅危惧種		絶滅危惧Ⅱ類	準絶滅危惧	
アオヘリアオゴミムシ	①③	絶滅危惧ⅠA類	CR	—		絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧ⅠB類	最重要保護生物
オオヒラタツクリゴミムシ	①③	絶滅危惧ⅠA類	CR	—		絶滅危惧Ⅰ類	絶滅	
アカツヤドROMシ	①③	絶滅危惧ⅠB類	EN	—				
コガタノゲンゴロウ	①	絶滅危惧Ⅱ類	VU	—		絶滅	絶滅危惧Ⅰ類	最重要保護生物
アサカミキリ	①③	絶滅危惧Ⅱ類	VU	—	準絶滅危惧	絶滅危惧Ⅰ類		最重要保護生物
カミヤコガシラミズムシ	①②③	絶滅危惧ⅠB類	EN	希少種		準絶滅危惧		

絶滅危惧ⅠB類 8種

オオイチモンジシマゲンゴロウ	①②③	絶滅危惧ⅠB類	EN	絶滅危惧種		絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧Ⅱ類	最重要保護生物
ゲンゴロウ	①②③	絶滅危惧Ⅱ類	VU	危急種	注意		絶滅危惧ⅠA類	消息不明・絶滅生物
コムズスマシ	①②③	絶滅危惧ⅠB類	EN	—				一般保護生物
ヒメキイロマグソコガネ	①②③	準絶滅危惧	NT	—		絶滅危惧Ⅰ類		最重要保護生物
キボシチビコツブゲンゴロウ	②③	絶滅危惧ⅠB類	EN	—				最重要保護生物
セスジガムシ	①③	絶滅危惧ⅠB類	EN	絶滅危惧種		絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧ⅠB類	
ヨツボシカミキリ	①	絶滅危惧ⅠB類	EN	—		絶滅危惧Ⅱ類		重要保護生物
オオコブスジコガネ	②③④	絶滅危惧Ⅱ類	VU	—				最重要保護生物

絶滅危惧Ⅱ類 24種

アオマダラタマムシ	①②③	—		絶滅危惧種	希少	準絶滅危惧	準絶滅危惧	要保護生物
アイヌハンミョウ	①②③	準絶滅危惧	NT	危急種	準絶滅危惧	準絶滅危惧	絶滅	重要保護生物
オオクワガタ	①②③④	絶滅危惧Ⅱ類	VU	危急種	希少	要注目	絶滅危惧ⅠA類	最重要保護生物
ミヤマダイコクコガネ	①②③④	—		危急種				
オオチャイロハナムグリ	①②③	準絶滅危惧	NT	危急種	注意	準絶滅危惧	準絶滅危惧	
ベーツヒラタカミキリ	①②③	—		危急種			絶滅危惧Ⅱ類	重要保護生物
ヨコヤマヒゲナガカミキリ	①②③	—		絶滅危惧種				
オオネクイハムシ (オオミズクサハムシ)	①②③	—		危急種	希少	準絶滅危惧		
オオルリハムシ	①②③	準絶滅危惧	NT	危急種	準絶滅危惧	準絶滅危惧	絶滅危惧Ⅱ類	重要保護生物
ガムシ	①②	準絶滅危惧	NT	希少種		要注目	絶滅危惧ⅠA類	要保護生物
アシナガミゾドROMシ	①②③	—		希少種				
キベリマルクビゴミムシ	①②③	絶滅危惧ⅠB類	EN	—		絶滅危惧Ⅱ類	準絶滅危惧	重要保護生物
チビアオゴミムシ	①②③	絶滅危惧ⅠB類	EN	—		絶滅危惧Ⅱ類	準絶滅危惧	最重要保護生物

種名	選定理由	環境省 2014	茨城県 2000	福島県 2002・2003	栃木県 2011	埼玉県 2008	千葉県 2011
コウベツゲンゴロウ	①②③	準絶滅危惧 NT	—				
マルガタゲンゴロウ	①②③	絶滅危惧Ⅱ類 VU	—		準絶滅危惧	絶滅危惧ⅠA類	重要保護生物
コオナガミズマシ	①②③	絶滅危惧Ⅱ類 VU	—			準絶滅危惧	一般保護生物
ケスジドROMシ	①③	絶滅危惧Ⅱ類 VU	—	準絶滅危惧		準絶滅危惧	
オビヒメコムツキモドキ	①②③	絶滅危惧Ⅱ類 VU	—		準絶滅危惧		
マルケンゲンゴロウ	①②③	準絶滅危惧 NT	—		絶滅危惧Ⅱ類		
マルチビゲンゴロウ	①②③	準絶滅危惧 NT	—				
キベリクロヒメゲンゴロウ	①②③	準絶滅危惧 NT	—			準絶滅危惧	
クロゲンゴロウ	①②	準絶滅危惧 NT	—			絶滅危惧ⅠA類	
オオミズマシ	①②	準絶滅危惧 NT	—			絶滅危惧Ⅱ類	要保護生物
キボシツゲンゴロウ	①③	準絶滅危惧 NT	—		準絶滅危惧		最重要保護生物

準絶滅危惧 19種

ツクバホソナガゴミムシ	①②③	—	希少種		要注目		
セアカオサムシ	①②	準絶滅危惧 NT	危急種		要注目	準絶滅危惧	重要保護生物
エグリゴミムシ	①②③	—	危急種				
ヤマトタマムシ	①②③	—	危急種		要注目		
ゲンジボタル	①②③④	—	危急種			絶滅危惧Ⅱ類	重要保護生物
キイロジョウカイ	①②③	—	危急種	希少	準絶滅危惧	絶滅危惧ⅠB類	
ヤマトヒメメダカカコウムシ	①②③	—	危急種		準絶滅危惧		
ワタラセミズギワアリモドキ	①②③	—	危急種	希少	準絶滅危惧		
スネケブカヒロコバネカミキリ	②③	—	危急種				
アカガネクイハムシ	①②③	準絶滅危惧 NT	危急種		絶滅危惧Ⅰ類		
サシゲチビタマムシ	①	—	希少種		要注目		
ツヤヒメオオキノコ	①③	—	希少種				
キイロテントウダマシ	②③	—	希少種				
ムナグロチャイロテントウ	②③	—	危急種		要注目	準絶滅危惧	
ルリナガクチキ	①③	—	希少種				
カタビロハムシ	①③	—	希少種				
キンイロネクイハムシ	①②③	準絶滅危惧 NT	—	希少	絶滅危惧Ⅱ類		要保護生物
サトウナガタマムシ	③	—	—				
ヤマトオサムシダマシ	①②③	準絶滅危惧 NT	—				

○シリアゲムシ目

準絶滅危惧 2種

ガガンボモドキ (ヤマトガガンボモドキ)	①②③	—	希少種			絶滅危惧Ⅱ類	要保護生物
ヒロオビシリアゲ	②③	—	—				

○チョウ目 チョウ類

絶滅 2種

オオウラギンヒョウモン	①②	絶滅危惧ⅠA類 CR	絶滅危惧種	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅	絶滅	消息不明・絶滅生物
ヒョウモンモドキ	①③	絶滅危惧ⅠA類 CR	—	絶滅危惧Ⅰ類			消息不明・絶滅生物

種名	選定理由	環境省 2014	茨城県 2000	福島県 2002・2003	栃木県 2011	埼玉県 2008	千葉県 2011
----	------	-------------	-------------	------------------	-------------	-------------	-------------

絶滅危惧ⅠA類 5種

ウスバアゲハ (ウスバシロチョウ)	③④	—	絶滅危惧種				
ヒメシロチョウ	①②③	絶滅危惧ⅠB類	EN	希少種	準絶滅危惧	絶滅	
カラスシジミ	①③	—	—	準絶滅危惧	要注目	絶滅危惧Ⅱ類	
クロシジミ	①②③④	絶滅危惧ⅠB類	EN	希少種	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅
キバネセセリ	③	—	希少種		要注目		消息不明・絶滅生物

絶滅危惧ⅠB類 9種

チャマダラセセリ	①②③④	絶滅危惧ⅠB類	EN	希少種	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅰ類	
ホシチャバネセセリ	①②③	絶滅危惧ⅠB類	EN	希少種	準絶滅危惧	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅
スジボソヤマキチョウ	①②③	—	—	希少種			
ツマグロキチョウ	①②	絶滅危惧ⅠB類	EN	—	準絶滅危惧	要注目	絶滅
ウラジロミドリシジミ	①③	—	—	危急種		準絶滅危惧	絶滅危惧ⅠA類
ハヤシミドリシジミ	①③	—	—	危急種	希少	準絶滅危惧	絶滅危惧Ⅱ類
ヒメシジミ	①②③④	準絶滅危惧 (本州・九州亜種)	NT	希少種	注意	要注目	絶滅危惧ⅠA類
ミヤマカラスシジミ	①②③	—	—	希少種		準絶滅危惧	絶滅危惧Ⅰ類
ムモンアカシジミ	①③	—	—	希少種	希少	準絶滅危惧	絶滅危惧Ⅰ類

絶滅危惧Ⅱ類 8種

ギンイチモンジセセリ	①②	準絶滅危惧	NT	—	注意	要注目	準絶滅危惧	一般保護生物
コキマダラセセリ	①③	—	—	希少種			準絶滅危惧	
スジグロチャバネセセリ	①②	準絶滅危惧 (四国亜種、北海道・本州・九州亜種)	NT	—	注意	要注目	絶滅危惧Ⅱ類	
ウラキンシジミ	①②	—	—	—			準絶滅危惧	最重要保護生物
ジョウザンミドリシジミ	①③	—	—	希少種			絶滅危惧ⅠA類	
ウラギンスジヒョウモン	①②	絶滅危惧Ⅱ類	VU	—		準絶滅危惧	準絶滅危惧	消息不明・絶滅生物
オオムラサキ	①②	準絶滅危惧	NT	希少種	注意	要注目	絶滅危惧Ⅱ類	重要保護生物
ヒメキマダラヒカゲ	③	—	—	希少種				一般保護生物

準絶滅危惧 9種

アイノミドリシジミ	①③	—	—	希少種			準絶滅危惧	
ウスイロオナガシジミ	③	絶滅危惧ⅠA類 (九州亜種)	CR	希少種		要注目	絶滅危惧Ⅱ類	
ウラクロシジミ	①②	—	—	—			準絶滅危惧	
ウラゴマダラシジミ	①②	—	—	—		要注目	絶滅危惧Ⅱ類	要保護生物
エゾミドリシジミ	①③	—	—	希少種				
オナガシジミ	①③	—	—	—		準絶滅危惧	準絶滅危惧	
クロミドリシジミ	①	—	—	—	希少	要注目	絶滅危惧ⅠB類	
フジミドリシジミ	①③④	—	—	希少種		要注目	準絶滅危惧	
オオヒカゲ	①②	—	—	—		要注目		

○チョウ目 ガ類

絶滅危惧ⅠA類 2種

マエアカヒトリ	②	準絶滅危惧	NT	—		絶滅		消息不明・絶滅生物
ミツモンケンモン	②	絶滅危惧ⅠB類	EN	絶滅危惧種		絶滅危惧Ⅰ類		

種名	選定理由	環境省 2014	茨城県 2000	福島県 2002・2003	栃木県 2011	埼玉県 2008	千葉県 2011
----	------	-------------	-------------	------------------	-------------	-------------	-------------

絶滅危惧ⅠB類 2種

オオチャバネヨトウ	①③	絶滅危惧Ⅱ類	VU	—		絶滅危惧Ⅱ類		要保護生物
イチモジヒメヨトウ	①③	絶滅危惧Ⅱ類	VU	希少種		準絶滅危惧	準絶滅危惧	要保護生物

絶滅危惧Ⅱ類 3種

ネスジシャチホコ	②	—	希少種		準絶滅危惧	準絶滅危惧		
マエジロシャチホコ	②	—	希少種			準絶滅危惧		
ハスオビアツバ	①③	—	希少種		準絶滅危惧	絶滅危惧Ⅰ類		

準絶滅危惧 13種

フタテンツツリガ	②	—	希少種					
ミツシロモンノメイガ	②③	—	希少種					
ノコバアオシャク	①②	—	希少種					
フチグロトゲエダシャク	①②	—	希少種		準絶滅危惧	絶滅危惧Ⅰ類		
ウスズミカレハ	②	—	希少種					
ヒメカレハ	①②	—	希少種					
オナガミズアオ	②③	準絶滅危惧	NT	—			絶滅のおそれのある地域個体群	
ヤママユ	①②	—	—				地帯別危惧	
キシジウスキヨトウ	①②	絶滅危惧Ⅱ類	VU	—		準絶滅危惧		
ウスミモンキリガ	①②	準絶滅危惧	NT	—		絶滅危惧Ⅱ類	準絶滅危惧	一般保護生物
オオシロテンクチバ	②	—	希少種					
ユミモンクチバ	②	—	希少種					
ネグロアツバ	②	—	希少種					

○トビケラ目

準絶滅危惧 2種

ギンボシツツトビケラ	①③	準絶滅危惧	NT	—				
ヒヌマセトビケラ	①	—	—					

情報不足①注目種 3種

アイシマトビケラ	③	—	—					
ナガレエグリトビケラ	③	—	—					
チョウモウコヒゲナガトビケラ	③	—	—					

情報不足②現状不明種 1種

スジトビケラ	①	—	—					
--------	---	---	---	--	--	--	--	--

○ハチ目

絶滅危惧Ⅱ類 9種

ヤマトアシナガバチ	①②	情報不足	DD	危急種		絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧ⅠB類	
サイジョウハムシドロバチ	①②③	—	—	危急種				
ハラナガハムシドロバチ	①②③	—	—	危急種				
ヤマトスナハキバチ	①③	情報不足	DD	危急種				
ニッポンハナダカバチ	①③	絶滅危惧Ⅱ類	VU	危急種		絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧ⅠA類	
トモンハナバチ	①③	—	—	—		絶滅危惧Ⅱ類		
シロスジフトハナバチ	①③	—	—	—				最重要保護生物

種名	選定理由	環境省 2014		茨城県 2000	福島県 2002 - 2003	栃木県 2011	埼玉県 2008	千葉県 2011
エゾアカヤマアリ	③	絶滅危惧Ⅱ類	VU	希少種		準絶滅危惧		
トゲアリ	①③	絶滅危惧Ⅱ類	VU	—				

準絶滅危惧 8種

ウマノオバチ	①③	準絶滅危惧	NT	—		準絶滅危惧		
キアシナガバチ	①	—		希少種				
アマクサヤドリコハナバチ	①③	—		—				
シロスジフデアシハナバチ	①③	—		—				
ホシトガリハナバチ	①③	—		—				
オオマルハナバチ	①	—		希少種				
ナミルリモンハナバチ	①③	—		—		準絶滅危惧		
テラニシクサアリ (テラニシケアリ)	①③	準絶滅危惧	NT	危急種：テラニシケアリ				

情報不足①注目種 4種

ニトベギングチ	③	情報不足	DD	—		絶滅危惧Ⅱ類		
アオスジクモバチ	③	情報不足	DD	—				
クズハキリバチ	③	情報不足	DD	—				
クロマルハナバチ	③⑤	準絶滅危惧	NT	—				要保護生物

情報不足②現状不明種 1種

スギハラクモバチ	③	—		—				要保護生物
----------	---	---	--	---	--	--	--	-------

7 クモ類

絶滅危惧Ⅱ類 1種

イソコモリグモ	①②③	絶滅危惧Ⅱ類	VU	希少種				
---------	-----	--------	----	-----	--	--	--	--

準絶滅危惧 9種

ワスレナグモ	①③	準絶滅危惧	NT	希少種		準絶滅危惧	情報不足	最重要保護生物
カネコタテグモ	①③	準絶滅危惧	NT	—			準絶滅危惧	最重要保護生物
キノウエタテグモ	①③	準絶滅危惧	NT	希少種		準絶滅危惧	準絶滅危惧	重要保護生物
キノボリタテグモ	①③	準絶滅危惧	NT	希少種			準絶滅危惧	重要保護生物
ハナサラグモ	①②③	—		—				
アブクマホラヒメグモ	③	—		—				
コガネグモ	①②③	—		—			絶滅危惧ⅠB類	要保護生物
コアシダカグモ	①②③	—		—				
ナガイツツグモ	①③	—		—				

8 その他無脊椎動物

○海綿動物門

準絶滅危惧 1種

シロカイメン	①③	—		希少種				
--------	----	---	--	-----	--	--	--	--

情報不足②現状不明種 1種

ヨコトネカイメン	①②③	—		希少種				
----------	-----	---	--	-----	--	--	--	--

種名	選定理由	環境省 2014	茨城県 2000	福島県 2002・2003	栃木県 2011	埼玉県 2008	千葉県 2011
----	------	-------------	-------------	------------------	-------------	-------------	-------------

○刺胞動物門

情報不足②現状不明種 1種

エダヒドラ	①	—	—				
-------	---	---	---	--	--	--	--

○扁形動物門

絶滅危惧ⅠA類 1種

カントウイドウズムシ	①②③	絶滅危惧Ⅰ類	CR+EN	希少種			
------------	-----	--------	-------	-----	--	--	--

絶滅危惧Ⅱ類 1種

カズメウズムシ	①③	—	—	希少種			準絶滅危惧
---------	----	---	---	-----	--	--	-------

準絶滅危惧 1種

ミヤマウズムシ	①③	—	—	—			絶滅のおそれのある地域個体群
---------	----	---	---	---	--	--	----------------

○紐形動物門

情報不足②現状不明種 3種

ヒヌマヒモムシ	②③	—	—	—			
チビクスイヒモムシ	②③	—	—	—			
ヒメクスイヒモムシ	②③	—	—	—			

○軟体動物門(巻貝類)

絶滅 1種

カタヤマガイ (ミヤイリガイ)	①②③④	絶滅危惧Ⅰ類	CR+EN	—			最重要保護生物
--------------------	------	--------	-------	---	--	--	---------

絶滅危惧ⅠA類 5種

イシマキガイ	①②③	—	—	—			重要保護生物
ホラアナゴマオカチグサ	①②③	絶滅危惧Ⅰ類	CR+EN	—		絶滅危惧Ⅱ類	
カワグチツボ	①②③	準絶滅危惧	NT	—			一般保護生物
ヤセキセルモドキ	①③	絶滅危惧Ⅰ類	CR+EN	—			
ツクバヒロウドマイマイ	①③④	絶滅危惧Ⅱ類	VU	希少種			

絶滅危惧ⅠB類 3種

ヨシダカワザンショウ	①③	準絶滅危惧	NT	—			重要保護生物
スナガイ	①③	準絶滅危惧	NT	—			要保護生物
ナタネキバサナギ	①③	絶滅危惧Ⅱ類	VU	—			最重要保護生物

絶滅危惧Ⅱ類 9種

ムシオイガイ	①③	—	—	—		準絶滅危惧	
ヒラドカワザンショウ	①③	—	—	—			
クリイロカワザンショウ	①③	準絶滅危惧	NT	—			
ミスゴマツボ	①②③	絶滅危惧Ⅱ類	VU	—			最重要保護生物
モノアラガイ	①②③	準絶滅危惧	NT	—		準絶滅危惧	要保護生物
ミズコハクガイ	①③	絶滅危惧Ⅱ類	VU	—		絶滅のおそれのある地域個体群	最重要保護生物
ハブタエギセル	①②③④	絶滅危惧Ⅱ類	VU	希少種		絶滅危惧Ⅱ類	
レンズガイ	①③	絶滅危惧Ⅱ類	VU	—		絶滅	重要保護生物
スジキビ	①③	準絶滅危惧	NT	—		絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧ⅠB類

準絶滅危惧 19種

ヤマキサゴ	①③	—	—	—			
-------	----	---	---	---	--	--	--

種名	選定理由	環境省 2014	茨城県 2000	福島県 2002 - 2003	栃木県 2011	埼玉県 2008	千葉県 2011
ヤマタニシ	①③	—	—				
ゴマガイ (ウゼンゴマガイ)	①③	—	—				
マルタニシ	①②③④	絶滅危惧Ⅱ類	VU	—		準絶滅危惧	一般保護生物
ヒナタムシヤドリカワザ ンショウ	①③	準絶滅危惧	NT	—			
ヒラマキミズマイマイ	①②③	情報不足	DD	—		準絶滅危惧	重要保護生物
ヒラマキモドキ	①③	準絶滅危惧	NT	—		絶滅のおそれのある地域個体群	
ナガオカモノアラガイ	①②③	準絶滅危惧	NT	—		準絶滅危惧	絶滅危惧Ⅱ類 要保護生物
キセルモドキ	①③	—	希少種：キセル ガイモドキ		準絶滅危惧		要保護生物
ヒメギセル	①③	—	—		要注目		最重要保護生物
オオタキコギセル	①③	—	—			絶滅危惧ⅠB類	一般保護生物
ナミコギセル	①③	—	—			絶滅のおそれのある地域個体群	
バツラマイマイ	①②③	絶滅のおそれのある地域個体群 (近畿地方以西)	LP	—			
ウメムラシタラ	①③	準絶滅危惧	NT	—		絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧ⅠB類 重要保護生物
タカキビ	①③	準絶滅危惧	NT	—		絶滅危惧Ⅱ類	重要保護生物
ヒメカサキビ	①③	準絶滅危惧	NT	—		絶滅危惧Ⅱ類	重要保護生物
ヒメハリマキビ	①③	準絶滅危惧	NT	—		絶滅危惧ⅠB類	
ヒゼンキビ	①③	準絶滅危惧	NT	—			
コケラマイマイ	①③	準絶滅危惧	NT	—			

情報不足①注目種 9種

トウキョウヒラマキ	①③	情報不足	DD	—		絶滅のおそれのある地域個体群	重要保護生物
ヒメヒラマキミズマイ マイ	①③	情報不足	DD	—			
コウフオカモノアラガイ	①②③	絶滅危惧Ⅱ類	VU	—			
マルナタネ	①③	—	—			絶滅危惧Ⅱ類	
ハクサンベッコウ	①③	情報不足	DD	—		絶滅危惧Ⅱ類	
エゾヒメベッコウ	①③	情報不足	DD	—			
エナクリイロベッコウ	①③	情報不足	DD	—			
ヒラベッコウ	①③	情報不足	DD	—		絶滅危惧Ⅱ類	
ニッコウヒラベッコウ	①③	情報不足	DD	—		要注目	

情報不足②現状不明種 4種

オオタニシ	①②③④	準絶滅危惧	NT	—		絶滅危惧Ⅱ類	
イマムラミジンツボ	①③	—	—				
マメタニシ	①②③	絶滅危惧Ⅱ類	VU	—			最重要保護生物
ヤマトキバサナギ	①②③	絶滅危惧Ⅱ類	VU	—			

○軟体動物門(二枚貝類)

絶滅危惧ⅠA類 3種

カワシジュガイ	①②③④	絶滅危惧Ⅱ類	VU	絶滅危惧種		絶滅危惧Ⅰ類	
カラスガイ	①②③④	準絶滅危惧	NT	危急種		情報不足	絶滅危惧Ⅱ類 最重要保護生物
サビシラトリ	①②③	準絶滅危惧	NT	—			重要保護生物

種名	選定理由	環境省 2014	茨城県 2000	福島県 2002・2003	栃木県 2011	埼玉県 2008	千葉県 2011
----	------	-------------	-------------	------------------	-------------	-------------	-------------

絶滅危惧Ⅱ類 3種

マツカサガイ	①④	準絶滅危惧	NT	危急種		絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧ⅠB類	重要保護生物
ヨコハマシジラガイ	①④	準絶滅危惧	NT	—		絶滅危惧Ⅰ類	準絶滅危惧	要保護生物
マシジミ	①⑤⑥	絶滅危惧Ⅱ類	VU	—				最重要保護生物

準絶滅危惧 1種

イシガイ	①④	—	—		情報不足	準絶滅危惧	一般保護生物
------	----	---	---	--	------	-------	--------

情報不足①注目種 1種

フネドフガイ	①④	—	—				
--------	----	---	---	--	--	--	--

○環形動物門(多毛類)

準絶滅危惧 1種

イトメ	①③	—	—				
-----	----	---	---	--	--	--	--

情報不足②現状不明種 2種

シダレイトゴカイの一種	③	—	—				
ドロオニスビオ	②	—	—				

○節足動物門(甲殻類)

絶滅危惧ⅠA類 1種

アリアケモドキ	②③	—	—				最重要保護生物
---------	----	---	---	--	--	--	---------

絶滅危惧Ⅱ類 5種

ヌマエビ	③	—	—				要保護生物
ハマガニ	②③	—	—				消息不明・絶滅生物
ヤマトオサガニ	①③	—	—				一般保護生物
コメツキガニ	①③	—	—				一般保護生物
チゴガニ	①③	—	—				一般保護生物

準絶滅危惧 5種

ヒヌマヨコエビ	①③	—	—				
ヌカエビ	①	—	希少種		要注目	絶滅危惧Ⅱ類	要保護生物
ミゾレヌマエビ	③	—	—				最重要保護生物
モクスガニ	②④	—	—		要注目	準絶滅危惧	一般保護生物
アカテガニ	①③	—	—				一般保護生物

情報不足①注目種 2種

フタタスナウミナナフシ	③	—	—				
フタバカクガニ	③	—	—				

○苔虫動物門

絶滅危惧Ⅱ類 2種

ヒメテンコケムシ	①③	—	—				
カンテンコケムシ	①③	—	希少種				

○選定種の解説項目

各対象種の解説内容については、次の項目について記述した。

【選定理由】

選定理由一覧 (p.13) の番号で示したほか、補足事項を文章で記述

【分布状況】

対象種の分布状況について記述

【形態及び生態】

対象種の特徴を示す形態及び生態について記述

【近似種】

近似種との異同について区別点を記述

【生息地】

対象種の生息に必要な特有の環境条件や県内の生息状況について概要を記述

【生存の危機】

生存に対する既知の報告や想定される圧迫要因について記述

【特記事項】

上記以外で特に記載すべき点があるものについて記述

【執筆者（協力者）】

協力者がある場合は括弧内に示した。

【文献】

それぞれの分類群（哺乳類，鳥類等）の末尾に文献一覧を掲載し、各種毎の記載では一覧の番号で示した。但し、昆虫・クモ類のみ目毎に一覧をまとめてある。

【その他】

- ・写真と図には、撮影者または提供者、及び撮影場所等を示した。
- ・カテゴリーは、茨城県 2016 年（今次改訂版）、同 2000 年、環境省 2014 年のデータに基づく。

各論

1 哺乳類

1) 概要

日本に生息する陸生哺乳類は、在来種のみで23科57属110種が確認されている。鯨類などの海生哺乳類を加えると、さらに41種増えて151種となる。陸生哺乳類のうち44種が固有種であり、属のレベルでも6属が日本固有なことは特筆すべき点である。これは、現在に至るまで日本列島に多様な生息環境が担保されてきた結果、多くの種が長期間にわたって保存されてきたためと考えられている。

茨城県では、2015年の時点で陸生哺乳類は15科32属37種（外来種3科3属3種を含む）、海生哺乳類は9科24属30種が確認されている。ただし、本県での哺乳類相やその生態についての研究は十分進んでいるとは言い難い。したがって、今後、コウモリ目（翼手目）や食虫目などの小型哺乳類を中心に、生息確認種が増える可能性が大きい。また、海生哺乳類については漂着遺体の確認事例なども種数に暫定的に含めているため、本県沿岸域に実際に生息する種の選定が今後の課題である。

陸生哺乳類の生息環境として本県を概観してみると、県北の阿武隈・八溝山地から筑波・加波山地に連なる山地帯と、霞ヶ浦や潤沼とそこに流出入する水系ネットワーク地帯、それらの中間に位置する人の手が強度に加えられた里地・里山地帯が代表的な景観となる。土地区分の統計値から見ると、森林率が31%と低い一方、耕地面積は174,100 ha（29%）と全国で2番目に広く、哺乳類の生息環境としては関東各県の中でも特異である。そのため、生息環境に連続した広い面積と、一定の質を求める森林性あるいは半森林性の大型哺乳類に着目すると、本県からはツキノワグマ、ニホンザル、ニホンジカ、カモシカが近世から近代にかけて一旦姿を消しており、これらが連綿と生息してきた近隣県と様相が異なる（ただし、千葉県にはツキノワグマとカモシカはもともと生息しない）。

小型哺乳類であるトガリネズミ科およびモグラ科、コウモリ目、ネズミ目（齧歯目）の生息種やその生態については、これまでに極めて断片的な情報が蓄積されているに過ぎない。また、過去の記録も少なく、その裏付けとなる標本が存在しない事例が多い。さらに、標本の存在が記録に残る種でも、東日本大震災で被災しその所在が不明になっている例がいくつか確認された。こうした貴重な自然史標本を散逸させずに、恒久的な施設に保管するための仕組み作りが急がれる。これらの分類群では、トガリネズミ科のカワネズミが今回のリストに新たに加わったが、その分布状況には不明な点が多い。今回の調査で得られた標本は、県自然博物館に収蔵保管されている。コウモリ目では、前回のレッドリスト掲載種であったヤマコウモリ（ヒナコウモリ科）がリストから除外された。これは、これまでの本種の確認事例が目視やバットディテクターを用いた音声によるものだけで、標本資料の保管が確認できなかったためである。レッドリスト改訂に併せた、かすみ網などによる補完調査でも本種の生息を示す確実な証拠は得られなかった。今後、生体や斃死体が確認されれば、リストへの復活を検討すべき種である。一方、ヒナコウモリとユビナガコウモリが新たにリストに加わったが、どちらも生息情報は断片的で、今後のより詳細な調査が求められる。ネズミ目では、リス科のニホンモンガがリストに加わったが、その生息状況はほとんど分かっていない。最後に、本県のレッドリストは種に着目した指定となっているが、コウモリ目などではコロニー単位の保全も今後の検討課題である。例えば、水戸市の金山跡の坑道には、普通種の扱いながらキクガシラコウモリとコキクガシラコウモリ（いずれもキクガシラコウモリ科）の大規模コロニーが確認された。しかし、それら地域の保全の枠組みが整備されておらず、コロニー内部への人間の侵入やいたずらが行われている形跡がある。こうしたコロニーを形成する種の行動圏や季節移動の有無などを把握した上で、地域集団として適切に保全する必要がある。

ネコ目（食肉目）についても、分布域や生態についての知見は限られている。前回からのリスト掲載種であるオコジョ（イタチ科）は、これまで確認記録のある地点での自動撮影カメラの設置など、補完調査を試みたが証拠は得られていない。里山から山地帯まで広く分布するキツネ（イヌ科）、テン（イタチ科）、アナグマ（イタチ科）などについても、本県での生息実態には不明な点が多い。アナグマは、前回のレッドリストで分布域と生息個体数の減少を懸念したが、近年は県南部の平地でも姿が見られるようになった。分布域に回復傾向があるのか、あるいは調査の不十分さに原因があったのかについて精査が必要である。ツキノワグマ（クマ科）は、近年、再び本県に姿を現した種で、幼獣も確認されてい

るので定着が示唆される。そのため、注目種としてリストに加えたが、今後、本種の分布拡大をいかに管理すべきかについて、関係機関と地元を交えた慎重な議論が必要である。

ウシ目（偶蹄目）では、ツキノワグマと同様にニホンカモシカ（ウシ科）を注目種として加えた。親子グループが確認されており定着の可能性が高い。今後の分布域管理をどのように進めるか、ツキノワグマと同様に早急に論じられるべきである。さらに、今後は栃木県側や福島県側からのニホンジカ（シカ科）の進出も予想され、注意深いモニタリングが必要である。イノシシ（イノシシ科）は、他の大型哺乳類と異なり、本県では近世から絶えることなく生息してきた唯一の偶蹄類で、分布域と個体数を増加させつつある。近年は、国道6号線を越えた東側の酒沼や霞ヶ浦周辺にも定着を見せ始めている。本県では、イノシシ管理計画を策定して農作物への被害抑制と個体群管理を進めているところである。

海生哺乳類については、本県が南北に長い海岸線を持つことから、これまでに多くの種の座礁や遺体漂着事例が記録されている。前述のように、茨城沿岸に生息環境を依存する種の選定が今後の課題としてあげられる。今回のリストでは、沿岸性であり、しばしば座礁や混獲によって本県で確認されているスナメリ（クジラ目、ネズミイルカ科）を掲載した。

外来種では、ハクビシン（ネコ目、ジャコウネコ科）が1963年に大子町で初記録されたが、1990年代以降には全県に分布を広げている。遺伝子解析の結果から、台湾を起源に持つ集団であることが判っている。2000年代後半には、特定外来生物の指定を受けたアライグマ（ネコ目、アライグマ科）が県南、県西、県北地域で同時多発的に確認されるようになった。その後、分布域と個体数を徐々に増やしている。県はアライグマ防除計画を策定してその根絶を目指している。クリハラリス（ネズミ目、リス科）も県南の菅生沼東岸を中心に定着しており、坂東市と常総市ではクリハラリス防除計画を策定して根絶を試みている。これらの外来種以外にも、県西地区でマスカラット（ネズミ目、ネズミ科）[あるいはヌートリア（ネズミ目、ヌートリア科）]が当該地域の河川で目撃されているほか、最近では県南地域で、キョン（ウシ目、シカ科）と思われる動物が複数地点で目撃されている。時宜を逸しない情報の収集と迅速な対策が必要不可欠である。

哺乳類の多くは森林性であったり夜行性であるため、その生息確認は容易ではない。現状では断片的な生息情報からその動態を予測することしかできていない。公的研究機関に加えて、在野の研究者との協働作業が求められるが、それには在野の哺乳類研究者の育成も視野に入れる必要があるだろう。

（山崎晃司）

2) 対象種の解説

カテゴリー別に分類した13種（絶滅危惧8種、情報不足5種）について、以下に解説する。

ヒナコウモリ科

Murina ussuriensis Ognev

コテングコウモリ

選定理由 ③ これまでに確認された地域および個体数が少ない。

分布状況 北海道, 本州, 四国, 九州, 隠岐, 対馬, 屋久島, 朝鮮半島, 沿海州, サハリン, 国後島。

形態及び生態 前腕長 28 ~ 35mm, 体重 4 ~ 8g の食虫性コウモリ。鼻孔の先が筒状になって, 左右ともやや外側を向いている。背中側は明るい茶色, 腹側は白い。背中側の毛は長く密生する。森林に生息し, ねぐら(昼間の隠れ場所)として, 丸まった枯葉の中, 樹皮下, 樹洞, すい道, 洞穴など, 様々な場所を利用する。夏期に 1 ~ 2 仔を産む。出産哺育場所は樹洞や, ぶらさがった枯葉のかたまりなどが知られる。

近似種 テングコウモリはサイズが大きく, 体毛が灰褐色で背面には銀色の光沢をもつ刺し毛がある。

生息地 北茨城市四時川溪谷, 小川, 旧山方町山方, 大子町, 桜川市筑波山で捕獲記録がある。これらの環境は山地~丘陵の自然林や二次林である。

生存の危機 森林伐採等による生息地の減少や分断化のおそれがある。

特記事項

執筆者(協力者) 安井さち子

文献 18), 19), 20), 21), 22), 23), 24), 25)



撮影 安井さち子

茨城県 2016	● ● ● ● ●	絶滅危惧 I B 類	●
茨城県 2000	● ● ● ● ●	絶滅危惧種	●
環境省 2014		対象外	

ヒナコウモリ科

Miniopterus fuliginosus (Hodgson)

ユビナガコウモリ

選定理由 ③ 分布が局地的

分布状況 本州以南, 屋久島まで分布。関東では千葉県を除くと確認記録は少ない。アフガニスタンからインド, 中国, 朝鮮半島。

形態及び生態 前腕長平均 47.3mm (本州産), 体重 10 ~ 17g の食虫性コウモリ。耳介は短く丸みを帯びる。体毛はこげ茶色でビロード状。狭長型の翼を持ち, 森林や草地などの上の開けた場所で採餌する。ねぐらは自然洞窟や廃坑, 防空壕跡, トンネルなど。季節的に移動し, ねぐらを変える。季節的な移動距離は 50 ~ 70km におよび, 200km 以上移動した例もある。ねぐらでは数十~数千個体の集団をつくる。冬眠期や出産哺育期に数万の大集団になることがある。夏期に 1 仔を産む。

近似種 奄美島以南~西表島から知られるリュウキュウユビナガコウモリはユビナガコウモリに似るが, サイズが小さい。

生息地 日立市多賀町および日立市鮎川町における学術捕獲事例のみである。素掘トンネル 1 カ所で, 11 月に多いときで 80 個体以上の集団が確認されている。

生存の危機 河川河口の素掘トンネルとその周辺でしか生息が確認されておらず, 今後の生息環境の消失が懸念される。

特記事項

執筆者(協力者) 安井さち子

文献 11), 26), 27), 28), 29) 30)



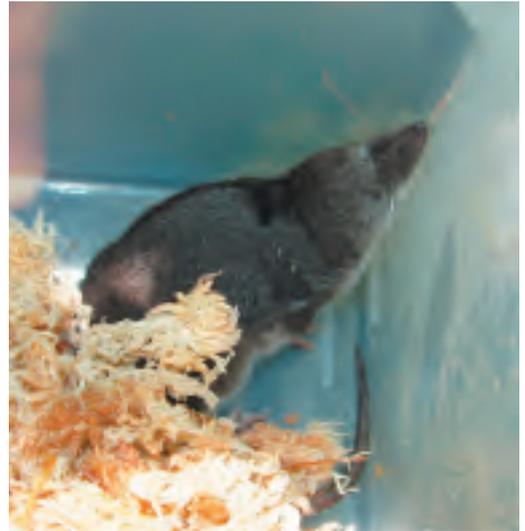
撮影 安井さち子

茨城県 2016	● ● ● ● ●	絶滅危惧 I B 類	●
茨城県 2000		対象外	
環境省 2014		対象外	

トガリネズミ科

Chimarrogale platycephalus (Temminck)

カワネズミ

選定理由 ①③ 生息地の改変および分布が局地的**分布状況** 日本固有種。本州、九州に分布するが、四国での近年の記録はない。**形態及び生態** 頭胴長 99～139mm, 尾長 78～136mm, 体重 25～58g。半水生に適した大型で尾の長いトガリネズミ。生息地は大径の浮石が多く、流れの速い溪流の付近に限られる。頻繁に水中に潜り、様々な無脊椎動物や両生類、魚類などの小動物を捕食する。**近似種** 近似種はいない。**生息地** これまでに、北茨城市（華川町花園、関本町才丸）、高萩市（横川）で学術捕獲されたほか、北茨城市（華川町小豆畑）で自動撮影されている。高萩市大北川での過去の情報や、1998年には石岡市（旧八郷町）上曾での記録もある。**生存の危機** 河川上流域の開発行為や、付随する土砂流入によって、本種の生息に適した環境が減少している。**特記事項** IUCN の LC（低懸念）に指定。**執筆者(協力者)** 藤本竜輔**文献** 1), 8), 9), 10), 13)

撮影 藤本竜輔

茨城県 2016 ●●● 絶滅危惧Ⅱ類 ●●●

茨城県 2000 対象外

環境省 2014 絶滅のおそれのある地域個体群(九州地方)

ヤマネ科

Glirulus japonicus (Schinz)

ヤマネ

選定理由 ③ 分布が局所的**分布状況** 本州、四国、九州、隠岐諸島に分布する 1 属 1 種の日本固有種。**形態及び生態** 頭胴長 68～84mm, 尾長 44～54mm, 体重 14～20g 程度だが、冬眠前の体重は 34～40g に増加する。四肢は短く、背面は暗褐色で、背中に黒褐色の縦線が走る。夜行性で主に樹上で活動する。樹洞内にコケや樹皮を集めて球形の巣を作る。果実、昆虫などの小動物、小鳥の卵などを捕食する。寒冷期には冬眠を行う。**近似種** 近似種はいない。**生息地** 阿武隈山地で断片的な生息情報があるが、分布は局所的であり、その生態についても分かっていない。**生存の危機** 生息動態が不明であり、保全のための具体的施策の検討も困難である。今後、局所的な生息環境が消失していくことが懸念される。**特記事項** 国指定の天然記念物、IUCN の LC（低懸念）に指定。**執筆者(協力者)** 山崎晃司**文献** 2), 13), 17), 57)

撮影 小菅次男

茨城県 2016 ●●● 絶滅危惧Ⅱ類 ●●●

茨城県 2000 ●●● 絶滅危惧種 ●●●

環境省 2014 対象外

リス科

Pteromys momonga Temminck

ニホンモモンガ

選定理由 ③ 分布が局所的**分布状況** 本州、四国、九州に分布する日本固有種。**形態及び生態** 頭胴長 14～20cm、尾長 10～14cm、体重 150～220g で、目が大きく、前肢と後肢の間に滑空のための飛膜が発達している。山地帯から亜高山帯の森林に生息する夜行性動物で、ほぼ完全な植物食である。繁殖については詳しいことが分かっていないが、年に2回繁殖する可能性が知られる。**近似種** 近似種はいない。**生息地** 1994年12月に常陸太田市（旧里美村）里川地区で捕獲記録が、2015年9月には常陸太田市折橋地区で目撃記録がある。また、北茨城市小川定波に接する福島県側で、1990年代および2005年に記録があり、茨城県側での生息が考えられる。**生存の危機** 分布が局所的であり、今後の生息環境の消失が懸念される。**特記事項** IUCNのLC（低懸念）に指定。**執筆者(協力者)** 山崎晃司**文献** 3), 17)

撮影 吉武和治郎

茨城県 2016	● ● ● ● ● ● ● ● ● ●	絶滅危惧Ⅱ類	● ● ● ● ● ● ● ● ● ●
茨城県 2000		対象外	
環境省 2014		対象外	

リス科

Sciurus lis Temminck

ニホンリス

選定理由 ①⑤ 調査不足も否めないが、鹿行、県南、県西部の平地林で生息情報が著しく希薄である。生息地の分断、孤立が懸念される。千葉県北部の平地林で生息情報があるが、県南地域へ河川を越えての個体の供給は考えにくい。**分布状況** 本州、四国、九州、淡路島。市街地周辺や本州の中国地方で稀、九州と淡路島は近年情報がない。**形態及び生態** 頭胴長 16～22cm、尾長 13～17cm、体重 250～310g。背面は夏毛で赤褐色、冬毛で暗褐色、腹は純白。平野から亜高山帯までの自然林を好み、低山帯の松林に多い。昼行性で主に樹上で活動するが、春から秋に食物を地面に浅く埋め貯蔵し、冬の餌の少ない時期に利用する。樹木の種子、果実、花芽、キノコ類を好み、昆虫その他の節足動物も食べる。樹皮などで球形の巣を樹上に作る。行動圏は雌で4～17ha、雄で4～30ha。初春から夏までの間に1～2回、2～6頭の子を産む。**近似種** キタリスが北海道に生息する。クリハラリスが坂東市に定着し、シマリスの生息確認が常陸大宮市にある。**生息地** 阿武隈山地、八溝山地、筑波・加波山系の一帯に分布する。1996年に神栖市で遺存的生息地が確認された後は、筑波山系以南で情報がほとんどない。**生存の危機** 平地の松林の減少が生息地を狭めたと考えられる。生息環境の減少に歯止めがなく、好転も望めない。シマリスとの競合が懸念される。**特記事項** 千葉県が要保護動物（環境省：絶滅危惧Ⅱ類に相当）に、埼玉県が地帯別危惧（環境省：該当なし）に指定。**執筆者(協力者)** 竹内正彦**文献** 36), 37), 38), 39), 40), 41), 50), 51), 52), 53), 54), 57)

撮影 (東京都) 林 典子

茨城県 2016	● ● ● ● ● ● ● ● ● ●	準絶滅危惧	● ● ● ● ● ● ● ● ● ●
茨城県 2000		希少種	● ● ● ● ● ● ● ● ● ●
環境省 2014		絶滅のおそれのある地域個体群(中国、九州地方)	

リス科

Petaurista leucogenys (Temminck)

ムササビ

選定理由 ①③ 滑空移動のために必要な連続した森林とねぐらおよび巣穴として必要な大径木の減少が進んでいるため。

分布状況 本州、四国、九州に分布する日本固有種。

形態及び生態 頭胴長 27～49cm、尾長 28～41cm、体重は 500～1250g である。飛膜が首から前肢、前肢と後肢の間、後肢と尾の間に発達して、高いところから低いところに滑空して移動する。低地から高山帯の森林に見られ、夜行性である。ほぼ完全な植物食で、木の芽、葉、花、果実などを利用する。繁殖は年に 2 回で、冬と初夏に交尾して、春と秋に出産する。

近似種 近似種はいない。

生息地 阿武隈山地、八溝山地、筑波・加波山地の一带に分布する。牛久市の平地林からは近年絶滅した。鹿島市鹿島神宮の社林に生息の可能性がある。

生存の危機 生息地が孤立化することにより、健全な世代交代が懸念される。

特記事項 IUCN の LC (低懸念) に指定。

執筆者(協力者) 山崎晃司

文献 4), 13), 57)



撮影 古橋光洋

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	●	●	●
茨城県 2000	●	希少種	●	●	●
環境省 2014		対象外			

ネズミイルカ科 *Neophocaena asiaeorientalis sunameri* (Pilleri et Gühr)

スナメリ

選定理由 ①③ 仙台湾から房総半島までの海域で生息数が 1000 から 5000 頭程度と推定される中、県沿岸に生息するスナメリは周年を通じて確認される。その安定した生息は地域個体群の存続のために重要であり、保護対策の推進と保護意識の向上を要する。

分布状況 日本近海に生息する本亜種は 5 つの地域個体群に分断され、茨城県沿岸のスナメリは仙台湾から東京湾に分布する地域個体群に属する。ただし、この個体群も 3 つのグループに分けられる可能性がある。

形態及び生態 成獣の体長は 130～180cm 程度、体重は 30～70kg 程度で、雄がやや大きい。県沿岸個体では最大 205cm の雄が確認されている。灰白色でくちばしがなく頭部は丸い、細長い流線型で背びれがないが、背の中央に隆起がある。沿岸域に生息し、他の 2 亜種も含め、ペルシャ湾から東南アジア、東シナ海を経て日本にまで分布する。揚子江に河川棲の亜種が生息する。主に魚類を捕食し、県沿岸ではイカやコノシロ、サヨリが確認されている。また、県沿岸では 3～5 月頃が出産時期と推測される。

近似種 近似種はいない。

生息地 神栖市から北茨城市の沿岸 1.6km 以内、水深 50m 以内の浅い海域に生息している。県海岸域の全市町村においてストランディングによって、また、大洗沖、銚田市沖および戸市の那珂川等において混獲で確認されている。

生存の危機 生息域が水深の浅い沿岸で人間の活動に影響を受けやすい。沿岸は海上交通が頻繁で、光、音、化学物質、ゴミなどの存在が激しく、漁業による混獲も起きやすい。

特記事項 水産資源保護法による捕獲禁止措置、種の保存法により国際希少野生動物種に指定。同じ地域個体群について千葉県レッドリストが D (NT 相当) 種に指定。

執筆者(協力者) 竹内正彦 (アクアワールド茨城県大洗水族館)

文献 44), 45), 46), 47), 48), 49), 55), 57)



提供 アクアワールド茨城県大洗水族館

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	●	●	●
茨城県 2000		対象外			
環境省 2014 (水産庁)		希少種			

ヒナコウモリ科

Vespertilio sinensis (Peters)

ヒナコウモリ

選定理由 ③ 確認記録が2地点しかない。

分布状況 北海道、本州、四国、九州。中国、モンゴル、ウスリ（ロシア）、朝鮮半島、台湾。

形態及び生態 前腕長 44～53mm、体重 14～30gの食虫性コウモリ。耳介と耳珠ともに幅広い。暗褐色の体毛に白っぽい差し毛が混じって霜降り状に見える。森林から都市まで生息する。ねぐらは、樹洞、海蝕洞、岩の割れ目や建造物の隙間など。出産哺育集団のサイズは数十～数千個体。メスの乳頭は1対。6～7月に通常2個体の仔を産む。新幹線の高架橋も出産哺育場所として利用され、埼玉県、群馬県、栃木県等で報告がある。出産哺育場所から越冬場所まで等、長距離移動する例が報告されている。

近似種 ヒメヒナコウモリはヒナコウモリに酷似するがやや小さい。メスは乳頭が2対。

生息地 大子町八溝山において2004年4月に斃死体の拾得、城里町御前山において2014年8月に学術捕獲例があるのみである。県内のねぐらはわかっていない。

生存の危機 確認記録が少なく、今後の生息環境の消失が懸念される。

特記事項

執筆者(協力者) 安井さち子

文献 12), 31), 32), 33), 34), 35)



撮影 山崎晃司

茨城県 2016	情報不足①注目種	●●●●●
茨城県 2000	対象外	
環境省 2014	対象外	

クマ科

Ursus thibetanus G.Cuvier

ツキノワグマ

選定理由 ③ 近世に茨城県から姿を消したと考えられるが、最近になって再出現をしている。

分布状況 本州、四国に分布するが、四国では絶滅の危機にある。また、かつては九州にも分布したが、すでに絶滅したと考えられている。本州の各地では分布域が拡大傾向にある。東日本、西日本、紀伊半島・四国の3つの大きな遺伝的グループに分けられる。

形態及び生態 成獣の体重はオスで80～100kg、メスで50～70kg程度で、胸に三日月型の白斑がある個体が多い。冬期には樹洞、土穴、岩穴などで冬眠を行う。メスは冬眠中に1～2頭の仔を出産する。交尾期は6月前後で、受精卵の着床遅延を行う。雑食性であるが、食物のほとんどは植物質で、特に秋期には冬眠前の体脂肪蓄積のために堅果類を飽食する。

近似種 近似種はいない。

生息地 八溝山地および阿武隈山地で生息情報がある。大子町では、幼獣の交通事故事例もあり、定着が示唆される。

生存の危機 分布の状況が不明である。

特記事項 IUCNでVU（危急種）に指定。

執筆者(協力者) 山崎晃司

文献 6), 15), 16)



撮影 山崎晃司

茨城県 2016	情報不足①注目種	●●●●●
茨城県 2000	対象外	
環境省 2014	絶滅のおそれのある地域個体群 (下北半島、紀伊半島、四国、東中国、西中国)	

ウシ科

Capricornis crispus (Temminck)

ニホンカモシカ

選定理由 ③ 近世から近代にかけて茨城県から姿を消したと考えられるが、最近になって再出現をしている。

分布状況 本州、四国、九州に分布する。東北地方や中部地方では分布が拡大傾向にある。

形態及び生態 成獣の体重は 30～45kgで、雌雄での明確な性的二型は示さない。角は雌雄共にあり、生え替わることなく加齢と共に伸長する。低山体から亜高山帯の森林帯に生息して、木本類の葉、草本類、ササ類などを採食する。交尾期は 10～11月で、出産は翌年の 5～6月である。

近似種 近似種はいない。

生息地 八溝山地および阿武隈山地で生息情報があり、笠間市での記録もある。ただし、笠間市での記録は、飼育個体が脱走したものとの未確認情報もある。近年は子連れでの目撃情報もあり、定着が示唆される。

生存の危機 分布の状況が不明である。

特記事項 国の天然記念物、IUCNでLC(低懸念)に指定。

執筆者(協力者) 山崎晃司

文献 7), 14), 57)



撮影 (栃木県) 山崎晃司

茨城県 2016 情報不足①注目種 ●●●●●

茨城県 2000 対象外

環境省 2014 対象外

ネズミ科

Micromys minutus (Pallas)

カヤネズミ

選定理由 ① 湿地の埋め立て、河川の改修などにより、生息地の減少と点在化が進んでいる。

分布状況 ヨーロッパから極東にかけて分布する。日本では、宮城県以南に分布する。また、隠岐諸島、淡路島、対馬などの島嶼にも分布する。

形態及び生態 成獣では頭胴長 50～80mm、尾長 61～83mm、体重は 7～14gになる。背面は暗褐色、腹面は白色。低地から標高 1200m程度の草地、水田、畑、休耕田、沼沢地などに見られる。イネ科、カヤツリグサ科の草地に多く、球状の巣を作る。繁殖は、春と秋の 2 回行われる地域が多い。

近似種 近似種はいないが、ハツカネズミとの混同も考えられる。

生息地 茨城県内での網羅的な分布調査は行われておらず、その生息実態は不明な部分が多い。県南、県西地域ではいくつかの記録があるが、県央、県北、鹿行地方での情報が分かっていない。

生存の危機 生息の状況が不明なままに、湿地、河川、草地などの変化が生息環境の消失を引き起こしている可能性がある。

特記事項

執筆者(協力者) 山崎晃司

文献 5), 57)



撮影 染谷 保

茨城県 2016 情報不足②現状不明種 ●●●●●

茨城県 2000 希少種 ●●●●●

環境省 2014 対象外

選定理由 ③ 1988年以降、生息情報は皆無である。確認された生息分布が局所的で、他地域との連続性がなく、本州中部の生息地としては低標高であるため、生息条件が厳しい。

分布状況 本州中部以北の山岳地域、青森県近辺の北東北地方、北海道に生息する。同種が旧北区、新北区の北部に広く分布する。

形態及び生態 頭胴長は雄 182～198mm、雌 140～170mm、尾長は雄 48～67mm、雌 54～61mm、体重は長野県志賀高原産の平均値で雄 202g、雌 161g。雄が大きい性的二型が認められる。背面は夏毛で暗褐色、腹は白く、冬毛は全身が白く、尾の先は年間を通して黒い。低温に適応し、高山の森林や岩場を利用している。ネズミ類、小型鳥類、鳥類の卵、昆虫の他、まれにノウサギを襲う。行動圏は雄 40～83ha、雌 18～50ha が報告されている。志賀高原では 4、5月に 4～6頭の子を産み、出産に巣穴を利用する。着床遅延の繁殖生理を持ち、交尾期ははっきりしない。

近似種 ニホンイイズナが北東北地方と北海道に生息する。

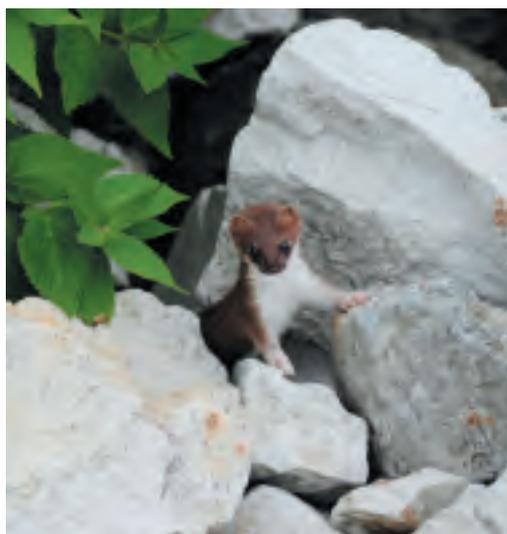
生息地 1966年に大子町男体山で確認、1988年に大子町八溝山で記録があるが、その後、確実な生息情報がない。

生存の危機 八溝山の生息確認地点は自然環境保全地域であり近年でも環境に大きな変化は認められないが、分布が非常に局所的で、個体数についての情報はまったくない。

特記事項

執筆(協力者) 竹内正彦

文献 13), 42), 43), 51), 57)



撮影 (長野県) 桃井尊央

茨城県 2016	情報不足②現状不明種	●●●●●
茨城県 2000	絶滅危惧種	●●●●●
環境省 2014	準絶滅危惧	●●●●●

3) 文献一覧

- 1) 藤本竜輔・竹内正彦・山崎晃司. 2015. 茨城県北部におけるカワネズミ *Chimarrogale platycephala* の生息確認. 茨城県自然博物館研究報告, (18): 49-51.
- 2) Iwasa, M.A. 2015. *Glirulus japonicus* (Schinz, 1845). in: Ohdachi et al. (eds.) *The wild mammals of Japan, Second Edition*, pp. 148-149, Shoukadoh.
- 3) Oshida, T. 2015. *Pteromys momonga* Temminck, 1844. in: Ohdachi et al. (eds.) *The wild mammals of Japan, Second Edition*, pp. 202-203, Shoukadoh.
- 4) Oshida, T. 2015. *Petaurista leucogenys* (Temminck, 1827). in: Ohdachi et al. (eds.) *The wild mammals of Japan, Second Edition*, pp. 200-201, Shoukadoh.
- 5) 金子之史. 2005. カヤネズミ. 阿部 永 (監修) 「日本の哺乳類 (改訂版)」, p. 134, 東海大学出版会, 東京.
- 6) Yamazaki, K. 2015. *Ursus thibetanus* G. Cuvier, 1823. in: Ohdachi et al. (eds.) *The wild mammals of Japan Second Edition*, pp. 243-245, Shoukadoh.
- 7) 三浦慎悟. 2005. カモシカ. 阿部 永 (監修) 「日本の哺乳類 (改訂版)」, p. 113, 東海大学出版会, 東京.
- 8) Abe, H., Saito and M. Motokawa 2015. *Chimarrogale platycephalus* (Temminck, 1842). In: Ohdachi et al. (eds.), *The wild mammals in Japan, Second Edition* pp. 16-18, Shoukadoh.
- 9) 藤本竜輔・安藤元一・小川 博. 2011. カワネズミ *Chimarrogale platycephala* における効率的な捕獲調査方法の検討. 農学集報, 55: 290-296.
- 10) 藤本竜輔・加藤達也・安藤元一・小川 博. 2010. カワネズミ *Chimarrogale platycephala* の飼育技術開発. 農学集報, 55: 219-226.
- 11) 安井さち子・山崎晃司. 2013. ユビナガコウモリの茨城県での初記録について. 茨城県自然博物館研究報告, (16): 63-67.
- 12) 山崎晃司・安井さち子・廣瀬 誠. 2008. ヒナコウモリの茨城県での初認記録について. 茨城県自然博物館研究報告, (11): 27-28.
- 13) 山崎晃司・小柳恭二・辻 明子. 2001. 茨城県でこれまでに確認された哺乳類について. 茨城県自然博物館研究報告, (4): 103-108.
- 14) 山崎晃司. 2008. 茨城県中部でのカモシカ (偶蹄目) の出現記録について. 茨城県自然博物館研究報告, (11): 29-31.
- 15) 山崎晃司・稲葉 修. 2009. 阿武隈山地 (茨城県・福島県・栃木県) へのツキノワグマの分布拡大の可能性について. 哺乳類科学, 49: 257-261.
- 16) 日本クマネットワーク. 2014. ツキノワグマおよびヒグマの分布域拡張の現況把握と軋轢抑止および危機個体群回復のための支援事業報告書. 172 pp., 日本クマネットワーク.
- 17) 安田雅俊・奥村みほ子・山崎晃司. 2010. 茨城県北部の小川群落保護林およびその周辺における野生哺乳類の記録. 茨城県自然博物館研究報告, (13): 99-104.
- 18) 平川浩文. 2011. コテングコウモリ. コウモリの会 (編) 「コウモリ識別ハンドブック 改訂版」, pp. 60-61, 文一総合出版, 東京.
- 19) Kawai, K. 2015. *Murina ussuriensis* Ognev, 1913. In: Ohdachi et al. (eds.), *The wild mammals in Japan Second Edition*, pp. 123-125, Shoukadoh.
- 20) 石田麻里・河合久仁子. 2011. テングコウモリ. コウモリの会 (編) 「コウモリ識別ハンドブック 改訂版」, pp. 58-59, 文一総合出版, 東京.
- 21) 長岡浩子. 1998. 北茨城市四時川溪谷で採集されたコテングコウモリの記録. 茨城生物, (18): 60-61.
- 22) 柴田鏡江・安井さち子. 2006. 茨城県北茨城市小川群落保護林におけるコテングコウモリの樹冠部での偶発的捕獲. 東洋蝙蝠研究所紀要, (5): 27-29.
- 23) 二上文彦・稲葉 修. 2003. 那珂郡山方町でコテングコウモリを確認. 茨城生物, (23): 55-56.
- 24) 茨城動物研究会. 2007. 茨城県北西地域の哺乳類. 「茨城県自然博物館第4次総合調査報告書」, pp. 255-260, ミュージアムパーク茨城県自然博物館.
- 25) 安井さち子・斉藤 理. 2010. 茨城県のコウモリ類. 「茨城県自然博物館総合調査報告書: 茨城県南西部地域を中心とした脊椎動物 (2006-2008)」, pp. 3-9, ミュージアムパーク茨城県自然博物館.
- 26) 三笠暁子・繁田真由美・浅田正彦・水野昌彦・長岡浩子・相澤敬吾. 2005. 千葉県における洞穴性コウモリ類の生息状況. 千葉県立中央博物館 自然誌研究報告, 8(2): 17-32.
- 27) 繁田真由美・繁田祐輔・三笠暁子・水野昌彦・浅田正彦. 2005. 千葉県の大規模ねぐらにおけるユビナガコウモリ (*Miniopterus fuliginosus*) の個体数変動. 千葉県立中央博物館 自然誌研究報告, 8(2): 33-40.
- 28) 船越公威. 2011. ユビナガコウモリ. コウモリの会 (編) 「コウモリ識別ハンドブック 改訂版」, pp. 54-55, 文一総合出版, 東京.
- 29) Sano, A. 2015. *Miniopterus fuliginosus*. In: Ohdachi et al. (eds.), *The wild mammals in Japan Second Edition*, pp. 126-127, Shoukadoh.
- 30) Sano, A. 2015. *Miniopterus fuscus*. In: Ohdachi et al. (eds.), *The wild mammals in Japan Second Edition*, pp. 128-129, Shoukadoh.
- 31) 大沢啓子・佐藤顕義・大沢夕志・勝田節子. 2013. 埼玉県熊谷市小島におけるヒナコウモリ *Vespertilio sinensis* 個体群の周年動態. 埼玉県自然の博物館研究報告, (7): 95-100.
- 32) 重昆達也・大沢夕志・大沢啓子・峰下 耕・清水孝頼・向山 満. 2013. 群馬県の新幹線高架橋で見つかったヒナコウモリ *Vespertilio sinensis* の出産哺育コロニーおよび冬季集団. 群馬県立自然史博物館研究報告, (17): 131-146.
- 33) 向山 満. 2011. ヒナコウモリ. コウモリの会 (編) 「コウモリ識別ハンドブック 改訂版」, pp. 32-33, 文一総合出版, 東京.

- 34) Fukui, D. 2015. *Vespertilio sinensis* (Peters, 1880). In: Ohdachi et al. (eds.), *The wild mammals in Japan Second Edition*, pp. 96-98, Shoukadoh.
- 35) 佐藤雅彦. 2011. ヒメヒナコウモリ. コウモリの会 (編) 「コウモリ識別ハンドブック 改訂版」, p. 34, 文一総合出版, 東京.
- 36) 石井信夫. 2005. ニホンリス. 阿部 永 (監修) 「日本の哺乳類 (改定版)」, p. 119, 東海大学出版会, 東京.
- 37) Tamura, N. 2015. *Sciurus lis* Temminck, 1844. In: Ohdachi et al. (eds.) *The wild mammals in Japan Second Edition*, pp. 192-195, Shoukadoh.
- 38) 山崎晃司. 2014. 菅生沼にクリハラリスが定着. 「自然博物館ニュース A・MUSEUM」(ミュージアムパーク茨城県自然博物館) (79): 4.
- 39) 日本野鳥の会茨城支部. 2007. 茨城県野生鳥獣生息分布調査報告書 (平成 17・18 年度). 358 pp., 日本野鳥の会茨城支部.
- 40) 茨城県. 2000. 茨城における絶滅のおそれのある野生生物 (動物編) 茨城県版レッドデータブック. 195 pp., 茨城県生活環境部環境政策課.
- 41) 矢竹一穂・秋田 毅・古川 淳. 2011. 千葉県におけるニホンリス (*Sciurus lis*) の生息状況の変遷. 千葉中央博自然誌研究報告 11(2): 19-30.
- 42) Masuda, R. 2015. *Mustela erminea* Linnaeus, 1758. In: Ohdachi et al. (eds.), *The wild mammals in Japan Second Edition*, pp. 254-255, Shoukadoh.
- 43) 野紫木洋. 1995. オコジョの不思議. 135 pp., どうぶつ社.
- 44) Shirakihara, M. and M. Yoshioka. 2015. *Neophocaena phocaenoides* (Cuvier, 1829). In: Ohdachi et al. (eds.), *The wild mammals in Japan Second Edition*, pp. 398-399, Shoukadoh.
- 45) 酒井 孝. 2014. 茨城県でストランディングおよび混獲したスナメリについて. 海洋と生物 (210号), 36(1): 14-21. 生物研究社.
- 46) 吉田征紀. 1994. 鹿島灘で認められた海獣類. 動物園水族館雑誌, (36): 24-31.
- 47) 粕谷俊雄・宮崎伸之. 1997. スナメリ. 日本哺乳類学会 (編) 「レッドデータ日本の哺乳類」, pp. 142-143, 文一総合出版.
- 48) 大隅清治. 1998. スナメリ. 日本の希少な野生水生生物に関するデータブック, pp. 264-265, 日本水産資源保護協会.
- 49) 落合啓二. 2011. スナメリ. 「千葉県の保護上重要な野生生物 — 千葉県レッドデータブック 動物編 (2011 年改訂版)」, p. 28, 千葉県環境生活部自然保護課.
- 50) 茨城県. 1997. 茨城県野生鳥獣生息分布調査報告書 (平成 7・8 年度). 319 pp., 茨城県生活環境部環境保全課.
- 51) 環境省自然環境局生物多様性センター. 2002. 生物多様性調査動物分布調査報告書 (哺乳類). 97 pp., 環境省自然環境局生物多様性センター.
- 52) 安田雅俊. 2007. 絶滅のおそれのある九州のニホンリス, ニホンモモンガ, 及びムササビ — 過去の生息記録と現状および課題 —. 哺乳類科学, 47: 195-206.
- 53) 落合啓二. 2011. ニホンリス. 「千葉県の保護上重要な野生生物 — 千葉県レッドデータブック 動物編 (2011 年改訂版)」, p. 24, 千葉県環境生活部自然保護課.
- 54) 埼玉県. 2008. 埼玉県レッドデータブック 2008 動物編, pp. 77, 埼玉県環境部自然環境課.
- 55) 粕谷俊雄. 2014. 鯨類研究 50 年を顧みる. 哺乳類科学, 54: 279-290.
- 56) Masuda, R. 2015. *Mustela nivalis* Linnaeus, 1766. In: Ohdachi et al. (eds.), *The wild mammals in Japan Second Edition*, pp. 252-253, Shoukadoh.
- 57) 竹内正彦・藤本竜介・森島和也・安井さち子・山崎晃司. 2015. 茨城県産野生哺乳類目録. 茨城県自然博物館研究報告, (18): 71-82.

2 鳥類

1) 概要

標高 1000 m をわずかに超える八溝山を最高峰とする本県の地勢は、総じてなだらかであり、古代から人手が加えられてきた。そのため、原始的な自然は人里から離れた急傾斜地などにわずかに残るにすぎない。反面、霞ヶ浦沿岸や利根川下流域の原生的な湿生草地は、近年までほぼ手付かずのまま残されてきた。したがって、絶滅危惧種の構成も人による利用状況を色濃く反映したものとなっている。また、高齢化社会を迎え、社会構造の変化に伴って人里の荒廃が進み、往時にはごく普通に生息していた鳥類の減少が進んでいる。今回の改訂では、絶滅危惧と情報不足を合わせ前回より 1 種多い 68 種選定した。鳥類の移動形態を基に、近年における生息環境の変化と鳥類の食性を緩くして鳥類の生息状況を概観する。

一般的に鳥類は、周辺で容易に確保できる餌資源を当てにして生息するため、季節毎に変化する餌量にどう対処するかは死活問題である。その点、土地利用がパッチワーク状に展開する人里で暮らす留鳥は、餌量の季節変動に応じて小刻みに環境資源を変えろという方法で順応している。しかし例えば、人里に住むシラコバトの生息数は 15 年間で一桁台に激減した。それは、シラコバトがその生活の全てを依存する零細畜産業が、飼料高騰や就業人口の高齢化によって衰退したからである。本県の山地では餌量が季節によって大きく変動するが、規模の大きな落葉広葉樹林では落葉の中や木質部で冬を越す栄養価の高い昆虫を当てにできるため、キツツキ類などは厳しい冬でも同じ場所に留まる傾向が強い。しかし、ブナ林やその代償林が古くから失われた本県の山地では、オオアカゲラやゴジュウカラの希少性は高い。また、イヌワシやクマタカに好適な樹林や山地性草地の面積が少ないため、生息は極めて不安定である。一方、水辺の環境は、水の大きな比熱のため気温の変化が緩和され、餌量も極端に変動しないため、鳥類は安定的に生息できる。特に、身を隠すに都合の良い広大なヨシ原は、水辺の鳥類に恩恵を与えている。しかし、本来安定的な水辺環境の一つであった水田も、水稻栽培の機械化に伴って泥深い湿田が激減し、タマシギの生息域が減少している。その生息地は、近年まで湿地や池であった水持ちの良い、主に稲敷地方の水田に限られている。夏鳥のヒクイナも同様の生息環境に住むため、同様に危機的な状況下にある。

主に南方地域から繁殖のために夏に日本に渡って来る夏鳥の多くは、ツバメに代表されるように昆虫食であり、昆虫が大量発生する寒帯まで渡る種が多く、日本列島はその南端に位置する。オオルリやサンコウチョウなど低山帯の鳥類は、輸入木材に押されて山林伐採が滞っていることを反映し、県内では分布域と生息数が増えているため今回は絶滅危惧種から外れたが、県北山地のブナ林などで生息するコマドリやコノハズクなどの生息数は低迷したままで、絶滅危惧の状態が続いている。パッチワーク状の土地利用に変化がないかに見える人里でも昆虫に頼って生息するアオバズクやカッコウの衰退には目を見張るものがあり、ランクアップして注意を喚起した。また、山林に比べて餌量が安定している水辺の鳥でも、同様に深刻な事態を迎えているものがある。人工的な水辺環境である水田では、コサギに代表されるシラサギ類が景色に風情を添えてきたが、畦畔で昆虫をあさるアマサギが急減している。さらに、人里に普通に生息していたアオバズクやサシバなど、昆虫食の鳥類の減少がともに 2000 年代初頭に始まっており、共通する要因の存在を匂わせる。アマサギとサシバは、カテゴリー無指定からいきなり絶滅危惧種入りするほど深刻である。一方、ヨタカやミゾゴイのような夜間に昆虫を求めて活動する鳥類は、近年では生息域が人里から遠ざかり、調査地の絞り込みや調査回数確保が難しく実態を把握しきれないため、情報不足とした。しかし、山林の高齢樹林化や農耕地の荒廃によって草地が減少しているのは明らかであり、生息地の孤立と個体数の減少を招いているものと危惧される。河川の砂礫地や草地、海岸の砂浜や草地の減少も著しく、イカルチドリ、シロチドリ、コアジサシに代表される荒蕪地の鳥類の将来も案じられる。

冬鳥は、夏季は高緯度地方の大湿原地帯で過ごし、繁殖しているものが多く、主にイネ科の根や葉、種子などの植物や魚を食べている。しかし、冬期には結氷や埋雪によって餌場がなくなるため、温帯以南に移動して越冬する。ところが、個々の種が好む餌の種類は、場所が変わっても大きく変わらないの

で、越冬地でも似たような環境と同じような餌資源を求めて毎年同じ場所を行き来する。したがって、大きく距離を隔てているとはいえ、冬鳥にとって繁殖地と越冬地は表裏一体のものであり、今回の涸沼のラムサール条約湿地登録の実現は、冬鳥にとって大きな朗報である。冬鳥に関しては明るい話題が多い。関東地方で唯一の定期的な越冬地である稲敷市稲波干拓のオオヒシクイは、発見当初から長い間40～50羽台を保っていたが、近年徐々に越冬数を増やし、平成26年度は100羽の大台を突破した。関係者の保護の努力によるところが大きい。涸沼と同様の保護策がなされ、再び関東地方にオオヒシクイの分布域が広がる契機になることを願っている。なお、100羽超えとはいえ、感染症などで急減する懸念があるためカテゴリーは据え置いた。世界的な希少種であるクロツラヘラサギは、本県が世界の越冬地の東限で、ごく少数が越冬しており、近年では県内の越冬地が複数になることもある。また、稲敷市を中心とする稲刈り後の水田やハス田では従来珍鳥とされてきたオオハシシギが定期的に越冬し、ハマシギやその他の内陸性のシギ・チドリ類の恰好の越冬地や中継地になっている。しかし、ハス田の防鳥ネットで羅網死する危険もあり、越冬地としての機能が損なわれて、内陸性シギ・チドリ類の生息地の喪失につながりかねない。このため、種の希少性と併せて絶滅危惧種とした。気がかりな材料としては、涸沼に1ヶ月ほど滞在するオオワシである。その数は1羽だけであり、高齢化によって越冬個体のいなくなることが危惧される。また、近年徐々に越冬数を増やして来たコクガンは、先の東日本大震災による地盤沈下のため餌場である藻場が大きく減って、現在は不定期かつ少数羽の滞在に留まっている。このため前回カテゴリー無指定から絶滅危惧種とした。なお、太平洋沿岸域に鳥類の生息を脅かす風力発電施設などの構造物が増えることを見越して、ヒメウなど冬の沿岸域の鳥類の一部を絶滅危惧種とした。

旅鳥は、南北の極近くまで長い渡りをする途中で日本に立ち寄る鳥である。シギ・チドリ類やアジサシ類が主であるが、ショウドウツバメやエゾビタキなど日本列島より北で繁殖し、渡りの途次に一時的に羽を休める小鳥類も含まれる。旅鳥からの選出は5種にとどまったが、定期的な渡来を選定基準にしたため、偶発的に飛来する種は対象外とした。しかし、従来は珍鳥・迷鳥的な扱いだったセイタカシギが、確実性の高い夏鳥になり、稲敷市において繁殖事例も出ている。たとえ偶発的な種だとしても将来的な見通しを持って継続的な観察をすると、意外な定着事例や減少事例が出てくるだろう。決して派手な鳥ではないので目立ちにくい。河口や湖沼の干潟、浅く水を張った水田が生息環境なので、粘り強いモニタリングが求められる。今回絶滅危惧種に指定した旅鳥全てがシギ類であったのも、30年以上にわたって蓄積した日本野鳥の会茨城県のシギ・チドリ類調査の結果があつてのことである。

(池野 進)

2) 対象種の解説

カテゴリー別に分類した68種（絶滅危惧59種、情報不足9種）について、以下に解説する。

ハト科

Streptopelia decaocto (Frivaldszky)

シラコバト

選定理由 ①②③ 畜産業の飼料に依存して生活するが、価格高騰と鳥インフルエンザ対策による畜舎の近代化で安定的な餌の確保が困難になり、オオタカなどの天敵の脅威もある。

分布状況 ヨーロッパ中部、インド、中国、朝鮮半島に生息。日本では留鳥として埼玉県などの一部や茨城県西地域の一部に生息している。

形態及び生態 全長約 32.5cm。雌雄同色。頭、頸、胸、腹部は灰褐色で後頸に黒い横帯がある。背、肩羽、中央尾羽は褐色。外側尾羽は先端が白く基部は黒色。初列風切羽は黒色、次列風切羽は灰色。嘴は黒く、足は赤色。

人家付近の林や小樹林、養鶏場、養豚場などの畜舎が点在し、近くに小河川がある所に好んで生息している。畑や田圃などの地上で主に植物質の餌を採る。ポポーポポーと繰返し鳴く。

近似種 近似種はいない。

生息地 関東地方の利根川水系の流域に生息域があり、県西はその東限にあたり、畜産業の盛んな地域で局地的に生息している。

生存の危機 2013年の補足調査で、本県における確実な生息数は5羽未満であり、安定した個体群の形成が困難な状況にある。

特記事項 個体数の著しい減少による分布域の縮小と孤立化が激しい。

執筆者(協力者) 池野 進・石井省三

文献 4), 55), 57), 61)



撮影 1997年、中村 栄

茨城県 2016 ●●●●● 絶滅危惧 I A 類 ●

茨城県 2000 ●●●●● 希少種 ●●●●●

環境省 2014 ●●●●● 絶滅危惧 I B 類 ●

サギ科

Ixobrychus eurhythmus (Swinhoe)

オオヨシゴイ

選定理由 ①② 妙岐ノ鼻の草原が、現在のように乾燥化する以前から本種の衰退が始まり、現在に至っている。

分布状況 ユーラシア大陸東部で繁殖し、冬季は東南アジアへ移動する。日本には本州中部地方以北に渡来し繁殖する。

形態及び生態 全長約 39cm。雌雄ほぼ同色。雄の頭頂は黒色。上面は濃い茶色。尾は暗褐色。雨覆は灰褐色で風切羽は灰黒色。下面は淡黄褐色で喉から腹部にかけて黒褐色の縦斑が1本ある。雌は上面が褐色で白斑が点在する。喉から腹部にかけて褐色の縦斑が出る。嘴は雌雄ともに黄褐色で足は緑色。

草原やヨシ原に生息するが、ヨシゴイに比べ、より乾燥した場所を好む。ヨシ原などで魚類、両生類、甲殻類などの小動物を捕食する。水辺の地上に葉や茎を使った巣を作り、純白の卵を5～6個産む。

近似種 近似種はいない。

生息地 本県では稲敷市浮島の妙岐ノ鼻の草原が唯一の生息地であったが、近年は確実な記録が途切れている。

生存の危機 本県で信頼のおける最後の記録は、1990(平成2)年6月24日のものである。その観察記録からは激減の前兆は窺えない。

特記事項

執筆者(協力者) 池野 進・石井省三

文献 7), 55), 57), 58), 61)



撮影 2012年、千葉県、杉山好子

茨城県 2016 ●●●●● 絶滅危惧 I A 類 ●

茨城県 2000 ●●●●● 絶滅危惧種 ●●●●●

環境省 2014 ●●●●● 絶滅危惧 I A 類 ●

クイナ科

Porzana fusca (Linnaeus)

ヒクイナ

選定理由 ①②③ 昭和30年代まで利根川流域にあった沼沢地を水田にした保水力が高い田圃に生息地が限定される。

分布状況 ユーラシア大陸南部に留鳥として生息。日本には夏鳥として渡来する。西日本に越冬するものもいる。

形態及び生態 全長約23cm。雌雄同色。頭から上面は暗緑褐色。下面は顔から腹部まで赤褐色。下腹部には白黒の縞模様があり、嘴は黒色で虹彩は赤色。足は赤色。

湖沼、河川、水田などの水辺環境に生息し、茂った草むらの中を静かに歩きながら昆虫や甲殻類などの小動物を餌とする。姿はなかなか見せないが、大きな声でキョッキョッキョッキョッキョッキョ…とはじめゆっくりで、次第に速くなるテンポで鳴く。水辺のイネ科植物の間に巣を作り、淡黄色に赤褐色の斑点のある卵を5～9個産む。

近似種 近似種はいない。

生息地 本来の生息環境は、水辺から陸への遷移帯で、密生する水生植物に隠れるようにして生息する。分けつが始まった水田は本種の生息の疑似環境になっている。

生存の危機 圃場整備事業が行き渡り、湿田が少なくなっていて、生息数が著しく減少している。

特記事項 生息環境の消失により分布の局地化が進行している。

執筆者(協力者) 池野 進・石井省三

文献 1), 12), 55), 57), 61)



撮影 2011年, 岸 久司

茨城県2016	●●●●●	絶滅危惧 I A 類	●●●●●
茨城県2000	●●●●●	危急種	●●●●●
環境省2014	●●●●●	準絶滅危惧	●●●●●

シギ科

Gallinago hardwickii (Gray)

オオジシギ

選定理由 ①② 本県は渡りの中継地としての機能は十分に保っているが、広い草地の減少により繁殖適地が著しく減少している。

分布状況 オーストラリア東部で越冬するが、夏鳥として日本に飛来、繁殖する。本県では主に旅鳥。

形態及び生態 全長約30cm。雌雄同色。上面は全体に茶褐色。頭中央線、眉斑、顔、喉は淡黄色。頭側線、過眼線、頬線は黒褐色。背から肩羽にかけて複数の白い線がある。胸は茶褐色で腹部は白色。長い嘴は先端が黒く基部は肉色をしている。足は黄緑色。

夏鳥として全国の山地の草原に渡来する。雄は繁殖地の上空を小刻みに飛びながらズビヤークズビヤークと鳴き回り、急降下をしながらザァザァザァという音を出す。長い嘴を泥の中に深く入れてミミズなどを捕食する。本県では水戸射爆場での繁殖記録がある。

近似種 近似種はいない。

生息地 本県では春秋の渡りの時期に湿気があって良く草刈された水田の畦畔に稀でないが、繁殖に必要な草丈の低い広い草地の減少で、繁殖期に留まる個体はいない。

生存の危機 本県の繁殖期の記録は、独特の求愛行動に基づくもので、北茨城市中郷工業団地における2003(平成15)年の記録を最後に途絶えている。

特記事項 2000年版RDBは過小評価だった。

執筆者(協力者) 池野 進・石井省三

文献 18), 55), 57), 58), 61)



撮影 2010年, 明日香治彦

茨城県2016	●●●●●	絶滅危惧 I A 類	●●●●●
茨城県2000	●●●●●	希少種	●●●●●
環境省2014	●●●●●	準絶滅危惧	●●●●●

タカ科

Haliaeetus albicilla (Linnaeus)

オジロワシ

選定理由 ②③ 県内唯一の越冬地涸沼で1998(平成10)年に密猟されて以来、稀に飛来するが、滞在時間は短い。

分布状況 極北地を除いたユーラシア大陸北部で繁殖し、冬季は南に移動する。日本では北海道で少数が繁殖する。

形態及び生態 全長雄約80cm、雌約95cm。翼開長182cm～230cm。雌雄同色。成鳥は体が褐色で尾羽は白く、嘴と足は黄色。頭部は体に比較して淡色に見える。若鳥は全体が褐色で、尾も褐色に白斑が混じり、成長するにつれて白色が多くなる。羽ばたきと滑空を交えてゆっくり飛翔する。

夏は広い原生林の続く湖沼畔や海岸に生息し、冬は海岸や河口、湖沼に生息する。水面低く飛んで足を伸ばして魚類を掴む。時には上空から急降下して地上の鳥類や哺乳類を捕ることもある。

近似種 近似種はいない。

生息地 冬の豊富な水産資源と、餌の解体場所となる大木がセットになった環境が必須である。まれにサケの遡上期に河川中流域に飛来する。

生存の危機 寿命の長い大型鳥類が一旦根絶やしされると回復が困難であり、涸沼の最新の記録は2011(平成23)年1月30日の短期滞在である。

特記事項

執筆(協力者) 池野 進・石井省三

文献 25), 26), 27), 55), 57), 60), 61)



撮影 2008年、北海道、斎藤玲子

茨城県2016	● ● ● ● ●	絶滅危惧ⅠA類	●
茨城県2000	● ● ● ● ●	絶滅危惧種	●
環境省2014	● ● ● ● ●	絶滅危惧Ⅱ類	● ●

カワセミ科

Halcyon coromanda (Latham)

アカショウビン

選定理由 ①② 2007(平成19)年まで5年毎に実施された鳥獣生息分布調査で得られた記録は5指に満たない。

分布状況 東南アジアに留鳥として分布。朝鮮半島、日本などに夏鳥として渡来繁殖する。冬季南に渡る。

形態及び生態 全長約27.5cm。雌雄同色。全体が赤橙色で下面はやや黄色味を帯びる。肩には紫の光沢があり腰は青く光る羽毛がある。嘴は太くて少し上に反っている。日本にはリュウキュウアカショウビンと本亜種の2亜種が生息する。

夏鳥として全国の山地に渡来し、溪流沿いの良く茂った林に生息し、木の洞などで繁殖する。枝や杭の上に止まってカエルやサワガニなどの餌を探し降りて取るが、カワセミのように常にダイビングはしない。キョロキョロと尻下がりに鳴く。

近似種 近似種はいない。

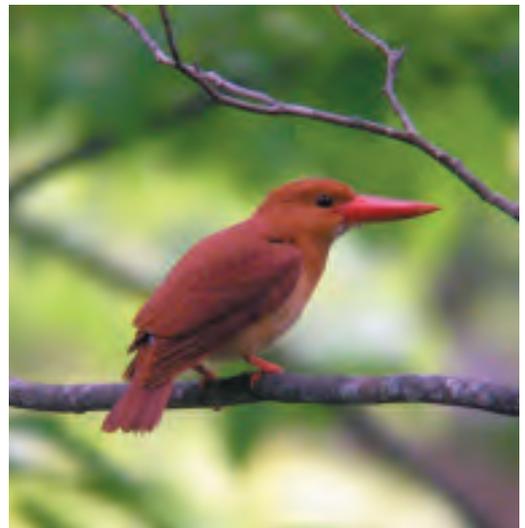
生息地 魚類や林内に生息する両生・爬虫類や昆虫類を餌とするため、渓谷沿いや池のある成熟した落葉広葉樹林を好む。

生存の危機 本県の樹種交換が進み、県内の山林の多くが人工林に変わった後、荒廃に至っているため、今後も個体数回復は見込めない。

特記事項 2000年版RDBは過小評価だった。

執筆(協力者) 池野 進・石井省三

文献 1), 55), 57), 58), 60), 61)



撮影 2005年、福島県、石川 皓

茨城県2016	● ● ● ● ●	絶滅危惧ⅠA類	●
茨城県2000	● ● ● ● ●	危急種	● ●
環境省2014		対象外	

イワヒバリ科

Prunella collaris (Scopoli)

イワヒバリ

選定理由 ①② 本県では唯一の越冬地だった筑波山山頂とその周辺の岩場に近年登山者が増加したため、行き場を失い、姿を消した。

分布状況 ユーラシア大陸中東部に留鳥として分布し、イベリア半島周辺で越冬するものもいる。日本では本州に生息し、冬季低山帯に標高する。

形態及び生態 全長約 18cm。雌雄同色。頭部から胸は灰褐色。背と肩羽は灰褐色で黒褐色の軸斑があり、肩羽の外側は赤褐色。腹部は赤褐色で白色の羽縁があり、下尾筒は暗赤褐色で白い羽縁がある。翼は黒褐色で 2 本の白帯がある。嘴は先端が黒く基部は黄色。足は橙黄色。

夏季には本州中部から北部の岩石地帯に生息するものが多い。岩の上や岩礫地の地上を歩いて餌を探す。岩の上にとまって胸を反らしてチョリチョリキュルリキュルリなどと囀る。冬期は低山に移動するが山麓には降りない。

近似種 近似種はいない。

生息地 繁殖期を高山帯で過ごすため、本県では数少ない冬鳥として筑波山の男体・女体山頂で、近年まで毎年越冬した。

生存の危機 2013（平成 25）年冬の補足調査でも確認はできなかった。

特記事項 登山者の増加によって生息地が消失した。

執筆者(協力者) 池野 進・石井省三

文献 1), 55), 57), 58), 61)



撮影 2007 年, 福島県, 伊澤泰彦

茨城県 2016	● ● ● ● ●	絶滅危惧 I A 類	●
茨城県 2000	● ● ● ● ●	希少種	● ● ● ● ●
環境省 2014	● ● ● ● ●	対象外	● ● ● ● ●

カモ科

Anser fabalis middendorffii Severtzov

オオヒシクイ

選定理由 ② 近年徐々に個体数が増加しているが、本亜種の世界の生息数の 1% をようやく上回った程度で、危機的状況は続いている。

分布状況 ユーラシア大陸北部で繁殖し、冬季は中国、朝鮮半島、日本で越冬する。日本では主に本州の日本海側に分布する。

形態及び生態 全長雄 105cm, 雌 96.3cm。雌雄同色。全身暗褐色、下腹部、上尾筒、下尾筒および尾の先端は白色。嘴は大部分が黒色で先端部近くに橙色の帯がある。足は橙色。日本に飛来するヒシクイの大部分は亜種ヒシクイと亜種オオヒシクイの 2 亜種。ヒシクイは全長雄 90cm, 雌 75cm。首も嘴も短く、一回り小さい。

刈田や農耕地で落穂や草の葉、マコモの根やヒシの実などを食べる。農耕地や湖沼などで、頭部を後方に向け、背羽の間に入れて眠る。飛行時は首を伸ばし、斜線、直線、V 字形の編隊飛行をする。

近似種 其亜種ヒシクイが稀に飛来する。

生息地 臆病な性質のため、視界を遮るものがない広い耕地や湖沼に越冬する。本県では稲敷市の稲波干拓地に関東地方唯一の定期的な越冬地がある。

生存の危機 越冬地の採食場は、広大な水田のごく一部に限られ、密集して生息するため、伝染病の蔓延で個体群が一挙に消滅する恐れがある。

特記事項 2000 年版 RDB は過小評価だった。

執筆者(協力者) 池野 進・石井省三

文献 2), 55), 56), 58)



撮影 2012 年, 小玉和夫

茨城県 2016	● ● ● ● ●	絶滅危惧 I B 類	●
茨城県 2000	● ● ● ● ●	危急種	● ● ● ● ●
環境省 2014	● ● ● ● ●	準絶滅危惧	● ● ● ● ●

カモ科

Branta bernicla (Linnaeus)

コクガン

選定理由 ①② 近年少数が県北の海岸で定期的に越冬し、個体数も増えていたが、東日本大震災による地盤沈下で、餌場が減少し、断続的で短期の滞在になっている。

分布状況 北極圏周辺で繁殖し、冬季は南方へ渡る。日本には冬鳥として北海道、東北地方沿岸部に飛来する。本県にはごく少数が岩石海岸等に飛来する。

形態及び生態 全長約61cm。小型のガンで雌雄同色。頭から上面は黒色。胸と腹部は黒褐色。下腹部と上尾筒は白色。頸にくさび形の白斑がある。嘴と足は黒色。

海岸や河口部などの浅瀬の海を生活の場としている。逆立ちして水面下の海藻類を食べることもあるが、アオサ、イワノリなどの岩場の海藻を好んで食べる。頸を伸ばして飛び、他のガン類のように隊列を組んで飛ぶことは少ない。低い声でグルルと聞こえる声で鳴く。

近似種 近似種はいない。

生息地 岩石海岸や小規模な漁港の舟入場など浅くて餌となるアオサが繁茂している藻場を好む。

生存の危機 天災による要因が減少をもたらしており、根本的な対策や見通しがたたない。

特記事項 北日本の個体数増加が本県での越冬を招来したが、地震で餌場が減少した。

執筆者(協力者) 池野 進・石井省三

文献 2), 55), 57), 58), 61)



撮影 2015年、伊澤泰彦

茨城県2016 ●●●●● 絶滅危惧ⅠB類 ●

茨城県2000 対象外

環境省2014 ●●●●● 絶滅危惧Ⅱ類 ●●●●●

サギ科

Botaurus stellaris (Linnaeus)

サンカノゴイ

選定理由 ② 生息環境が極めて特殊であり、ひとつがいが占有する面積も大きいいため、本県の生息数はごく少数と見込まれる。

分布状況 ユーラシア大陸中部で夏鳥として繁殖。冬に南に移動する。日本では本州以南に冬鳥として、本州中部以北では夏鳥として繁殖する。

形態及び生態 全長約68.5cm。雌雄ほぼ同色。頭部は黒く喉は白色。体全体が黄褐色で複雑な黒い斑点がある。胸には黒い縦班がある。嘴と足は黄緑色で虹彩は黄橙色。

広大なヨシ原に生息し、時折ヨシ原面を低空で短距離を飛ぶ。夜行性で夜間にポォーポォーと低音で繰り返し鳴く。動物質を主食とし魚類、両生類、甲殻類などを食べ、時にノネズミ、カヤネズミなどの哺乳類を食べることもある。ヨシ原の地上に巣を作り、オリーブ色をした卵を4～5個産卵する。

近似種 近似種はいない。

生息地 本県では面的に広がりのあるヨシ原で通年生息し、繁殖の可能性も高い。その他県内各所で断片的な記録がある。

生存の危機 生息環境が極めて特殊で、生息地も孤立的なため、個体間の交流に懸念があり、つがいの維持に不確定要素が伴う。

特記事項

執筆者(協力者) 池野 進・石井省三

文献 1), 55), 57), 61)



撮影 2015年、千葉県、飯田直己

茨城県2016 ●●●●● 絶滅危惧ⅠB類 ●

茨城県2000 ●●●●● 絶滅危惧種 ●

環境省2014 ●●●●● 絶滅危惧ⅠB類 ●

サギ科

Butorides striata (Linnaeus)

ササゴイ

選定理由 ①③ 止水域に接した大木を有する樹林という繁殖環境の組合せは、平地が多い本県では極めて限定される。

分布状況 ユーラシア大陸南部、オーストラリア、アフリカ大陸で留鳥として分布。日本には夏鳥として本州以南に飛来し繁殖する。

形態及び生態 全長約 52cm。雌雄同色。頭部は黒色、後頭の羽毛は冠羽状になる。上面から尾は青灰色。翼上面にうろこ模様がある。下面は灰褐色。嘴は黒色で虹彩は黄色。足は緑黄色。

河川、湖沼、水田などの水辺に生息し魚類などの動物質を捕食する。夜行性だが日中に活動することも多い。地上を走ることもあり、身体をかがめて餌を待ち、近づくと素早く捕える。雑木林やマツ・スギなどの高木上に粗雑な巣を作り淡青緑色の卵を 3～6 個産卵する。

近似種 近似種はいない。

生息地 亜寒帯から熱帯に分布し、決して珍しくないが、流れの緩やかな河川や湖岸に接した大木に営巣する。近くの水辺で採食するが、水田は利用しない。

生存の危機 本県唯一の県北の繁殖地では、営巣木のクロマツの衰退と河川工事によって個体数を著しく減じ、近年はひとつがいのみ営巣する。

特記事項

執筆者(協力者) 池野 進・石井省三

文献 9), 55), 57), 58), 61)



撮影 2014年, 牛山武美

茨城県 2016 ●●●●● 絶滅危惧 I B 類 ●

茨城県 2000 ●●●●● 絶滅危惧種 ●

環境省 2014 対象外

サギ科

Egretta sacra (Gmelin)

クロサギ

選定理由 ①③ 本種に適した生息環境が整っているのは、県北の海岸のみであり、繁殖履歴もあるが、近年の確実な記録はない。

分布状況 日本の本州以南、東南アジア、オーストラリアなどに分布する留鳥。海岸を好んで生息地とする。

形態及び生態 全長約 62.5cm。雌雄同色。黒色型と白色型がある。黒色型は全身が黒色、白色型は全身が白色で、両型ともに虹彩は黄色。嘴は両型とも淡黄色から黒色に近いものまで変異が多い。足は両型ともに黄緑色または緑褐色。

岩礁で魚類、カニ・エビなどの甲殻類、貝などを捕食する。岩の上に巣を作ることが多く、枯れ枝などで皿型の巣を作り青緑色の卵を 3～5 個産む。

近似種 近似種はいない。

生息地 岩石海岸に特化したサギで、潮溜まりや河口の浅瀬などが採食場であり、海食崖や孤島の岩棚に営巣する。行動域は営巣地を中心に 30km 以上に達する。

生存の危機 東日本大震災によって岩棚が、貧相だった植物帯とともに崩落したため、繁殖環境の条件が整うまでに相当の時間を要する。

特記事項 地震による海食崖の崩落で営巣適地が減少した。

執筆者(協力者) 池野 進・石井省三

文献 1), 55), 57), 58), 61)



撮影 2014年, 明日香治彦

茨城県 2016 ●●●●● 絶滅危惧 I B 類 ●

茨城県 2000 ●●●●● 危急種 ●●●●●

環境省 2014 対象外

トキ科

Platalea minor Temminck et Schlegel

クロツラヘラサギ

選定理由 ①③ 本県には本種に適した干潟はないが、確実に毎年ごく少数が越冬しており、近年複数ヶ所で越冬することもある。

分布状況 中国東北部や朝鮮半島のごく限られた地域で繁殖し、日本には数少ない冬鳥として飛来する。

形態及び生態 全長約 74.5cm。雌雄同色。全身が白色で夏羽では後頭に薄黄色の冠羽がある。また、頸の下部にも黄色い帯がある。冬羽では冠羽も頸の黄色い帯はない。虹彩は赤く、嘴はへら状で黒色。目元の裸出部は黒色で前頭から喉元まで目を囲むようにある。足は黒色。水田、湖沼、沼沢地、干拓地などに生息し、水中に嘴の先端を入れて左右に振りながら開閉し、魚類、甲殻類、昆虫類などを探しながら捕食する。地上や浅水中に片足立ちし、嘴を背にもたせかけて休む。

近似種 近似種はいない。

生息地 干潟差の大きな広い干潟を好むため、繁殖地のある朝鮮半島西海岸に近い九州や台湾で多くが越冬する。本県の越冬地は世界の最東端にあたる。

生存の危機 へら状の嘴を泥中に差し込んだまま、前進し、採食できるような環境が、本県にはごく僅かなので採食地を変更できない。

特記事項 一過性の飛来ではなく、毎年の越冬が確実になったためのリストアップ。

執筆者(協力者) 池野 進・石井省三

文献 1), 10), 55), 57), 61)



撮影 2010年, 徳元 茂

茨城県 2016 ●●●● 絶滅危惧 I B 類 ●

茨城県 2000 対象外

環境省 2014 ●●●● 絶滅危惧 I B 類 ●

カッコウ科

Cuculus canorus Linnaeus

カッコウ

選定理由 ①② 1997 (平成 9) 年から 5 年おきに実施した県内の分布調査で一貫して減少を辿り、その後も回復の兆しが無い。

分布状況 ユーラシア大陸に広く夏鳥として分布、冬季にはインドやアフリカ大陸南部に移動する。日本では夏鳥として九州以北に飛来し繁殖する。

形態及び生態 全長約 35cm。雌雄ほぼ同色。頭から上面は灰青色。胸は灰色、下面は全体に白く、腹には黒く太い横斑が複数ある。目の周囲に黄色のアイリングがある。嘴は黒く基部は黄色。虹彩は暗橙色で足は黄色。

平地から山地の草原や農耕地に夏鳥として渡来し、カッコウ、カッコウと連続して鳴く。昆虫を主な餌とし、渡りの時期には市街地の公園などで毛虫を食べることもある。モズ、オオヨシキリ、ホオジロなどの巣に托卵する。

近似種 近似種はいない。

生息地 托卵相手のオオヨシキリやモズなどが生息する明るい草原や疎林に生息し、身近な鳥として人の居住地域にも現れる。

生存の危機 2007 (平成 19) 年の段階では県西に生息域がまとまっていたが、現在では県内全域で生息確認の記録が少なくなっている。

特記事項 本県の分布が、依然として縮小を続けている。

執筆者(協力者) 池野 進・石井省三

文献 1), 55), 57), 61)



撮影 2010年, 栃木県, 石川 皓

茨城県 2016 ●●●● 絶滅危惧 I B 類 ●

茨城県 2000 ●●●● 希少種 ●●●●

環境省 2014 対象外

選定理由 ①② 本県に本種の生息適地が多かった 1970 年代前半（昭和 50 年頃）でも一度に見られる数は 10 羽に満たなかった。

分布状況 ユーラシア大陸北部で局所的に繁殖する。冬季アフリカや東南アジア、オーストラリアなどに渡る。日本では旅鳥。

形態及び生態 全長約 17cm。雌雄同色。褐色の頭中央線と頭側線が額で交わる。眉斑は白色で過眼線は黒褐色である。上面は軸斑が黒く、白色の羽縁があり、全体に赤褐色に見える。背には白い V 字模様がある。下面は全体に白い。嘴は黒く上嘴の先端が下に軽く折れ曲がったように見える。足は黒色。冬羽は上面が白褐色で下面は白色。旅鳥として干潟や河口部に立ち寄る。トウネンやハマシギの中に混じっていることがある。

近似種 近似種はいない。

生息地 秋のシギであり、干潟から内陸の水田に至る多様な水域に生息するが、個体数は少なく、他のシギの群れに少数が混じる。

生存の危機 基盤整備による乾田の増加とハス田の増加による水深の深すぎる湛水域が増加したため、小型のシギ類が利用しづらくなっている。

特記事項 基礎データの整理により評価を見直した。

執筆者(協力者) 池野 進・石井省三

文献 51), 55), 57), 61)



撮影 2006 年, 明日香治彦

茨城県 2016	●●●●●	絶滅危惧 I B 類	●
茨城県 2000	●●●●●	希少種	●●●●●
環境省 2014	●●●●●	対象外	●●●●●

選定理由 ①②③④ 基盤整備がほぼ全県に行き渡った現在、かつて湖や沼だった水田に生息地が限られ、除草の折に巣毎破壊されることがある。

分布状況 アフリカ、東南アジア、オーストラリアなどに生息、日本では本州中部以南で繁殖、冬季南に渡るものもある。

形態及び生態 全長約 23.5cm。雌雄異色。雌が雄より美しい。雄は上面が褐色で雨覆に淡黄褐色の斑がある。顔から胸は灰褐色。肩に淡黄色の線がある。下面は白色。雌は上面が黒褐色で雨覆に黒い細かな横縞がある。顔から胸は濃い赤褐色。目の周りの白いアイリングは後頸へと流れる。頭中央線はともに黄褐色。嘴と足は緑黄色。水田、休耕田などに生息する。一妻多夫で、巣作り子育てを雄が行う。浅い水の中でミミズや昆虫類を餌とするが、イネ科植物の種子なども食べる。

近似種 近似種はいない。

生息地 本来的には丈の低い湿性草地に生息するが、本県では低湿な水田や放棄直後の水田などが代替生息地になっている。冬季も同様の環境で過ごす。

生存の危機 2006（平成 18）年度の調査で 11ヶ所で繁殖を確認した新利根川流域の平成 24 年度の状況は 8ヶ所に減っている。

特記事項 本県の分布が、依然として縮小を続けている。

執筆者(協力者) 池野 進・石井省三

文献 41), 55), 57), 58), 61)



撮影 2010 年, 岸 久司

茨城県 2016	●●●●●	絶滅危惧 I B 類	●
茨城県 2000	●●●●●	希少種	●●●●●
環境省 2014	●●●●●	絶滅危惧 II 類	●●●●●

タカ科

Haliaeetus pelagicus (Pallas)

オオワシ

選定理由 ②③ 洄沼は県内唯一の越冬地で40年以上継続し、毎年1月末頃から3月初頭頃まで同じ個体と思われる1羽が越冬する。

分布状況 カムチャッカ半島やオホーツク海沿岸で繁殖し、冬季に南に移動する。日本には冬鳥として飛来する。

形態及び生態 全長雄約88cm、雌約102cm。翼開長220～245cm。雌雄同色。成鳥では全身が黒色。額、小雨覆、中雨覆、腿、尾が白色。嘴と足は黄色。若鳥は体が褐色で年齢により白色羽が混じる。成鳥の場合飛翔時の前縁の白色部がよく目立つ。冬季に北海道以南の海岸などに飛来し、魚類を主食とする。時には海獣や水鳥を捕えたり、それらの死体を食べる。

近似種 近似種はいない。

生息地 冬に水産資源が豊かな水域と、餌の解体場所となる大木がセットになった環境が必須。まれにサケの遡上期に河川中流域に飛来する。

生存の危機 同じ個体と思われる成鳥1羽のみという飛来状況が長年続いており、越冬個体数が増える兆しはみえない。

特記事項 2000年版RDBは過小評価だった。

執筆者(協力者) 池野 進・石井省三

文献 25), 28), 55), 57), 58), 60), 61)



撮影 2015年、若山伏蔵

茨城県2016	● ● ● ● ●	絶滅危惧I B類	● ●
茨城県2000	● ● ● ● ●	危急種	● ●
環境省2014	● ● ● ● ●	絶滅危惧II類	● ●

タカ科

Circus spilonotus Kaup

チュウヒ

選定理由 ①③ 県内各所の広大なヨシ原で越冬する。総個体数は100羽程度である。そのうち10羽未満が本県で通年過す個体である。

分布状況 ユーラシア大陸中東部で繁殖し、冬季東南アジアなどに渡る。日本には冬鳥として渡来するが、少数が繁殖もしている。

形態及び生態 全長雄約48cm、雌約58cm。翼開長113～137cm。個体の変異が多い。雄成鳥の体は灰色で腹部は白色。尾は灰色で腰は白色。頭と胸に黒色の縦斑がある。嘴は先端が黒く、基部は黄色。足も黄色。雌及び若鳥は全体が褐色で変異が多い。翼や尾は褐色で横斑はない。飛翔時に両翼を少し上げて浅いV字形で飛ぶ。河川や湖沼の広いヨシ原に生息し、多くはヨシ原の上を低く飛び、地上の哺乳類や鳥類を見つけると、急降下して捕食する。

近似種 近似種はいない。

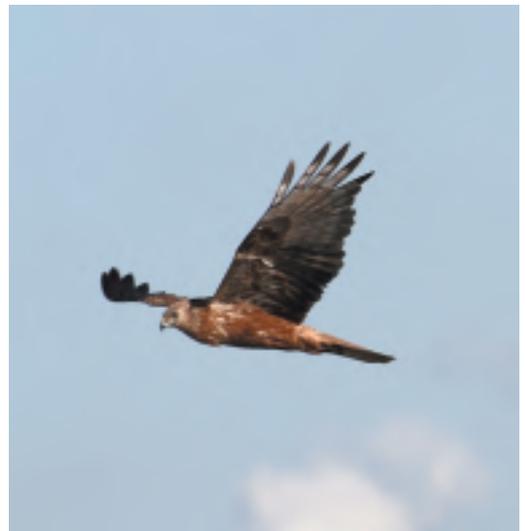
生息地 霞ヶ浦などの広大なヨシ原とその周辺の耕作地に生息する。多くは冬鳥であるが、一部は繁殖する。

生存の危機 地上営巣性なので、中型哺乳類等の天敵が多い。また、生息環境である複雑な湿性植物群落から成る草地在、一部で一様で単純な群落に変わったり、乾燥化が進んでいる。

特記事項 本県で初めて繁殖が確認された湿地は、堤防の構築で消え、繁殖地は1ヶ所になった。

執筆者(協力者) 池野 進・石井省三

文献 29), 30), 55), 57), 58), 60), 61)



撮影 2010年、明日香治彦

茨城県2016	● ● ● ● ●	絶滅危惧I B類	● ●
茨城県2000	● ● ● ● ●	危急種	● ●
環境省2014	● ● ● ● ●	絶滅危惧I B類	● ●

選定理由 ①② 現在本県に繁殖地はないが、隣県から飛来し、〈生息地〉欄のように条件を整えば、繁殖を可能にする生息環境がある。

分布状況 ユーラシア大陸、北アメリカ大陸に広く生息分布している。日本では留鳥として少数が生息し繁殖している。

形態及び生態 全長雄約 81cm、雌約 89cm。翼開長 168～213cm。雌雄同色。上面は黒褐色で頭上から後頸は金色の羽毛がある。尾は灰色をおび先端に幅の広い黒帯がある。嘴は先が黒く基部は黄色。足は黄色。若鳥は成鳥よりも黒く後頭の金色の羽毛は少ない。初列風切、次列風切と尾羽の基部は白色。

険しい山岳地帯に生息し、季節による移動は少ない。飛翔力が強いために平地や海岸に出現することもある。高空を帆翔しながら地上のノウサギなどを見つけて捕食する。岩棚や大木に巣を構え繁殖する。

近似種 近似種はいない。

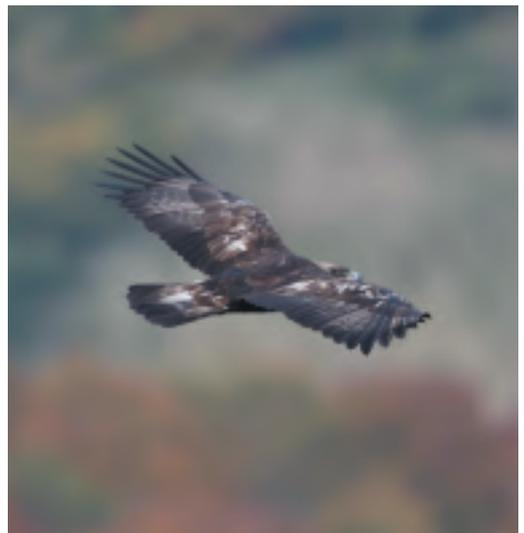
生息地 1992（平成 4）年 8 月 15 日に竜神峡で確認された後、羽毛採取や岩棚への材木の積み上げを認めたが、1 年後に消息を絶った。

生存の危機 全国の生息数が 500 羽と限界に近い状態でありながら、採食地の減少が目立ち、種の存亡が危ぶまれている。

特記事項

執筆者(協力者) 池野 進・石井省三

文献 34), 35), 55), 57), 58), 60), 61)



撮影 2008 年、新潟県、石田光史

茨城県 2016 ●●●● 絶滅危惧 I B 類 ●

茨城県 2000 ●●●● 絶滅危惧種 ●

環境省 2014 ●●●● 絶滅危惧 I B 類 ●

選定理由 ①③ 隆起準平原からなる本県の山地には急傾斜面に生育する良好な落葉広葉樹林が少なく、それを反映して生息数も少ない。

分布状況 インド、ヒマラヤ、スリランカ、中国南東部などに生息する。日本では九州以北に生息し留鳥。

形態及び生態 全長雄約 72cm、雌約 80cm。翼開長 140～165cm。雌雄同色。頭部から後頸は黄白色で黒色の縦斑があり、後頭部の羽毛はやや長く冠羽状になる。背から上面は褐色で尾羽には黒褐色の横斑が数本ある。下面は白色で喉から胸に黒い縦斑がある。腹部には褐色の横斑がある。嘴は黒く足は黄色。

森林の多い山地に生息し、幅の広い翼を広げ帆翔する。羽ばたきはゆっくりで滑翔するとき翼は水平に保たれる。急降下して中型の鳥や哺乳類を捕まえる。森林の大木に営巣する。

近似種 近似種はいない。

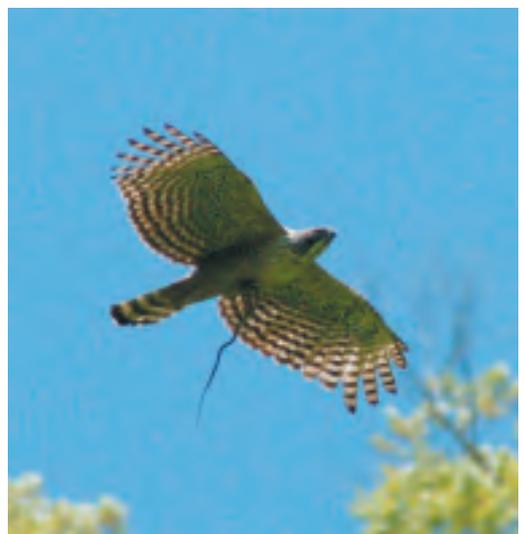
生息地 山間の急傾斜地に生える高齢の針葉樹の混ざった広い落葉広葉樹林を好み、その山林内や周辺の伐採地を採食場としている。

生存の危機 近年新たなつがいが定着するようになったが、本県では環境要因のそろった潜在生息地は限られている。

特記事項

執筆者(協力者) 池野 進・石井省三

文献 35), 36), 55), 57), 58), 60), 61)



撮影 2010 年、栃木県、池田 昇

茨城県 2016 ●●●● 絶滅危惧 I B 類 ●

茨城県 2000 ●●●● 絶滅危惧種 ●

環境省 2014 ●●●● 絶滅危惧 I B 類 ●

フクロウ科

Otus sunia (Hodgson)

コノハズク

選定理由 ①②③ 本県では〈生息地〉欄に記した環境要因を満たす地は少なく、県内の個体数も少ない。

分布状況 ユーラシア大陸、アフリカ大陸に生息し、冬季は南に移動する。日本では夏鳥として北海道以南に飛来する。

形態及び生態 全長約20cm。翼開長42～49cm。雌雄同色で褐色型と赤色型がある。褐色型は体が全体に灰褐色で白、黒などの細かい複雑な斑紋がある。赤色型は体が赤褐色で他は同じである。耳羽を持つが時期によって長さが異なる。虹彩は黄色く嘴は黒色。夏鳥として飛来し、茂った森林に生息するが、稀に平地の果樹林などに生息するものもいる。夜行性で夕方から活動して昆虫類を捕食する。ブックョッコーブックョッコーと繰り返し連続して鳴く。

近似種 近似種はいない。

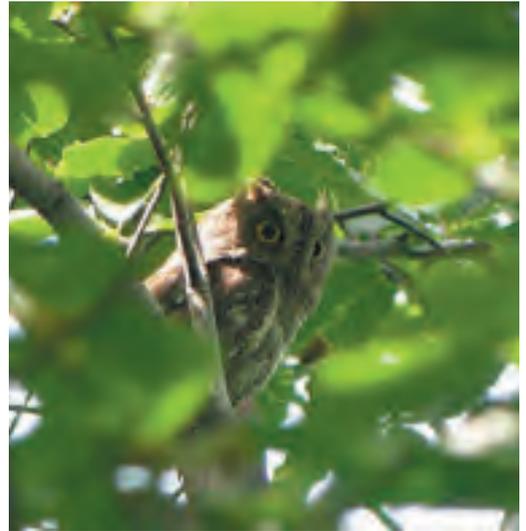
生息地 本種が好む生息環境は、昆虫発生量の多い広い落葉広葉樹林だが、本県は単一樹種からなる人工林が多いため、伐採できない急傾斜地などに生息が限られる。

生存の危機 補足調査で条件の揃った未調査地を調べたが、生息を確認ができないため、減少が危惧される。

特記事項

執筆者(協力者) 池野 進・石井省三

文献 37), 55), 57), 58), 60), 61)



撮影 2004年, 新潟県, 明日香治彦

茨城県 2016	● ● ● ●	絶滅危惧 I B 類	● ●
茨城県 2000	● ● ● ●	絶滅危惧種	● ●
環境省 2014		対象外	

フクロウ科

Ninox scutulata (Raffles)

アオバズク

選定理由 ①② 傷病鳥で収容される個体数が2002(平成14)年の11羽をピークに急減し、2010(平成22)年以降収容されない年の方が多い。

分布状況 ロシア東部、中国東部、朝鮮半島などで夏鳥であり、冬季になるとインドや東南アジアに移動する。日本では夏鳥として全国に飛来する。

形態及び生態 全長約29cm。翼開長66～70.5cm。雌雄同色。頭部から上面は黒褐色で尾羽には数本の黒帯がある。胸から腹部は黄白色の地に黒褐色の太い縦斑がある。耳羽はなく虹彩は黄色で嘴は黒色。夏鳥として飛来し、平地から山地の林や大木のある社寺林などに生息する。夜間に活動しガやカブトムシのような昆虫を好んで食べる。夜間に街路灯の周辺で餌を捕ることもよくある。ホッポーホッポーと二声ずつ区切って連続して鳴く。

近似種 近似種はいない。

生息地 樹洞を持つ大木があり、甲虫や蛾などの飛翔性昆虫の発生量が多い開けた環境を好み、この条件がそろえば、都市部にも生息できる。

生存の危機 大木の森林整備の名目で伐採や枝打ちがなされ、営巣適木が減少しているほか、環境が変わりがなくても翌年に飛来しない事例が増えている。

特記事項 2000年代中盤以降に傷病鳥の収容が減少した。

執筆者(協力者) 池野 進・石井省三

文献 37), 55), 57), 58), 60), 61)



撮影 2015年, 飯田直己

茨城県 2016	● ● ● ●	絶滅危惧 I B 類	● ●
茨城県 2000	● ● ● ●	希少種	● ● ● ●
環境省 2014		対象外	

カワセミ科

Megaceryle lugubris (Temminck)

ヤマセミ

選定理由 ①②③ 生息環境が県北山間地の河川に限られるため、多めに見積もっても60羽程度の生息数とされている。

分布状況 日本、中国東部、インドシナ半島東部に分布。日本には留鳥として全国に生息する。

形態及び生態 全長約37.5cm。雌雄ほぼ同色。頭には白と黒の顕著な冠羽がある。この冠羽の白黒が雄ではコントラストが強く雌では弱くなる。上面から尾は白と黒の細かな鹿の子模様になっている。頸側と下面は白く胸には黒斑が帯状にある。雄は胸の帯が橙褐色になる。腹部は白色。翼下面は雄では白く、雌では橙褐色。

全国の溪流や山地の湖沼に生息し、水辺の木の枝や杭の上に止まって、餌となる水中の魚をダイビングして嘴で捕まえる。キャラッキャラッと鳴く。

近似種 近似種はいない。

生息地 水量が豊かで魚類が身を寄せる緑陰のあるトコ場が随所にある県北の河川に生息し、自然崩落などで生じた法面を営巣地とする。

生存の危機 災害防止のための法面舗装による環境改変や近年の手軽で高性能なカメラの普及によるカメラマンの営巣地への立入など、営巣に支障が生じている。

特記事項 2000年発行RDB以降、高性能のデジタルカメラが普及した。

執筆者(協力者) 池野 進・石井省三

文献 38), 55), 57), 58), 60), 61)



撮影 2012年, 石川 皓



センニュウ科

Locustella pryeri (Seebohm)

オオセッカ

選定理由 ①②③ 本県の総個体数は1000羽程度とされていた。全国の生息地も局所的であり、その総個体数が絶滅の危機を脱する域には達していない。

分布状況 中国東北地区南部に限られた地域で繁殖し冬季に南に移動する。日本では本州北部や本県などで局所的に繁殖している。

形態及び生態 全長約13cm。雌雄同色。頭上から上面は黄茶褐色。尾は暗褐色で黄褐色の羽縁がある。淡い不明瞭な眉斑があり、頬と耳羽は淡褐色。翼は黒褐色で黄茶褐色の羽縁がある。嘴は褐色、足は淡褐色。

湿った草原に生息している。冬期は姿を見つけにくい、繁殖期には雄は丈の高い草にとまり、そこから飛び立ってジुकジुकジुकと短くさえずり、良く目立つ。地表近くに巣を構え白色の卵を5~6個産む。

近似種 近似種はいない。

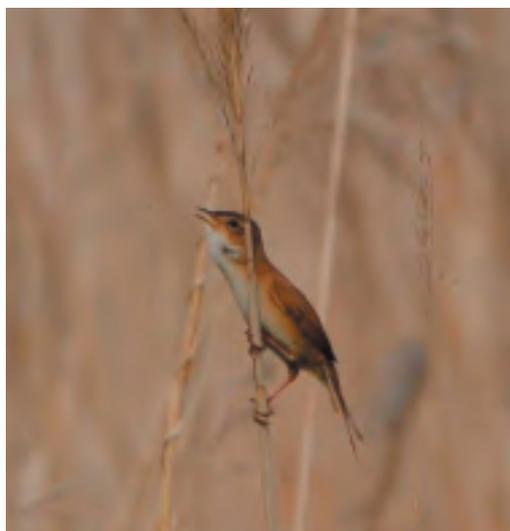
生息地 水辺のカサガを主とする脆弱な植物群落に依存して生息するため、本県では霞ヶ浦湖岸や利根川下流域とその周辺に生息地が限られる。

生存の危機 近年利根川下流域における繁殖期の生息数が、200羽前半台まで減少している。

特記事項 2000年発行のRDBで過小評価していた。

執筆者(協力者) 池野 進・石井省三

文献 1), 44), 54), 55), 57), 61)



撮影 2014年, 小柳 恵



ヨシキリ科

Acrocephalus bistrigiceps Swinhoe

コヨシキリ

選定理由 ①②③ 1980年代初頭まで内陸の草地にも生息地があったが、現在は霞ヶ浦・北浦、涸沼では稀になり、主要個体群は、利根川河川敷に限られる。

分布状況 ユーラシア大陸東部及び日本で繁殖し、冬季に南に渡る。日本には夏鳥として渡来し、本県では局所的。

形態及び生態 全長 13.5cm。雌雄同色。頭部から上面、尾羽上面は黄褐色。喉は白色で胸部から腹部は淡黄褐色。頭側と過眼線は黒褐色で白色の眉斑は明瞭。嘴は黒色、下嘴の基部は黄色。足は肉色。

夏鳥として九州以北の高原などに渡来し繁殖するが局地的である。北海道や本州中部では平地の草原でも繁殖する。草原の丈の高い茎に営巣することが多い。イネ科植物の枯葉や枯枝を使いコップ状の巣を作り4～6個産卵する。

本県では霞ヶ浦周辺や涸沼周辺の低層湿原での繁殖が確認されていた。

近似種 近似種はいない。

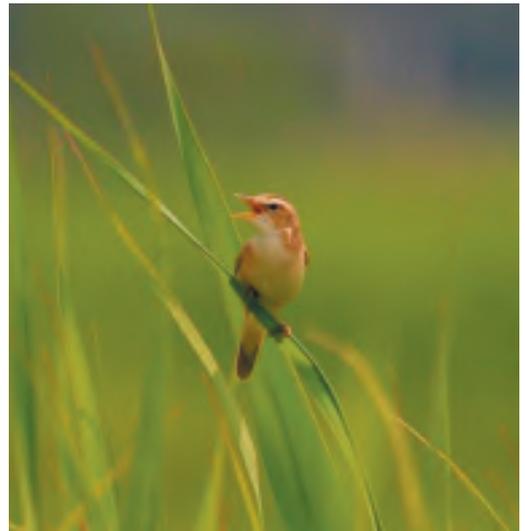
生息地 本県では霞ヶ浦・北浦、涸沼、牛久沼など湖岸や河川敷などのやや湿り気が多く、大人の背丈までの草地で繁殖する。

生存の危機 草地の再生が進行中の霞ヶ浦・北浦で実施した平成22年度の調査では本種の生息状況に回復する兆しがない。

特記事項 2000年版RDB発行以降も減少が続いている。

執筆者(協力者) 池野 進・石井省三

文献 1), 45), 46), 55), 57), 61)



撮影 2007年, 岸 久司

茨城県2016	●●●●●	絶滅危惧I B類	●
茨城県2000	●●●●●	希少種	●●●●●
環境省2014		対象外	

ゴジュウカラ科

Sitta europaea Linnaeus

ゴジュウカラ

選定理由 ①③ 2007(平成19)年までの5年毎の鳥獣生息分布調査で、夏冬を通じて2ヶ所程度の記録があるのみ。

分布状況 ユーラシア大陸中部、中国南東部などに分布繁殖する。日本では九州以北の山地に留鳥として生息する。

形態及び生態 全長約 13.5cm。雌雄ほぼ同色。頭部から上面、中央尾羽は青褐色。翼は黒褐色で羽縁は灰色。目を通る黒色の過眼線が良く目立つ。眉斑は白色。喉から胸は白色で腹部は黄褐色。下尾筒は濃茶色。嘴は黒く、足も黒い。雌は下尾筒の濃茶色が薄い。

山地の広葉樹林や針広混合林に生息する。木の幹に垂直にとまり、体をさかさまにして幹を回りながら昆虫類を捕食する。植物質ではハンノキ、ブナ、イチイの実などを食べる。繁殖期にはフィフィフィと大きな声を発し、キツツキ類の古巣等を利用して5～7個を産卵する。

近似種 近似種はいない。

生息地 本県では県北のブナ帯に属する山地の原生的な林に生息するが、このような林が本県には限られていて、生息域が著しく不連続である。

生存の危機 大きな渡りをせず、冬でも同じ樹林帯で過ごすため、県外からの移入による個体数の増加は期待できない。

特記事項 2000年発行のRDBで過小評価していた。

執筆者(協力者) 池野 進・石井省三

文献 1), 47), 55), 57), 58), 61)



撮影 2005年, 栃木県, 石川 皓

茨城県2016	●●●●●	絶滅危惧I B類	●
茨城県2000	●●●●●	希少種	●●●●●
環境省2014		対象外	

ヒタキ科

Luscinia akahige (Temminck)

コマドリ

選定理由 ①②④ 深い浸食谷がない本県の山地には潜在生息地は多くない。しかし、近付きがたい小さな沢にも生息するため、記録が採取されにくい面がある。

分布状況 日本だけで繁殖し、冬季に中国南部で越冬する。伊豆諸島、屋久島、種子島では留鳥として分布する。

形態及び生態 全長約 14cm。雌雄ほぼ同色。雄の頭部から上面は全て暗赤褐色。顔から胸元まで橙赤色。胸と脇は暗灰色で橙赤色の部分との境は黒に近い。嘴は黒色。足は黄褐色。雌は全体に色が鈍く、胸の黒帯の色も淡い。

繁殖期には山地のよく茂った針広混合林に生息し、倒木のあるような湿った場所を好む。地表近くの低木林やササの中で生活し、雄は枯れ枝や倒木、切株などにとまって、ヒンカラカラカラと響き渡る美声で囀る。倒木の陰や崖の下に巣を構え 3～5 個を産卵する。

近似種 近似種はいない。

生息地 県北のブナ帯に属する山地で下生えの豊かな沢沿いに生息する。良好な落葉広葉樹林に多いが、高齢の人工針葉樹林にも生息する。まれに渡り途中で平地林で見ることがある。

生存の危機 円やかな山容の本県の山地には道路網が発達しており、生息地に道路が近い場合、常に密猟の脅威に晒されている。

特記事項 生息地での本種の密猟に関する具体的な話が後を絶たない。

執筆者(協力者) 池野 進・石井省三

文献 1), 55), 57), 61)



撮影 2014年, 長野県, 石田光史

茨城県 2016	● ● ● ● ●	絶滅危惧 I B 類	● ●
茨城県 2000	● ● ● ● ●	危急種	● ● ● ● ●
環境省 2014		対象外	

ホオジロ科

Emberiza fucata Pallas

ホオアカ

選定理由 ①② 2007 (平成 19) 年までの 5 年毎の鳥獣生息分布調査で繁殖期の生息域が一貫して減少している。

分布状況 中国東北部、朝鮮半島などに夏鳥として分布、冬季に南に移動する。日本では九州以北で繁殖し北日本、北海道では夏鳥。

形態及び生態 全長約 16cm。雌雄ほぼ同色。頭部から上面は灰褐色で、背には黒い縦斑がある。肩羽は赤褐色。頬と耳羽は赤褐色。喉から胸は白色で黒と赤褐色の 2 本の帯が胸にある。胸以下の下面は淡褐色。嘴は黒灰色で足は黄色。雌は頬の赤褐色、胸の黒色と赤褐色の帯が淡い。主に山地の草原に生息するが、河川や湖沼近くの平地にも生息する。雄は低木や丈の低い草にとまってチョッチンチョジョジと少し濁った声で囀る。秋冬は暖地の草地に単独でいることが多い。地上の凹地や低い枝の茂みに巣を構え 3～6 個産卵する。

近似種 近似種はいない。

生息地 湿潤な草地から乾燥した草地へ遷移途上にある草地、または天水頼りや滲出水頼りの湿地で灌木がわずかに生育する丈の低い草地に生息する。

生存の危機 未利用の工業団地用地などは経費削減のために草刈が控えられ、近年では太陽光発電所の用地として需要が高まっている。

特記事項 太陽光発電所用地の需要が高まったのは 2000 年 RDB 発行以降のことである。

執筆者(協力者) 池野 進・石井省三

文献 1), 55), 57), 60), 61)



撮影 2013年, 福島県, 伊澤泰彦

茨城県 2016	● ● ● ● ●	絶滅危惧 I B 類	● ●
茨城県 2000	● ● ● ● ●	希少種	● ● ● ● ●
環境省 2014		対象外	

キジ科

Coturnix japonica Temminck et Schlegel

ウズラ

選定理由 ①②③ 小規模経営による畜産業が衰退し、大規模経営でも小屋飼いが主流になったため、草地の必要性が失われつつある。

分布状況 ユーラシア大陸東北部で繁殖し、冬季は南方へ渡る。日本では本州中部以北で繁殖し、以南で越冬する。本県では留鳥。

形態及び生態 全長約 20cm。雌雄ほぼ同色。体は丸みをおびて尾は短い。頭から上面は褐色で黒と黄白色の横斑と縦斑がある。眉斑は黄白色。下面は淡黄褐色で胸から脇には白色と褐色の縦斑、黒い横斑がある。雄は頬から喉にかけて赤褐色。雌は汚白色。翼は黄褐色の地に不明瞭な黒褐色の横斑がある。

平地から山地の草原や農耕地にすみ、冬は暖地の河原や休耕地に生息する。草かげにいたることが多く姿は見つけにくい。天敵が近づくとじっと身を潜めて、いよいよとなると飛立ち低く直線的に飛ぶ。

近似種 近似種はいない。

生息地 人が定期的に刈り込む膝頭ほどの草地、牛馬の放牧で常に攪乱を受けている放牧地など広くて明るい草地を好む。

生存の危機 経済のグローバル化のため草地の攪乱要因が増える見込みはなく、かつ放牧地が太陽光発電所に置き換わっている。

特記事項 2000 年発行の RDB で過小評価していた

執筆者(協力者) 池野 進・石井省三

文献 1), 55), 57), 61)



撮影 2008 年, 岸 久司

茨城県 2016 ●●● 絶滅危惧Ⅱ類 ●●●

茨城県 2000 対象外

環境省 2014 ●●● 絶滅危惧Ⅱ類 ●●●

カモ科

Anas formosa Georgi

トモエガモ

選定理由 ①② 本県では一時的に増加してもここ 50 年近く個体数に変化がなく、回復にはさらに時間を要する。

分布状況 北極圏とユーラシア大陸の北東部で繁殖し、冬季には南方へ渡る。日本には冬鳥として主に本州以南に渡来する。

形態及び生態 全長約 40cm。小型のカモで雌雄異色。雄の頭頂から後頭は黒褐色。顔は黄白色の地に緑黒色のともえ形の模様がある。後頭から背は褐色。翼は黒褐色で次列風切羽の外縁は白色。胸は灰色で細かい黒斑がある。胸側には白い縦線がある。腹部は白色。雌雄ともに嘴は黒色で足も黒い。雌は全体に褐色で嘴の付け根に小さい白斑がある。

日中は湖沼や河川に生息し、夜間水田などに飛来して植物質を主に食べ、動物質の水生昆虫や甲殻類なども餌とする。

近似種 近似種はいない。

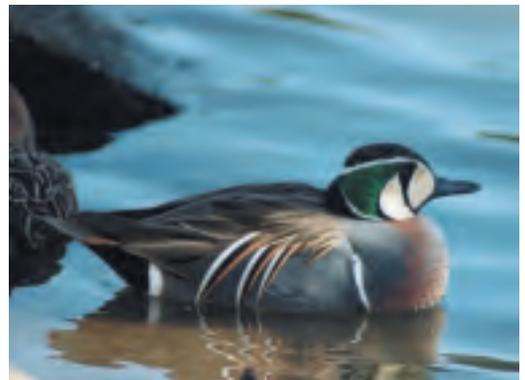
生息地 西日本の日本海側に代表的な越冬地があり、本県ではオシドリが好む水辺にオシドリに混じって少数越冬するが、定期的な越冬地はない。

生存の危機 主要な越冬地である朝鮮半島などで、高病原性鳥インフルエンザウイルスに感染して大量死する事例が頻発している。

特記事項 2000 年 RDB の発行以降に高病原性鳥インフルエンザウイルスが発生した。

執筆者(協力者) 池野 進・石井省三

文献 2), 55), 57), 58), 61)



撮影 2002 年, 西野正義

茨城県 2016 ●●● 絶滅危惧Ⅱ類 ●●●

茨城県 2000 ●●● 希少種 ●●●

環境省 2014 ●●● 絶滅危惧Ⅱ類 ●●●

ウ科

Phalacrocorax pelagicus Pallas

ヒメウ

選 定 理 由 ① 近縁種のウミウとともに人の手が及ばない海食崖でねぐらを共有するが、東日本大震災で岩棚の崩落が著しい。

分 布 状 況 北アメリカ大陸の西海岸やユーラシア大陸の北東海岸部で繁殖し冬期南に移動する。北海道の一部で繁殖し、茨城県では冬鳥。

形態及び生態 全長約 73cm。雌雄同色。全体に黒色で青や紫の光沢がある。夏羽では頭頂部と後頭部に短いブラシ状の冠羽があり、目の周りの裸出部は暗赤色になり、足の付け根に白斑が生じる。冬羽では目の周りの裸出部はわずかで足の付け根の白色はない。嘴は細長い鉤状をした黒色で足も黒色。

海に面した断崖や岩礁に生息し、防波堤やテトラポッドに止まっていることもある。潜水が得意で泳ぎと潜水を繰り返しながら主に魚類を捕食する。

近 似 種 同所的に生息するウミウも全身黒色だが、ヒメウの嘴は細く、識別は容易。峙では高所をウミウ、低所をヒメウと使い分ける。

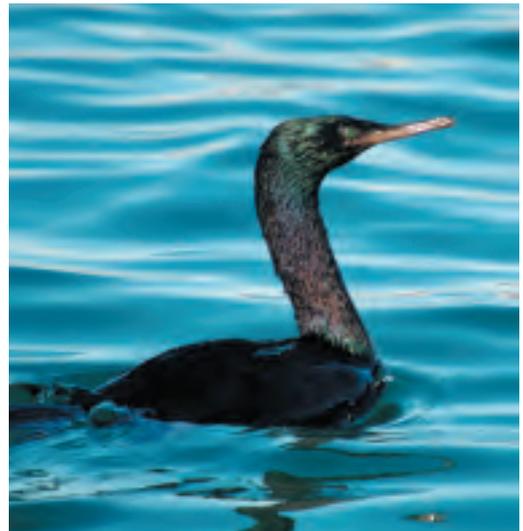
生 息 地 本県では冬期に岩石海岸から鹿島灘沿岸などの砂浜まで広い範囲で採食する。夜間は、県北や千葉県の高食崖のねぐらで過ごす。

生存の危機 本県最大規模のねぐらの所在地に国道バイパス計画がある。

特 記 事 項 地震と開発行為によるねぐらの消失が危惧される。

執筆(協力者) 池野 進・石井省三

文 献 5), 55), 57), 61)



撮影 2009年, 野尻智治

茨城県 2016 ●●● 絶滅危惧Ⅱ類 ●●●

茨城県 2000 対象外

環境省 2014 ●●● 絶滅危惧ⅠB類 ●●●

サギ科

Ixobrychus sinensis (Gmelin)

ヨシゴイ

選 定 理 由 ①② まとまった個体群があった霞ヶ浦・北浦での減少が著しく、湖岸再生の効果も限定的である。

分 布 状 況 ユーラシア大陸南部に留鳥として生息し、一部は冬季に南方へ移動する。日本では夏鳥として九州以北に渡来し繁殖する。

形態及び生態 全長約 36.5cm。雌雄ほぼ同色。雄の頭頂は黒く後頸は黄褐色、背から腰は褐色、雨覆は黄褐色で風切羽は黒褐色。下面は黄褐色で、前頸の中央に茶褐色の縦斑がある。雌の頭頂は茶褐色で下面は黄白色。喉から胸にかけて褐色の縦斑がある。嘴は雌雄ともに黄褐色で足は黄緑色。

水田、湿地、ヨシ原などに生息し魚類、両生類などの動物質を捕食する。警戒すると嘴を上に向け首を伸ばしヨシの茎に似せた擬態をする。ヨシ原などに葉を束ねた巣を作り、淡青緑色の卵を 5～6 個産む。

近 似 種 近似種はいない。

生 息 地 本県では霞ヶ浦や涸沼などの大きな湖沼や 1 級河川の下流などまとまりのあるヨシ原に生息するが、放棄田のヨシ原を利用する場合もある。

生存の危機 ヨシの茎を支柱に造巣するが、天敵の侵入を防ぐため、水ヨシを用いる。この特殊性を考慮した湖岸再生事業はごく稀である。

特 記 事 項 2000 年版 RDB 発行以降も減少が続いている。

執筆(協力者) 池野 進・石井省三

文 献 3), 6), 55), 57), 58), 61)



撮影 2007年, 山根靖正

茨城県 2016 ●●● 絶滅危惧Ⅱ類 ●●●

茨城県 2000 ●●● 希少種 ●●●

環境省 2014 ●●● 準絶滅危惧 ●●●

選定理由 ①④ 2007（平成19）年調査の段階では各河川で通常の増減を繰り返していたが、ここ10年間で河川の大増水がなく、玉石河原が減少している。

分布状況 中国東部で夏鳥。冬季は南に移動する。日本の本州以南、朝鮮半島では留鳥。北海道では夏鳥である。

形態及び生態 全長約20.5cm。雌雄同色。上面は淡褐色で下面は白い。額と頸に黒帯があり、嘴付け根の上面は白い。目の周囲に肉色のアイリングがある。虹彩と嘴は黒色。足は淡黄色。河川下流部より中・上流域を好み、河原や湖沼付近の砂礫地に生息し繁殖する。繁殖期にはピッピッピッと鳴きながらよく飛び回る。巣やヒナに天敵が近づくと、親鳥は怪我をしたふりをし、天敵の気をそらしてヒナや巣を守る擬傷という行動をする。

近似種 近似種はいない。

生息地 河川上・中流域の玉石河原で繁殖し、冬季に周辺の湿った水田や少雨で水位低下し、干潟状になった川岸で過ごす。

生存の危機 各河川で川筋の固定化によって玉石河原の草地化が進んだため、繁殖適地が減少した。また、天敵のトビの増加や河原へのレジャー車両の進入が止まず、負の要因は増えている。

特記事項 2000年版RDB発行以降に生じた現象である。

執筆者(協力者) 池野 進・石井省三

文献 1), 55), 57), 61)



撮影 2010年, 石川 皓

茨城県 2016	● ● 絶滅危惧Ⅱ類 ● ●
茨城県 2000	● 希少種 ● ● ●
環境省 2014	● ● 対象外 ● ●

選定理由 ①②③ 2007年の調査ですでに年間を通して生息記録が減少しており、その後も砂浜の浸食などによって営巣適地の減少が続いている。

分布状況 ユーラシア大陸南部、アフリカ北部などの主に沿岸部で繁殖する。日本では九州以北で繁殖し、多くは留鳥である。

形態及び生態 全長約17.5cm。雌雄同色。夏羽では頭は橙色、上面は茶褐色をしている。額から眉斑は白色、額と過眼線は黒色。側頸から胸元にかけて黒斑があるが胸中央部分は切れている。嘴と足は黒色。冬羽では全体が灰褐色になり、頭部の橙色は消える。海岸や河口部などの砂泥地に留鳥として生息し、砂地にくぼみを作って巣を構え繁殖する。水際でゴカイやカニなどの動物質の餌を食べる。冬季は群れを作ることが多い。

近似種 近似種はいない。

生息地 海浜植物が疎らに生育する砂浜で通常単独つがいや営巣する。広い砂浜では複数つがいの営巣もみられる。

生存の危機 繁殖地、越冬地ともに海岸の砂浜や河口干潟に依存しており、河口干潟に乏しい本県で砂浜の減少は、本種にとって存亡の危機である。

特記事項 2000年版RDBは過小評価だった。

執筆者(協力者) 池野 進・石井省三

文献 1), 55), 57), 58), 61)



撮影 2015年, 仲田 立

茨城県 2016	● ● 絶滅危惧Ⅱ類 ● ●
茨城県 2000	● 希少種 ● ● ●
環境省 2014	● ● 絶滅危惧Ⅱ類 ● ●

セイタカシギ科

Himantopus himantopus (Linnaeus)

セイタカシギ

選定理由 ① 本県には泥質干潟がほとんどないため、短期の飛来が多い。水田にも飛来し、畦畔で造巣することもあるが、持続しない。

分布状況 アフリカ大陸中南部、オーストラリア、南アメリカ大陸で留鳥。日本では旅鳥、一部局所的に繁殖している。

形態及び生態 全長約 32cm。雌雄ほぼ同色。雄の夏羽では後頭から上面が黒色。腰から尾羽は白色。翼上面は黒色。雌の頭部は殆どが白色。下面は全体に白色で嘴は直線的に細長く黒い。虹彩と足は赤く、足は非常に長い。

旅鳥として水田、干潟、湖沼に渡来するが、一部は留鳥として局地的に繁殖している。利根川下流部で繁殖活動例がある。浅い水中を歩きながら魚類や甲殻類、水生昆虫などを捕食する。

近似種 近似種はいない。

生息地 周囲を丈の高い草で囲まれた池塘の浅瀬に泥を盛り上げて巣を作り繁殖する。本県では水田や干拓・埋立事業地などに少数がときどき飛来し、偶発的に繁殖もする。

生存の危機 小規模な繁殖個体群のある東京湾岸の後背地としての役割が本県の現状であり、安定的な個体群を作り出す環境がない。

特記事項 2000 年版 RDB 発行以降に東京湾岸の後背地的な位置になった。

執筆者(協力者) 池野 進・石井省三

文献 16), 55), 57), 61)



撮影 2006 年, 明日香治彦

茨城県 2016	●●●	絶滅危惧Ⅱ類	●●●
茨城県 2000	●●●	希少種	●●●
環境省 2014	●●●	絶滅危惧Ⅱ類	●●●

シギ科

Limnodromus scolopaceus (Say)

オオハシシギ

選定理由 ① 2005 (平成 17) 年頃から毎年 10 羽以上がハス田で越冬している。それに伴い秋の飛来数も増えたが、個体数は 50 羽未満にすぎない。

分布状況 アラスカ北西部および北東シベリアで繁殖し、冬季に北アメリカ大陸南部に渡る。日本には数少ない旅鳥または冬鳥として渡来する。

形態及び生態 全長約 29cm。雌雄同色。夏羽は頭から上面が赤褐色、肩羽は先が黒く羽縁は白色。尾は白黒の横縞。下面は顔から腹部まで赤褐色、胸から脇に黒褐色の横縞がある。嘴と過眼線は黒色。嘴は黒色で基部は黄緑色を帯びる。足は黄緑色。

数少ない旅鳥または冬鳥として渡来し、ハス田や水田、河口などに生息する。水面下の土に嘴を垂直に差し込み、上下に動かしながら餌を探す。飛んだときにピッピッピッと言う声を出す。本県では霞ヶ浦周辺などでの記録がある。

近似種 近似種はいない。

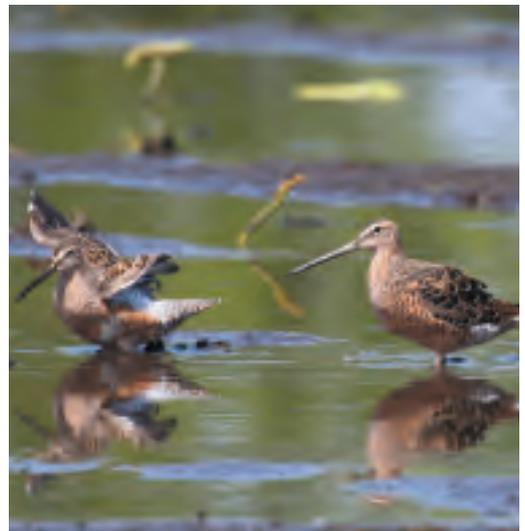
生息地 本県では春秋の渡りの時期に、田起こし後の水田や湛水している休耕田に飛来するほか、収穫後のハス田で少数が越冬する。

生存の危機 ハス田での防鳥ネット敷設が、越冬個体群に影響を与えている。

特記事項

執筆者(協力者) 池野 進・石井省三

文献 15), 55), 57), 61)



撮影 2015 年, 明日香治彦

茨城県 2016	●●●	絶滅危惧Ⅱ類	●●●
茨城県 2000	●●●	対象外	●●●
環境省 2014	●●●	対象外	●●●

シギ科

Limosa lapponica (Linnaeus)

オオソリハシシギ

選定理由 ①② 春には利根川下流域の水田などに定期的に飛来するが、近年内陸の飛来地の行方市で2008(平成20)年以降姿が途絶えている。

分布状況 ユーラシア大陸北部、アラスカ西部で繁殖し、冬季はアフリカやオーストラリアに渡る。日本では旅鳥。

形態及び生態 全長約41cm。雌雄ほぼ同色。雄の夏羽では頭頂から後頸まで赤褐色で黒い縦斑がある。背と肩羽は灰褐色で黒い軸斑と赤褐色の羽縁がある。喉から胸は赤褐色で胸側に黒褐色の縦斑がある。腹部は白く赤褐色が混じる。雌は全体に赤褐色みが薄い。嘴は肉色で先端になるほど黒く、大きく反り返る。足は黒色。冬羽は全体に灰褐色で下面は白色。旅鳥として海岸や河口、干潟、水田などに渡来し、ゆっくり歩きながら、嘴を根元まで差し込んで貝類、ゴカイなどの餌を捕食する。

近似種 近似種はいない。

生息地 干潟や河口の砂州や砂浜を好み、本県では神栖市の利根川下流域に記録が多いが、海岸に近い内陸の水田にも飛来する。秋は少ない。

生存の危機 利根川下流域の河川沿いの水田では放棄後ヨシ原に変わったために、内陸の飛来地は大型店舗の進出やハウス栽培の普及で生息地が減少している。

特記事項 基礎データの整理により評価を見直した。

執筆者(協力者) 池野 進・石井省三

文献 15), 55), 57), 58), 61)



撮影 2012年, 石川 皓

茨城県2016	●●●	絶滅危惧Ⅱ類	●●●
茨城県2000		対象外	
環境省2014	●●●	絶滅危惧Ⅱ類	●●●

シギ科

Tringa totanus (Linnaeus)

アカアシシギ

選定理由 ①② 2005(平成17)年神栖市高浜における12羽を記録して以降、秋の記録がない。

分布状況 ユーラシア大陸中西部で繁殖し、冬季アフリカ大陸中部や東南アジアに渡る。日本では多くが旅鳥だが北海道の一部で繁殖する。

形態及び生態 全長約27.5cm。雌雄同色。夏羽では上面が濃褐色で背に黒褐色の縦斑がある。肩羽は濃褐色の地に黒と黄褐色の斑点がある。腰から尾羽は白く尾には黒い横縞がある。下面は白地に黒褐色の縦斑が目立つ。目の周りに白いアイリングがある。嘴は黒褐色で基部になるほど赤くなる。足は朱色。冬羽は上面が灰褐色。顔や胸部は淡褐色で細かい縦斑がある。腹部は白色。

旅鳥として水田やハス田に立ち寄る。海岸近くの低木や枯木に止まることもある。

近似種 近似種はいない。

生息地 秋に飛来数が多く、利根川流域の低湿な水田に生息する。近年ごく少数が稲敷市のハス田で越冬するようになった。

生存の危機 水を張った休耕田に飛来していたが、政策の変更により休耕田がほぼ消滅し、秋の生息地が激減している。

特記事項 基礎データの整理により秋の飛来数の減少が判明した。

執筆者(協力者) 池野 進・石井省三

文献 15), 52), 55), 57), 58), 61)



撮影 2014年, 明日香治彦

茨城県2016	●●●	絶滅危惧Ⅱ類	●●●
茨城県2000	●●●	希少種	●●●
環境省2014	●●●	絶滅危惧Ⅱ類	●●●

ツバメチドリ科

Glareola maldivarum Forster

ツバメチドリ

選定理由 ①② 全国的な増加傾向を受けて毎年少数を観察するが、一時のような集団繁殖や毎年の繁殖の事例が途絶えている。

分布状況 中国東北部で繁殖し、冬季東南アジアやオーストラリアに渡る。日本では旅鳥または夏鳥。

形態及び生態 全長約 26.5cm。雌雄同色。夏羽では上面は濃灰褐色。腰は白く尾は黒色。喉は淡黄色で黒い線で囲まれている。胸は濃灰褐色で下面は白い。嘴は黒く短めで基部は赤色。足は黒褐色。冬羽では上面が全体に灰褐色を帯びる。喉は淡褐色で周囲の黒線は不明瞭になる。嘴基部は黒色になる。

海岸、干潟、休耕田、草地などに生息し、地上では胸を張った姿勢でじっとしていることが多い。ツバメのように飛びながら昆虫類を捕食する。

近似種 近似種はいない。

生息地 海岸やその埋立地、河原や内陸の耕地など開けて乾燥した環境を好み、飛んでいる昆虫などを捕る。県南や鹿行ではまれに繁殖する。

生存の危機 繁殖環境が、埋立地や休耕田など一時利用を見合わせた土地であるため、極めて不安定である。

特記事項 人為的で極めて不安定な環境は、景気減退と農業政策の変更で減少している。

執筆者(協力者) 池野 進・石井省三

文献 51), 53), 55), 57), 61)



撮影 2010年, 明日香治彦

茨城県 2016	●●●●●	絶滅危惧Ⅱ類	●●●●●
茨城県 2000	●●●●●	希少種	●●●●●
環境省 2014	●●●●●	絶滅危惧Ⅱ類	●●●●●

カモメ科

Sterna albifrons Pallas

コアジサシ

選定理由 ①②③④ 自然災害に脆弱で不安定な繁殖地は、天敵に目立ち易いため、集団で営巣する繁殖戦略を採るが、群れサイズが減少している。

分布状況 ユーラシア大陸で広範囲に分布し、部分的に夏鳥。冬季に南方へ渡る。日本には本州以南に夏鳥として渡来する。

形態及び生態 全長約 28cm。雌雄同色。夏羽では頭頂と過眼線は黒色。上面は淡灰色。尾は白く燕尾。下面は全体が白色。嘴は黄色で先端が黒色。足は橙黄色。冬羽では頭頂は白黒まだら模様で後頭は黒色。額と先頭は白い。嘴と足は黒くなる。

夏鳥として河口、海岸、河川、湖沼などに渡来。水面上空をゆっくり羽ばたきながら、水中の小魚を見つけ、停空飛翔をしながら狙いを定めダイビングして餌を捕える。浜辺や河原で集団繁殖する。

近似種 近似種はいない。

生息地 通常は砂浜の波が届かない海浜草地への移行帯や増水に晒されやすい大きな河川の玉石から成る中州で営巣し、付近の水域で採食する。

生存の危機 本県における安定した集団繁殖地は、那珂川河口域と利根川河口域にすぎない。河川の集団繁殖地は 2004 (平成 16) 年を最後に途絶えている。

特記事項 2000 年版 RDB は過小評価だった。

執筆者(協力者) 池野 進・石井省三

文献 19), 20), 55), 57), 61)



撮影 2014年, 徳元 茂

茨城県 2016	●●●●●	絶滅危惧Ⅱ類	●●●●●
茨城県 2000	●●●●●	希少種	●●●●●
環境省 2014	●●●●●	絶滅危惧Ⅱ類	●●●●●

選定理由 ①② 秋の渡りの時期に本県を通過する個体数に大きな変化はないが、近年丘陵部における繁殖記録が途絶えている。

分布状況 ユーラシア大陸中東部で繁殖、冬季に南に渡る。日本では夏鳥として離島を除く全国に渡来する。冬季東南アジアに渡る。

形態及び生態 全長雄約 57cm、雌約 60.5cm。翼開長 121 ~ 135cm。雌雄ほぼ同色だが変異が多い。トビより小さく、ノスリより大きい。翼は大きく前縁後縁ともほぼ直線に見える。飛翔時、頭が長く突出したように見え、翼はほぼ平行、時折両翼を上げて上方で打ち付けるような上空飛翔をする。
夏鳥として山地の森林に渡来し繁殖する。ハチ類を好み、その巣を襲ってスズメバチやアシナガバチの幼虫をよく食べる。ほかにアリ、カエル、ヘビ、昆虫類も食べる。

近似種 近似種はいない。

生息地 本県では丘陵から山地の落葉広葉樹林で営巣し、林縁や伐採地に生息するハチ類などを餌にする。秋の渡りには県南でもまれでない。

生存の危機 2007（平成 19）年までの 5 年毎に実施した鳥獣生息分布調査では一貫して減少傾向をたどっており、現在も同様の傾向である。

特記事項 2000 年版 RDB 発行以降も減少が止まない。

執筆者(協力者) 池野 進・石井省三

文献 1), 55), 57), 58), 61)



撮影 2010 年, 根本信二

茨城県 2016	● ● ●	絶滅危惧Ⅱ類	● ● ●
茨城県 2000	● ● ●	希少種	● ● ●
環境省 2014	● ● ●	準絶滅危惧	● ● ●

選定理由 ①② 傷病鳥で收容される個体数は平成 16 年(2004 年)の 12 羽をピークに、多い年でもその 4 分の 1 止まりに急減している。

分布状況 アムール地方南部、中国東北部、朝鮮半島などで夏鳥。日本にも本州以南に夏鳥として渡来して繁殖し、冬季東南アジアへ渡る。

形態及び生態 全長雄約 47cm、雌約 51cm。翼開長 115 ~ 115cm。雌雄ほぼ同色。頭上は灰褐色で上面は茶褐色、尾羽は灰褐色で 3 本の黒色帯がある。頬は灰色で喉は白く中央に 1 本の黒色の縦斑がある。胸は濃茶褐色で腹部は白地に茶褐色の横斑がある。雌は白い眉斑を持つ個体が多い。嘴は黒く基部は黄色。足は黄色。帆翔時は翼後縁が直線的に見える、大きな声でピクィーイピクィーイと鳴く。
夏鳥として渡来し平地林や山麓の林に生息する。両性爬虫類を主に食し、電柱や枝先に止まって地上の餌を探し、飛び降りて捕まえる。

近似種 近似種はいない。

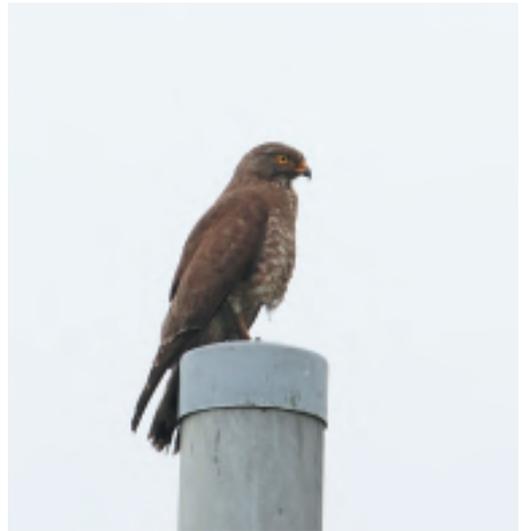
生息地 本県では狭い地域に水域と山林を併せ持つ谷津田に特化して生息するが、土壌生物が豊かな成熟林にも生息する。

生存の危機 度重なる減反政策や就農人口の高齢化で低い生産性の谷津田が放棄され、その荒廃で生息地を失っている。

特記事項 2000 年版 RDB 発行以降に生じた現象である。

執筆者(協力者) 池野 進・石井省三

文献 33), 55), 57), 58), 60), 61)



撮影 2010 年, 明日香治彦

茨城県 2016	● ● ●	絶滅危惧Ⅱ類	● ● ●
茨城県 2000	● ● ●	対象外	● ● ●
環境省 2014	● ● ●	絶滅危惧Ⅱ類	● ● ●

キツツキ科

Dendrocopos leucotos (Bechstein)

オオアカゲラ

選定理由 ①② スギ・ヒノキの人工林にほぼ置き換わった本県では、相対的に局所的な生息にとどまっており、総個体数も少ない。

分布状況 ユーラシア大陸中部に広く留鳥として分布する。日本では奄美大島以北で留鳥として繁殖している。

形態及び生態 全長約28cm。雌雄ほぼ同色。雄の額は白色。頭上から後頭は赤く、体上面は黒く背、雨覆、風切に白斑がある。腰は白く、顔から下面は黄褐色で胸には黒い縦斑がある。下腹から下尾筒は赤色。嘴は黒く、足は灰褐色。雌は頭上が黒色。山地の落葉広葉樹林や針広混交林に生息する留鳥。木の幹に縦に止まり、嘴でつついて、木の割れ目や樹皮の下にひそむ昆虫の幼虫、主にカミキリムシ類を引き出して食べる。キョッキョッと鳴く。

近似種 近似種はいない。

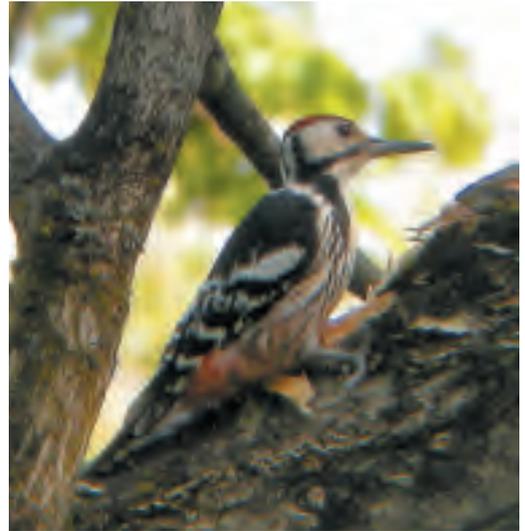
生息地 原生林、二次林を問わず、県北の規模の大きな落葉広葉樹林もしくは針広混交林に生息する。

生存の危機 落葉広葉樹林でも原生的な林には保護措置が講じられている場合が多いが、高齢の二次林についてはその評価が不十分で、生息地の減少が危惧される。

特記事項 2000年版RDBは過小評価だった。

執筆者(協力者) 池野 進・石井省三

文献 55), 57), 58), 61)



撮影 2013年, 長野県, 神田愛恵子

茨城県2016	●●●●	絶滅危惧Ⅱ類	●●●●
茨城県2000	●●●●	希少種	●●●●
環境省2014	●●●●	対象外	●●●●

ハヤブサ科

Falco peregrinus Tunstall

ハヤブサ

選定理由 ①②③〈生息地〉欄の生息環境は主に県北の岩化が未熟な海食崖に限られ、崖地の自然崩落で繁殖が失敗する。

分布状況 ユーラシア大陸北部、北アメリカ大陸北部で夏鳥。ユーラシア大陸南部、オーストラリア、日本では留鳥として分布。

形態及び生態 全長約雄38cm、雌約51cm。翼開長84～120cm。雌雄同色。頭上から上面は青灰黒色で尾には数本の黒帯がある。目の後方と顎線は黒色。喉から胸、腹部は白色で胸には細かい黒色斑があり腹部には黒色横斑がある。嘴の先は黒く基部は黄色。足は黄色。若鳥は上面黒褐色、下面は淡黄褐色で黒く太い縦斑がある。海岸、河口、原野、耕地など開けた場所に生息し、枝先や岩棚にとまり、羽ばたきと滑翔を繰り返す、中型の鳥類を上空から急降下して捕える。近年は市街地でも繁殖している。

近似種 近似種はいない。

生息地 海岸や内陸の比高が大きく垂直な崖地等の周囲に樹木が茂った場所を好み、併せて採食条件が優れていればそのまま営巣する。

生存の危機 危険を伴う生息環境のため、天敵の脅威は薄らぐが、周辺の環境破壊を伴う写真撮影が横行している。また、防鳥ネットに羅網死するケースが絶えない。

特記事項

執筆者(協力者) 池野 進・石井省三

文献 40), 55), 57), 61)



撮影 2006年, 多田恒雄

茨城県2016	●●●●	絶滅危惧Ⅱ類	●●●●
茨城県2000	●●●●	危急種	●●●●
環境省2014	●●●●	絶滅危惧Ⅱ類	●●●●

サンショウクイ科

Pericrocotus divaricatus (Raffles)

サンショウクイ

選定理由 ①②③ 本種の生息地が山地の昆虫発生量の多い林に限られるのは、松林の激減とその保全対策で取られた薬剤散布で樹冠生物が貧相になったことによる。

分布状況 ウスリー地方、中国東北部、日本などに分布、冬季に東南アジアに渡る。日本では夏鳥として渡来し繁殖する。

形態及び生態 全長約 20cm。雌雄ほぼ同色。体は細く尾は長め、雄の額から頭部は白く、後頭は黒色。上面は青灰色で尾は黒色、外側尾羽は白色。下面是全体に白色で脇はやや灰色を帯びる。過眼線と嘴は黒色。足は黒褐色。雌は後頭から後頸が灰色。

平地から山地の大きな落葉樹の林などに生息する。樹上で昆虫などを捕食し、高い枯れ枝や梢に直立した姿勢でとまり、低い枝や地上には殆どとまらない。高い所を波状飛行しながらヒリリンヒリリンと鳴く。

近似種 近似種はいない。

生息地 樹種や標高にかかわらず高木林の樹冠部に生息する。1970年代初頭まで市街地にも生息していたが、現在、本県では山地に限られる。

生存の危機 県北の山地でやや生息数が回復気味だが、かつての広域的な分布に回復するにはスギ単相の平地林では不十分である。

特記事項 スギの単相林が広葉樹林に置き換わる兆候は見えない。

執筆者(協力者) 池野 進・石井省三

文献 1), 51), 55), 57), 61)



撮影 2007年、伊澤泰彦

茨城県 2016	●●●	絶滅危惧Ⅱ類	●●●
茨城県 2000	●●●	希少種	●●●
環境省 2014	●●●	絶滅危惧Ⅱ類	●●●

ツバメ科

Hirundo daurica Laxmann

コシアカツバメ

選定理由 ①② 2004(平成16)年の環境省調査で県北の分布が20年前に比べ激減し、その状況が現在も継続している。

分布状況 ユーラシア大陸南部、アフリカ大陸中央部に留鳥。ロシア極東、中国東北部、日本には夏鳥として渡来し冬季に南に渡る。

形態及び生態 全長約 18.5cm。雌雄同色。頭部から上面は青色光沢のある黒色。腰は赤褐色で細い黒色の軸斑がある。尾、嘴、足は黒褐色。喉、頸側、胸、腹は淡橙褐色で、黒色の細い縦斑がある。

市街地や集落の近くを飛び回り、飛翔中の昆虫を餌とする。ツバメより滑翔が多く、長い尾羽が目立つ。ジュジュと濁った声を発する。軒下や天井、橋げたなどに土と枯れ草でとっくりを縦に割ってつけたような巣を構え、白色の卵を4~5個産む。

近似種 近似種はいない。

生息地 県北から県央の山麓や丘陵に至る川沿いや海岸沿いの地域に生息するが、その分布は局所的である。

生存の危機 スズメと営巣場所をめぐる競合関係にあり、本種の古巣や造巢中の巣が奪取されるため、繁殖状況は極めて不安定である。

特記事項 2000年発行のRDBで過小評価していた。

執筆者(協力者) 池野 進・石井省三

文献 11), 43), 55), 57), 61)



撮影 2015年、榎田 昭

茨城県 2016	●●●	絶滅危惧Ⅱ類	●●●
茨城県 2000	●●●	希少種	●●●
環境省 2014		対象外	

ホオジロ科

Emberiza yessoensis (Swinhoe)

コジュリン

選 定 理 由 ①② 2007（平成 19）年までの 5 年毎の鳥獣生息分布調査では増加していると評価したが、急激に減少を示す地域もある。

分 布 状 況 中国東北部や日本で繁殖し、冬季に中国中部から南部に移動する。日本では本州と九州で繁殖する漂鳥または留鳥。

形態及び生態 全長約 14.5cm。雄の夏羽では首から上の頭部が黒色。背から上面は赤褐色で背には黒い縦斑がある。腰と上尾筒は茶褐色をしている。胸からの下面は淡褐色。嘴は黒く足は淡黄褐色。雄の冬羽および雌では額から後頭が褐色で黒い縦斑があり、頬は茶褐色で淡黄色の眉斑と頬線がある。顎線は黒くて太い。

本州中北部や九州で繁殖するものは標高の高い草原に分布する。一方、霞ヶ浦周辺では低層湿原で繁殖している。ヨシ原の先端で胸を反らしピッツツビなどとさえる。

近 似 種 近似種はいない。

生 息 地 霞ヶ浦・北浦沿岸や利根川下流域の丈の低いイネ科草本の群落に生息し、その周辺にある放棄して間もない水田にも生息する場合がある。

生存の危機 減反政策の見直しによる休耕田の減少や霞ヶ浦沿岸干拓地での浚渫土による地盤改良などで丈の低い草が減少している。

特 記 事 項 減反政策の変更による減少は、2000 年版 RDB の発行以降に生じた現象。

執筆(協力者) 池野 進・石井省三

文 献 1), 50), 55), 57), 60), 61)



撮影 2006 年, 明日香治彦



カモ科

Aix galericulata (Linnaeus)

オシドリ

選 定 理 由 ① 越冬個体は増加傾向にあるが、本県の繁殖地は急崖地にある水辺に接した高齢樹林なので、繁殖環境は限られ、且つ枯損も進んでいる。

分 布 状 況 ウスリー地方、中国、日本などで繁殖し、冬は南方へ渡るものもいる。日本では離島を除く全国で繁殖し留鳥または漂鳥。

形態及び生態 全長約 45cm。中型のカモで雌雄異色。雄の頭頂は暗緑色、後頭の羽毛は長く伸びて冠羽となり紫赤褐色。尾は褐色で緑色光沢がある。目を通る幅広い黄白色の眉斑があり、胸は紫色で 2 本の白い縦縞線がある。三列風切羽の最内側のものは幅広い橙色でイチョウ羽と呼ばれている。雌雄ともに嘴はピンク色。雌は全体に灰褐色で白いアイリングから後頸に伸びる白い線がある。

山地の湖沼や河川に生息し、樹木の洞で繁殖する。ドングリを好んで食べる。近年は山麓の水田でも見られる。本県では漂鳥または留鳥。

近 似 種 近似種はいない。

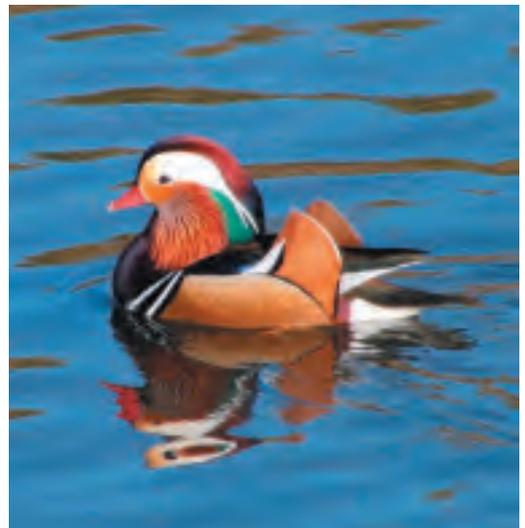
生 息 地 規模の大小を問わず、樹林に囲われた湖沼や河川を好み、同じような条件を備えた高齢樹林で繁殖する。

生存の危機 高齢樹林が年を経れば、本種の営巣に適した樹洞を持つ樹木から倒壊が進み、繁殖環境がさらに悪化する可能性がある。

特 記 事 項

執筆(協力者) 池野 進・石井省三

文 献 1), 55), 57), 61)



撮影 2011 年, 杉山みどり



選定理由 ①② 本県では1980年代まで三桁の数で越冬していたが、理由が不明なまま、近年は主要な越冬地で激減している。

分布状況 ユーラシア大陸北部や北アメリカ大陸北部で繁殖し、冬期南方へ渡来する。冬鳥として九州以北に渡来する。一部は北海道で繁殖する。

形態及び生態 全長約65cm。雌雄異色。雄の頭部と顔は緑黒色。背は黒色で腰は灰黒色。頸、胸、腹部は白色。初列風切羽と次列風切羽の一部は黒色。次列風切羽の大部分と雨覆は白色。雌は頭部と顔は茶褐色で冠羽がある。背は灰色で胸から腹部は白色。嘴は雌雄ともに赤褐色で先端が黒い。足は赤色。

繁殖期は内陸の湖沼や河川に生息し、冬季は広い湖沼や内湾などで生活する。泳ぎと潜水を巧みに繰り返し、魚類などの動物を餌とする。水中に頭を入れて餌を探す行動が見られることもある。

近似種 近似種はいない。

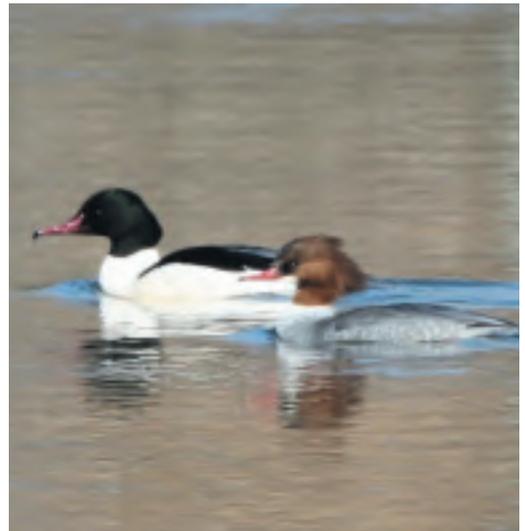
生息地 霞ヶ浦・北浦、湖沼など大きな湖沼で越冬する。また、久慈川や那珂川などの大きな河川で春秋の渡りの折りに立ち寄ることがある。

生存の危機 霞ヶ浦・北浦では2007(平成19)年以降越冬が途絶え、湖沼でも2008年以降、散発的に越冬するにすぎない。

特記事項 2000年発行のRDBで過小評価していた。

執筆者(協力者) 池野 進・石井省三

文献 2), 55), 57), 61)



撮影 2014年, 山根靖正

茨城県2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県2000		対象外	
環境省2014		対象外	

選定理由 ①④ 2007(平成19)年まで県内の陸水域でごく普通に生息していたが、外来魚による遊漁の普及や溜池の改修によって生息が減少している。

分布状況 東南アジアやアフリカ大陸中南部に留鳥として生息する。日本では本州以南に留鳥として生息し、北海道では夏鳥。

形態及び生態 全長約26cm。雌雄同色。夏羽では頭部から上面は黒褐色で頬から前頸は赤褐色。胸から腹部は褐色。嘴は黒く短く先が尖っており、先端と付け根の下が黄色。虹彩は黄色。足は黒褐色。冬羽では上面黒褐色で頬、胸、腹部は淡褐色。

主に湖沼や河川に生息し、巧みに潜水して主に魚類や甲殻類、水生昆虫などの動物質を餌としている。淀んだ水面に植物の葉茎や藻の類を利用して浮き巣を作る。飛立つときには助走を必要とし、足を下げ低く飛ぶ。繁殖期にはケレケレケレと大きな声で尻下りに鳴く。

近似種 近似種はいない。

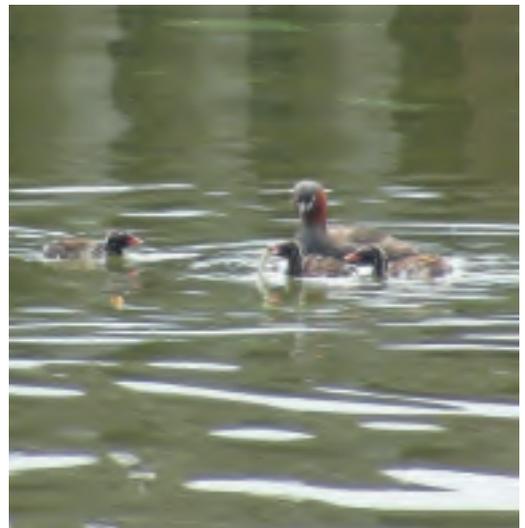
生息地 水生植物がある湖沼などの水辺で繁殖するが、冬季には海の沿岸を含めた広範な水域に生息する。

生存の危機 ブラックバスによるヒナの捕食や堤などの改修による水生植物帯の衰退で巣が作れないなど繁殖の基盤が揺らいでいる。

特記事項 ブラックバスの外来魚の密放流が横行しだしたのは2000年版RDB発行以降である。

執筆者(協力者) 池野 進・石井省三

文献 1), 3), 55), 57), 58), 61)



撮影 2012年, 斎藤玲子

茨城県2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県2000		対象外	
環境省2014		対象外	

チドリ科

Vanellus cinereus (Blyth)

ケリ

選定理由 ①② 本県で越冬する個体群のうち、最多の個体数で構成される個体群が繁殖地の環境悪化のために激減している。

分布状況 中国東北部、日本などで繁殖し、冬季中国南部や東南アジアに移動する。日本では留鳥として本州以南に生息する。

形態及び生態 体長約 35.5cm。雌雄同色。頭部から顔は青灰色。上面は灰褐色で腰から尾は白く先端に黒帯がある。胸に太い黒帯があり、腹部は白色。翼が黒く、飛んだ時によく目立つ。虹彩は朱色、嘴は黄色で先端が黒い。足は黄色。

水田、河原、耕作地などの草地に生息し、昆虫の幼虫やミミズ、カエルなどを食べる。巢やヒナに近づくと、けたたましいキキッキキッという声を発して威嚇行動をする。時にはカラスなどを追い回しながら飛び回る。また、地上では翼を半開きにして、威嚇行動をする。

近似種 近似種はいない。

生息地 丈の低い疎で開放的な草地を好む。本県での繁殖事例は1件のみである。冬は県央・県南・鹿行の湿った水田に群れて過ごす。

生存の危機 本県で越冬個体数が最多の個体群の繁殖地である栃木県旧湯津上村の草地に太陽光発電所が設置され、個体数が急減した。

特記事項

執筆者(協力者) 池野 進・石井省三

文献 14), 15), 55), 57), 61)



撮影 2013年, 塚本英夫

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	●	●	●	●
茨城県 2000	●	希少種	●	●	●	●
環境省 2014	●	情報不足	●	●	●	●

シギ科

Gallinago solitaria Hodgson

アオシギ

選定理由 ①③ 生息要件を満たす環境要因の組合せは限定的であり、本県の確実な生息地は県央の一部に限られる。個体数は多くても10羽未満で年変動が大きい。

分布状況 ユーラシア大陸中部に生息し冬季に南に移動する。日本では冬鳥として全国の山地の溪流部に渡来する。

形態及び生態 全長約 30cm。雌雄同色。上面は全体に青紫色で黒褐色と茶褐色の混じった複雑な模様がある。背と肩羽に2本の白い線が出る。眉斑は白く黒褐色の過眼線と頬線がある。下面は白く腹部と脇には褐色の横斑がある。嘴は暗肉色で先端になるほど黒味を増す。足は黄緑色。冬鳥として全国の山地の溪流に生息し、三面張りのコンクリート水路にすることもある。単独で過ごし、静かにたたずみ、水生昆虫やミミズなどを捕食する。

近似種 近似種はいない。

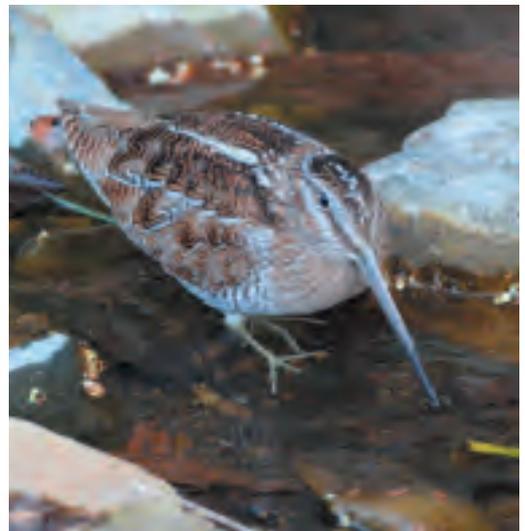
生息地 準平原を流れる小川や用水路などの山間地の人家や畜産農家の排水が流れ込む、あるいは腐葉土が堆積した岸辺のある細流で冬季に単独で生息する。

生存の危機 道路が並行して走る山間地の細流は、道路の付替えや基盤整備事業によって生息環境が消える潜在的危険性を有している。

特記事項

執筆者(協力者) 池野 進・石井省三

文献 17), 55), 57), 61)



撮影 2015年, 岸 久司

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	●	●	●	●
茨城県 2000	●	希少種	●	●	●	●
環境省 2014		対象外				

選定理由 ①② 秋に多いが、本県では春にも県南や鹿行の水田などに飛来する。しかし、その数は減少がみであり、秋は飛来地数や個体数が一段と減少している。

分布状況 ユーラシア大陸中西部やオホーツク沿岸などで繁殖し、冬季には南に渡る。日本では旅鳥。

形態及び生態 全長約 39cm。雌雄ほぼ同色。雄の夏羽では頭頂から後頸まで赤褐色で黒い縦斑がある。背、肩羽は暗赤褐色で黒い軸斑と白い羽縁がある。顔から胸は赤褐色で白い眉斑がある。腹部と脇は白く、黒い横斑がある。尾に黒帯を持つ。雌は全体に赤褐色みが薄い。嘴は肉色で先端保護黒い。足は黒色。冬羽は上面と胸が灰褐色で下面は白色。旅鳥として渡来し、河口や干潟、水田、沼地などに生息する。水面下の土に嘴を垂直に差し込みカニや貝類などを探して食べる。キッキッと鳴く。

近似種 近似種はいない。

生息地 海岸の干潟や田起こし後の水田や基盤整備事業地などに生息するが、広い干潟がない本県にあっては稲敷市から神栖市が主な飛来地になっている。

生存の危機 連休の大型化で、地域一斉の田植えが薄らぎ、道路沿いの大型店舗の進出で、採食地が減少し、春季の減少が著しい。

特記事項 基礎データの整理により評価を見直した。

執筆者(協力者) 池野 進・石井省三

文献 15), 55), 57), 61)



撮影 2009年, 明日香治彦

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県 2000		対象外	
環境省 2014		対象外	

選定理由 ①② 1960年代前半までは県内各地に飛来し、100羽前後の群れサイズも珍しくなかったが、近年では30羽以下の群れが県南の水田に飛来するに過ぎない。

分布状況 ユーラシア大陸北部で繁殖し、冬季にアフリカ大陸中部や東南アジアに渡る。日本では旅鳥。

形態及び生態 全長約 32.5cm。雌雄同色。夏羽は全体に黒色。上面に白斑がある。目の周りに白いアイリングがある。嘴は黒く下嘴の基部が赤色。足は暗赤色。冬羽は上面が灰褐色で白色斑がある。眉斑は白く過眼線は褐色。

旅鳥として海岸や河口、水域近くの水田やハス田などに立ち寄る。春の渡りは早く、数も春の方が圧倒的に多い。嘴を斜めに差して水生昆虫などの餌を探す。水中を歩き回り、時には泳ぐこともある。

近似種 近似種はいない。

生息地 干潟から内陸の水田に至る多様な湿地に群れをなして生息する。

生存の危機 ハス田に敷設した防鳥ネットを通年の掛け放しにするため、早春に飛来する本種が利用しづらくなっている。

特記事項 基礎データの整理により評価を見直した。

執筆者(協力者) 池野 進・石井省三

文献 15), 51), 55), 57), 61)



撮影 2011年, 岸 久司

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県 2000		対象外	
環境省 2014	●	絶滅危惧II類	● ● ● ●

シギ科

Calidris alpina (Linnaeus)

ハマシギ

選定理由 ①② 秋より春に多いシギであるが、2009（平成 21）年春以降、群れサイズと飛来地点数が減少に転じている。

分布状況 ユーラシア大陸北部や北アメリカ大陸北部で繁殖し、冬季に南に渡る。日本では旅鳥または冬鳥。

形態及び生態 全長約 21 cm。雌雄同色。夏羽は頭部から後頸は赤褐色で黒い縦斑がある。上面は赤褐色で黒い軸斑がある。顔から胸は白色、白い腹部には大きな黒斑がある。嘴は黒く下に軽く湾曲している。足は黒色。冬羽は上面が灰褐色でわずかに軸斑が残る。眉斑と下面は白色。旅鳥または冬鳥として干潟や河口に渡来し、背を丸めたような恰好で嘴を下にしたまま、餌をあさる。本県では霞ヶ浦周辺で越冬する少数の群れがいる。

近似種 近似種はいない。

生息地 砂浜のみならず岩石海岸から内陸の水田やハス田に至る多様な水域に群れで生息し、一部は越冬する。越冬数は増加している。

生存の危機 春の渡りの中心地だった行方市の干拓地と神栖市の利根川沿いの水田で河川工事や基盤改良工事があり、生息環境が一変した。

特記事項 基礎データの整理により評価を見直した。

執筆者(協力者) 池野 進・石井省三

文献 15), 55), 57), 61)



撮影 2015 年, 杉山好子

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県 2000		対象外	
環境省 2014	●	準絶滅危惧	● ● ● ●

タカ科

Accipiter gentilis (Linnaeus)

オオタカ

選定理由 ①④ 本県の生息密度は高いが、2002（平成 14）年の 15 羽を境に傷病鳥として収容される個体数が減少している。その傾向は幼鳥で顕著である。

分布状況 ユーラシア大陸中央部、北アメリカ大陸北部に留鳥として生息。日本では九州北部以北で留鳥。

形態及び生態 全長雄約 50cm、雌約 56cm。翼開長 105～130cm。雌雄ほぼ同色。成鳥は頭から上面が濃青色、尾には 4 本の黒帯がある。白い眉斑と太く黒い過眼線が明瞭。下面は白地に細い黒色の横斑が密にある。幼鳥は全体が褐色で胸に黒色の縦斑がある。嘴は黒褐色で足は黄色。

山地から平地の林に生息し、中型の鳥類を捕食する。数回の速い羽ばたきと滑翔を交互に行い直線的に飛翔する。また、高空を帆翔することもある。

近似種 近似種はいない。

生息地 成熟した林と畑や放牧地がモザイク状に広がる農村に生息密度が高く、山間地の密で広大な樹林にも生息するが、数は少ない。

生存の危機 本種の生息環境のひとつである畑地で耕作放棄が増加したため、採食場の減少だけでなく餌動物の減少も招いている。

特記事項 2000 年版 RDB 発行以降の基礎研究で、生息数が危機的レベルではないことが判明した。

執筆者(協力者) 池野 進・石井省三

文献 31), 32), 55), 57), 58), 60), 61)



撮影 2006 年, 山根靖正

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県 2000	●	危急種	● ● ● ●
環境省 2014	●	準絶滅危惧	● ● ● ●

選定理由 ①② 2004（平成16）年の環境省調査では全国的に分布が減少傾向にあり、本県の調査でも分布の増えた形跡はない。

分布状況 ユーラシア大陸中東部に夏鳥として分布、冬季に東南アジアに渡る。日本では本州中部以北に夏鳥として渡来、繁殖する。

形態及び生態 全長約23.5cm。雌雄異色。雄は全身黒色で眉斑が白い。下腹の中央は色が薄く、下尾筒には白斑がある。翼下面は風切の基部と下雨覆の前縁に白色部があるため、飛翔時の下面は白と黒の帯状に見える。嘴は黒色、足は橙黄色。雌は上面がオリーブ褐色、眉斑、喉は淡褐色、胸から下は濃褐色で小さな白斑がある。翼下面の様子は雄と同じである。夏鳥として低山帯から亜高山帯の落葉広葉樹林や針広混合林に生息し繁殖する。雄は高い梢でキョロンツリーと一声ずつ間をおいてさえずる。低木の茂みに巣を構え3～4個産む。

近似種 近似種はいない。

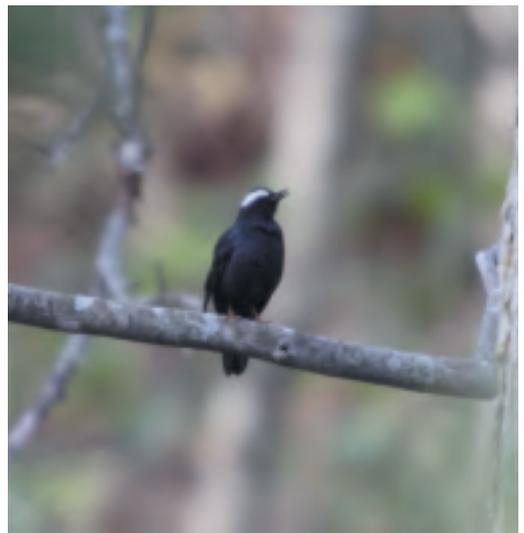
生息地 標高1000～2000mの薄暗い落葉広葉樹林で繁殖する夏鳥であり、県北の福島・栃木県境に接する限られた地域に生息する。

生存の危機 本県のブナ帯の高木相は、地球温暖化や登山等の過度の利用により衰退傾向にあり、森林のギャップの形成が本種には負の要因になる。

特記事項

執筆者(協力者) 池野 進・石井省三

文献 1), 11), 55), 57), 61)



撮影 2011年, 長野県, 石田光史

茨城県2016	●	準絶滅危惧	●●●●
茨城県2000	●	希少種	●●●●
環境省2014		対象外	

選定理由 ①③ 夜行性ため、目に触れる機会が少なく、生息環境も特異であることが近年明らかになってきたので、実態把握は今後の課題である。

分布状況 夏鳥として本州以南に渡来し繁殖する。冬季、中国南部や台湾、フィリピンなどに移動する。琉球列島では少数が越冬する。

形態及び生態 全長約49cm。雌雄ほぼ同色。頭部から後頸は濃い茶色。後頭には短い冠羽がある。背から上面は濃い茶色で背には不規則な細かい黒色斑がある。下面は淡褐色で喉から腹部にかけて黒褐色の縦斑が数本出る。嘴は雌雄ともに黒く足は黒緑色。薄暗い林に好んで生息している。夜行性で、サワガニやミミズ、魚類、両生類などの動物質を捕食する。夜間にウォーウォーというような声で鳴く。樹上に粗雑な巣を作り、白色の卵を3～4個産む。

近似種 近似種はいない。

生息地 落葉広葉樹の大木の枝葉が水辺や水田に覆いかぶさるような暗くて湿った山林を好み、条件が整えば、里山にも生息する。

生存の危機 落葉広葉樹の大木と湿った環境という限られた要素の組み合わせは決して多くなく、今後絶滅危惧種の仲間入りは必至である。

特記事項 2000年版RDB発行時は本種の生態が未解明で、過大評価の可能性はある。

執筆者(協力者) 池野 進・石井省三

文献 8), 55), 57), 58), 61)



撮影 2009年, 新潟県, 石田光史

茨城県2016	●	情報不足①注目種	●●●●
茨城県2000	●	絶滅危惧種	●●●●
環境省2014	●	絶滅危惧II類	●●●●

ヨタカ科

Caprimulgus indicus Latham

ヨタカ

選 定 理 由 ①②③ 1970年代初頭まで県内全域に生息したが、2007年の記録は県南になく、県北にごく少数あるに過ぎない。今後の絞った調査が必要。

分 布 状 況 ユーラシア大陸中東部で夏鳥として分布、冬季、東南アジアへ移動する。インド周辺では留鳥。日本では夏鳥として九州以北に渡来し繁殖する。

形態及び生態 全長約29cm。雌雄ほぼ同色。全身茶褐色で複雑な黒褐色や赤褐色の斑紋がある。雄は喉や初列風切羽や尾の先端に白斑があり、雌にはない。虹彩は黒く、嘴は黒くて短く先が曲がる。木の枝や地上では姿が溶け込んで保護色となっている。

平地から低山の林縁で夕方や明け方に活発に飛び回り、大きな口を開けながら飛翔し、昆虫類を捕えて食べる。夜間にキョッキョッキョッキョッ…と単調な声を連続して発する。渡りの時期には耕作地や市街地にも現れる。

近 似 種 近似種はいない。

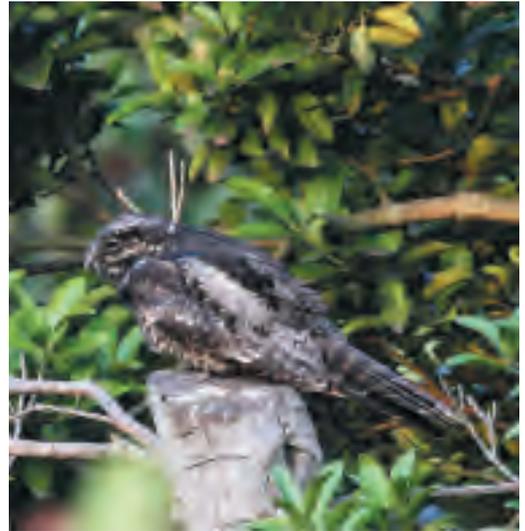
生 息 地 夜間に飛びながら飛翔性の昆虫を採食するため、昆虫の発生源である樹林、昆虫および自らが飛び回れる広い開放的な空間が必須である。

生存の危機 屋根ふき材供給地のカヤ場や安価な輸入木材の流通による伐採地の減少など、樹林と開放空間がセットになった環境が減少している。

特 記 事 項 夜行性で樹林の多い地域に生息するため、生態に合わせた調査で実態を把握する必要がある。

執筆(協力者) 池野 進・石井省三

文 献 1), 51), 55), 57), 61)



撮影 2006年、東京都、中西榮子

茨城県2016 情報不足①注目種 ●●●●●

茨城県2000 希少種 ●●●●●

環境省2014 準絶滅危惧 ●●●●●

アマツバメ科

Apus nipalensis (Hodgson)

ヒメアマツバメ

選 定 理 由 ①② 毎年晩秋に渡りの個体が記録されるが、繁殖期の記録は途絶えている。

分 布 状 況 ユーラシア大陸南部、アフリカ大陸中南部に留鳥として分布。日本では留鳥として本州中部以南に生息する。

形態及び生態 全長約13cm。雌雄同色。全身黒褐色で喉は白色。腰が白い。尾は浅い燕尾型で、長い翼は浅い鎌形をしている。虹彩は黒く、嘴も黒い。太平洋沿岸部の市街地の高層建築物などの建造物にあるコシアカツバメなどツバメ類の空巣を利用して繁殖することが多い。日中は建造物の周辺を飛び回りながら昆虫類を捕えて餌とし、夜は巣を峙とする。飛翔中はジュリィチュリィと鳴く。

近 似 種 近似種はいない。

生 息 地 熱帯の鳥であり、都市部のビルや工場建屋など地面に垂直な高度差のある壁面に泥を使って造巣するため、主に地方の都市部に生息する。

生存の危機 1981(昭和56)年2月に高萩市内で繁殖が初めて確認され、その後数年同市で繁殖地が点々と変わった後、繁殖個体群が途絶えた。

特 記 事 項 地球温暖化によって冬でも温暖な鹿島灘沿岸に復活する可能性を否定できない。

執筆(協力者) 池野 進・石井省三

文 献 11), 13), 55), 57), 59), 60), 61)



撮影 2012年、静岡県、小泉金次

茨城県2016 情報不足①注目種 ●●●●●

茨城県2000 危急種 ●●●●●

環境省2014 対象外 ●●●●●

ウミスズメ科

Uria aalge (Pontoppidan)

ウミガラス

選定理由 ①②③ 繁殖の南限である北海道では漁で使われる刺し網に混獲されて著しく個体数を減じており、本県における近年の記録はない。

分布状況 北欧やベーリング海、オホーツク海などで繁殖し、冬季に南に移動するものがある。日本では北海道で少数が繁殖している。

形態及び生態 全長約 43.5cm。雌雄同色。夏羽では頭部から上面、嘴、喉、頸が黒褐色。下面は白色。足は黒色。冬羽では喉、頸、頬が白色になり目の後ろに 1 本の黒線がある。
海上で生活し、水中に潜ってイカナゴなどの魚類やイカなどを餌とする。陸上では体を高く保ち、嘴をやや上向きにしていることが多い、飛翔は速く羽ばたき、海上低く直線的に飛ぶ。岩棚に直接 1 個産む。

近似種 近似種はいない。

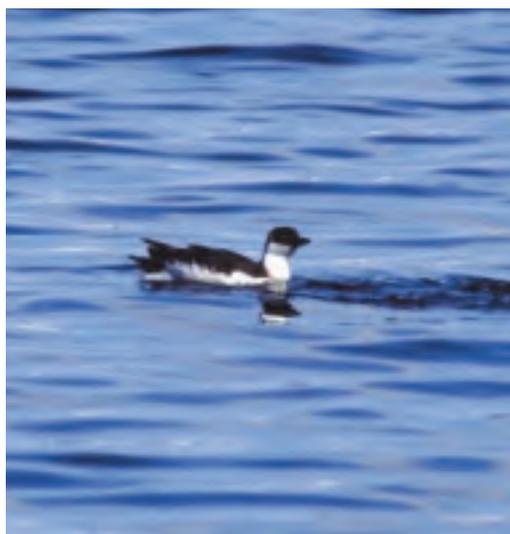
生息地 本県には稀な冬鳥として親潮舌が到達する 1 月下旬から 2 月末に太平洋の沿岸から沖合 30km 付近までに生息する。

生存の危機 本県の確実な記録は 1985（昭和 60）年 6 月 7 日のひたちなか市磯崎港外における 2 羽であるが、海の観察機会が少なく、実態は分かっていない。

特記事項 海鳥は 2000 年版 RDB では評価の対象外だった。

執筆者(協力者) 池野 進・石井省三

文献 21), 22), 23), 55), 57), 58), 59), 61)



撮影 2005 年, 北海道, 川崎慎二

茨城県 2016 情報不足①注目種 ●●●●●

茨城県 2000 対象外

環境省 2014 ●●●●● 絶滅危惧 I A 類 ●●●●●

ウミスズメ科

Cephus carbo Pallas

ケイマフリ

選定理由 ①② 東北地方の宮城県・山形県より北で繁殖しているが、本県における飛来が近年減少している。

分布状況 北海道や本州北部の島で繁殖し、冬季は南に移動するが、主に本州中北部の海上で過ごす。茨城県では冬鳥。

形態及び生態 全長約 37cm。雌雄同色。夏羽では全身ほとんどが黒色で、目の周りが幅広く白い。嘴は黒く、両嘴の基部の上下に小さな白斑がある。先端はとがっている。足は赤色。冬羽では上面が黒褐色で下面は淡く、目の周りが白く、足はやや橙色を帯びる。
海上で生活し、潜水を繰り返してイカナゴなど魚類を捕食する。飛び立ち時に海面を蹴って助走し、早い羽ばたきで直線的に飛ぶ。岩の隙間の巣に直接 2 個産む。

近似種 近似種はいない。

生息地 本県には稀な冬鳥として親潮舌が到達する 1 月から 2 月末頃に太平洋の沿岸数キロ沖合までに生息する。

生存の危機 本県における確実な記録は 2013（平成 25）年 1 月 2 日のひたちなか市平磯海岸における 1 羽であるが、海の観察機会が少なすぎる。

特記事項 海鳥は 2000 年版 RDB では評価の対象外だった。

執筆者(協力者) 池野 進・石井省三

文献 21), 24), 55), 57), 58), 60), 61)



撮影 2015 年, 飯田直己

茨城県 2016 情報不足①注目種 ●●●●●

茨城県 2000 対象外

環境省 2014 ●●●●● 絶滅危惧 II 類 ●●●●●

タカ科

Accipiter nisus (Linnaeus)

ハイタカ

選定理由 ①② 本県の多くの記録は冬季のものである。県央の小盆地で繁殖の未確認情報があるが、繁殖個体ごく少数のため、詳細が掴めていない。

分布状況 ユーラシア大陸中部に夏鳥及び留鳥。冬季南に渡るものもいる。日本では主に留鳥だが、冬季に北方から飛来する個体加わる。

形態及び生態 全長雄約32cm, 雌約39cm。翼開長62~76cm。雌雄異色。雄は頭から上面が濃青灰色、尾には4本の暗色帯がある。下面は白地に赤褐色の横斑がある。雌は上面が灰褐色。尾に4本の暗色帯がある。下面は白地に褐色の横斑がある。嘴は先端が黒く、基部は黄色。足は黄色。低山帯の林に生息し、冬季には農耕地や市街地にも稀でない。速い羽ばたきと滑翔を交互に交え、直線的に飛ぶ。空中で小型の鳥類を捕食する。

近似種 近似種はいない。

生息地 天然林、人工林を問わず林床植物が疎で、樹間がやや込み入った壮齢林を好む。

生存の危機 2007(平成19)年まで5年毎に実施された鳥獣生息分布調査で繁殖期のものは5指に満たない。

特記事項 本県の繁殖期の個体数は確かに少ないが、丘陵から山地の山林における実態の解明が不十分である。

執筆者(協力者) 池野 進・石井省三

文献 1), 55), 57), 58), 60), 61)



撮影 2013年, 池田 昇

茨城県2016 情報不足①注目種 ●●●●●

茨城県2000 希少種 ●●●●●

環境省2014 準絶滅危惧 ●●●●●

キツツキ科

Jynx torquilla Linnaeus

アリスイ

選定理由 ①② 近年も日立市で繁殖期の鳴き声が録音されており、的を絞った本種の実態を調査する必要がある。

分布状況 ユーラシア大陸中部に広く夏鳥、冬季に南に移動する。日本では本州北部以北で繁殖、冬は本州中部以西に移動する。

形態及び生態 全長約17.5cm。雌雄同色。頭上から上面は灰色で黒い細かい横斑があり、頭の中央から背の中央にかけて黒い縦斑があり、過眼線も黒色。尾は灰褐色で黒い横帯がある。喉は灰褐色、胸から腹部は黄灰色で黒い横帯がある。雨覆は黒、灰褐色、赤褐色の複雑な虫くい状斑があり、風切は黒と褐色のまだらである。嘴は灰褐色で足は灰黄褐色。平地から山地の林縁や木のまばらな草原などに生息する。主食はアリで、アリの巣にねば付く長い舌を入れ、アリの卵を食す。キョーキョーキョーと鳴く。

近似種 近似種はいない。

生息地 本県では冬季に県南のヨシ原など水辺近くの地上で見かけるが、実態は良く分かっていない。少数ながら繁殖を窺わせる観察例もある。

生存の危機 2007(平成19)年までの5年毎の鳥獣生息分布調査で毎冬2ヶ所程度の記録があるのみ。繁殖期の記録も1例ある。

特記事項 今後も繁殖期における本県の生息状況を積み上げてから、カテゴリーを決める必要がある。

執筆者(協力者) 池野 進・石井省三

文献 1), 39), 55), 57), 61)



撮影 2014年, 飯田直己

茨城県2016 情報不足①注目種 ●●●●●

茨城県2000 希少種 ●●●●●

環境省2014 対象外

選定理由 ①②③ 元来個体数が少ないうえに小声でさえずり、巢の外装を蘚苔類で巧みに隠すため、目につきにくい。このため、実態が把握しづらい。

分布状況 ユーラシア大陸中東部に夏鳥として分布、冬季にインドや東南アジアに渡る。日本では夏鳥として渡来、九州以北で繁殖する。

形態及び生態 全長約 13cm。雌雄同色。頭から上面は灰褐色。尾は濃灰褐色。目先は白く、白いアイリングを持つ。喉から下面は白く、胸から脇がわずかに灰褐色である。翼は濃灰褐色で灰褐色の羽縁がある。嘴は黒褐色で下嘴の基部は黄褐色。足は黒色。落葉広葉樹林の樹冠やギャップのある木の枝などに止まり、飛翔する昆虫類に飛び付いて捕え、また元の枝に戻る動作を繰り返す。地上から 2.5～6m の横枝に巢を構え 3～5 個産む。

近似種 近似種はいない。

生息地 標高に関係なく、飛翔性昆虫を監視しながら捕獲できる空間のある林に好んで生息する。近年県南の平地林での繁殖例がある。

生存の危機 落雷や風倒木や枯損木で生じたギャップを使用するため、生息環境は偶発的であり、実態不明のまま衰退が進行している恐れがある。

特記事項 県南の近年の繁殖地は、人手で管理された環境であり、類似環境を洗い出して、知見を深める必要がある。

執筆者(協力者) 池野 進・石井省三

文献 48), 55), 57), 61)



撮影 2007 年, 山根靖正

茨城県 2016	情報不足①注目種	●●●●●
茨城県 2000	希少種	●●●●●
環境省 2014	対象外	●●●●●

選定理由 ①②③ 2002 (平成 14) 年の鳥獣生息分布調査の繁殖期に生息地が一時的に複数現れたが、その後確かな記録が途絶えている。

分布状況 繁殖地は日本のみ。中国南部、台湾、フィリピン北部で越冬する。本州で繁殖し、一部が冬季に西日本に残る。

形態及び生態 全長約 14cm。雌雄ほぼ同色。雄の頭部から顔は緑黄褐色。上面は灰緑色で背には黒い縦斑がある。目先は黒く、白色のアイリングがある。喉から下面は黄褐色で脇には淡黒色の縦斑がある。翼は黒褐色で灰緑色の羽縁がある。雨覆に 2 本の白い線がある。嘴は灰褐色で足は橙褐色。雌は喉から下面が黄色で下腹部は白色。本州中北部の落葉広葉樹の疎林に局地的に生息する。雄は高い木の梢でチョンチョンピーピーコピーピーなどと囀る。

近似種 近似種はいない。

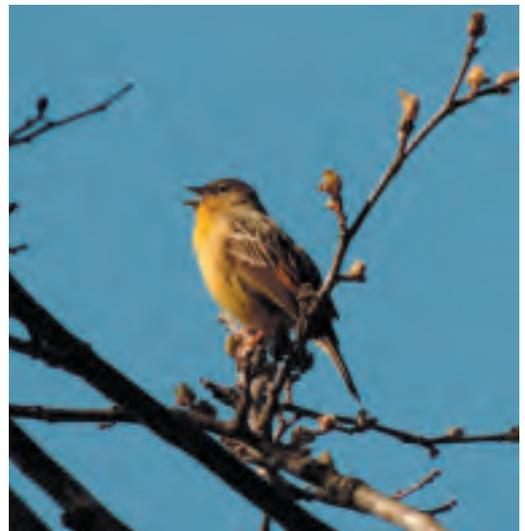
生息地 本県では標高 800m 以上の灌木林に生息するが、日本海側の高密度生息域では平地の灌木が生えた河川敷などの草地にも生息する。

生存の危機 本種の分布の中心である東北地方と異なり、冬でも積雪がなく灌木林の成長が早いいため、長期の生息が難しい。

特記事項 本県では伐採跡地や灌木を維持する必要のある施設など生息適地の洗い出しが必要である。

執筆者(協力者) 池野 進・石井省三

文献 49), 55), 57), 60), 61)



撮影 2014 年, 福島県, 石川 皓

茨城県 2016	情報不足①注目種	●●●●●
茨城県 2000	対象外	●●●●●
環境省 2014	準絶滅危惧	●●●●●

3) 文献一覧

- 1) 茨城県生活環境部環境政策課. 2007. 茨城県野生鳥獣生息分布調査報告書. 358 pp., 茨城県生活環境部環境政策課.
- 2) 武田隆治. 2014. ガン・カモ・ハクチョウ類一斉調査報告 (平成 25 年度). 日本野鳥の会茨城県会報, (318): 4-7.
- 3) 池野 進・相川照夫・明日香治彦・飯島紀美子・石塚恵美子・岩崎忠敬・岩本昌彦・植竹 孝・植竹静江・内田初萌・海老沢悦子・太田 孝・大野晴一・小沼小百合・春日晴一・金澤まち子・神田愛恵子・久留島昭彦・小杉山良子・小林初枝・齋藤玲子・坂本 博・篠塚武雄・下里勝彦・下里登美子・菅原利喜男・高橋清志・武田隆治・成井 宏・西野正義・福田篤徳・藤井徳寿・堀 泰雄・宮内隆之・宮内教江・山根靖正. 2010. 第 14 回霞ヶ浦メモリアル (霞ヶ浦・北浦一斉) 調査報告. 日本野鳥の会茨城支部報, (296): 6-7.
- 4) 日本野鳥の会茨城支部. 2008. 平成 19 年度シラコバト生息調査報告. 71 pp., 日本野鳥の会茨城支部.
- 5) 国土交通省常陸河川国道事務所. <http://www.ktr.mlit.go.jp/hitachi/hitachi00205.html>. (2014 年 9 月 11 日閲覧).
- 6) 池野 進・明日香治彦・山根靖正. 2008. 霞ヶ浦の再生湖岸で蘇る水辺の鳥たち. 日本野鳥の会茨城支部報, (283): 5.
- 7) 横山 仁. 1990. 浮島草原探鳥会. 日本野鳥の会茨城支部報, (170): 8-9.
- 8) 浜口 寛・石川正道・小西恭子・永井敏和・大鹿裕幸・川上和人. 2014. 愛知県西三河地域におけるミゾゴイの生息環境モデル. 日本鳥学会誌, 63: 33-41.
- 9) 牛山武美. 2014. 巻頭写真解説. 日本野鳥の会茨城支部報, (320): 1.
- 10) 石岡ピースブログ. <http://sudohiro264533.blog3.fc2.com/blog-category-5.html>. (2014 年 9 月 12 日閲覧).
- 11) 財団法人日本野鳥の会. 2004. 種の多様性調査 鳥類繁殖分布調査報告書. 135 pp., 環境省自然環境局生物多様性センター
- 12) 渡辺美男・平野敏明. 2011. 神戸市西区周辺におけるヒクイナの生息状況. Bird Research, (7): A45-A55.
- 13) 山口万寿美. 1982. ヒメアマツバメの繁殖について. 日本野鳥の会茨城支部報, (125): 17.
- 14) 海老原真一. 2009. ケリの県内初繁殖報告. 日本野鳥の会茨城支部報, (291): 3-4.
- 15) 武田隆治. 2013. シギチドリ類調査報告 (2013 年). 日本野鳥の会茨城県会報, (316): 3-7.
- 16) 明日香治彦. 2008. セイタカシギの繁殖記録. 日本野鳥の会茨城支部報, (286): 3-7.
- 17) 福田篤徳. 2002. あこがれ鳥に遭う方法: 第 16 回アオシギ. 日本野鳥の会茨城支部報, (246): 22.
- 18) 大槻公彦. 2003. 鳥だより. 日本野鳥の会茨城支部報, (255): 17.
- 19) 日本野鳥の会茨城支部. 2001. 平成 13 年度 希少鳥獣等保護調査報告書. 52 pp., 日本野鳥の会茨城支部.
- 20) 小山大地. 2004. 那珂川・岩根探鳥会. 日本野鳥の会茨城支部報, (260): 18.
- 21) 鈴木紀雄. 2007. 観光船からの海鳥観察報告. 日本野鳥の会茨城支部報, (277): 3-4.
- 22) 大塚 豊. 1975. 鳥だより. 日本野鳥の会茨城支部報, (60): 13.
- 23) 根本龍次. 1985. 鳥だより. 日本野鳥の会茨城支部報, (147): 14.
- 24) 秋田宏幸. 2013. 鳥だより. 日本野鳥の会茨城県会報, (313): 18.
- 25) 西野正義. 2004. 鳥だより. 日本野鳥の会茨城支部報, (259): 17.
- 26) 池野 進. 1998. 酒沼の自然保全に必要なもの. 日本野鳥の会茨城支部報, (223): 5-9.
- 27) 藤井徳寿. 2011. 鳥だより. 日本野鳥の会茨城支部報, (303): 15.
- 28) 池野 進. 2004. 鳥だより. 日本野鳥の会茨城支部報, (258): 16.
- 29) 池田 昇・田沼 寿. 2007. 茨城県におけるチュウヒの繁殖初記録. Strix, (25): 95-98.
- 30) 日本野鳥の会茨城支部. 2010. 平成 21 年度チュウヒ類生息調査報告. 48 pp., 日本野鳥の会茨城支部.
- 31) 堀江玲子・遠藤幸一. 2013. オオタカの分布と環境利用の変遷. 樋口広芳 (編) 「日本のタカ学 生態と保全」, pp. 53-69, 東京大学出版会.
- 32) 遠藤幸一. 2008. オオタカ保全の国内状況. 尾崎研一・遠藤幸一 (編) 「オオタカの生態と保全」, pp. 80-85, 日本林業技術協会.
- 33) 渡辺靖夫・先崎啓究・伊関文隆・越山洋三. 2013. フィールドガイド日本の猛禽類 Vol. 2 サシバ. 29 pp., 西本真理子植物画工房マカロン.
- 34) 池野 進. 1996. イヌワシ・クマタカが生息する奥久慈林道計画路線決定に異議あり. 日本野鳥の会茨城支部報, (213): 6-7.
- 35) 山崎 亨. 2013. イヌワシとクマタカ分布と生息場所利用. 樋口広芳 (編) 「日本のタカ学 生態と保全」, pp. 15-36, 東京大学出版会.
- 36) 伊澤泰彦・矢吹 勉. 2011. 毎月 1 年間探鳥会報告 2010 年小山ダムの野鳥. 日本野鳥の会茨城県会報, (303): 14-15.
- 37) 日本野鳥の会茨城支部. 2000. 平成 12 年度 指定鳥獣保護調査報告書: フクロウ科鳥類の生息分布及び繁殖状況に関する調査. 37 pp., 日本野鳥の会茨城支部.
- 38) 池野 進. 1995. 1994 年カワセミ調査報告 カワセミには川辺の緑陰が必要. 日本野鳥の会茨城支部報, (206): 5-8.
- 39) 池野 進. 2002. あこがれ鳥に遭う方法: 第 15 回アリスイ. 日本野鳥の会茨城支部報, (245): 22.
- 40) 日本野鳥の会茨城支部. 2007. 平成 18 年度 猛禽類ハヤブサ生息調査報告書. 80 pp., 日本野鳥の会茨城支部.
- 41) 日本野鳥の会茨城支部. 2006. 平成 17 年度 シギ・チドリ類生息調査報告書. 20 pp., 日本野鳥の会茨城支部.
- 42) Mashiko, M. and Y. Toquenaga. 2013. Increasing variation in population size and species composition ratio in mixed-species heron colonies in Japan. Forktail, (29): 71-77.
- 43) 大田真也. 2010. スズメはなぜ人里が好きなのか. 230 pp., 弦書房.

- 44) 植田睦之・金井 裕. 1994. 利根川下流におけるオオセッカの環境選択. 「平成5年度希少野生動植物生息状況調査報告」, pp. 19-23, 環境省.
- 45) 加藤俊哉. 1982. 鳥だより. 日本野鳥の会茨城支部報, (129): 9.
- 46) 日本野鳥の会茨城支部. 2010. 平成22年度茨城県野生鳥類生息分布調査報告書. 56 pp., 日本野鳥の会茨城支部.
- 47) 小林圭助. 1974. 東部中国山地の鳥相. 「東中国山地自然環境調査報告」, pp. 81-105, 兵庫県・岡山県・鳥取県.
- 48) 日本野鳥の会茨城県. 2014. 花王株式会社霞ヶ浦研修所構内の鳥類生息状況調査報告書. 16 pp., 日本野鳥の会茨城県.
- 49) 茨城県. 2002. 茨城県野生鳥獣生息分布調査報告書. 384 pp., 茨城県生活環境部環境政策課.
- 50) 龍ヶ崎バードウォッチングクラブ. 2010. 龍ヶ崎の野鳥をしらべる. 138 pp., 龍ヶ崎バードウォッチングクラブ.
- 51) 茨城県鳥獣センター. 1969. 茨城県産鳥類の目録. 60 pp., 茨城県鳥獣センター.
- 52) 武田隆治. 2005. 2005年シギドリ類調査報告. 日本野鳥の会茨城支部報, (268): 4-7.
- 53) 明日香治彦. 1999. 鳥だより. 日本野鳥の会茨城支部報, (231): 17.
- 54) 日本野鳥の会千葉県. 2014. 緊急レポート オオセッカが減っています. 日本野鳥の会千葉県会報, (400): 2.
- 55) 日本鳥学会 (編). 2012. 日本産鳥類目録 改訂第7版. 438 pp., 日本鳥学会.
- 56) 黒田長禮. 1980. 新版 鳥類原色大図説. 3巻. I, 150 pp., II 173 pp., III, 155 pp., 講談社.
- 57) 高野伸二. 1981. 日本産鳥類大図鑑. 474 pp., 東海大学出版会.
- 58) 清棲幸保. 1976. 野鳥の事典 第9版. 413 pp., 東京堂出版.
- 59) 桜井良三. 1984. 世界文化生物大図鑑3. 399 pp., 世界文化社.
- 60) 高野伸二. 1980. 野鳥識別ハンドブック. 324 pp., 財団法人日本野鳥の会.
- 61) 真木広造・大西敏一・五百澤日丸. 2014. 日本の野鳥 650. 788 pp., 平凡社.

3 爬虫類

1) 概要

日本では、これまでカメ目は海ガメ類を除いて4科12種、トカゲ目はトカゲ亜目が6科49種、ヘビ亜目が6科53種知られている。そのうち本県では、カメ目が4科5種、トカゲ亜目3科3種、ヘビ亜目2科8種が記録されている。ただし、これには本県海岸の砂浜に産卵するアカウミガメ以外の海生カメ類と、繁殖が確認されているミシシippアカミミガメ以外の外来種は含まない。

カメ目のうち、クサガメは県内に広く生息しているが、個体数はかなり減少している。ニホンイシガメについては、近年個体数が著しく減少してしまい、今後注視して生息地の調査を進めていく必要がある。ニホンスッポンは、霞ヶ浦周辺でときどき大型の個体が捕獲されるが、それ以外の地域では生息の確認されている場所は減少しており、個体数もかなり少なくなっていると考えられる。今後、生息地の詳細かつ継続的な調査が必要である。また、県内では外来種のミシシippアカミミガメが各地に分布を広げて定着・繁殖し、生息数を増やしており、在来のクサガメやニホンイシガメの生息に大きな圧力となっていることが懸念される。

ウミガメ類については、茨城県の鹿島灘海岸は古くから太平洋岸の産卵の北限地といわれ、アカウミガメが産卵に訪れる貴重な場所であった。1976（昭和56）年には日立市での産卵が確認されたが、その後、毎年産卵が続いており、近年は宮城県（山本町以南）や福島県のいわき市で産卵が確認されていた。しかし2011（平成23）年3月に発生した東日本大震災で、東北から関東地方にかけての海岸は巨大な津波に襲われた。茨城県の海岸も津波の影響により、環境が大きく変化してしまった所がある。そのため、引き続き産卵場として活用するのか懸念されたが、日立市では、産卵に訪れる個体数は震災前より数は減少したものの、確実に産卵場として活用されていることが判明した。しかも、訪れる数は徐々に増えているので、今後、海岸の整備には、アカウミガメの産卵場としての環境維持にも配慮することが強く望まれる。

トカゲ亜目では、ニホンヤモリ、ニホントカゲ、ニホンカナヘビの3種が確認されている。ニホンヤモリについては、本県が太平洋岸における分布の北限に近い生息地であるため、2000（平成12）年版レッドリストに取り上げて注視してきた。しかし、県内の分布域が広がり、生息数も増えている兆候があるので、今回のリストからは除外した。

ニホントカゲ、ニホンカナヘビについては、県内に広く生息しているが、個体数は減少傾向にあり、今後注視していくことが必要であろう。

ヘビ亜目では、8種が確認されている。いずれの種も個体数は減少傾向にあるが、今回は特に、生息の確認された地点が少なく、個体数も少ないと考えられる種、ヒバカリ、シロマダラ、タカチホヘビの3種をリストに取り上げた。

（早瀬長利・小菅次男）

2) 対象種の解説

カテゴリー別に分類した6種（絶滅危惧3種、情報不足3種）について、以下に解説する。

選定理由 ①③ 日立市の海岸は北限に近い産卵場である。東日本大震災の津波の影響で、産卵場はかなりの被害を受けてしまった。

分布状況 産卵地は、本州の能登半島および福島県いわき市を北限とする。

形態及び生態 甲長は65～100cm、体重は70～180kgに成長する。幼体では背甲にキールがあり、成長すると消失する。背甲の色は黒褐色で成長すると赤褐色となる。オスは尾が長く、前肢の爪が鉤状に曲がる。5～8月にかけて夜間に上陸し、砂浜に穴を掘って、70～250個の卵を産む。卵は直径4cmのピンポン玉状、2～3週間の間隔で数回産卵する。食性は雑食で、海藻、貝類、甲殻類などを食べる。

近似種 アオウミガメ

背甲が青っぽい灰白色ないし暗褐色。産卵地は屋久島以南。

生息地 産卵の記録は、宮城県や福島県にもあるが、鹿島灘の海岸は、太平洋側の北限地の産卵場として昔から知られていた。

生存の危機 砂浜の開発や護岸工事などによる産卵に適した砂浜の減少や、漁獲作業の際の混獲の犠牲やビニール片等の誤食による死亡が増加している。

特記事項 千葉県(2011)ではA(最重要保護生物)、福島県では希少として扱われている。

執筆者(協力者) 小菅次男

文献 1), 16), 17), 20), 22), 23), 25), 27), 29), 32)



撮影 根本正吉

茨城県 2016	●●●●●	絶滅危惧Ⅱ類	●●●●●
茨城県 2000	●●●●●	危急種	●●●●●
環境省 2014	●●●●●	絶滅危惧ⅠB類	●●●●●

選定理由 ①③

分布状況 本州、四国、九州とその周辺の島々に分布する。

形態及び生態 全長30～60cm。頭部は細長く、頸部にはくびれがほとんどない。眼は小さく鱗に埋もれるように存在する。体鱗はビーズのように盛り上がりつやつやと光沢がある。鱗の間の皮膚が露出しているため乾燥にきわめて弱い。夜行性、地中生で主にミミズなどを食べる。平地から山地まで生息し、倒木の下や石の下で見つかるが、夜行性であるためか確認例が少ない。

近似種 近似種はいない。

生息地 本県では八溝山で発見されて以来、近年いくつか確認例があるが、その個体数は少ない。

生存の危機 森林などの開発による生息地の喪失、沢のガレ場の改変による生息環境の悪化、異動途中における轢死などが大きな脅威である。

特記事項 栃木県(2011)では、情報不足、福島県(2003)では、未評価として取り扱われている。

執筆者(協力者) 小菅次男

文献 2), 9), 10), 11), 12), 13), 14), 16), 18), 19), 20), 22), 27), 29), 30), 31), 32)



撮影 稲葉 修

茨城県 2016	●●●●●	準絶滅危惧	●●●●●
茨城県 2000	●●●●●	希少種	●●●●●
環境省 2014		対象外	

ナミヘビ科

Dinodon orientale (Hilgendorf)

シロマダラ

選定理由 ①③

分布状況 日本固有種で、本州、四国、九州、伊豆大島や屋久島などの島々に分布しているが、数は少ない。

形態及び生態 全長30～70cm。背面は灰色もしくは灰褐色で、黒い黄帯がある。夜行性で、トカゲや小型のヘビ類など爬虫類を食べる。気性が荒い。6～8月に、1～9個の卵を産む。山地から平地までの主に森林に生息するが、水田、畑、住宅地などにも住む。

近似種 アオダイショウの幼蛇

シロマダラは斑紋が独立しているが、アオダイショウは前後が連なりかけたはしご状である。

生息地 夜行性のため発見例が少なかったが、近年各地で確認例が増えている。

生存の危機 森林などの開発による生息地の喪失や異動途中における轢死が多い。

特記事項 千葉県(2011)では、B(重要保護生物)として、栃木県(2011)では、情報不足、福島県(2003)では、希少として取り扱われている。

執筆者(協力者) 小菅次男

文献 1), 2), 5), 10), 11), 12), 13), 14), 15), 17), 18), 19), 20), 21), 22), 27), 28), 29), 31), 32)



撮影 小菅次男

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	●	●	●
茨城県 2000	●	希少種	●	●	●
環境省 2014		対象外			

イシガメ科

Mauremys japonica (Temminck et Schlegel)

ニホンイシガメ

選定理由 ①②⑤ 本県のカメ類の調査は十分ではないが、本種は近年確認例が少ない。分布、生息状況に関する情報は不足している。

分布状況 本州、四国、九州及びその周辺の島嶼に分布する日本固有種。

形態及び生態 甲長はオス13cm、メス20cm。背甲は扁平で黄土色、もしくは黄褐色。腹甲は黒色。背甲の後縁はギザギザになっており、これは幼体ほど顕著である。5～8月に、水辺近くの土手、畑、畔などで産卵する。雑食性で、魚、甲殻類、水生昆虫、水草などを食べる。

近似種 クサガメ

ニホンイシガメと異なり、背甲に縦に3本の隆起があり、背甲後縁のギザギザが少ない、頭に黄緑色の筋模様がある。

生息地 県内の確認例はクサガメに比べて少ない。水戸市、小美玉市、鉾田市、行方市などで記録がある。

生存の危機 水田、池沼の開発による生息地の喪失、河川、池沼、水田の改修工事による生息環境の悪化、外来種の移入による競争が、個体数の減少をもたらしている。

特記事項 栃木県(2011)では情報不足、千葉県(2011)では、A(最重要保護生物)として、福島県(2003)では未評価として扱われている。

執筆者(協力者) 小菅次男(須賀英明)

文献 1), 2), 5), 7), 9), 16), 17), 18), 19), 20), 24), 27), 29), 31), 32)



撮影 小菅次男

茨城県 2016	●	情報不足②現状不明種	●	●	●
茨城県 2000		対象外			
環境省 2014	●	準絶滅危惧	●	●	●

選定理由 ①②④ 本県のカメ類調査が十分ではなく、確認例が少ない。分布、生息状況に関する情報は不足している。

分布状況 アジア東部に広く分布し、日本では本州、四国、九州、沖縄島、石垣島、西表島、与那国島などに分布する。

形態及び生態 甲長 25～30cm。背甲は扁平で柔らかな皮膚に覆われ、鱗板を持たない。みずかきが発達している。河川の中流から下流にかけて、平地の湖沼などの砂泥質の場所に生息する。肉食性で、魚、貝類、甲殻類、水生昆虫などを食べる。4～6月に交尾し、6～8月に産卵する。

近似種 近似種はいない。

生息地 県内の河川、湖沼に生息するが詳しい調査があまりない。2014（平成26）年8月に水戸市千波湖、2015年7月に利根川で捕獲された。

生存の危機 河川、湖沼などの水質悪化、改修工事による生息環境の悪化。外来種のカメ類の移入による競争が本種の生存を圧迫している。

特記事項 千葉県（2011）では情報不足、栃木県（2011）では情報不足として扱われている。

執筆者(協力者) 小菅次男

文献 1), 2), 9), 17), 20), 22), 25), 27), 31), 32)



撮影 池澤広美

茨城県 2016	情報不足②現状不明種	●●●●●
茨城県 2000	対象外	
環境省 2014	情報不足	●●●●●

選定理由 ①②④ 水田の圃場整備や湿地の減少などに伴い減少が心配される。

分布状況 日本固有亜種で本州、四国、九州、佐渡ヶ島、隠岐島、奄岐島、五島列島などに分布している。

形態及び生態 全長 40～60cm。背面は褐色、または茶褐色で、口角から頸部にかけて、斜めに淡黄色の帯が入る。腹面は黄白色で、その両端には暗色の点刻がある。森林や草原などでも見つかるが、水田、湿原、水路脇などで見つかることが多い。カエル、オタマジャクシ、ドジョウなどの小魚、ミミズなどを食べる。産卵は初夏で、平均して6個の卵を産む。

近似種 ヤマカガシ、ジムグリの幼蛇

本種は幼蛇を含め頸部に明るく黄色い帯が斜めに入るので区別は容易である。

生息地 本県では平地から山地まで幅広く生息すると思われる。餌のカエル類が生息する水田や湿地に見られるが、調査が不十分で確認例は少ない。

生存の危機 水田、湿地、森林などの開発による生息地の喪失。水田の乾田化などによる生息環境の悪化、餌のカエル類の減少、異動途中の轢死などが生存をおびやかしている。

特記事項 千葉県（2011）では、D（一般保護動物）として、栃木県（2011）では要注意、福島県（2003）では、希少として扱われている。

執筆者(協力者) 小菅次男

文献 1), 2), 5), 12), 13), 14), 17), 18), 20), 22), 23), 27), 29), 31), 32)



撮影 小菅次男

茨城県 2016	情報不足②現状不明種	●●●●●
茨城県 2000	対象外	
環境省 2014	対象外	

3) 文献一覧

- 1) 長谷川雅美, 2011. 爬虫類・両生類, 「千葉県の保護上重要な野生生物—千葉県レッドデータブック—動物編」, pp. 126-144, 千葉県環境生活部自然保護課.
- 2) 林 光武・青柳郁夫・菱沼知仁・石塚利一・木村有紀・鈴木毅一・赤羽記年・岩淵真由美, 2005. 爬虫類・両生類, 「レッドデータブックとちぎ: 栃木県の保護上注目すべき地形・地質・野生動植物」, pp. 538-536, 栃木県林務部自然環境課.
- 3) 早瀬長利, 2010. 茨城県西部地域の両生・爬虫類, 「茨城県自然博物館総合調査報告書: 茨城県南西部地域を中心とした脊椎動物(2006-2008)」, pp. 17-21, ミュージアムパーク茨城県自然博物館.
- 4) 早瀬長利, 2010. 茨城県における淡水生外来カメ類の捕獲記録, 茨城県自然博物館研究報告, (13): 93-97.
- 5) 疋田 務・当山昌直・松井正文・倉本 満・羽鳥道久・藤下英也・西村昌彦・リチャード ゴリス・柴田保彦, 1989. 日本のヘビとカエル大集合解説書, 87 pp., 大阪市自然史博物館.
- 6) 茨城県環境局, 1985. 茨城県特定動植物分布調査報告書: 茨城の特定動植物の分布(昭和58・59年), 532 pp., 茨城県環境局.
- 7) 茨城県高等学校教育研究会生物部, 2005. 茨城の自然観察ガイドブック, 221 pp., 茨城県高等学校教育研究会.
- 8) 茨城県生活環境部, 1995. 茨城県特定動植物分布調査報告書2: 茨城県の特定動植物の分布動物編(平成5・6年度), 417 pp., 茨城県生活環境部.
- 9) 茨城生物の会, 1995. 水戸市の両生・ハ虫類調査報告書, 58 pp., 水戸市立博物館.
- 10) 稲葉 修, 2003. 茨城県北茨城市と大子町でタカチホヘビを確認, 茨城生物, (23): 50-54.
- 11) 稲葉 修, 2005. 常陸太田市(旧里美村)でタカチホヘビを確認, 茨城生物, (26): 21-22.
- 12) 稲葉 修, 2007. 茨城県内における爬虫類(陸産)の記録—県北部を中心として—, 茨城生物, (27): 43-57.
- 13) 稲葉 修, 2007. 久慈川流域の爬虫類と両生類, 久慈川のほとり, (20): 40-43, 久慈川水系環境保全協議会.
- 14) 稲葉 修, 2007. 久慈川流域の爬虫・両生類, 「茨城県自然博物館第4次総合調査報告書」, pp. 269-278, ミュージアムパーク茨城県自然博物館.
- 15) 稲葉 修, 2008. 冬季に野外にて確認したシロマダラ, 茨城生物, (28): 71-72.
- 16) 稲葉 修 他, 2015. ふくしまに生きる爬虫・両生類—身近な生き物から未来の南相馬・福島を考える—, 「平成27年度特別展図録」, 26 pp., 福島県南相馬市博物館.
- 17) 環境省(編), 2014. Red Data Book 3 日本の絶滅のおそれのある野生生物: 爬虫類・両生類, 153 pp., (株)ぎょうせい.
- 18) 小菅次男, 1979. 茨城県の両生類・ハ虫類の生息概況, 茨城県立水戸南高等学校紀要, (4): 93-101.
- 19) 小菅次男, 1992. 茨城の両生類とハ虫類, 「茨城の生物 平成4年版」, pp. 236-241.
- 20) 小菅次男・早瀬長利, 2000. 爬虫類・両生類, 「茨城における絶滅のおそれのある野生生物 動物編」, pp. 74-83, 茨城県生活環境部環境生活課.
- 21) 小菅次男, 2007. シロマダラの水戸市内での初記録, 茨城生物, (27): 37.
- 22) 日本爬虫両棲類学会, 2015. 日本産爬虫両棲類標準和名, (2002年総会で承認, 2015年改訂), <http://zoo.zool.kyoto-u.ac.jp/herp/wamei.html>.
- 23) 中村賢児・上野俊一, 1963. 原色両生爬虫類図鑑, 214 pp., 保育社.
- 24) 日本自然保護協会, 1979. 第2回自然環境保全基礎調査: 動物分布調査報告(両生類・ハ虫類)茨城県, 35 pp., 環境省.
- 25) 大野正人・萩原正明, 2013. 自然しらべ2013日本のカメさがし: 身近な生きものから見えてくる生物多様性報告書, 36 pp., 日本自然保護協会.
- 26) 品田時夫, 1994. ウミガメは減っているか—その保護と未来—, pp. 90, 紀伊半島ウミガメ情報交換会, 日本ウミガメ協議会.
- 27) 千石正一, 1979. 原色両生・爬虫類, 206 pp., 家の光協会.
- 28) 塩田正寛, 1992. シロマダラ, 「茨城の生物 平成4年版」, 235 pp., 茨城県高等学校教育研究会生物部会.
- 29) 菅原宏理・星 一彰・矢吹育夫・横田清美, 2003. 両生・爬虫類, 「レッドデータブックふくしまII, 福島県の絶滅のおそれのある野生生物」, pp. 30-41, 福島県生活環境部環境政策室.
- 30) 鈴木律子, 2004. 那珂郡山方町でタカチホヘビ(幼蛇)を発見, 茨城生物, (24): 37.
- 31) 栃木県自然環境調査研究会両生爬虫類部会, 2001. 栃木県自然環境基礎調査: とちぎの両生類・爬虫類, 146 pp., 栃木県林務部自然環境課.
- 32) 内山りゅう・前田憲男・沼田研児・関慎太郎, 2002. 決定版 日本の両生爬虫類, 335 pp., 平凡社.

4 両生類

1) 概要

日本に分布する両生類は、2015（平成27）年までに、サンショウウオ目（有尾目）が3科32種、カエル目（無尾目）は6科49種が知られている。このうち茨城県では、2015年までに、サンショウウオ目（有尾目）が2科6種、カエル目（無尾目）4科11種の生息が確認されている。ただし、2015年4月に福島県南部で確認されたトウホクサンショウウオは含まない。

サンショウウオ目のサンショウウオ科では、従来一種とされてきた日本のハコネサンショウウオ属（*Onychodactylus*）の種が吉川ほか（2013, 2014）の研究により6種に分類された。それによると、本県のハコネサンショウウオ属は狭義のハコネサンショウウオ（*O. japonicus*）を含め、3種に分けられることになった。県北の八溝山系に分布する集団は狭義のハコネサンショウウオであるが、県北阿武隈山地の花園山周辺部および多賀山地の集団はバンダイハコネサンショウウオ（*O. intermedius*）、さらに県南西部の筑波山系に分布する集団はツクバハコネサンショウウオ（*O. tsukubaensis*）として新たに記載された。特に、ツクバハコネサンショウウオの生息地は筑波山系に限定されるため、今後、十分な保護対策を講じる必要がある。今後、これらの3種の分布範囲や成体の形態や習性について精査することが必要であろう。

クロサンショウウオは、県内では県北の2地域にのみ限定的に生息しているが、いずれも森林伐採等の影響により生息場所の環境が悪化している。トウキョウサンショウウオは関東地方を中心に分布し、福島県が北限とされている。主に丘陵地や低山地の谷間の水田地帯に生息しているが、開発の影響や、山間部の林道、圃場整備等の影響で急速に生息数が減少している。

トウホクサンショウウオについては、1960年代に花園山系で記録されたが、その後の記録はなく誤認の可能性が否定できなかった。今回、福島県南部で産卵場を確認することができたことから、今後この地域から本県にかけて本種の生息域を精査することが必要である。これらのことから、今回のリストからは除外した。

イモリ科のアカハライモリは山間地から平地部の広い地域の池沼、水田、小川などに棲息が確認されていたが、水田の圃場整備や乾田化などの影響により、平地部では急激に生息数が減少した。今後、注視する必要がある。

本県に生息するサンショウウオ目の6種は、いずれも生息環境が限定される上、多くの生息地が開発などによって消失あるいは劣化したため、生息数の減少が顕著である。

カエル目のアズマヒキガエルは、産卵場の埋め立てや森林の伐採、松枯れなどによる山林荒廃などの影響により、近年は生息数がかなり少なくなっている。タゴガエルは、主に県北の山間地域に広く生息するが、筑波山塊に生息する個体群は他の生息地とは不連続であり、今後その保護に留意する必要がある。ツチガエルは県全域に広く生息している種であったが、近年、県南地域や県西地域では、生息数が急激に減少した。カジカガエルは、主に久慈川流域や那珂川流域の上流から中流域に生息しているが、河川改修や水質の悪化などの影響で生息数は減少している。シュレーゲルアオガエルは、水田の畔や小川の水辺の湿地の土中に産卵する習生があるため、圃場整備や水路のコンクリート化などの影響を受けて、生息数は減少傾向にある。

アカガエル類も生息数は減少傾向にあり、2～3月の産卵期に鳴き声を聞くことが少なくなってしまうが、今後、さらに詳しい調査が必要と考え、今回のリストからニホンアカガエルは除外した。トウキョウダルマガエルは、県南部や県西部では場所によって生息数がかなり減少してしまったが、今後さらに注視する必要がある。

モリアオガエルについては、隣接する千葉県・栃木県・福島県では生息が確認されているが、前回（平成12年）のレッドデータブック作成時と同様に本県内での生息は確認できなかった。

（早瀬長利・小菅次男）

2) 対象種の解説

カテゴリー別に分類した 11 種（絶滅危惧 8 種，情報不足 3 種）について，以下に解説する。

選定理由 ①③④ 本種は生息地が筑波山系に限定されており、かつ生息環境の悪化や新種記載後はペット目的による捕獲圧の増加にさらされ、生息数が激減しつつある。

分布状況 日本固有種で筑波山系にのみ生息する。

形態及び生態 成体は全長 12～16cm で背面に赤褐色の明瞭な縦条や斑紋が見られる。尾が短く、尾長の頭胴長に対する比率（尾率）がオスで 100～110%、メスで 90% 程度。幼生は黒爪を持ち、体全体に白い不規則な斑点が散り、尾の上縁に黄色の縦条がある。幼生は沢の上流部での約 3 年の水中生活の後、変態して陸上生活に移行する。産卵は 5～6 月に、沢の最源流部の伏流水中で行われ、メスは 1 対の紡錘形の卵嚢を岩に産み付ける。一腹卵数は 17 個程度。

近似種 ハコネサンショウウオとバンダイハコネサンショウウオは尾率が通常オスで 110% 以上、メスで 100% 以上あり、幼生の白斑、黄条は少ない。

生息地 本県の筑波山から加波山の周辺部の溪流にのみ生息している。

生存の危機 林道による生息域分断、砂防堰堤等による水域の連続性の喪失や幼生の生息環境悪化、山頂の施設による地下水汲上げ、ペット目的の採集圧の増加が生息をおびやかしている。

特記事項 従来はハコネサンショウウオとして扱われてきたが 2013 年に新種として記載された。筑波山系の固有種である。本県産ハコネサンショウウオ属 3 種の生息域は互いに重ならず、完全に異所的に分布している。2015（平成 27）年 12 月に環境省から国内希少野生動物種として追加指定された。

執筆者（協力者） 吉川夏彦

文献 10), 14), 42), 43), 46)



撮影 早瀬長利

茨城県 2016 ●●●●● 絶滅危惧 I B 類 ●●●●●

茨城県 2000 ●●●●● 危急種 ●●●●●

環境省 2014 未評価

選定理由 ①③ 県内の生息地は本種の分布の東限にあたり、学術的に重要である。生息域の環境悪化により、生息数は減少している。

分布状況 日本固有種で、新潟、福島、茨城以西の本州の山間部に分布し、日本海側では低山地にも生息する。一般に標高の高い所に多い。

形態及び生態 成体は、全長 13～18cm、背面に黄褐色の縦条や細かい斑紋を有するが、本県産ではこれが不明瞭な個体が多い。尾率は通常オスで 120% 以上、メスで 100% 以上だが、本県産個体群は他地域よりもやや尾が短い傾向がある。高標高のブナ帯に多いが、スギ植林地でも見られる。幼生は指先に黒爪を有し、沢の上流部約 3 年間水中生活を送り、変態上陸する。産卵時期は、5～6 月と推測される。産卵場所は源流部に近い場所の伏流水中だが、本県ではいまだ確認例はない。

近似種 ツクバハコネサンショウウオとバンダイハコネサンショウウオに似るが本県産ハコネサンショウウオ属では尾率が最も大きい。

生息地 本県では北西部の八溝山周辺で、主に標高 400m 以上の所に生息している。

生存の危機 森林伐採による生息地破壊と環境悪化、林道建設による分断化、砂防工事による水域の分断や幼生の生息環境悪化が深刻である。

特記事項 本県の生息域は分布の東限にあたる。

執筆者（協力者） 吉川夏彦

文献 12), 22), 43), 44), 46)



撮影 吉川夏彦

茨城県 2016 ●●●●● 絶滅危惧 I B 類 ●●●●●

茨城県 2000 ●●●●● 危急種 ●●●●●

環境省 2014 対象外

選定理由 ①②③ 生息地が、低地や丘陵部であるため、開発の影響を受け、産卵や生息に適した環境が減少して急激に数を減らした。

分布状況 日本固有種で、主に関東地方以東の太平洋沿岸地域の平地部に生息し、分布の北限は福島県南部である。

形態及び生態 成体は、小型で全長9～10cmで、四肢が短く、前肢と後肢が体側でかさならない。繁殖期は、2月～3月で、産卵場所は、池、沢のよどみ、水田の側溝などの水たまりなどである。メスは、一對のバナナ形の卵のうを産む。一卵のうには、30～80個の卵が含まれる。幼生は、細かい褐色の不規則な斑点がある。

近似種 クロサンショウウオは、卵のうがあげび状で幼生の尾に黒斑模様がある。

生息地 県の中央部から県北にかけての比較的低い山地や丘陵部に局所的に生息している。

生存の危機 雑木林が松枯れや宅地造成地整備等の影響で生息適地が減少し、水田の乾田化や用水のコンクリート化などにより生息環境が急激に悪化している。

特記事項 4つの地域個体群に分けられるが、茨城の集団は、茨城・福島両県にかけて分布する北限集団の一部をなす。栃木県(2011)では、絶滅危惧Ⅱ類(Bランク)、福島県(2003)では、絶滅危惧Ⅱ類として、千葉県(2011)では、最重要保護生物として扱われている。

執筆者(協力者) 早瀬長利

文献 1), 2), 3), 4), 5), 8), 13), 16), 17), 18), 19), 20), 21), 22), 23), 24), 25), 26), 27), 28), 29), 30), 31), 32), 33), 34), 35), 36), 37), 38), 39), 42)



撮影 小菅次男



選定理由 ①② 水田の乾田化や側溝のコンクリート化等の影響を受けて水環境が悪化し生息場所が狭められている。

分布状況 日本固有種で本州・四国・九州・佐渡・隠岐・壱岐などに生息する。

形態及び生態 成体は、8～10cm、背面は黒～褐色で腹面は赤～オレンジ色で不規則な黒斑がある。幼生は、変態後約1年は陸上で生活し、その後は池や水田などの水中に生息する。食性は動物食で、水生昆虫やオタマジャクシなどの小動物を食べる。

近似種 県内に近似種はいない。

生息地 県内では水田の用水や沼や池などに比較的広範囲に生息している。

生存の危機 生息に適した水環境の減少や、ペットとしての採集等ですずれの生息地でも数は減少している。

特記事項 千葉県(2011)では、最重要保護生物として、栃木県(2011)では絶滅危惧Ⅱ類(Bランク)として、福島県(2003)では、準絶滅危惧として扱われている。

執筆者(協力者) 早瀬長利

文献 1), 2), 3), 10), 16), 17), 18), 19), 20), 21), 22), 23), 24), 25), 26), 32), 33), 35), 36), 37), 38), 39), 42)



撮影 早瀬長利



選定理由 ①② 比較的標高の高い高所に生息するが、本県では、山間部の環境の悪化により、生息数が減少傾向にある。

分布状況 日本固有種で、本州・四国・九州の山地に生息する。

形態及び生態 成体は、体長4～5cmと比較的小型で、みずかきはあまり発達していない。あごの下部に明瞭な黒斑がある。陸上移行後は、森林内の湿った場所に生息し、水の中にはあまり入らない。産卵期は、4～5月で、沢の源流部にある水中の岩穴の奥や石の下に産卵し、卵は、カエルの中では比較的大きく直径3～4mm。孵化した幼生は、ほとんど餌を食べないでも、短時間で陸上に移行する。

近似種 ヤマアカガエルとは、下顎の黒斑が明瞭であることで区別できる。

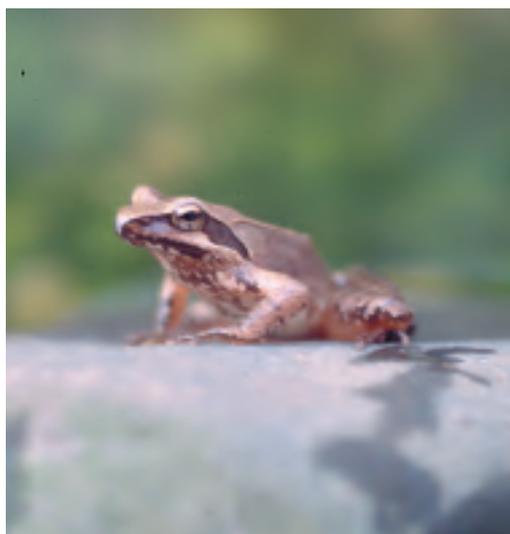
生息地 県内では、主に県中央部の筑波山周辺部や県北の八溝山周辺部および花園山周辺部等の山間部に生息している。

生存の危機 山間部の森林の伐採や林道建設等の影響で生息域が狭められている。

特記事項 千葉県(2011)では、重要保護生物として扱われている。

執筆者(協力者) 早瀬長利

文献 1), 3), 7), 11), 15), 16), 17), 18), 20), 21), 22), 23), 24), 25), 26), 31), 33), 36), 39)



撮影 小菅次男

茨城県2016	●	準絶滅危惧	●	●	●
茨城県2000	●	希少種	●	●	●
環境省2014		対象外			

選定理由 ①③ 本県では、県北部の溪流の上流・中流にのみ生息し、河川の改修工事や水質の悪化などにより、生息数が減少している。

分布状況 日本固有種で、本州、四国、九州に分布する。

形態及び生態 成体の体色は、灰褐色で不規則な暗褐色の模様を有する。体は比較的扁平で、指先に大きな吸盤があり、岩などをよじ登れる。体長は、雄が3～4cm、雌が5～7cmと雌が大きい。繁殖期には、フィーフィーフィーとよく響く声で鳴く。

近似種

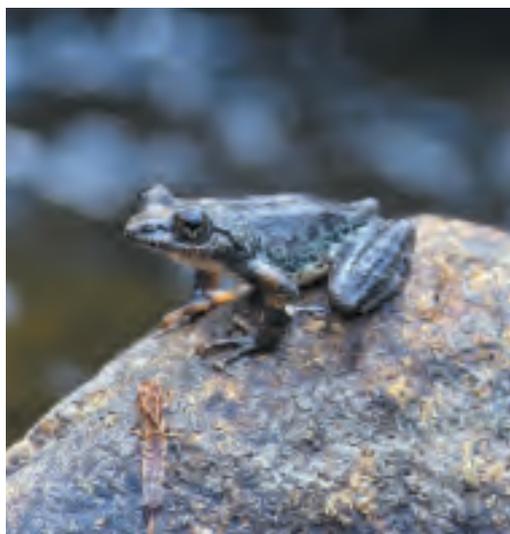
生息地 水のきれいな河川の上流から中流域に生息する。本県では、県北山間部の上流から中流域に生息する。

生存の危機 河川の改修工事、生活排水の流入などの河川環境や水質の悪化により、生息数が減少している。

特記事項 千葉県(2011)では、重要保護生物として、栃木県(2011)では、要注目として、福島県(2003)では希少種として扱われている。

執筆者(協力者) 早瀬長利

文献 1), 2), 15), 16), 17), 18), 20), 21), 22), 23), 24), 25), 26), 27), 31), 32), 33), 36), 37), 39)



撮影 染谷 保

茨城県2016	●	準絶滅危惧	●	●	●
茨城県2000	●	希少種	●	●	●
環境省2014		対象外			

選定理由 ①② 産卵場とする水辺が開発や湿地の埋め立て等により失われたり悪化することにより生息数が減少傾向にある。

分布状況 日本固有亜種で、本州（東北地方から山陰地方にかけて）に分布する。

形態及び生態 大型のカエルで、繁殖期以外はほとんど水に入らず陸上で生活する。繁殖期は4月から5月で、多数が集まって、騒がしく鳴き交わすことで「蛙合戦（かわすがっせん）」として知られている。主に昆虫類やミミズなどを好んで食べる。オタマジャクシの期間は短く、小さい状態でカエルに変態する。

近似種 南西日本に無分布する別亜種のニホンヒキガエルによく似るが、鼓膜が大きいことで区別できる。

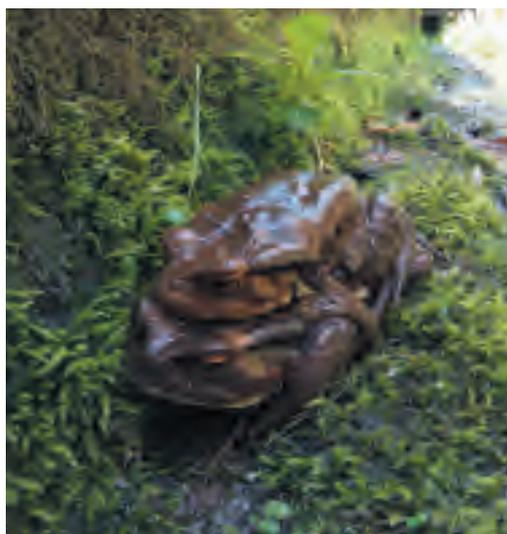
生息地 主に、山間地の雑木林や民家の近くなどに生息し、主に夜間に活動する。

生存の危機 湿地の埋め立てやそれに伴う護岸工事による水辺のコンクリート化等の影響が深刻である。

特記事項 千葉県（2011）では要保護生物として、栃木県（2011）では、要注目種として扱われている。

執筆者(協力者) 早瀬長利

文献 1), 2), 3), 10), 15), 16), 17), 19), 22), 23), 24), 25), 26), 27), 31), 32), 33), 36), 38), 39), 40), 41)



撮影 染谷 保

茨城県 2016	情報不足①注目種	●●●●●
茨城県 2000	対象外	
環境省 2014	対象外	

選定理由 ①② 県内全域に生息していたが、近年、県西・県南地域では生息数が著しく減少している。

分布状況 本州、四国、九州および周辺の島々、朝鮮半島、中国東北部。

形態及び生態 背面は灰褐色で多数のいぼがあり、側面には細かな斑紋をもつ。悪臭のある体液を分泌する。繁殖期は、5～8月。幼生は、孵化後、オタマジャクシで越冬し、翌年に8cmくらいに成長してから陸上に移行する。

近似種

生息地 平野部の水田や池、山間の溪流や湿地など、水辺に生息する。

生存の危機 水田の圃場整備や乾田化及び用水路のコンクリート化などの影響が深刻である。

特記事項 栃木県（2011）では、絶滅危惧Ⅱ類（Bランク）として、福島県（2003）では、準絶滅危惧種として扱われている。

執筆者(協力者) 早瀬長利

文献 1) 2), 3), 15), 16), 17), 22), 24), 25), 26), 31), 32), 33), 36), 37)



撮影 早瀬長利

茨城県 2016	情報不足①注目種	●●●●●
茨城県 2000	対象外	
環境省 2014	対象外	

選定理由 ①②生息環境の悪化により、特に県南・県西地域では、急激に生息数が減少している。

分布状況 自然分布としては関東平野、仙台平野、新潟県中部・南部、長野県北部・中部に確認され、北海道には1990年に侵入が確認された。

形態及び生態 成体は、雄・雌とも同じ色で、体色では区別できない。背中線を持ち、背面に円くて孤立している黒い斑紋がある。主に平地や山地付近の池や水田に生息し、繁殖期は4月下旬から7月。雄は水面に浮きながら、テリトリーを持ちゲゲと鳴きながら雌をまつ。

近似種 トノサマガエルとは、黒斑紋が独立し、雄と雌が同系色であることで区別できる。

生息地 県内に広く生息する。主に水田や池などの水辺に生息し、水かきが発達し、泳ぐことが得意である。

生存の危機 水田の圃場整備や乾田化等の影響により、生息数が急激に減少している。

特記事項 従来 *Rana* 属の亜属とされていたが、近年 *Pelophylax* 属に変更された。千葉県(2011)では重要保護動物として、栃木県(2011)では、準絶滅危惧(Cランク)として、福島県(2003)では、未評価として扱われている。

執筆者(協力者) 早瀬長利

文献 1), 2), 3), 10), 15), 16), 17), 19), 21), 22), 23), 24), 25), 31), 32), 33), 36), 37), 38), 41)



撮影 早瀬長利

茨城県2016 情報不足①注目種 ●●●●●

茨城県2000 対象外

環境省2014 準絶滅危惧 ●●●●●

3) 文献一覧

- 1) 長谷川雅美, 2011. 爬虫類・両生類, 「千葉県の保護上重要な野生生物: 千葉県レッドデータブック動物編」, pp. 126-144, 千葉県環境生活部自然保護課.
- 2) 林 光武・青柳郁夫・菱沼知仁・石塚利一・木村有紀・鈴木毅一・赤羽記年・岩淵真由美, 2005. 爬虫類・両生類, 「レッドデータブックとちぎ: 栃木県の保護上注目すべき地形・地質・野生動物」, pp. 538-536, 栃木県林務部自然環境課.
- 3) 林 光武, 2012. とちぎのカエルとサンショウウオ, 「第 103 回企画展図録」, 52 pp., 栃木県立博物館.
- 4) 林 義雄・草野 保, 2006. ミトコンドリア遺伝子 D - 100pHV2 領域に基づくトウキョウサンショウウオの地域間異変, 爬虫両棲類学会会報, (1): 1-8.
- 5) 早瀬長利, 1977. 地域的特性を生かした生物の教材化 — 両生類, 有尾目を中心にして —, 「昭和 52 年度前期 内地留学研究報告書」, 37 pp., 自費出版.
- 6) 早瀬長利, 1979. 茨城県のクロサンショウウオ, 採集と飼育, (41-5): 255.
- 7) 早瀬長利, 1979. 茨城県のタゴガエルについて (1), 両生爬虫類研究会誌, (15): 17-23.
- 8) 早瀬長利, 1981. 茨城県のサンショウウオ (1), 茨城の生物第 2 集, pp. 178-183, 茨城県高等学校教育研究会生物部.
- 9) 早瀬長利, 1991. 両生類ハコネサンショウウオ, 「第 47 回企画展図録 — 真壁町の歳時記」, pp. 39-40, 真壁町歴史民俗資料館.
- 10) 早瀬長利, 2010. : 茨城県西部地域の両生・爬虫類, 「茨城県自然博物館総合調査報告書: 茨城県南西部地域を中心とした脊椎動物 (2006-2008)」, pp. 17-21, ミュージアムパーク茨城県自然博物館.
- 11) 早瀬長利・野口達也, 1982. 茨城県のタゴガエルについて (2), 両生爬虫類研究会誌, (24): 1-2.
- 12) 早瀬長利・大関 滋, 1983. ハコネサンショウウオの産卵と発生, 採集と飼育, 45(3): 123-123.
- 13) 早瀬長利・山根爽一, 1988. 日本産サンショウウオ科 (Hynobiidae) サンショウウオの生息環境と繁殖様式, 茨城大学教育学部紀要 (自然科学), (38): 85-102.
- 14) 早瀬長利・山根爽一, 1982. 茨城県筑波山系におけるハコネサンショウウオ (*Onychodactylus japonicus*) の水中生活期の生態, 日本生態学会誌, 32: 395-403.
- 15) 疋田 務・当山昌直・松井正文・倉本 満・羽鳥道久・藤下英也・西村昌彦・リチャード ゴリス・柴田保彦, 1989. 日本のヘビとカエル大集合解説書, 87 pp., 大阪市自然史博物館.
- 16) 茨城県環境局, 1985. 茨城県特定動植物分布調査報告書: 茨城の特定動植物の分布 (昭和 58・59 年), 532 pp., 茨城県環境局.
- 17) 茨城県高等学校教育研究会生物部, 2005. 茨城の自然観察ガイドブック, 221 pp., 茨城県高等学校教育研究会.
- 18) 茨城県生活環境部, 1995. 茨城県特定動植物分布調査報告書 2: 茨城県の特定動植物の分布動物編 (平成 5, 6 年度), pp. 325-330, 茨城県生活環境部.
- 19) 茨城生物の会, 1995. 水戸市の両生・ハ虫類調査報告, 58 pp., 水戸市立博物館.
- 20) 稲葉 修, 1996. 阿武隈山地のサンショウウオ, 「さとみ風土記 (3)」, pp. 1-11, 里美村教育委員会.
- 21) 稲葉 修, 2007. 久慈川流域の爬虫類と両生類, 久慈川のほとり, (20): 46-52, 久慈川水系環境保全協議会.
- 22) 稲葉 修, 2007. 久慈川流域の爬虫・両生類, 「茨城県自然博物館第 4 次総合調査報告書」, pp. 269-278, ミュージアムパーク茨城県自然博物館.
- 23) 稲葉 修, 2015. ふくしまに生きる爬虫・両生類 — 身近な生き物から未来の南相馬・福島を考える —, 「平成 27 年度特別展図録」, 26 pp. 福島県南相馬市博物館.
- 24) 環境省 (編), 2014. Red Data Book 3 日本の絶滅のおそれのある野生生物 爬虫類・両生類, 153 pp., (株)ぎょうせい.
- 25) 小菅次男, 1979. 茨城県の両生類・ハ虫類の生息概況, 茨城県立水戸南高等学校紀要, (4): 93-101.
- 26) 小菅次男, 1992. 茨城の両生類とハ虫類, 「茨城の生物 平成 4 年版」, pp. 236-241.
- 27) 小菅次男・早瀬長利, 2000. 爬虫・両生類, 「茨城における絶滅のおそれのある野生生物 (動物編): 茨城県版レッドデータブック」, pp. 72-83., 茨城県生活環境部環境政策課.
- 28) 草野 保・川上洋一・御手洗 望, 2014. トウキョウサンショウウオ: この 10 年間の変遷 — 東京都多摩地区における 2008 年度生息状況調査報告書 —, 74 pp., トウキョウサンショウウオ研究会.
- 29) 草野 保・早瀬長利, 1990. トウキョウサンショウウオの卵サイズの地理的変異, 個体群生態学会会報, (46): 5-12.
- 30) 益子 治, 1983. 茨城県北部におけるサンショウウオ科の分布と環境要因, 茨城県高等学校教育研究会生物部会誌, (43): 14-21.
- 31) 松橋利光・奥山風太郎, 2002. 山溪ハンディ図鑑 9 日本のカエル, 191 pp., 山と溪谷社.
- 32) 中村賢児・上野俊一, 1963. 原色両生爬虫類図鑑, 214 pp., 保育社.
- 33) 日本爬虫両棲類学会, 2015. 日本産爬虫両棲類標準和名, (2002 年総会で承認, 2015 年改訂), <http://zoo.zool.kyoto-u.ac.jp/herp/wamei.html>.
- 34) 日本自然保護協会, 1979. 第 2 回自然環境保全基礎調査 動物分布調査報告 (両生類・ハ虫類) 茨城県, 35 pp., 環境省.
- 35) 佐藤井岐雄, 1943. 日本産有尾類総説, 520 pp., 日本出版社.
- 36) 千石正一, 1979. 原色両生・爬虫類, 206 pp., 家の光協会.
- 37) 菅原宏理・星 一彰・矢吹育夫・横田清美, 2003. 両生・爬虫類, 「レッドデータブックふくしま II 福島県の絶滅のおそれのある野生生物」, pp. 30-41, 福島県生活環境部環境政策室.

- 38) 栃木県自然環境調査研究会両性爬虫類部会. 2001. 栃木県自然環境基礎調査 とちぎの両生類・爬虫類. 146 pp., 栃木県林務部自然環境課.
- 39) 潮田好弘. 2014. 新茨城風土記 ―ひとと自然のものがたり―. 「開館20周年記念企画展図録」, pp. 34, ミュージアムパーク茨城県自然博物館.
- 40) 湯本勝弘・早瀬長利. 2010. 筑波山 ―ブナとガマと岩と―. 「第50回企画展図録」, p. 25., ミュージアムパーク茨城県自然博物館.
- 41) 内山りゅう・前田憲男・沼田研児・関慎太郎. 2002. 決定版 日本の両生爬虫類. 335 pp., 平凡社.
- 42) Yoshikawa, N. & M. Matsui. 2013. A new salamander of the genus *Onychodactylus* from Tsukuba Mountains, eastern Honshu, Japan (Amphibia, Caudata, Hynobiidae). *Current Herpetology*, 32: 9-25.
- 43) Yoshikawa, N., M. Matsui, K. Nishikawa, J. B. Kim & A. Kryukov. 2008. Phylogenetic relationships and biogeography of the Japanese clawed salamander, *Onychodactylus japonicus* (Amphibia: Caudata: Hynobiidae), and its congener inferred from the mitochondrial cytochrome b gene. *Molecular Phylogenetics and Evolution*, 49: 249–259.
- 44) Yoshikawa, N., M. Matsui, & K. Nishikawa. 2012. Genetic structure and cryptic diversity of *Onychodactylus japonicus* (Amphibia, Caudata, Hynobiidae) in northeastern Honshu, Japan, as revealed by allozymic analysis. *Zoological Science*, 29: 229–237.
- 45) Yoshikawa, N. & M. Matsui. 2014. Two new salamanders of the genus *Onychodactylus* from eastern Honshu, Japan (Amphibia, Caudata, Hynobiidae). *Zootaxa*, 3866: 53–78.
- 46) 吉川夏彦. 2015. 最近の日本産ハコネサンショウウオ属の分類に関する雑記. *両生類誌*, (27): 1-8.

5 淡水・汽水魚類

1) 概要

茨城県は国内有数の豊かな水域環境を有し、県総面積の約8%を占める水域は大小200を超える河川と複数の海跡湖から構成されている。県央南部から鹿行・県西・県南かけての平野部には、国内最大の流域面積を誇る利根川水系があり、国内第2位の面積を有する湖の霞ヶ浦のほか、牛久沼、菅生沼などもこの水系に含まれる。県央には那珂川水系があり、その最下流部には、関東地方唯一の天然汽水湖でラムサール条約湿地に登録された潤沼が位置する。県北には、奥久慈の山々を水源とする久慈川水系、阿武隈山地を水源とする花貫川水系や大北川水系などの数多くの中小河川があり、太平洋へと直接注いでいる。利根川と那珂川には広大な河口域が存在するほか、茨城県沖の海域では南方からの海流（黒潮）と北方からの海流（親潮）が合わさり、国内屈指の好漁場が形成されている。

この恵まれた水域環境を反映し、現在までに本県の河川や湖沼で確認された汽水・淡水魚類は計126種にも及ぶ。このうち、本県に自然分布する67種を概観すると、次の①～⑥の特徴が挙げられる。① 黒潮と親潮の影響によって、温暖地の通し回遊魚（本県がほぼ北限となるオオウナギ、カワアナゴ、ゴクラクハゼ、ボウズハゼなど）と寒冷地の通し回遊魚（本県がほぼ南限となるカワヤツメ、サケ、ニホンイトヨなど）の両者が確認される。② 関東地方で最も標高の低い場所に生息するニッコウイワナや、全国でも産地の限られたヤマメ無斑型が県北の山間溪流の一部にみられる。③ 県北の中小河川の中下流域には、シロウオやウツセミカジカ、スミウキゴリ、オオヨシノボリなどの通し回遊魚が遡上する。④ 霞ヶ浦を含む利根川下流域は高い魚類多様性を有し、かつてはニホンウナギ、コイ、フナ類、ヤリタナゴやタナゴ、アカヒレタビラ（本県が南限）、ゼニタナゴ、クルメサヨリ、ジュズカケハゼなどの一大産地で、現在でもワカサギやシラウオ、ヌマチチブ（通称ゴロ）などの豊かな漁業資源を有する。⑤ 県内の平野部ではミナミメダカが広く生息するほか、丘陵や台地の清流にはスナヤツメ北方種やアブラハヤ、カマツカ、ホトケドジョウ、シマドジョウ（ヒガシシマドジョウ）、ギバチの姿がみられる。⑥ 潤沼を含む那珂川河口域や利根川河口域には、ニホンウナギ、ニシン湖沼系群（本県が南限）、サッパ、コノシロ、汽水性ハゼ類（マハゼ、エドハゼ、ピリンゴ、ヒモハゼ、マサゴハゼなど）が生息している。

このような地域固有の汽水・淡水魚類相は、昭和期以降、とりわけ1960年代から現在まで続く人間活動の影響によって大きく変化してきた。河川の上流域では、河川改修、森林伐採による土砂流入、堰堤の設置などの影響で、ニッコウイワナやヤマメ（無斑型を含む）、カジカの生息地が減少傾向にある。前2種については、釣り人による採集圧も深刻である。中流域では、河川改修に加えて、生活排水の流入などによる水質汚濁によって、カマツカ、ギバチ、シマドジョウなどの生息地が減少している。下流域から河口域では、堰堤や水門などの河川横断工作物によって、生活史のなかで海と河川を行き来するカワヤツメ、ニホンウナギ、サケ、サクラマス、アユ、ニホンイトヨ、クルメサヨリ、ウツセミカジカ、シロウオ、ボウズハゼ、ゴクラクハゼ、オオヨシノボリなどの回遊が阻害されている可能性がある。さらに、河口堰の設置や流路改修による塩分の変化、開発による塩性湿地や干潟の消失によって、汽水性ハゼ類（エドハゼやヒモハゼ、ピリンゴ、マサゴハゼなど）の生息地が減少している。湖沼やため池では、埋立てや護岸工事などによって、キンブナやジュズカケハゼなどの生息地が奪われている。湖沼やその周辺の河川・水路に生息するゼニタナゴ、アカヒレタビラ、タナゴ、ヤリタナゴなどの在来タナゴ類については、水質汚濁や湖沼・河川・水路の改修とそれらに伴う産卵母貝の減少、観賞魚業者や愛好者の採集圧によって、良好な生息地が激減している。丘陵地や雑木林の開発で湧水地やそこから流れ出す細流が消滅したことで、アブラハヤやホトケドジョウ、スナヤツメ北方種の生息地が減少している。水田地帯では、圃場整備による乾田化や水路改修、パイプライン化などによって、ミナミメダカの生息地が減少傾向にある。

これらの人為的な環境改変による生息地の劣化・消失に追い打ちをかけているのが、他地域や外国から持ち込まれた外来種による影響である。特定外来生物で北アメリカ原産の魚食性外来魚であるオオクチバスとブルーギルは県内各地の湖沼やため池で、コクチバスは那珂川水系・利根川水系の一部で、チャンネルキャットフィッシュは霞ヶ浦を含む利根川水系で個体数が多く、在来生物群集や水産業に甚

大な被害をもたらしている。琵琶湖産のコアユに混入して放流されたハス、ワタカ、スゴモロコなどは主に利根川水系に、また、カワムツ、ヌマムツ、オイカワ、タモロコは県内各地の河川や水路に定着し個体数も多い。中国大陸原産のオオタナゴ、タイリクバラタナゴのほか、琵琶湖産カネヒラ、他地域産のヤリタナゴなども分布が拡大しており、特に在来タナゴ類への影響が懸念される。他地域産のイワナやヤマメの釣り人による放流、他地域産や飼育品種のメダカの放流も、県内の在来個体群の遺伝的攪乱につながっている。ごく最近でも、久慈川では北海道産フクドジョウの増加、霞ヶ浦では中国大陸原産のコウライギギの侵入などが確認されている。

○選定基準および方法

茨城県版の魚類のレッドリストを見直すに当たり、評価の対象としては、県内の淡水域に自然分布する種や亜種という従来の条件に加えて、環境省（2015）と同様に、汽水域に生息するものも含めることにした。そのため、まず、県内の淡水域から汽水域で確実な採集記録があるすべての淡水・汽水魚類を、既存文献の調査と専門家へのヒアリングによってリストアップしたところ、2015年3月現在までに県内から計126種が記録されていることが判明した。この中から他地域や外国から持ち込まれた外来種59種を除いた67種を、評価対象種リストとした。

淡水・汽水魚類レッドリストの見直し作業では、評価対象種リストに含まれたすべての種について生息状況等に関する情報〔原則的に学术论文や報告書、国や県の統計資料などの公表物、博物館（国立科学博物館、ミュージアムパーク茨城県自然博物館、水戸市立博物館、東京大学総合資料館など）の収蔵標本データ、分科会委員や執筆者・調査協力者による現地調査の未公表データ〕を収集・整理した。それらの情報に基づいて評価対象種を淡水・汽水魚類分科会で評価し、カテゴリーの各ランクまたはランク外に判定した。各種のランクの判定は、茨城県版レッドリストの共通評価基準に加え、環境省レッドリストのカテゴリー（ランク）と判定基準（環境省、2015）に準じて、漁獲統計がある種（ニホンウナギとニシン湖沼系群のみ）については漁獲量データに基づき、また、それ以外の種では再生産していると考えられる生息水域（良好な生息地）の数や規模とそれらの変化に基づいて行った。

○評価結果の概要

今回の見直し作業の結果、県版レッドリストに選定された淡水・汽水魚類は、前回（平成12年）の茨城県版レッドデータブックの17種からほぼ倍増し、計33種となった。絶滅の危機に瀕している種（絶滅危惧IA類、IB類）には、前回の掲載種であるゼニタナゴ、ニッコウイワナ、ヤマメ無斑型、タナゴ、アカヒレタビラに加えて、汽水域に生息するニシン湖沼系群、マサゴハゼ、ゴクラクハゼも新たに追加された。これら8種については、この15年間だけでも生息状況が悪化の一途を辿っており、絶滅の危険性が急速に高まっている。

今回の見直し作業では、評価の方法やカテゴリー区分の変更があったため、前回のランクと厳密には比較しにくい種もあった。例えば、前回は危急種とされたカワヤツメと降海型イトヨ（Higuchi et al., 2014がニホンイトヨ *Gasterosteus nipponicus* として新種記載）および希少種とされたボウズハゼとカワアナゴは、今回は新設されたカテゴリーの「情報不足」に移行された。これら4種については、1960年代から現在まで稀にしか生息が確認されず、県内で継続的に生息し再生産していると判断される水域が見つからない。さらに、本県が南限または北限に近いため無効分散の可能性もある。一方で、これら4種の希少性は高く、県内での再生産を否定する科学的根拠もない。したがって、現時点ではカテゴリーを評価するに足る情報が蓄積されていないが、今後とも情報の収集に努めるとともに、予防的見地からは生息地を保全すべきであると考えられ、ランク外ではなく情報不足に選定された。

今回新たに選定された16種には、かつては河川や湖沼の普通種であったが近年は減少傾向が認められるもの（ニホンウナギ、シマドジョウ、キンブナ、カジカ、ジュズカケハゼ）、評価対象種の範囲を主に汽水域に生息する魚類にまで広げたことに伴うはじめての評価で危機的と判断されたもの（上述のニシン湖沼系群、マサゴハゼ、ゴクラクハゼのほか、クルメサヨリ、ヒモハゼ、ミミズハゼ、イド

ミミズハゼ、エドハゼ、ビリンゴ)、最近になって県内から生息が確認されたもの(ミヤコタナゴ、ミツバヤツメ)が含まれている。

これらのなかで特に注目されるのは、いま、国内外で絶滅危惧種として認知されているニホンウナギである。かつて茨城県といえば天然ウナギの主産地であり、例えば、1960年代に霞ヶ浦を含む利根川水系では国内の天然ウナギの約3分の1が漁獲されていた。しかしながら、1970年代に入り、利根川河口堰や常陸川水門が完全に閉鎖され、人工護岸化が進む中で漁獲量は急減し、その後は現在までゆるやかな減少傾向が続いている。ただし、県内では天然ウナギを漁獲する漁業者自体が減少している実状があることに加え、中小河川や湖沼にはいまだに広く分布しており、久慈川や潤沼など複数の水域では必ずしも近年の漁獲量の減少傾向が顕著ではないことも知られている。したがって、現時点では県内でのニホンウナギの絶滅リスクが急速に高まっているとは判断しにくい。生息地保全や資源管理などの対策を講じないと、近い将来、絶滅危惧種に移行する恐れがあるため、県版レッドリストでは準絶滅危惧種に選定した。

(加納光樹・増子勝男・稲葉 修・諸澤崇裕)

[文献 茨城県, 2000; 環境省, 2015]

2) 対象種の解説

カテゴリ別に分類した33種(絶滅危惧26種、情報不足7種)について、以下に解説する。

選定理由 ①②③④ 湖沼では1960年代前半まで産卵のために来遊した成魚が大量に漁獲されていた。しかし、1970年代には減少傾向に変わり、1990年代には極めて低い資源状態になった。確実な標本の記録は2005年が最後だが、現在でも極めて稀に捕獲されるという漁業者からの聞き取り情報もある。

分布状況 北海道サロマ湖・風蓮湖・湧洞沼、青森県尾駱沼、宮城県万石浦、茨城県湖沼など。

形態及び生態 体は細長く側扁し、銀白色である。腹鰭の前後に一連の稜鱗がある。えら孔後縁に肉質の突起がない。産卵期に群れで海域から汽水湖沼に来遊し、水生植物帯で産卵する。仔稚魚は湖沼で成育し、成長するにつれて海域へと散逸する。

近似種 近似種はいない。

生息地 湖沼とその周辺の汽水域から海域に生息している。

生存の危機 湖沼のニシンの減少要因として、干拓事業や水質汚濁による産卵場および成育場の劣化・消失、産卵期の成魚や周辺海域での当歳魚の乱獲、海水温の上昇などが挙げられているが、実際にどの要因が大きく関与したのかはよくわかっていない。

特記事項 汽水域に生息する魚種のため、今回はじめて評価対象にされた。利根川河口域では1960年代（河口堰設置前）まで複数の採集記録がある。湖沼では1990年代に万石浦系群の種苗が放流されたことがある。

執筆(協力者) 加納光樹・金子誠也(猿渡敏郎)

文献 5), 6), 25), 31), 44), 62)



1962年に湖沼で採集
水戸市立博物館所蔵標本(加納光樹)

茨城県2016 ●●●●● 絶滅危惧I A類 ●

茨城県2000 対象外

環境省2014 絶滅のおそれのある地域個体群

選定理由 ①②③④ 2000(平成12)年の霞ヶ浦流入河川での採集記録を最後に、県内で野生個体の生息は確認されておらず、絶滅の恐れが極めて高まっている。

分布状況 日本固有種。神奈川県・新潟県以北の本州(青森県を除く)。

形態及び生態 体は側扁し、体側の縦列鱗数は50以上で、日本産タナゴ類で最も多い。口ひげはない。湖沼やため池など主に止水域に生息する。産卵母魚として、主にドブガイ類、カラスガイ、イシガイを利用する。

近似種 他のタナゴ類に比べ、鱗が細かいことで識別できる。

生息地 かつて霞ヶ浦、湖沼、千波湖、利根川水系などに普通に生息していたが、1990年代までに激減し、現在では自然環境下での生息が確認できなくなっている。

生存の危機 水質汚濁や湖沼・河川・水路の改修とそれらに伴う二枚貝の減少によって、生息地が劣化・消失してきた。さらに、外来魚による捕食影響、観賞魚業者や愛好者の採集圧などが追い打ちをかけた可能性もある。

特記事項 琵琶湖博物館で霞ヶ浦産の集団が系統保存されていた。その一部が2007年に県内に里帰りし、閉鎖水域で飼育されている。

執筆(協力者) 諸澤崇裕(萩原富司)

文献 9), 41), 48)



茨城県産飼育個体(諸澤崇裕)

茨城県2016 ●●●●● 絶滅危惧I A類 ●

茨城県2000 ●●●●● 絶滅危惧種 ●

環境省2014 ●●●●● 絶滅危惧I A類 ●

選定理由 ①②③④⑥ 本県の北部山間に生息するが、1990年代以降、密漁や養殖イワナの放流による交雑、ヤマメ放流による種間競争の影響等で激減した。さらに森林伐採や林道工事など開発の影響で生息環境が劣化している。ごく近い将来における絶滅の恐れが極めて高い。

分布状況 山梨県富士川・鳥取県日野川以北の本州各地。

形態及び生態 体側に直径が瞳孔長より小さな白色斑点が散在し、全長16cm以上の個体では白色斑点と同大のごく薄い橙色着色斑点が主に側線より下部にみられる。産卵期には、側線下部を中心に直径が瞳孔長より小さく、発色がより強い橙色着色斑点が多数、浮き出るよう出現する。背部には顕著な虫喰い模様がみられ、これは遺伝的に固定していると思われる。

近似種 県内に放流されている養殖イワナは、体側に瞳孔長と同大かそれより大きな白色斑点がある。産卵期の有色斑点は現れないか発色が弱い橙色。背部の虫喰い模様は顕著でない。

生息地 久慈川水系里川と大北川水系の一部の支流に生息（阿武隈高地のもっとも南の生息地）。各生息地とも連瀑帯上流の隔離された小さな個体群である。生息地の標高は500～750m前後で、関東地方のイワナ生息地としては標高が最も低い。夏期水温は16℃以下。

生存の危機 山林伐採や開発によるシルトの流入や水温上昇、産卵環境の悪化、養殖イワナの放流による交雑、ヤマメ放流による種間競争、密漁により、多くの生息地で個体数が激減した。

特記事項 常陸太田市の個体群は、市指定の天然記念物であり、一部の河川は内水面漁場管理委員会指定の禁漁区に指定されており、無許可での捕獲は禁止されている。

執筆者(協力者) 稲葉 修(丸山 隆・斉藤裕也)

文献 14), 19), 20)



茨城県北部(稲葉 修)

茨城県2016 ●●●●● 絶滅危惧ⅠA類 ●●●●●

茨城県2000 ●●●●● 絶滅危惧種 ●●●●●

環境省2014 ●●●●● 情報不足 ●●●●●

選定理由 ①③⑥ かつて、北部山間の1河川の上流域部の、ごく限られた区間にわずかに野生個体が生息していたが、最近ではほとんど生息が確認されず、極めて危機的な状況が続いている。

分布状況 ヤマメ無斑型は茨城県と神奈川県に局所的に分布。ヤマメ有斑型・サクラマスは北海道、静岡県・山口県以北の本州、大分県を除く九州；日本海、オホーツク海。

形態及び生態 ヤマメの遺伝的な斑紋突然変異の個体(遺伝的には劣勢遺伝)。体形、計数形質はヤマメ有斑型と同じだが、体側のパーマーク、背部の小黒点を欠く。ただし側線上には、有斑型と同様の薄い紅色線がある。

近似種 別亜種アマゴでも無斑型が報告され、近畿地方以西に局所的に分布する。

生息地 原産地は、県北の1水系の支流だが、近年では、野生個体はほとんど確認されない。生息河川内での出現エリアは上流域のごく限られた区間内、その上下流では確認されなかった。生息区間内では有斑型とともに生息しており、無斑型はごく少なかったとされる。1990年代以降、原産地生息区間の上流側や久慈川水系、利根川水系(筑波山塊)において養殖個体が放流され、時折確認されることがある。

生存の危機 原産地は、森林伐採による土砂の流入やゴミの投棄、河川改修などにより産卵・生息環境が悪化している。さらに、他地域産の有斑型養殖個体の放流も行われている。

特記事項 ヤマメ有斑型については、県内各地に養殖個体が放流され、自然繁殖する野生個体はほとんど残っていないと考えられる。

執筆者(協力者) 稲葉 修(丸山 隆・斉藤裕也)

文献 15), 17), 21)



茨城県北部(稲葉 修)

茨城県2016 ●●●●● 絶滅危惧ⅠA類 ●●●●●

茨城県2000 ●●●●● 絶滅危惧種 ●●●●●

環境省2014 ●●●●● 準絶滅危惧 ●●●●●

選定理由 ①②③ 1960年代に利根川感潮域上端に存在した生息地は、1970年代の河口堰閉鎖などにより多大な影響を受けた。その後、1979年まで霞ヶ浦で生息が稀に確認されていた。しかしながら、1980年代以降、県内での確認記録はなく、絶滅の恐れが極めて高まっている。

分布状況 能登半島・茨城県～沖縄県の日本各地；朝鮮半島南部、台湾。

形態及び生態 体は淡褐色で、体側に5～6個のにじんだような黒褐色の縦斑がある。頬にミミズ状の複雑な斑紋がある。生時、体側には青く光る小斑点が散在する。河川下流域～河口域の流れのゆるやかな場所の砂礫底に生息する。両側回遊性だが、ダム湖などに陸封されることもある。

近似種 他のヨシノボリ属魚類とは、頬の斑紋のほか、眼の直後まで鱗があることなどで区別できる。

生息地 かつては霞ヶ浦を含む利根川水系に広く生息していたが、1980年代以降は生息が確認できなくなっている。

生存の危機 河口堰の設置によって生息範囲が縮小し、埋立て・干拓や護岸整備、水質汚濁などによって生息適地が劣化・消失したと考えられる。

特記事項 汽水域にも生息する魚種のため、今回はじめて評価対象にされた。

執筆者(協力者) 加納光樹(篠原現人)

文献 1), 23), 32), 33), 44), 61), 63), 64)



1966年に潮来町地先の北浦で採集
国立科学博物館所蔵標本(金子誠也)

茨城県2016	●●●●●	絶滅危惧I A類
茨城県2000		対象外
環境省2014		対象外

選定理由 ①②③ 1960年代までは利根川河口域の複数地点に普通に生息していたが、1970年代の河口堰閉鎖以降、生息は確認されていない。かつての生息地を現在踏査しても生息適地はないため、絶滅の恐れが極めて高まっている。

分布状況 福島県～沖縄県の日本各地；朝鮮半島、台湾、澎湖諸島。

形態及び生態 吻は丸く、上唇を被う。尾鰭基底の黒色斑はくさび形。第1背びれに大きな黒色斑はない。体長約2.5cm。河口域の塩性湿地や干潟に形成される潮だまりや濠に主に生息する。

近似種 広島県以西に分布する同属のスナゴハゼは、第1背びれ後方に目立つ黒色斑をもつ。

生息地 かつて県内では利根川河口域に普通に生息していたが、1970年代以降、確実な生息記録はない。

生存の危機 埋立て・干拓や護岸整備による塩性湿地と砂泥干潟の劣化・消失、河口堰の設置や河道の浚渫に伴う塩分環境の変化などにより、生息適地となる干潟上の中塩分の潮だまりや濠が消失した。

特記事項 汽水域に生息する魚種のため、今回はじめて評価対象にされた。

執筆者(協力者) 加納光樹(篠原現人)

文献 1), 27), 32), 33), 44), 60)



1966年に神栖町地先の利根川で採集
国立科学博物館所蔵標本(金子誠也)



多摩川 東京都大田区(加納光樹)

茨城県2016	●●●●●	絶滅危惧I A類
茨城県2000		対象外
環境省2014	●●●●●	絶滅危惧II類

選定理由 ①②③④ 霞ヶ浦とその流入河川では 1990 年代以降に顕著な減少傾向が見られ、最近の 10 年間だけでも個体数が 1/10 以下になっていると推定される。生息地の分断化も進行し、確実に確認できる地点は年々減少している。かつては久慈川水系、涸沼などで生息が確認されていたが、近年はごく稀に確認される程度である。

分布状況 日本固有種。関東地方以北の本州太平洋側。

形態及び生態 タナゴ類のなかでは体高が低い。口ひげがある。側線は完全。体側の暗色縦帯は腹鰭起点より前から尾部に入る。肩部にある暗色斑は不明瞭。河川や農業水路、湖沼に生息する。産卵母貝として、主にドブガイ類やカラスガイなど大型の二枚貝を利用する。

近似種 ヤリタナゴやアカヒレタビラと類似するが、体高が低いこと、体側や背鰭の色斑の状態で見分けられる。

生息地 霞ヶ浦を含む利根川水系の一部に局所的に生息しているほか、久慈川水系、涸沼などでもごく稀に生息が確認される。

生存の危機 水質汚濁や河川・水路の改修とそれらに伴う二枚貝の減少によって、生息地が劣化・消失している。さらに、外来魚による捕食影響、観賞魚業者や愛好者の採集圧が追い打ちをかけている可能性もある。

特記事項

執筆者(協力者) 諸澤崇裕 (萩原富司)

文献 9), 19), 35), 37), 48), 62)



霞ヶ浦 稲敷市 (増子勝男)

茨城県 2016 ●●●●● 絶滅危惧 I B 類 ●●

茨城県 2000 ●●●●● 危急種 ●●●●●

環境省 2014 ●●●●● 絶滅危惧 I B 類 ●●

選定理由 ①②③④ 霞ヶ浦とその流入河川では 1990 年代以降に顕著な減少傾向が見られ、最近の 10 年間だけでも個体数が 1/10 以下になっていると推定される。生息地の分断化も進行し、確実に確認できる地点は年々減少している。かつては涸沼で生息が確認されていたが、1960 年代以降は確認されていない。

分布状況 日本固有亜種(種全体として日本固有種)。岩手県、宮城県、栃木県、群馬県、茨城県、千葉県、埼玉県、東京都。

形態及び生態 口ひげがある。側線は完全。体側の暗色縦帯は腹鰭起点より後から尾部に入る。肩部に明瞭な暗色斑がある。オスの臀鰭外縁は赤色。河川や農業水路、湖沼に生息する。産卵母貝として、主にイシガイを利用する。

近似種 ヤリタナゴやタナゴと類似するが、体側や背鰭の色斑の状態で見分けられる。

生息地 霞ヶ浦を含む利根川水系の一部に局所的に生息している。

生存の危機 水質汚濁や河川・水路の改修とそれらに伴う二枚貝の減少によって、生息地が劣化・消失している。さらに、外来魚による捕食影響、観賞魚業者や愛好家の採集圧が追い打ちをかけている可能性もある。

特記事項

執筆者(協力者) 諸澤崇裕 (萩原富司)

文献 9), 30), 37), 48)



霞ヶ浦 稲敷市 (増子勝男)

茨城県 2016 ●●●●● 絶滅危惧 I B 類 ●●

茨城県 2000 ●●●●● 危急種 ●●●●●

環境省 2014 ●●●●● 絶滅危惧 I B 類 ●●

選定理由 ①②③ かつて県内各地の湧水由来の河川や水路に広く生息していたが、1960年代以降の開発行為により生息地の多くが消失した。1990年代以降も、県央から県西部では平地林伐採に伴う湧水地の消滅や河川・水路改修などにより、複数の生息地が消失した。現在、県内に残された生息地は30か所以上あるものの、そのほとんどの水域で開発による危機が迫っている。

分布状況 日本固有種。北海道、中部地方以北の本州

形態及び生態 口は吸盤状。上口歯板は2尖頭。7対のえら孔がある。尾鰭後端は黒くない。成魚は全長15～20cmほど。筋節数は51～66。非寄生性。河川上流域下部から中流域、湧水地に生息し、海域へは回遊しない。

近似種 本州、四国、九州に分布する近似種のスナヤツメ南方種とは、形態形質では明確に区別できず、遺伝子解析が必要。

生息地 那珂川水系と利根川水系（霞ヶ浦流入河川を含む）の一部に局所的に生息しているほか、県北部の中小河川でも生息が確認されている。

生存の危機 森林伐採による河川水温の上昇や湧水地の渇水、河川や素掘り水路の工事に伴う環境の変化、排水流入による水質汚濁などにより、生息地が劣化・消失している。

特記事項 県内各地で採集した個体は、遺伝子解析により北方種に同定されていることから、北方種が広く分布するものと考えられる。ただし、稚アユなど関西方面からの魚類の放流のある河川では、それらに混じった南方種が見つかる可能性がある。

執筆者(協力者) 稲葉 修 (山崎裕治)

文献 17), 35), 37)



北浦流入河川 鉦田市 (増子勝男)



選定理由 ①③④ 霞ヶ浦では確認地点数と個体数ともに1990年代までに激減したが、2005年以降はわずかに増加傾向が認められている。ただし、他地域産の個体の放流事例があり、遺伝的攪乱が生じている恐れもあるため、回復しているとは判断しにくい。霞ヶ浦以外の水域では、個体数が減少しており、生息地の消失も認められる。

分布状況 北海道、宮崎県、鹿児島県、沖縄県を除く日本各地。

形態及び生態 タナゴ類のなかでは体高が低い。口ひげがある。側線は完全。体側に有色の縦帯はない。背鰭軟条間の鰭膜に紡錘形の暗色斑がある。河川や農業水路など主に流水域に生息する。産卵母貝として、主にマツカサガイやヨコハマシジラガイを利用する。

近似種 タナゴやアカヒレタビラとは、体側や背鰭の色斑の状態で識別できる。

生息地 久慈川水系、那珂川水系、洄沼、霞ヶ浦、牛久沼、利根川水系などで生息が確認されている。

生存の危機 水質汚濁や河川・水路の改修とそれらに伴う二枚貝の減少によって、生息地が劣化・消失している。さらに、外来魚による捕食影響、観賞魚業者や愛好家の採集圧などが追い打ちをかけている可能性もある。

特記事項 他地域産の個体の放流事例があり、現在の生息状況が自然分布を反映していない可能性もある。

執筆者(協力者) 諸澤崇裕 (萩原富司)

文献 9), 19), 37), 48)



那珂川水系 城里町 (諸澤崇裕)



選定理由 ①②⑥ 本種の主な生息域は人間活動の影響を受けやすい中・下流域であるため、急速に生息範囲が減少している。県央の一部河川の中流域では生息が確認できなくなっている。県北では生息する河川が比較的多く残っているが、いずれの生息地でも河川工作物による断片化が進行し、個体群サイズも小さい。現在、県内に残された生息地は10か所以上あるものの、そのほとんどの水域で開発による危機が迫っている。

分布状況 日本固有種。青森県～和歌山県の本州と四国の太平洋側、琵琶湖とその流入河川。

形態及び生態 最大全長17cmで、カジカと同様に丸みを帯びた大きい頭部とやや側扁した体幹をもつ。眼から鰓蓋に向かう2本の暗色帯がある。胸鰭条数は13～17でモードは16である。河川中流域～下流域に生息し、下流域の瀬の河床浮石下部の間隙に雄が構えた産卵床に雌が卵（直径約1.3～2mm）を産み付ける。孵化した仔魚は流下し、海域での約1ヵ月間の浮遊生活を経て着底し、稚魚は春以降に河川に遡上する両側回遊型の生活様式をもつ（小卵型）。河川では水生昆虫や甲殻類などの底生小動物を主食とする。琵琶湖の個体群は小卵型の亜種として位置づけられる。

近似種 カジカとは、産着卵の直径、胸鰭条数、眼から鰓蓋に向かう2本の暗色帯の有無などによって識別できる。

生息地 那珂川、久慈川、鮎川、宮田川、東連津川、十王川、花貫川、塩田川、大北川、里根川などに生息する。

生存の危機 両側回遊型の生活様式をもつため、河川工作物による河川と海域との移動阻害が、生息場所や産卵場所の減少をもたらしている。

特記事項 県北では比較的生息状況は良好だが、他地域由来個体の放流履歴情報があるため、遺伝的集団構造解析が必要。

執筆者(協力者) 栗田孝晴

文献 4), 8), 29), 35), 43), 66), 68)



那珂川水系（金子誠也）



選定理由 ①② かつては県内の各河川で成魚の遡上がみられた。しかしながら、河川下流域の産卵場環境の劣化や消失が相次ぎ、現在では安定的に成魚の遡上が確認できる河川は県北部の一部に残されているのみで、合計で10か所に満たない。

分布状況 北海道～鹿児島県；朝鮮半島。

形態及び生態 頭部は小さく、体はやや側扁し細長い。背鰭は1基。生時、体は半透明。春に水がきれいな河川の下流域の砂礫底で産卵する。孵化仔魚は流下し、その後の約10ヵ月間を沿岸海域で過ごす。翌春に成魚が産卵のために河川を遡上する。寿命は1年。

近似種 体形や体色、胸鰭軟条数などにより他のハゼ科魚類と区別できる。

生息地 利根川、那珂川、久慈川、十王川、大北川でごく少数の成魚が確認されている。県北の沿岸海域では仔稚魚も採集されている。日立市内の宮田川などでは鉱山からの排水の影響などにより生息地が消失した。

生存の危機 河川改修による底質環境の変化や排水流入による水質汚濁により、産卵場の環境が劣化・消失している。一部の河川では、堰の設置による遡上阻害が起きている可能性がある。沿岸海域では港湾開発による影響も懸念される。

特記事項

執筆者(協力者) 稲葉 修

文献 17), 19)



久慈川河口沖（荒山和則）



選 定 理 由 ①② 現在、県北の河川の伏流水域に極めて局所的に生息している。本種の生息適地は、河川改修などの開発行為によって減少傾向にあり、将来的な絶滅のリスクが徐々に高まっている。

分 布 状 況 北海道～沖縄県；朝鮮半島，中国，沿海州。

形態及び生態 頭部は小さく、体は円筒形で細長い。背鰭は 1 基。胸鰭上端の軟条は 1 本遊離する。尾鰭縁辺に明瞭な透明帯がない。河口域の淡水がしみ出る場所、河川中流域～下流域の礫や小石の下に生息する。成魚は礫下で産卵する。孵化仔魚は流下し、海域～汽水域で仔稚魚期を過ごす。

近 似 種 体型がよく似たイソミミズハゼは、尾鰭縁辺に明瞭な透明帯があることで区別できる。

生 息 地 那珂川、久慈川、十王川、大北川の伏流水域に局所的に生息している。かつて利根川でも生息が確認されていたが、1970 年代の河口堰閉鎖以降の確実な採集記録はない。

生存の危機 河川改修などの開発行為により、生息適地が減少している。一部の河川では、堰の設置による遡上障害が起きている可能性がある。

特 記 事 項

執筆者(協力者) 稲葉 修

文 献 1), 18)



ひたちなか市の海岸 (稲葉 修)

茨城県 2016	● ● ● ● ● ● ● ● ● ●	絶滅危惧Ⅱ類	● ● ● ● ● ● ● ● ● ●
茨城県 2000		対象外	
環境省 2014		対象外	

選 定 理 由 ①②③ 県内の 10 か所以上の水域に生息するものの、近年、いずれの水域でも生息範囲が縮小し、個体数も減少している。特に、霞ヶ浦では 1990 年頃までは普通種であったが、現在は流入河川の河口付近や入り江のヨシ帯周辺などでごく稀に確認される程度で、急速に絶滅の危険性が高まってきている。

分 布 状 況 北海道～兵庫県・神奈川県の日本各地；サハリン、ウルップ島

形態及び生態 口は小さく、口の後端は眼の中央下か、それより前方にある。眼上管の開孔はない。メスの婚姻色は、尾鰭以外の各鰭が暗色で、体側に黄色横帯が入る。平野部の湖沼とその周辺の水路、ため池、河川下流域から感潮域上端などの流れの緩やかな抽水植物帯周辺の泥底に主に生息する。水底に定位するだけでなく、表層から中層を群れで遊泳する。ユスリカ類幼虫などの底生動物を主に食べる。産卵期は春で、泥底に掘られた穴の中で産卵する。

近 似 種 体型や体色がよく似たピリングゴは、眼上管の開孔が 3 対あることで識別できる。メスの第 1 背鰭後半部の明瞭な黒色斑は、日本海側の個体群ではあるが、太平洋側の個体群ではない。

生 息 地 霞ヶ浦・北浦を含む利根川水系、酒沼を含む那珂川水系、久慈川、花貫川、大北川、江戸上川で生息が確認されている。

生存の危機 埋立て・干拓や河川・湖沼の護岸整備などにより生息適地が減少している。魚食性外来魚による捕食影響も懸念されている。

特 記 事 項 本州太平洋側の個体群は、日本海側と遺伝的に異なっていることが確認されている。

執筆者(協力者) 金子誠也・加納光樹 (渋川浩一)

文 献 1), 2), 17), 19), 27), 28), 36), 37), 49), 50), 61)



酒沼 大洗町 (渋川浩一)

茨城県 2016	● ● ● ● ● ● ● ● ● ●	絶滅危惧Ⅱ類	● ● ● ● ● ● ● ● ● ●
茨城県 2000		対象外	
環境省 2014	● ● ● ● ● ● ● ● ● ●	準絶滅危惧	● ● ● ● ● ● ● ● ● ●

選定理由 ①②③ かつて利根川河口域では広範囲から頻りに採集されていたが、1970年代の河口堰閉鎖によって堰上流側の生息地は消失し、堰下流側でも生息範囲が縮小した。洄沼と茂宮川でも稀に確認される。

分布状況 青森県～沖縄県の日本各地；朝鮮半島，渤海，黄海

形態及び生態 体はミミズのように細長く、体側には暗色の縦帯が走る。吻は上唇を被う。第1背鰭は3棘で、臀鰭起部は第2背鰭起部より遥かに後方にある。第2背鰭基底長は臀鰭基底長より遥かに長い。河川河口域や汽水湖の砂泥底に生息する。アナジャコ類などの甲殻類の巣穴を産卵場所や隠れ家として利用する。

近似種 近似種はいない。

生息地 利根川河口域と洄沼，茂宮川の狭い範囲に局所的に生息している。

生存の危機 埋立て・干拓や護岸整備による砂泥干潟の消失，河口堰設置や河道の浚渫に伴う塩分環境の変化などにより，生息適地が減少している。

特記事項 汽水域に生息する魚種のため，今回はじめて評価対象にされた。

執筆者(協力者) 加納光樹・金子誠也・碓井星二

文献 1), 24), 27), 32), 44), 62)



茂宮川 日立市 (金子誠也)



選定理由 ①②④ 県内主要河川・湖沼における天然ウナギの漁獲量の減少率は、過去12～45年(3世代)で25～93%であった。過去45年の漁獲量の高い減少率には1970年代の利根川河口堰や常陸川水門の閉鎖による影響が関わっている。直近10年程度の漁獲量に大きな減少は認められず、いまだに利根川河口域や洄沼などでは近隣他県と比べて多い。県内の多くの中小河川にも生息しているが、生息数に減少傾向は認められる。以上のことから、生息地保全や資源管理などの対策を講じないと、近い将来、絶滅危惧種に移行する恐れがある。

分布状況 北海道中部以南の日本各地；朝鮮半島，台湾，中国，ベトナム，ルソン島など。

形態及び生態 体は細長い円筒形で、腹鰭はない。体の背方は暗色，腹方は白色で、まだら状の斑紋はない。脊椎骨数は112～119。河川の中流域から河口域，湖沼，内湾などに生息する。成魚はマリアナ海嶺の海山付近で産卵する。仔魚は黒潮に乗って移動し，シラスウナギになると接岸して一部が河川へと遡上する。夜行性で，河川では甲殻類，水生昆虫，貝類，魚類などを食べる。

近似種 利根川水系で稀に見つかるオオウナギは，体にまだら状の斑紋があり，脊椎骨数が少ないことで識別できる。

生息地 霞ヶ浦，洄沼，利根川，那珂川，久慈川などの県内主要河川・湖沼のほか，県内各地の中小河川に生息している。

生存の危機 河川中流域から河口域への堰堤設置による遡上阻害，河川改修により河岸の穴や河床の浮き石などの隠れ家が減少したこと，河口付近でのシラスウナギの乱獲，河川や湖沼での未成魚や成魚の乱獲などにより，生息数が減少傾向にある。なお，日本沿岸へのシラスウナギ加入量の減少には，気候変動や海流の変化なども関わっていると考えられている。

特記事項 IUCN(国際自然保護連合)のレッドリストで絶滅危惧ⅠB類に選定されている。漁獲量データは，環境省(2013)の方法で解析した。

執筆者(協力者) 加納光樹・増子勝男・稲葉 修・諸澤崇裕

文献 26), 27), 28), 55), 58), 59)



霞ヶ浦 稲敷市 (増子勝男)



選定理由 ①② 県内各地に生息しており、現時点での絶滅の危険性は低いが、1960年代と最近10年間の調査結果を比較すると、生息地数と個体数に減少傾向が認められる。

分布状況 日本固有亜種。岩手県～千葉県の太平洋側。

形態及び生態 フナ類のなかでは体高が低い。背鰭分枝軟条数は11～14、第1鰓弓の鰓耙数は30～38。体は黄褐色～赤褐色で、体側の鱗の外縁が明るく縁取られる。河川の中・下流域の緩流部とそれに続く農業水路、池沼などに生息する。岸近くの水生植物が繁茂した場所で産卵する。

近似種 県内に生息するギンブナとゲンゴロウブナは、体高が高く、背鰭分枝軟条数や鰓耙数がより多いことで識別できる。

生息地 霞ヶ浦、涸沼、菅生沼などとその周辺の水路や小河川、利根川、十王川、大北川、花貫川などの下流域で生息が確認されている。

生存の危機 水質汚濁や湖沼・河川・水路の改修によって、産卵場や成育場である水生植物帯が減少している。さらに、外来魚による捕食の可能性も示唆されている。

特記事項 他地域産のフナ類の放流による遺伝的攪乱が生じている可能性もある。

執筆者(協力者) 増子勝男

文献 10), 19), 25), 28), 37), 38), 56)



那珂川水系 水戸市(稲葉 修)

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県 2000		対象外	
環境省 2014	● ●	絶滅危惧Ⅱ類	● ● ● ●

選定理由 ①②⑤ 1960年代以降、県内各地では河川改修や排水流入による水質汚濁、堰の設置などによって多くの生息地が消失してきた。2000年代に入っても開発行為により複数の生息地が消失の危機にさらされている。現在、県南と県西では断片化し縮小した生息地がわずかに見られるのみだが、県北と県央では良好な生息地が30か所以上残存している。

分布状況 山口県西部を除く本州、四国。

形態及び生態 体は円筒形で細長い。口ひげは3対。体側中央に円形または楕円形の黒色斑紋が点列状に縦走する。背鰭前の背部に輪郭の不明瞭な暗色斑が1列に並ぶ。オスの胸鰭にはくちばし状の骨質盤がある。河川中流域や湧水水源の細流などの砂底から砂礫底に生息する。

近似種 他のシマドジョウ属の種とは、背部の斑紋、胸鰭骨質盤の形などで区別可能。

生息地 県内各地の河川中流域に広く生息している。

生存の危機 河川改修による底質環境の悪化、生活排水流入による水質汚濁、個体群を分断する堰の設置などにより、生息地が劣化・消失している。

特記事項 最新の分類では、県内の個体群はヒガシシマドジョウに該当する。

執筆者(協力者) 稲葉 修(宮崎淳一)

文献 17), 19), 22), 28), 37), 46), 54)



東連津川 日立市(稲葉 修)

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県 2000		対象外	
環境省 2014		対象外	

選 定 理 由 ①②③⑤⑥ 県全体では生息地数が減少傾向にあるものの、県内各地の農業水路や水田、池沼、公園池などで普通に生息が確認されている。その一方で、遺伝子解析を行うと、国内の他地域産や飼育品種の放流による外来個体群と判明する事例もある。この状況を放置すれば、近い将来、絶滅危惧種へと移行する恐れがある。

分 布 状 況 日本固有種。日本海側では京都府以西の本州、太平洋側では岩手県以南の本州、四国、九州、沖縄県など。

形 態 及 び 生 態 背鰭は基底が短く、尾部後方にある。臀鰭は基底が長い。尾鰭後縁は角張る。尾部の黒色素胞は、明瞭な網目模様を形成せず、雄の背鰭の欠刻は深い。平野部の河川、池沼、水田、農業水路、塩性湿地などに生息する。水生植物が繁茂する場所に多くみられる。

近 似 種 兵庫県以北の本州日本海側に分布するキタノメダカは、尾部の黒色素胞が濃く網目模様を形成し、網目交点に染み状斑があること、雄の背鰭の欠刻が浅いことで識別できる。

生 息 地 県内各地の湖沼や河川、ため池、農業水路、公園池などに生息する。

生 存 の 危 機 圃場整備による乾田化、湖沼・河川・水路の人工護岸化、排水流入による水質汚濁、魚食性外来魚による捕食影響などにより、生息環境が劣化・消失している。他地域産や飼育品種の放流による遺伝的攪乱などの影響も懸念される。

特 記 事 項 県内全域で遺伝子解析を実施し、保全対象となる在来個体群を把握することが急務である。

執筆者(協力者) 増子勝男(福井正人)

文 献 10), 19), 25), 27), 28), 37), 39), 51)



湖沼 大洗町(加納光樹)

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	●	●	●	●
茨城県 2000	●	希少種	●	●	●	●
環境省 2014	●	絶滅危惧Ⅱ類	●	●	●	●

選 定 理 由 ①②③ 1960年代半ばまでは霞ヶ浦をはじめとする県内水域で年間100トン以上が漁獲されていたが、その後は減少傾向にあり、現在でも漁獲はされるが、自家消費される程度の量である。霞ヶ浦には広範囲に生息するが、産卵場・成育場となる水生植物帯の劣化・消失が続いており、今後、絶滅危惧種へと移行する恐れがある。

分 布 状 況 青森県～山口県の本州と九州北岸・西岸に局所的に分布；朝鮮半島、黄海・渤海～ベトナム北部の東シナ海と南シナ海沿岸、台湾。

形 態 及 び 生 態 体は細長い円筒形で、下あごは長く突出し、頭長よりも長い。下あごの先端は黒い。胸鰭軟条数は10～12。内湾、河川の下流域から河口域、汽水湖などに生息し、淡水域にも来遊する。表層を遊泳する。動物プランクトン、陸上昆虫などを食べる。産卵期は春から夏。抽水植物の茎などに産卵する。仔稚魚は植物帯周辺で成育する。

近 似 種 県内の海域に生息するサヨリは、下あごが頭長よりも短く、下あご先端の下面が朱色であること、胸鰭軟条数が多いことで識別できる。

生 息 地 霞ヶ浦、利根川水系、湖沼、那珂川などに生息する。

生 存 の 危 機 河口堰の設置による回遊阻害、埋立てや干拓、護岸工事に伴う水生植物帯の減少などによって生息環境が劣化・消失している。

特 記 事 項

執筆者(協力者) 碓井星二・加納光樹

文 献 19), 28), 44), 65)



北浦 鹿嶋市(加納光樹)

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	●	●	●	●
茨城県 2000	●	対象外	●	●	●	●
環境省 2014	●	準絶滅危惧	●	●	●	●

選定理由 ①②③ 筑波山塊の個体群は細分化・分断が進行している。県内の那珂川水系の支流の多くでは、過去10年間に生息範囲と個体数が著しく減少している。

分布状況 日本固有種。本州（和歌山県を除く）、四国、九州（宮崎県・鹿児島県を除く）。

形態及び生態 最大全長15cm。丸みを帯びた大きい頭部とやや側扁した体幹をもつ。頭部に顕著な暗色帯がない。前鰓蓋骨の後縁に1対の小棘がある。胸鰭条数は12～14でモードは13である。河川上流域～中流域に生息する。直径約3mmの卵を産み、河川で生活史を完結する河川陸封型の生活様式をもつ（大卵型）。主に夜間に活動し、カゲロウ目、トビケラ目、双翅目幼虫などの水生昆虫を主食とする。繁殖期に成熟雄が瀬の河床の浮石下部の間隙を繁殖なわばり（産卵床）として占拠し、複数の雌と配偶した後、孵化まで雄が産卵床内で卵を単独で保護する。

近似種 ウツセミカジカとは、産着卵の直径、胸鰭条数、眼から鰓蓋に向かう2本の暗色帯の有無などによって識別できる。

生息地 利根川水系（筑波山）、那珂川水系、久慈川水系、県北部の中小河川の上流域に生息する。

生存の危機 河川工作物による流程生息分布の分断や護岸工事に伴う生息環境の単純化、土砂流入による産卵床の礫下空間の埋没などにより、生息範囲や個体数が減少している。

特記事項 那珂川、久慈川水系では数か所、他水系からの移植地があり、今後、遺伝的集団構造解析が必要である。

執筆者(協力者) 栗田孝晴

文献 29), 35), 42), 43), 57), 66)



恋瀬川 石岡市（増子勝男）



選定理由 ①②③ 県北の河川上流域～中流域の狭い範囲に生息する。現時点で絶滅の危険性は低いが、存続基盤が不安定であり、堰の設置などによりいくつかの生息地の消失や分断が生じている。

分布状況 青森県～九州南部の日本海・東シナ海側、本州・四国の瀬戸内海側、宮城県～九州南部の太平洋側。

形態及び生態 ヨシノボリ類の中では大型種で、全長約10cm。尾鰭基底に太い明瞭な暗色横帯、胸鰭基底に顕著な黒色斑がある。頬には斑紋はない。河川上流域から中流域に生息する。両側回遊性。

近似種 県内河川の他のヨシノボリ類とは、尾鰭・胸鰭基底、頬の斑紋などによって区別できる。

生息地 那珂川、久慈川、里川、十王川、大北川など県北の河川上流域～中流域に生息している。

生存の危機 河川改修などの開発行為や堰の設置などによって、生息地の消失や分断などが生じている。

特記事項

執筆者(協力者) 増子勝男

文献 17), 19), 29), 35)



十王川 日立市（増子勝男）



選定理由 ①②③ 利根川では1970年代の河口堰閉鎖以降も、堰下流側には広範囲に生息しているが、堰上流側の生息地は消失した。涸沼から下涸沼川では稀に確認される程度である。今後、開発により生息地が劣化すれば、絶滅危惧種へと移行する恐れがある。

分布状況 宮城県～宮崎県の日本各地；ロシア、朝鮮半島、中国。

形態及び生態 口は大きく、口の後端は眼の後端を越える。体は細長い。頭部の断面は円形に近い。体側には、薄い色の横斑が並ぶ。河川河口域や汽水湖の砂泥底に生息する。アナジャコ類などの甲殻類の巣穴を産卵場所や隠れ家として利用する。

近似種 体形や体色がよく似たチクゼンハゼは、下顎下面に1対のひげ状突起があり、体側の暗色横斑が濃いことなどで識別できる。

生息地 利根川河口域と涸沼、茂宮川に生息する。

生存の危機 埋立て・干拓や護岸整備による砂泥干潟の消失、河口堰の設置や河道の浚渫に伴う塩分環境の変化などにより、生息適地が減少している。

特記事項 汽水域に生息する魚種のため、今回はじめて評価対象にされた。

執筆者(協力者) 加納光樹・金子誠也・碓井星二

文献 1), 24), 27), 32), 44), 52)



涸沼 大洗町 (金子誠也)

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県 2000		対象外	
環境省 2014	● ●	絶滅危惧Ⅱ類	● ● ● ●

選定理由 ①②③ 利根川では1970年代の河口堰閉鎖以降も、堰下流側には広範囲に生息しているが、堰上流側の生息地は消失した。涸沼から那珂川河口域では稀に確認される程度である。今後、開発により生息地が劣化すれば、絶滅危惧種へと移行する恐れがある。

分布状況 北海道～鹿児島県の日本各地；朝鮮半島、中国、サハリンなど。

形態及び生態 口は小さく、口の後端は眼の中央下か、それより前方にある。眼上管の開孔は3対。婚姻色の出現したメスでは、尾鰭以外の各鰭が黒く、体側に明瞭な黄色横帯がない。河川河口域や汽水湖に生息する。水底に定位するだけでなく、表層から中層を群れで遊泳する。底生動物のほか動物プランクトンもよく摂餌する。

近似種 体型や体色がよく似たジュズカケハゼは、眼上管の開孔がないことで識別できる。

生息地 利根川河口域、涸沼から那珂川河口域に生息するほか、花貫川、大北川、小石川、里根川でも生息が確認されている。

生存の危機 埋立て・干拓や護岸整備による塩性湿地と砂泥干潟の消失、河口堰の設置や河道の浚渫に伴う塩分環境の変化などにより、生息適地が減少している。

特記事項 汽水域に生息する魚種のため、今回はじめて評価対象にされた。

執筆者(協力者) 加納光樹・金子誠也・碓井星二

文献 1), 17), 25), 32), 44), 62)



多摩川 東京都大田区 (加納光樹)

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県 2000		対象外	
環境省 2014		対象外	

選定理由 ①③ 本県が分布の南限に近く、1960年代から県内水域で稀に成魚の採集記録はあるものの、再生産への寄与の有無は不明である。県内水域では希少性が高く、一部で開発行為による生息環境の劣化も生じている恐れがあるが、現時点ではカテゴリーを評価するに足る情報が蓄積されていない。

分布状況 北海道、茨城県・島根県以北の本州；スカンジナビア半島東部～朝鮮半島、アラスカ。

形態及び生態 口は吸盤状。上口歯板は2尖頭。7対のえら孔がある。第2背鰭先端と尾鰭先端は黒い。筋節数は通常65～77。成魚は全長60cmほど。成魚は海域から河川中・下流域へと遡上し産卵する。幼生は河川の砂泥底で3～4年かけて成長した後、再び海域へと下る。海域では大型魚類に寄生して過ごす。

近似種 近似種のシベリヤヤツメは、第2背鰭先端が黒くない。

生息地 1960年代以降、利根川、那珂川、久慈川、大北川の中・下流域と涸沼や霞ヶ浦、菅生沼で成魚の採集記録があるが、個体数は極めて少ない。幼生の確認も稀である。

生存の危機 河川改修による底質環境の変化や排水流入による水質汚濁により、生息適地が消失してきた可能性がある。河川中流域～河口域への堰の設置により、遡上障害が生じている可能性もある。

特記事項 見直しに伴い、情報不足①に移行したが、本種の希少性に特段の変化はない。

執筆者(協力者) 稲葉 修 (山崎裕治)

文献 17), 19), 51), 67)



那珂川水系 ひたちなか市 (渡辺重行)

茨城県 2016 情報不足①注目種 ●●●●●

茨城県 2000 ●●●●● 危急種 ●●●●●

環境省 2014 ●●●●● 絶滅危惧Ⅱ類 ●●●●●

選定理由 ①③ 本種の自然繁殖地は、国内で唯一、栃木県的那珂川水系で確認されている。茨城県を回遊時に通過していく可能性が高いが、県内での採集記録は1例のみで、現時点ではカテゴリーを評価するための情報が不足している。

分布状況 北海道、栃木県、高知県；アリューシャン列島～カリフォルニア州南部。

形態及び生態 口は吸盤状。上口歯板は3尖頭。7対のえら孔がある。筋節数は通常60～71。成魚は全長60cmほど。成魚は海域から河川中・下流域、湖沼などの淡水域へと遡上し産卵する。幼生は淡水域で数年間過ごした後に海域へと下る。

近似種 日本産の他のヤツメウナギ類は、上口歯板が2尖頭である。

生息地 2010年4月に涸沼で幼生1個体の採集記録があるのみである。栃木県内的那珂川水系や鬼怒川に生息地があり、その下流側に位置する茨城県を通過して海域へ回遊している可能性もある。

生存の危機 河川改修による底質環境の変化や排水流入による水質汚濁化により、生息適地が消失してきた可能性がある。河川中流域～河口域への堰の設置による遡上障害が生じている可能性もある。

特記事項 県内での生息確認に伴い、今回はじめて評価対象にされた。

執筆者(協力者) 稲葉 修 (山崎裕治・渡辺敬晴・田中宏典)

文献 7), 27)



2010年4月23日に涸沼で採集
アクアワールド茨城県大洗水族館所蔵標本
(加納光樹)

茨城県 2016 情報不足①注目種 ●●●●●

茨城県 2000 ●●●●● 対象外 ●●●●●

環境省 2014 絶滅のおそれのある地域個体群 ●●●●●

選定理由 ①②③④ 最近、県内の一部で生息が確認されているが、専門家による調査が開始されたばかりであり、現時点ではカテゴリーを評価するに足る情報が不足している。

分布状況 日本固有種。関東地方。

形態及び生態 タナゴ類のなかでは小型種。口ひげがある。側線は不完全で、胸鰭上方にしか達しない。体側縦帯はない。背鰭軟条間の鰭膜に紡錘形の暗色斑がある。雄の臀鰭外縁は黒色。丘陵地帯や平野部の細流やため池に生息する。産卵母貝として、主にマツカサガイやヨコハマシジラガイ、ドブガイを利用する。

近似種 婚姻色が出ていない時期、ヤリタナゴと類似するが、側線が不完全であることで識別できる。

生息地 大正期に土浦市で採集された標本がある。最近、県内で生息が確認されたが、遺伝的特徴や生息状況の詳細については不明である。

生存の危機 他県の場合と同様に、水質汚濁や細流・水路の改修とそれらに伴う二枚貝の減少によって、生息地が劣化・消失してきた可能性があるが、詳細は不明である。

特記事項 天然記念物で、種の保存法により国内希少野生動植物種にも指定されており、捕獲・飼育等は厳しく規制されている。

執筆者(協力者) 諸澤崇裕・加納光樹・増子勝男・稲葉修

文献 12), 27), 53)



大正期に土浦で採集
東京大学総合研究博物館所蔵標本（増子勝男）



茨城県内で採集（加納光樹）

茨城県 2016 情報不足①注目種 ●●●●●

茨城県 2000 対象外

環境省 2014 ●●●●● 絶滅危惧 I A 類 ●●●●●

選定理由 ①②③ 本県は分布の南限に近く、1950年代から成魚が稀に来遊する記録はあるものの、再生産への寄与の有無は不明である。県内では希少性が高く、一部で開発行為による生息環境の劣化も生じている恐れがあるが、現時点ではカテゴリーを評価するに足る情報が蓄積されていない。

分布状況 日本海側は北海道～九州北部、太平洋側は北海道～千葉県；サハリン、千島列島、朝鮮半島東岸。

形態及び生態 体はやや側扁し、尾柄は細い。体側には鱗板が並び、尾柄部には膜質のキールがある。背鰭棘は3本で、背鰭棘の鰭膜はないか、あっても基部のみで目立たない。背鰭軟条数は通常14。春に成魚は産卵のために海域から河川へと遡上し、流れの緩やかな場所や細流の水草帯周辺で営巣・産卵する。稚魚は産卵場周辺で育成し、2～3cmになると降海する。

近似種 太平洋系降海型イトヨは尾柄部のキールが骨質で、背鰭軟条数は通常12。太平洋系陸封型イトヨは、背鰭棘の鰭膜が棘の先端に及び、降海はしない。

生息地 1950年代から現在まで、利根川と久慈川、関根川の河口域、霞ヶ浦、涸沼で春先に成魚の採集記録があるが、個体数は極めて少なく、稚魚の確認記録も関根川での1例のみである。現時点では毎年継続して生息が確認できる場所は見つかっていない。

生存の危機 河口域での水門や堰の設置による遡上障害、排水の流入による水質汚濁、河川改修に伴う水草帯の消失などによって、生息適地が減少している。

特記事項 見直しに伴い、情報不足①に移行したが、本種の希少性に特段の変化はない。降海型イトヨは初版では *G. aculeatus* としたが、その後 Higuchi et al. (2014) がニホンイトヨ *G. nipponicus* の名称で記載した。

執筆者(協力者) 増子勝男

文献 11), 13), 19), 25), 34), 39), 44), 45), 51), 62), 69)



霞ヶ浦 行方市（荒山和則）

茨城県 2016 情報不足①注目種 ●●●●●

茨城県 2000 ●●●●● 危急種 ●●●●●

環境省 2014 絶滅のおそれのある地域個体群 ●●●●●

選 定 理 由 ① 本県は太平洋側の分布の北限であり、黒潮で輸送された仔魚が河川で成長して成魚になるものの、再生産には寄与していない可能性がある。県内河川では希少性が高く、一部で開発行為による生息環境の劣化も見られるが、現時点ではカテゴリーを評価するに足る情報が蓄積されていない。

分 布 状 況 日本海・東シナ海側では福井県～鹿児島県、太平洋側では茨城県～鹿児島県の日本各地；濟州島、中国銭塘江、広東省汕頭、海南島。

形態及び生態 頭部はやや縦扁し、胴部は円筒形、尾部はやや側扁する。腹鰭は左右に分かれている。頬の横列孔器列が縦列孔器列を横断しない。河川下流域から汽水域に生息する。夜行性で、昼間はテトラポッドや倒木などに隠れている。なお、卵・孵化仔魚が小さく、浮遊期間も長いいため、初期分散は大きいと考えられている。

近 似 種 他のカワアナゴ属魚類は、頬の横列孔器列が縦列孔器列を横断することで識別できる。

生 息 地 利根川本流、小貝川、鬼怒川、霞ヶ浦、那珂川などで、定置網や刺し網で稀に成魚が採集されるのみで、継続的に生息が確認できる河川は見つかっていない。

生存の危機 河川下流域から河口域での護岸工事や堰の設置などによって、生息環境が劣化している可能性がある。

特 記 事 項 見直しに伴い、情報不足①に移行したが、本種の希少性に特段の変化はない。

執筆者(協力者) 増子勝男

文 献 10), 40), 44)



利根川 坂東市 (増子勝男)

茨城県 2016	情報不足①注目種	●●●●●
茨城県 2000	希少種	●●●●●
環境省 2014	対象外	

選 定 理 由 ①②③ 本県は分布の北限に近く、黒潮で輸送された仔魚が河川で成長して成魚になるものの、再生産には寄与していない可能性がある。県内河川では希少性が高く、一部で開発行為による生息環境の劣化も見られるが、現時点ではカテゴリーを評価するに足る情報が蓄積されていない。

分 布 状 況 福島県～沖縄県の日本各地；台湾。

形態及び生態 頭部は丸く、体は円筒形でやや細長い。上唇はぶあつく、3か所に切れ込みがある。オスの成魚の第1背鰭は伸長する。体色は褐色～灰褐色で、10本前後の暗色横帯が入る。河川上流域下部から中流域に生息し、付着藻類を主に食べる。孵化仔魚は流下し、海域で浮遊生活を送る。稚魚になると、再び河川へと遡上する。なお、孵化仔魚が小さく、浮遊期間も長いいため、初期分散は大きいと考えられている。

近 似 種 他のボウズハゼ属魚類とは、頭部の形、上唇の切れ込み、体や鰭の色斑などにより区別できる。

生 息 地 利根川、那珂川、久慈川、鮎川、十王川などで、稀に稚魚または成魚の生息が確認される。しかしながら、継続的に生息が確認できる河川は見つかっていない。

生存の危機 河川改修による底質環境の変化や排水流入による水質汚濁により、生息環境が劣化している。一部の河川では、堰の設置による遡上阻害が起きている可能性がある。

特 記 事 項 見直しに伴い、情報不足①に移行したが、本種の希少性に特段の変化はない。

執筆者(協力者) 稲葉 修

文 献 16), 17), 19)



鮎川 日立市 (稲葉修)

茨城県 2016	情報不足①注目種	●●●●●
茨城県 2000	希少種	●●●●●
環境省 2014	対象外	

選定理由 ①③ カテゴリーを評価するための情報が不足しているが、茨城県内における稀な種であり、新たにレッドリストに掲載された。

分布状況 茨城県～鹿児島県の日本各地に局所的に分布。

形態及び生態 頭部は小さく、体は円筒形で細長い（体高は体長の約10%）。眼は退化して小さい。胸鰭上部に遊離軟条がない。背鰭は1基。総脊椎骨数が35～37本と多い。海岸や河口域の転石下、伏流水域などに生息する。

近似種 他のミミズハゼ属魚類とは、体形や総脊椎骨数の多さ、胸鰭遊離軟条の有無などによって区別できる。

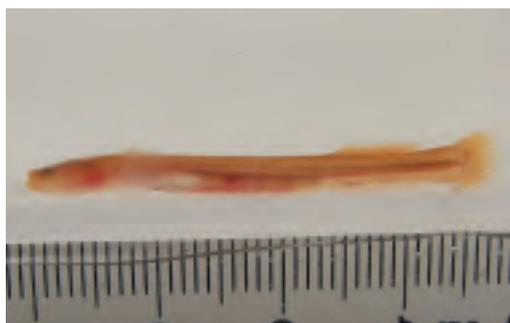
生息地 太平洋側の生息地は本県が北限。2011年に那珂川河口の護岸近くの転石帯で1個体のみが確認されたが、その後、記録が途絶えており、生息状況は不明である。

生存の危機 産地が局限されており、護岸整備などによって生息地が消失するおそれがある。

特記事項 汽水域に生息する魚種のため、今回はじめて評価対象にされた。

執筆者(協力者) 加納光樹 (川口貴光)

文献 1), 27), 32)



那珂川水系 ひたちなか市 (川口貴光)

茨城県 2016 情報不足①注目種 ●●●●●

茨城県 2000 対象外

環境省 2014 準絶滅危惧 ●●●●●

3) 文献一覧

- 1) 明仁・坂本勝一・池田裕二・藍澤正宏. 2013. ハゼ亜目. 中坊徹治 (編)「日本産魚類検索—全種の同定 第3版」, pp. 1347–1608, 2106–2211, 東海大学出版会.
- 2) 荒井和則. 2011. ジュズカケハゼ. 茨城県内水面水産試験場 (編)「いばらき魚類帳」, p. 44, http://www.pref.ibaraki.jp/nourinsuisan/naisuisi/gyoganchu/documents/044_jyuzukakehaze.pdf (2015年11月25日閲覧).
- 3) 荒井和則・松崎慎一郎・増子勝男・萩原富司・諸澤崇裕・加納光樹・渡辺勝敏. 2012. 霞ヶ浦における外来種コウライギギ (ナマズ目 ギギ科)の採集記録と定着のおそれ. 魚類学雑誌, 59: 141–146.
- 4) 藤井亮史・矢部 衛・清水孝昭・金山 勉・尼岡邦夫. 1997. カジカ4型の分類学的検討. 1997年度日本魚類学会年会講演要旨集, p. 26.
- 5) 藤本 武・金子虎寿・矢口正直. 1954. 潤沼産ニシンの生態調査. 茨城県水産試験場試験報告, 昭和25・26年度: 135–142.
- 6) 藤本 武・北浜 仁. 1964. 汽水性水域の水産資源に関する基礎調査—II 茨城県潤沼ニシンの二三の観察. 茨城県水産試験場試験報告, 昭和37年度: 41–56.
- 7) 福富則夫・中村智幸・土居隆秀・武田維倫・尾田紀夫. 2002. 栃木県那珂川におけるミツバヤツメの採捕記録, 産卵床の立地条件および水槽内における産卵. 魚類学雑誌, 49: 53–58.
- 8) 後藤 晃. 1994. カジカ属魚類の繁殖様式と生活史変異. 後藤 晃・塚本勝巳・前川光司 (編)「川と海を回遊する淡水魚—生活史と進化—」, pp. 141–153. 東海大学出版会.
- 9) 萩原富司・浜田篤信・沼沢 篤. 2001. 霞ヶ浦タナゴ調査結果. 霞ヶ浦研究, (10/11): 91–97.
- 10) 浜田篤信・春日清一. 1998. 霞ヶ浦・北浦の魚類. 「茨城県自然博物館第1次総合調査報告書」, pp. 227–235.
- 11) Higuchi, M., H. Sakai & A. Goto. 2014. A new threespine stickleback, *Gasterosteus nipponicus* sp. nov. (Teleostei: Gasterosteidae), from the Japan Sea region. *Ichthyological Research*, 61: 341–351.
- 12) 細谷和海. 2013. コイ科. 中坊徹治 (編)「日本産魚類検索—全種の同定 第3版」, pp. 308–327, 1813–1819, 東海大学出版会.
- 13) 茨城県内水面水産試験場. 2012. 東北地方太平洋沖地震による津波がもたらした北浦における海水魚の採集記録. 茨城県水産試験場内水面支場研究報告, 45: 1–3.
- 14) 茨城県生活環境部. 1995. 茨城県特定動植物分布調査報告書2—茨城県の特定動植物の分布 動物編. 417 pp., 茨城県生活環境部環境政策課.
- 15) 位田俊臣・岡本成司・大川雅登・佐藤陽一. 1989. 無紋ヤマメについて. 水産育種, 6: 34–36.
- 16) 井口恵一朗・阿部信一郎・稲葉 修. 2005. 北限記録を更新しているボウズハゼ. 魚類学雑誌, 52: 159–161.
- 17) 稲葉 修. 1998. 茨城県北部沿岸水系の魚類. 茨城生物, (18): 62–76.
- 18) 稲葉 修. 2004. 茨城県内で確認したミミズハゼ属の魚類. 茨城生物, (24): 19–22.
- 19) 稲葉 修. 2007. 久慈川水系の淡水魚類. 「茨城県自然博物館第4次総合調査報告書」, pp. 279–294, ミュージアムパーク茨城県自然博物館.
- 20) 稲葉 修・丸山 隆・斉藤裕也. 2000. 茨城県におけるイワナ自然個体群の保護の試み. 2000年度日本魚類学会年会講演要旨集, p. 59.
- 21) 稲葉 修・中村 栄・桐原幸一・宮崎淳一. 1996. 茨城県の淡水魚類相. 茨城生物, (17): 30–37.
- 22) 岩見哲夫・宮崎淳一. 1988. 茨城県桜川周辺の淡水魚類相. 筑波の環境科学, (11): 77–84.
- 23) Ishizaki, D., T. Mukai, T. Kikko & T. Yodo. 2016. Contrasting life history patterns of the goby *Rhinogobius similis* in central Japan indicated by otolith Sr:Ca ratios. *Ichthyological Research*, 63: in press.
- 24) 金子誠也・加納光樹. 2015. 潤沼とその周辺河川に生息する魚類. 「茨城県自然博物館総合調査報告書」, 印刷中, ミュージアムパーク茨城県自然博物館.
- 25) 金子誠也・碓井星二・百成 渉・加納光樹・増子勝男・鎌田洗一. 2011. 標本記録に基づく1960年代の茨城県潤沼の魚類相. 日本生物地理学会会報, 66: 173–182.
- 26) 環境省. 2013. 報道発表資料 平成25年2月1日, 第4次レッドリストの公表について (汽水・淡水魚類) (お知らせ). <http://www.env.go.jp/press/press.php?serial=16264> (2015年11月25日閲覧).
- 27) 環境省 (編). 2015. レッドデータブック2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—4 汽水・淡水魚類. 414 pp., ぎょうせい.
- 28) 霞ヶ浦情報センター研究委員会編. 1994. 霞ヶ浦の魚たち. 165 pp. 霞ヶ浦情報センター.
- 29) 川那部浩哉・水野信彦・細谷和海編. 2001. 日本の淡水魚. 720 pp., 山と溪谷社.
- 30) 北村淳一・諸澤崇裕. 2010. 霞ヶ浦流入河川におけるタナゴ亜科魚類の産卵母貝利用. 魚類学雑誌, 57: 149–153.
- 31) 小林時正. 2000. ニシン. 水産庁 (編)「日本の希少な野生水生生物に関するデータブック」, pp. 74–75. 日本水産資源保護協会.
- 32) 国土交通省 河川環境データベース. <http://mizukoku.nilim.go.jp/ksnkankyo> (2015年11月25日閲覧).
- 33) 国立科学博物館魚類研究室 日本産淡水魚類標本データベース. <http://fishcol.kahaku.go.jp/fish/search.html> (2015年11月25日閲覧).
- 34) 増子勝男. 2001. 潤沼および潤沼川の魚類. 「茨城県自然博物館第2次総合調査報告書」, pp. 291–302, ミュージアムパーク茨城県自然博物館.
- 35) 増子勝男. 2004. 茨城県北東地域の淡水魚類. 「茨城県自然博物館第3次総合調査報告書」, pp. 297–306, ミュージアムパーク茨城県自然博物館.
- 36) 増子勝男. 2007. ジュズカケハゼ. 萩原富司・熊谷正裕 (編)「平成調査新・霞ヶ浦の魚たち」, p. 99. 霞ヶ浦市民協会.

- 37) 増子勝男. 2010. 茨城県南西地域の魚類. 茨城県自然博物館総合調査報告書: 茨城県南西部地域を中心とした脊椎動物 (2006-2008), pp. 23-29, ミュージアムパーク茨城県自然博物館.
- 38) Matsuura, K. & R. Arai. 1993. Catalog of the freshwater fish collection in the National Science Museum, Tokyo. Fish specimens deposited in the former Research Institute for Natural Resources (Shigenkagaku Kenkyusho) Part 2, 301 pp., National Science Museum.
- 39) Matsuura, K. & R. Arai. 1994. Catalog of the freshwater fish collection in the National Science Museum, Tokyo. Fish specimens deposited in the former Research Institute for Natural Resources (Shigenkagaku Kenkyusho) Part 3. 335 pp., National Science Museum.
- 40) Matsuura, K. & R. Arai. 1995. Catalog of the freshwater fish collection in the National Science Museum, Tokyo. Fish specimens deposited in the former Research Institute for Natural Resources (Shigenkagaku Kenkyusho) Part 4. 301 pp., National Science Museum.
- 41) 水戸市立博物館編. 1987. 千波湖の自然. 64 pp. 水戸市立博物館.
- 42) 水野信彦・後藤 晃 (編), 1987. 日本の淡水魚類, その分布, 変異, 種分化をめぐって. 244 pp., 東海大学出版会.
- 43) 水野信彦・丹羽 弥. 1961. カジカ *Cottus pollux* Günther の生態的 2 型. 動物学雑誌, 8: 25-33.
- 44) 水資源開発公団・資源科学研究所. 1968. 利根川河口堰建設事業に伴う水産動物に及ぼす影響予測解析調査. 266 pp., 水資源開発公団.
- 45) 森 誠一. 2003. イトヨ類における分布の現状と保全. 後藤 晃・森 誠一 (編)「トゲウオの自然史」, pp. 201-212. 北海道大学図書刊行会.
- 46) 諸澤崇裕. 2007. シマドジョウ. 萩原富司・熊谷正裕 (編)「平成調査新・霞ヶ浦の魚たち」, p. 70. 霞ヶ浦市民協会.
- 47) 諸澤崇裕. 2007. ギバチ. 萩原富司・熊谷正裕 (編)「平成調査新・霞ヶ浦の魚たち」, pp. 71-72. 霞ヶ浦市民協会.
- 48) 諸澤崇裕・藤岡正博. 2007. 霞ヶ浦における在来4種と外来3種のタナゴ類 (Acheilognathinae) の生息状況. 魚類学雑誌, 54: 129-137.
- 49) 向井貴彦・渋川浩一・篠崎敏彦・杉山秀樹・千葉 悟・半澤直人. 2010. ジュズカケハゼ種群: 同胞種群とその現状. 魚類学雑誌, 57: 173-176.
- 50) 中村 誠. 1986. ジュズカケハゼの生態に関する研究-1, ジュズカケハゼの初期発生. 茨城県内水面水産試験場研究報告, 23: 13-17.
- 51) 中村 誠. 1989. 沼沼の魚類目録. 茨城県内水面水産試験場研究報告, 25: 74-78.
- 52) 中村 誠・杉浦仁治. 2000. 沼沼産魚類の追加. 茨城県内水面水産試験場調査研究報告, 36: 36-40.
- 53) 中村守純. 1969. 日本のコイ科魚類. 604 pp. 資源科学研究所.
- 54) 中島 淳・洲澤 譲・清水孝昭・斉藤憲治. 2012. 日本産シマドジョウ属魚類の標準和名の提唱. 魚類学雑誌, 59: 86-95.
- 55) 中谷仁崇・根本 孝. 2011. ウナギ. 茨城県内水面水産試験場 (編)「いばらき魚顔帳」, pp. 22-23, http://www.pref.ibaraki.jp/nourinsuisan/naisuishi/gyoganchu/documents/022_unagi.pdf (2015年11月25日閲覧).
- 56) 中谷仁崇・根本 孝. 2011. キンプナ. 茨城県内水面水産試験場 (編)「いばらき魚顔帳」, p. 33, http://www.pref.ibaraki.jp/nourinsuisan/naisuishi/gyoganchu/documents/033_kinbuna.pdf (2015年11月25日閲覧).
- 57) 裏田孝晴. 2011. 河川性カジカにおける繁殖・生態多様性と保全. 宗原弘幸・後藤 晃・矢部 衛 (編)「カジカ類の多様性—適応と進化」, pp. 158-175. 東海大学出版会.
- 58) 仁平 章. 2006. 利根川および霞ヶ浦におけるウナギ漁獲量の変動. 茨城県内水面水産試験場研究報告, 40: 55-68.
- 59) 農林水産省. 平成 25 年漁業・養殖業生産統計 (概数値) http://www.maff.go.jp/j/tokei/kouhyou/kaimen_gyosei/gaisuu/index.html (2015年11月25日閲覧).
- 60) Okazaki, D., T. Yokoo, K. Kanou & H. Kohno. 2012. Seasonal dynamics of fishes in tidepools on tidal mudflats in the Tama River estuary, central Honshu, Japan. Ichthyological Research, 59: 63-69.
- 61) 小沼洋司. 1983. 霞ヶ浦と北浦における湖岸帯の魚類相とハゼ類の分布域・漁獲量. 茨城県内水面水産試験場研究報告, 20: 15-23.
- 62) 猿渡敏郎・小藤一弥・田中宏典・金高卓二・齋藤伸輔. 2006. 魚類の生息環境としての汽水湖—茨城県沼沼を例に—. 猿渡敏郎 (編)「魚類環境生態学入門—溪流から深海まで, 魚と棲みかのインターアクション」, pp. 74-102. 東海大学出版会.
- 63) Suzuki, T., K. Shibukawa, H. Senou & I-S. Chen. 2016. Redescription of *Rhinogobius similis* Gill 1859 (Gobiidae: Gobionellinae), the type species of the genus *Rhinogobius* Gill 1859, with designation of the neotype. Ichthyological Research, 63: in press.
- 64) 辻 幸一. 2001. ゴクラクハゼ. 川那部浩哉・水野信彦・細谷和海 (編)「日本の淡水魚 改訂版」, p. 585. 山と溪谷社.
- 65) 碓井星二・加納光樹・荒山和則・中里亮治. 2010. 北浦の沿岸帯におけるクルマサヨリ仔稚魚の生息場所利用パターン. 日本生物地理学会会報, 65: 29-38.
- 66) 山口安男・岡部 勉. 2011. カジカ・ウツセミカジカ. 茨城県内水面水産試験場 (編)「いばらき魚顔帳」, pp. 26-27. http://www.pref.ibaraki.jp/nourinsuisan/naisuishi/gyoganchu/documents/026_kajika_1.pdf (2015年11月25日閲覧).
- 67) 山崎裕治・後藤 晃. 2000. ヤツメウナギ類における系統分類と種分化の現状と課題. 魚類学雑誌, 47: 1-28.
- 68) Yokoyama, R. & S. Yamamoto. 2012. Freshwater sculpin dwelling in Lake Chuzenji, Nikko, Kanto District, Japan, is identified as *Utsusemikajika*, *Cottus reinii*, unintentionally introduced from Lake Biwa. Ichthyological Research, 59: 389-393.
- 69) Higuchi, M., H. Sakai, & A. Goto. 2014. A new threespine stickleback, *Gasterosteus nipponicus* sp. nov. (Teleostei: Gasterosteidae), from the Japan Sea region. Ichthyological Research, 61: 341-351.

6 昆虫・クモ類

1) 概要

本県は北緯 36～37 度付近に位置し、年間降雨量 1,300～1,600 mm、年間平均気温 12～14℃で、東側全面は南北 190 km に及ぶ太平洋海岸線、県北地域は概ね標高 300～400 m の丘陵地で県境地域では 700～800 m の中山間地、そして県央～南部・南西部地域は平野部で古くから田畑として開拓されてきた。植物相は県央～県北地域を通る暖帯林から温帯林への移行地帯で、その北側はトチ・ブナ帯が発達して豊かな森林を形成している。しかし、最高峰は 1,022 m の独立峰・八溝山で、県内全体に北方系の要素は希薄であるが、190 km におよぶ海岸線はオオコブスジコガネなどの海洋性要素の北上を可能にし、本県の生物相を豊かにする一端を担っている。また、県南地域にあって標高 1,000 m に満たない筑波山塊は、上部にブナ帯が育ち、ヨコヤマヒゲナガカミキリのようなブナ帯の特産種が生息する。コウチュウ目(鞘翅目)昆虫だけでもこれまでに茨城県から記録された種の 3 分の 1 に及ぶ 1,000 種以上が記録される貴重な地域である。他方、霞ヶ浦は日本有数の大淡水湖であるが、湖岸周辺の整備が進んで砂浜やヨシ原などの自然環境はほとんど姿を消した。しかし、稲敷市浮島・妙岐ノ鼻には辛うじて大規模なヨシ原が残され、野鳥の観察地として保全されている。ここは同時に低湿地に生息する昆虫類の貴重な生息地でもあり、オビヒメコメツキモドキが確実に観察できるのはこの妙岐ノ鼻と栃木県渡良瀬遊水池だけである。ここではさらに、県内の他地域からは記録の無いオオツノハネカクシやナカイケミヒメテントウなども生息する。以上のように本県は高山帯が欠如しているものの、特異な環境に生息する遺存的な種や日本における分布の北限地に生息する種などが確認され、本来的には豊かな昆虫・クモ類叢を支えていると言えよう。

この様な県勢の下に本項で扱う節足動物門昆虫綱は、調査対象に偏りがあって、チョウ目(鱗翅目:チョウ・ガ類)、トンボ目(蜻蛉目)、コウチュウ目などは比較的よく調べられているものの、他の分類群ではなかなか調査が進んでいないのが現状である。本県からはこれまで 6,000 種以上の昆虫類が記録されているが、本レッドデータブックにはその中の 261 種を掲載した。平成 12 年の初版では 142 種が掲載されたが、今回は 13 種が削除される一方で、調査研究の進展に伴って新たなグループも加わり、差引 127 種も増加した。また、節足動物門クモ綱クモ類(クモ目)は県内から 340 種ほど記録されているが、その中から新たに 5 種が加わり合計 10 種が選定された。しかし、その多くは県北地域での精力的な調査の成果であり、今後は県南地域での調査の進展が望まれる。

最初に、カゲロウ目やトンボ目などの水生昆虫に触れる。

カゲロウ目(蜉蝣目)昆虫は県内から 50 種程が記録されているが未だ調査不足であり、県央～県北地域の限られた河川のみならず、県南地域の大河川や湖沼・湿地にも調査を拡大しなければならない。初版時に選定種はなかったが、今回は那珂川と久慈川の下流域から記録されたアカツキシロカゲロウを選定した。この種は河川改修や洪水による生息環境の破壊に伴い絶滅の危機に瀕している。

トンボ目では、生息する水辺環境の急速な悪化によってイトトンボ科やトンボ科の多くの種が絶滅の危機に瀕し、特にコバネアオイトトンボ、ベニイトトンボ、オオセスジイトトンボ、ヒヌマイトトンボは深刻である。また、オオモノサシトンボ、キトンボなども注視していかなければならない。県内に分布する 91 種の中から 37 種を選定したが、初版時より 24 種も増えている。なお、メガネサナエ、オオキトンボ、ベッコウトンボは絶滅種と認定した。

カワゲラ目(襍翅目)昆虫は県内から 50 種程が記録されているがカゲロウ目と同様に未だ調査不足であり、県南地域を含めた県全域での調査を進めなければならない。初版時には唯一トワダカワゲラが選定されたが、今回新たに、増水や河川改修などの環境変化の影響を受けやすい大河川の中・下流域に生息するフライソニアミメカワゲラと、県北の局限された山間部溪流に生息するシノピアミメカワゲラも加えた。

アミメカゲロウ目(脈翅目)昆虫は県内から 57 種が記録され、初版時の選定種はなかったが今回は 5 種を選定した。幼生期の生態に関する情報が少ない稀少種アヤホソバヒメカゲロウとナナホシクサカゲロウに加え、クシヒゲカゲロウなどの 4 種も生息環境が局限されており、注視を要する種として選

定した。

ヘビトンボ目（広翅目）昆虫は県内から17種が記録され、初版時に選定種はなかったが今回はヤマトセンブリを選定した。この種は平野部の湿地や池沼などに生息することから常に開発の脅威に曝され、また、飛翔能力が弱いことから新たな生息適地への自力移動の可能性も低く、絶滅の危機に瀕している。

トビケラ目（毛翅目）昆虫は県内から170種程が記録され、平地から丘陵部に生息するヒゲナガトビケラ科の記録が比較的多いことが特徴的である。初版時の選定種はなかったが、今回は本県を基準産地とするヒヌマセトトビケラとチョウモウコヒゲナガトビケラ、および情報が非常に少ないアイシマトビケラ、ナガレグリトビケラ、ギンボシツトビケラの合計5種を選定した。また、かつては止水域に普通に生息していたスジトビケラは近年100年間程の記録が無く、注視すべき種として選定した。

水生昆虫類は水辺環境の影響を直接受けることから、コウチュウ目やカメムシ目の一部の種と同様に環境の劣化は大きな問題である。

ムカシトンボと共に、生きる化石と呼ばれるガロアムシ目（非翅目）のガロアムシは本県でも八溝山、花園山、筑波山などの高標高域に分布しているが、山間渓流域の荒廃によって個体数の減少が顕著であり、絶滅の危機に瀕している。

バッタ目（直翅目）は県内から108種が記録され、そのうち58種ほどが鳴く虫として知られる。近年、旧水戸射爆場跡地が大規模開発されて海浜性や湿原性のヤマトマダラバッタ、オオクサキリなどの貴重種の生息環境が大きく変化し、生存の危機に瀕している。そのような中、初版時には12種が選定されていたが、今回新たにセグロイナゴなどの3種を加えた。また、初版時には選定されなかったカマキリ目（蟷螂目）として今回新たに1種を選定した。

カメムシ目（半翅目）は県内に分布する約430種の中から27種を選定したが、初版時より9種も増えている。陸生カメムシ類のフタテンカメムシ、ハリサシガメ、ヒメマダラナガカメムシはともに海浜域に生息する種で、生息環境の攪乱による生息の危機が懸念される。また、ベニモンマキバサシガメ、ナカボシカメムシ、チャイロクチブトカメムシは落葉広葉樹の周辺に生息する種で、その様な環境の維持が必須である。一方、水辺環境に生息するババアメンボ、エサキアメンボ、ホッケミズムシ、ミヤケミズムシは近年の生息環境の急激な悪化が懸念され、注視する必要がある。なお、クマゼミの分布拡大は著しく、県央部まで拡がりつつある一方で、ブナ帯に生息するコエゾゼミとアカエゾゼミはその高い自然度の維持が重要であり、注視していかなければならない。

コウチュウ目は県内に分布する約3,000種の中から60種を選定したが、初版時より26種も増えている。コブヤハズカミキリ、ヒメビロウドカミキリおよびワタラセハンミョウモドキの3種は粘り強い調査の反復にも関わらず依然として再確認には至っていない。また、ベーツヒラタカミキリ、キイロジョウカイ、アカガネネクイハムシ、オオルリハムシ、オオシマオビハナノミなども近年の記録は非常に少なく、絶滅の危機に瀕している。なお、コガタノゲンゴロウは県内の近年の記録が全く無いことから絶滅と判断したが、コミズスマシ、アカツヤドロムシ、キンイロネクイハムシなどの水辺環境に生息する種も絶滅が心配される。一方、平地に生息するアオヘリアオゴミムシ、オオヒラタトックリゴミムシ、ヒメキイロマグソコガネ、ヨツボシカミキリなども近年は記録されることが珍しくなってきた。なお、近年になって生息が確認されたオビヒメコメツキモドキ、オオコブスジコガネ、サトウナガタマムシなども、貴重な種として保護しなければならないであろう。

シリアゲムシ目（長翅目）、ガガンボモドキ科に属するガガンボモドキは関東平野に特異な稀少種であり、本県でも県央部の平地林で記録されているものの、近年の開発事業によって平地林が減少し生息の維持が危ぶまれる。

チョウ目のうちチョウ類では、南方系種で本来本県では生息が確認されなかったムラサキツバメ、ナガサキアゲハ、ツマグロヒョウモンなどが近年本県に定着し、一方ではチャバネセセリ、クロシジミ、スジボソヤマキチョウ、ツマグロキチョウ、各種ゼフィルス類などは絶滅の危機に瀕している。県内に分布する約110種の中から33種を選定したが、初版時より12種も増えている。なお、ウスバアゲハ（ウスバシロチョウ）は福島県方面からの自然拡散で本県の八溝山周辺にも侵入してきた。他方、ガ類はミ

ツモンケンモンとマエアカヒトリの1968年以降の記録が無く、絶滅が心配される。また、湿地植物を寄主とするイチモジヒメヨトウ、オオチャバネヨトウ、ハスオビアツバも近年の記録は激減して絶滅が心配される。県内で分布が確認された約1,500種の中の20種を選定したが、これは初版時より6種も多い。

ハチ目（膜翅目）のうちハチ類は県内から565種が記録され、カリバチ類やハナバチ類の記録は多いがハバチ類、キバチ類、寄生バチ類の調査は遅々としている。なお、ハナバチ類は150種ほどが記録されて、近隣他県と比べて特筆される。この様な状況から、今回は初版時に選定された12種のうち6種を削除し、新たに13種を加えた合計19種を選定した。一方、アリ類は県内から77種が記録され、その中から初版時に選定された2種にトゲアリを加えた3種を選定した。このアリはクロオオアリやムネアカオオアリの巣に一時的に社会寄生する特異な習性をもつためコロニー数は非常に少なく、生存が危ぶまれている。

クモ綱・クモ類は主に県北山間部から340種程が記録されているものの、県南地域からの記録や土壌性以外の種の情報は不足している。クモ類の多くは産室や卵嚢を草木の葉や茎に形成することから安定した生息には良好な草原環境（藪）が必要で、これを維持するためには景観に配慮しつつ草刈りの頻度を下げることが望まれる。耕作地の開発にあたっては、その前に一部を自然草原あるいは湿地に復元することを望みたい。今回はイソコモリグモやワスレナグモなど、初版時に選定された4種に、新たにカネコトタテグモやアブクマホラヒメグモなど6種を加えて合計10種を選定した。特にイソコモリグモは砂浜海岸に生息することから保護対策は非常に困難と思われ、何らかの有効な手段を講じなければならないであろう。なお、初版で選定されたハンゲツオスナキグモは東アジア一帯に広く分布し、生息環境も広範で耕作地や市街地でも観察され、潜在的個体数は少なくないと推測されることから削除した。

（大桃定洋）

○カゲロウ目（蜉蝣目）

茨城県ではカゲロウ目を詳細に調査した報告は少なく、48種が記録された「茨城県の昆虫」（栗田、1993）が唯一である。しかし、近年はカゲロウ目の分類研究が進展して学名の変更などもあることから、目録の見直しが必要となっている。2007年以降は、茨城県自然博物館による総合調査研究によって県内各地の河川でこのグループの生息調査が進んでおり、ファウナは徐々に明らかになってきている。ただ、調査は県央から県北の限られた河川に集中しており、県南地域を流れる鬼怒川や利根川など大きな河川や湖沼・湿地などはほとんど調べられていない。これらの地域に調査を広げていく必要がある。

本県における絶滅のおそれのあるカゲロウ目として、アカツキシロカゲロウを選定した。従来、本種の採集記録は利根川水系しかなかったが、最近になって那珂川と久慈川の下流域でも確認された。幼虫は大河川の下流域に生息し、粘土質や石礫からなる河床にU字状の巣穴を作り、6～10月にかけて日の出の2時間前ころに羽化し、日の出の時刻には羽化個体のほぼすべてが死んでしまう。

本種の生息地は大河川の下流域であることから、河川改修や洪水による流路や河床基質の変化によって生息環境が破壊されると絶滅のおそれがある。

（岸本 亨）

○トンボ目（蜻蛉目）

2000（平成12）年に初めて公刊された「茨城における絶滅のおそれのある野生生物〈動物編〉—茨城県版レッドデータブック—」に掲載されているトンボ目昆虫は、絶滅種としてベッコウトンボ、絶滅危惧種としてヒヌマイトンボ、オオキトンボの2種、危急種としてメガネサナエ、キイロヤマトンボの2種、希少種としてベニイトンボ、オオセスジイトンボ、オゼイトンボ、ムカシトンボ、キイロサナエ、アオヤンマ、ハッチョウトンボ、キトンボの8種（合計13種）があげられている。その後、本県におけるトンボ類の生息環境は著しく悪化し、今回の改訂版では、絶滅種3種を含む37種

が掲載された。

トンボ目昆虫は、河川や湖沼、農業用溜池や湿地等の水環境に依存して生息している。しかし、近年トンボ類が好む生息環境は急速に失われつつある。その要因は、① 水質汚濁、② 開発による埋め立て、③ 農業用溜池の改修工事と湿地の乾燥・荒廃化、④ 外来魚の放流などが考えられる。なかでも湿地の乾燥化と荒廃は著しく、これには耕作放棄された水田の増加や夏季の猛暑による高温乾燥が関与していると推察できる。したがって、今回掲載した種には湿地などの不安定で脆弱な環境に依存し、かつ環境の変化に対する適応力が弱い、イトトンボ科やトンボ科の種が多く含まれる。これらの種を将来的に保護するためには、水源の維持管理や乾燥化を防止するための植生管理、周囲の緑地保全が重要な課題である。また、トンボ目昆虫のみならず、生物多様性を保全するには、地域におけるビオトープの継続的な保全・管理の実践ができる体制づくりが望まれる。

(渡辺 健)

○カワゲラ目（襜翅目）

カワゲラ目昆虫は本県から9科47種が確認されているが、2007年から始まった茨城県自然博物館の総合調査による成果が大きい。しかし、調査は主に県央から県北地域にかけての限られた河川で行われ、県南地域の河川における調査はほとんどない。農耕地を流れる平地流や湿地、湖沼などの止水域に生息する種もあるので、県南地域の調査も必要である。

今回、カワゲラ目昆虫からトワダカワゲラ、フライソニアミメカワゲラ、シノビミアミメカワゲラの3種を選定した。トワダカワゲラは県北地域の河川の源流域に生息し、生息地は極限されることから近年の林道建設や森林伐採による生息環境への影響は大きい。なお、近似種であるミネトワダカワゲラは、前回の初版（2000年）では掲載されていたが、本県には分布しないことが判明したので選定種から除外した。増水や河川改修などの環境変化の影響を受けやすい中・下流域に生息するフライソニアミメカワゲラと、県北の局限された山間部渓流域に生息するシノビミアミメカワゲラも、その生息調査が進んでおらず情報不足の状況にある。

(岸本 亨)

○ガロアムシ目

ガロアムシ類は体長20～30mm、無翅で単眼を欠き、長い触角と尾毛を持つ肉食性の土壤昆虫で、1科5属26種からなる世界的にも珍しい昆虫である。日本には2属6種が生息し、本州産は3種で本県には唯一ガロアムシが分布する。洞窟や浅地下などの冷涼かつ湿潤な環境に棲息し、氷河期の遺存種「生きている化石」と呼ばれることがある。自然度の高い環境に棲息することから第一級の自然環境指標昆虫であり、森林伐採などによる乾燥化は絶滅へ拍車を掛けている。なお、2015年はガロアムシ目が創設されて100年、日本で最初のガロアムシが駐日フランス外交官ガロア(E. Gallois)によって日光・中禅寺湖畔で採集されて100年の記念すべき年である。

(大桃定洋)

○バッタ目（直翅目）・カマキリ目（螳螂目）

バッタ目は茨城県から108種ほど記録されており、このうち58種ほどが翅を使って鳴く種類である。本県には八溝山以外に1,000mを超える高い山がないものの、長い海岸線に沿って海浜性のヤマトマダラバッタやハマスズなどが生息することは大きな特徴と言えよう。また、平野部の湿原にはオオクサキリ、カスミササキリ、リュウキュウチビスズなどが遺存的な希少種として生息することも本県の特徴と言える。しかし、貴重な生息地である旧水戸射爆場跡地の大規模開発のように、各地の生息環境は著しく劣化している。

今回、新たにカワラバッタなど4種を加えて合計16種を選定した。この中の、オオクサキリやクロツヤコオロギなどは太平洋側の分布北限である。なお、初版時に選定されたカヤキリが、近年はむしろ

増加の傾向にあることから削減した。また、カマキリ目として今回新たにウスバカマキリを選定した。以前は旧水戸射爆場跡地に少なくなかったが、近年の大規模開発によって極端な減少が見られるためである。

(井上尚武)

○カメムシ目（半翅目）

レッドデータリストの改訂にあたり、初版（2000年）では絶滅危惧種としていたブチヒゲカメムシ及び危急種としていたアカスジカメムシについて、今回はリスト外とした。前回は、両種ともに県内の生息地が限られることなどによる判断であったが、その後、両種を目にする機会が格段に増加したため、掲載からはずすこととした。両種が増加した理由としては、食草とする植物が耕作植物や園芸植物として人為により持込まれた影響が考えられる。ブチヒゲカメムシは、本来、海浜や湖沼の周辺域のマメ科やキク科植物を利用していただと思われるが、耕作植物の導入によって県内に広く分布する状況が生じたと考えられる。また、同じように、アカスジカメムシは県北部の山地に生育するセリ科植物を利用していただが、園芸植物であるハーブ類の栽培等により移入され、県下に広く分布する種となった。

絶滅危惧 IA 類としたフタテンカメムシ、準絶滅危惧としたヒメマダラナガカメムシは、海浜部の砂地に生息し、それぞれイネ科とヒルガオ科植物を食草としている。また、ハリサシガメは、個体数が少なく、全国的にも稀な種であるが、本県では、現在までのところ海浜部の砂地で記録されており、本種が好む生息環境であることがうかがえる。これらの種にとって、砂地や海浜植物の減少が絶滅への危惧を高めることを指摘したい。

絶滅危惧 IB 類としたコエゾゼミとアカエゾゼミは、ブナ帯の自然度の高い地域に生息するため、その植生の消失や劣化は種の存続に直結する問題となる。また、準絶滅危惧としたベニモンマキバシガメとナカボシカメムシ、チャイロクチブトカメムシは落葉広葉樹を食樹とし、あるいは、広葉樹上に生息する昆虫類等を捕食する種である。これらの種にとって、落葉広葉樹林の減少・劣化が個体数の減少や絶滅につながると懸念される。

今回、絶滅危惧 IA 類、IB 類と判定した中で、ババアメンボ、ホッケミズムシ、エサキアメンボ、ミヤケミズムシの4種は水域に生息する種である。埋立てなどによる湖沼環境の喪失や水質の悪化が、生息地と個体数の減少をもたらしたと考えられる。また、外来魚による捕食圧が絶滅への危惧を高めている状況にある。

絶滅危惧 II 類及び準絶滅危惧と判定した種を含めて概観すると、海浜部や落葉広葉樹林域に生息する種が目を引く。これらの環境を保全することが強く求められる。

(成田行弘)

○アミメカゲロウ目（脈翅目）

茨城県のアミメカゲロウ目昆虫は、水戸市立博物館が1993年に公刊した「茨城県の昆虫」の中で7科19種（ヘビトンボ科とラクダムシ科を含む）が断片的に記録されている。しかし、ヒメカゲロウ科やクサカゲロウ科など7科52種を含むまとまった記録が2010年に、さらにその追加が2012年にいずれも水戸昆虫研究会誌“るりぼし”に報告されて、合計8科57種となった。また、「茨城県自然博物館総合調査報告書2013年 茨城県の昆虫類およびその他の無脊椎動物の動向」の中では、コナカゲロウ科5種が記録されているので、本県のアミメカゲロウ目昆虫は写真記録として報告されているケカゲロウを含めると10科62種となる。日本では約140種が記録されているので、平野部が多い茨城県のファウナは豊かと言えよう。

本県産種の特徴は海浜性の種から平野部及び山地に生息する種まで多様なことがあげられる。中でも1,000 m以上の高標高地が八溝山頂だけであるにもかかわらず、高地性の稀な種が数種記録されているのは注目される。また、ほとんどの種が幼虫期を地中や地表あるいは樹上で過ごしているため生態不明の種が多い上、調査の歴史も浅いため、環境の変化が彼らの生息にどのような影響を与えているかも

不明確で、調査研究の進展が望まれる。

今回、以下の5種を選定した。ヒメカゲロウ科のアヤホソバヒメカゲロウは、八溝山での1例が知られるだけの注目種であるが情報不足である。クサカゲロウ科は本州からの記録が富山県と茨城県八溝山に限られるナナホシクサカゲロウを情報不足の注目種とした。また、生息環境が局限されるキントキクサカゲロウとクシヒゲカゲロウ科のクシヒゲカゲロウ、およびウスバカゲロウ科のオオウスバカゲロウも生息環境が極限され、絶滅の危機に瀕しているために準絶滅危惧とした。

(櫻井 浩)

○コウチュウ目 (鞘翅目)

多様な環境に適応した甲虫類は日本から1万種以上が知られる大きなグループであるが、本県内では2014年までの調査でようやく3,000種を超えたところで、まだまだ調査不足の状況である。先の初版出版時(2000年)には2,400種ほどが確認されていたが、その中で40種がリストに掲載された。今回の改定では初版から継続して34種を掲載し、さらに26種を追加しなければならない状況となり、掲載種は合計60種に増加した。

初版で絶滅危惧種としたコブヤハズカミキリ、ヒメビロウドカミキリおよびワタラセハンミョウモドキは、その後の粘り強い調査の反復にもかかわらず依然として再確認には至らず、危急種として掲載されたベーツヒラタカミキリ、キイロジョウカイ、アカガネネクイハムシ、オオルリハムシ、また希少種とされたオオシマオビハナノミも生息地の消滅などによって絶滅の危機に瀕している。今回の改訂では平地に生息する種を中心に絶滅危惧種として加えなければならなくなった。コガタノゲンゴロウは初版で既に掲載すべきであったが、他にも前回あまり心配していなかったコミズスマシ、アカツヤドロムシ、キンイロネクイハムシなどの水辺環境に生息する種、アオヘリアオゴミムシ、オオヒラタトックリゴミムシ、チビアオゴミムシなどのオサムシ類、ヒメキイロマグソコガネ、ヨツボシカミキリなどを中心に、草地に生息するアサカミキリとともに取り上げることとなった。さらに、新たに生息が確認された全国的に非常に珍しいオビヒメコメツキモドキやオオコブスジコガネなども加え、北限の生息地となるサトウナガタマムシも掲載した。

これらの種の生息環境、特に水辺環境や平地の自然草地などは開発の進行が速く、初版出版時以降も急速に劣化が進んでいる。

(大桃定洋)

○シリアゲムシ目

シリアゲムシ類に関心を持つ人が少ない中、長翅目談話会などが中心となって活躍している。形態的に変異の多い昆虫のために分類・同定は容易ではなく、生態的にも情報不足の状況にあり、特に関東から東海地域の太平洋岸地域で著しいようだ。日本にはガガンボモドキ科10種とシリアゲムシ科34種が生息し、そのうち本県からは前者4種と後者7種の分布が報告されている。今回は前回と同様にガガンボモドキと新たに八溝山で記録されたヒロオビシリアゲを追加した。この種は主として長野県や山梨県などの中部地域の山間部に棲息し、八溝山は最も北東域に位置する非常に貴重な生息地である。

(大桃定洋)

○チョウ目 (鱗翅目) チョウ類

茨城県からは、現在125種が記録されている。そのうち、迷蝶、偶産種と考えられる種や絶滅種を除けば、県内には現在110数種が生息していると考えられる。

絶滅種の、オオウラギンヒョウモン、ヒョウモンモドキは関東地区のみならず他の本州地域でも絶滅状態の種である。ヒョウモンモドキは初版ではリストに含めなかったが、今回資料を再検討したところ、かつて茨城に生息していた絶滅したと判断した。

ウスバシロチョウについては、当初絶滅種に含める予定であったが、絶滅危惧I A類に移した。本

種は1948年、1976年に小貝川河川敷で記録されたが、この地では数年のうちに絶滅した。ところが2014年に大子町で記録された。これは近隣の福島県や栃木県の個体群が分布を拡大したため、今後分布の広がることが予想される。しかし、本種が関東平野部に分布するのはきわめて稀な例であり、重要である。

絶滅危惧IA類とIB類に含まれる14種のうち、ウスバアゲハ（ウスバシロチョウ）、ヒメシジミ、スジボソヤマキチョウ、チャマダラセセリ、ホシチャバネセセリ、ヒメシロチョウ、ツマグロキチョウは草原に近い環境に生息している種で、キバネセセリ、クロシジミ等他の種は疎林を主な生息地とする種である。草原環境を好む種の絶滅危機が強くなっているのが近年の大きな傾向である。

絶滅危惧II類と準絶滅危惧に含まれる17種に共通してみられるのは、雑木林やその林縁に生息している種ということである。アイノミドリシジミ、エゾミドリシジミ、ウラクロシジミ、ウスイロオナガシジミ、オナガシジミ、ジョウザンミドリシジミ、フジミドリシジミ、オオヒカゲ、ヒメキマダラヒカゲは、ミズナラやブナを中心とした冷温帯林に生息する種である。県内ではこのような林は県北の限られた地域に見られ、これらのチョウの生息地も限定されていたが、環境は比較的安定しており強い危機感を感じていなかった。しかし、近年それらの地域でも森林伐採などの影響を受ける事例が見られ心配である。

また、ウラゴマダラシジミ、クロミドリシジミ、ウラギンスジヒョウモン、オオムラサキは、コナラやクヌギを中心とした低山地の雑木林に生息しており、県内に広く生息していた種である。生息域も広く、普通に見られていた種が絶滅に向かいつつあることは、10年前は考えられなかった。近隣県でもこれらの種が絶滅危機種にあげられてきており、今後の状況が大変気になるところである。

(佐々木泰弘)

○チョウ目（鱗翅目）ガ類

2015年末時点で茨城県の蛾の種数は1,639種確認されている。

初版（2000年）において県の絶滅危惧種として掲載されたミツモンケンモンとマエアカヒトリについては、いずれも1968年の記録以降本県からの記録はない。その生存が危ぶまれる状況にあると考えられ、今回、絶滅危惧IA類と判定した。これらの2種は全国的にも衰亡傾向が著しいと見られている。

イチモジヒメヨトウ、オオチャバネヨトウは、それぞれクサヨシ、ガマを寄生植物とし低湿地環境に生息する種である。県内では菅生沼などで1970年代まで記録されていたが、近年の記録は極めて限られている。また全国的にも減少傾向が大きいと見られるので、両種を絶滅危惧IB類として位置づけた。

これまで県の希少種としてランクされていたネスジシャチホコはクヌギを食樹とし、1964年に御前山で記録されたがその後の記録がない。同様に希少種としてランクされていたマエジロシャチホコは山地性の種でミズナラを食樹としている。八溝山では最近も継続して記録されているが、全国的にも希少な種である。同様に希少種としてランクされていたハスオビアツバはスゲを寄生植物とし湿地環境に生息する種であり、これまで菅生沼等で確認されていたが、2000年代になってからは記録がない。以上の3種に関する本県での状況は隣県の栃木県、埼玉県の場合に共通するものがあり、今回はこの3種を絶滅危惧II類にランク付けた。

フタテンツヅリガ、ミツシロモンノメイガ、ノコバアオシヤク、フチグロトゲエダシヤク、ウスズミカレハ、ヒメカレハ、オオシロテンクチバ、ユミモンクチバ、ネグロアツバはこれまで県の希少種としていた種であるが、これらは引き続き準絶滅危惧にランクし、それぞれの種について今後の動向を観察していく。以上に加えて今回、オナガミズアオ、ヤママユ、キスジウスキヨトウ、ウスミモンキリガを準絶滅危惧として加えた。オナガミズアオ、ウスミモンキリガの両種はハンノキを、キスジウスキヨトウはガマ、ミクリを寄生植物としている。それぞれ湿地環境に生息するもので、こうした環境は衰退しやすいことからこれらの種を準絶滅危惧とするのが適当と判断した。また、ヤママユは県北の八溝山などでは現在も多産する種であるが、県南の平地林ではその数を減じている。里山環境に生息するガ類を代表するものとしてヤママユを準絶滅危惧として位置づけた。なお、これまで県の希少種として二

ホンセセリモドキ、ホソオビアシブトクチバが挙げられていたが、両種ともに生息地は限定されるが、それぞれの生息地で安定的に発生していると認められたため、ランク外とした。

なお過去に採集記録はあるが、最近確認されていない種もあり、今後の動向が懸念される種もある。今回レッドデータブックに登録される種だけでなく、今後の動向を合わせて追跡して行く必要がある。

(林 恵治)

○トビケラ目（毛翅目）

トビケラ目は茨城県から170種ほど記録されており、調査が進めば200種近くに達するものと思われる。本県産種の特徴としては、1,000 m以上の山地溪流が存在しないため、急峻な山地溪流に生息するオオナガレトビケラの記録がなく、他方で平地から丘陵地にかけて生息するヒゲナガトビケラ科の記録が比較的多いことがあげられる。また、県南の河川には少なからずトビケラは生息するものの、県央や県北の河川に比べて記録された種数が少ないことも特徴と言える。なお、筑波山周辺の山麓や県北の中山間地帯に僅かにみられる小湿地は水質が比較的安定しており、分布的に貴重なトビケラが記録されている。一見なんでもない湿地ゆえに、その重要性に気づかれぬまま開発によって消失した事例もみられる。

今回、本県を基準産地とするヒヌマセトトビケラとチョウモウコヒゲナガトビケラ、および情報不足のアイシマトビケラ、ナガレグリトビケラ、ギンボシツツトビケラの5種を選定した。また、かつては止水域に普通に生息していたスジトビケラは100年近く確認されていないことから、注目すべき種として選定した。

(勝間信之)

○ハチ目（膜翅目）

本県からは565種のハチ類が記録されているが、カリバチ類やハナバチ類、アリ類の報告が多く、ハバチ類、キバチ類、寄生バチ類は調査がすすんでいない。特に、ハナバチ類は150種ほどが記録され他県と比べ突出している。また、アリ類は77種が記録されている。今回の改訂において、ハチ類は初版時の9種に新たに13種を加えて合計22種を選定し、初版で選定されていた6種を削除した。選定種は調査がすすんでいるグループの種が多く、選定理由としては主に生息環境の悪化や、生息地が局限されていることによる。

かつては普通に見られたウマノオバチは寄生バチ類の中から唯一選定した種であり、生息地のクリ林や雑木林の放棄がすすむ中で個体数の減少が懸念される。

中・大型のアシナガバチであるヤマトアシナガバチとキアシナガバチは人の居住地とも結びついた里山的環境でよく見られる種であり、近年の農村集落の環境変化がこれら種の生息に大きく反映している。

既存の坑に営巣する管住性のサイジョウハムシドロバチ、ハラナガハムシドロバチおよびトモンハナバチはカヤ葺き屋根等をよく利用しているが、近年の人々の住環境の変化に伴い急激な個体数の減少が見られる。

ヤマトスナハキバチとニッポンハナダカバチは砂質土壌を好んで営巣し、シロスジフトハナバチ、アマクサヤドリコハナバチおよびホシトガリハナバチは海浜性・準海浜性の種で、いずれも海浜の大型開発に伴い生息地の減少が懸念される。

主に山間部に生息する大型のオオマルハナバチは個体数が少なく、豊富な餌資源も必要とすることから生息環境の維持を注視する必要がある。なお、クロマルハナバチはトマトの花粉媒介昆虫として利用され始め、国内外来種としての定着問題も含め見守る必要がある。コマルハナバチとの混同も懸念される。

ニトベギングチ、アオスジベッコウ、スギハラクモバチおよびクズハキリバチは比較的大型の種であり、確認情報が多数あってもおかしくない種であるが、生息の記録は非常に少なく情報不足の状況にある。

今回、ケナガチビコハナバチ、ツヤハラナガコハナバチ、ナワヒメハナバチ、オモゴヒメハナバチ、ヤマテマメヒメハナバチおよびヤマブキヒメハナバチは削除した。これらの種は個体数が非常に少なく記録地も限定される稀な種と言えるが、関連資料に乏しい情報不足状態にあることから削除した。アリ類は初版時の2種にトゲアリを加えて3種を選定した。

(久松正樹)

○クモ綱クモ目

本県のクモ類は、日本から報告されている種の約23%に当たる340種が主に県北山間地域を中心に記録されている。しかし、県南地域からの記録情報は少なく、また、土壌性以外の草木や樹間、水辺などに生活している種類の情報も不足している。

今回の改訂では開発行為などの脅威だけでなく、海岸や洞窟などの生息環境が局限される視点からイソコモリグモ、ワスレナグモ、カネコトタテグモ、アブクマホラヒメグモなど10種を選定した。特に、イソコモリグモは砂浜海岸に生息することから保護対策は非常に困難と思われるが、何らかの有効な対策を講じなければならない。

クモ類の多くは産室や卵囊を草本の葉や茎に形成することから安定した生息には良好な草原環境(藪)が必要で、これを維持するために景観に配慮しつつ草刈りの頻度を下げることが望まれる。また、減少が見込まれる耕作地は開発する前に一部を自然草原あるいは湿地に復元することを望みたい。

なお、前回選定されたハンゲツオスナキグモ(現在の学名: *Steatoda cingulata*)は、東アジア一帯に広く分布し、生息環境も広範で耕作地や市街地にも見られ、潜在的な個体数は少なくなく、生息環境の悪化が将来この種の存続に重大な影響を及ぼすものではないと推測し得るので、削除が妥当と判断した。

(小野展嗣)

2) 対象種の解説

カテゴリー別に分類した昆虫類234種(絶滅危惧221種、情報不足13種)、クモ類10種(絶滅危惧10種)について、以下に目ごとに解説する。

選定理由 ③ 本種は、発見されて以来、日本では利根川水系における採集記録しかなかったが、2012年に那珂川と久慈川の下流域で確認された。本種の分布には関東平野の地史的な変遷が大きく影響していると考えられ、本県の地理的・自然特性を特徴づける要素をもった種と考えられる。

分布状況 本州（茨城、千葉、埼玉）に分布。

形態及び生態 成虫の体長は約10～20mmでカゲロウ類の中では比較的大きく、25mmを超える個体もいる。幼虫は大きな川の下流域に生息し、粘土質や石礫からなる河床にU字状の巣穴を形成する。羽化期間は6月から10月頃までであり、羽化時間は日の出の2時間ほど前である。日の出時には羽化個体のほぼすべてが死んでしまう。近似種のおオシロカゲロウと同所的に生息している地域もあるが、成虫の出現時期、羽化時間帯などが異なる。雄は亜成虫から脱皮して成虫となるが、雌は亜成虫のまま交尾・産卵する。

近似種 同属のおオシロカゲロウ *Ephoron sigae* (Takahasi 1924) に形態が酷似し、外部形態における種間の相違点は非常に少ない。

生息地 本県を流れる利根川水系河川の下流域（古河市、常総市、稲敷市、つくばみらい市、つくば市、土浦市、石岡市）、那珂川の下流域（ひたちなか市、水戸市）と久慈川の下流域（日立市）に生息している。

生存の危機 生息地が限られており、河川の下流域が生息地であることから河川改修や洪水による流路や河床基質の変化によって生息地の環境が破壊されると絶滅するおそれがある。

特記事項 千葉県レッドデータブックにおいて準絶滅危惧種に選定されている。

執筆者(協力者) 岸本 亨

文献 1), 2), 3)



撮影 東城幸治

茨城県2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県2000		対象外	
環境省2014	●	準絶滅危惧	● ● ● ●

選定理由 本県では 1970 年代以降記録がない。

①②③ 河川・湖沼の水質汚濁、開発による埋め立て、改修工事による植生の変化、管理不足による荒廃などにより生息地の減少や生息環境が悪化している。

分布状況 日本特産種であり、東北地方から近畿地方に分布するが、その産地は連続せず、点在している。滋賀県琵琶湖や長野県諏訪湖が産地として知られる。

形態及び生態 体長 65mm 内外の大型のサナエトンボで、腹部第 7 から 9 節が著しく広がっているのが特徴である。比較的大きな湖や河川の沿岸域に生息し、成虫は 6 月下旬から 10 月中旬に出現する。

近似種 同属のナゴヤサナエに酷似しているが、本種の腹部第 7 節の黄色の斑紋背面部分の形は、くさび形に長く、ナゴヤサナエと区別できる。

生息地 本県では、1950～1960 年代に水戸市桜山周辺の桜川や沢渡川、桜川市の桜川中流域に生息していたが、それ以降の記録はない。

生存の危機 本種の既知産地における記録は 1970 年代以降途絶えており、絶滅したと考えられる。本種は土着ではなく、琵琶湖産稚アユの放流にともなって移入された可能性があるが、本県の生息地は霞ヶ浦水域とは離れており、絶滅は河川環境の急激な荒廃によるものと思われる。

特記事項 東京都（絶滅）、埼玉県（絶滅危惧 I 類）。

執筆者(協力者) 渡辺 健（廣瀬 誠）

文献 6), 7), 9), 10), 13), 21), 23), 36), 39), 52)



撮影 染谷 保



選定理由 本県では 1958 年以降記録がない。

①②③ 開発による生息地の埋め立てや改修工事による植生の変化、管理不足による荒廃、外来魚の放流などにより生息地の減少や生息環境の悪化が見られる。

分布状況 本州、四国、対馬を含む九州に分布する。

形態及び生態 体長 45mm 内外の大型のアカトンボの仲間、成虫は 7 月上旬から 11 月下旬に出現する。体に目立つ斑紋はなく、体色は全体が橙黄色で美しく、翅も薄い橙色を帯びる。幼虫は平地や丘陵地の抽水植物が繁茂した池や沼に生息するが、成虫は原野のような周辺環境が開放的な条件を好む。

近似種 ショウジョウトンボの未熟個体に似るが、本種の胸部に長毛があり、腹部が扁平でないことから区別できる。同属のキトンボとは体長の大きさや翅の黄色部の広がり方等で区別ができる。

生息地 1950 年に笠間市（旧岩間町）、1958 年に水戸市で記録されて以来、追加記録がない。

生存の危機 本種の記録は 1958 年の水戸市以降途絶えており、絶滅したと考えられる。

特記事項 東京都（絶滅）、神奈川県（絶滅）、千葉県（消息不明・絶滅生物）、埼玉県（絶滅危惧 I 類）、栃木県（絶滅危惧 I 類）、群馬県（絶滅危惧 I 類）。

執筆者(協力者) 渡辺 健（廣瀬 誠）

文献 6), 7), 9), 10), 23), 36), 39), 52)



撮影 染谷 保



選定理由 本県では40年以上記録がない。

①②③ 環境の変化に対する適応力が弱く、生息地の埋め立てや水質汚染によって全国的に激減している。

分布状況 本州、四国、九州ならびに奄岐や対馬に分布する。

形態及び生態 体長40mmのややすんぐりとした体形の中型トンボで、成虫は春期4～6月に出現する。4枚の翅にはそれぞれ3個の明瞭な褐色斑がある。未熟個体は明るい茶褐色であるが、成熟すると雄は黒褐色、雌は暗褐色になる。本種の生息にはヨシやガマなどの挺水植物が繁茂している池沼・湿地と周辺の多様な植生環境が必要である。

近似種 同属のヨツボシトンボに似るが、本種の方がやや小さく、翅の紋様が大きいことで区別できる。ヨツボシトンボは本種と似たような環境を好むため、同じ場所に混生することもある。

生息地 水戸市、龍ヶ崎市、常総市、石岡市、結城市、稲敷市、美浦村、つくば市などの池沼に生息していたが、1970年代以降激減し、40年以上記録はない。

生存の危機 本県では既に絶滅したと考えられる。また、隣接県でも絶滅している。

特記事項 埼玉県（絶滅）、栃木県（絶滅）、群馬県（絶滅）、千葉県（絶滅）、東京都（絶滅）、神奈川県（絶滅）。現在の確実な生息地は本県では静岡県、兵庫県、山口県と九州に点在するのみである。

執筆者(協力者) 渡辺 健(廣瀬 誠)

文献 6), 7), 9), 10), 23), 36), 39), 52)



撮影 染谷 保

茨城県 2016	● ● ● ● ●	絶滅
茨城県 2000	● ● ● ● ●	絶滅種
環境省 2014	● ● ● ● ●	絶滅危惧 I A 類

選定理由 ①②③④ 開発による池沼の埋め立て、改修工事による植生の変化、管理不足による荒廃、外来魚の放流などにより生息地の減少や生息環境の悪化が見られる。特に、県央地域の農業用溜池は浚渫工事や護岸工事が積極的に行われ、植生破壊が著しい。また、本種に対する採集圧も強い。残された生息地は極めて貴重である。

分布状況 本州、四国、九州に分布するが、生息地は局地的である。

形態及び生態 体長約30mm内外で、胸部から腹部にかけて金緑色をしたイトトンボである。成熟した雄の複眼は美しい水色となる。後頭部の後側が黄白色であることが特徴である。平地や丘陵地のヨシやガマなどの抽水植物が豊富な古い池沼に生息し、成虫は5月下旬～10月頃に出現する。秋に生殖活動を行い、雌は、ガマ等の柔らかい水生植物の組織に産卵する。

近似種 同属のアオイトトンボ、オオアオイトトンボと混生することがあるが、両種に比較すると本種はやや小型で翅も小さいことと、成熟しても雄は白い粉をふかないこと等で区別できる。

生息地 日立市、水戸市、笠間市や那珂市など県北～県央地域の平地池沼を中心に生息している。現在の確実な生息地は水戸市と那珂市である。

生存の危機 本県における確実な生息地は現在水戸市と那珂市の溜め池だけであり、絶滅が危惧されている。

特記事項 埼玉県（絶滅）、千葉県（絶滅）、東京都（絶滅）、神奈川県（絶滅）、栃木県（絶滅危惧 II 類）、群馬県（絶滅危惧 II 類）、福島県（絶滅危惧 II 類）。

執筆者(協力者) 渡辺 健(廣瀬 誠)

文献 2), 6), 7), 9), 10), 21), 23), 24), 36), 39), 45), 52)



撮影 染谷 保

茨城県 2016	● ● ● ● ●	絶滅危惧 I A 類
茨城県 2000		対象外
環境省 2014	● ● ● ● ●	絶滅危惧 I B 類

選定理由 ①②③ 全国では東北地方から九州に至るまで点々と産地があるが、いずれも局地的であり、生息地のほとんどは海水が入り込む汽水域である。そこに存在するヨシ群落は、河岸・河口の改修、埋め立てなどの開発や河川の水質汚染により、減少している。汽水という厳しい環境に生息している昆虫類の数は少なく、貴重である。

分布状況 1971年に東茨城郡茨城町と大洗町の涸沼沿岸で発見され、1972年に新種記載された。宮城県から大阪府までの10カ所と、大分県、長崎県対馬、日本海岸の数カ所および山口県や岡山県の瀬戸内海側からのみ発見されている。四国からは記録がない。国外では香港に分布する。

形態及び生態 体長約30mmの小さなイトトンボの一種。雄の胸部には4個の黄緑色斑紋があるのが特徴的で、雌の体色は橙色である。成虫の出現最盛期は、6月中旬から8月上旬までで、それ以降は次第に減少する。河口付近の汽水域にあるヨシ群落が生息域である。成虫の生息範囲は、幼虫生息地の抽水植物（ヨシ、ガマ、イグサ等）の生育する湿地内の水域の空間やそこに接する水田や休耕田等の空間である。

近似種 体形は同属のモートンイトトンボに似るが、体色や斑紋で区別できる。本県ではモートンイトトンボと本種の混生は認められていない。

生息地 本県における生息地は涸沼沿岸の一部と神栖市の利根川の河口域に限られ、分布は極めて局地的である。

生存の危機 海水が入り込む汽水域に存在するヨシ群落は、河岸・河口の改修、埋め立てなどの開発や河川の水質汚染により幼虫生息の通性を失い、急速に減少しており、群落に依存して生活している本種の生存は危機的状況にある。

特記事項 神奈川県（絶滅）、東京（絶滅危惧Ⅰ類）、千葉（絶滅危惧Ⅰ類）、埼玉（絶滅危惧Ⅰ類）。

執筆者(協力者) 渡辺 健（廣瀬 誠）

文献 2), 6), 7), 8), 9), 10), 11), 12), 23), 34), 36), 39), 52)



撮影 染谷 保

茨城県 2016	● ● ● ● ●	絶滅危惧ⅠA類	●
茨城県 2000	● ● ● ● ●	絶滅危惧種	●
環境省 2014	● ● ● ● ●	絶滅危惧ⅠB類	●

選定理由 ①②③ 開発による池沼の埋め立て、改修工事による植生の変化、管理不足による荒廃、外来魚の放流などにより生息地の減少や生息環境の悪化が著しい。残された生息地は極めて貴重である。

分布状況 群馬、栃木、埼玉、東京、神奈川、千葉、茨城、新潟、宮城の9都県で生息が確認されている。生息地は極めて局限される。

形態及び生態 体長40mm内外の大型のイトトンボで、細い直線状の腹部には節ごとに「物差し」の目盛りのような規則正しい斑紋がある。平地の植生の豊かな池沼に生息し、成虫は6～9月に出現する。

近似種 同属のモノサシトンボに似ているが本種の方が体がやや大きく、雄の腹部第9節背面が黒いことや雌の腹部第10節背面に黒い部分があることで区別できる。

生息地 水戸市、茨城町、小美玉市、竜ヶ崎市、土浦市、牛久市、つくば市、潮来市、行方市、鹿嶋市、稲敷市、坂東市、常総市などから記録があるが、現在は鹿行～県南、県西地域の限られた池沼にしかみられない。

生存の危機 全国の既知生息地の79%は失われているとされている。本県においても本種の生息地数は減少の一途をたどっており、危機的状況である。

特記事項 神奈川県（絶滅）、東京都（絶滅危惧Ⅰ類）、栃木県（絶滅危惧Ⅰ類）、埼玉県（絶滅危惧Ⅰ類）、千葉県（絶滅危惧Ⅰ類）。

執筆者(協力者) 渡辺 健（廣瀬 誠）

文献 2), 6), 7), 9), 10), 11), 12), 20), 21), 23), 36), 39), 40), 47), 52)



撮影 染谷 保

茨城県 2016	● ● ● ● ●	絶滅危惧ⅠB類	●
茨城県 2000		対象外	
環境省 2014	● ● ● ● ●	絶滅危惧ⅠB類	●

選定理由 ①②③ 開発による池沼の埋め立て、改修・浚渫工事による植生の変化、管理不足による荒廃、外来魚の放流などにより生息環境が悪化している。

分布状況 北海道、本州、四国、九州に分布する。

形態及び生態 体長 40mm内外のアカトンボの仲間である。体色は橙黄色で、胸部や腹部に黒条斑はない。翅の前縁に沿って翅端まで橙黄色の帯があり、翅のつけ根から半分程度、橙黄色の部分が広がる美しい種である。丘陵地や低山地の森林に囲まれているような池沼などに生息し、成虫は7月下旬から12月上旬まで出現する。

近似種 同属のオオキトンボとは体長の大きさや翅の黄色部の広がり方等で区別ができる。

生息地 水戸市、那珂市、ひたちなか市、東海村、石岡市、笠間市、稲敷市、神栖市など、以前は県内各地に広く分布していたが、近年では県央地域の丘陵地に存在する池沼等で生息が確認されているに過ぎない。

生存の危機 生息地は極めて局限され、個体数は著しく減少している。絶滅が危惧される。

特記事項 東京都（絶滅）、神奈川県（絶滅）、千葉県（絶滅）、群馬県（絶滅危惧Ⅰ類）、埼玉県（絶滅危惧Ⅱ類）、栃木県（準絶滅危惧種）。

執筆者(協力者) 渡辺 健（廣瀬 誠）

文献 2), 6), 7), 9), 10), 21), 23), 36), 39), 44), 52)



撮影 染谷 保



選定理由 ①②③ 開発による池沼や湿地の埋め立て、改修・浚渫工事による植生の変化、管理不足による荒廃、生活排水の流入による水質の悪化などにより生息地が減少している。

分布状況 北海道、本州、四国、九州に分布する。

形態及び生態 体長は37mm内外のイトンボで、体色は淡い褐色である。成虫のまま越冬する数少ないトンボで、平地や低山地の挺水植物が繁茂する池沼や湿地に生息する。成虫は6月頃から出現する。発生地の周辺で生活して越冬し、翌春、生殖活動を行う。

近似種 ホソミオツネトンボに酷似するが、本種は閉じた翅の縁紋が重ならないことで区別できる。

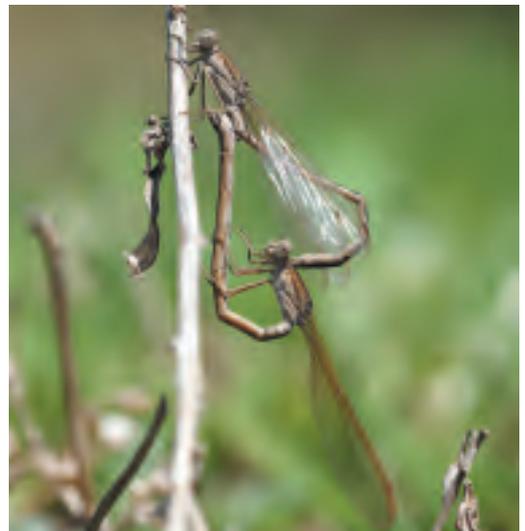
生息地 以前は県内各地に広く分布していたが、近年の生息地は北茨城市、大子町、高萩市、常陸太田市、常陸大宮市、東海村やつくば市、小美玉市などで確認されている。

生存の危機 生息環境が悪化しつつあり、生息地の減少および個体数の減少が懸念される。ホソミオツネトンボとの生息競合なども含めて種の存続への圧迫が強まっていると推測される。

特記事項 東京都（絶滅危惧Ⅰ類）、千葉県（絶滅危惧Ⅰ類）、神奈川県（絶滅危惧Ⅱ類）。

執筆者(協力者) 渡辺 健（廣瀬 誠）

文献 2), 6), 7), 9), 10), 14), 20), 21), 23), 36), 39), 52)



撮影 染谷 保



選定理由 ①②③ 生息地は水田脇の休耕田などの乾燥リスクが高い不安定な環境である場所が多く、近年の夏季の高温・乾燥条件で急激な環境悪化が進んでいる。また、県内の農業用溜池は浚渫工事や護岸工事が積極的に行われ、植生破壊が著しく生息に不適當な環境となってしまった。

分布状況 福島、新潟、埼玉より南西の本州、四国、九州に分布する（対馬、伊豆大島、下甕島の離島を含む）。

形態及び生態 体長 75mm内外で太い腹部を有する大形のヤンマである。体色は黒色が基本で、胸部や腹部の側面に黄緑色の斑紋がある。成虫は6～9月に出現し、マルタンヤンマやギンヤンマ、ヤブヤンマ等の他のヤンマ類と混じって黄昏活動をする。平地～丘陵地のヨシやマコモなどの植物が繁茂する池沼や湿地、水田などに生息するが、近くに樹林がある場所を好む性質が強い。

近似種 同属のアオヤンマも本種と同じような環境を好み、混生することがある。本種の形態はアオヤンマに酷似するが、体長はひとまわり大きく、体色が異なるので容易に区別できる。

生息地 県内では常陸太田市、常陸大宮市、那珂市、水戸市、大洗町、笠間市、石岡市、牛久市、神栖市などで記録がある。

生存の危機 幼虫・成虫に適する生息環境が悪化しつつあり、生息地および個体数の減少が懸念される。種の存続への圧迫が強まっていると判断される。

特記事項 東京都（絶滅危惧Ⅰ類）、神奈川県（絶滅危惧Ⅰ類）、千葉県（絶滅危惧Ⅰ類）、埼玉県（準絶滅危惧種）。

執筆者(協力者) 渡辺 健

文献 2), 5), 6), 7), 9), 10), 23), 31), 33), 36), 39), 40), 41), 46), 52)



撮影 染谷 保

茨城県 2016	● ● ● ● ● ● ● ● ● ●	絶滅危惧Ⅱ類	● ● ● ● ● ● ● ● ● ●
茨城県 2000		対象外	
環境省 2014	● ● ● ● ● ● ● ● ● ●	準絶滅危惧	● ● ● ● ● ● ● ● ● ●

選定理由 ①②③ 河川改修工事による植生の変化、河床の砂・礫の流下、水質汚濁などにより生息環境が悪化している。

分布状況 日本固有種・亜種であり、北海道と本州の東北部（長野県、山梨、群馬、栃木、茨城各県以北）に分布する。

形態及び生態 体長 40mm内外の小型で細身のサナエトンボである。山間部の森林に囲まれた溪流に生息し、成虫は5～7月に出現する。成虫の体色は黒色で、胸部前面および側面に淡黄緑色の斑紋がある。雄の胸部側面黒条は地域的な変異があり、本県の個体は黒条が基部より上部に向かうにつれて途中で消失する。

近似種 ダビドサナエやクロサナエおよびヒメクロサナエと酷似するが、胸部側面の黒条や尾部付属器を比較することでそれぞれ区別できる。これらの種は同一場所に混生することもある。

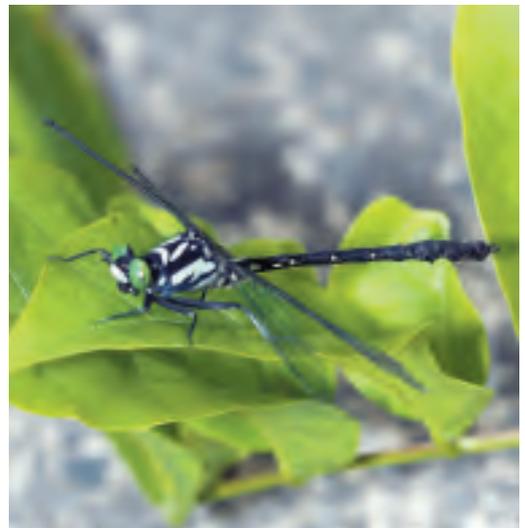
生息地 大子町、北茨城市、高萩市、常陸太田市などの県北山間地域の溪流域に限定的に分布する。

生存の危機 生息環境が悪化しつつあり、生息地および個体数の減少が懸念される。

特記事項 群馬県（絶滅危惧Ⅰ類）、栃木県（準絶滅危惧種）。

執筆者(協力者) 渡辺 健（廣瀬 誠）

文献 2), 7), 9), 10), 14), 15), 21), 23), 36), 39), 52)



撮影 染谷 保

茨城県 2016	● ● ● ● ● ● ● ● ● ●	絶滅危惧Ⅱ類	● ● ● ● ● ● ● ● ● ●
茨城県 2000		対象外	
環境省 2014		対象外	

選定理由 ①②③ 開発による池沼の埋め立て、改修・浚渫工事による植生の変化、管理不足による荒廃、外来魚の放流などにより生息環境が悪化している。

分布状況 北海道、本州、四国、九州に分布する。

形態及び生態 体長55mm内外の細身のトンボで、体色は胸部から腹部にかけて暗金緑色である。丘陵地から山間地の林間にある閉鎖的で薄暗く小さな池沼に生息し、成虫は6～10月に出現する。

近似種 同属のエゾトンボやハネビロエゾトンボに酷似するが、これら2種とは、雄は尾部付属器の形状で、雌は生殖弁の形状で区別できる。

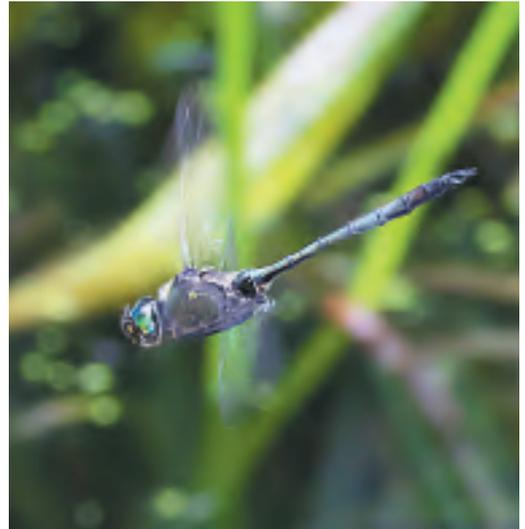
生息地 県北山地や筑波山系の丘陵～山間地にある池沼や小河川周辺に生息するが、減少傾向にある。

生存の危機 生息環境が悪化しつつあり、生息地および個体数の減少が懸念される。

特記事項 関東地方では千葉県で重要保護生物に指定、東北、北陸地方では絶滅危惧Ⅰ類～絶滅危惧Ⅱ類に指定している県が多い。

執筆者(協力者) 渡辺 健

文献 2), 6), 7), 9), 10), 13), 15), 21), 23), 36), 39), 44), 52)



撮影 染谷 保

茨城県2016	● ● ●	絶滅危惧Ⅱ類	● ● ●
茨城県2000		対象外	
環境省2014		対象外	

選定理由 ①②③ 開発による湿地、小河川の埋め立てや改修、管理不足による湿地の荒廃・乾燥など、生息環境の悪化が見られる。

分布状況 日本固有種であり、北海道、本州、四国、九州に分布する（佐渡、隠岐、対馬等の離島も含む）。

形態及び生態 体長60～70mm内外であるが、個体差が大きい。また、雄より雌の方が大きい。体色は全身が金属光沢のある濃い緑色で美しい。雄の未熟個体は胸部側面に黄色い斑紋があるが、成熟すると消える。平地から丘陵地の湿地や湿地内の細い流れ等に生息し、成虫は6～10月に出現する。

近似種 同属のエゾトンボと混生することがある。体形はエゾトンボよりがっしりした感があり、雄は尾部上部付属器の形により、雌は産卵弁と腹部の形により区別できる。

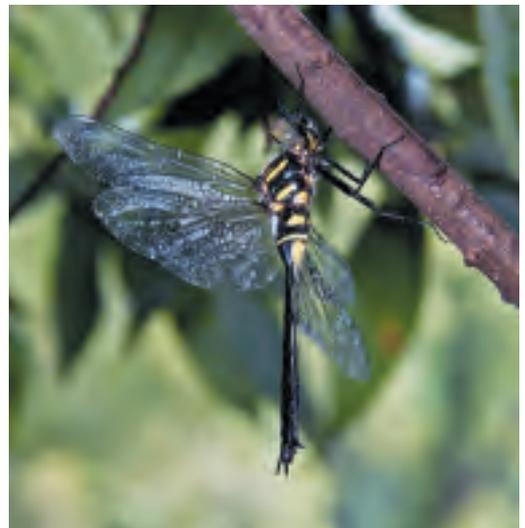
生息地 県内では主に水戸市や那珂市、ひたちなか市、大洗町、茨城町、小美玉市、笠間市の県央地域や石岡市などで記録がある。

生存の危機 生息地である湿地を流れる細流等および周囲の生息環境が悪化しつつあり、個体数、生息地の減少が懸念される。

特記事項 東京都（絶滅）、神奈川県（絶滅）、埼玉県（絶滅危惧Ⅰ類）、千葉県（絶滅危惧Ⅰ類）、栃木県（準絶滅危惧種）。

執筆者(協力者) 渡辺 健

文献 2), 7), 9), 10), 16), 20), 21), 23), 31), 36), 39), 44), 45), 52)



撮影 染谷 保

茨城県2016	● ● ●	絶滅危惧Ⅱ類	● ● ●
茨城県2000		対象外	
環境省2014	● ● ●	絶滅危惧Ⅱ類	● ● ●

選定理由 ①②③④ 河川の汚濁、改修工事による環境や植生の変化、管理不足による荒廃や伐採などによる生息環境の悪化が見られる。また、本種に対する採集圧は強い。

分布状況 本州、四国、九州に分布する。分布は広いが、産地は局部的である。

形態及び生態 体長 75mm内外の細身で大型のトンボで、成虫は 5 月下旬から 8 月に出現する。胸部は光沢のある金緑色で、側面には鮮やかな黄色の斑紋がある。低山地から平地を流れる、砂が多く堆積するような幅広い河川に生息する。

近似種 県内の産地では同属のコヤマトンボと混生する。本種は腹部第 3 節側面の黄色斑が黒条により途切れることでコヤマトンボと区別できる。

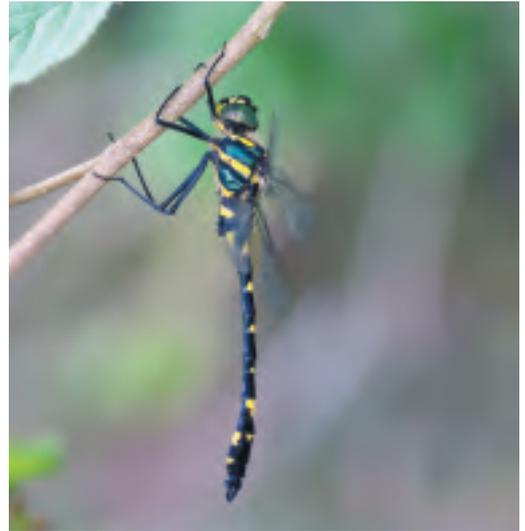
生息地 県北・県央地域を流れる山田川、里川、藤井川、涸沼川、涸沼前川流域、県西・県南地域を流れる小貝川、鬼怒川流域などで生息が認められている。

生存の危機 本種の生息する河川でも、幼虫の生息に適した川底に砂が多く流れの緩やかな範囲は限られている。河川ならびに周囲の生息環境が悪化しつつあり、個体数の減少が懸念される。

特記事項 東京都（絶滅）、埼玉県（絶滅危惧Ⅰ類）、千葉県（絶滅危惧Ⅰ類）。

執筆者(協力者) 渡辺 健(廣瀬 誠)

文献 2), 6), 7), 9), 10), 17), 19), 21), 23), 28), 35), 36), 39), 52)



撮影 染谷 保

茨城県 2016 ●●● 絶滅危惧Ⅱ類 ●●●

茨城県 2000 ●●● 危急種 ●●●

環境省 2014 ●●● 準絶滅危惧 ●●●

選定理由 ①②③ 開発による池沼の埋め立てや改修・浚渫工事による植生の変化、管理不足による荒廃、外来魚の放流などにより生息環境が悪化している。

分布状況 本州、四国、九州および周辺の離島に分布する。

形態及び生態 体長 40mm内外の中型のアカトンボで翅の先端には黒褐色の斑紋がある。平地から丘陵地にある周囲を樹林に囲まれた薄暗い環境の池沼に生息する。本種は移動性が低く、羽化水域近辺に留まることが多い。成虫は 7～10 月に出現する。体色は黄褐色で、成熟すると雄は腹部がやや朱色を帯びた赤色に、胸部は濃い褐色になる。

近似種 同属で翅の先端が黒褐色になる近似種にノシメトンボ、コノシメトンボの 2 種がある。これら 3 種は体の大きさならびに胸部側面の斑紋の形状で区別できる。

生息地 主に水戸市や那珂市、笠間市、城里町、茨城町、大洗町などの県央地域から記録があるが、分布は局限される。

生存の危機 生息環境が悪化しつつあり、生息地および個体数の減少が懸念される。

特記事項 千葉県（絶滅危惧Ⅰ類）、東京都（準絶滅危惧種）。

執筆者(協力者) 渡辺 健

文献 2), 6), 7), 9), 10), 21), 23), 31), 36), 38), 39), 46), 52)



撮影 染谷 保

茨城県 2016 ●●● 絶滅危惧Ⅱ類 ●●●

茨城県 2000 対象外

環境省 2014 対象外

選 定 理 由 ①②③ 開発による湿地の埋め立て、管理不足による休耕田の荒廃などにより生息環境が悪化し、生息地が減少している。

分 布 状 況 北海道、本州、四国、九州に分布し、周辺の離島では対馬など一部にのみ分布する。

形態及び生態 体長 30mm内外の小型で華奢なアカトンボである。平地や丘陵地の木立に囲まれた湿地や休耕田などに生息する。成虫は 7～10 月に出現し、体色は黄褐色をしている。雌の顔面額上部にある小さな眉斑の有無は、個体によって異なるが、雄には眉斑がない。成熟雄は腹部が赤色となり、顔面は白くなる。

近 似 種 同属のマユタテアカネ、マイコアカネに似るが、本種はマユタテアカネよりもひと回り小型で、雄は顔面に眉斑がない。また、それぞれの種は胸部側面の斑紋で区別できる。

生 息 地 県内の低地から山地にかけての湿地や池沼に生息するが局所的であり、個体数は多くない。

生存の危機 生息環境が悪化しつつあり、生息地の消滅および個体数の減少が懸念される。

特 記 事 項 千葉県（絶滅危惧Ⅰ類）、東京都（絶滅危惧Ⅱ類）、栃木県（準絶滅危惧種）、埼玉県（準絶滅危惧種）。

執筆者(協力者) 渡辺 健（廣瀬 誠）

文 献 2), 6), 7), 9), 10), 14), 20), 21), 23), 36), 39), 40), 44), 52)



撮影 染谷 保

茨城県 2016 ●●● 絶滅危惧Ⅱ類 ●●●

茨城県 2000 対象外

環境省 2014 対象外

選 定 理 由 ①②③ 河川改修工事による植生の変化、生活排水の流入などにより生息環境が悪化している。

分 布 状 況 青森県から鹿児島県にかけて、本州と九州に分布する。四国からは記録がない。

形態及び生態 体長 55mm内外のカワトンボの仲間で、成虫は 5～7 月に出現する。体色は金緑色で、雄の翅の色は青藍色で美しい。雌の翅の色は、薄茶色で翅の縁に白色の偽縁紋を有する。幼虫の生息は水質や周囲の環境に影響されやすく、平地から丘陵部のヨシなどの植物が繁茂する水のきれいな河川に生息する。

近 似 種 ハグロトンボに酷似し、混生することもあるが、本種はハグロトンボよりやや早く出現し、競合を避けている。

生 息 地 主に県北から県央地域を流れる河川の清流域で生息が確認されている。水戸市桜川では 40 年以上記録はないが、近年では桜川市、坂東市、つくば市でも記録がある。

生存の危機 生息環境が悪化しつつあり、生息地および個体数の減少が懸念される。種の存続への圧力が強まっていると判断される。

特 記 事 項 東京都（絶滅）、千葉県（絶滅）、神奈川県（絶滅危惧Ⅱ類）、埼玉県（準絶滅危惧種）。

執筆者(協力者) 渡辺 健（廣瀬 誠）

文 献 2), 6), 7), 9), 10), 21), 23), 30), 36), 39), 52)



撮影 染谷 保

茨城県 2016 ●●● 準絶滅危惧 ●●●●●

茨城県 2000 対象外

環境省 2014 ●●● 準絶滅危惧 ●●●●●

選定理由 ①②③ 開発による湿地や池沼の埋め立て、改修・浚渫工事による植生の変化、管理不足による荒廃、外来魚の放流などにより生息環境が悪化している。

分布状況 本州、四国、九州と、その周辺の離島に分布する。

形態及び生態 体長40mm内外の中型のイトトンボである。雄の腹部は鮮やかな黄色で美しい。雌の腹部は黄褐色あるいは黄緑色となる。平地から低山地にかけてのヨシやマコモなどの多くの水生植物の茂る池沼や湿地・休耕田などに生息し、成虫は5～8月に出現する。

近似種 形態は同属のベニイトトンボに酷似するが、体色が黄色と異なるので容易に区別できる。

生息地 県内の湿地や休耕田、湖沼に広く分布しているが、各地とも急激に減少傾向にある。

生存の危機 生息環境が悪化しつつあり、生息地および個体数の減少が懸念される。

特記事項 東京都（絶滅危惧Ⅰ類）、神奈川県（絶滅危惧Ⅰ類）、千葉県（絶滅危惧Ⅱ類）、埼玉県（準絶滅危惧種）。

執筆者(協力者) 渡辺 健

文献 2), 6), 7), 9), 10), 15), 20), 21), 23), 36), 39), 40), 44), 52)



撮影 染谷 保

茨城県2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県2000		対象外	
環境省2014		対象外	

選定理由 ①②③ 開発による湿地や池沼の埋め立て、改修・浚渫工事による植生の変化、管理不足による荒廃、外来魚の放流などにより生息環境が悪化している。

分布状況 日本固有種であり、北海道および新潟、長野、群馬、栃木、茨城県以北の東北地方に分布する。

形態及び生態 体長35mm内外のやや華奢な感じがするイトトンボである。成虫は5～7月に出現し、ヨシ・ガマなどが繁茂する池沼や湿地、休耕田などに生息する。雄の体色は青味が強い水色で雌は白色がかった水色である。

近似種 同属のエゾイトトンボに酷似するが、腹部第2節背面のワングラス状の斑紋で区別できる。

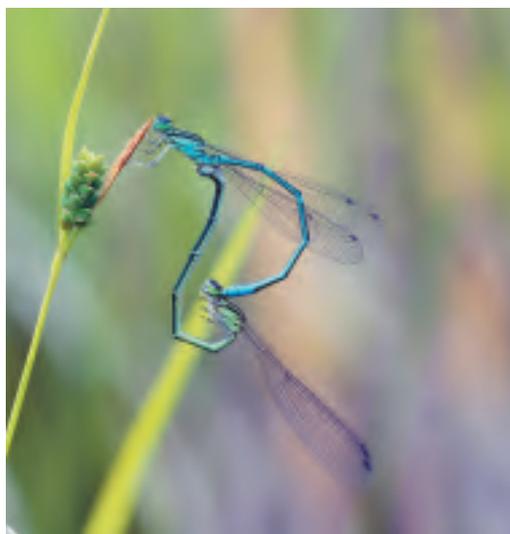
生息地 県北から県央地域を中心に、山間部から低湿地、休耕田などに広く分布している。東海村、ひたちなか市の生息地は海に最も近接した低地である。湿地の荒廃・乾燥化により減少傾向にある。

生存の危機 生息環境が悪化しつつあり、生息地の埋め立て、個体数の減少が懸念される。

特記事項 埼玉県（絶滅）。

執筆者(協力者) 渡辺 健（廣瀬 誠）

文献 2), 6), 7), 9), 10), 12), 14), 15), 20), 21), 23), 36), 39), 40), 44), 52)



撮影 染谷 保

茨城県2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県2000	●	希少種	● ● ● ●
環境省2014		対象外	

選定理由 ①②③ 開発による池沼の埋め立て、改修・浚渫工事による植生の変化、管理不足による荒廃、外来魚の放流などにより生息環境が悪化している。

分布状況 北海道、本州、四国、九州、および周辺の離島に分布する。

形態及び生態 体長 30mm内外のイトトンボで、平地や丘陵地の浮葉植物などの抽水植物が多い池沼や、河川の流れの緩やかな場所などに生息する。成虫は 5～10 月に出現し、成熟した雄の体色は青色、雌の体色は緑色～黄褐色になる。胸部背側の肩縫線上黒条に淡色条斑がある。

近似種 同属のオオイトトンボやムスジイトトンボと混生することがある。形態はそれぞれ酷似しているため、見分けは難しい。眼後紋の形や大きさ、後頭条および肩縫線上黒条の淡色部の有無が見分けのポイントとなる。

生息地 県内の池沼に広く分布しているが、山間地、平地とも急速に減少傾向にある。

霞ヶ浦沿岸一帯は安定した生息地であったが、水生植物群落の荒廃で絶滅した。

生存の危機 生息環境が悪化しつつあり、生息地の縮小および個体数の減少が懸念される。

特記事項 東京都（絶滅危惧Ⅰ類）、千葉県（絶滅危惧Ⅱ類）。

執筆者(協力者) 渡辺 健（廣瀬 誠）

文献 2), 6), 7), 9), 10), 20), 21), 23), 31), 36), 39), 40), 52)



撮影 染谷 保

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県 2000		対象外	
環境省 2014		対象外	

選定理由 ①②③ 開発による湿地や池沼の埋め立て、改修・浚渫工事による植生の変化、管理不足による荒廃、外来魚の放流などにより生息環境が悪化している。

分布状況 宮城県以南の本州、四国、九州および周辺の離島ならびに南西諸島、南北大東島などに分布する。

形態及び生態 体長 30mm内外のイトトンボである。成虫は 5～10 月に出現し、平地のヨシやガマなどの抽水植物が繁茂する池沼や湿地、休耕田などに生息している。成熟した雄の体色は明るい青色で、腹部の第 8～9 節はほとんど全体が青色で、腹部の背中側の黒色条が 6 個に分かれている。雌の体色は黄緑色である。

近似種 同属のセスジイトトンボ、オオイトトンボと混生することがある。形態はそれぞれ酷似しているため、見分けは難しい。眼後紋の形や大きさ、後頭条および肩縫線上黒条の淡色部の有無が見分けのポイントとなる。

生息地 県南から県西地域の池沼を中心に分布しているが生息地は局限される。日立市や小美玉市、つくば市、土浦市、美浦村などで生息が確認されている。

行方台地上の農業用溜め池には多産した池も多く存在したが、外来魚の放流後、絶滅した。

生存の危機 生息環境が悪化しつつあり、生息地および個体数の減少が懸念される。

特記事項 千葉県（絶滅危惧Ⅰ類）、東京都（準絶滅危惧種）。

執筆者(協力者) 渡辺 健（廣瀬 誠）

文献 2), 6), 7), 9), 10), 20), 23), 24), 36), 39), 52)



撮影 染谷 保

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県 2000		対象外	
環境省 2014		対象外	

選定理由 ①②③ 開発による湿地の埋め立て、管理不足による休耕田の荒廃などにより生息環境が悪化し、生息地が減少している。

分布状況 北海道南端部、本州、四国、九州に分布する。

形態及び生態 体長 25mm内外の小型のイトトンボである。平地から中山間地の抽水植物が豊富な湿地や休耕田などに生息し、成虫は6～8月に出現する。成熟した雄の胸部は緑色、腹部は橙赤色で美しい。雌の体色は全身緑黄色で腹部背面に黒条がある。

近似種 同属のヒヌマイイトトンボとは混生せず、体色や斑紋、大きさも異なる。

生息地 低地から山地にかけて湿地、水量の安定している休耕田等に広く分布しているが、急激に減少傾向にある。

生存の危機 植生の遷移によって生息環境が悪化しつつあり、生息地および個体数の減少が懸念される。

特記事項 東京都（絶滅）、神奈川県（絶滅危惧Ⅰ類）、千葉県（絶滅危惧Ⅰ類）、群馬県（絶滅危惧Ⅰ類）、埼玉県（絶滅危惧Ⅱ類）。

執筆者(協力者) 渡辺 健(廣瀬 誠)

文献 2), 6), 7), 9), 10), 12), 14), 15), 21), 23), 36), 39), 44), 52)



撮影 染谷 保

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県 2000		対象外	
環境省 2014	●	準絶滅危惧	● ● ● ●

選定理由 ①②③ 砂防ダムなどの建設工事、河川改修工事による河床の変化、水質汚濁などにより生息環境が悪化している。

分布状況 日本固有種であり、北海道、本州、四国、九州に分布するが、宮城県と千葉県では記録されていない。

形態及び生態 体長 50mm内外の中型のトンボであり、森林に囲まれた水のきれいな沢や溪流に生息する。成虫は4～6月に出現する。成虫の体色は黒色で、胸部前面および側面に黄色の帯状斑紋があり、腹部にも節ごとに黄色斑紋がある。成熟個体の複眼は灰色で、左右に離れ、翅の形はイトトンボやカワトンボに似ている。トンボの系統である均翅亜目と不均翅亜目の両方の特徴を持つ原始的なトンボ「生きている化石」として知られる。

近似種 日本には近似種はいない。

近似種ヒマラヤムカシトンボ *E. laidlawi* はヒマラヤに分布し、2012年中華人民共和国の北東部から新種 *E. sinensis* (和名新称：チャバラムカシトンボ) が記載された。

生息地 北茨城市、高萩市、大子町、常陸太田市、常陸大宮市、城里町、笠間市、桜川市、石岡市、つくば市の10市町に生息する。

生存の危機 生息環境が悪化しつつあり、生息地の荒廃および個体数の減少が懸念される。

特記事項 群馬県（絶滅危惧Ⅰ類）、栃木県（準絶滅危惧種）、埼玉県（準絶滅危惧種）。

執筆者(協力者) 渡辺 健(廣瀬 誠)

文献 2), 6), 7), 9), 10), 12), 13), 14), 15), 21), 23), 36), 39), 51), 52)



撮影 染谷 保

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県 2000	●	希少種	● ● ● ●
環境省 2014		対象外	

選定理由 ①②③ 開発による湿地の埋め立て、管理不足による休耕田の荒廃などにより生息環境が悪化し、生息地が減少している。

分布状況 日本特産種であり、北海道、本州、四国、九州に分布する。種子島、屋久島、隠岐、対馬にも分布する。

形態及び生態 体長 65mm内外の小型のヤンマで、体色は黒色に黄色～黄緑色の斑紋がある。里山的環境の保存されている平地から丘陵地の湿地や休耕田などに生息し、成虫は 5～6 月に出現する。

近似種 本土には近似種はいない。沖縄本島には同属のオキナワサラサヤンマが分布している。

生息地 県内の低地から丘陵地の湿地や小河川に広く生息するが、減少傾向にある。

生存の危機 生息環境が悪化しつつあり、生息地の荒廃および個体数の減少が懸念される。

特記事項 東京都（絶滅危惧Ⅰ類）、神奈川県（絶滅危惧Ⅰ類）、群馬県（絶滅危惧Ⅰ類）、栃木県（準絶滅危惧種）、埼玉県（準絶滅危惧種）、千葉県（準絶滅危惧種）。

執筆者(協力者) 渡辺 健

文献 2), 6), 7), 9), 10), 20), 21), 23), 31), 36), 39), 40), 44), 52)



撮影 染谷 保

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県 2000		対象外	
環境省 2014		対象外	

選定理由 ①②③ 開発による池沼の埋め立て、改修・浚渫工事による植生の変化、管理不足による荒廃、外来魚の放流などにより生息環境が悪化している。

分布状況 北海道南部、本州、四国、九州に分布する。離島では対馬で記録されている。

形態及び生態 体長 75mm内外の大型で腹部が太いヤンマである。体色は全身が黄緑色～青緑色で美しい。ヨシやガマ、マコモなどの植物が繁茂している池沼や湿地などに生息し、成虫は 5～8 月に出現する。

近似種 本種の体形は同属のネアカヨシヤンマに酷似するが、体長はひとまわり小さく、体色が異なるので容易に区別できる。

生息地 県内のヨシなどが密生した池沼に広く分布するが、生息地、個体数ともに減少傾向にある。

生存の危機 生息環境が悪化しつつあり、生息地の植生の変化および個体数の減少が懸念される。

特記事項 神奈川県（絶滅）、東京都（絶滅危惧Ⅰ類）、栃木県（絶滅危惧Ⅰ類）、群馬県（絶滅危惧Ⅰ類）、千葉県（絶滅危惧Ⅰ類）、埼玉県（絶滅危惧Ⅱ類）。

執筆者(協力者) 渡辺 健

文献 2), 6), 7), 9), 10), 20), 23), 31), 36), 39), 40), 44), 52)



撮影 染谷 保

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県 2000	●	希少種	● ● ● ●
環境省 2014	●	準絶滅危惧	● ● ● ●

選定理由 ①②③④ 開発による池沼の埋め立て、改修・浚渫工事による植生の変化、管理不足による荒廃、外来魚の放流などにより生息環境が悪化している。また、本種に対する採集圧は強い。

分布状況 日本固有亜種であり、北海道、本州（福井、石川、長野県以北）に分布する。

形態及び生態 体長 70mm内外でルリボシヤンマ属のなかでは最も小型である。雄は成熟すると複眼と腹部の斑紋が青色となり、美しい。また、雌の腹部斑紋は青色と黄緑色になる 2 型がある。主に平地～丘陵地のヨシやガマ、マコモなどの水生植物が繁茂する池沼に生息し、成虫は 8～10 月に出現する。

近似種 同属のルリボシヤンマやオオルリボシヤンマに似るが、本種は最も小型で胸部や腹部の斑紋の色等で他種との区別は容易である。

生息地 県内のヨシなどが密生した池沼に生息するが、減少傾向にある。

生存の危機 生息環境が悪化しつつあり、生息地の消滅および個体数の減少が懸念される。

特記事項 東京都（絶滅）、埼玉県（絶滅危惧Ⅰ類）、群馬県（絶滅危惧Ⅰ類）、栃木県（準絶滅危惧種）。

執筆者(協力者) 渡辺 健

文献 2), 7), 9), 10), 11), 21), 23), 27), 31), 36), 39), 40), 43), 44), 52)



撮影 染谷 保

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	●	●	●
茨城県 2000		対象外			
環境省 2014	●	準絶滅危惧	●	●	●

選定理由 ①②③ 山地湿原の乾燥・荒廃、開発による池沼の埋め立て、改修・浚渫工事による植生の変化などにより生息環境が悪化している。

分布状況 北海道、本州、四国に分布する。

形態及び生態 体長 80mm内外の大型のヤンマで中山間地の小規模な池沼や湿地に生息する。成虫は 7～10 月に出現する。体色は黒褐色で、胸部側面から腹部にかけて黄緑色の斑紋がある。成熟した雄の腹部斑紋の一部は青色となる。

近似種 同属のオオルリボシヤンマに似るが、本種はやや細身で小型である。胸部側面の斑紋形状の違いから区別できる。

生息地 大子町、北茨城市、高萩市、日立市、常陸太田市、水戸市、石岡市などの丘陵や山間にある池沼や湿地で記録がある。

生存の危機 生息環境が悪化しつつあり、生息地の荒廃および個体数の減少が懸念される。

特記事項 東京都（準絶滅危惧種）、埼玉県（準絶滅危惧種）。

執筆者(協力者) 渡辺 健

文献 2), 7), 9), 10), 14), 21), 23), 36), 39), 52)



撮影 染谷 保

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	●	●	●
茨城県 2000		対象外			
環境省 2014		対象外			

選定理由 ①②③ 河川改修工事による植生の変化、水質汚濁などにより生息環境が悪化している。

分布状況 日本特産種であり、関東・上信越地方より西南の本州、四国、九州に分布する。

形態及び生態 体長 65mm内外の大型のサナエトンボで平地～丘陵地の水田用水などの砂泥の多い緩やかな流れに生息する。成虫は 5 月～7 月に出現し、体色は黒色で胸部側面から腹部にかけて黄色斑紋がある。

近似種 同属のヤマサナエに酷似しているが、ヤマサナエは、やや上流に生息し、分布域も広い。雄成虫の尾部付属器や翅胸の第 1 側縫合線の黒色条で区別できる。

生息地 県央から県南、県西地域の小河川に分布するが生息地は局限される。

生存の危機 生息環境が悪化しつつあり、生息地の水質汚濁および個体数の減少が懸念される。

特記事項 東京都（絶滅）、神奈川県（絶滅危惧Ⅰ類）、千葉県（絶滅危惧Ⅰ類）、栃木県（準絶滅危惧種）、埼玉県（準絶滅危惧種）。

執筆者(協力者) 渡辺 健

文献 2), 6), 7), 9), 10), 13), 18), 20), 23), 26), 36), 39), 52)



撮影 染谷 保

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県 2000	●	希少種	● ● ● ●
環境省 2014	●	準絶滅危惧	● ● ● ●

選定理由 ①②③ 河川改修工事による植生の変化、水質汚濁などにより生息環境が悪化している。

分布状況 日本特産種であり、本州、四国、九州に分布するが、局所的である。

形態及び生態 体長 65mm内外の大型のサナエトンボで、成虫は 7～10 月に出現する。雄成虫の腹部第 7～9 節は左右に広がり特徴的である。主に平地の大河川下流域や河口の汽水域、汽水湖沼にも生息する。

近似種 同属のメガネサナエに酷似するが、メガネサナエとは腹部第 7 節の黄色の斑紋の形状で区別できる。

生息地 那珂川、涸沼川、涸沼前川、鬼怒川、小貝川利根川の中流～下流域、涸沼、菅生沼沿岸などに生息する。

生存の危機 生息環境が悪化しつつあり、生息地の水質悪化および個体数の減少が懸念される。

特記事項 千葉県（絶滅危惧Ⅰ類）、群馬県（絶滅危惧Ⅱ類）、埼玉県（準絶滅危惧種）。

執筆者(協力者) 渡辺 健（廣瀬 誠）

文献 2), 6), 7), 9), 10), 12), 13), 18), 20), 21), 23), 36), 37), 39), 40), 52)



撮影 染谷 保

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県 2000		対象外	
環境省 2014	●	絶滅危惧Ⅱ類	● ● ● ●

選定理由 ①②③ 開発による池沼の埋め立て、改修・浚渫工事による植生の変化、管理不足による荒廃、外来魚の放流などにより生息環境が悪化している。

分布状況 岩手県、秋田県以南の本州、四国、九州に分布する。

形態及び生態 体長 55mm内外の中型のトンボ。エゾトンボ科の種であるが、体色は金緑色ではなく、胸部は黄褐色に黒色条斑を有し、腹部は黒色と黄色の虎斑模様である。平地から丘陵地のヒシなどの水生植物が豊富な池沼に生息し、成虫は 4～6 月に出現する。雄の翅は透明であるが、雌の翅は透明の型と前縁が黒褐色になる型が現れる。雌は産卵の際、ゼラチン質の細い紐状の卵塊を作り、卵塊は水中で水生植物に絡みつく。

近似種 同属のオオトラフトンボに似るが、オオトラフトンボは本県に分布していない。

生息地 県内の低地から丘陵地の池沼に広く生息するが、どこでも個体数は少なく、減少傾向にある。

生存の危機 生息環境が悪化しつつあり、生息地の減少および個体数の激減が懸念される。

特記事項 東京都（絶滅）、神奈川県（絶滅）、埼玉県（絶滅危惧Ⅰ類）、千葉県（絶滅危惧Ⅰ類）、群馬県（絶滅危惧Ⅰ類）、栃木県（絶滅危惧Ⅱ類）。

執筆者(協力者) 渡辺 健

文献 2), 3), 6), 7), 9), 10), 21), 23), 36), 39), 40), 44), 52)



撮影 染谷 保

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県 2000		対象外	
環境省 2014		対象外	

選定理由 ①②③ 開発による池沼の埋め立て、改修・浚渫工事による植生の変化、管理不足による荒廃、外来魚の放流などにより生息環境が悪化している。

分布状況 北海道、本州、四国、九州に分布し、周辺の離島にも見られる。

形態及び生態 体長 45mm内外のアカトンボで、翅の先端に黒褐色の斑紋がある。平地から丘陵地にかけての開放的な池沼や水田などに生息し、時に人工的な池やプールで発生することもある。このため、都市公園などで記録されることが多い。成虫は 6～11 月に出現し、成熟すると雄は全身が赤色となる。

近似種 同属の種で翅の先端が黒褐色になる近似種にノシメトンボ、リスアカネの 2 種がある。これら 3 種は大きさや胸部側面の斑紋の形状で区別できる。

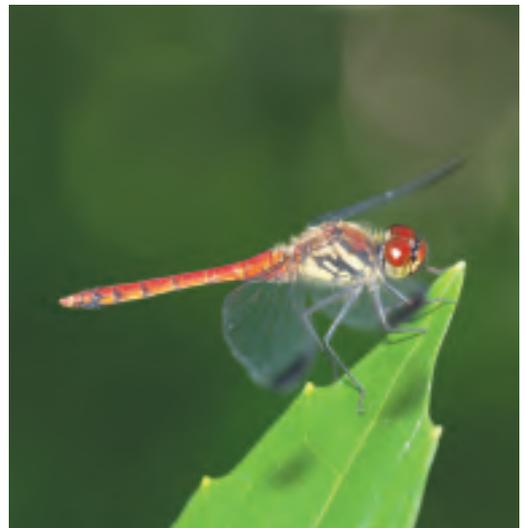
生息地 県南から鹿行、県西、県央地域に広く生息するが、個体数は少なく、発生地は局所的である。

生存の危機 生息環境が悪化しつつあり、生息地の埋め立てによる個体数の減少が懸念される。

特記事項 千葉県（準絶滅危惧種）。

執筆者(協力者) 渡辺 健（廣瀬 誠）

文献 2), 4), 6), 7), 9), 10), 13), 21), 23), 29), 36), 38), 39), 40), 52)



撮影 染谷 保

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県 2000		対象外	
環境省 2014		対象外	

選定理由 ①②③ 開発による小河川の埋め立てや改修による植生の変化、水質汚濁などにより生息環境が悪化している。

分布状況 北海道、本州、四国、九州に分布する。国後、奥尻、佐渡などの離島にも見られる。

形態及び生態 体長 35mm内外のアカトンボで、翅の縁紋内側に褐色の太い帯がある。平地から中山間地の水田脇の緩やかで小さな流れなどに生息し、成虫は7～11月に出現する。成熟した雄は翅脈や縁紋を含めて全身が赤色となり美しい。

近似種 翅の特徴的な斑紋から他のアカネ類と容易に区別できる。

生息地 昭和年代は県内各地に広く生息していたが、著しく減少した。近年では北茨城市や高萩市、日立市、常陸太田市、常陸大宮市、城里町、笠間市の県北・県央地域や石岡市などで生息が確認されている。

生存の危機 生息環境が悪化しつつあり、生息地の減少および個体数の急減が懸念される。

特記事項 千葉県（絶滅）、東京都（絶滅危惧Ⅱ類）、神奈川県（準絶滅危惧種）。

執筆者(協力者) 渡辺 健

文献 1), 2), 6), 7), 9), 10), 15), 21), 23), 36), 39), 50), 52)



撮影 染谷 保

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県 2000		対象外	
環境省 2014		対象外	

選定理由 ①②③ 開発による池沼の埋め立てや改修・浚渫工事による植生の変化、管理不足による荒廃、外来魚の放流などにより生息環境が悪化している。

分布状況 福島県より南西の本州、四国、九州に分布し、九州の周辺離島にもみられる。

形態及び生態 体長 45mm内外のやや大型のアカトンボ。体色は黄褐色で胸部側面に2本の太い黒色条斑と、翅の基部に橙色斑を有する。幼虫は平地から山地の水生植物が豊富な池沼に生息し、成虫は6～10月に出現する。本種は移動性が強く、時に人工的な池やプールで発生することもある。

近似種 キトンボは本種同様に翅の基部に橙色斑を有するが、翅の橙色部分の面積や胸部側面の黒色条斑の有無などで区別できる。

生息地 水戸市、大子町、北茨城市、高萩市、常陸太田市、日立市、那珂市、笠間市、石岡市などで記録があるが、継続的に記録される事例は少ない。石岡市の学校プールで発生が継続した事例がある。

生存の危機 各地で生息環境が悪化しつつあり、生息地および個体数の減少が懸念される。

特記事項 千葉県（絶滅危惧Ⅰ類）。

執筆者(協力者) 渡辺 健(廣瀬 誠)

文献 2), 7), 9), 10), 12), 14), 15), 22), 23), 32), 36), 39), 48), 49), 52)



撮影 染谷 保

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県 2000		対象外	
環境省 2014		対象外	

選定理由 ①②③ 山地湿原の乾燥・荒廃、開発による湿地の埋め立て、水源地の埋没、管理不足による休耕田の荒廃などにより生息環境が悪化している。

分布状況 本州、四国、九州に分布する。周辺の離島では見られない。

形態及び生態 体長 18mm内外の日本で一番小さいトンボである。平地や丘陵地、中山間地にある日当たりの良い、草丈の低い植物が多く生えている水深の浅い湿地や休耕田跡などに生息し、成虫は5～9月に出現する。成熟すると雄の体色は全身鮮やかな赤色となり、雌は茶褐色で、腹部に黄色や黒色の横縞状の斑紋がある。また、翅の基部は橙黄色になる。

近似種 近似種はいない。極めて小さなトンボであるため、他のアカネ類との区別は容易である。

生息地 県内の湿地や休耕田などに広く生息しているが、山間地・低地とも減少傾向にある。

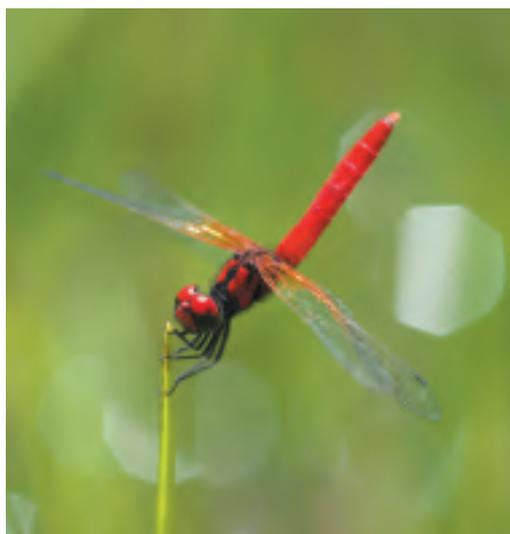
県南ではつくば市と土浦市を結ぶ丘陵地や台地上の湿地が生息地の南限となり、県西の桜川市が分布の西限となる。

生存の危機 生息環境が悪化しつつあり、生息地の荒廃および個体数の減少が懸念される。また、採集圧も強い。

特記事項 東京都（絶滅）、埼玉県（絶滅）、群馬県（絶滅危惧Ⅰ類）。

執筆者(協力者) 渡辺 健(廣瀬 誠)

文献 2), 6), 7), 9), 10), 12), 13), 14), 15), 20), 21), 23), 36), 39), 44), 52)



撮影 染谷 保

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	●	●	●
茨城県 2000	●	希少種	●	●	●
環境省 2014		対象外			

選定理由 ①②③ 開発による湿地の埋め立て、管理不足による休耕田の荒廃などにより生息環境が悪化している。

分布状況 北海道南部、本州、四国、九州および周辺の離島に分布する。

形態及び生態 体長 35mm内外の小型のトンボで、腹部は太く扁平で短い。腹部の特徴は雄より雌の方が顕著である。平地から丘陵地にある水深の浅い池沼や湿地、休耕田などに生息し、成虫は5～8月に出現する。成熟雄の体色は全身が黒化し、腹部背面にシオカラトンボと同じような青白い粉をふく。

近似種 本土には近似種は分布していない。沖縄本島～琉球列島にはオオハラビロトンボが、西表島にはキイロハラビロトンボが分布する。

生息地 県内の低地の湿地や休耕田などに広く生息しているが、減少傾向にある。

生存の危機 生息環境が悪化しつつあり、生息地の植生の変化および個体数の減少が懸念される。

特記事項 千葉県（絶滅危惧Ⅰ類）、東京都（絶滅危惧Ⅱ類）。

執筆者(協力者) 渡辺 健(廣瀬 誠)

文献 2), 6), 7), 9), 10), 20), 21), 23), 31), 36), 39), 40), 44), 52)



撮影 染谷 保

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	●	●	●
茨城県 2000		対象外			
環境省 2014		対象外			

選定理由 ①②③ 開発による池沼の埋め立てや改修・浚渫工事による植生の変化、管理不足による荒廃、外来魚の放流などにより生息環境が悪化している。

分布状況 日本固有亜種であり、北海道、本州、四国、九州および周辺の離島に分布する。

形態及び生態 体長 45mm内外。太く扁平な腹部を有するずんぐりとした体形の中型のトンボである。平地や丘陵地の水生植物が繁茂した池沼や湿地に生息し、成虫は 4 月から 7 月に出現する。成虫の体色は黄褐色で黒色の斑紋を有し、翅の結節付近に特徴的な黒褐色の斑紋がある。

近似種 同属のベッコウトンボに似るが、本種の方がやや大きく、翅の紋様が小さいことで区別できる。

生息地 県内の低地から山地にかけての湿地や池沼などに広く生息しているが、年により発生数が変動し、各地で減少傾向にある。

生存の危機 生息環境が悪化しつつあり、生息地の荒廃および個体数の減少が懸念される。

特記事項 東京都（絶滅危惧Ⅰ類）、千葉県（絶滅危惧Ⅰ類）、神奈川県（絶滅危惧Ⅱ類）、埼玉県（準絶滅危惧種）、栃木県（準絶滅危惧種）。

執筆者(協力者) 渡辺 健(廣瀬 誠)

文献 2), 6), 7), 9), 10), 20), 21), 23), 31), 36), 39), 40), 44), 52)



撮影 染谷 保

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県 2000		対象外	
環境省 2014		対象外	

選定理由 ①③ トワダカワゲラは東北地方を中心に生息しており、茨城県は本種の分布のほぼ南限と考えられる。本県における生息地は極限されているが、林道建設や森林伐採による生息環境の変化で生息数は減少傾向にある。

分布状況 東北地方全域と茨城、栃木、新潟の各県に分布。

形態及び生態 成虫の体長は約 20 ~ 25mm。雌雄ともに無翅型。体色は光沢のある褐色または暗褐色である。頭部には単眼がなく、長い触角をもつ。胸部背板の前隅角と後隅角は突出しており、この形状は種によって特徴がある。幼虫は山地の水温の低い沢や湧水の礫が堆積したところや落葉の下などに生息している。幼虫の腹部第 9 節と 10 節の間には花環状の気管鰓があり、この形態は他の科と区別するための重要な特徴である。成虫の出現は 10 月頃からで、羽化後約 1 ヶ月頃に交尾・産卵する。

近似種 本州に生息する同属のミネトワダカワゲラ *Scopura montana* Maruyama に似るが、メスは前胸や亜生殖板の形態、オスは胸部、肛上板や交尾器の特徴で識別できる。幼虫での識別は難しい。

生息地 八溝山地や阿武隈山地の標高約 500m 以上の川や沢、湧水に生息する。北茨城市、大子町、常陸太田市、高萩市で採集されている。

生存の危機 本種の生息には安定した水量・低水温、河床環境が維持される必要がある。県北地域の林道建設や森林伐採は明らかに本種の生息環境を破壊しており、個体数減少の原因となっている。

特記事項 岩手県、宮城県、栃木県ではレッドデータブックに掲載されている。2000 年版ではミネトワダカワゲラとされた。

執筆者(協力者) 岸本 亨

文献 2), 3), 8), 10), 11), 12), 13), 14), 15), 16)



撮影 佐々木泰弘



撮影 今井初太郎

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県 2000		対象外	
環境省 2014		対象外	

選定理由 ①③ 幼虫は河川の中・下流域の流れの緩やかな場所に生息し、河川改修や増水・氾濫などによる影響を非常に受けやすい。生息地では個体数が少なく、分布も極限されている。

分布状況 本州の東北地方から中部地方に分布。採集が困難な種のひとつである。

形態及び生態 成虫の体長は 20mm 前後の中型のカワゲラ類である。頭部は大きく、橙色の斑紋が特徴的である。河川の中・下流域に生息し、幼虫は流れの緩い瀬や平瀬で見つかる。幼虫は夏に採集されることはないが、12 月頃には終令に近い体形の幼虫が採集される。本県における成虫の出現時期は 3 月初旬頃であり、産卵は 4 月頃と考えられる。詳しい生態はわかっていない。

近似種 日本産は 1 属 1 種であり、成虫は頭部や胸部の斑紋などに特徴があり、識別は難しくない。幼虫も特徴的な斑紋と腹部体節の特徴により識別できるが、若齢幼虫は慣れないと難しい。

生息地 水戸市(那珂川)、友部町(酒沼川)、那珂市・常陸大宮市・大子町(久慈川)、水府村(山田川)からの記録があるが、最近の記録は久慈川のみである。

生存の危機 本県では、久慈川以外の生息地の状況が不明であるが、那珂川では採集が困難になっている。久慈川では生息地を数か所確認しているが、年によって個体数の変動が大きく、採集できない年もある。本種は流されやすい性質が見られ、増水や河川改修による影響を受けやすいと考えられる。

特記事項 長野県では絶滅危惧 I 類、栃木県では絶滅危惧 II 類、埼玉県では準絶滅危惧種、滋賀県では情報不足種に選定されている。

執筆者(協力者) 岸本 亨

文献 1), 2), 6), 7), 17)



撮影 岸本 亨

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県 2000		対象外	
環境省 2014	●	準絶滅危惧	● ● ● ●

選定理由 ①③ 採集個体数も少ないことから、本種の生息地自体が少ないと考えられるが、調査不足の感もあり、カテゴリーは情報不足とした。

分布状況 本州と九州に分布。分布記録は非常に少ない。

形態及び生態 成虫の体長は 30mm 前後の大型のカワゲラ類である。体色は頭部が黒く、胸部から腹部にかけて黒地に黄色の縁取りがある。生息地は自然がよく残された山麓の溪流で、集落の現れる上流に限られていると考えられている。幼虫も成虫と似た形態的特徴をもつ。成虫は 4～5 月に羽化出現する。詳しい生態はわかっていない。

近似種 近似種はいない。

生息地 常陸太田市里川町、大子町で採集・記録されている。

生存の危機 極めて生息地が限られており、しかも個体数が少ないため、何らかの理由で生息地が破壊されると絶滅するおそれがある。

特記事項

執筆者(協力者) 岸本 亨

文献 4), 5), 7), 9), 17)



撮影 今井初太郎

茨城県 2016 情報不足①注目種 ●●●●

茨城県 2000 対象外

環境省 2014 対象外

選 定 理 由 ①③ 山間部の源流域に生息するが、生息域周辺の岩石移動や湧水域の植生変化で個体数が減少している。

分 布 状 況 日本固有種で、本州の山間地域に分布。

形態及び生態 成虫は体長 20～30mmで、全体に淡褐色～暗褐色。幼虫は乳白色。体型はやや扁平で翅はない。山間地域の朽木や落葉の下、あるいは石の下などの湿潤な環境に潜み、夜行性。新成虫は秋期に現れ、小昆虫などを補食する。

近 似 種 日本産は 6 種。やや小型で体色が濃く、より高標高地にはヒメガロアムシ *G. yuasai* Asahina が生息する。

生 息 地 八溝山地、花園山地、筑波山地の標高 400m 以上の林床の岩石の下や土壌中あるいは溪流の岩石の下などに生息する。

生存の危機 近年の山間部の砂防ダム工事や林道整備などによって溪流周辺の岩石や土壌が移動し、生息環境が大きく変化してしまった。

特 記 事 項 直翅目系昆虫の原始的グループで、幼虫は 7 年内外に 7～8 回の不完全変態をし、成虫は雌で約 1 年間は生存する。

執筆者(協力者) 内船俊樹・大桃定洋

文 献 1), 2), 3)



撮影 佐々木泰弘

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県 2000	●	希少種	● ● ● ●
環境省 2014		対象外	

選 定 理 由 ①②③ 茨城県で唯一の記録があった高萩市の生息地では、20年以上生息が確認されていない。

分 布 状 況 本州、四国、九州。茨城県が北限。

形態及び生態 体長18mm内外。全体漆黒で雌の触角の中ほどが白いが、雄ではそれが無い。畑の土手や山沿いの水田の畦などに穴を掘ってすみ、7月頃夕方からキチキチキチと高い声で鳴く。多数発生する場所では群生する。比較的生息地が多い千葉県での観察では耕作地周辺や希に市街地付近に生息する例があり、人為的に草地の状態を維持した環境が適しているようである。

近 似 種 近似種はいない。

生 息 地 高萩市の生息地は山間の水田と畑に挟まれた狭い地区である。過去に取手市からも生息の情報があつたが未確認である。

生存の危機 農薬等の散布による影響が懸念される。

特 記 事 項

執筆(協力)者 井上尚武

文 献 1), 2), 3), 4), 5)



撮影 井上尚武

茨城県2016	● ● ●	絶滅危惧 I A 類	●
茨城県2000	● ● ●	絶滅危惧種	●
環境省2014		対象外	

選 定 理 由 ①②③ 生息地が極めて限られており、日本固有種で産地が遺存的である。

分 布 状 況 本州、九州に局地的に隔離分布する。

形態及び生態 体長(翅端まで)雌雄ともに40~50mm。全身あざやかな緑色で、前胸背に2本の黄色いストライプがある。湖や河川の岸辺のヨシ原や海岸のチガヤ群落などに生息し、成虫は7月下旬から9月頃にかけて夜間草の上に登り、金属的な大きな声でチャキチャキチャキなどと鳴く。鳴き声にA、B、C型の3通りあり、順にシャー、チャキチャキチャキ、ジュワジュワジュワと聴こえる。鳴き声の型が異なっても、ほぼ同所的に生息するので種内変異と考えられる。

近 似 種 クサキリ、ヒメクサキリとよく似ているが、鳴き声が異なるのと鳴く場所が草の上の方なので区別できる。

生 息 地 県内12市町村から生息の記録があるが、高萩市、日立市、東海村、大洗町、銚田市(旧旭村)、鹿嶋市などはほぼ絶滅した。他の地区でも激減している。

生存の危機 海岸やその周辺が開発されつつある。ヨシ原は水質汚濁などが原因で減少しつつある。

特 記 事 項

執筆(協力)者 井上尚武

文 献 2), 3), 4), 6), 22)



撮影 井上尚武

茨城県2016	● ● ●	絶滅危惧 I B 類	●
茨城県2000	● ● ●	絶滅危惧種	●
環境省2014		対象外	

選定理由 ①②③ 生息地が極めて限られており、個体数が非常に少ない。また日本固有種で産地が遺存的である。

分布状況 宮城、福島、茨城、千葉、埼玉、新潟各県の一部。

形態及び生態 体長雄 20～23mm、雌 21～24mm。長翅型の翅端まで雄 35～39mm、雌 37～42mm。短翅型と長翅型があり、翅の長さの差が大きい。短翅型は幼虫のように見える。緑色型と褐色型がある。雌の産卵器は弓状にそり上がる。雄は弱々しい声でシリリリまたはツルルルと鳴く。ヨシ原に生息し、ヨシの茎に産卵する。成虫の発生初期には灯火に飛来することがある。

近似種 オナガササキリの雄に似るが本種はやや大きい。

生息地 霞ヶ浦沿岸や利根川流域の一部のヨシ原に生息するが、個体数は少ない。

生存の危機 水質汚濁や開発によって広いヨシ原が減少しつつある。

特記事項

執筆者(協力者) 井上尚武

文献 6), 7)



撮影 井上尚武

茨城県 2016	● ● ● ● ●	絶滅危惧 I B 類	●
茨城県 2000	● ● ● ● ●	絶滅危惧種	●
環境省 2014		対象外	

選定理由 ①②③④ 昔からよく知られた鳴く虫だが、過去 20 数年ほどで生息地が激減しており、現在も減少しつつある。里山の管理も含めた生息地保全の見通しが立っていない。

分布状況 福島県南部以南の本州、四国、九州、対馬；中国大陸。

形態及び生態 体長は翅端まで雌雄ともに 50～53mm。体色は大きく分けて緑色と褐色の 2 型があり、褐色型は淡褐色型と濃褐色型がある。人里の雑木林や屋敷林、河川敷のヨシ原などに生息する。成虫は 8 月中下旬ころから現れ、夜間ガチャガチャと騒がしく鳴くので、かつては「ガチャガチャ」とか「ハタオリ」などの方言で呼ばれた。ほとんどの生息地では群生する。

近似種 タイワンクツワムシが静岡県以西に分布する。

生息地 県内の生息地は 10 数力所に過ぎない。河川敷以外では平地～低山地の雑木林の縁に生息する。管理を放棄した雑木林には生息しないようである。

生存の危機 農業形態などの変化による里山の管理放棄や都市開発がさらに進行すると予想される。

特記事項

執筆者(協力者) 井上尚武

文献 8), 9)



撮影 井上尚武

茨城県 2016	● ● ● ● ●	絶滅危惧 I B 類	●
茨城県 2000	● ● ● ● ●	危急種	● ●
環境省 2014		対象外	

選定理由 ①②③ 自然度の高い海岸が砂浜の減少や開発によって減少し、生息地が激減している。

分布状況 北海道, 本州, 四国, 九州, 奄美大島; ウスリー, モンゴル, 中国, ビルマ, インド, スリランカ。

形態及び生態 体長7~8mm。灰白色の地に褐色のまだらがある。生息地の砂浜に合わせた体色をしている。主に自然度の高い海岸の、まばらに草の混じった砂浜に特異的に生息する。希に内陸の河川敷の砂地でも見つかる。8月ごろより成虫が出現し夜間ジー、ジーと鳴くが、時々チョンチョンという音が入る。

近似種 近似種はいない。

生息地 県内では自然度の高い海浜に生息するが、東海村およびひたちなか市の海岸は大規模開発で激減した。鹿嶋市では駐車場などに改変され生息地が破壊された。

生存の危機 海岸の大規模開発や、クロマツの植林、砂浜自体の後退によって減少している。

特記事項

執筆者(協力者) 井上尚武

文献 3)



撮影 井上尚武

茨城県 2016	● ● ● ● ●	絶滅危惧 I B 類	● ● ● ● ●
茨城県 2000	● ● ● ● ●	絶滅危惧種	● ● ● ● ●
環境省 2014		対象外	

選定理由 ①②③ 本州では大河川の河口付近や大きな湖のヨシ原に局地的に生息している。水質汚濁や護岸工事などによってヨシ原が減少している。

分布状況 本州, 南西諸島; スマトラ。

形態及び生態 体長6~7.5mm。マダラスズ位の大きさで、体色は一見ヤチスズに似ており生息地では混生することが多いが、本種は脚の白色の斑紋がやや目立つ。大きな湿原のヨシ原の地上に生息する。8月頃から成虫が出現し、ジージーツという地味な声で鳴く。別名ヤマトチビスズは本州に生息する年一化性の個体群を指すが、南西諸島の個体(多化性)との交雑実験によると正常に子孫が継続して生まれるので遺伝的には同種とされる。

近似種 ヤチスズに似るが、本種はやや小型で脚などの白い斑紋がヤチスズより目立つ。

生息地 銚田市, 行方市, 潮来市の北浦沿岸, 土浦市, 稲敷市などの霞ヶ浦沿岸, 利根川下流域の河川敷のヨシ原に生息する。

生存の危機 水質汚濁や湖の護岸工事によるヨシ原の減少, 河川敷の利用のための改変などによって減少している。

特記事項

執筆者(協力者) 井上尚武

文献 6), 10), 11), 12), 13)



撮影 井上尚武

茨城県 2016	● ● ● ● ●	絶滅危惧 II 類	● ● ● ● ●
茨城県 2000	● ● ● ● ●	絶滅危惧種	● ● ● ● ●
環境省 2014		対象外	

選定理由 ①②③ 砂丘を伴う自然度の高い海岸が、大規模開発や浸食、砂の供給の減少などにより減少している。

分布状況 北海道、本州、四国、九州；韓国。

形態及び生態 体長（翅端まで）雄 30mm前後、雌 30～35mm。体は黄褐色で暗褐色の細かい点を散布する。砂浜の砂の模様にかモフラージュしている。成虫は8月頃から出現する。草のまばらな自然度の高い海浜に生息する。海岸で近くの草原の方へ追い立てても、必ず砂浜に飛んで戻る。

近似種 近似種はいない。

生息地 東海村からひたちなか市の海岸は大規模開発で激減した。

生存の危機 近年、海岸の開発や浸食作用により生息地が減少しつつある。

特記事項

執筆者(協力者) 井上尚武

文献 3)



撮影 井上尚武

茨城県 2016	● ● ●	絶滅危惧Ⅱ類	● ● ●
茨城県 2000	● ● ●	危急種	● ● ●
環境省 2014		対象外	

選定理由 ①②③ 茨城県では生息に適した環境が少なく、個体数が非常に少ない。年によって発生を確認できないことがある。

分布状況 北海道、本州、四国、九州

形態及び生態 体長（翅端まで）雄 25～30mm、雌 40～43mm。体色は灰青色で、河原の石の色と似ている。翅は長く、後肢が短い。後翅中央部に褐色の半円帯があり、その内側はあざやかな青色。石のごろごろした中流域の河原に生息し、日中はよく飛ぶ。成虫は7～9月に現れる。

近似種 近似種はいない。

生息地 県内の一部の河川中流域の河原に生息する。戦前に採集記録があったが、2004年に再発見された。その後も採集されたが、2014年の調査では発見できなかった。

生存の危機 何らかの原因で生息地に外来種の雑草がはびこると、生息に不適となる。

特記事項

執筆者(協力者) 井上尚武

文献 8), 14), 15), 16)



撮影 井上尚武

茨城県 2016	● ● ●	絶滅危惧Ⅱ類	● ● ●
茨城県 2000		対象外	
環境省 2014		対象外	

選定理由 ①③ 茨城県では生息地が少なく、常陸那珂港のような開発によって生息地が減少しつつある。

分布状況 本州、四国、九州、対馬、南西諸島。国外では台湾にも分布する。

形態及び生態 体長雄雌とも 15～16mm。ツツレサセコオロギによく似ているが前翅が短い。また成虫の出現時期が本種は初夏なので重ならない。雌の産卵器は短い。幼虫で越冬する。乾いた芝地や草原に生息し、雄は間隔をおいてピーッと一声ずつ鳴くが地味な声なので一般に気づかれにくい。

近似種 ツツレサセコオロギとは成虫の出現時期と鳴き声で区別できる。

生息地 ひたちなか市などから記録がある。いずれも乾いた芝地や草地に生息し個体数は少ない。

生存の危機 生息地は開発に適した所が多く、工業団地や宅地などに改変されつつある。

特記事項

執筆者(協力者) 井上尚武

文 献 3), 8)



撮影 井上尚武

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県 2000	●	希少種	● ● ● ●
環境省 2014		対象外	

選定理由 ①③ 開発に適した環境と重なる地区が多く地域個体群の絶滅の恐れがある。

分布状況 本州、四国、九州、伊豆大島。国外では韓国、中国にも分布する。

形態及び生態 体長雌雄とも 22mm前後。体色が枯れ草に似ている。古くからチンチロリンと聴きなされて知られているが、実際はピツピリピツと聞こえる。本県では海岸付近の乾いた草原を中心に生息し、8月中旬頃から成虫が出現する。群生する傾向がある。希に内陸のグラウンドの縁や工場敷地の草地に生息することがある。雌は枯れ草の茎などに産卵する。

近似種 オキナワマツムシが南西諸島や台湾に生息し、本種とは亜種レベルで異なるとされる。

生息地 福島県浜通り地方が北限とされるが詳しい産地の記録はない。確実な産地は高萩市以南で、海岸付近を中心に生息地がある。希に内陸にも生息地が見つかることがある。

生存の危機 生息地が開発によって改変される。

特記事項 太平洋側の北限確定のためには、福島県の調査が必要である。

執筆者(協力者) 井上尚武

文 献 7), 17)



撮影 井上尚武

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県 2000	●	希少種	● ● ● ●
環境省 2014		対象外	

選 定 理 由 ①②③ 海岸付近に生息地が見られるが非常に限られ、生息範囲も狭い。牧草地の生息地では管理が放棄され生息地が失われる恐れがある。

分 布 状 況 本州、伊豆諸島、四国、九州。国外では朝鮮半島にも分布する。

形態及び生態 体長雄雌とも9～11mm。産卵器の長さ10mm。黄色い体で後頭から前翅にかけ背面に太い黒褐色条がある。はねが短く雌雄とも鳴かない。明るい松林やチガヤなどの乾いた草地、希に牧草地にもすみ、群生する傾向がある。年1化で成虫は秋に出現する。

近 似 種 近似種はいない。

生 息 地 本県からは常陸太田市、東海村、ひたちなか市など4カ所しか記録がない。主に海岸付近の草地に生息する。

生存の危機 開発の危機にさらされている。一部の生息地は採草地なので、保護について農家の理解を得る必要がある。

特 記 事 項

執筆者(協力者) 井上尚武

文 献 3), 18)



撮影 井上尚武

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	●	●	●
茨城県 2000	●	希少種	●	●	●
環境省 2014		対象外			

選 定 理 由 ①③ 砂浜の多い本県では生息に適した環境が少ない。

分 布 状 況 北海道、本州、四国、国後島、佐渡島、伊豆諸島、対馬、奄美大島。国外では韓国にも分布する。

形態及び生態 体長雌雄とも10mm前後。翅が退化して鳴かない。海岸の潮間帯に適応した種で、石のごろごろした磯や海岸の消波ブロックの隙間に波を避けるように群生する。夜行性で魚介類の死体に集まる。

近 似 種 体にうすい紋があるウスモンナギサスズに似るが、本種にはないので区別できる。

生 息 地 ひたちなか市の海岸から生息地が見つかっている。

生存の危機 生息地が少なく、また生息範囲が狭い。一部は開発の危機にさらされている。

特 記 事 項

執筆者(協力者) 井上尚武

文 献 3), 19)



撮影 井上尚武

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	●	●	●
茨城県 2000	●	危急種	●	●	●
環境省 2014		対象外			

選定理由 ①②③ 海岸付近のシバ草地に局地的に生息していたが開発により絶滅した。神栖市の生息地も一時的に偶然繁殖した可能性が高い。

分布状況 本州から九州までの各地に分布。国外では朝鮮、中国にも分布する。

形態及び生態 体長（翅端まで）雄 35mm前後、雌 36～40mm。体は褐色で前胸の背面が濃褐色。幼虫、成虫ともに複眼に縦縞の模様がある。シバやチガヤなどの優占する草原に生息する。植物群落の遷移でいうと初期の段階の植生に限って生息する。毎年火入れを行って草原の状態を維持している山口県秋吉台のような環境に群生する。馬や牛などの家畜を利用しない農業への転換や、かやぶき屋根の農家の減少とともに生息地が減少したと考えられる。

近似種 近似種はいない。

生息地 東海村からひたちなか市にまたがる海岸付近の生息地が大規模開発によって消滅した。他に県内では神栖市など一部しか生息の記録がない。

生存の危機 生息地が開発される可能性が高い。

特記事項

執筆者(協力者) 井上尚武

文献 7), 20)



撮影 井上尚武

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県 2000		対象外	
環境省 2014		対象外	

選定理由 ①③ 宅地造成地などに生息する例もあるが、海岸付近のチガヤ群落のような本来の生息地が開発によって減少している。

分布状況 本州、四国、九州、伊豆諸島、南西諸島。国外では中国、台湾、東南アジアに分布する。

形態及び生態 体長（翅端まで）雄 27～35mm、雌 45～57mm。淡緑色と褐色の2型がある。背面は淡紅色で直線状。頭頂が尖り、全体細長い。主にチガヤの優占する草原にすみ草の茎にとまっている。人が近づくと反対側に回って隠れる性質がある。成虫の出現初期にあたる8月頃には、希に灯火に飛来することがある。

近似種 ショウリョウバッタは大型で雄は飛ぶときキチキチキチという音を出す为本種は出さない。

生息地 県内数カ所から記録があるが、東海村やひたちなか市では大規模開発によって激減した。

生存の危機 比較的自然度の高い草草が減少しつつある。草原という遷移の初期の段階が維持されないと生息できない。

特記事項

執筆者(協力者) 井上尚武

文献 3)



撮影 井上尚武

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県 2000	●	希少種	● ● ● ●
環境省 2014		対象外	

選 定 理 由 ①③ 東北地方などの山間部では生息地が比較的多いが本県では一部に限られる。家畜用の牧草地は通常農薬を使用しないため生息できると考えられ、牧畜との関わりで分布を広げる例として貴重である。

分 布 状 況 北海道、本州、四国、九州、奥尻島、佐渡島、香岐、対馬。国外では旧北区全域に広く分布する。

形態及び生態 体長（翅端まで）雄 25～27mm、雌 25～30mm。体色は黄緑色、黄褐色、褐色の3型がある。イナゴ類に似るが前胸背部の黒い帯が前翅までつながる。山間部の湿地や草原にすむ。しばしば牧草地にも進出する。年1化で6～8月に見られる。関東平野でも牧草地に生息する例があり、牛馬の飼育が盛んだった時代には分布が広がったと考えられる。

近 似 種 ハネナガイナゴに似るが、本種はあまり飛ばず水田には生息しない。

生 息 地 本県では北茨城市の一部に生息する。生息範囲は牧草地にまたがっている。

生存の危機 県北山間地帯の牧草地が、農薬の使用を控えるなど適度に維持管理される必要がある。

特 記 事 項

執筆者(協力者) 井上尚武

文 献 12), 21)



撮影 井上尚武

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県 2000		対象外	
環境省 2014		対象外	

選 定 理 由 ①②③ もともと生息地が少なかったが、開発で激減もしくは絶滅した。近県の状況から見て、県内の他の地域にまだ生息の可能性が残されている。

分 布 状 況 北海道, 本州, 四国, 九州, 南西諸島; ユーラシア大陸。

形態及び生態 体長 47 ~ 65mm。体色は淡緑色または褐色。前脚の基節の内側に黒い斑紋がある。翅はやや透明で後翅は無紋。河原や荒地のような比較的乾いた草原に生息し, 年 1 化で成虫は 8 月頃から秋に発生する。

近 似 種 コカマキリに似るが本種はより大きく, 前脚の腿節に黒, 白, 紫の斑紋をもつので区別できる。

生 息 地 かつては旧水戸射爆場跡地に生息していたが, 大規模開発で近年生息が確認できない。県内からは他にも生息情報を得ているが詳細は未確認である。

生存の危機 自然度の高い生息地が減少しつつある。ペットや売買目的で捕獲される例がネット上に公開されている。

特 記 事 項 ネットオークションなどによる売買を規制する必要がある。

執筆(協力)者 井上尚武

文 献 1), 2)



撮影 井上尚武

茨城県 2016	●●●	絶滅危惧Ⅱ類	●●●
茨城県 2000		対象外	
環境省 2014	●●●	情報不足	●●●

選定理由 ①②③ 生息環境の悪化とともに、都市化等による生息環境の消滅など、個体数が激減している。

分布状況 北海道、本州、ロシア極東部。

形態及び生態 体長7～9mm。小型で、体形はやや丸味を帯びる。全体に黒色だが、とくに、前腿節は基部を除き黒色で、胸部背面、後葉部側面には青色毛が見られる。水生植物の豊かな湖沼に生息する。

近似種 ヒメアメンボに似るが、体形や体色、青色毛の有無などで区別は容易である。

生息地 水生植物が繁茂する、自然度の高い止水域に生息する。県内数か所の湖沼から記録がある。

生存の危機 湖沼の水質の悪化や都市化による湖沼の消滅といった問題に加え、湖沼周辺の森林の乾燥化に伴っての水域の減少、水位の低下といった新たな問題が生じている。

特記事項

執筆者(協力者) 成田行弘 (櫻井 浩・柳田紀行)

文献 2), 6)



撮影 成田行弘

茨城県2016 ●●●● 絶滅危惧I A類 ●

茨城県2000 ●●●● 絶滅危惧種 ●

環境省2014 ●●●● 準絶滅危惧 ●●●●

選定理由 ①②③ 全国的に減少傾向が著しく、近年、関東地方からの記録はほとんどない。県内で安定した産地は1か所のみである。水質悪化や、天敵となる肉食性魚類等の侵入によって容易に絶滅する恐れがある。

分布状況 本州(山形県以南)、四国、九州。

形態及び生態 大型のミズムシで、体長約10mm。前胸背板着色部には黒色横帯がおおよそ8～9本ある。♂の前脚フ節は台形に近く、内側のペグ列は全長にわたってみられる。水質良好な池沼に生息し、主に藻類などから吸汁する。幼虫は春に出現し、成虫で越冬する。

近似種 本州北部に基亜種のミズムシ *H. distanti*、近畿以西にナガミズムシ *H. mandshurica* とオオミズムシ *H. kolthoffi* がいるが、分布が異なるほか、♂の前脚附節等の形状によって識別できる。

生息地 牛久市と常陸太田市から記録がある。牛久市の記録には、「水田や池、水路に普通で、時に誘殺灯に極めて多数が誘殺されることがある」と記述されているが、その後は全く確認されていない。

生存の危機 水質悪化に敏感なことに加え、水中を活発に遊泳することから、ブラックバス等肉食性魚類の標的になりやすい。

特記事項

執筆者(協力者) 柳田紀行

文献 1), 2), 4), 10)



撮影 成田行弘

茨城県2016 ●●●● 絶滅危惧I A類 ●

茨城県2000 ●●●● 対象外 ●

環境省2014 ●●●● 準絶滅危惧 ●●●●

選 定 理 由 ①②③ 本県での生息が極めて限られているうえ、本県の昆虫相が形成された過程を検証するうえで貴重な種である。

分 布 状 況 北海道、本州（北部・中部山岳）、ロシア極東部。

形態及び生態 体長 12 ～ 16mm。褐色地に黒色の点刻がある。結合版は半翅鞘前縁より外方に顕著に広がり、各節の中央部は赤褐色となる。草原のキク科やバラ科の植物上で見られる。

近 似 種 顕著な結合版の張り出しから、近似種はいない。

生 息 地 本県では、県北部の標高 780m の湿性草原から 1 例が記録されている。

生存の危機 本県、高標高地域での湿性草原の減少により絶滅のおそれが高い。

特 記 事 項 氷河期時代の遺存種の可能性が高く、本県の昆虫相が形成された過程を検証するうえで貴重な種である。

執筆者(協力者) 成田行弘

文 献 2)



撮影 成田行弘

茨城県 2016 ●●●●● 絶滅危惧 I A 類 ●

茨城県 2000 ●●●●● 絶滅危惧種 ●

環境省 2014 対象外

選 定 理 由 ①②③ 本種の全国的な分布状況から、本県が北限と考えられ、本県の自然環境を語る上での指標となりうる貴重な種である。

分 布 状 況 本州、四国、九州、南西諸島、台湾。

形態及び生態 体長 13 ～ 15mm。黄褐色で細長い体形。結合板の各節には黒紋を持つ。全国的には、その名のとおり、アズキやダイズの害虫として知られる。

近 似 種 ハラビロヘリカメムシやホシハラビロヘリカメムシに似るが、胸部と腹部がほぼ等長であることから区別は容易である。

生 息 地 本県では、県北の山間部から記録されている。マメ科の自生植物を食草としているものと思われるがよくわかっていない。

生存の危機 県北部の多様な草原的環境の消滅により、本種の生息が危ぶまれる状況にある。

特 記 事 項

執筆者(協力者) 成田行弘

文 献 2)



撮影 成田行弘

茨城県 2016 ●●●●● 絶滅危惧 I A 類 ●

茨城県 2000 ●●●●● 危急種 ●●●●●

環境省 2014 対象外

選 定 理 由 ①②③ 県内での生息地が極めて限られているうえ、この数年は観察例がなく、絶滅が強く危惧されている。

分 布 状 況 北海道、本州、四国。

形態及び生態 体長 10mm内外。やや卵形で、体色はオリーブ色を帯びた褐色。触角は第 1 節を除き黒色。ミツバウツギ科のミツバウツギを寄主植物とする。

近 似 種 体形と体色から他種との区別は容易である。

生 息 地 本県からは、城里町の山間地から記録されている。寄主植物以外では本種を見る機会はほとんどないことから、ミツバウツギに強く依存する生態であることがうかがえる。

生存の危機 寄主植物は、山間の溪流沿いに生育するが、本種生息地では、その枯死や衰弱が顕著であることから、本種の生存が危ぶまれる状況にある。

特 記 事 項

執筆者(協力者) 成田行弘

文 献 2)



撮影 成田行弘

茨城県 2016 ●●●●● 絶滅危惧 I A 類 ●

茨城県 2000 ●●●●● 絶滅危惧種 ●

環境省 2014 対象外

選 定 理 由 ①②③ 現在の生息地は、極めて限定された砂地に生息し、開発や、潮流の変化などによって、容易に生息環境が変化する状況にある。本県を代表する貴重な海浜性昆虫と位置づけられる。

分 布 状 況 本州、四国、九州、屋久島。

形態及び生態 体長 11 ~ 14mm。褐色の地に黒い点刻がある。小楯板の上辺両端に 1 つずつ白紋をもつためこの名がある。海浜部のイネ科植物の根際で生活するとされる。

近 似 種 「フタテン」という和名からは、イメージし難いが、体形と白紋から同定は可能である。

生 息 地 本県では、ひたちなか市の海浜部から確認されている。食草は、砂地のイネ科植物であると思われるが、個体数も極めて少なく、その解明には至っていない。

生存の危機 ごく狭い極限的な環境に生息しており、わずかな環境の変化が絶滅に結びつく可能性が極めて高い。

特 記 事 項

執筆者(協力者) 成田行弘

文 献 2)



撮影 成田行弘

茨城県 2016 ●●●●● 絶滅危惧 I A 類 ●

茨城県 2000 ●●●●● 絶滅危惧種 ●

環境省 2014 対象外

選定理由 ①②③ 水生植物が繁茂する、自然度の高い湖沼環境の減少とともに個体数が減少している。水質の悪化や乾燥化による湖沼への水の供給量の減少などが原因と考えられる。

分布状況 本州、九州。

形態及び生態 体長7～10mm。体の側面には金色の微毛が顕著で、体形が細身であることも加わりエレガントな感じのアメンボである。また、本属のアメンボ類は、4節からなる触角は、先端の第4節が最長である。自然度が高い、水生植物の豊かな止水域に生息し、開放水面に出ることは少なく、植物間で生活する。

近似種 ヒメアメンボやババアメンボに似るが、本属の特徴でもある、触角第4節の長さで容易に区別される。

生息地 県内からは、生息地として数ヶ所が知られるが、常陸太田市、ひたちなか市の生息地などでは、近年、その姿が確認されていない。

生存の危機 水質の悪化や開発による湖沼環境の消滅、水生植物の減少などにより、本種の絶滅が危惧される状況にある。

特記事項

執筆者(協力者) 成田行弘 (櫻井 浩・柳田紀行)

文献 2), 6)



撮影 成田行弘

茨城県2016 ●●●●● 絶滅危惧I B類 ●

茨城県2000 ●●●●● 絶滅危惧種 ●

環境省2014 ●●●●● 準絶滅危惧 ●●●●●

選定理由 ①②③ 全国的に減少傾向にあり、記録が少ない。県内で安定した産地は2か所のみである。水質悪化や、天敵となる肉食性魚類等の侵入によって既存の産地が消滅すれば、県内での生息基盤は極めて脆弱なものとなる。

分布状況 本州、四国、九州。国外では台湾、中国。

形態及び生態 体長約8～9mm。県内では、ホッケミズムシに次いで大型のミズムシである。前胸背板着色部には太い黒色横帯が6～8本ある。♂の前脚フ節には、端半部のみペグ列がみられる。池沼や流れの緩やかな水路などに生息し、主に藻類などから吸汁する。幼虫は春に出現し、成虫は水中で越冬する。局地多産の傾向がある。

近似種 近似種はいない。

生息地 灯火に飛来するなど、県内各地で散発的な確認例があるものの、安定した産地は、常陸太田市と東茨城郡城里町の2か所のみである。

生存の危機 水質悪化に敏感なことに加え、水中を活発に遊泳することから、ブラックバス等肉食性魚類の標的になりやすい。

特記事項

執筆者(協力者) 柳田紀行

文献 10)



撮影 成田行弘

茨城県2016 ●●●●● 絶滅危惧I B類 ●

茨城県2000 ●●●●● 対象外 ●

環境省2014 ●●●●● 準絶滅危惧 ●●●●●

選定理由 ①②③ 八溝山の山頂部に極限的に生息し、鳴き声などの観察からも個体数が多いとは言えない。ブナ林の減少などにより容易に姿を消すことが予想される。

分布状況 北海道、本州、四国、サハリン、千島列島、シベリア。

形態及び生態 体長 31 ~ 35mm。体は黒色で黄褐色の斑紋がある。前胸背板後縁の黄褐色の横帯は、両端で外方の黒紋で分断される。オスの腹弁は後方に長く伸び、腹節第 4 腹板に達する。北海道や東北地方では平地や低山地に生息するが、本県では、標高およそ 900m 以上の高地に限定して生息する。

近似種 エゾゼミ、アカエゾゼミに似るが、本種は、小型であることや胸部の黄褐色の紋様などで区別される。

生息地 本県の最高峰である八溝山の山頂付近のブナ林に限定して生息する。近似の 2 種のセミ類より高所に生息する。

生存の危機 限られた地域での少数の発生であり、わずかな森林環境の変化によって生息が脅かされる状況にある。

特記事項

執筆者(協力者) 成田行弘

文 献 2), 8)



撮影 佐々木泰弘

茨城県 2016	● ● ● ● ●	絶滅危惧 I B 類	● ●
茨城県 2000	● ● ● ● ●	危急種	● ●
環境省 2014		対象外	

選定理由 ①②③ 県内の各発生地においては、本種の鳴き声を聴く頻度は明らかに減少しており、限られた地域での発生であることから、急激に減少するおそれがある。

分布状況 北海道、本州、四国、九州、朝鮮半島、中国。

形態及び生態 体長 38 ~ 43mm。体も翅も赤みを帯びる。オスの腹弁は短く円形型で、その末端は腹節第 3 腹板に達しない。北海道や東北地方では平地に棲むが、本県では、標高およそ 600m 以上に生息する。

近似種 エゾゼミ、コエゾゼミに似るが、本種は赤味を帯びることや腹弁の形状から区別は容易である。

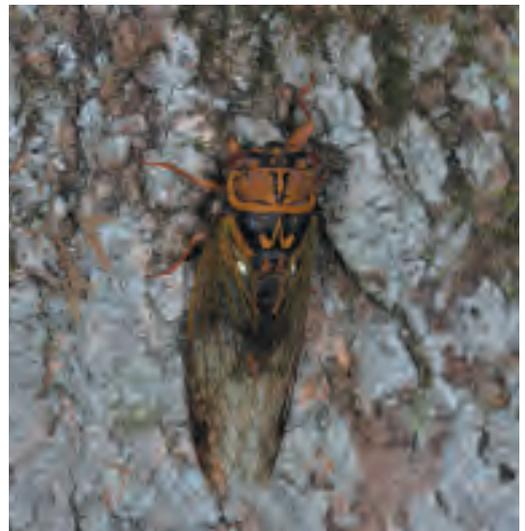
生息地 八溝山塊、阿武隈山地、筑波山塊などの標高 600m に局所的に生息する。ブナ、ミズナラなどの落葉広葉樹の林に見られるが、広葉樹の伐採等による森林環境の悪化により個体数が減少している。

生存の危機 自然度の高い地域での広葉樹林の減少により、本種の生息が脅かされる状況にある。

特記事項

執筆者(協力者) 成田行弘

文 献 2), 8)



撮影 佐々木泰弘

茨城県 2016	● ● ● ● ●	絶滅危惧 I B 類	● ●
茨城県 2000	● ● ● ● ●	危急種	● ●
環境省 2014		対象外	

選定理由 ①②③ 本県のさまざまな自然の姿のなかで、草原的な荒地という存在は消えつつある。本種の存在自体が稀な種であるが、限られた生息環境の減少により、個体数の減少が懸念される。

分布状況 本州、四国、九州、朝鮮半島、中国、ミャンマー、インド。

形態及び生態 体長 14.5 ~ 16mm。前胸背板側角はトゲ状に突出し、後葉には 4 つの淡黄褐色の紋が並ぶ。また、革質部に黒褐色の地に乳白色の縦紋があり、特徴となっている。捕食したアリやゴミを背負うという特徴ある生態を示す。

近似種 サシガメ類の中でも、形態、配色ともに特徴的であり、近似種はいない。

生息地 ひたちなか市の海浜部に近い荒れた草原的環境から記録されている。ピットホールトラップに落下した個体を得ていることから、砂地状の荒地を徘徊している姿が推察される。

生存の危機 わずかな生息環境の消失は、本種の生存に直結するもので、生息環境の変化により本種の生息が危ぶまれる状況にある。

特記事項

執筆者(協力者) 成田行弘

文 献 2)



撮影 成田行弘

茨城県 2016	● ● ● ● ● ● ● ● ● ●	絶滅危惧 I B 類	● ● ● ● ● ● ● ● ● ●
茨城県 2000	● ● ● ● ● ● ● ● ● ●	危急種	● ● ● ● ● ● ● ● ● ●
環境省 2014	● ● ● ● ● ● ● ● ● ●	準絶滅危惧	● ● ● ● ● ● ● ● ● ●

選定理由 ①②③ 全国的にも限られた分布を示す種であり、本県は南限となっている。生息地は、自然環境からも人為的環境からも不安定な位置づけにあることから、本種の生息が危惧される状況にある。

分布状況 本州。極東ロシア、中国。

形態及び生態 体長 7 ~ 8.5mm。光沢のある黄褐色の地に黒い点刻を密に散布する。頭部中葉は側葉より短い。イネ科植物を食草とし、イネの穂を吸収して斑点米を発生させるなど、イネの害虫としての顔を持つが、本県では稀な種である。

近似種 頭部中葉が側葉より短いことは、形態上の大きな特徴である。特徴的な姿をしており、近似種はいない。

生息地 県南地域の利根川流域や湖沼の湖岸等に生息すると思われるが、確実な報告は限られる。生息地が護岸などの工事により消失することにより、本種の発生が危ぶまれる状況にある。

生存の危機 生息地の水環境の変化や人為的な土地の改修等により、生息が危ぶまれる状況にある。

特記事項 本種の生息地が青森県、福島県(いずれも海浜部)、本県という特異な分布は、本県の昆虫相が形成されてきた過程を考えるうえで貴重な情報を提供している。なお、本県からの確実な記録は、林(1990)のみである。

執筆者(協力者) 成田行弘

文 献 3)



撮影 成田行弘

茨城県 2016	● ● ● ● ● ● ● ● ● ●	絶滅危惧 I B 類	● ● ● ● ● ● ● ● ● ●
茨城県 2000	● ● ● ● ● ● ● ● ● ●	危急種	● ● ● ● ● ● ● ● ● ●
環境省 2014	● ● ● ● ● ● ● ● ● ●	対象外	● ● ● ● ● ● ● ● ● ●

選定理由 ①②③ 浮葉をはじめとする水生植物が豊かに生育する湖沼には、本種が生息する可能性が高いが、こうした場所の多くは「ため池」であることが多く、安定した環境とは言い難い。こうした環境の消失、水質の悪化により、容易に絶滅、あるいは、個体数が激減するおそれがある。

分布状況 北海道、本州、九州、台湾、中国。

形態及び生態 体長 6.5～10mm

近似種 全体ががっしりした体形や結合板の後端が鋭いトゲ状になることなどで区別は容易である。

生息地 自然度が高く水生植物、特に浮葉が生育する湖沼に限って生息する。県北部から県中部にかけては、いくつかの湖沼で姿を見ることができる。発生地においては、個体数は少なくない。

生存の危機 水質の悪化、水域の開発による水生植物群落の消滅等により、容易に個体数が減少することが考えられる。

特記事項

執筆者(協力者) 成田行弘

文献 2), 6)



撮影 成田行弘

茨城県 2016	●●●	絶滅危惧Ⅱ類	●●●
茨城県 2000	●●●	希少種	●●●
環境省 2014		対象外	

選定理由 ①②③ 自然度の高い湖沼、ため池の減少により、個体数が減少している。環境的に優れているように思われるため池等であっても、水量を調節するなどの管理により、本種が生息しにくい環境になっていると思われる。

分布状況 本州、四国、九州、ロシア極東部、朝鮮半島、中国。

形態及び生態 体長 17～20mm。体色は、黄褐色から暗褐色で個体差がある。前脚の腿節は太く、脛節はかぎ状に曲がる。水中の植物などに体を固定して獲物を待ち、捕えて体液を吸う。水中を活発に泳ぎ回る姿は、同様の生態を示すタガメ、ミズカマキリ、オオコオイムシなどとは異なる。

近似種 オオコオイムシに比べてより小型であること、体色の光沢が弱いことなどがあげられる。一般に、オオコオイムシが休耕地や湿地などに生息するのにに対し、本種はより水量が多いため池や湖沼で見ることが多い。

生息地 水量の安定した、水生植物が生育するため池や湖沼に生息する。県内からは、比較的多くの生息地を見聞するが、いずれも、個体数が少ないか、あるいは、かつての生息地であることが多い。

生存の危機 水質や水辺環境の悪化、水位の低下等により、本種の個体数は著しく減少している。

特記事項

執筆者(協力者) 成田行弘 (柳田紀行)

文献 2), 9)



撮影 佐々木泰弘

茨城県 2016	●●●	絶滅危惧Ⅱ類	●●●
茨城県 2000	●●●	希少種	●●●
環境省 2014	●●●	準絶滅危惧	●●●

選定理由 ①②③ 本種は稀な種であるが、この種が安定的に生息するためには餌となる各種の鱗翅類が生息できることが条件となる。鱗翅類の食草、食樹を育む森林の乾燥化、伐採等が進むことにより、本種の生息も脅かされる。

分布状況 本州、四国、九州。

形態及び生態 体長 11 ~ 17mm。淡褐色地に黒色系の不定形の斑紋がある。前胸背測角の先端は鋭角をなすが、トゲ状とはならない。鱗翅類幼虫を捕食する。

近似種 キュウシュウクチブトカメムシに似るが、本種とは異なり、前胸背測角がより尖り、後縁に突起があることで区別される。

生息地 城里町から越冬中の個体が記録されている。この地は、各種の常緑・落葉広葉樹が茂る地域で、多くの昆虫を育てている地域といえる。

生存の危機 特定の植物や動物を食物としない本種にとって、これらを育む自然環境全体をセットとして保全することが、生存を継続させるために必要である。

特記事項

執筆者(協力者) 成田行弘

文献 2)



撮影 成田行弘

茨城県 2016	● ● ●	絶滅危惧Ⅱ類	● ● ●
茨城県 2000		対象外	
環境省 2014		対象外	

選定理由 ①②③ 山間地の野生のマメ科植物の生育環境の悪化により、本種の個体数が減少していると考えられる。

分布状況 北海道、本州、四国、九州、シベリア東部、朝鮮半島、中国。

形態及び生態 体長 12 ~ 14mm。緑色を帯びた灰褐色。前胸背板の前縁に4つの白い紋があることが和名の由来であるが、紋が不明瞭な個体も見られる。また、側角は丸味を帯びながら斜め前方に突出し、特徴的である。

近似種 前胸背の形状は独特であり、近似種はいない。

生息地 県北の山間地の草原的な環境において、稀に記録される。自生するマメ科植物を食草とする。

生存の危機 山間地のマメ科植物が生育する環境の減少によって、本種の生息が危ぶまれる状況にある。

特記事項

執筆者(協力者) 成田行弘

文献 2)



撮影 成田行弘

茨城県 2016	● ● ●	絶滅危惧Ⅱ類	● ● ●
茨城県 2000	● ● ●	危急種	● ● ●
環境省 2014		対象外	

選 定 理 由 ①②③ 森林の乾燥化や伐採等によって、本種の生息域が制限され、個体数のさらに減少するおそれがある。

分 布 状 況 本州、四国、九州、朝鮮半島、中国、シベリア東部。

形態及び生態 体長 17～18mm。緑色で、前胸背側角の先端は、多少黒ずむ。オスの生殖節の突起が太いことからこの名があるが、雌雄とも、前胸背板の後縁部に、歯状突起がある。サクラ類など、バラ科植物を寄主植物とする。

近 似 種 ツノアカツノカメムシ、セアカツノカメムシなど大型のツノカメムシ類が知られるが、前胸背板の歯状突起で区別は容易である。

生 息 地 県北山地の広葉樹上から記録されているが、記録は2例にとどまる。

生存の危機

特 記 事 項

執筆者(協力者) 成田行弘

文 献 2)



撮影 成田行弘

茨城県 2016	● ● ● ● ●	絶滅危惧Ⅱ類	● ● ● ● ●
茨城県 2000		対象外	
環境省 2014		対象外	

選 定 理 由 ①②③ 本種の寄主植物は、シイ、カシ類に限定されるうえ、極めて狭い地域での発生であるため、樹木の老化や周辺環境の変により、急激に個体数が減少するおそれがある。

分 布 状 況 茨城、新潟以西の本州、四国、九州および沖縄本島と周辺の諸島。

形態及び生態 体長、オス 23～30mm。メス、25～27mm。小型の細長いセミで緑色の地に、黒と暗褐色の斑紋が混じる。シイ・カシの林で6～8月に発生する。ミンミンゼミに近い鳴き声だが、合唱性があるため、林全体が鳴いているような感じを覚える。

近 似 種 ハルゼミ、ヒグラシ等とは、大きさや生息環境が異なることから容易に区別される。

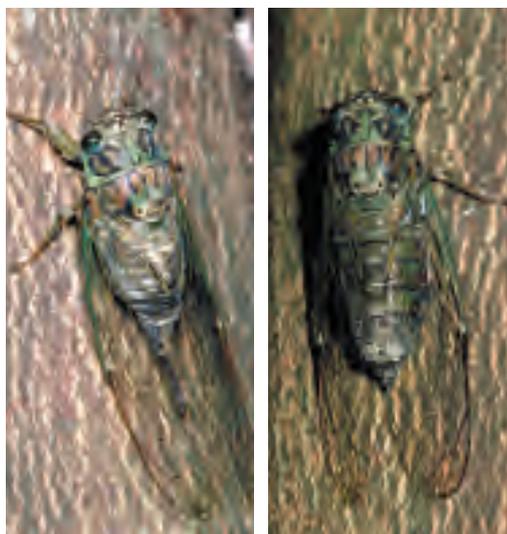
生 息 地 笠間市と石岡市(旧八郷町)に生息している。いずれの発生地も極めて狭いエリアであり、とくに、笠間市の発生地は、シイの木の老化や周辺環境の変化から発生数が減少している。

生存の危機 農薬の空中散布、寄主植物の老化、発生地周辺の森林の開発等により、個体数が減少するおそれがある。

特 記 事 項

執筆者(協力者) 成田行弘

文 献 2), 8)



撮影 小菅次男

茨城県 2016	● ● ● ● ●	準絶滅危惧	● ● ● ● ●
茨城県 2000	● ● ● ● ●	希少種	● ● ● ● ●
環境省 2014		対象外	

選定理由 ①②③ 本県南西部のマツ林に見られるが、開発やマツ枯れによるマツ林の消滅、マツ枯れ防止剤の空中散布等で生息地や発生個体数の減少がみられる。

分布状況 本州、四国、九州。国外では中国に分布する。

形態及び生態 オスは大型で細長く体長27～32mm。メスは小型で体長23～26mmで産卵管が裸出する。翅は無色透明、平地～低山地のマツ林に生息し、4月下旬～6月下旬に発生し、ムゼー・ムゼー・ギー・ギーと鳴き、晴天時には断続的に合唱する。

近似種 近縁のエゾハルゼミは標高およそ600m以上に生息すること、発生時期が6月中旬～7月下旬であること、鳴き声が明らかに異なることなどから、区別は容易である。

生息地 県南西部の平地から山麓にかけてのマツ林に局所的に生息し、県中央部以北の記録は極めて稀である。

生存の危機 開発やマツ枯れによるマツ林の消滅、マツ枯れ防止剤の空中散布の影響により生息地が消滅し、発生個体数の減少がみられる。

特記事項

執筆者(協力者) 成田行弘 (小菅次男)

文献 2), 8)



撮影 小菅次男

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	●	●	●
茨城県 2000	●	希少種	●	●	●
環境省 2014		対象外			

選定理由 ①②③ 農薬の普及から全国的に個体数が激減した種類である。大型の肉食昆虫であるため、水質の悪化した時代においては、餌の確保も難しかったであろうことがうかがえる。農薬の改良等により、生息環境の改善がみられるものの、安定した発生が見られる状況には至っていない。

分布状況 本州、四国、九州、対馬、沖縄。国外ではロシア極東部、台湾、朝鮮半島、中国、インドにも分布する。

形態及び生態 体長48～65mm。水草などに体を固定し、尾端を水面に出した姿で獲物を待つ。強大な捕獲脚で小魚や昆虫を捕え、体液を吸う。灯火によく飛来するが、飛翔する姿はまさにセミの仲間を思わせる。

近似種 大型で強大な前脚を持つことから、コオイムシやタイコウチとは明らかに区別される。

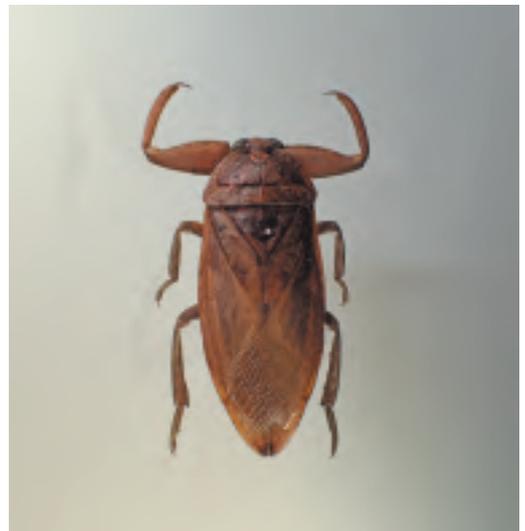
生息地 水草の豊かな止水域～流れの緩やかな小河川に生息する。県内の限られた地域に生息し、個体数は多くない。

生存の危機 水質や水辺環境の悪化、水位の低下などの要因により、容易に個体数が減少するおそれがある。

特記事項

執筆者(協力者) 成田行弘 (柳田紀行)

文献 2), 9)



撮影 成田行弘

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	●	●	●
茨城県 2000	●	希少種	●	●	●
環境省 2014	●	絶滅危惧II類	●	●	●

選 定 理 由 ①②③ 生息地域である、県北部の山地一帯の広葉樹林帯の減少と乾燥化により、本種の生息が懸念される状況にある。

分 布 状 況 本州、九州。国外では朝鮮半島にも分布する。

形態及び生態 体長 11.5 ~ 13mm。体は、成熟後も羽化直後のように脆弱な印象で、淡黄緑色の地に紅色の斑紋を持つ。広葉樹の樹上で小昆虫などを捕食する。

近 似 種 近似種のアカマキバサシガメは全体に赤味を帯びること、複眼後方に横溝を欠くことなどで区別される。

生 息 地 県北山地の標高およそ 600 メートル以上の広葉樹から記録されている。

生存の危機 広葉樹林の減少、森林の乾燥化により、本種の個体数が減少するおそれがある。

特 記 事 項

執筆者(協力者) 成田行弘

文 献 2)



撮影 成田行弘

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	●	●	●
茨城県 2000	●	希少種	●	●	●
環境省 2014		対象外			

選 定 理 由 ①②③ 海岸部のハマヒルガオを寄主植物としているが、この砂浜に生育する植物の勢いは、決して「旺盛」といえるものではないように思われる。寄主植物の消滅や砂浜の減少によって、容易に絶滅や個体数の減少といった状況が考えられる。

分 布 状 況 本州、四国、九州、南西諸島。国外では台湾、東南アジア、太平洋諸島に分布する。

形態及び生態 体長 8mm内外。体は黒色で、前翅は橙赤色の地に黒の斑紋があり、この黒紋の様子から、和名が名付けられている。この黒紋の変化はさまざまであるが、本県産の個体としては、比較的安定しているといえる。本県の海浜部のハマヒルガオを寄主植物として生息している。

近 似 種 ジュウジナガカメムシや本県からは確認されていないコマダラナガカメムシに似るが、背面の文様や成虫の寄主植物を観察することで区別は容易である。

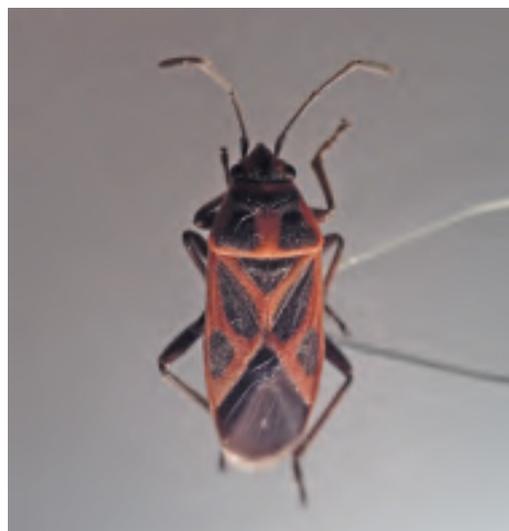
生 息 地 日立市をはじめ、県内数ヶ所の海浜部から記録された。本種は寄主植物であるハマヒルガオに強く依存し、あまり植物から離れることはない生態のように思われる。県内の海岸部にはハマヒルガオの自生地が各所に点在するため、本種の生息地はさらに増える可能性はある。

生存の危機 潮流の変化や開発による砂浜の減少は、本種の寄主植物であるハマヒルガオの絶滅や減少につながるが、このことは、本種の生息に致命的な影響を与えることになる。

特 記 事 項

執筆者(協力者) 成田行弘 (櫻井 浩)

文 献 未発表



撮影 成田行弘

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	●	●	●
茨城県 2000		対象外			
環境省 2014		対象外			

選 定 理 由 ①②③ 照葉樹林帯とブナ・イヌブナ樹林帯の間に位置する落葉広葉樹林帯は、植林やゴルフ場などの開発が進められた地域でもあり、さらなる開発は、本種の減少につながりかねない。

分 布 状 況 北海道、本州、四国、九州、対馬。国外では朝鮮半島、シベリア東部、中国に分布する。

形態及び生態 体長 8～9mm。褐色地に黒い点刻がある。前胸背板の中央には、明瞭な 4 個からなる黒紋があり、本種の和名の由来となっている。

クヌギ、コナラの樹上から得られるが、寄主植物の確定には至っていない。

近 似 種 前胸背板の黒い紋は特徴的で、近似種はいない。

生 息 地 県北の山地など、本県での高標高域からも記録されているが、御前山などの低山地で姿を見る機会が多く、本種は、中間温帯を主な生息場所とするカメムシ類であると思われる。

生存の危機 人里的でない、落葉広葉樹林の減少は、本種の生息を危うくするおそれがある。

特 記 事 項

執筆者(協力者) 成田行弘

文 献 2)



撮影 成田行弘

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県 2000		対象外	
環境省 2014		対象外	

選 定 理 由 ①②③ 平地～低山地に生息する肉食のカメムシ類で、記録が少なく稀な種である。鱗翅類の幼虫や小昆虫などを捕食するとされているが、この種が安定的に生息するためには、各種の鱗翅類をはじめとした昆虫類が生息できることが条件となる。鱗翅類の食草、食樹を育む森林の乾燥化、伐採等が進むことにより、本種の生息が脅かされる。

分 布 状 況 北海道、本州。国外では北アメリカと旧北区に広く分布する。

形態及び生態 体長 18mm内外。暗褐色の地に、黒い点刻が散布する。前胸背板の側角は、鋭く尖り、側方に張り出す。本種は、鱗翅類幼虫の捕食性天敵として、応用昆虫学の観点から研究されている。

近 似 種 本種は、クチブトカメムシより大型で、側角はさらに鋭い。また、クチブトカメムシでは腹節第 4～7 節の腹面に明瞭な黒紋が見られるのに対し、本種ではメスの第 7 腹節腹面に 1 個の黒紋を見せることなどで容易に区別できる。

生 息 地 大子町の標高約 300m の地点や那珂市の平野部から記録されている。平地～低山地にかけて生息していると思われる。

生存の危機 特定の植物や動物を食物としない本種にとって、これらを育む自然環境全体をセットとして保全することが、生存を継続させるために必要である。

特 記 事 項

執筆者(協力者) 成田行弘

文 献 1), 2)



撮影 成田行弘

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県 2000		対象外	
環境省 2014		対象外	

選 定 理 由 ①②③ 県北に生息する肉食性のカメムシ類で稀な種である。鱗翅類の幼虫や小昆虫などを捕食するとされているが、この種が安定的に生息するためには各種の鱗翅類などの昆虫類の生息が条件となる。鱗翅類の食草、食樹を育む森林の乾燥化、伐採等が進むことにより、本種の生息が脅かされる。

分 布 状 況 北海道、本州、四国、九州。国外では旧北区に広く分布する。

形態及び生態 体長 11 ~ 14mm。体色は、全体に赤味を帯びた褐色で斑紋等の目立った特徴はない。山地の樹上に生息するといわれているが、本県からは、北茨城市の標高 780m のところで、1 例が記録されている。鱗翅類の幼虫を捕食するといわれているが、詳しい生態は不明である。

近 似 種 形態、色彩ともに地味なカメムシで、これといった特徴に欠けるが、クチブトカメムシ類や本県産のカメムシ類を概観しても近似種は見当たらない。

生 息 地 北茨城市の山間部から記録されている。

生存の危機 特定の植物や動物を食物としない本種にとって、これらを育む自然環境全体をセットとして保全することが、生存を継続させるために必要である。

特 記 事 項

執筆者(協力者) 成田行弘

文 献 1), 2), 5)



撮影 成田行弘

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県 2000		対象外	
環境省 2014		対象外	

選 定 理 由 ①②③ 常緑広葉樹林化のミズキやヒサカキを寄主植物とすることから、開発や乾燥化による樹林の減少に伴い、本種の個体数のさらなる減少が予想される。

分 布 状 況 本州、四国、九州、屋久島、対馬、奄美大島。国外では台湾、中国にも分布する。

形態及び生態 体長 11 ~ 14mm。小盾板には黄白色の丸味のある逆三角形の斑紋を持つ。ミズキ科のミズキ、ツバキ科のヒサカキ等を寄主植物とする。産卵した卵を保護する習性が知られる。

近 似 種 エサキモンキツノカメムシに似るが、小盾板の斑紋がハート型にならないことで容易に区別できる。

生 息 地 本県では、水戸市、笠間市など、県央部を中心に記録が重ねられてきた。近年の温暖化により、本種の発生個体数も増えるのではないかと考えたが、依然、稀な存在である。

生存の危機 常緑広葉樹林の減少や消失により、個体数が減少するおそれがある。

特 記 事 項

執筆者(協力者) 成田行弘

文 献 2)



撮影 成田行弘

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県 2000	●	希少種	● ● ● ●
環境省 2014		対象外	

選定理由 ①②③ 本種については、ケンボナシのみを寄主植物とすることから、この植物の消失は本種の減少や絶滅につながる。

分布状況 本州、四国、九州。国外では朝鮮半島、台湾、中国、ベトナム、ラオスにも分布する。

形態及び生態 体長 16 ~ 18mm。大型の美しいカメムシで、その名のおり、前胸背板の側角は大きく、赤く鋭い。産卵した卵を保護する習性が知られる。

近似種 ツノカメムシ類のなかでも、側角の形状と配色は特徴的である。

生息地 日立市、水戸市など数か所から記録され、寄主植物としてケンボナシに強く依存している。

生存の危機 平地の雑木林などで見られるケンボナシが開発等で伐採されると、本種の生存は危機的な状況となる。

特記事項

執筆者(協力者) 成田行弘

文献 2), 7)



撮影 成田行弘

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県 2000		対象外	
環境省 2014		対象外	

選 定 理 由 ①②③ 茨城県で確認されている生息環境は、霞ヶ浦湖岸のヤナギなどに限定されており、湖岸の改修などで木が伐採されれば容易に危機に陥る可能性がある。

分 布 状 況 北海道から九州、屋久島まで広く分布するが生息地は局所的である。

形態及び生態 前翅長 13mm内外でクサカゲロウ科の中では中型である。腹部末端節（交尾器）は特異な形状をしており、目が良ければ肉眼でも同定可能である。湖岸のヤナギなどに限って見られ、成虫は5月と9月に記録されている。

近 似 種 同属で日本に分布するのは2種だが、九州以北では本種だけで、分布域に近似種はいない。

生 息 地 茨城県では霞ヶ浦沿岸の2か所（小美玉市、稲敷市）で確認されている。湖岸に生えるヤナギ類又はエノキから得られているが、なぜ湖岸に限られるのかは不明である。

生存の危機 生息地が霞ヶ浦湖岸の貧弱な環境に限定されているため容易に危機に陥る。

特 記 事 項 霞ヶ浦沿岸以外でも生息している可能性がある。利根川など大型河川の河川敷などの調査が不足している。高知県では準絶滅危惧種に指定されている。

執筆者(協力者) 櫻井 浩

文 献 1), 4), 6), 10)



撮影 櫻井 浩

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県 2000		対象外	
環境省 2014		対象外	

選 定 理 由 ③ 本州では標高の高い山地で見られるが、どの地も個体数が少ないため生態が解明されていない。茨城県では2か所で確認されているが、生息地は限定され、特に筑波山上部では他の産地と隔絶されている可能性がある。

分 布 状 況 青森県から九州まで広く分布するが局所的。

形態及び生態 前翅長 11mm内外。前翅と後翅前縁とに褐色のまだら紋がある。雄の触角は櫛状で本種の名の由来となっている。雌は体長より長い産卵管を持つ。灯火に飛来するが、生態については不明な点が多い。

近 似 種 本州では近似種は確認されていない。

生 息 地 茨城県では岡見湿原（常陸太田市）と筑波山上部で確認されている。山地に生息すると思われ、茨城の場合はおのずと筑波山及び県北部山地に限られる。しかし、八溝山では未だ確認出来ない。

生存の危機 幼虫の生息環境が不明だが、成虫が確認されている環境から考えると、沢の上流部の自然環境保全が本種の存続につながるものと思われる。

特 記 事 項 幼虫の生息場所の解明が待たれる。高知県では準絶滅危惧種に、富山県では情報不足に指定されている。

執筆者(協力者) 櫻井 浩

文 献 2), 6), 8), 10)



撮影 櫻井 浩

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県 2000		対象外	
環境省 2014		対象外	

選 定 理 由 ①②③ 生息環境が海浜部に限定され、現在まで数例しか確認されていない。全国的にも少なくなっており、茨城の海岸線においても生息出来る環境及び生息地は極めて限定されている。

分 布 状 況 北海道から九州まで広く分布し、主に海岸線に分布域がある。

形態及び生態 前翅長 57mm内外と大きく、ウスバカゲロウ科最大の種。幼虫は蟻地獄と呼ばれるすり鉢状の巣は作らず、植物が生えた砂地の表面下に潜み他の昆虫類を捕食する。成虫は夕方から夜間に活動的で、灯火にも飛来し蛾などを捕食する。

近 似 種 他のウスバカゲロウ科の種より一回り大きいいため容易に本種と分かる。

生 息 地 幼虫は植物が疎らに生じる起伏のある砂地に生息するため、生息地が限定される。東海村、ひたちなか市、日立市などの海岸線沿いの地域で確認されている。

生存の危機 砂浜の消失や防波堤の整備などで、生息に適した環境が極めて限定されている。砂浜から林に続く砂地環境の保全が本種の存続につながる。

特 記 事 項 近年確認された生息地は国有地内にあり、今後の保全対策が期待される。全国の 10 道府県でレッドリストに挙げられている。

執筆者(協力者) 櫻井 浩

文 献 9), 10)



撮影 櫻井 浩

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県 2000		対象外	
環境省 2014		対象外	

選 定 理 由 ②③ 八溝山での 1 例の記録以外得られていない。県外のいずれの地も高所に極めて稀に生息することから、茨城に於いても生息地、生息数共に極限されていると思われるが近県での情報が不足している。

分 布 状 況 北海道、本州、九州に分布するが、高所で局所的に記録されている。

形態及び生態 前翅長 7mm内外でヒメカゲロウ科の中では小型である。灯火にも飛来するが詳しい生態については未知な部分が多い。

近 似 種 翅形は、広く分布するホンバヒメカゲロウ *M. linearis* Hagen, に似ているが、本種は翅脈の横脈上に褐色の斑紋があるため同定は容易である。

生 息 地 茨城県では 2008 年に八溝山で 1 個体確認された。高所にのみ僅かに生息するものと思われる。

生存の危機 2008 年に記録されて以降、毎年調査しているにもかかわらず再確認出来ていない。生息個体数が極めて少ないと思われる。

特 記 事 項 本州では青森県や神奈川県などで確認されているが、多くの県は調査不足の感がある。

執筆者(協力者) 櫻井 浩

文 献 1), 2), 3)



撮影 櫻井 浩

茨城県 2016	●	情報不足①注目種	● ● ● ●
茨城県 2000		対象外	
環境省 2014		対象外	

選定理由 ②③ 北方系の種で、本州では富山県の高所と茨城県の八溝山頂で記録されており、本州では明らかに標高の高い山地に生息すると思われる。しかし、県内を含め近県の調査は不足している。

分布状況 北海道に分布するとされていたが、本州にも分布することが確認された（富山県、茨城県）。

形態及び生態 前翅長 20mm内外でクサカゲロウ科の中ではやや大型である。生態については、他のクサカゲロウ属と変わらないと思われるが、情報が少なく不明である。8月に採集されている。

近似種 ヨツボシクサカゲロウ *Chrysopa pallens* (Rambur) に近いが、ナナホシの名の通り、左右の頬に3つずつと触角間に1つの計7つの黒紋があり、他の種とは明らかに異なる。

生息地 八溝山の山頂付近での灯火採集で2007年と2011年に雌が1個体ずつ得られているにすぎない。八溝山の山頂付近に生息するものと思われる。

生存の危機 ここ7年間の八溝山の調査で2頭しか得られておらず、生息密度は極めて低いと思われる。広葉樹の自然林が維持される事が望まれる。

特記事項 未だ雄が得られていないため、さらなる調査が必要である。なお、北海道では準絶滅危惧種に指定されている。

執筆者(協力者) 櫻井 浩

文献 4), 5), 6), 7), 10)



撮影 櫻井 浩

茨城県 2016 情報不足①注目種 ●●●●●

茨城県 2000 対象外

環境省 2014 対象外

選 定 理 由 ①③ 近似種のクロセンブリが、県内の丘陵地から山地にかけて広く分布するのに比べ、本種は平野部のため池でしか確認されていない。移動能力に乏しく、生息地が孤立状態になっている。

分 布 状 況 本州（日本固有種）。

形態及び生態 前翅長 8～14mm，単眼を欠き，体色は茶褐色。成虫は春に発生する。昼行性だが，行動はあまり活発ではない。幼虫は水性だが，卵は水面上に張り出した木の枝や葉など陸上に産み付けられる。孵化した幼虫は，落下して水中生活を開始する。

近 似 種 県内の丘陵地から山地にかけて，形態のよく似たクロセンブリ *S. melania* Nakamura が分布するが，交尾器の形態および，体色が黒色であることなどで識別できる。

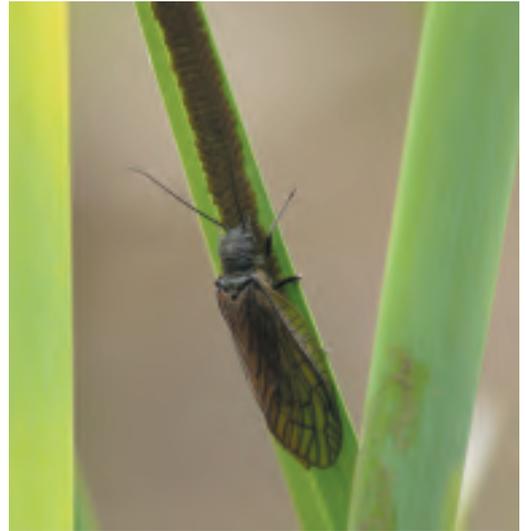
生 息 地 笠間市，および小美玉市のため池から記録されている。

生存の危機 生息地は，いずれも人家や農耕地に隣接しており，開発や水質悪化などによる影響を強く受ける恐れがある。

特 記 事 項 笠間市の産地は池の半分が埋め立てられた。

執筆者(協力者) 柳田紀行

文 献 1), 2)



撮影 柳田紀行

茨城県 2016 情報不足①注目種 ●●●●

茨城県 2000 対象外

環境省 2014 情報不足 ●●●●

選定理由 ①②③ 北関東の限定されたヨシ原（渡良瀬遊水池と菅生沼の2カ所）にのみ生息するが、大規模公園化などの整備事業ともなう生息環境の消失によって絶滅の危機に瀕している。

分布状況 日本固有種。生息確認は栃木県（渡良瀬遊水池）と本県常総市（旧水海道市・菅生沼）の2カ所だけ。

形態及び生態 体長 8.0～8.5mm。全体に暗黒褐色で光沢があり、上翅には縦4列に眼状紋を配し、紋の中央部は紫色に輝く。成虫は春期に低湿地のヨシ原水辺周辺に見られる。栃木県渡良瀬遊水池を原産地として記載され、それ以前に常総市・菅生沼から記録された1個体も本種であった。

近似種 やや小型の近似種コハンミョウモドキ *E. punctatus* Motschulsky は利根川周辺域、小貝川流域、霞ヶ浦湖畔域などから記録されている。

生息地 1952年に常総市の菅生沼で記録されたが、その後の記録はない。

生存の危機 産地である菅生沼は周辺からの泥土や生活排水の流入などによって生息環境が大きく変化し、絶滅が危惧されている。

特記事項 菅生沼では調査不足の感がいなめず、情報不足にある。

執筆者(協力者) 大桃定洋・西山 明

文献 32), 38), 49)



撮影 森田誠司

茨城県 2016 ●●●●● 絶滅危惧 I A 類 ●

茨城県 2000 ●●●●● 絶滅危惧種 ●

環境省 2014 ●●●●● 絶滅危惧 I B 類 ●

選定理由 ①②③ 奥州山系のブナ帯～ブナ帯下部の自然林では比較的普通に発見されるが、そこから離れた八溝山の分布域は貴重である。しかし、近年の生息確認はなく、絶滅が危惧される。

分布状況 日本固有種。フォッサマグナ帯の東側で、長野県、北関東～東北各県、佐渡島に分布する。

形態及び生態 体長 14～24mm。全体に灰褐色～褐色。上翅は基部に一对のコブ状突起を持ち、先端は鋭く棘状を呈する。成虫は8月下旬から現れ、湿ったフキ、イタドリ、ヤマブドウ、ヤマハンノキなどの枯葉を後食し、成虫で越冬する。

近似種 分布域には近似種は産せず、特異な体型から同定を誤ることはない。

生息地 1962年に大子町・八溝山の山頂付近で記録されたが、その後の記録はない。

生存の危機 スギ・ヒノキの植林による生息環境の激変が影響を及ぼしていると考えられるが、長野県や北部日本海側の地域ではスギ林にも現れるようで、生存を脅かしている要因はわからない。

特記事項 いわき市の水石山と鬮伽井岳でも1960年頃に記録されたがその後の記録はなく、八溝山と同様に貴重な分布域の消滅が危惧されている。

執筆者(協力者) 大桃定洋・公文 暁

文献 4), 49), 59)



撮影 公文 暁

茨城県 2016 ●●●●● 絶滅危惧 I A 類 ●

茨城県 2000 ●●●●● 絶滅危惧種 ●

環境省 2014 対象外

選定理由 ①②③ 大川、丘陵地あるいは高原などの草地環境に生息するが、産地は局所的。そのような環境が消滅しつつある今日、本種の生息も心配され、絶滅が危惧される。

分布状況 本州、九州、対馬に産し、国外では朝鮮半島や中国、台湾にも分布する。

形態及び生態 体長 8.5 ~ 12.0mm。全体に赤褐色で上翅白色毛短い黄褐色毛が入り混ざった不規則な模様を配する。成虫は 6 ~ 8 月に温帯樹林帯のオトコヨモギやヨモギを含む草地に現れる。

近似種 県内には同属近似種ニセビロウドカミキリ *A. sejuncta* (Bates) が分布し、その小型個体に似るが上翅に不規則な毛斑が現れることで容易に区別される。

生息地 1979年にひたちなか市水戸射爆場跡地（旧那珂湊市）で記録されたが、その後の記録はない。同地は現在では大規模公園に整備されて、かつての生息環境は消滅してしまった。しかし、県内の大川や丘陵地などの草地環境に生息する可能性がある。

生存の危機 記録地は大規模公園に整備されて、かつての環境は大きく変わってしまった。

特記事項

執筆者(協力者) 大桃定洋・公文 暁

文献 4), 49), 59)



撮影 公文 暁

茨城県 2016 ●●●●● 絶滅危惧 I A 類 ●

茨城県 2000 ●●●●● 絶滅危惧種 ●

環境省 2014 ●●●●● 準絶滅危惧 ●●●●●

選定理由 ①③ 池沼周辺の限られた環境に生息するが生息地は非常に局所的、かつ不安定な環境のために、絶滅が危惧される。

分布状況 本州、四国、九州、琉球に産し、国外では台湾、中国、東南アジア、インドにも分布する。

形態及び生態 体長 16.5 ~ 17.0mm。全体に暗黒色で、頭部と前胸背板は緑銅あるいは赤銅色の光沢に富み、上翅側縁部は緑色に輝く。

近似種 北方系の同属種ツヤキベリアオゴミムシ *C. spoliatus motschulskyi* Andrewes は県内に分布するものの非常に稀な種で、上翅が赤銅色光沢の強い緑色に輝くことで容易に区別される。

生息地 河川敷、水田、池沼周辺などの湿地に生息し、常総台地の常総市（旧水海道市）および北総台地の守谷市や取手市から記録されている。

生存の危機 全国的に急激に個体数が減少しているが、その原因は不明。茨城県でも最近の 50 年に記録はなく、絶滅してしまったか心配される。

特記事項 南方系の種で、関東平野では極めて稀。茨城県は北限の分布。

執筆者(協力者) 大桃定洋・西山 明

文献 32), 49), 53), 55)



撮影 森田誠司

茨城県 2016 ●●●●● 絶滅危惧 I A 類 ●

茨城県 2000 ●●●●● 対象外 ●

環境省 2014 ●●●●● 絶滅危惧 I A 類 ●

選 定 理 由 ①③ 池沼周辺の限られた環境に生息するが生息地は非常に局所的で、環境の消失によって絶滅が危惧される。

分 布 状 況 本州、四国、九州に産し、国外では中国、東南アジア、フィリピン、インド、スリランカにも分布する。

形態及び生態 日本産本属中の最大種で、体長 15.5 ~ 17.0mm。体型は紡錘形でやや扁平、体表は滑沢。上翅条溝の第一と第二、第三と第四、第五と第六はそれぞれ末端で連結する。主に湿地環境で採集されるが夜間に灯火に飛来する個体の採集記録が多い。

近 似 種 同属種オオトックリゴミムシ *O. vicarius* Bates も県内各地に分布するが、小型 (12 ~ 13mm) で上翅条溝が末端でも連結しないことから区別される。また、これよりもやや大型のエチゴトックリゴミムシ *O. echigonus* Habu et Baba が菅生沼で記録されたが、この種は上翅条溝は細く、間室が平坦なことで区別される。

生 息 地 常総台地の鏡町および県央の城里町 (旧常北町) から記録されている。1981 年に常北町で記録されて以降、追加記録はない。

生存の危機 生息地の河川敷改修工事後は生息の再確認には至らず、絶滅してしまったか心配される。

特 記 事 項 南方系の種で、関東平野では極めて稀。茨城県は北限の分布。

執筆者(協力者) 大桃定洋・西山 明

文 献 8), 32), 49)



撮影 森田誠司

茨城県 2016 ●●●●● 絶滅危惧 I A 類 ●

茨城県 2000 対象外

環境省 2014 ●●●●● 絶滅危惧 I A 類 ●

選 定 理 由 ①③ 限定された生息環境と個体数の少なさは種の維持を厳しくしている。その上、自然災害や河川改修などによって生息環境が消滅している。

分 布 状 況 日本固有種。本州の関東地域とその周辺地域 (山形、新潟、福島、栃木、群馬、埼玉および茨城県) に特異的に分布する。

形態及び生態 体長 2.7mm前後。全体に赤褐色 (鉛色) で上翅側縁はほぼ平行、先端部は会合線に向かって湾入する。

近 似 種 県内に広く分布する同属のツヤドロムシ *Z. nitida* Nomura はやや小型で上翅は暗黒褐色を呈することで容易に区別される。

生 息 地 2002 年に常陸大宮市 (旧御前山村) 相川の湧水付近で 1 個体が採集されたものの、その湧水は消失してしまった。

生存の危機 採集地環境の変化によってその後の追加記録はない。

特 記 事 項 伏流水の湧き出し口周辺で採集される地下水性の特異な種で、同様の生態を持つ種は他にない。

執筆者(協力者) 大桃定洋・足田直之

文 献 50), 54), 65), 66), 67)



撮影 西山 明

茨城県 2016 ●●●●● 絶滅危惧 I A 類 ●

茨城県 2000 対象外

環境省 2014 ●●●●● 絶滅危惧 I B 類 ●

選 定 理 由 ① 県内では最近の 60 年間に全く観察記録がなく、絶滅したと思われる。

分 布 状 況 本州、四国、九州、琉球、小笠原に産し、国外では台湾、中国、朝鮮半島にも分布する。

形態及び生態 体長 24 ~ 29mm。全体に黒褐色で緑色の光沢を帯び、前胸背板および上翅側縁は黄褐色で上翅には 3 条の点刻列がある。水生植物の生じた池沼や放棄水田などに生息し、主に西南日本～琉球に分布するが本州では非常に珍しい。

近 似 種 同属種マルコガタノゲンゴロウ *C. lewisianus* Sharp (体長 21 ~ 26mmで、体型はやや卵形) が本州、九州に分布するが、茨城県からは未記録。

生 息 地 県南・県西地域の東茨城郡吉田、つくばみらい市谷和原、坂東市菅生沼の記録がある。

生存の危機 過去に記録された地域は県南西部で、これらの地域では水質汚濁や埋め立てなどによる生息環境が著しく変化してしまった。

特 記 事 項 県内の記録はいずれも 50 年以上も昔の記録で、現在の生息は期待できないであろう。なお、栃木県では絶滅種と判断された。

執筆者(協力者) 大桃定洋・疋田直之

文 献 1), 37), 49)



撮影 西山 明

茨城県 2016 ●●●●● 絶滅危惧 I A 類 ●

茨城県 2000 対象外

環境省 2014 ●●●●● 絶滅危惧 II 類 ●●●

選 定 理 由 ①③ 近年の生息確認はなく、絶滅が危惧される。

分 布 状 況 本州 (福島県以南)、四国、九州、隠岐に産し、国外では樺太、東シベリア、朝鮮半島にも分布する。

形態及び生態 体長 10 ~ 15mm。全体に黄褐色～黒色で、前胸背板と上翅の両側と中央部には白色状紋が走る。成虫は 5 月末～ 8 月に現れ、草地のアザミやアサ、クサマオなどを食する。

近 似 種 近似種はいない。特異な色調・斑紋から同定を誤ることはない。

生 息 地 1951 年に大子町・八満山の山麓で記録されたが、その後の記録はない。

生存の危機 草地環境の消滅。近年の生息確認はなく、絶滅が危惧される。

特 記 事 項 麻の害虫として知られる。近年は麻栽培の制限で麻畑がなくなり、草地のアザミに依存して生息するようだ。

執筆者(協力者) 大桃定洋・公文 暁

文 献 4), 49), 59)



撮影 公文 暁

茨城県 2016 ●●●●● 絶滅危惧 I A 類 ●

茨城県 2000 対象外

環境省 2014 ●●●●● 絶滅危惧 II 類 ●●●

選定理由 ①②③ 生息地は非常に局所的で、個体数も少ない。

分布状況 日本固有種。本州（関東から東北地方）の特産種。

形態及び生態 体長 2.8 ~ 3.4mm。全体に黄褐色で、体型は幅の狭い楕円形。上翅は密に深い点刻を列状に配する。水生植物が豊かで湧水のある沼池やアオミドロの生じた休耕田などの清浄な浅い湿地環境に生息する。

近似種 同属のクロホシコガシラミズムシ *H. basinotatus* Zimmermann とマダラコガシラミズムシ *H. sharpi* Wehncke が知られ、両種ともよく似るが体型はやや幅広。クロホシはやや大型で上翅黒色紋は独立・散在させ、会合部は巾広く黒色。マダラはやや小型で各黒色紋は連結する。

生息地 水戸市、ひたちなか市、笠間市などから記録されているが、産地は非常に局所的である。また、よく似たクロホシは天子町、ひたちなか市、つくば市から、マダラは天子町、水戸市、小美玉市、笠間市、つくば市から記録されている。

生存の危機 湧水のある沼池やアオミドロの生じた休耕田などの清浄な浅い湿地環境の消滅などによって生息環境が消失している。

特記事項

執筆者(協力者) 大桃定洋

文献 12), 22), 49)



撮影 西山 明

茨城県 2016 ●●●● 絶滅危惧 I A 類 ●

茨城県 2000 ●●●● 希少種 ●●●●

環境省 2014 ●●●● 絶滅危惧 I B 類 ●

選定理由 ①②③ 本州産の特異な中型種で、生息地は県央地域の数カ所に限られ、個体数も少ない。

分布状況 日本固有種。本州（東北、関東、近畿）に特異的に分布する。

形態及び生態 体長 16 ~ 17mm。頭部と前胸背板の大部分は黄褐色で、上翅は黒色で、基部後方の横帯紋、上翅側縁の細い縦帯、全面に散在する細い縦帯紋は黄褐色。湧水のある浅い湿地環境に生息し、灯火に飛来することもある。

近似種 亜種 *sakishimanus* Nakane が沖縄本島から八重山諸島に分布するものの、本州の中部地方から奄美諸島は分布の空白域である。

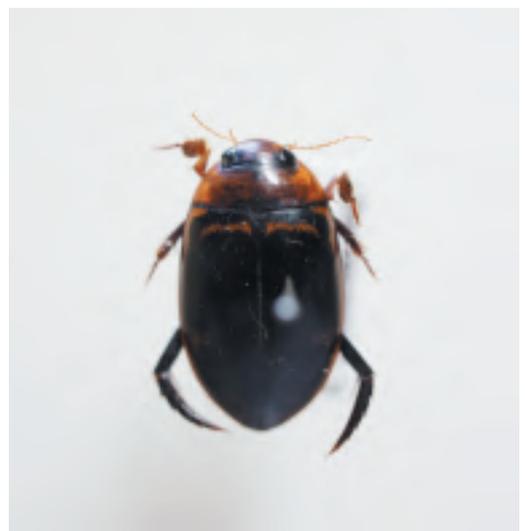
生息地 県央の城里町(旧桂村)、笠間市(旧岩間町)、小美玉市山(旧美野里町)などの里山環境から記録されていたが近年は非常に稀となり、ほとんど記録はない。

生存の危機 1980年以降の埋め立て事業などによる生息環境の消滅で近年の生息確認はなく、絶滅が危惧される。

特記事項 笠間市(旧笠間町)の生息地は造成工事によって埋め立てられてしまった。

執筆者(協力者) 大桃定洋・疋田直之

文献 46), 49), 64)



撮影 西山 明

茨城県 2016 ●●●● 絶滅危惧 I B 類 ●

茨城県 2000 ●●●● 絶滅危惧種 ●●●●

環境省 2014 ●●●● 絶滅危惧 I B 類 ●

選定理由 ①②③ 特に県南や県西地域では生息環境の悪化によって絶滅に瀕し、県北地域でも絶滅が危惧される。

分布状況 北海道、本州、四国、九州、香岐、屋久島に産し、台湾、中国、朝鮮半島、シベリアにも分布する。

形態及び生態 体長 34 ~ 42mm。全体に暗褐色で、緑色の光沢がある。前胸背板と上翅の側縁は黄褐色。雄は全面に光沢が強く雌は全面に縮刻を密に装う。水生植物の生じる池沼や浅い湿地環境にも生息し、灯火にも飛来する。

近似種 日本産最大のゲンゴロウで、これに相当する体長の種は青森県と北海道に分布するゲンゴロウモドキ *Dytiscus dauricus* Gebler と本州北部および北海道に分布するエゾゲンゴロウモドキ *D. maginialis czerskii* Zaitzev が知られる。しかし、前胸背板は前後左右側縁が黄褐色を呈し明確に区別できる。

生息地 かつては県内各地の溜め池や沼などに普通に生息し、灯火にも飛来した。しかし、近年は個体数が激減し、県南や県西部では絶滅が心配される。

生存の危機 水田への農薬散布あるいは生活排水委の流入などによる水質劣化や埋め立てなどによって生息環境は容易に劣化し、特に県南・県西地域では顕著である。

特記事項 全国的に絶滅の危険が増大している種として関心が高まっている。

執筆者(協力者) 大桃定洋・平田直之

文献 12), 28), 49)



撮影 染谷 保



撮影 西山 明

茨城県 2016	● ● ● ● ●	絶滅危惧 I B 類	●
茨城県 2000	● ● ● ● ●	危急種	● ●
環境省 2014	● ● ● ● ●	絶滅危惧 II 類	● ●

選定理由 ①②③ 生息地は非常に局所的で、個体数も少ない。

分布状況 北海道、本州、四国、九州に産し、千島や樺太にも分布する。

形態及び生態 体長 4.9 ~ 5.6mm。全体に鉛黒色で、上翅会合部は金銅色。湧水のある清浄な池や沼あるいは小さな沢に生息する。

近似種 同属種ミズスマシ *G. japonicus* Sharp とヒメミズスマシ *G. gestroi* Regimbart が県内に分布する。これらの区別は微妙で、雄交尾器を検しなれば確定できない。

生息地 ひたちなか市からの記録しかない。また、近似のヒメミズは水戸市と阿見町の記録だけで、最普通のミズは北茨城市花園山地、水府村、岩間町愛宕山、つくば市筑波山、牛久市などの平地～山間部から記録されている。

生存の危機 中山間地の湧水のある清浄な沢や沼池に生息する。しかし、近年はヒメミズスマシとともに急激に生息が確認できなくなり、その原因は不明である。

特記事項

執筆者(協力者) 大桃定洋

文献 12), 22), 28), 49), 57)



撮影 西山 明

茨城県 2016	● ● ● ● ●	絶滅危惧 I B 類	●
茨城県 2000	● ● ● ● ●	対象外	
環境省 2014	● ● ● ● ●	絶滅危惧 I B 類	●

選 定 理 由 ①②③ 生息地は一般に非常に局所的で、個体数も少ない。

分 布 状 況 日本固有種。北海道、本州、対馬、奄美大島、沖縄島に産する。

形態及び生態 体長 3.0～4.3mm。全体にやや光沢のある赤～黄褐色。放牧地などのやや乾燥した牛糞で見つかることが多い。

近 似 種 体長と色彩から同属の他種とは容易に区別でき、同定を誤ることはない。

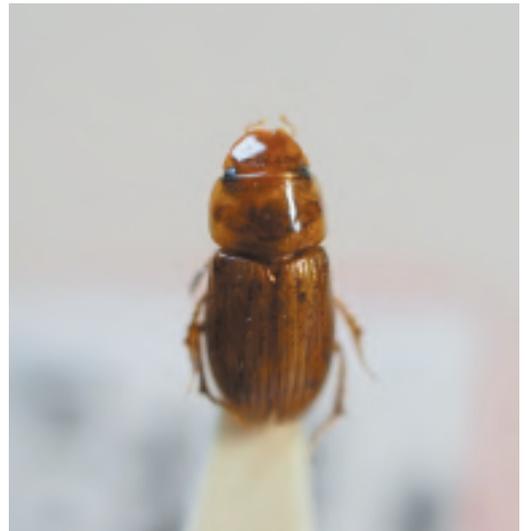
生 息 地 唯一、筑波大学構内の草地で採集された記録しかない。

生存の危機 放牧地のやや乾燥した牛糞などに見られるが、環境整備による牛糞の始末によって生息域が縮小している。

特 記 事 項 調査不足の感がいなめず、情報不足にある。

執筆(協力)者 大桃定洋

文 献 19), 22)



撮影 西山 明

茨城県 2016 ●●●● 絶滅危惧 I B 類 ●

茨城県 2000 対象外

環境省 2014 ●●●● 準絶滅危惧 ●●●●

選 定 理 由 ②③ 本州の限られた地域から記録される不思議な分布域を持つ種で、生息数も少ない。

分 布 状 況 九州と本州の限られた地から記録されている。海外では台湾、中国、インドシナからインドに広く分布する。

形態及び生態 体長 3.0～3.4mm。頭部と前胸背板は赤褐色。上翅は黒褐色で側縁は赤褐色を呈し、中央部に縦帯状、後半 1/4 に斜め帯状の赤褐色紋を配する。植物の多い池沼の浅瀬などで見つかることが多い。

近 似 種 同所的に分布する。

近縁のコツブゲンゴロウ *Noterus japonicus* Sharp はやや大型(3.9～4.3mm)で全体的に黄褐色で光沢が強く、上翅に黒色紋が現れることはないことから容易に区別できる。

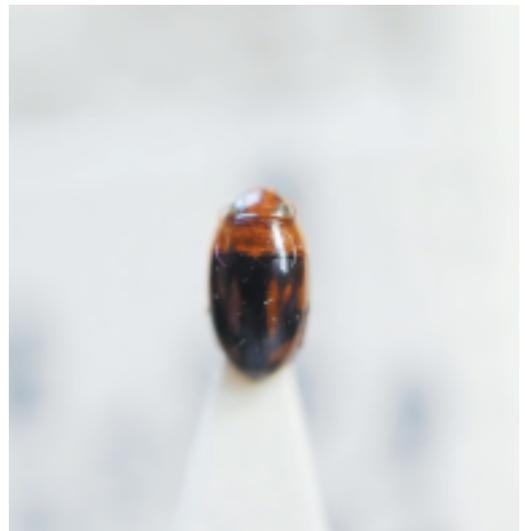
生 息 地 最近、土浦市の水生植物の多い溜め池から発見された。

生存の危機 生息地はハス田の周辺部で、常に人的破壊を伴う環境であり、安定した生息は望めない。

特 記 事 項 南方系の種で、本州の各地から点々と記録される不思議な分布域を持つ種で、土浦市の産地は北限である。

執筆(協力)者 大桃定洋・疋田直之

文 献 42), 51)



撮影 西山 明

茨城県 2016 ●●●● 絶滅危惧 I B 類 ●

茨城県 2000 対象外

環境省 2014 ●●●● 絶滅危惧 I B 類 ●

選定理由 ①③ 既知生息地では近年の20年間に追加記録は全くなく、新たに発見された生息地も水田で常に生息環境の破壊にさらされている。

分布状況 本州（関東地方）と対馬から記録され、海外では中国に分布する。

形態及び生態 体長4.0～6.1mm。全体に黄褐色で、部分的に緑色の光沢がある。上翅の偶数間室はやや隆起し、後半には暗色のコブ状隆起を散在させる。セリなどの湿性植物の多い休耕田、湿地、溜め池の浅瀬などで主に冬期に見つかる。

近似種 県内に近似種は生息しないが、北海道や青森県には同属の3種が分布する。

生息地 つくば市筑波山およびその周辺と古河市利根川の合計3カ所から記録されていた。

生存の危機 容易に変化する環境に生息するため、安定した生息は常に脅かされている。

特記事項 最近、つくば市筑波山山麓の有機農法水田で新たな生息地が発見された。

執筆者(協力者) 大桃定洋

文献 7), 20), 22), 49)



撮影 西山 明

茨城県2016 ●●●● 絶滅危惧I B類 ●

茨城県2000 ●●●● 絶滅危惧種 ●

環境省2014 ●●●● 絶滅危惧I B類 ●

選定理由 ① 都市分布型の典型的なカミキリであるが、近年はほとんど姿を見ることができなくなった。理由は不明である。

分布状況 北海道から屋久島、奄美諸島まで広く分布し、国外では台湾、朝鮮半島からインドシナ地域まで広大な分布域を持つ。

形態及び生態 体長8～14mm。全体に暗赤色で、上翅には2対の黄白色円形紋を配する。成虫は5月末～8月に平地から低山地のクリの花などに集まり、灯火にも飛来する。

近似種 日本産は1属1種。上翅斑紋が消失した個体がまれに現れ、ヒメカミキリ属(*Ceresium*)の種を思わせるが、前胸背板の形状から容易に区別できる。

生息地 1980年代までは各地に見られ、大子町、常陸大宮市、水戸市、古河市、土浦市、つくば市などで記録された。

生存の危機

特記事項 かつては都市部も含めて各地に広く分布する普通種であったが、近年の記録はほとんどないようだ。

執筆者(協力者) 大桃定洋・公文 暁

文献 4), 49), 59)



撮影 公文 暁

茨城県2016 ●●●● 絶滅危惧I B類 ●

茨城県2000 対象外

環境省2014 ●●●● 絶滅危惧I B類 ●

選 定 理 由 ②③④ 黒潮の流れに沿った太平洋沿岸の良好な海岸環境の残る地域に生息するが、個体数は非常に少ない。

分 布 状 況 本州、伊豆諸島、九州に分布し、中国、朝鮮半島からインドシナ地域まで分布。

形態及び生態 体長 11 ~ 13.1mm。全体に暗黒褐色で、頭部と前胸背板は黄褐色短毛に覆われる。小盾板は特異な五角形。成虫は 5 月 ~ 9 月に海浜環境の打ち上げられた魚や鳥の死体に集まり、灯火にも飛来する。

近 似 種 大型で厚みのある特異な体型と小盾板が五角形であることから、他のコブスジコガネ類とは容易に区別される。

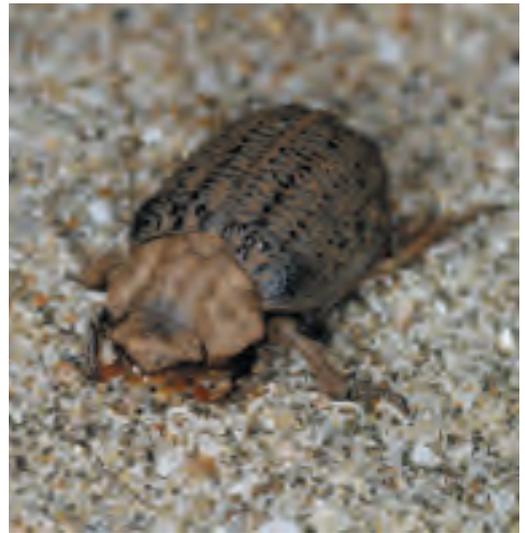
生 息 地 1977 年に神栖市（旧波崎町）で記録され、その後の暫くの間は生息が確認されていなかった。しかし、2004 年に再確認され、個体数は少ないものの安定している。

生存の危機 人気のある甲虫であることから、採集圧が心配される。

特 記 事 項 日本産コブスジコガネ類の中では唯一の亜属 (*Aframorgus*) を異にする。

執筆(協力)者 大桃定洋 (平井剛夫)

文 献 50), 56)



撮影 平井剛夫

茨城県 2016 ●●●●● 絶滅危惧 I B 類 ●●

茨城県 2000 対象外

環境省 2014 ●●●●● 絶滅危惧 II 類 ●●●●●

選 定 理 由 ①②③ 西南日本に分布の中心がある種で、北関東地域では非常に珍しく、主に里山林や寺社林などに発生するが非常に局所的で、個体数も少ない。

分 布 状 況 本州 (山形県以南)、四国、九州、対馬から記録され、国外では中国、朝鮮半島に分布する。

形態及び生態 体長 16 ~ 29mm。全体に金緑色で、橙色あるいは赤色を帯びる個体もいる。上翅の 2 対の丸い陥没紋は特異的。成虫は 5 月末 ~ 8 月中頃に現れ、アオハダ、クロガネモチ、オガタマノキ、ツゲなどの衰弱木や新しい立ち枯れに飛来する。

近 似 種 よく似た同属のクロマダラタマムシ *N. querceti* (Saunders) は全体に黒みが強く、上翅に陥没紋がないことなどから容易に区別できる。主に西南日本に分布し、本県は分布の北東限で、はるかに珍しい種である。

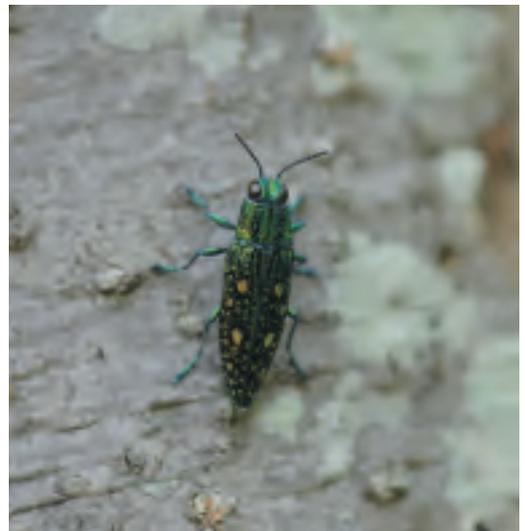
生 息 地 水戸市偕楽園は古くから知られた生息地であるが、近年は水戸市森林公園、城里町 (旧桂村) 御前山、常陸大宮市下伊勢畑、筑西市 (旧協和町) 蓬田、美野里町などからも記録され、局所的ながら広く分布するようだ。

生存の危機 里山林の伐採などによって生息環境が破壊され、個体数が著しく減少している。

特 記 事 項 近年、朝鮮半島 ~ 中国にも分布することが知られた。なお、本種は基亜属 *Nipponobuprestis* に属するが、よく似た同属のクロマダラタマムシは亜属 (*Nipponobuprestisia*) を異にする。

執筆(協力)者 大桃定洋

文 献 49), 22)



撮影 佐々木泰弘

茨城県 2016 ●●●●● 絶滅危惧 II 類 ●●●●●

茨城県 2000 ●●●●● 絶滅危惧種 ●●●●●

環境省 2014 対象外

選定理由 ①②③ 大川の中・上流域の河川敷などに生息するが産地は非常に局所的であり、生息環境の悪化によって個体数は著しく減少している。

分布状況 北海道、本州、四国、九州、対馬に分布。海外では朝鮮半島、中国、シベリア南東部からも記録がある。

形態及び生態 体長 16～17mm。全体に暗緑色で暗褐色を帯びる個体もいる。体下面は緑青色の金属光沢に富む。頭部上唇前縁は波状で中央に小歯を持つ。成虫は 4 月下旬～6 月中旬に河川敷や荒廃草地などの乾燥地などに見られるが、非常に局所的である。

近似種 同所的に生息する同属のミヤマハンミョウ *C. sachalinensis* Morawitz は体下面が緑赤色の金属光沢に輝くことや頭部上唇前縁の形状で区別され、カワラハンミョウ *C. laetescrpta* Motschulsky とは上翅の特異な紋様で容易に区別される。

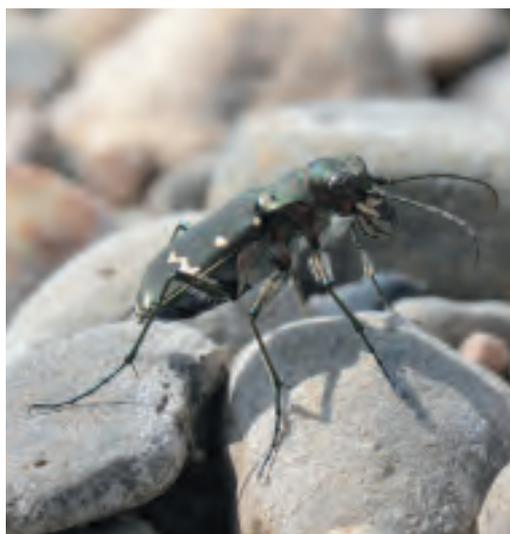
生息地 大子町・久慈川河川敷の数力所、城里町（旧桂村）御前山、桜川市（旧真壁町）筑波山などの限られた地域から記録されている。

生存の危機 開発・改修事業によって生息環境が大きく変化し、種の維持が心配される。

特記事項 生息地が局限される本種とミヤマおよび広域分布種のニワハンミョウ *C. japana* Motschulsky の 3 種は外見的に非常に類似しており、同定には注意を要する。

執筆者(協力者) 大桃定洋

文献 6), 28), 44), 49), 58)



撮影 佐々木泰弘

茨城県 2016	● ● ● ● ● ● ● ● ● ●	絶滅危惧Ⅱ類	● ● ● ● ● ● ● ● ● ●
茨城県 2000	● ● ● ● ● ● ● ● ● ●	危急種	● ● ● ● ● ● ● ● ● ●
環境省 2014	● ● ● ● ● ● ● ● ● ●	準絶滅危惧	● ● ● ● ● ● ● ● ● ●

選定理由 ①②③④ 主にクヌギの古木などが多い里山林～平地林に生息するが、個体数は少なく、生息環境の消滅も影響して野外での種の維持が心配される。

分布状況 北海道、本州、四国、九州、対馬に分布。海外では中国、朝鮮半島からも記録されている。

形態及び生態 体長 25～75mm (大腮を含む)。全体に漆黒で、上翅には微細な点刻を散布する。小型の個体では点刻が強くなり、8～10条の点刻列のある縦条が現れる。成虫は 6 月～9 月頃に現れ、夜行性で昼間は樹洞などに潜み、灯火にも飛来する。

近似種 近縁のヒラタクワガタ *Serrognathus platymelus* (Saunders) が分布するが、大あごの形状から容易に区別できる。

生息地 分布の中心は西南日本にあり、県内のクヌギなどの平地林にも生息するが非常に稀である。

生存の危機 近年は各地で平地林の保護活動が拡がりつつあるも、クヌギなどの伐採によって生息環境が狭められている。

特記事項 日本最大のクワガタムシで人気があり、常にペット業者やマニアによる採集圧が問題視される。なお、成虫は長命で、3 年以上生きることがあるようだ。

執筆者(協力者) 大桃定洋

文献 45), 49)



撮影 渡辺 健

茨城県 2016	● ● ● ● ● ● ● ● ● ●	絶滅危惧Ⅱ類	● ● ● ● ● ● ● ● ● ●
茨城県 2000	● ● ● ● ● ● ● ● ● ●	危急種	● ● ● ● ● ● ● ● ● ●
環境省 2014	● ● ● ● ● ● ● ● ● ●	絶滅危惧Ⅱ類	● ● ● ● ● ● ● ● ● ●

選定理由 ①②③④ 中山間部～山間部の牧場に生息し、主に牛糞に依存しているが近年の個体数減少は著しい。家畜飼料中の何らかの成分が影響しているのかもしれない。

分布状況 本州、四国、九州、に分布。海外ではシベリアからも記録されている。

形態及び生態 体長 17～24mm。全体に黒色で光沢が強い。前胸背板は中央に明瞭な縦溝を走らせ、前角は丸い。成虫は夜行性で、6月～10月頃に林内の獣糞に集まり、放牧地の新鮮な牛糞などにも集まる。秋に個体数が増加する。

近似種 本種と同様の環境に生息する同属のダイコクコガネ *C. ochus* (Motschulsky) は北海道～屋久島に分布し、前胸背板の前角が切断状に角張り、中央の縦溝が痕跡程度である。

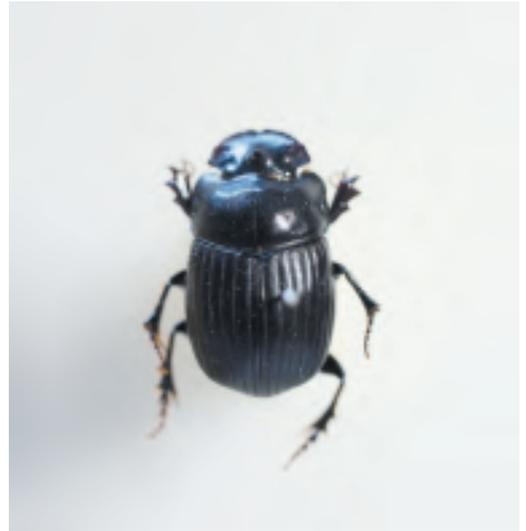
生息地 県央から県北の中山間部～山間部の牧場に生息する。より大型のダイコク（体長 15.7～34.0mm）は牧場の牛糞処理として人為的に導入されているようだが、小型の本種は同様の環境に生息するものの、むしろ獣糞に依存していることが多いようだ。

生存の危機 人気のある甲虫であることから、採集圧が心配される。

特記事項 小規模の牧場でも生息する。以前は県内の分布は疑問視されていたが、近年は局所的ながら生息することが確認された。

執筆者(協力者) 大桃定洋

文献 29), 49), 50)



撮影 西山 明

茨城県 2016	● ● ●	絶滅危惧Ⅱ類	● ●
茨城県 2000	● ● ●	危急種	● ●
環境省 2014	● ● ●		対象外

選定理由 ①②③ ブナやシデ類の古木を含むやや湿潤で自然度の高い広葉樹林帯に生息するが局所的で、個体数も非常に少ない。

分布状況 日本固有種。本州、四国、九州、屋久島に分布。

形態及び生態 体長 22～32mm。全体に光沢のある黒褐色で、青銅あるいは紫銅色の光沢を帯びる個体もいる。成虫は7～8月頃に現れ、樹洞の中などにいることが多い。

近似種 独特の体型と大きさから同定を誤ることはない。

生息地 大子町花瓶山や北茨城市花園山などの県北の山間部から記録されているが個体数は非常に少ない。

生存の危機 自然度の高い広葉樹林の伐採などによる生息環境の減少や森林の乾燥化によって絶滅が心配される。

特記事項 特有のジャコウ臭を発することから容易に発見されることがある。

執筆者(協力者) 大桃定洋

文献 41), 49), 51)



撮影 公文 暁

茨城県 2016	● ● ●	絶滅危惧Ⅱ類	● ●
茨城県 2000	● ● ●	危急種	● ●
環境省 2014	● ● ●	準絶滅危惧	● ●

選定理由 ①②③ 分布の中心は西南日本で、本県の沿岸地域における生息は日本における分布の北限のようだ。貴重な生息地である。

分布状況 本州から沖縄本島まで、周辺の島々を含めて広く分布し、海外では朝鮮半島、中国、インドシナ地域にも分布する。

形態及び生態 体長 26 ~ 34mm。全体に赤褐色で体型は扁平。成虫は夜行性で、6月~9月頃にシイノキなどの枯死材周辺を徘徊し、灯火にも飛来する。

近似種 特異な体型から同定を誤ることはない。

生息地 50 ~ 60年以前の記録では笠間市などの内陸部からの記録もあるが、近年では神栖市や鹿嶋市などの鹿行地域、日立市、北茨城市などの沿岸部からの記録しかない。

生存の危機 寺社林や座敷林などの照葉樹林に残るシイノキの古木に依存して発生することから、そのような環境が急激に減少している近年は生存の危機に瀕している。

特記事項 昼間はシイノキ類の脱出孔中に潜んでいることが多く、松葉などを孔に入れて確認することができる。鹿行地域の分布は自然および緑地環境保全地域に依存している。

執筆者(協力者) 大桃定洋・公文 暁

文献 4), 39), 40), 49), 59)



撮影 公文 暁

茨城県 2016	● ● ●	絶滅危惧Ⅱ類	● ● ●
茨城県 2000	● ● ●	危急種	● ● ●
環境省 2014		対象外	

選定理由 ①②③ ブナ類に特異的に依存するが産地は局所的で、個体数も少ない。

分布状況 日本固有種。本州、四国、九州に分布する。

形態及び生態 体長 25 ~ 35mm。

全体に黒色で。上翅は白色微毛による小斑紋を散布し、中央とその前後で横帯を形成する。成虫は夜行性で、7月~8月頃にブナ類生木の空洞などに潜み、灯火にも飛来する。

近似種 ヒゲナガカミキリ *Monochamus grandis* Waterhouse の小型雌個体に似るが、前胸背側縁の突起が黄褐色微毛で覆われることはないので区別は容易である。

生息地 八溝山、花瓶山、男体山、豎破山、花園山、吾国山、筑波山などの山間地から記録されている。

生存の危機 近年はブナ類の枯死による生存の危機が迫っている。

特記事項 日中は根際のウロなどの中に潜んでおり、発見は難しい。

執筆者(協力者) 大桃定洋・公文 暁

文献 4), 17), 23), 43), 49), 59)



撮影 公文 暁

茨城県 2016	● ● ●	絶滅危惧Ⅱ類	● ● ●
茨城県 2000	● ● ●	絶滅危惧種	● ● ●
環境省 2014		対象外	

選定理由 ①②③ 山間地の道路工事による湿地環境の埋め立てによって生息環境が悪化し、生息維持が心配される。

分布状況 日本固有種。北海道と本州(東日本と兵庫県および岡山県)に分布。

形態及び生態 体長 6.6 ~ 12mm。

背面は黒紫色、銅色、緑色、青色などと多様であるが、肢(脛節と跗節)は常に赤褐色~黄褐色。成虫は5~6月にハンノキ林の中のスゲ類のあるやや日陰の湿地に現れ、地域によって3亜種に区別される。

近似種 同属のスゲハムシ(キヌツヤミズクサハムシ) *P. sericea* (Linnaeus) は北海道~九州まで広く分布するが、肢が赤褐色~褐色を呈することはない。なお、同属の日本産としては中国地方に限って産するアキネクイハムシ *P. akiensis* Tominaga et Katsura および北海道に限って産するヒラシマネイクイハムシ *P. weisei* (Duvivier) が知られる。

生息地 北茨城市花園山、高萩市上君田、常陸太田市(旧里美)里見牧場、城里町、水戸市、つくば市筑波山などから記録されている。なお、筑波山の生息地は乾燥と埋め立てによって消失してしまった。

生存の危機 生息環境の悪化あるいは埋め立てによる生息地の消失によって個体数が激減している。

特記事項 県産個体群は日本産3亜種の中の新潟県北部~福島県北部以南の関東・中部に分布する亜種 *babai* Chujo に属するが、前胸背板の形状などはかなり異なり、阿武隈型と呼ばれることもある。

執筆者(協力者) 大桃定洋

文献 11), 36), 49), 51)



撮影 西山 明

茨城県 2016	● ● ● ● ● ● ● ● ● ●	絶滅危惧Ⅱ類	● ● ● ● ● ● ● ● ● ●
茨城県 2000	● ● ● ● ● ● ● ● ● ●	危急種	● ● ● ● ● ● ● ● ● ●
環境省 2014		対象外	

選定理由 ①②③ 湿地周辺や湿潤な草地環境に生息する大型美麗種であるが、生息地は局所的であり、生息地での個体数も減少している。

分布状況 本州(中央部)と佐渡島に分布。海外では朝鮮半島、中国北部、シベリア東部にも分布する。

形態及び生態 体長 9 ~ 14mm。

全体に青藍色であるが、全体に赤褐色で会合部と側縁部だけが青藍色を呈する個体も多い。成虫は6~7月にシロネやエゴマのあるやや湿地環境に現れる。

近似種 大型の優美な種で、他に似た種はいない。

生息地 北茨城市花園山地、常陸太田市(旧里美村)岡見湿地、水戸市千波湖、美野里町、石岡市(旧八郷町)筑波山、桜川市(旧真壁町)、龍ヶ崎市、稲敷市(旧桜川村)浮島などで記録されている。

生存の危機 道路工事や湿地環境の埋め立てによって生息環境が破壊され、生息地での個体数が減少している。

特記事項

執筆者(協力者) 大桃定洋

文献 11), 26), 50), 51), 63)



撮影 佐々木泰弘



撮影 公文 暁

茨城県 2016	● ● ● ● ● ● ● ● ● ●	絶滅危惧Ⅱ類	● ● ● ● ● ● ● ● ● ●
茨城県 2000	● ● ● ● ● ● ● ● ● ●	危急種	● ● ● ● ● ● ● ● ● ●
環境省 2014	● ● ● ● ● ● ● ● ● ●	準絶滅危惧	● ● ● ● ● ● ● ● ● ●

選 定 理 由 ①② 県内各地に広く分布していたが、近年は姿を見ることが少なくなり、特に県南・県西の平野部ではほとんど見られなくなった。

分 布 状 況 北海道, 本州, 四国, 九州に分布。海外では朝鮮半島, 中国, 台湾にも分布する。

形態及び生態 体長 33 ~ 40mm。全体に光沢の強い黒色。成虫は年間を通して水生植物や落葉の多い沼, 池, 湿地に見られ, 比較的汚れた水環境にも適応している。夏期には灯火にも飛来する。

近 似 種 日本最大のガムシで, 近似種はいない。

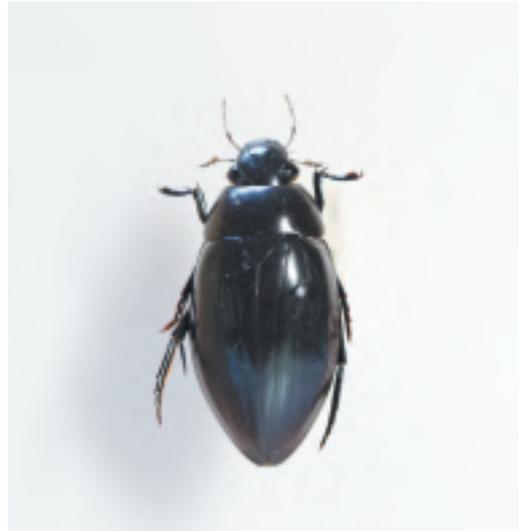
生 息 地 1970年代までは県内各地に普通に見られたが, 近年は急激に個体数が減少している。

生存の危機 水辺環境の改修工事による生息環境の劣化などによって生存が脅かされている。

特 記 事 項 つくば市の筑波山麓では少ないながら確実に生息することが確認され, 貴重な生息地となっている。

執筆者(協力者) 大桃定洋・疋田直之

文 献 20), 22), 28), 49), 37)



撮影 西山 明

茨城県 2016	● ● ● ● ● ●	絶滅危惧Ⅱ類	● ● ● ● ● ●
茨城県 2000	● ● ● ● ● ●	希少種	● ● ● ● ● ●
環境省 2014	● ● ● ● ● ●	準絶滅危惧	● ● ● ● ● ●

選 定 理 由 ①②③ 清流中流域は河川改修工事などによって生息環境の変化が大きく, 常に生息が脅かされている。

分 布 状 況 本州, 四国, 九州に分布。海外では朝鮮半島にも分布する。

形態及び生態 体長 2.7 ~ 3.2mm。全体に赤褐色。成虫は中山間地域の清流中流域に生息し, 水中に埋没した腐食木材などに集まる。なお, ミヤモトアシナガドロムシ *S. miyamotoi* Nomura et Nakane とされる種は本種と同種である。

近 似 種 キスジミゾドロムシ *Ordobrevia foveicollis* (Schönfeldt) に似るが, 上翅に黄斑が現れないことで容易に区別できる。

生 息 地 北茨城市花園山地, 常陸太田市 (旧水府村) 山田川, 城里町 (旧桂村) 那珂川, 水戸市, 小美玉市 (旧美野里町) などから記録される。

生存の危機 生活排水の流入などによる水質悪化や河川の改修工事による生息環境の劣化などによって生存が脅かされている。

特 記 事 項 県内の2カ所の生息地ではその後の調査で再確認することができない。

執筆者(協力者) 大桃定洋・疋田直之

文 献 20), 49), 52), 64), 65)



撮影 西山 明

茨城県 2016	● ● ● ● ● ●	絶滅危惧Ⅱ類	● ● ● ● ● ●
茨城県 2000	● ● ● ● ● ●	希少種	● ● ● ● ● ●
環境省 2014		対象外	

選 定 理 由 ①②③ 個体数の多い種ではなかったが近年の減少は著しく、目立つ種でありながらほとんど姿を見ることはなくなってきた。

分 布 状 況 北海道、本州、四国、九州に分布。海外では朝鮮半島、中国、シベリア東部にも分布する。

形態及び生態 体長 13 ~ 16.5mm。全体に黄褐色で、頭部、前胸背板の前後縁と上翅中央部は黒色と目立つ色調の平地性の種。主に河川敷や池沼などの水辺に生息するが、乾燥気味の半裸地草地などでも発見されることがある。

近 似 種 同属のカワチマルクビゴミムシ *N. lewisi* Bates が同所的に分布するが頭部は赤褐色で、上翅第三間室に剛毛孔点があることで区別できる。

生 息 地 桂村赤沢・那珂川畔、水海道市および牛久市結束町の3カ所から記録されている。

生存の危機 理由は不詳ながら、生息環境の劣化や消滅などによって生存が脅かされている。

特 記 事 項

執筆者(協力者) 大桃定洋・西山 明

文 献 5), 32), 49), 57)



撮影 森田誠司

茨城県 2016	● ● ●	絶滅危惧Ⅱ類	● ● ●
茨城県 2000		対象外	
環境省 2014	● ● ●	絶滅危惧ⅠB類	● ● ●

選 定 理 由 ①②③ 生息環境が限られ、近年では個体数も著しく減少して絶滅が心配される。

分 布 状 況 本州の特産で、関東地方・利根川水系の記録が多い。海外ではシベリアにも分布する。

形態及び生態 体長 8.7 ~ 9.2mm。全体に黄緑色で金色の細毛に覆われ、肢と触角は褐色。河川や沼沢地のヨシやスゲ類の生じた湿性草地に生息する。

近 似 種 1属1種の優美な種で、細身の体型から同定を誤ることはない。

生 息 地 取手市の小文間や利根川畔、鏡町、古河市渡良瀬川畔から記録されている。

生存の危機 主に河川敷などの低湿地に生息することから、改修工事などによる生息環境の劣化や消滅などによって生存が脅かされている。

特 記 事 項

執筆者(協力者) 大桃定洋・西山 明

文 献 31), 32), 49)



撮影 森田誠司

茨城県 2016	● ● ●	絶滅危惧Ⅱ類	● ● ●
茨城県 2000		対象外	
環境省 2014	● ● ●	絶滅危惧ⅠB類	● ● ●

選定理由 ①②③ 平地～中山間地域の池沼や休耕田などから記録されるが、産地は局所的で個体数も少ない。

分布状況 本州、四国、九州と八重山諸島に産し、中国にも分布する。

形態及び生態 体長 3.4～3.8mm。頭部と前胸背板は黄褐色、上翅は褐色～黒褐色で暗色の輪郭に囲まれた6～7条の縦条紋を配する。成虫は低地から中山間部の池沼や放棄水田などの湿地環境に生息するが、局所的である。

近似種 同属のルイスツブゲンゴロウ *L. lewisius* Sharp やニセルイスツブゲンゴロウ *L. lewisoides* Brancucci が同所的に生息するので同定には注意を要する。これらは体型がやや大型(3.9～4.7mm)で色調がより明るく、上翅の縦条紋も明瞭なことで区別される。

生息地 唯一、ひたちなか市海浜公園から記録されていたが、最近の10年間で生息域の環境は大きく変化して生息は確認できなくなった。

生存の危機 水辺環境の改修工事による生息環境の劣化などによって生存が脅かされている。

特記事項 同属でより小型のキタノツブゲンゴロウ *L. vagelineatus* Zimmermann が土浦市手野から記録された。

執筆者(協力者) 大桃定洋・疋田直之

文献 12), 22), 49), 62)



撮影 西山 明

茨城県 2016	● ● ●	絶滅危惧Ⅱ類	● ● ●
茨城県 2000		対象外	
環境省 2014	● ● ●	準絶滅危惧	● ● ●

選定理由 ①②③ 近年の里山～中山間地域では水辺環境が安定して維持されることが難しく、そこでの生息も安定しない。

分布状況 北海道、本州、四国、九州に産し、国外では中国、朝鮮半島にも分布する。

形態及び生態 体長 12～14.5mm。頭部と前胸背板は黄褐色で後頭部と前胸背板の前・後縁は黒色。上翅は黄褐色で黒色の網目紋様が全面に広がる。成虫は低地から中山間部の池沼や放棄水田、休耕田などの湿地環境に生息し、灯火にも飛来する。

近似種 特異な体型から同定を誤ることはない。

生息地 里山～中山間地域の池沼や休耕田などに生息し、県北の日立市、高萩市、ひたちなか市などから記録されるが産地は局所的。近年は水質悪化などによって生息数は激減している。

生存の危機 水辺環境の改修工事などによる生息環境の劣化によって生存が脅かされている。

特記事項

執筆者(協力者) 大桃定洋・疋田直之

文献 12), 49)



撮影 西山 明

茨城県 2016	● ● ●	絶滅危惧Ⅱ類	● ● ●
茨城県 2000		対象外	
環境省 2014	● ● ●	絶滅危惧Ⅱ類	● ● ●

選定理由 ①②③ 生息地は非常に局所的で、かつ個体数も少ないことから生息維持が心配される。

分布状況 日本固有種。本州、四国、九州に分布する。

形態及び生態 体長 5.5 ~ 6.2mm。背面は光沢の強い黒褐色で腹面は褐色。上翅先端は丸く湾曲する。成虫は山間部の清流域に現れる。

近似種 同様の環境には同属のオナガミズスマシ *O. regimbarti* Sharp も分布するが、体型は大型 (8.7 ~ 10.2mm) で上翅の先端部は切断状を呈することで区別できる。

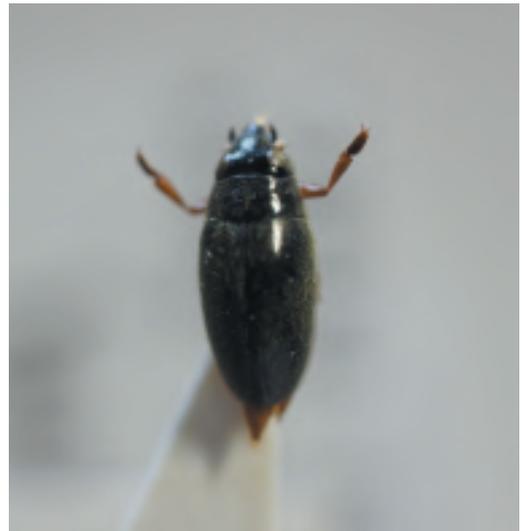
生息地 大子町および常陸大宮市の久慈川とその流域、常陸大宮市 (旧御前山村) 相川から記録されている。

生存の危機 生活排水の流入などによる水質悪化や河川の改修工事による生息環境の劣化などによって生存が脅かされている。

特記事項 近年の記録はほとんどない。生息地は非常に局所的であり、調査不足の感はいがめない。

執筆者(協力者) 大桃定洋

文献 6), 49), 52), 54)



撮影 西山 明

茨城県 2016 ●●● 絶滅危惧Ⅱ類 ●●●

茨城県 2000 対象外

環境省 2014 ●●● 絶滅危惧Ⅱ類 ●●●

選定理由 ①③ 清流の中流域は常に改修工事などによる生息環境の変化に脅かされている。

分布状況 日本固有種。本州、九州に分布。

形態及び生態 体長 4.8 ~ 5.2mm。全体に暗褐色で上翅間室には顕著な黄色毛を密生する。成虫は 7 ~ 8 月頃に山間部の清流域に現れ、水中の埋没流木などに集まる。

近似種 類似するヒメドロムシ類はいない。

生息地 北茨城市関本町・小川と常陸太田市 (旧水府村) 山田川からの記録しかない。

生存の危機 河川改修工事などによる生息環境の劣化によって生存が脅かされている。

特記事項 1 属 1 種で日本産ヒメドロムシ科の最大種。

執筆者(協力者) 大桃定洋・足田直之

文献 7), 49)



撮影 西山 明

茨城県 2016 ●●● 絶滅危惧Ⅱ類 ●●●

茨城県 2000 対象外

環境省 2014 ●●● 絶滅危惧Ⅱ類 ●●●

選定理由 ①②③ ススキやチガヤなどの湿地性草地は火入れなどの人為的影響を受け、常に種の生存が左右される。

分布状況 日本固有種。本州（関東）の特産種。

形態及び生態 体長 5.2～5.8mm。上翅は基部 2/5 と先端 1/4 が青い光沢のある黒色でその中間は橙黄色の特異な色調。ススキやチガヤなどのスーピングで採集される。

近似種 上翅の特徴的な色彩から同定を誤ることはない。

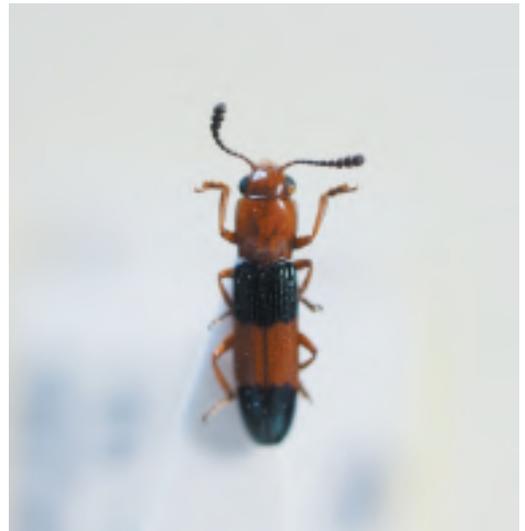
生息地 原産地は東京であるが、今日の確実な生息地は栃木県渡良瀬遊水池と本県の稲敷市浮島の 2 カ所しかない。

生存の危機 火入れや適度な草刈りなどによる植物群落の遷移に伴う生息環境の維持が必要である。

特記事項

執筆者(協力者) 大桃定洋（高橋敬一）

文献 51), 23)



撮影 西山 明

茨城県 2016 ●●● 絶滅危惧Ⅱ類 ●●●

茨城県 2000 対象外

環境省 2014 ●●● 絶滅危惧Ⅱ類 ●●●

選定理由 ①②③ 生息地は休耕田や池沼の浅瀬などの環境変化の多い湿地で、かつ非常に局所的であり、個体数も少ないことから絶滅が心配される。

分布状況 本州（福島県以南）、四国、九州、西南諸島に産し、国外では台湾、インドシナ地域にも分布する。

形態及び生態 体長 2.4～2.7mm。全体に黄赤褐色で上翅はやや暗色で全面にやや大きい点刻を密布する。成虫は植物の多い池沼の浅瀬、放棄水田、休耕田などの水辺環境に現れるが局所的で個体数も多くない。

近似種 同属のコマルケシゲンゴロウ *H. acuminatus* Motschulsky も同様の環境に生息し、体型はやや小型（2.0～2.5mm）であるがよく似ているので同定には注意を要する。

生息地 小美玉市（旧美野里町）池花池と稲敷市浮島からの記録しかない。同属のコマルケシゲンゴロウも稀な種で、茨城町からの記録しかない。

生存の危機

特記事項 以前は *H. adachii* Kamiya や *H. japonicus* Takizawa などの学名が当てられていた。

執筆者(協力者) 大桃定洋・疋田直之

文献 49), 52), 64)



撮影 西山 明

茨城県 2016 ●●● 絶滅危惧Ⅱ類 ●●●

茨城県 2000 対象外

環境省 2014 ●●● 準絶滅危惧 ●●●

選 定 理 由 ①②③ 生息地は非常に局所的で個体数も少ないが、調査不足の感はいがめない。

分 布 状 況 日本固有種。本州、四国、九州に分布する。

形態及び生態 体長 1.5 ~ 2.0mm。全体に光沢の強い黄赤褐色で上翅は全面にやや大きい点刻を密布する。成虫は植物の多い池沼の浅瀬、放棄水田、休耕田などの水辺環境に現れ、生息地は局所的ながら個体数は多い。

近 似 種 ほぼ体長が同じであるが長卵型で体高が比較的低いホソマルチビゲンゴロウ *L. miyamotoi* (Nakane) やナガマルチビゲンゴロウ *L. kyushuensis* (Nakane) が本州から知られるので注意を要する。

生 息 地 草本植物の多い池沼や休耕田などの浅瀬に生息する。唯一、水戸市（旧内原町）鯉淵から記録されている。

生存の危機

特 記 事 項 以前は *Clypeodytes* 属として扱われていた。

執筆者(協力者) 大桃定洋・疋田直之

文 献 12), 49)



撮影 西山 明

茨城県 2016 ● ● ● 絶滅危惧Ⅱ類 ● ● ●

茨城県 2000 対象外

環境省 2014 ● ● ● 準絶滅危惧 ● ● ●

選 定 理 由 ①②③ 生息地は非常に局所的であり、かつ近年は個体数の減少も著しい。

分 布 状 況 北海道、本州、四国、九州、トカラ列島に分布し、海外では朝鮮半島、中国からも記録がある。

形態及び生態 体長 8 ~ 10mm。全体に金銅色の弱い光沢のある黒褐色で上翅側縁は黄褐色を呈する。成虫はヨシなどの生じたやや大きい池沼に生息し、生息地は局所的であるが個体数は多い。灯火にも飛来する。

近 似 種 本州には他に本属の種を産しないが、類似する近縁のヒメゲンゴロウ *Rhantus pulverosus* (Stephens) が分布する。しかし、上翅の周辺部が黄褐色に縁取られることで容易に区別できる。

生 息 地 比較的大きい池や湖沼などに生息し、県内では唯一、大子町叶田から記録されている。

生存の危機

特 記 事 項 決して珍しい種ではなく、調査不足の感は大きい。

執筆者(協力者) 大桃定洋・疋田直之

文 献 1), 49)



撮影 西山 明

茨城県 2016 ● ● ● 絶滅危惧Ⅱ類 ● ● ●

茨城県 2000 対象外

環境省 2014 ● ● ● 準絶滅危惧 ● ● ●

選 定 理 由 ①② 近年の個体数減少は著しく、特に県西・県南地域では絶滅が心配される。

分 布 状 況 本州、四国、九州に分布し、海外では朝鮮半島、中国からも記録がある。

形態及び生態 体長 20～25mm。全体に光沢のある黒色で緑色あるいは褐色を帯びる。成虫は植物の多い池沼、放棄水田、休耕田などの水辺環境に現れ、生息地は局所的であるが個体数は決して少なくない。

近 似 種 上翅周辺部が黄褐色を呈する同属のコガタノゲンゴロウ（絶滅危惧ⅠA）に似るが、本種は上翅全面が黒～黒褐色なので見誤ることはない。また、暗褐色を呈するトビイロゲンゴロウ *C. sugillatus* Erichson にも似るが、この種は南西諸島から東南アジアに広く分布し、九州以北には分布しない。

生 息 地 水生植物の多い池沼、放棄水田、休耕田などの水辺環境に生息するが、生息地は局所的である。新成虫は8～9月頃に現れ、冬期でも見出される。大子町周辺を主とする県北地域では生息地が多い。

生存の危機 水辺環境の改修工事などによる生息環境の劣化によって生息維持が脅かされている。

特 記 事 項 県西・県南地域での生息は非常に局所的で、筑波山周辺の数力所で確認された生息地は非常に貴重である。

執筆者(協力者) 大桃定洋・疋田直之

文 献 1), 12), 49)



撮影 西山 明

茨城県 2016 ●●● 絶滅危惧Ⅱ類 ●●●

茨城県 2000 対象外

環境省 2014 ●●● 準絶滅危惧 ●●●

選 定 理 由 ①② かつては池、沼、河川などの広い水辺環境で普通に姿を見ることができたが、近年はほとんど姿を見ることができなくなった。

分 布 状 況 北海道、本州、四国、九州、琉球列島に広く分布し、海外ではシベリア、樺太、朝鮮半島、中国、ベトナムにも分布する。

形態及び生態 体長 7～12mm。全体に光沢のある暗褐色で前胸背板および上翅の側縁は黄褐色を呈する。成虫は池沼や河川の止水域で群泳する。

近 似 種 特異な体型から同定を誤ることはない。

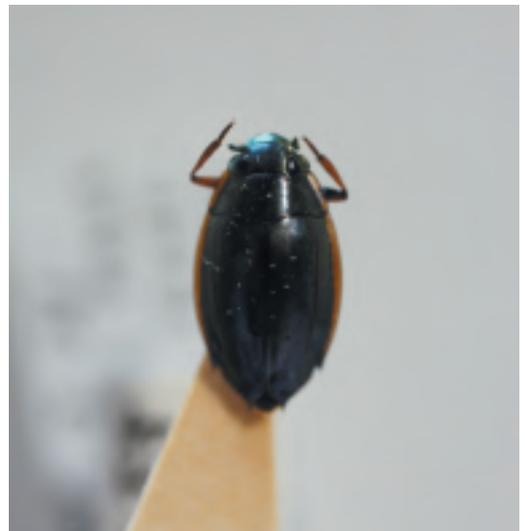
生 息 地 広く県内各地に生息していたが、近年は急速に個体数が減少している。理由は不明。

生存の危機

特 記 事 項 個体数の減少は特に県南・県西地域で著しい。

執筆者(協力者) 大桃定洋

文 献 12), 26), 49), 64)



撮影 西山 明

茨城県 2016 ●●● 絶滅危惧Ⅱ類 ●●●

茨城県 2000 対象外

環境省 2014 ●●● 準絶滅危惧 ●●●

選定理由 ①② 県内各地の乾燥した草地や丘陵地などの荒廃環境に現れるが、各種の大規模開発事業などによって生息環境が消滅している。

分布状況 北海道、本州、四国、九州に分布し、海外では朝鮮半島、中国北東部、シベリアにも分布する。

形態及び生態 体長 16 ~ 22mm。全体に赤銅色で緑色の光沢を帯びる個体が多い。成虫は平野部から中山間部の乾燥した草地や荒廃地などに8月下旬頃から現れ、チョウやガの幼虫あるいはミミズなどを補食する。

近似種 全体の色調と特異な上翅の彫刻から同定は容易である。本州には他に本属種は産しない。

生息地 北茨城市、日立市、ひたちなか市、水戸市、笠間市、筑西市、古河市、常総市、鏡町などの広範な地域から記録されているが、いずれの地でも局所的で個体数は少ない。

生存の危機 各種の開発事業などによって乾燥した草地や丘陵地などの荒廃環境が消失し、生息個体数が急激に減少している。

特記事項

執筆者(協力者) 大桃定洋・西山 明

文献 12), 32), 37), 49)



撮影 公文 暁



選定理由 ①②③ 主に西南日本に分布する種で北関東地域では非常に珍しく、大規模開発や伐採による自然林の消失によって生息環境が破壊され、僅かな生息地における種の維持が心配される。

分布状況 日本固有種。本州、四国、九州に分布する。

形態及び生態 体長 2.6 ~ 3.2mm。全体に黄褐色で細毛に覆われる。成虫は湿潤環境の保たれた自然林、特に照葉樹林の朽木の樹皮下や落葉下などに見られる。

近似種 本科はオサムシ科ゴミムシ類に似るが、上翅側縁端に特殊な抉れ構造を持つことで容易に区別できる。本州には他に本属種は産しない。

生息地 日立市高鈴山、鉾田市(旧旭村)冷水、つくば市筑波山の記録しかない。

生存の危機 落葉や朽木による湿潤環境が種の存続に必須であるが、各種の開発事業などによる生息環境の乾燥化によって生息地の消滅や個体数の減少を招いている。

特記事項 原始的な形体の珍しい種として知られ、日立市高鈴山は北限の産地である。

執筆者(協力者) 大桃定洋・西山 明

文献 32), 49)



撮影 森田誠司



選 定 理 由 ①②③ 里山林、寺社林、屋敷林などの古木の伐採によって発生環境が破壊され、個体数が著しく減少している。

分 布 状 況 本州東北地方南部～沖縄本島に分布し、海外では朝鮮半島、中国、台湾、インドシナ北部にも分布する。

形態及び生態 体長 25～40mm。日本最大のタマムシで、全体に金緑色に輝き、前胸背板に 2 本、各上翅に 1 本の赤紫色の縦帯紋を配する美麗種。成虫は 6～8 月に屋敷林、寺社林などの里山的環境のサクラ、エノキ、シデ、クヌギなどの古木に発生する。

近 似 種 優美な色彩と体長から見間違いすることのない確かな種である。なお、琉球列島、男女群島および対馬に生息する個体群はそれぞれ別亜種として命名されている。

生 息 地 県南、県西から県北まで広く分布するがいずれの産地でも個体数は少ない。

生存の危機 里山林や屋敷林の伐採などによって生息環境が狭められている。

特 記 事 項 古くから知られた昆虫で、その優美な上翅は工芸品に利用されてきた。日本では法隆寺の玉虫厨子は有名であり、韓国でも古墳から上翅で装飾された靴が出土している。

執筆者(協力者) 大桃定洋

文 献 37), 49), 50), 64)



撮影 西山 明

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	●	●	●
茨城県 2000	●	●	●	●	●
環境省 2014					対象外

選 定 理 由 ①②③④ 一般にもよく知られた清流を代表する甲虫であるが、河川の改修工事あるいは生活排水の流入などによる水質悪化によって生息地の消滅や個体数の減少が著しい。

分 布 状 況 日本固有種。本州、四国、九州に分布する。

形態及び生態 体長 10～16mm。前胸背板は淡赤色で中央に黒色丸紋を配し、上翅は黒色。日本最大のホタルで、成虫は 6～7 月に清流域に現れ、幼虫はカワニナ類を捕食し、岸辺の土中で蛹化する。

近 似 種 同属のヘイケボタル *L. lateralis* Motschulsky は前胸背板中央が幅広い縦の黒色帯になる。なお、はるかに小型のヒメボタル *Hotaria parvula* (Kiesen-wetter) がつくば市筑波山山頂付近や常陸太田市(旧水府村)武生林道などの山間部に生息するが非常に稀。

生 息 地 県内に広く分布する。生息地は局所的で、多くは保護地に指定されており、自然分布は少ないようだ。

生存の危機 県内各地に保護地が設定されているが、それ以外の地ではほとんど姿を見ることができなくなってきた。

特 記 事 項 同属のヘイケボタルは水田などにも生息し、より広い地域で姿を見ることができる。

執筆者(協力者) 大桃定洋

文 献 28), 49), 55)



撮影 佐々木泰弘

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	●	●	●
茨城県 2000	●	●	●	●	●
環境省 2014					対象外

選定理由 ①②③ 里山～中山間地域のハンノキ林を伴う古い湿地環境に特化した種で、近年の生息環境の悪化に伴って生息地が消滅しつつある。

分布状況 日本固有種。本州の限られた地域（福島、茨城、栃木の各県と東京都）に分布する。

形態及び生態 体長 16～20.5mm。成虫は5～6月に湿地環境に特異的に現れ、各種の花に飛来する。

近似種 フォッサマグマ以西の本州中部と九州に分布する同属のカタキンイロジョウカイ *T. ohkawai* M. Sato に似るが、上翅肩部が黒化することはない、雄交尾器も異なる。また、同様の環境に混生するジョウカイボン *Lycocerus suturellus* (Motschulsky) は瘦せ形で前胸背板が縦長。

生息地 ハンノキ林を伴う古い湿地環境に生息し、城里町（旧桂村）錫高野と石岡市（旧八郷町）上曾峠から記録されている。

生存の危機 里山林の伐採に伴った乾燥化や湿地環境の劣悪化によって生息環境は狭められている。石岡市上曾峠の湿地域は乾燥と埋め立てによって消失してしまった。

特記事項 湿地環境から離れることはない。

執筆者(協力者) 大桃定洋

文献 27), 49), 52)



撮影 西山 明

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	●	●	●
茨城県 2000	●	●	●	●	●
環境省 2014					対象外

選定理由 ①②③ 限られた湿地環境にだけ生息し、個体数も少ない。

分布状況 日本固有種。本州の限られた湿地環境に局所的に産する。

形態及び生態 体長 5.5mm。上翅の黒色斑紋は変化が多く、前胸背板が黒化する個体もいる。成虫は6～8月に河口やヨシ原などの湿地に特異的に現れる。

近似種 本州には他に本属種は分布しない。

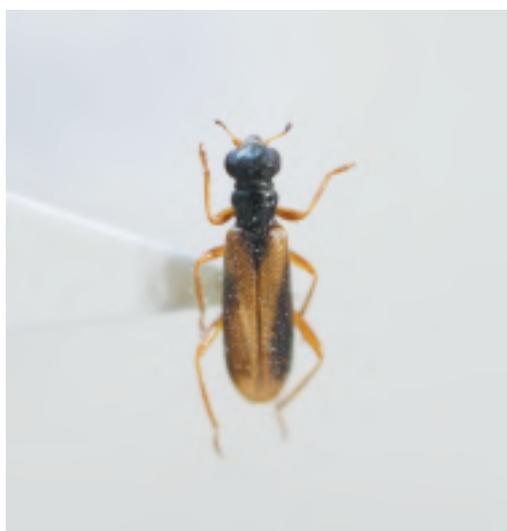
生息地 河口や湖、沼、池などのヨシ原に生息し、水戸市、土浦市、阿見町、神栖市、取手市、稲敷市（旧桜川村）から記録されている。

生存の危機 河川や湖沼の改修あるいは開発に伴う防岸工事によってヨシ原が縮小あるいは消滅しつつあり、生息地の消滅が危惧される。

特記事項 湿地環境に特化した種。日本産のカッコウムシ類の中には他に湿地性種はいない。

執筆者(協力者) 大桃定洋

文献 25), 34), 49), 52)



撮影 西山 明

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	●	●	●
茨城県 2000	●	●	●	●	●
環境省 2014					対象外

選定理由 ①②③ ヨシやスゲ類の多い湿地環境に適応した特異な種で、生息地の減少に伴って生息維持が心配される。

分布状況 日本固有種。本州の限られた地域（福島、茨城、栃木、埼玉の各県）に分布する。

形態及び生態 体長 2.8～3.8mm。上翅には4個の白黄色楕円形紋を配するが、個体によっては2個あるいは消失する。成虫は4～5月にヨシ原などの湿地環境に特異的に現れる。

近似種 特異な上翅紋様の種で、同属の他種とは容易に区別される。

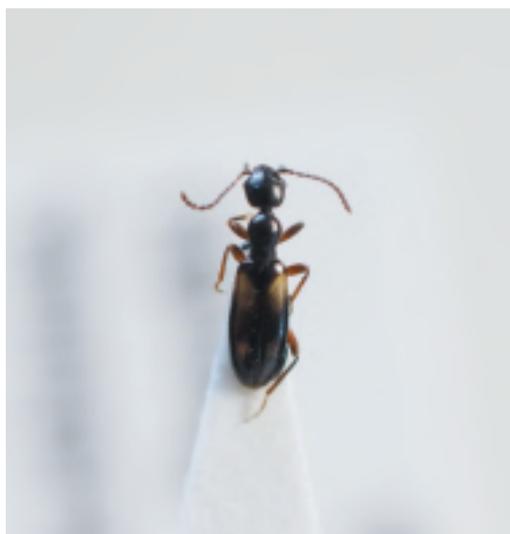
生息地 平野部～中山間部の水田周辺や池沼周辺のスゲ類の多い湿地環境に生息し、阿見町廻戸、桜川市（旧岩瀬町）上野沼や（旧大和村）大和大池、水戸市（旧内原町）鯉淵池、つくば市吉瀬、稲敷市（旧桜川村）浮島など、県南や県西の湿地で記録される。

生存の危機 湖沼の改修あるいは開発に伴う防岸工事によって生息環境が縮小あるいは消滅しつつある。

特記事項 湿地環境に限って発生する特異な種。日本産のアリモドキ類の中には他に湿地性の種はいない。

執筆者(協力者) 大桃定洋

文献 20), 25), 51)



撮影 西山 明

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	●	●	●
茨城県 2000	●	●	●	●	●
環境省 2014					対象外

選定理由 ②③ 同地にはベーツヤサカミキリ *Leptoxenus ibidiiformis* Bates やキイロメダカカミキリ *Stenhomalus nagaai* Hayashi も分布し、いずれも日本における北限の生息地である。

分布状況 本州、四国、九州、隠岐、対馬、屋久島に分布し、国外では台湾にも分布する。

形態及び生態 体長 10～14mm。後脛節の黄褐色長毛は特異的である。成虫は7月中旬～8月中旬に現れ、ネムノキなど各種の花を訪れる。幼虫はネムノキを食害する。

近似種 後脛節に黄褐色長毛を密生する特異的な特徴から同定を誤ることはない。

生息地 唯一、常陸太田市（旧水府村）武生林道から記録されている。

生存の危機 生息地周辺の自然環境は維持されているが、尾根筋のネムノキが伐採されると種の維持が困難となる。

特記事項 西南日本分布型の種で、武生林道は関東地方唯一の生息地である。

執筆者(協力者) 大桃定洋・公文 暁

文献 4), 49), 60)



撮影 佐々木泰弘



撮影 公文 暁

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	●	●	●
茨城県 2000	●	●	●	●	●
環境省 2014					対象外

選定理由 ①②③ 生息地はいずれも平野部の狭い灌漑用の溜め池で、農薬の流入などの水質汚染や改修による水生植物（ウキヤガラ）の消滅が心配される。

分布状況 日本固有種。原産地（栃木県喜連川）以外には青森県、岩手県金ケ崎町、宮城県と本県の2カ所の産地が知られるだけ。

形態及び生態 体長6.5～9.2mm。全体に赤褐色で、前胸背板と上翅肩部に微毛が密生する特異な種。成虫は4月中旬～5月中旬に現れ、カヤツリグサ科フトイに集まる。

近似種 同属のフトネクイハムシ *D. clavareau* Jacobson もカヤツリグサ科フトイに集まるが、前胸背板と上翅肩部に微毛が密生することで区別できる。

生息地 県内では桜川市（旧大和村）大和西大池と鉾田市串挽の溜め池の2カ所だけが生息地である。

生存の危機 生息地はいずれも平野部の溜め池であり、人為的な改修工事などによって生息環境の変化が常につきまとう。

特記事項

執筆者(協力者) 大桃定洋

文 献 13), 15), 51)



撮影 公文 暁

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県 2000	● ●	危急種	● ● ● ●
環境省 2014	●	準絶滅危惧	● ● ● ●

選定理由 ① スダジイの潜葉虫として黒潮の流れに沿って南方から分布拡大してきた種で、本県は太平洋岸の北限の生息地である。

分布状況 日本固有種。本州（茨城県以南）、四国、九州、伊豆諸島、対馬に分布する。

形態及び生態 体長3.6～4.6mm。全体に金褐色、銀白色および黒色の3色からなる複雑な毛斑を配する。成虫はスダジイに8月中旬に現れ、枯れ木の樹皮下や割れ目あるいはスギやケヤキの樹皮下で越冬し、翌春に再活動する。

近似種 同属でクヌギを食樹とするダンダラチビタマムシ *T. variolaris* Saunders やケヤキを食樹とするヤノナミガタチビタマムシ *T. yanoi* Kurosawa に似るが、上翅の斑紋が違うので区別できる。

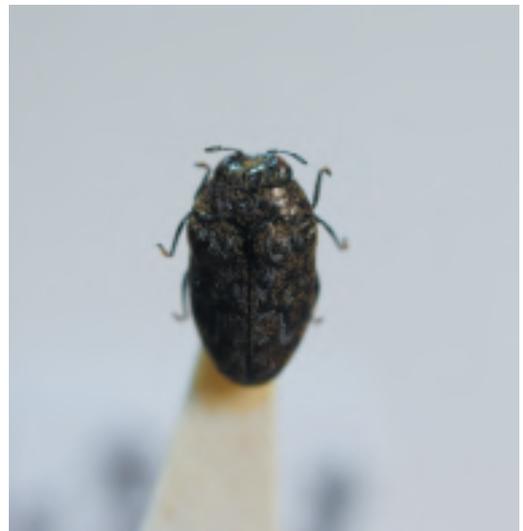
生息地 寺社林や屋敷林などのスダジイに依存し、県内には広く分布する。

生存の危機 寺社林や屋敷林などのスダジイ古木が伐採され、生息環境が縮小されている。

特記事項 スダジイに依存して県内には広く分布し、急激な生息環境の消失や個体数の減少はないようだ。

執筆者(協力者) 大桃定洋

文 献 9), 25), 49)



撮影 西山 明

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県 2000	● ●	希少種	● ● ● ●
環境省 2014		対象外	

選定理由 ①③ 西南日本に分布の中心を持つ種で、北関東地域では非常に珍しく、本県は日本における北限の産地である。

分布状況 日本固有種。本州（茨城県以南）、四国、九州に分布する。

形態及び生態 体長 2.5 ~ 3.2mm。全体に黒褐色で上翅基部付近に逆八の字型、中央後半に太めの横帯の赤褐色紋を配するが変異が大きく、ほとんど痕跡程度となる個体もいる。成虫はクリ、スタジイ、シデなどの広葉樹に生じたキノコに集まる。

近似種 日本産は 1 属 1 種。同所的に生息する近縁のズグロホソオオキノコ *Dacne zonalia* Lewis に似るが、触角や前胸背板の形状が違う。

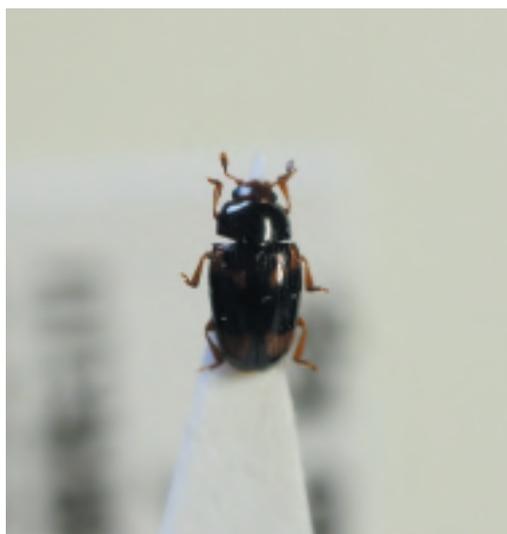
生息地 中山間地域の深い広葉樹林が残るやや湿潤な環境が保持される地域に生息し、常陸太田市（旧水府村）武生林道、笠間市仏頂山、笠間市（旧岩間町）鐘転山、城里町（旧七会村）などから記録されている。

生存の危機 中山間地域の広葉樹林の伐採と森林の乾燥化による生息環境の劣化が心配される。

特記事項

執筆者(協力者) 大桃定洋

文献 7), 18), 50)



撮影 西山 明

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	●	●	●
茨城県 2000	●	希少種	●	●	●
環境省 2014		対象外			

選定理由 ②③ 西南日本に分布の中心を持つ種で、北関東地域から北の地域では非常に珍しい。

分布状況 日本固有種。北海道、本州、四国、九州に分布する。

形態及び生態 体長 3 ~ 4mm。全体に黄褐色で触角と跗節を除く肢は黒色。成虫・幼虫ともにスタジイやミカン類に発生するカイガラムシを捕食する。

近似種 日本産は 1 属 1 種。近縁のトウヨウダナエテントウダマシ *Danae orientalis* (Gorham) に似るが、前胸背板の形状が全く違う。

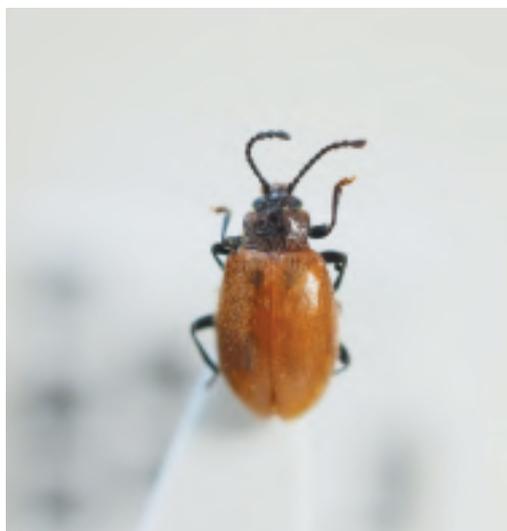
生息地 やや湿潤な環境が保持された稲敷市（旧江戸崎町と旧桜川村）の 2 カ所のスタジイ林から記録されている。

生存の危機 スタジイの古木が残る比較的規模の大きい寺社林や屋敷林の伐採は生息環境の縮小を招き、生存維持が心配される。

特記事項

執筆者(協力者) 大桃定洋（高橋敬一）

文献 10), 21), 49)



撮影 西山 明

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	●	●	●
茨城県 2000	●	希少種	●	●	●
環境省 2014		対象外			

選定理由 ②③ スゲ類の豊かな湿地環境に特異なテントウムシで、生息環境の破壊や消失による個体数の減少、生息地の消失が心配される。

分布状況 日本固有種。本州に分布するが、産地は局所的である。

形態及び生態 体長 3.4 ~ 3.6mm。全体に黄褐色で前胸背板基半部と上翅会合部は黒色。成虫は 4 ~ 5 月湿地に現れ、スゲ類やヨシに発生するハダニやアリマキを捕食する。

近似種 同属のクロスジチャイロテントウ *M. kiotoensis* (Nakane et Araki) の上翅側縁部の黒色紋が消失した個体と区別がつかず、同胞種であろうと考えられている。

生息地 常陸太田市 (旧里美村) の二カ所の湿地からのみ記録されている。

生存の危機 休耕田などの人工的な湿地環境の悪化や消失による生存の危機が常に心配される。

特記事項 湿地性テントウムシの代表的な種。

執筆者(協力者) 大桃定洋

文献 14), 34)



撮影 西山 明

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県 2000	● ●	危急種	● ● ● ●
環境省 2014		対象外	

選定理由 ①③ 山間地のやや湿潤な環境が保持されるブナ帯やブナ帯下部の自然林に生息するが非常に稀で、生息環境の維持が心配される。

分布状況 日本固有種。北海道と本州 (青森~長野県) の山間地域に分布する。

形態及び生態 体長 8 ~ 9mm。全体に黒色で青い光沢があるが、稀に赤味を帯びた個体や青色光沢を発しない個体もいる。

近似種 本州西南部、四国、九州には同属のルリツヤナガクチキが分布する (未命名) が、より扁平な体型と弱い光沢で区別される。

生息地 北茨城市・花園山地からの記録しかない。

生存の危機 山間地域の広葉樹林の伐採と森林の乾燥化による生息環境の劣化が心配される。

特記事項

執筆者(協力者) 大桃定洋

文献 33), 49)



撮影 西山 明

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県 2000	● ●	希少種	● ● ● ●
環境省 2014		対象外	

選 定 理 由 ①③ 春期に林床のトネリコやイボタの新芽に特異的に発見されるが、発生期は短く、個体数も少ない。

分 布 状 況 日本固有種。本州と九州に分布する。

形態及び生態 体長 7.8 ~ 8.8mm。全体に光沢のある黄褐色。後腿節は大きく膨らみ、雄では末端部に 1 本の顕著な突起を持ち、雌ではさらに中央部にも 1 本の突起を持つ。

近 似 種 特異な後腿節の突起から同定を間違うことはない。

生 息 地 里山~中山間地域に生息し、大子町と水戸市からの記録しかない。

生存の危機 里山~中山間地域の林床のトネリコやイボタに依存することから、公園林床の除草などによって生息環境が狭められている。

特 記 事 項 春期の短期間に現れることから調査不足の感がいがめなしい。

執筆(協力)者 大桃定洋

文 献 20), 49)



撮影 公文 暁

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県 2000	●	希少種	● ● ● ●
環境省 2014		対象外	

選 定 理 由 ①②③ 生息地は非常に局所的で個体数も少ない。また、生息環境の消滅も心配される。

分 布 状 況 日本固有種。本州と九州に分布する。

形態及び生態 体長 7 ~ 9mm。全体に金銅色や金緑色で上翅中央部は赤銅色の縦条紋を配する。成虫は 5 ~ 9 月に現れ、ミクリヤスゲの花に集まる。

近 似 種 特異な後腿節の突起から同定を間違うことはない。

生 息 地 北茨城市花園山地、日立市(旧十王町)山部、石岡市(旧八郷町)上曾峠などの僅かな生息地が知られるだけ。

生存の危機 本種を含めて 4 種のネクイハムシ類が生息していた石岡市上曾峠の湿地は残念ながら乾燥と埋め立てによって消失してしまった。

特 記 事 項 以前は朝鮮半島と中国東北部に分布するとされていたが、それは同属の別種 *D. aquatica* (Linnaeus) である。

執筆(協力)者 大桃定洋

文 献 3), 36), 49)



撮影 公文 暁

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県 2000		対象外	
環境省 2014	●	準絶滅危惧	● ● ● ●

選定理由 ③ 県内にはシラカシは普通に分布するものの、本種の生息確認は僅かな地だけであり、非常に局所的分布の種である。

分布状況 原産地は台湾で、日本では本州（茨城県以南）、四国、九州に分布する。

形態及び生態 体長 7.0～9.7mm。背面は黒色で赤紫色を帯び、腹面は黒みを帯びた金緑色。通常は上翅端部 1/4 近くに一对の白色毛斑を現すが、消失する個体もいる。成虫は6月に現れ、カシ類の伐採木に集まる。

近似種 上翅端の白色毛斑が消失した個体は同属のコクロナガタマムシ *A. yamawakii* Kurosawa に似るが、上翅先端部が突出することで容易に区別される。

生息地 つくば市小田の筑波山麓と笠間市（旧岩間町）愛宕山麓の二カ所からの記録しかない。

生存の危機 里山環境などにおける太いシラカシ材の伐採が目立ち、生息が脅かされている。

特記事項 西南日本に分布の中心を持つ種で、本県は北限の産地である。

執筆者(協力者) 大桃定洋

文献 16), 18), 22)



撮影 西山 明

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県 2000		対象外	
環境省 2014		対象外	

選定理由 ①②③ 2013年に生息が確認され、里山～中山間地の納屋や廃屋などの人間の生活環境に密接する環境に生息することから常に生息が脅かされている。

分布状況 本州、四国、九州に分布し、海外では台湾や中国北部にも分布する。

形態及び生態 体長 22mm前後。全体に黒色。前胸背板基部は上翅基部に重積するように拡がり、小盾板はその下に隠れる。上翅先端部は細まり、先端が上反する。納屋のワラクズの下に潜むことが多い。

近似種 特異な体型から同定を間違えることはない。

生息地 最近、常陸太田市の廃屋で生息が確認された。日本における北限の記録のようだ。

生存の危機 廃屋の解体などによる生息環境の消失によって、生息維持が困難になる。

特記事項 里山環境や中山間部の廃屋などの人工的な環境に特異で、まだ調査不足の感はいがめない。

執筆者(協力者) 大桃定洋

文献 19), 22), 47)



撮影 佐々木泰弘

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県 2000		対象外	
環境省 2014	●	準絶滅危惧	● ● ● ●

選 定 理 由 ①②③ 全国的にみて生息地が特異的な分布を示す種であり、個体数も少ない。

分 布 状 況 本州（中部、関東地方）。

形態及び生態 体長は雄雌とも 15mm内外。翅の長さは 20mm内外で体色は褐色。翅は透明で、いくぶんか黄味を帯びる。脚は細長く、前脚は体の懸垂に用いられ、後脚で餌となる小昆虫を捕えたまま飛翔する。飛翔はゆるやかで森林の林床を低く飛ぶ。成虫は夏季に出現するが、地中の幼虫の生態などは明らかでない。

近 似 種 本種の他に数種類のガガンボモドキ類が観察できるが、交尾器などの形態以外での区別は困難である。

生 息 地 平地から標高 200m ほどの丘陵地の雑木林。近似種が筑波山や八溝山などの中腹部から山頂にかけての生息も確認されている。

生存の危機 里山的環境をみせる平野部の雑木林の減少と林床のササ類の繁茂による生息環境の悪化。

特 記 事 項 埼玉県（絶滅危惧Ⅱ類）、千葉県（絶滅危惧Ⅱ類）、長野県（準絶滅危惧）。

執筆（協力）者 廣瀬 誠

文 献 1), 2), 3), 4), 5)



撮影 廣瀬 誠

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県 2000	●	希少種	● ● ● ●
環境省 2014		対象外	

選 定 理 由 ②③ 茨城県で記録されているのは八溝山の高所での数頭のみで、生息密度は極めて薄く、僅かな環境変化で危機的な状況に陥りやすい。また、栃木県では北西部の山地で見られるも少なく、八溝山の近隣での記録はまだない。

分 布 状 況 本州中部の長野、山梨、群馬、栃木、茨城の各県で分布が確認されている。

形態及び生態 翅には前後翅共に黒い翅端紋と帯紋があり、紋は幅広くそれ以外の紋は出現しない。6月～8月に成虫が見られる。

近 似 種 広く分布するヤマトシリアゲ *P. japonica* Thunberg に極似し、交尾器の検鏡以外での同定は困難である。

生 息 地 茨城県では八溝山南側湧水群付近の湿潤な環境でのみ確認されている。広葉樹の大木も多く、林床のミヤコザサと共に湿潤な環境を保っている。

生存の危機 本種の生息環境として、高所でなおかつ湿潤な環境が挙げられるが、八溝山上部は今のところ安定した環境にある。

特 記 事 項 目視による同定が困難なため、調査が進んでいない県が多い。

執筆（協力）者 櫻井 浩

文 献 6), 7), 8)



撮影 櫻井 浩

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県 2000		対象外	
環境省 2014		対象外	

選定理由 ①② 全国と同じく、茨城県でも減少が続き、1963年の記録を最後に県内からの報告がない。

分布状況 本州、四国、九州に分布。国外では朝鮮半島、中国、ウズリー、アムールに分布する。

形態及び生態 開張 70～80mm。ヒョウモン類の中では最も大形。温暖な環境を好み、県北山地からは記録されていない。成虫の出現は年1回。6～7月に出現し8月は夏眠に入り姿が見られなくなる。9月から再び出現し活発に活動し産卵終息する。食草はスミレ類。

近似種 ♀は大形で区別が付きやすい。♂は後翅表外縁の黒紋の形状が二山形である。

生息地 低地や山麓の草原・河川の堤防草地、茅場。1950年代には筑波山塊には茅場が存在し、多産したことが記録されている。その後、茅場の役目は終わりすぎ、ヒノキが植林され生息地が消えた。

生存の危機 茅場の喪失、河川堤防の草地の管理などにより生息地が消失したものと思える。

特記事項

執筆者(協力者) 塩田正寛・佐々木泰弘・有賀俊司

文献 26), (34), (38), (39), (52), (67), (95), (119), (122), (130), (185), (186), (210), (211)



左：♂ 1931年6月26日

右：♀ 1932年9月24日

いずれも君賀村産（現稲敷市）で採集、茨城県自然博物館所蔵標本（塩田正寛）

茨城県 2016	●●●●●	絶滅
茨城県 2000	●●●●●	絶滅危惧種
環境省 2014	●●●●●	絶滅危惧 I A 類

選定理由 ①③ 茨城県では、1933～1947年・友部町・内原町で記録された。1948年以降は記録されていない。

分布状況 本州の特産種。福島県、茨城県・千葉県、長野県、山梨県、岐阜県、愛知県、兵庫県、広島県、山口県などで記録されている。国外では、朝鮮半島、中国に分布する。

形態及び生態 開張 50～55mm。翅表は橙色を帯びた茶色。成虫の出現は年1回。6～7月。明るい湿地の草地が生息地。食草は、キク科のマアザミ。

近似種 コヒョウモンモドキと似るが、茨城県には生息していない。

生息地 友部町（笠間市旭町）・内原町（笠間市鯉淵）の2地点で記録されている。2地点は、南北に数kmの範囲にある。記録地点の環境は、標高30mほどの平坦な台地で、湧水による湿地や細流・溜池が随所に見られる。現在でも人家周辺には湧水が噴出し、食草マアザミも自生している。湧水地域は周辺部より、夏は涼しく冬は暖かい安定した環境にあったと思われる。

生存の危機 1947年の記録を最後に、姿を消したようである。現在まで報告はない。絶滅種である。

特記事項

執筆者(協力者) 塩田正寛・佐々木泰弘・有賀俊司

文献 49), (97), (208), (209), (217)



♀ 1933年7月2日

東茨城郡鯉淵村産（現笠間市）で採集、神奈川県立生命の星・地球博物館所蔵標本（塩田正寛）

茨城県 2016	●●●●●	絶滅
茨城県 2000	●●●●●	対象外
環境省 2014	●●●●●	絶滅危惧 I A 類

選 定 理 由 ③④ 関東平野のほぼ中央部の2地点で生息が確認されたが、水海道では1952年、伊奈では1988年以降生息が確認されていない。

分 布 状 況 北海道、本州、四国に分布。国外では中国に分布する。

形態及び生態 開張70mm前後の、やや透明感のある白色の翅を持つ。成虫の出現は年1回。5月上旬～5月下旬。食草はケシ科のジロポウエンゴサクやムラサキケマン。

近 似 種 モンシロチョウなどに似るが、翅表の透明感で区別は容易。

生 息 地 1948～1951年は、水海道市(常総市)の標高13mの小貝川河川敷、1976～1987年は伊奈町(つくばみらい市)の標高8mの小貝川河川敷に生息していた。伊奈は水海道の15kmほど下流である。生息地の面積は狭く、河川敷内で生活のすべてが行われていた

生存の危機 水海道は、発見時には衰退期に入っていたと思えるが、伊奈の個体群は、発見時100個体を数えた。採集圧により絶滅したと考えられる。

特 記 事 項 2014年に八溝山地に別個体群が侵入したことが確認された。

執筆(協力者) 塩田正寛・佐々木泰弘・有賀俊司

文 献 12), 40), 101), 102), 113), 126), 127), 173), 174), 183), 184), 186), 187), 188), 189), 190), 201)



撮影 佐々木泰弘

茨城県2016	●●●●	絶滅危惧I A類	●
茨城県2000	●●●●	絶滅危惧種	●
環境省2014		対象外	

選 定 理 由 ①②③ 生息が局地的で限定され、近年の記録はごく少数である。

分 布 状 況 北海道、本州、九州に分布。国外では朝鮮半島、中国、ロシア南東部～アルタイ山脈に分布する。

形態及び生態 開張45mm前後。横長の翅型で白色。前翅端に黒斑がある。河川敷が生息環境。古くは、台地の松林にも生息していた記録がある。成虫の出現は年3～4回、4～9月までほぼ連続して出現する。食草はツルフジバカマ。

近 似 種 紛らわしい種はない。

生 息 地 久慈川や那珂川の、河川敷が生息地である。1954年以前には、那珂湊・水戸市・勝田市・東海村石神・大子町など広い範囲で記録された。その後しばらく記録が途絶えたが1967年大子町久慈川で再発見され、2003年まで記録された。その後姿が見られない状態が続いたが、2010年再び記録された。しかし、1年で姿を消した。2014年に今までの生息地から離れた北茨城市で1個体確認された。

生存の危機 久慈川の2010年の個体群は、秋の洪水による水没がなければ、定着地になり得たと思われる。

特 記 事 項

執筆(協力者) 塩田正寛・佐々木泰弘・有賀俊司

文 献 19), 39), 56), 61), 66), 69), 93), 95), 96), 116), 136), 157), 159), 208), 217)



撮影 佐々木泰弘

茨城県2016	●●●●	絶滅危惧I A類	●
茨城県2000	●●●●	希少種	●●●●
環境省2014	●●●●	絶滅危惧I B類	●

選定理由 ①③ 鶏足山塊の生息地点はダム建設により水没消滅した。鷺子山塊の地点も近年記録されていない。

分布状況 北海道, 本州, 九州。ヨーロッパからサハリンにかけて広く分布。

形態及び生態 開張 35mm内外。樹上性の中型シジミチョウ。雄雌ともに翅表は茶黒色。裏面は茶褐色の地に白色斑と赤色紋がある。雌雄ともに尾状突起を有する。成虫は6月下旬～7月中旬に年1回出現する。幼虫の食樹はハルニレ, オヒョウ等でこれが混成する落葉広葉樹林が生息環境である。夕方に活動することが多い。

近似種 ミヤマカラスシジミとは後翅裏面の白斑の並びで区別。

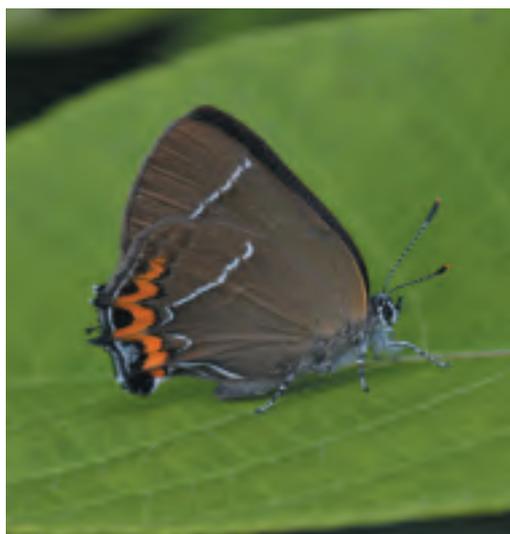
生息地 確認された生息地は多賀山地, 鷺子山塊, 鶏足山塊の限られた地点のみである。

生存の危機 数少ない生息地内のハルニレを保全していく必要がある。

特記事項

執筆者(協力者) 塩田正寛・佐々木泰弘・有賀俊司

文献 18), 71), 74), 80), 151), 168), 171), 192), 205)



撮影 佐々木泰弘

茨城県 2016	● ● ● ● ●	絶滅危惧 I A 類	●
茨城県 2000		対象外	
環境省 2014		対象外	

選定理由 ①②③④ 過去には多賀山地, 鶏足山塊, 筑波山塊, 県央・県南・県西の低地に広く生息していたがほとんどの地域で消えてしまった。

分布状況 北海道, 本州, 四国, 九州。

形態及び生態 開張 35mm内外。地上性の中型シジミチョウ。雄の翅表は鈍い紫藍色, 雌は黒褐色。裏面は茶褐色の地に黒色斑がある。成虫は6月下旬～に年1回出現する。幼虫は始めアブラムシ類と後にクロオオアリと共生生活をし, アリの巣の中で蛹化し地上に出て羽化する。樹木のまばらな林が生息環境である。

近似種 近似種はいない

生息地 2000年以後, 多賀山地, 鶏足山塊内の4地点のみで生息が確認されていたが, 近年それらの地点でも確認が途絶えている。

生存の危機 生息地が森林に移行したり, 宅地造成で破壊されたりして失われている。生息地は人為的に保全する必要がある, 採集の規制も考慮に入れる必要がある。

特記事項

執筆者(協力者) 佐々木泰弘・塩田正寛・有賀俊司

文献 2), 25), 26), 45), 49), 58), 64), 69), 74), 94), 97), 103), 176), 181), 197), 202), 208), 211)



撮影 佐々木泰弘

茨城県 2016	● ● ● ● ●	絶滅危惧 I A 類	●
茨城県 2000	● ● ● ● ●	希少種	● ● ● ● ●
環境省 2014	● ● ● ● ●	絶滅危惧 I B 類	●

選 定 理 由 ③ 1973年にはじめて記録された。以後の記録は、10例にも満たない状態で、ここ15年ほどは記録が途絶えている。

分 布 状 況 北海道、本州、四国、九州に分布する。国外では朝鮮半島、中国東北部、ロシア南西部に分布する。

形態及び生態 開張45mm前後。全体薄茶色の大型のセセリチョウ。食樹はウコギ科のハリギリで、食樹の交じる森林が生息環境である。成虫の出現は年1回。7月下旬～8月上旬。

近 似 種 大型のアオバセセリとは、翅の色彩で区別がつく。

生 息 地 多賀山地北部の標高が高い地域。八溝山塊の記録は1例のみである。

生存の危機 森林が伐採された地域で記録されている例が多い。本来は森林性の種である。安定したブナ林の形成が望ましい。

特 記 事 項

執筆者(協力者) 塩田正寛・佐々木泰弘・有賀俊司

文 献 68), 72), 112), 140), 193), 199), 200), 219)



撮影 佐々木泰弘

茨城県2016 ●●●●● 絶滅危惧I A類 ●●●●●
茨城県2000 ●●●●● 希少種 ●●●●●
環境省2014 ●●●●● 対象外 ●●●●●

選 定 理 由 ①②③④ 多賀山地の標高の高い地域に局所的に生息地が知られているが、生息地点及び個体数が減少している。八溝山塊・筑波山塊では記録が途絶えている。

分 布 状 況 北海道、本州、四国に分布する。国外ではミャンマー、中国、朝鮮半島、ロシア南東部、東シベリアに分布する。

形態及び生態 開張30mm前後。翅表は黒色、裏面は茶色。独特の白い斑紋を持つ。成虫の出現は年2回。4～5月、7～8月。食草はバラ科のキジムシロ・ミツバツチグリなどである。

近 似 種 小形種で、紛らわしいものはない。

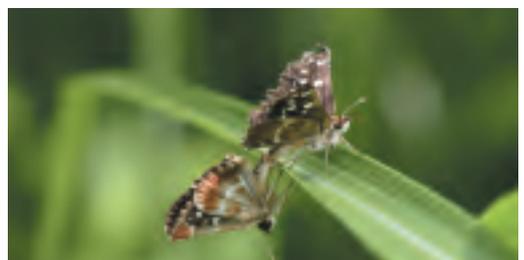
生 息 地 日当たりの良い草原、森林伐採跡地、谷の氾濫原・湿地などの自然環境や、人為的な牧草地や採草地も生息地である。

生存の危機 生息環境は、森林に遷移しやすく、人為的草地は規模が小さく採集圧の影響を受けやすい

特 記 事 項

執筆者(協力者) 塩田正寛・佐々木泰弘・有賀俊司

文 献 14), 21), 34), 49), 69), 70), 74) 106), 147), 150), 153), 177), 207), 217)



撮影 佐々木泰弘

茨城県2016 ●●●●● 絶滅危惧I B類 ●●●●●
茨城県2000 ●●●●● 希少種 ●●●●●
環境省2014 ●●●●● 絶滅危惧I B類 ●●●●●

選定理由 ①② 1996年以前は、県内の全域から記録される普遍的な種であったが、1997～2002年まで記録が途絶えた。しかし、2003年以降再び記録されるようになり、現在に至っている。だが、かつてのように秋になると普遍的に見られた状態には戻っていない。記録が途絶えた6年間、何が生じたのかは不明である。

分布状況 本州、四国、九州に分布する。太平洋側の分布北限は福島県。茨城県は北限に近い。

形態及び生態 開張35mm前後。成虫越冬し春に産卵する。6月に最初の成虫が出現するが個体数は少ない。次の世代は、8月から徐々に個体数が増し、9月からは広い範囲で普遍的に見られるようになる。食草はマメ科のカワラケツメイ。

近似種 キタキチョウに似るが、前翅表の黒斑・後翅裏面の斑紋が異なる。

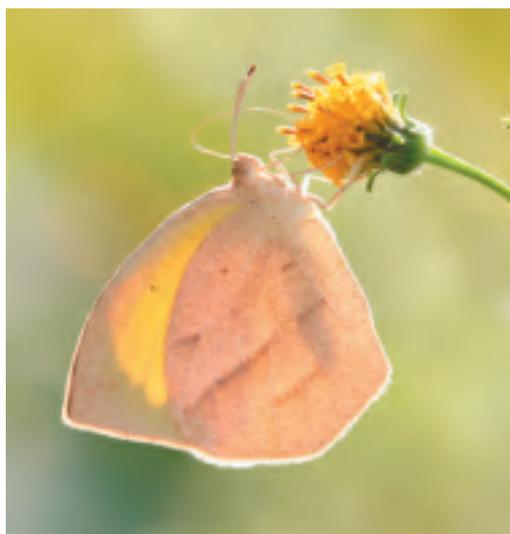
生息地 食草のある日当たりの良い河川敷や草地を好む。県内全域から記録されているが、越冬地域は、標高200m未満の照葉樹林地帯である。北風の吹き抜ける低地では越冬できないと思われる。

生存の危機 現在のところは、県北、県央には記録が戻ってきているが、県央・鹿行・県南・県西低地の記録は極めて少ない。

特記事項

執筆者(協力者) 塩田正寛・佐々木泰弘・有賀俊司

文献 4), 6), 9), 11), 26), 34), 74), 75), 93), 95), 107), 108), 110), 135), 144), 154), 175), 182), 208), 211), 221)



撮影 佐々木泰弘

茨城県2016 ●●●●● 絶滅危惧I B類 ●

茨城県2000 対象外

環境省2014 ●●●●● 絶滅危惧I B類 ●

選定理由 ①③ 過去3地点より記録があったが、1地点は絶滅、他1地点も個体数の減少が激しい。

分布状況 北海道、本州、九州。ウスリー、アムール、中国東北部、朝鮮半島。

形態及び生態 開張35mm内外。樹上性の中型シジミチョウ。裏面は銀灰白色で雄の翅表は青みの強い金属光沢の緑色、雌は黒褐色。雌雄とも短い尾状突起を有する。成虫は6月中旬～7月中旬に年1回出現する。幼虫の食餌植物はカシワでカシワ林及びカシワが混成する落葉広葉樹林が生息環境である。

近似種 紛らわしい種はいない。

生息地 現在生息が確認されているのは、2地点のみ。多賀山地、久慈山地の各1地点に生息。

生存の危機 県内のカシワ林は遷移や伐採等により減少している。県内にわずかに残るカシワ林を保護する必要がある。

特記事項

執筆者(協力者) 佐々木泰弘・塩田正寛・有賀俊司

文献 74), 85), 100), 155), 156), 170), 172), 177), 194), 218), 223)



撮影 佐々木泰弘

茨城県2016 ●●●●● 絶滅危惧I B類 ●

茨城県2000 ●●●●● 危急種 ●●●●●

環境省2014 対象外

選 定 理 由 ①③ 過去に記録のあった県北低地、多賀山地の地点の中には近年記録なく絶滅したと考えられる所もある。現在残る生息地も個体数が激減している。

分 布 状 況 北海道、本州、九州。国外では中国東北部、朝鮮半島。

形態及び生態 開張 38mm内外。樹上性の中型シジミチョウ。雄の翅表は金属光沢の緑色、雌は黒褐色。裏面は黒褐色の地に白色斑と赤色紋がある。雌雄ともに尾状突起を有する。成虫は6月下旬～7月中旬に年1回出現する。幼虫の食樹はカシワでカシワ林及びカシワが混成する落葉広葉樹林が生息環境である。

近 似 種 ジョウザンミドリシジミ、エゾミドリシジミと似るが翅表の黒帯の幅や後翅裏面の赤斑の形で区別。

生 息 地 久慈山地、多賀山地内の数地点のみで生息している。過去には県北低地の1地点でも記録されている。

生存の危機 県内のカシワ林は遷移や伐採等により減少している。県内にわずかに残るカシワ林を保護する必要がある。

特 記 事 項

執筆(協力者) 佐々木泰弘・塩田正寛・有賀俊司

文 献 57), 74), 85), 90), 100), 155), 194), 202), 218)



撮影 佐々木泰弘

茨城県 2016	●●●●●	絶滅危惧 I B 類	●
茨城県 2000	●●●●●	危急種	●●
環境省 2014		対象外	

選 定 理 由 ①②③④ 草地環境が放置されて植生遷移により生息地が失われた。過去にあった生息地は激減し、その場所でも個体数の減少が著しい。

分 布 状 況 北海道、本州、四国、九州。ユーラシア大陸北部に広く分布。

形態及び生態 開張 18mm内外。草原性のシジミチョウ。雄の翅表は青藍色、雌は黒褐色で赤橙色斑紋列がある。裏面は雌雄とも灰白色の地に黒色斑と赤橙色斑紋列がある。成虫は6月中旬～7月上旬に年1回出現する。幼虫の食草はヨモギ、イタドリ、アザミ類など草原性環境が生息環境である。

近 似 種 ミヤマシジミに似るが、翅表の色合いや翅裏黒紋、青色鱗粉の入り方などにより区別。

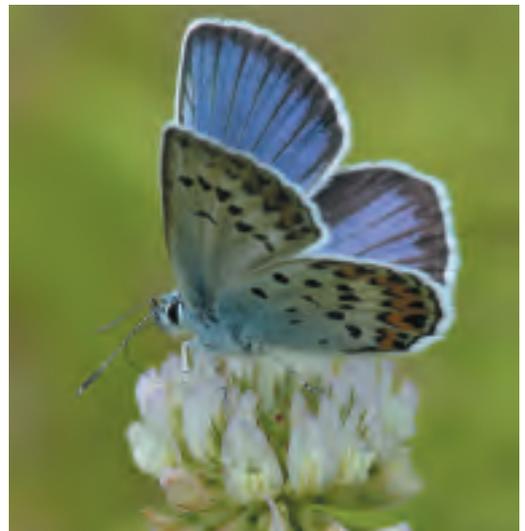
生 息 地 多賀山地内の標高 600～700m に生息。現在継続して発生している生息地点は数地点のみ。

生存の危機 草地環境の保全、積極的な維持が必要である。

特 記 事 項

執筆(協力者) 佐々木泰弘・塩田正寛・有賀俊司

文 献 14), 39), 55), 69), 74), 177), 202)



撮影 佐々木泰弘

茨城県 2016	●●●●●	絶滅危惧 I B 類	●
茨城県 2000	●●●●●	希少種	●●●●
環境省 2014	●●●●●	準絶滅危惧	●●●●●

選定理由 ①②③ 過去には県北低地にも生息していたが絶滅した。現在残る山地内の生息地でも個体数が減少している地点が多い。

分布状況 北海道、本州、四国、九州。日本固有種。

形態及び生態 開張 35mm内外。樹上性の中型シジミチョウ。雄雌とも翅表は茶黒色。裏面は茶褐色の地に白色斑と赤色紋がある。雌雄ともに尾状突起を有する。成虫は6月下旬～7月中旬に年1回出現する。幼虫の食樹はクロウメモドキでこれが混成する落葉広葉樹林が生息環境である。夕方に活動することが多い。

近似種 カラスシジミとは後翅裏面の白斑の並びで区別。

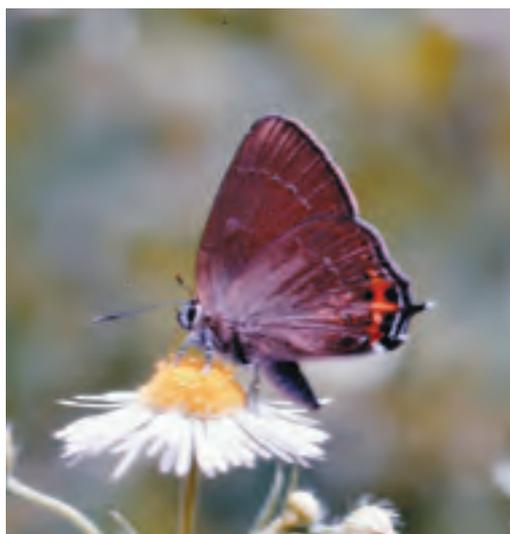
生息地 多賀山地、久慈山地の標高 400～800m に生息。過去には県北低地でも記録された。

生存の危機 湿原の保全が必要。森林の伐採等で湿原の乾燥化が進むと食樹が衰退し、チョウが消滅する可能性が高い。

特記事項

執筆者(協力者) 佐々木泰弘・塩田正寛・有賀俊司

文献 14), 46), 59), 60), 64), 65), 69), 74), 76), 103), 128), 145), 177), 202), 216)



撮影 小菅次男



選定理由 ①③ 多賀山地内には多くの生息地が知られていたが、2000年以降は数地点のみで確認されただけである。久慈山地、八満山塊からの記録は近年出ていない。

分布状況 北海道、本州。中国北部・東北部、アムール、ウスリー、朝鮮半島。

形態及び生態 開張 38mm内外。樹上性の中型シジミチョウ。翅表は翅端の黒色部を除き全体橙色で、裏面に褐色状斑がある。雌雄ともに尾状突起を有する。成虫は7月中旬～8月に年1回発生する。幼虫は半肉食性で、ブナ科植物の他、クリオオアブラムシ、カイガラムシ類などの昆虫を補食する。落葉広葉樹林が生息環境で、夕方活発に活動する傾向が強い。

近似種 アカシジミとは後翅裏面に白色帯がないことで区別。

生息地 多賀山地、久慈山地、八満山塊の標高 400～700m を中心に生息。

生存の危機 標高の低いところでも出現するので、里山をはじめ山地の雑木林保全が必要である。

特記事項

執筆者(協力者) 佐々木泰弘・塩田正寛・有賀俊司

文献 13), 14), 16), 27), 84), 98), 103), 111), 147), 148), 154), 155), 156), 177), 180), 195), 202), 216)



撮影 佐々木泰弘



選定理由 ①② 多賀山地の、標高の高い地域で記録されている。多賀山地以外では久慈山地や八溝山塊で記録されているが、記録が連続しない。多賀山地では、個体数は多かったが、近年減少傾向にある。

分布状況 北海道、本州、四国、九州に分布。国外では朝鮮半島、中国東北部・北部、ロシア南東部に分布する。

形態及び生態 開張 30mm位。オレンジ色の小さいセセリチョウ。支脈に黒い筋があるの。成虫の出現は年1回、7～8月。食草はイネ科のカモジグサやクサヨシなど。

近似種 本種の♂は、前翅表に黒い性標がある。♀はヘリグロチャバネセセリと酷似する。

生息地 多賀山地の北部の標高の高い地域の沢沿い草地に生息する。八溝山塊や久慈山地でも沢沿い草地で記録されている。

生存の危機 個体数が少なく、生息地が林道拡張や森林伐採の影響を受けやすい。森林放置による環境変化も影響している。

特記事項

執筆者(協力者) 塩田正寛・佐々木泰弘・有賀俊司

文献 10), 21), 39), 49), 56), 69), 73), 74), 154), 155), 156), 177), 208), 217)



撮影 佐々木泰弘

茨城県 2016	● ● ●	絶滅危惧Ⅱ類	● ● ●
茨城県 2000		対象外	
環境省 2014	● ● ●	準絶滅危惧	● ● ●

選定理由 ①② 生息範囲は広いが、成虫の個体数は少ない。単発的な確認で終わり継続して確認されている地点は少ない。継続して確認された地点での個体数の減少が目立つ。

分布状況 北海道、本州、四国、九州。日本特産種

形態及び生態 開張 35mm内外。樹上性の中型シジミチョウ。雄雌とも翅表は黒色地で、裏面は黄褐色色の地に黒色斑と赤色紋がある。成虫は6月中旬～7月上旬に年1回出現する。食樹はトネリコ類でこれらが混成する落葉広葉樹林が生息環境である。夕方に活動する。

近似種 近似種はいない

生息地 多賀山地、久慈山地、八溝山塊、鷲子山塊、鶏足山塊、筑波山塊に生息。

生存の危機 確認している地域の広範囲での雑木林の保護が必要。

特記事項

執筆者(協力者) 佐々木泰弘・塩田正寛・有賀俊司

文献 14), 22), 62), 69), 74), 115), 131), 133), 140), 177), 180), 194), 214), 220), 223)



撮影 小菅次男

茨城県 2016	● ● ●	絶滅危惧Ⅱ類	● ● ●
茨城県 2000		対象外	
環境省 2014		対象外	

選定理由 ①③ 県内では、標高の高い山地のミズナラの混ざる雑木林に生息し個体数も少ない。僅かな環境変化で絶滅する危険がある。

分布状況 北海道、本州。ウスリー、中国東北部、朝鮮半島。

形態及び生態 開張 35mm内外。樹上性の中型シジミチョウ。雄の翅表は青味のある金属光沢の緑色、雌は黒褐色。裏面は黒褐色の地に白色斑と赤色紋がある。雌雄ともに尾状突起を有する。成虫は6月下旬～7月中旬に年1回出現する。幼虫の食樹はミズナラ等のブナ科植物で、これらが混成する落葉広葉樹林が生息環境である。午前中に活動することが多い。

近似種 ハヤシミドリシジミ、エゾシミドリシジミと似るが翅表の黒帯の幅や後翅裏面の赤斑の形で区別。

生息地 多賀山地、八溝山塊の標高の高い山地に生息する。

生存の危機 生息地点のミズナラを混交する、雑木林の保全を必要とする。

特記事項

執筆者(協力者) 佐々木泰弘・塩田正寛・有賀俊司

文献 14), 16), 57), 69), 74), 140), 155), 177), 178), 195)



撮影 佐々木泰弘

茨城県 2016	●●●	絶滅危惧Ⅱ類	●●●
茨城県 2000	●●●	希少種	●●●
環境省 2014		対象外	

選定理由 ①② 山地を中心に分布し、低地でも記録されている。近年、低地では見られなくなり、山地でも筑波山塊などでは確認できなくなっている。

分布状況 北海道、本州、四国、九州に分布。国外ではサハリン、朝鮮半島、中国東北部、ユーラシア大陸北部に広く分布する。

形態及び生態 開張 60～65mm。やや小型のヒョウモンチョウ類。後翅裏面に茶色の帯がある。成虫の出現は年1回。7月に出現するが、8月には夏眠に入る。9月に入ると再び出現し、10月の始めに終息する。食草は、タチツボスミレ、ツボスミレなどのスミレ類。

近似種 オオウラギンスジヒョウモンと近似する。前翅外縁の形で区別ができる。

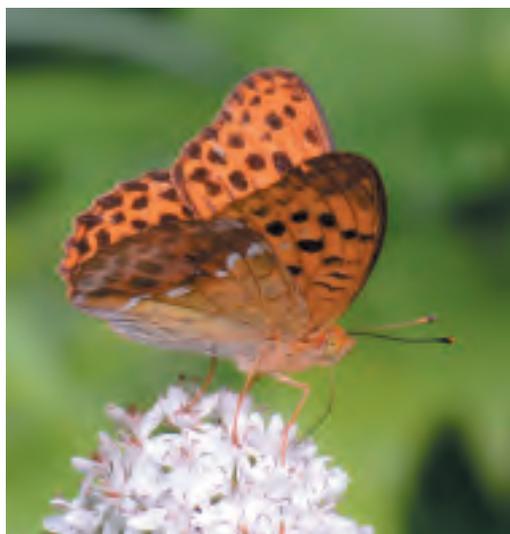
生息地 明るい草原や草場が生息地である。1950年代の難台山や1960年代の筑波山などでは多産した記録がある。

生存の危機 山地では、安定した草地や牧場がある地点では現在も記録されている。しかし、筑波山では、1981年は個体数が60%程度に減少した。県西部では1950年代には普通に見られたが、1976年頃には記録されなくなった。水戸市では、1950年代には記録されたが、1978年代には記録されなくなっている。生息環境の草地が、徐々に森林に変わり生息環境が狭められたことが減少の要因と考えられる。

特記事項

執筆者(協力者) 塩田正寛・佐々木泰弘・有賀俊司

文献 6), 34), 42), 47), 50), 53), 63), 69), 74), 95), 120), 121), 146), 162), 185), 208), 213)



撮影 佐々木泰弘

茨城県 2016	●●●	絶滅危惧Ⅱ類	●●●
茨城県 2000		対象外	
環境省 2014	●●●	絶滅危惧Ⅱ類	●●●

選定理由 ①② かつては、生息地も個体数も多かったが、現在に進むにしたがって生息地は激減している。

分布状況 北海道の一部、本州、四国、九州に分布。

国外では朝鮮半島、中国東北部、ベトナム、台湾北部に分布する。

形態及び生態 開張90mm位。大形のタテハチョウ。♂の翅表は濃い紫色。♀は♂より大形で翅表は茶褐色。

成虫の出現は年1回、7～8月。食樹はニレ科のエノキ。雑木林が生息環境。

近似種 紛らわしい種はない。

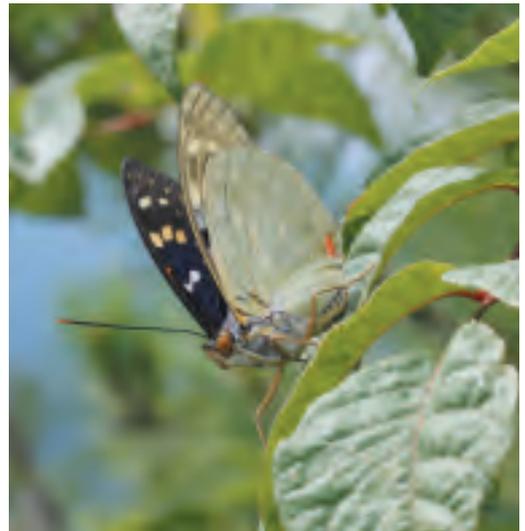
生息地 生息には、エノキを交える、安定した規模の大きい雑木林を必要とする。山地では、個体数は少ないが全域に分布する。関東平野部での減少が著しく生息地が少なくなっている。

生存の危機 開発に伴い、雑木林の縮小化・消失で生息地が失われている。近年、自然観察施設が設置されることによって本種の生息環境が確保されている。

特記事項

執筆者(協力者) 塩田正寛・佐々木泰弘・有賀俊司

文献 1), 3), 5), 7), 14), 16), 25), 26), 27), 30), 38), 43), 48), 55), 56), 58), 63), 74), 87), 88), 89), 97), 119), 120), 121), 122), 124), 125), 141), 143), 148), 149), 177), 191), 202), 203), 208), 209), 212), 217)



撮影 佐々木泰弘

茨城県2016	●●●	絶滅危惧Ⅱ類	●●●
茨城県2000	●●●	希少種	●●●
環境省2014	●●●	準絶滅危惧	●●●

選定理由 ③ 県北山地の安定した森林の林床に生息する。生息地及び個体数が少ない。

分布状況 北海道・本州・四国・九州に分布。北海道では低地に、四国、九州では高山にのみ生息する。国外では中国大陸南部に分布する。

形態及び生態 開張55mm位。中型のジャノメチョウ。成虫出現は年1回。8月上旬～9月下旬。他県の亜高山地域に比べて初めと終息が2旬遅れる。食草は、スズタケ・クマザサ。アズマネザサなどのササ類。

近似種 ヤマキマダラヒカゲとは、翅形斑紋で区別できる。

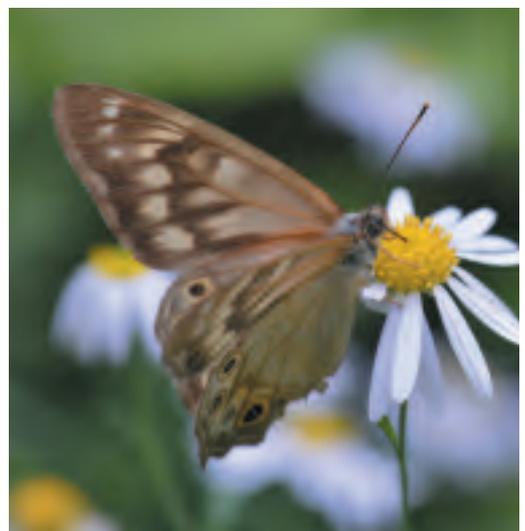
生息地 多賀山地や久慈山地、八溝山塊の標高の高い地域の安定した冷温帯林の林床に生息する。森林伐採で取り残された小規模の樹林にも姿を見ることがあるが、出現状態は不安定である。標高の低い山地や、低地でも記録されている。低地では、水戸市の笠原湧水地や、真壁町の桜川湿地で各1記録されている。

生存の危機 冷温帯林の森林伐採によって、大きな影響を受けている。

特記事項

執筆者(協力者) 塩田正寛・佐々木泰弘・有賀俊司

文献 15), 16), 24), 54), 69), 74), 78), 91), 122), 164), 215)



撮影 佐々木泰弘

茨城県2016	●●●	絶滅危惧Ⅱ類	●●●
茨城県2000	●●●	希少種	●●●
環境省2014		対象外	

選 定 理 由 ①③ 生息地が県北山地のごく限られた地域に限定されている。過去確認できた地点で近年確認できなくなった地点もある。

分 布 状 況 北海道, 本州, 四国, 九州。アムール, 中国東北部, 朝鮮半島。

形態及び生態 開張 35mm内外。樹上性の中型シジミチョウ。雄の翅表は金属光沢の緑色, 雌は黒褐色。裏面は黒褐色の地に白色斑と赤色紋がある。雌雄ともに尾状突起を有する。成虫は 6 月下旬～7 月中旬に年 1 回出現する。幼虫の食樹はミズナラ, コナラ等のブナ科植物でこれらが混成する落葉広葉樹林が生息環境である。朝方活発に活動し, 雄は占有行動をとる。

近 似 種 近似種のメスアカミドリシジミの確実な茨城県記録はない。本種とは裏面白色斑の形で区別。

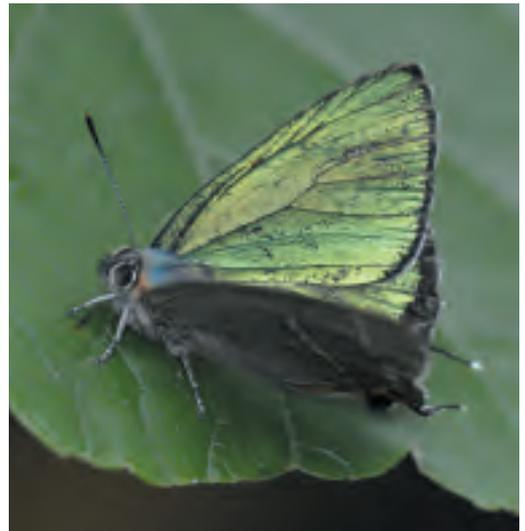
生 息 地 定着地域は, ミズナラを含む冷温帯林地域である。多賀山地, 八溝山塊の標高 600m 以上に生息。

生存の危機 生息地域は, 伐採・植林によってその多くがスギ林に置き換わっている。県内では少ない冷温帯林に生息する本種は, 必然的に稀な種である。

特 記 事 項

執筆者(協力者) 佐々木泰弘・塩田正寛・有賀俊司

文 献 69), 74), 98), 100), 105), 154), 155), 156), 178), 196)



撮影 佐々木泰弘

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県 2000	●	希少種	● ● ● ●
環境省 2014		対象外	

選 定 理 由 ③ 生息地がごく限られた地域に限定されている。過去確認できた地点で近年確認できなくなった地点もある。

分 布 状 況 北海道, 本州, 九州。中国東北部, ウスリー, 朝鮮半島。

形態及び生態 開張 35mm内外。樹上性の中型シジミチョウ。翅表は雌雄とも黒褐色で, 裏面は灰白色の地に黒色斑と赤色紋がある。雌雄とも尾状突起を有する。成虫は 6 月中旬～7 月中旬に年 1 回出現する。幼虫の食餌植物はカシワ, ミズナラ, コナラ等のブナ科植物でこれらが混成する落葉広葉樹林が生息環境である。夕方活発に活動する傾向が強い

近 似 種 オナガシジミとは, 裏面の黒斑模様で区別できる。

生 息 地 多賀山地, 八溝山塊の標高 600m 以上に生息。

生存の危機 生息地域は, 植林伐採によってその多くがスギ林に置き換わっている。

特 記 事 項

執筆者(協力者) 佐々木泰弘・塩田正寛・有賀俊司

文 献 32), 57), 69), 74), 98), 100), 105), 139), 155), 156), 178), 196), 218)



撮影 佐々木泰弘

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県 2000	●	希少種	● ● ● ●
環境省 2014		絶滅危惧 I A 類 (九州亜種)	

選定理由 ①② 各地域で個体数が少なくなり、特に低山地での道路拡張等により雑木林の減少等で生息地が減少している。

分布状況 北海道、本州、四国、九州。台湾。

形態及び生態 開張 35mm内外。樹上性の中型シジミチョウ。雄の翅表は光沢のある白色、雌は灰黒色で青白色の紋がある。裏面は黒褐色の地に白色斑と赤色紋がある。雌雄ともに尾状突起を有する。成虫は6月中旬～7月上旬に年1回出現する。幼虫の食樹はマンサク類でこれらが混成する落葉広葉樹林が生息環境である。夕方に活発に活動する。

近似種 紛らわしい種はいない。

生息地 多賀山地、八溝山塊、鷲子山塊、鶏足山塊に生息。他、県央低地からも記録があるが疑問。

生存の危機 谷に自生する食樹マンサクが道路拡張などで消失することが多い。谷の植生の保全が必要である。マンサクが病気拡散により枯れていることも危機である。

特記事項

執筆者(協力者) 佐々木泰弘・塩田正寛・有賀俊司

文献 14), 20), 28), 46), 55), 69), 74), 79), 117), 132), 134), 156), 177), 194), 195), 196), 206)



撮影 佐々木泰弘

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県 2000		対象外	
環境省 2014		対象外	

選定理由 ①② 各地域で個体数が少なくなり、特に分布の中心である標高の低いところでの生息地が減少している。

分布状況 北海道、本州、四国、九州。アムール、中国東北部、朝鮮半島。

形態及び生態 開張 35mm内外。樹上性の中型シジミチョウ。雄雌とも翅表は黒色地に青白色の紋で、裏面は白色の地に黒色紋がある。成虫は6月中旬～7月上旬に年1回出現する。幼虫の食樹はイボタ類でこれらが混成する落葉広葉樹林が生息環境である。夕方に活発に活動する。

近似種 紛らわしい種はいない。

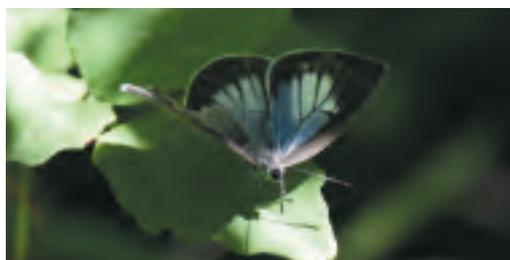
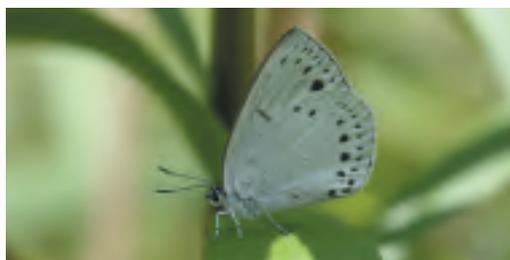
生息地 山地から低地にかけて生息するが、400m以下の山地～平野に多く生息する。

生存の危機 生息地が開発により消えることが多く、生息できる部分を残すことが必要である。

特記事項

執筆者(協力者) 佐々木泰弘・塩田正寛・有賀俊司

文献 26), 30), 31), 44), 65), 87), 92), 121), 124), 141), 146), 156), 208), 213)



撮影 佐々木泰弘

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県 2000		対象外	
環境省 2014		対象外	

選定理由 ①③ 各生息地での個体数が少なく、落葉広葉樹林の伐採・針葉樹の植林で生息地が消失しているところもある。

分布状況 北海道、本州、四国、九州。日本固有種。

形態及び生態 開張 35mm内外。樹上性の中型シジミチョウ。雄の翅表は青味のある金属光沢の緑色、雌は黒褐色。裏面は黒褐色の地に白色斑と赤色紋がある。雌雄ともに尾状突起を有する。成虫は6月下旬～7月中旬に年1回出現する。幼虫の食樹はミズナラ、コナラ等のブナ科植物でこれらが混成する落葉広葉樹林が生息環境である。日中に活動することも多くウツギ、クリなどの花にも訪花する。

近似種 ジョウザンミドリシジミやハヤシミドリシジミと似るが翅表の黒帯の幅や後翅裏面の赤斑の形で区別。

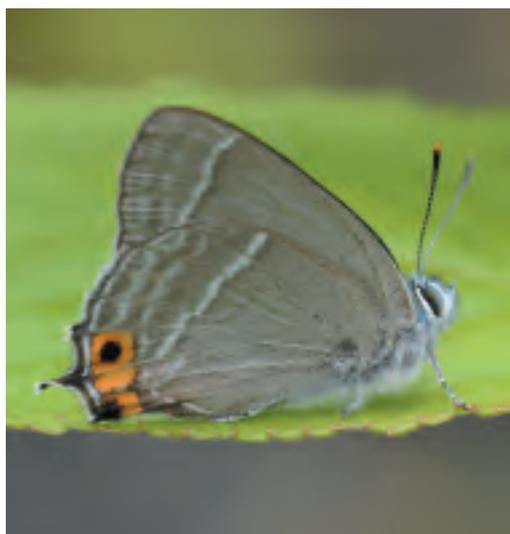
生息地 多賀山地、久慈山地、八溝山塊の標高 600m 以上の山地を中心に生息している。多賀山地では、低地でも記録されている。

生存の危機 コナラ・ミズナラを混交する雑木林の保全が必要である。

特記事項

執筆者(協力者) 佐々木泰弘・塩田正寛・有賀俊司

文献 14), 16), 37), 55), 57), 69), 74), 100), 105), 138), 140), 147), 194), 218)



撮影 佐々木泰弘

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県 2000	●	希少種	● ● ● ●
環境省 2014		対象外	

選定理由 ①③ 各生息地での個体数が少なく、八溝山塊では近年確認されていない。

分布状況 北海道、本州、四国、九州。ウスリー、アムール、中国大陸西部、中国東北部、朝鮮半島。

形態及び生態 開張 35mm内外。樹上性の中型シジミチョウ。翅表は雌雄とも黒褐色で、裏面は灰白色の地に黒色斑と赤色紋がある。雌雄とも尾状突起を有する。成虫は7月中旬～8月上旬に年1回出現する。幼虫の食樹はクルミ類でこれらが混成する落葉広葉樹林が生息環境である。夕方活発に活動する傾向が強い。

近似種 ウスイロオナガシジミとは、裏面の黒斑模様で区別できる。

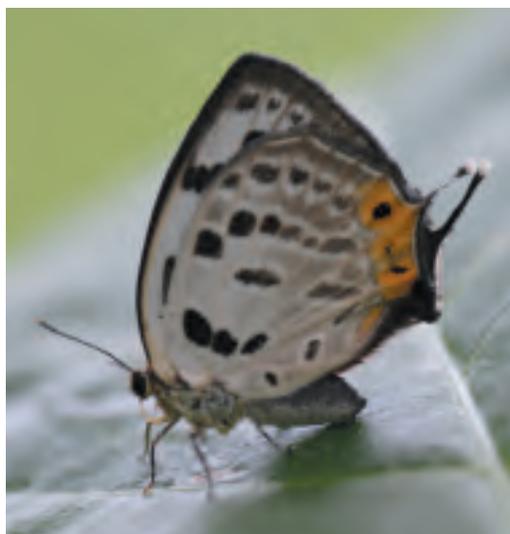
生息地 多賀山地、八溝山塊の標高 400～700m に生息。

生存の危機 オニグルミは、山地の谷沿いに多く見られるが、特に生息地にある食樹オニグルミを保全する必要がある。

特記事項

執筆者(協力者) 佐々木泰弘・塩田正寛・有賀俊司

文献 36), 57), 69), 74), 100), 117), 129), 137), 155), 156), 167), 195), 202), 204), 223)



撮影 佐々木泰弘

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県 2000		対象外	
環境省 2014		対象外	

選定理由 ① 食樹であるクヌギが、開発等により減少している。

分布状況 北海道、本州、四国、九州。中国大陸（東北部含む）、朝鮮半島。

形態及び生態 開張 35mm内外。樹上性の中型シジミチョウ。雄の翅表は金属光沢の暗銅色、雌は黒褐色。裏面は黒褐色の地に白色斑と赤色紋がある。雌雄ともに尾状突起を有する。成虫は6月下旬～7月中旬に年1回出現する。幼虫の食樹はクヌギでこれらが混成する落葉広葉樹林が生息環境である。

近似種 他のミドリシジミ類とは雄は翅表の色で雌は裏面の色等で区別できる。

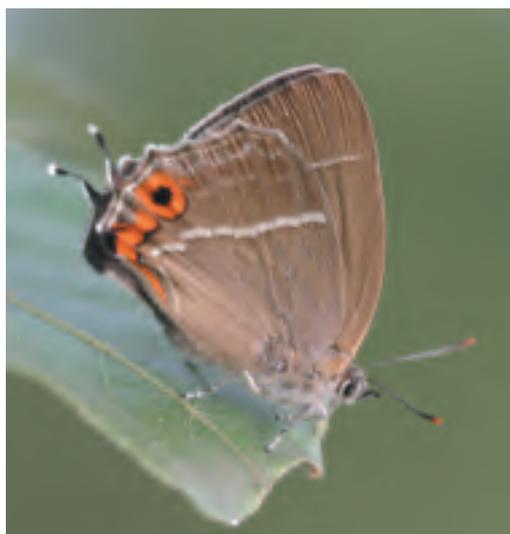
生息地 多賀山地、久慈山地、八溝山塊、鷲子山塊、鶏足山塊、筑波山塊、県北・県央・県南低地に生息している。

生存の危機 大きなクヌギが主体となっている林を保全していく必要がある。

特記事項

執筆者(協力者) 佐々木泰弘・塩田正寛・有賀俊司

文献 17), 23), 29), 69), 74), 82), 86), 98), 100), 104), 114), 117), 123), 148), 166), 196), 198), 202), 222)



撮影 佐々木泰弘

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県 2000		対象外	
環境省 2014		対象外	

選定理由 ①③④ ブナ林・ブナの混ざる雑木林は県内に少なく、生息個体数も少ない。イヌブナの見られる標高の低い地での生息地もある。

分布状況 北海道、本州、四国、九州。日本固有種。

形態及び生態 開張 33mm内外。樹上性のシジミチョウ。雄の翅表は白みがかった青みの強い金属光沢緑色、雌は黒褐色。裏面は灰褐色の地に白色斑と赤色紋がある。雌雄とも短い尾状突起を有する。成虫は6月中旬～7月上旬に年1回出現する。幼虫の食樹はブナで、ブナが混成する落葉広葉樹林が生息環境である。夕方に活動することが多い。

近似種 近似種はいない

生息地 ブナやイヌブナの自生する林に生息する。多賀山地、久慈山地、八溝山塊に生息。

生存の危機 ブナやイヌブナの混じる林を保全したい。植林等によりスギ・ヒノキ針葉樹に置き換えることを規制したい。

特記事項

執筆者(協力者) 佐々木泰弘・塩田正寛・有賀俊司

文献 14), 32), 41), 69), 74), 83), 99), 118), 137), 142), 161), 165), 169), 196), 223)



撮影 佐々木泰弘

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県 2000	●	希少種	● ● ● ●
環境省 2014		対象外	

選 定 理 由 ①② 多賀山地の標高の高い地域に分布するが、生息地点が少ない。

分 布 状 況 北海道・本州。国外では朝鮮半島・中国東北部・ロシア南東部などに分布する。

形態及び生態 開張 60mm位。大形のジャノメチョウ。後翅表の楕円黒紋が特徴。成虫の出現は年 1 回、7 月中旬～9 月中旬であるが、9 月は♀のみが残る。薄暗い場所を好み、広葉樹林の内部や湿地・休耕田の周辺で姿を見る。樹液で吸蜜する。

近 似 種 ジャノメチョウに似るが、大形で後翅表に黒紋があることで区別される。

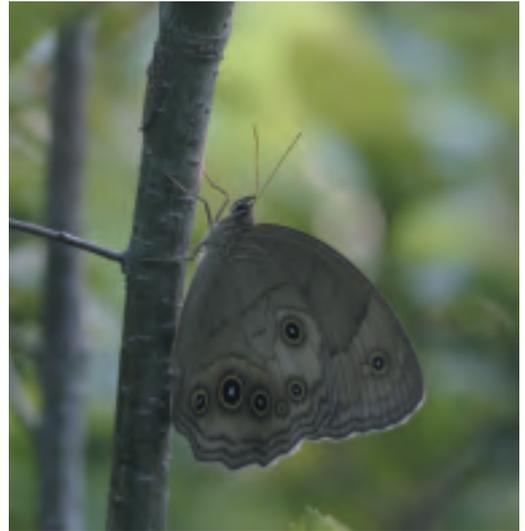
生 息 地 多賀山地の標高の高い地域が主な生息地であるが、久慈山地・八溝山隴・鶏足山隴の、標高の低い地域でも幾つかの記録がある。生息範囲は広いようである。

生存の危機 個体数が多い種ではない。生息範囲も狭く森林伐採の影響を受けやすい。

特 記 事 項

執筆者(協力者) 塩田正寛・佐々木泰弘・有賀俊司

文 献 14), 36), 49), 55), 69), 74), 155), 158), 179), 216)



撮影 佐々木泰弘

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県 2000		対象外	
環境省 2014		対象外	

選 定 理 由 ② 1968 年を最後に記録がなく、本県では絶滅の危惧あり、今回新たに追加する。

分 布 状 況 本州、四国、九州、屋久島、トカラ列島、沖縄島、石垣島、西表島。

形態及び生態 5～10月に数回発生し、ネギ、ダイズ、トウモロコシなどの農作物の害虫とされている。前翅前縁が深紅色となる。

近 似 種 シロヒトリに似るが、やや小型で、前翅前縁が深紅色・腹部の虎縞模様で識別。

生 息 地 本県では 1968 年の新治村（現土浦市）の記録以降、公式記録なし。

生存の危機 全国的に激減している。

特 記 事 項 栃木県では絶滅。

執筆者(協力者) 林 恵治・佐藤和明

文 献 1), 4)

茨城県 2016 ●●●● 絶滅危惧 I A 類 ●

茨城県 2000 対象外

環境省 2014 ●●●● 準絶滅危惧 ●●●●

選 定 理 由 ② 1968 年を最後に記録がなく、本県では絶滅の危惧あり。

分 布 状 況 本州（青森県、岩手県、栃木県、群馬県、長野県）に非常に局地的に生息。

形態及び生態 5～6月と8～9月に発生し、クロツバラ、クロウメモドキを食す。前翅に3つの丸い白紋がある。

近 似 種 特になし。

生 息 地 本県では 1968 年の関城町（現筑西市）の記録以降、公式記録なし。

生存の危機 本県で絶滅の危惧あり。

特 記 事 項 栃木県では絶滅危惧 I 類（A ランク）。

執筆者(協力者) 林 恵治・佐藤和明

文 献 4)

茨城県 2016 ●●●● 絶滅危惧 I A 類 ●

茨城県 2000 ●●●● 絶滅危惧種 ●

環境省 2014 ●●●● 絶滅危惧 I B 類 ●

選定理由 ①③ 湿地環境に依存する種のため、環境変化の影響を受けやすく、湿地環境の指標種として今回新たに追加する。

分布状況 北海道、本州、九州に局地的に生息。

形態及び生態 7～8月に発生し、ガマを食す。前翅は一様に濃い赤褐色。

近似種 特になし。

生息地 本県では1979年岩井市(現坂東市)の菅生沼の記録以降、公式記録なし。

生存の危機 本県での湿地環境変化による絶滅の危機あり。

特記事項 栃木県では絶滅危惧Ⅱ類(Bランク)、千葉県では要保護生物(C)。

執筆者(協力者) 林 恵治・佐藤和明

文献 4)

茨城県2016 ●●●● 絶滅危惧ⅠB類 ●

茨城県2000 対象外

環境省2014 ●●●● 絶滅危惧Ⅱ類 ●●●●

選定理由 ①③ 沼沢地や河川敷の低湿地環境に依存する種のため、環境変化の影響を受けやすく、前回よりランクを上げる。

分布状況 本州(宮城県、群馬県、茨城県、栃木県、埼玉県、千葉県、新潟県)に局地的に生息。

形態及び生態 5月に発生し、クサヨシを食す。前翅に1の字を横にした模様がある。

近似種 特になし。

生息地 本県では1981年岩井市(現坂東市)の菅生沼の記録以降、しばらく公式記録がなかったが、2014年5月に取手市の利根川河川敷で記録された。

生存の危機 本県での湿地環境変化による絶滅の危機あり。

特記事項 栃木県では準絶滅危惧(Cランク)、埼玉県では準絶滅危惧(NT2)。

執筆者(協力者) 林 恵治・佐藤和明

文献 4) 【2015 博物館報告書発表予定】



撮影 林 恵治

茨城県2016 ●●●● 絶滅危惧ⅠB類 ●

茨城県2000 ●●●● 希少種 ●●●●

環境省2014 ●●●● 絶滅危惧Ⅱ類 ●●●●

選 定 理 由 ② 食樹の分布は広いが、最近の記録がなく絶滅の危機があるため、前回よりランクを上げる。

分 布 状 況 本州（福島県以南）、四国。九州。

形態及び生態 九州では5月から、関東では6月から発生し、年2化。クヌギを食す。前翅の下に黒い縁取りがある。

近 似 種 特になし。

生 息 地 本県では1964年に御前山の記録以降、公式記録なし。

生存の危機 本県で絶滅の危機あり。

特 記 事 項 栃木県では準絶滅危惧（Cランク）、埼玉県では準絶滅危惧（NT1）。

執筆者(協力者) 林 恵治・佐藤和明

文 献 4)



選 定 理 由 ② 食樹は県北山地、筑波山に広く分布するが、最近の記録が少なく絶滅の危機があるため、前回よりランクを上げる。

分 布 状 況 日本固有種。北海道、本州、四国、九州の山地に生息するが稀。

形態及び生態 6月と7～8月に発生し、ミズナラを食す。前翅の縁に白い帯がある。

近 似 種 特になし。

生 息 地 本県では1965年八溝山の記録以降、高萩市の記録、2009年八溝山の記録【未発表】があるが、公式記録少ない。

生存の危機 本県では生息環境は維持されているものの、最近の公式記録がなく、絶滅の危機あり。

特 記 事 項 埼玉県では準絶滅危惧（NT1）。

執筆者(協力者) 林 恵治・佐藤和明

文 献 4)



撮影 佐藤和明、釣巻岳人



選 定 理 由 ②③ 特定の植物に依存しており、食樹の衰退に伴い、絶滅の危惧あり。

分 布 状 況 本州（関東地方以西）、伊豆諸島（三宅島、御蔵島）、四国、九州、対馬、種子島、屋久島、奄美大島、沖永良部島、沖縄島、石垣島、西表島、与那国島。

形態及び生態 5～10月に2、3回発生し、サカキカズラを食す。前翅に3つの白い紋がある。

近 似 種 特になし。

生 息 地 本県では1970年に関城町（現筑西市）での記録があるが、その後の公式記録なし。

生存の危機 本県で絶滅の危惧あり。

特 記 事 項

執筆者(協力者) 林 恵治・佐藤和明

文 献 4)

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県 2000	●	希少種	● ● ● ●
環境省 2014		対象外	

選 定 理 由 ①② 川沿いに生えるヤナギ類が河川改修工事などで消失するに伴い、絶滅の危惧が高まっている。

分 布 状 況 本州、四国、九州、対馬。

形態及び生態 5～6月と8月に発生し、ヤナギ類を食す。前翅の先が鋸の歯のような形状をしている。

近 似 種 特になし。

生 息 地 本県で過去に高萩市での記録あるが、その後の公式記録なし。

生存の危機 本県での河川敷環境変化により、絶滅の危惧あり。

特 記 事 項

執筆者(協力者) 林 恵治・佐藤和明

文 献 4)

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県 2000	●	希少種	● ● ● ●
環境省 2014		対象外	

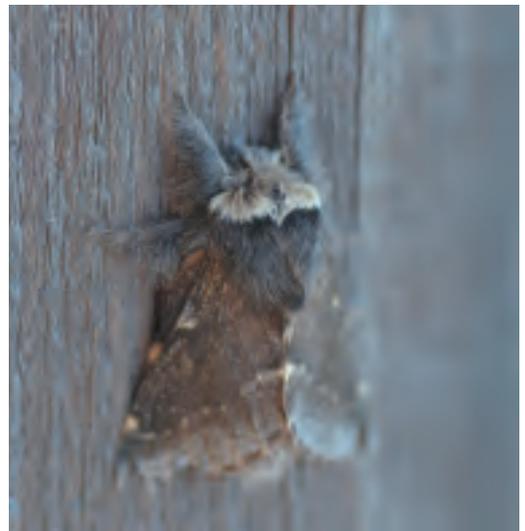
選定理由 ①② 個体数が少なく、環境変化により絶滅の危惧あり。
分布状況 北海道, 本州 (東北地方, 関東地方, 中部地方), 四国, 九州。
形態及び生態 2月下旬～3月に発生し、昼飛性。タデ科, バラ科, マメ科, キク科など広食性で、これらの植物の繁茂する河川敷で記録が多い。翅に黒褐色の縁取りがある。
近似種 特になし。
生息地 本県では 1999 年岩井市 (現坂東市) 菅生沼と 2004 年石下町 (現常総市) 以降記録が途絶えていたが、2011 年に古河市・坂東市・常総市・桜川市で新生息地が判明した。ただしいずれの地でも個体数は少ない。
生存の危機 本県での河川敷環境変化により、絶滅の危惧あり。
特記事項 栃木県では準絶滅危惧 (Cランク), 埼玉県では準絶滅危惧 I 類 (CR+EN)。
執筆者(協力者) 林 恵治・佐藤和明
文献 5), 6), 9)



撮影 佐々木泰弘

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県 2000	●	希少種	● ● ● ●
環境省 2014		対象外	

選定理由 ② 食性は広いが、最近の記録がなく絶滅の危惧あり。
分布状況 北海道, 本州, 四国, 九州。日本固有種。
形態及び生態 11月～12月に発生し、カシワ, ミズナラ, クヌギ, ヤマナラシ, カラマツなどを食す。翅に薄墨を流したような色をしている。
近似種 特になし。
生息地 本県で過去に高萩市での記録あるが、最近の公式記録なし。
生存の危機 本県で絶滅の危惧あり。
特記事項
執筆者(協力者) 林 恵治・佐藤和明
文献 4)



撮影 佐々木泰弘

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県 2000	●	希少種	● ● ● ●
環境省 2014		対象外	

選定理由 ①② 個体数が少ない上に、河川敷や沼地に生えるヤナギに依存しており、環境変化により絶滅の危惧あり。

分布状況 北海道、本州に生息するが、個体数少ない。

形態及び生態 4～5月に発生し、オオヤマザクラ、セイヨウハコヤナギを食す。前翅にL字の白い斑紋が出る。

近似種 特になし。

生息地 本県では、1979年に岩井市（現坂東市）の菅生沼で、その後牛久市で、また2003年に宍塚大池（土浦市）で記録があるが、最近の公式記録なし。

生存の危機 本県で河川敷・沼沢地の環境変化により、絶滅の危惧あり。

特記事項

執筆者(協力者) 林 恵治・佐藤和明

文献 2), 4)



撮影 佐藤和明

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県 2000	●	希少種	● ● ● ●
環境省 2014		対象外	

選定理由 ②③ 湿地環境に依存する種のため、環境変化の影響を受けやすく、湿地環境の指標種として今回新たに追加する。

分布状況 北海道、本州、四国、九州。

形態及び生態 5～8月に発生し、寒冷地では春型年1回、温暖地では春型、夏型の年2回発生。ハンノキ、ヤシャブシを食す。前翅と後翅に1つずつ大きな紋がある。

近似種 オオミズアオに酷似するが、やや小型。触角が淡緑色、後翅の眼状紋がやや大きく円型などで識別。

生息地 本県では近似種のオオミズアオは県内各地に普遍的に見られるが、当種は稀。

生存の危機 本県では個体数が激減している。

特記事項 埼玉県では地域個体群（LP）。

執筆者(協力者) 林 恵治・佐藤和明

文献 7)

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県 2000		対象外	
環境省 2014	●	準絶滅危惧	● ● ● ●

選定理由 ①② 生息地環境変化により個体数が減っているため、今回新たに追加する。

分布状況 北海道、本州、四国、九州、対馬。対馬、屋久島、奄美大島、沖縄島。

形態及び生態 夏から初秋に発生し、クヌギ、コナラ、クリ、カシワ、カシ類、サクラ類と食性は広い。楕円形の繭から天蚕糸（テグス）を生産する。

近似種 特になし。

生息地 本県ではかつては雑木林やクリ林に普通に見られたが、最近雑木林やクリ林の減少により、個体数が減っている。八溝山、筑波山などの山地では継続して生息確認しているが、平地での記録が近年減っている。

生存の危機 生息環境の保全を怠るといつの間にか絶滅の可能性もある。

特記事項 埼玉県では地帯別危惧（RT）。

執筆者(協力者) 林 恵治・佐藤和明

文献 4)



撮影 佐々木泰弘

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県 2000		対象外	
環境省 2014		対象外	

選定理由 ①② 湿地環境に依存する種のため、環境変化の影響受けやすく、湿地環境の指標種として今回新たに追加する。

分布状況 北海道、本州、四国、九州、対馬。

形態及び生態 6月下旬～9月に発生し、ガマ、ミクリを食す。前翅には黒い点が列状に出る。

近似種 特になし。

生息地 本県で過去に高萩市での記録があるが、その後の公式記録なし。

生存の危機 本県での湿地環境変化による絶滅の危惧あり。

特記事項 栃木県では準絶滅危惧（Cランク）。

執筆者(協力者) 林 恵治・佐藤和明

文献 4)



撮影 佐藤和明

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県 2000		対象外	
環境省 2014	● ●	絶滅危惧II類	● ● ● ●

選 定 理 由 ①② 湿地環境に依存する種のため、環境変化の影響受けやすく、湿地環境の指標種として今回新たに追加する。

分 布 状 況 北海道、本州、四国、九州。

形態及び生態 10月に発生し成虫越冬。ハンノキが自生する湿地環境を好む。前翅は褐色だが縁の色が淡い。

近 似 種 特になし。

生 息 地 本県では1981年岩井市(現坂東市)の菅生沼の記録以降、穴塚大池(土浦市)では継続発生。

生存の危機 本県では食樹のハンノキ林の減少により、絶滅の危機あり。

特 記 事 項 栃木県では絶滅危惧Ⅱ類(Bランク)、千葉県では一般保護生物(D)。埼玉県では準絶滅危惧(NT1)。

執筆(協力)者 林 恵治・佐藤和明

文 献 4), 5)



撮影 佐藤和明

茨城県2016 ● 準絶滅危惧 ● ● ● ●

茨城県2000 対象外

環境省2014 ● 準絶滅危惧 ● ● ● ●

選 定 理 由 ② 食草は広く分布しているが、最近の公式記録が少なく、絶滅の危機あり。

分 布 状 況 本州、伊豆諸島、四国、九州、対馬、屋久島、奄美大島、沖縄島、石垣島、西表島。

形態及び生態 4月～10月に発生し、キイチゴ、ニガイチゴを食す。前翅に灰黄色の紋がある。

近 似 種 シロテクチバに似るが、前翅の地色が濃い、腎状紋が灰黄色で識別できる。

生 息 地 本県では1959年豊里町(現つくば市)での記録、2006年穴塚大池(土浦市)の記録があるが、公式記録は少ない。

生存の危機 本県で絶滅の危機あり。

特 記 事 項

執筆(協力)者 林 恵治・佐藤和明

文 献 1), 2), 4)



撮影 佐藤和明

茨城県2016 ● 準絶滅危惧 ● ● ● ●

茨城県2000 ● 希少種 ● ● ● ●

環境省2014 対象外

選定理由 ② 食草は広く分布しているが、最近の公式記録が少なく、絶滅の危惧あり。

分布状況 北海道、本州、四国、九州。

形態及び生態 4～5月と7～9月に発生し、オヒシバを食す。前翅に弓状に湾曲する淡黄色の筋が出る。昼飛性。

近似種 特になし。

生息地 本県では1959年に豊里町（現つくば市）、1980年岩井市（現坂東市）菅生沼の記録の後、2000年に取手市の利根川河川敷の記録があるが、公式記録は少ない。

生存の危機 本県で絶滅の危惧あり。

特記事項

執筆者(協力者) 林 恵治・佐藤和明

文献 4), 8)



撮影 林 恵治

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県 2000	●	希少種	● ● ● ●
環境省 2014		対象外	

選定理由 ② コケ類は広く分布するが、最近の公式記録がなく絶滅の危惧あり。

分布状況 北海道、本州。

形態及び生態 5～8月に年2回発生し、コケ類を食す。前翅の基部半分が黒青色。

近似種 特になし。

生息地 本県では1959年に豊里町（現つくば市）での記録があるが、その後の公式記録なし。

生存の危機 本県で絶滅の危惧あり。

特記事項

執筆者(協力者) 林 恵治・佐藤和明

文献 4)

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県 2000	●	希少種	● ● ● ●
環境省 2014		対象外	

選定理由 ①③ 県内では県北の湿地や小溪流を中心に生息しているものと思われるが、産地は限られている。

分布状況 北海道，本州，九州。国外では極東ロシア，朝鮮半島及び中国に分布する。

形態及び生態 体長5mm程，前翅長6～7mm程の小型のトビケラで，前翅に20～22個の黒縁のある銀白線状の紋があるのが特徴的。生態はよく判っていないが，成虫は6月から8月頃に発生し，灯火に集まる。

近似種 本州，九州に広く分布するヒメセトトビケラ (*Trichosetodes japonicus* Tsuda) に翅の模様がよく似るが，交尾器の形態が異なるので識別できる。

生息地 常陸太田市岡見湿地，八溝山，北茨城市定波などで採集・記録されている。

生存の危機 県北の中山間部における河川改修や林道建設に係わる工事などによる濁水の排出により生息地が破壊されると絶滅する恐れがある。

特記事項

執筆者(協力者) 勝間信之

文 献 4), 8)



撮影 柳田紀行

茨城県2016	●	準絶滅危惧	●	●	●
茨城県2000		対象外			
環境省2014	●	準絶滅危惧	●	●	●

選定理由 ① 県内では平地の河川に広く生息しているものと考えられる。基産地の濁沼川では生息数は多く，現在のところは絶滅が危惧されることはないと考えられるが，河川改修や生活排水の流入などで水質が大きく悪化すると，絶滅の可能性がある。

分布状況 本州(岩手・秋田・茨城)。

形態及び生態 体長5～7mm程，前翅長6～7mm程の小型のトビケラで，前翅に小さな白色の紋があるのが特徴的。詳しい生態は判っていないが，成虫は6月から8月頃に発生し，灯火に集まる。

近似種 主に西日本に分布するウジセトトビケラ *Setodes ujiensis* Akagi に似るが，雄交尾器の形態が全く異なることで容易に識別できる。

生息地 2009年に笠間市南小泉の濁沼川で新種として記載された。その他，久慈川，那珂川及び利根川水系の本流及びその支流の小河川で確認されている。

生存の危機 平地における生活排水や農薬散布及び河川改修に係わる濁水の流出などにより河川の水質が著しく悪化すると，絶滅する恐れがある。

特記事項

執筆者(協力者) 勝間信之

文 献 5), 6)



撮影 勝間信之

茨城県2016	●	準絶滅危惧	●	●	●
茨城県2000		対象外			
環境省2014		対象外			

選定理由 ③ 現在、県内唯一の産地である石岡市上曾峠の湿地でのみ確認されていることから、産地は極めて限られている。

分布状況 本州（茨城・三重・島根）。

形態及び生態 体長6mm程。全体に暗黒褐色。成虫は6～9月頃に発生し、灯火に集まる。生態はよく判っていない。

近似種 同属のキブネミヤマシマトビケラ *Diplectrona kibuneana* Tsuda に体色は似るが、雄交尾器の形態が全く異なることで容易に識別できる。

生息地 石岡市上曾峠の湿地でのみ記録がある。

生存の危機 極めて生息地が限られており、河川改修や林道建設に伴う濁水の流入などの影響で生息地が破壊されると絶滅する恐れがある。

特記事項

執筆者(協力者) 勝間信之

文献 2), 7)

茨城県 2016 情報不足①注目種 ●●●●●

茨城県 2000 対象外

環境省 2014 対象外

選定理由 ③ 県内で本種の生息可能な山間地域の湿地は面積も小さいことから、産地が限られている。

分布状況 本州（栃木、茨城、長野、岐阜）。

形態及び生態 前翅長15mm前後、体色は赤褐色から黄褐色。幼虫の生息地は水の流が一時期に涸れてしまうような湿地である。成虫は9月から10月頃に発生し、灯火に集まる。

近似種 日本産は1属1種であり、交尾器の特徴から他の種類と見間違えることはない。

生息地 常陸太田市岡見湿地でのみ記録がある。

生存の危機 極めて生息地が限られており、河川改修や林道建設に伴う濁水の流入などの影響で、生息地が破壊されると絶滅する恐れがある

特記事項

執筆者(協力者) 勝間信之

文献 3), 8)



撮影 勝間信之

茨城県 2016 情報不足①注目種 ●●●●●

茨城県 2000 対象外

環境省 2014 対象外

選 定 理 由 ③ 県内で本種の生息可能な山間地域の湿地は面積も小さいことから、産地が限られている。

分 布 状 況 本州（茨城）。

形態及び生態 体長4～5mm程。前翅長6.5mm程。体色は淡褐色の小型のトビケラ。雄後翅基部に櫛状の毛塊があることが特徴的。成虫は7月から8月頃に発生し、灯火に集まる。

近 似 種 同属のヌマコヒゲナガトビケラ *A. paludicola* Ito et Kuhara, ミツマタコヒゲナガトビケラ *A. trichotoma* Ito et Kuhara, に似るが、交尾器の形態が全く異なること、雄後翅基部に櫛状の毛塊があることで容易に識別できる。

生 息 地 2013年に高萩市滝の倉湿原で採集された標本を基に新種記載された。その他、常陸太田市岡見湿原、石岡市上曾峠の湿地（未発表）で記録、採集されている。

生存の危機 極めて生息地が限られており、河川改修や林道建設に伴う濁水の流入などの影響で生息地が破壊されると絶滅する恐れがある。

特 記 事 項

執筆者(協力者) 勝間信之

文 献 9), 10)

茨城県2016 情報不足①注目種 ●●●●

茨城県2000 対象外

環境省2014 対象外

選 定 理 由 ① 当時の昆虫研究者、中原和郎により100年前に記録されたが、その後の県内での記録はなく、絶滅した可能性がある。しかし、県北地域にはまだ良好な止水環境が残されており、再発見の可能性もあることから、情報不足種扱いとした。

分 布 状 況 北海道、本州、九州及び朝鮮半島に分布。

形態及び生態 体長15～20mm、翅開長19～25mm程。体色は褐色。比較的大きなトビケラで、前翅の先端に黒いスジがあるのが特徴的である。

近 似 種 同属のエグリトビケラ *Nemotaulius admorsus* (McLachlan) に似るが、前翅後縁がエグリトビケラよりは決れないこと、前翅先端部に黒いスジがあることにより容易に識別できる。

生 息 地 1914年に常陸国金江津（現在の稲敷郡河内町）で記録されたがその後の県内での記録はない。

生存の危機 本種は一般的な昆虫図鑑などではよく掲載されているため、かつては日本全国の平野部に広く普通に生息していたものと思われるが、平地流における水質の悪化により各地で絶滅の危機に瀕している。

特 記 事 項

執筆者(協力者) 勝間信之

文 献 1)

茨城県2016 情報不足②現状不明種 ●●●●

茨城県2000 対象外

環境省2014 対象外



撮影 村上義千代

選 定 理 由 ①② 1970年代の採集記録はあるものの、その当時から個体数は少なく、非常に稀な種である。近年は全国的に減少傾向にある種である。

分 布 状 況 本州、四国、九州。

形態及び生態 体長は16～22mmで、中型のアシナガバチである。体は黒色で褐色の斑紋が多い。前伸腹節の2縦斑と腹部第1背板後縁の帯紋は常に鮮やかな黄色である。

木の葉の裏、細い枝に育房数100以下の小規模な巣を造る。繭の蓋は黄緑色をおびるので他種の巣と区別がつく。平地に生息し、時には人家の軒下、壁にも巣を造る。1980年頃に銚田で行われた古巣の調査では、本種の古巣を回収することができず、当時から他のアシナガバチ類と比べ生息数が少なかった。

近 似 種 黒色の中胸背板に1～2対の黄色く明瞭な縦帯状の斑紋をもつので、近似のコアシナガバチやキボシアシナガバチと区別できる。

生 息 地 個体数が少なく、確かな記録はひたちなか市（水戸射爆場跡地）と潮来市（旧潮来町）の2例しかない。

生存の危機 もともと個体数が少ないうえに、近年の環境の変化が個体数の減少をもたらしている。

特 記 事 項

執筆者(協力者) 久松正樹

文 献 1), 2), 3), 4), 5), 6), 7)



撮影 久松正樹



選 定 理 由 ①②③ わらびき屋根などを好み、集団で営巣する様子が見られた。住宅環境の大きな変化でわらびき屋根を有する家屋がなくなり営巣地が激減し、それに伴い個体数が激減した。

分 布 状 況 北海道、本州、四国、九州；朝鮮半島、中国。

形態及び生態 体長約6～8mmで、体は黒色、腹部第1, 2, 4背板後縁に黄色帯がある。ハラナガハムシドロバチより小型で、腹部第1節は長さよりも幅広く、中央に深い縦溝がある。

麦藁や虫孔などの既存孔に、泥で仕切りを作り営巣する。年1化で春にみられ、麦藁や茅でふいた屋根には集団で営巣することがある。ノミゾウムシ類の幼虫を狩る。

近 似 種 ハムシドロバチ属は日本で11種が知られており、互いに類似するので同定は難しい。ハラナガハムシドロバチよりは小型である。

生 息 地 わらびき屋根や、虫孔などの既存孔を利用した記録が常陸太田市やつくば市で記録されており、都市部を除き生息する。

生存の危機 生息環境の大きな変化は、本種の生存をかなり圧迫していると考えられる。

特 記 事 項

執筆者(協力者) 久松正樹

文 献 3), 8), 9), 10), 11)



撮影 久松正樹



選定理由 ①②③ 本県では記録が少なく、個体数が少ないと考えられる。加えて、住宅環境の大きな変化でわらび屋根を有する家屋がなくなり、好営巣地が激減した。

分布状況 北海道、本州、四国、九州；中国、東シベリア。

形態及び生態 体長約7～10.5mmで、体は黒色、腹部第1, 2, 4背板後縁に黄色帯がある。第1背板は縦長。腹部には光沢がある。メスの単眼後方に一対の小穴がある。中胸背板には2本の縦溝、腹部第1背板中央にも1本の縦溝がある。麦藁や細いヨシ筒などの既存孔に、泥で仕切りを作り営巣する。幼虫の餌としてハムシ類の幼虫を狩る。

近似種 ハムシドロバチ属は、互いに類似するので同定は難しい。第1背板が縦長であるのが特徴である。

生息地 既存孔を利用して営巣するので、県内には広く生息する可能性があるが、常陸大宮市（旧山形町）と行方市（旧北浦村）での記録しかない。

生存の危機 生息環境の大きな変化は、本種の生存をかなり圧迫していると考えられる。

特記事項

執筆者(協力者) 久松正樹

文献 3), 8), 12)



撮影 久松正樹

茨城県 2016	●●●●	絶滅危惧Ⅱ類	●●●●
茨城県 2000	●●●●	危急種	●●●●
環境省 2014		対象外	

選定理由 ①③ 水戸市と、東海村に記録があるが、開発により生息環境は減少している。新たな記録もあるが、いずれも不安定な場所である。

分布状況 北海道、本州、四国、九州。

形態及び生態 体長は12mm内外で体は黒色、光沢に富む。腹部第1, 4背板後縁に黄色帯がある。乾いた砂地に好んで営巣するため、海浜、河川敷などで見られるが、県内では公園や学校の砂場につくられた例もある。ニッポンハナダカバチと同所で見られることが多い。幼虫の餌として、ヨコバイ類やキジラミ類が狩られる。卵は、粘性物質で付着させ積み重ねた約70個の砂粒の塔の上に産み付けられる。

近似種 ハナダカバチモドキ属は中胸側板後上方に溝に囲まれた区画があるので本種と区別がつく。

生息地 乾いた砂質に好んで営巣するため、ニッポンハナダカバチと同所で見られることが多い。県平野部の砂質土壤に生息する。

生存の危機 開発による生息適地の減少が懸念される。

特記事項

執筆者(協力者) 久松正樹

文献 1), 3), 13), 14), 15)



撮影 久松正樹

茨城県 2016	●●●●	絶滅危惧Ⅱ類	●●●●
茨城県 2000	●●●●	危急種	●●●●
環境省 2014		情報不足	●●●●

選 定 理 由 ①③ 生息地のひとつであるひたちなか市から東海村にかけての砂丘地帯は、大規模の港湾開発が進み、確実に生息地の減少が見られる。新たな記録も増えているが、いずれも不安定な場所で、恒常的に生息確認ができる場所は、坂東市大崎地内のみである。

分 布 状 況 北海道、本州、四国、九州；朝鮮半島、台湾、中国。

形態及び生態 体長 20～23mmで、体は黒色、黄白色の斑紋を有する。上唇が非常に長く、この種名がつけられた。

乾いた砂地に好んで営巣するため、海浜、河川敷などで見られることが多いが、県内では公園や学校の砂場につくられた例が多い。成虫は深く坑道を掘り幼虫室を設け、最初に狩った獲物に卵を産み付ける。その後、幼虫の成長に合わせて獲物を随時運び込む。幼虫の餌は、アブ類、ニクバ工類、キンバ工類、ハナアブ類、サシバ工類、コウカアブ類などハ工目昆虫が知られている。

近 似 種 体型や大きさが一見してクロスズメバチに似るが、本種は黄白色の斑紋部が腹部に幅広く広がり、区別は容易である。

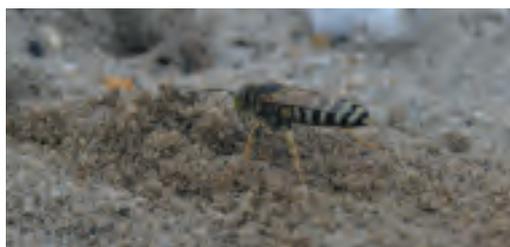
生 息 地 ひたちなか市（水戸射爆場跡地）や東海村でしか記録がなかった。近年、県南西部でも記録されており、県平野部の砂質土壌に生息する。

生存の危機 開発による生息地の減少が懸念される。

特 記 事 項

執筆者(協力者) 久松正樹

文 献 1), 3), 13), 14), 15), 16), 17)



撮影 佐々木泰弘



撮影 久松正樹

茨城県 2016	● ● ●	絶滅危惧Ⅱ類	● ● ●
茨城県 2000	● ● ●	危急種	● ● ●
環境省 2014	● ● ●	絶滅危惧Ⅱ類	● ● ●

選 定 理 由 ①③ 本州各地に分布するが、密度にはかなりのムラがあり、関東地方では局所的にしか記録されていない。県内で安定的に見られるのは小貝川のみで、周辺環境の保全が望まれる。

分 布 状 況 本州、四国、朝鮮半島、中国～ヨーロッパ

形態及び生態 体長 14～18mm。日本産では唯一のモンハナバチ類で、体は黒色で頑丈である。雌雄とも最終節を除く各腹部背板の両側に黄色い横長の明瞭な斑紋があり、他のハチと見誤ることはない。

8～9月に出現し、雌はヨモギなどの綿毛を集めて竹筒、建物の隙間などに巣をつくる。常総市の小貝川土手での記録では、ニガクサ、ムラサキツメクサ、ツルフジバカマ、クサフジへの訪花を確認した。

近 似 種 類似種はなく、他種との区別は容易である。

生 息 地 茨城県ではつくば市と常総市の小貝川で記録があるが、前地は研究学園駅の開発で、周囲の環境が大きく変容した。

生存の危機 生息地のひとつである小貝川の河川敷の一角は、災害対策としての河川改修が行われる可能性が否定できない。総合的な視野の保全が必要である。

特 記 事 項

執筆者(協力者) 久松正樹

文 献 18), 19), 20)



撮影 久松正樹

茨城県 2016	● ● ●	絶滅危惧Ⅱ類	● ● ●
茨城県 2000		対象外	
環境省 2014		対象外	

選定理由 ①③ 準海浜性種として、海浜性植物を餌資源として依存する傾向が強い種である。県内の海岸や湖岸は開発により大きな環境変化が生じており、安定した生育地は減少しつつある。

分布状況 本州、四国、九州；旧北区。

形態及び生態 体長 14～16mm。体は黒色で、大顎基部、上脣、頭盾の上字紋、頭盾上板の三角紋は黄色。腹部第 1～4 背板後端の白色毛は幅広くて顕著である。

7～9 月に出現して、阿字ヶ浦海岸では、ハマゴウに訪花する記録がある極めてまれな種である。準海浜性種で、海浜性植物等に比較的依存している種である。

近似種 腹部第 1～4 背板後端の白毛帯は完全にそろい、類似のスジソフトハナバチより幅広い。

生息地 ひたちなか市の阿字ヶ浦海岸で記録されているが個体数はわずかである。

生存の危機 海岸、湖岸の消波堤など人工物の建設による生息環境の大幅な変化が懸念される。

特記事項

執筆者(協力者) 久松正樹

文献 3), 19), 21), 22)



撮影 久松正樹

茨城県 2016	● ● ●	絶滅危惧Ⅱ類	● ● ●
茨城県 2000		対象外	
環境省 2014		対象外	

選定理由 ③ 北方系の種類で県内の生息地は阿武隈山地の数力所のみである。

分布状況 北海道南西部、本州中部以北；シベリア、中国、朝鮮半島、台湾。

形態及び生態 体長 4.5～7mm。体色は頭部・胸部・腹柄節・脚は黄赤褐色で、頭部・胸部・脚の上面はやや暗色。腹部は黒色だが、基部は少し赤みがかかる。森林の縁などに落ち葉を集めて蟻塚を作る。働きアリは獲物や天敵に対してかみついた跡に蟻酸を噴射する習性があるので注意が必要である。8 月に結婚飛行が行われ新女王は巣を創設する際に、同属の種の巣に侵入し一時的な社会寄生を行うものと考えられている。

近似種 アカヤマアリやツノアカヤマアリに似るが、頭部の一部の形態が異なるので区別できる。

生息地 本県では阿武隈山地の北茨城市花園、和尚山、常陸太田市岡見から生息記録がある。花園では比較的標高の低い約 400m の所でも記録がある。

生存の危機 森林の伐採などによって生息地の環境が不安定になっている。

特記事項

執筆者(協力者) 井上尚武

文献 13), 43), 44)



撮影 井上尚武

茨城県 2016	● ● ●	絶滅危惧Ⅱ類	● ● ●
茨城県 2000	● ● ●	希少種	● ● ●
環境省 2014	● ● ●	絶滅危惧Ⅱ類	● ● ●

選定理由 ①③ 本種は他のアリに一時的社会寄生するため生息コロニーが少なく、生息地である雑木林が減少しつつある。さらに巣をつくるための大きい樹木も減少している。

分布状況 本州（東北地方以南）、四国、九州、屋久島；台湾、朝鮮半島、中国

形態及び生態 体長 7～8mm。体色は頭部・脚・腹部は黒色、胸部、腹柄節は赤褐色。胸部背面は平らで前胸・中胸・前伸腹節・腹柄節に刺状突起を持つ。クロオオアリとムネアカオオアリの巣に一時的社会寄生を行う。立木の根もと付近の空洞の中に巣をつくる。結婚飛行は9～11月で、単独で越冬した雌が翌春寄主の巣へ侵入すると考えられている。

近似種 近似種はいない。

生息地 高萩市、ひたちなか市、城里町、水戸市、笠間市の6カ所から生息の記録があるが、ひたちなか市の生息地は都市開発により絶滅した。

生存の危機 市街地付近では都市開発により雑木林の存続が困難になっている。

特記事項

執筆(協力)者 井上尚武

文献 13), 44)



撮影 荻沼正和

茨城県 2016	●●●●	絶滅危惧Ⅱ類	●●●●
茨城県 2000		対象外	
環境省 2014	●●●●	絶滅危惧Ⅱ類	●●●●

選定理由 ①③ かつては、普通に見られた種と考えられるが、宿主であるシロスジカミキリの好むクリ林の放棄が進み、生息環境は悪化している。

分布状況 本州、四国、九州；朝鮮半島、中国、台湾、タイ、インド。

形態及び生態 体長は 15～24mm。産卵管が極めて長く、体の 6.5～9 倍に達する。体全体が黄赤褐色で、腹部は暗褐色を帯びることがある。翅は赤黄色を帯び、外縁は暗褐色、前翅に 3 個、後翅に 1 個の黒紋がある。シロスジカミキリの幼虫に寄生する。茨城県では宿主であるシロスジカミキリが生息する平地から丘陵地の雑木林やクリ畑で記録されている。

近似種 ヒメウマノオバチは、産卵管が短いこと、後脚の付節のみ黒色であることで区別される。

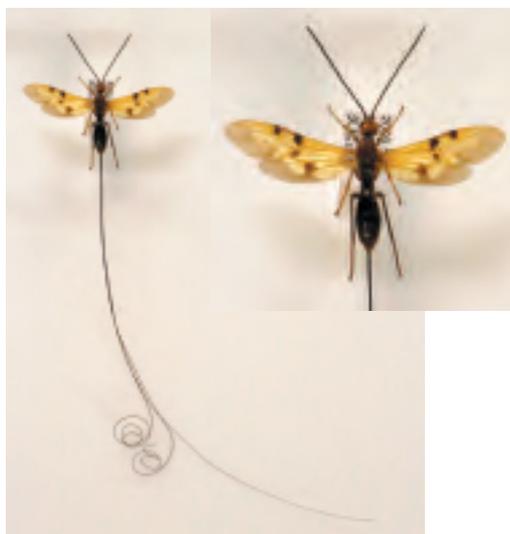
生息地 筑波山周辺から城里町にかけての、平地から丘陵地の雑木林やクリ畑で多く記録されている。

生存の危機 雑木林やクリ林の維持が困難になりつつある現在、生息環境は悪化しているといえよう。

特記事項

執筆(協力)者 久松正樹

文献 3), 24), 25), 26), 27), 28), 29), 30)



撮影 久松正樹

茨城県 2016	●●●●	準絶滅危惧	●●●●
茨城県 2000		対象外	
環境省 2014	●●●●	準絶滅危惧	●●●●

選定理由 ① 大型のアシナガバチで目立つため、人的圧力を受けやすく生息数を減らしている。

分布状況 北海道、本州、四国、九州；朝鮮半島。

形態及び生態 体長 20～26mmで、大型のアシナガバチである。体は黒色で鮮黄色の斑紋が目立つ。名前の通り脚の黄斑が顕著である。前伸腹節には、顕著な 2 縦斑がある。

樹木の枝や人家の軒先に営巣する。セグロアシナガバチは平地に多いのに対して、本種は低山地に多い傾向がある。働きバチ数は最大で約 50 個体である。日本産アシナガバチ類のなかでは攻撃性および毒性が強い。

近似種 大型で類似のセグロアシナガバチは、前伸腹節に 2 黄斑を欠き、本種との区別がつく。

生息地 樹木の枝や人家の軒先に営巣するため、都市部を除く県内の広い範囲に生息することが可能である。

生存の危機 他のアシナガバチ類と比べ生息数が低いことに加え、大型で活動場所が人と重なることが多いため、駆除の対象となる。近年、平地での目撃回数は激減してきた。

特記事項

執筆者(協力者) 久松正樹

文献 4), 5), 6), 7)



オス, 撮影 久松正樹

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	●	●	●
茨城県 2000	●	希少種	●	●	●
環境省 2014		対象外			

選定理由 ①③ 海浜性種で個体数が非常に少ない。高次消費者のため、海浜の環境に大きく依存している。本種の唯一の記録地である阿字ヶ浦海岸は港湾の整備が進められており、保全対策が必要である。

分布状況 北海道、本州、九州

形態及び生態 体長 4～6mm。体は黒色で、雌の腹部第 1～2 背板は赤褐色で、第 3 背板も前部が暗褐色を帯びることが多い。雄の触角第 3 鞭節以降に発達した微毛帯がある。

4～11 月に出現し、カワラサイコ、カワラケツメイなどに訪花することが知られている。海浜の環境に大きく依存する海浜性種である。ヤドリコハナバチ属のハチは、他のコハナバチ属などに労働寄生する。

近似種 小型で似ている種も多く、同定は難しい。

生息地 ひたちなか市の阿字ヶ浦砂丘で記録された。記録地はひたち海浜公園内で、ハマゴウ等の海浜植物が咲く非開園エリアである。

生存の危機 生息地が海岸で消波堤など人工物の建設による環境変化は生息に大きなダメージを与える。

特記事項

執筆者(協力者) 久松正樹

文献 19), 21), 22)



撮影 久松正樹

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	●	●	●
茨城県 2000		対象外			
環境省 2014		対象外			

選定理由 ①③ 記録がある地域は限られ、現在まとまった数が確認されているのは菅生沼畔のみである。

分布状況 北海道、本州、九州；極東ロシア、中国、朝鮮半島。

形態及び生態 体長は雌 13mm、雄 12mm前後でミツバチよりわずかに大きいハナバチである。全身に体毛が多く、雌の後脚の腿節、脛節、基付節の刷毛が顕著なこと、雌の腹部第2～4背板（雄では2～5背板）の後縁に発達した白色毛帯がある。

8～11月に出現し、砂地に穴を掘り花粉を運んで幼虫を育てる。花粉塊の形が大変ユニークで、下面にかなえ状の三本脚がついている。

近似種 後脚の基付節にも脛節と同様の刷毛を有するので、ヒメハナバチとは区別がつく。

生息地 成虫はアキノノグシへの訪花が顕著で、営巣には裸地もしくは粗く芝草が茂る半裸地を利用する。県内では、八溝山と菅生沼畔で記録されているのみである。

生存の危機 生息地が限られており、営巣地が利用開発される危険があり、特別な保護が必要である。

特記事項

執筆者(協力者) 久松正樹

文献 2), 3), 19), 31), 32), 33)



撮影 久松正樹

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県 2000		対象外	
環境省 2014		対象外	

選定理由 ①③ 海浜植物に依存するキヌゲハキリバチに寄生する。高次消費者の本種の生息は、海浜の環境に大きく依存している。本種の唯一の記録地である阿字ヶ浦海岸は、港湾の整備が進められており、保全対策が必要である。

分布状況 本州、九州；台湾。

形態及び生態 体長8～10mmで、日本産で最も小型のトガリハナバチ類である。体は黒色で、触角と脚はやや褐色を帯びる。雌雄とも中胸盾板に鱗状毛による2対の明瞭な紋があり、他種と区別がつく。

キヌゲハキリバチに労働寄生する。海浜の環境に大きく依存する海浜性種である。

近似種 日本産の他種には、中胸盾板に鱗状毛による2対の紋がある種はなく、区別は容易である。

生息地 ひたちなか市の阿字ヶ浦砂丘で記録された。記録地はひたち海浜公園内で、ハマゴウ等の海浜植物が咲く非開園エリアである。

生存の危機 生息地を海岸に依存しており、消波堤など人工物の建設による環境変化は生息に大きなダメージを与える。

特記事項

執筆者(協力者) 久松正樹

文献 19), 21), 22)



撮影 久松正樹

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県 2000		対象外	
環境省 2014		対象外	

選定理由 ① 記録のある八溝山と筑波山のいずれの地域においても、採集個体数が非常に少なく、稀な種といえる。

分布状況 北海道、本州、四国、九州。

形態及び生態 体長は、女王が19～23mm、働きバチが8～19mm、雄バチが13～19mmである。女王と働きバチの体は黒色で、胸部背面上部に灰色に見える箇所がある。腹部背面の先端はオレンジ色、その上部に淡色の帯がある。雄は淡黄褐色で、胸部と腹部に黒い帯がある。集団を作り、その中に女王と働きバチの階層があり共同生活をする社会性昆虫である。多くの個体を維持するために、豊富な餌資源を必要とする。

近似種 同所に生息するコマルハナバチ、クロマルハナバチの雌の胸部は黒色で区別は容易である。

生息地 筑波山以北の山間部に生息し、平野部での記録はない。

生存の危機 個体数を維持するため豊富な餌資源を必要とする。環境の改変に敏感である。

特記事項

執筆者(協力者) 久松正樹

文献 10), 28), 31), 34), 35), 36)



撮影 久松正樹

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県 2000	●	希少種	● ● ● ●
環境省 2014		対象外	

選定理由 ①③ 分布が局地的で個体数が少ない種である。労働寄生するので、宿主の個体数に大きく左右されて、生育は不安定である。また、茨城県から栃木県が分布のほぼ北限にあたる。

分布状況 本州、四国、九州。国外では極東ロシア、中国、朝鮮半島、台湾、東南アジアにも分布する。

形態及び生態 体長は10～14mm。頭胸部の体色は黒色で、腹部背板は虹色の光沢を帯びる。鮮やかな青色を呈する部分は、羽状毛による。7～10月に出現し、スジボソフトハナバチなど *Amegilla* 属に労働寄生すると推定されている。県内各地で散発的にしか採集されていなかったが、美浦村の陸平遺跡でまとめて採集された。陸平遺跡では、メハジキへの訪花が顕著であった。

近似種 ウスルリモンハナバチに類似する。ウスルリモンハナバチは、腹部毛帯がナミルリモンハナバチより幅広く、県内では未記録である。

生息地 高萩市、那珂市、土浦市、美浦村での記録があるが、採集地は局地的である。

生存の危機 開発による宿主の個体数減少が懸念される。

特記事項

執筆者(協力者) 久松正樹

文献 2), 3), 15), 19), 23), 28), 37)



撮影 久松正樹

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県 2000		対象外	
環境省 2014		対象外	

選定理由 ①③ 他のアリに一時的社会寄生するためか、生息コロニー数が少ない。さらに適度に管理された雑木林が減少している。

分布状況 北海道, 本州(中部以北)。国外では朝鮮半島にも分布する。

形態及び生態 体長3～3.5mm。体色は漆黒色。腹柄節は側方から見て逆U字型。女王(雌)アリの触角柄節は著しく平たいが働きアリでも他種と比較して明らかに扁平である。おもに山地帯から亜高山帯にかけて分布し、キイロケアリに一時的社会寄生する。この仲間はサンショウのような強い臭気を持ち、働きアリは長い行列を作る性質がある。

近似種 日本に産するクロクサアリの仲間の中で、本種は触角が扁平なので区別できる。

生息地 本県からは高萩市, 常陸太田市, 稲敷市, 取手市から知られている。本県では希に平野部にも生息地が見つかる。

生存の危機 平野部の生息地では開発などによる雑木林の減少が生息地を危機にさらしている。

特記事項 和名および学名は新称名によった。

執筆者(協力者) 井上尚武

文献 13), 43), 44)



撮影 井上尚武



選定理由 ③ 大型のギングチバチで目立つにもかかわらず、記録された場所は筑波山麓の1か所のみである。全国的に個体数も少なく、さらに調査を進める必要がある。

分布状況 本州; インド, 台湾。

形態及び生態 体長は18mmで、日本産ギングチバチの中でも大型である。体は黒色で腹部腹節の後縁や脚は褐色である。

朽ち木の虫孔に営巣し、幼虫の餌にヤガ類の成虫を狩り入れる。茨城県では、つくば市のふれあいの里で、イヌザンショウに訪花した個体が1個体されたのみである。

近似種 一見キボシアシナガバチに似るが、ギングチバチの特徴である頭盾の銀毛で区別は容易である。

生息地 ヤガ類を採餌することから、県内の各地で記録される可能性は高い。県内での唯一の記録地は筑波山麓である。

生存の危機 植林が進んだり、立ち枯れの木を放置することが少なくなったり、営巣場所が減少している。

特記事項

執筆者(協力者) 久松正樹

文献 33), 38), 39)



撮影 久松正樹



選定理由 ③ 近年の記録は全くない。高次消費者で、環境の影響を大きく受けやすい。本種の餌となるクモやクモの餌となる小昆虫類が生息できる砂丘地が減少している。

分布状況 本州、四国、九州；朝鮮半島、台湾。

形態及び生態 体長 13mm内外。体は黒色で青色の微毛からなる明瞭な紋があり、腹部背板の各節の斑は特に顕著である。海浜に生息しているが、海浜近くの林縁部などでも活動している。海浜に住む徘徊性イソコモリグモを狩る。

近似種 体長 13mm内外。体は黒色で青色の微毛からなる明瞭な紋があり、腹部背板の各節の斑は特に顕著である。

生息地 東海村とひたちなか市で採集された記録が残っている。

生存の危機 記録された場所は、港湾等の大規模開発で、環境が大きく変わり、生存が危惧される。

特記事項

執筆者(協力者) 久松正樹

文献 1), 3), 40)



撮影 久松正樹

茨城県 2016 情報不足①注目種 ●●●●●

茨城県 2000 対象外

環境省 2014 情報不足 ●●●●●

選定理由 ③ 標本で確認できる生息地は、美浦村の陸平遺跡の 1 個体のみであった。県内に広く分布すると思われるが密度は低い。

分布状況 本州、九州；中国、台湾。

形態及び生態 体長は 16～20mm。体は黒色で触角と脚は赤褐色を帯びる。雌雄とも胸部の毛は黄褐色毛で、黒毛を交えず、腹部第 1 背板には密な黄褐色の毛があり、第 2 背板後縁には同色の明瞭な毛帯がある。7～9月にかけて出現し、クズ、ハギ、ミソハギなどに訪花する。

近似種 オオハキリバチに似るが、本種は腹部第 2 背板後縁に顕著な毛帯がある。

生息地 標本で確認できる生息地は、美浦村の陸平遺跡の 1 個体のみであった。クズに好んで訪花するため、県内に広く分布すると思われる。

生存の危機 従来より珍しい種で記録は少ない。クズは県内に広く分布するのに、個体数が少ない理由は不明である。

特記事項

執筆者(協力者) 久松正樹

文献 19), 23)



撮影 久松正樹

茨城県 2016 情報不足①注目種 ●●●●●

茨城県 2000 対象外

環境省 2014 情報不足 ●●●●●

選定理由 ③⑤ もともと個体数の多い種ではなく、かつコマルハナバチと混同されることも多く調査は進んでいなかった。在来種であるがトマトの花粉媒介昆虫として利用され始め、国内外来種として定着の問題もある。

分布状況 本州, 四国, 九州; 中国, 朝鮮半島。

形態及び生態 体長は、女王が20～23mm, 働きバチが11～19mm, 雄が14～19mmである。女王と働きバチは全身が黒色で、腹部背面先端はオレンジ色である。毛は短い、刈りそろえたように整っていて、ピロウド状に見える。雄は黄色で、胸部と腹部に黒い帯があり、顔の前方に特徴的な黄色い毛がある。
類似のコマルハナバチは夏前に巣が解散してしまい姿を消すが、本種は4～10月に見ることが出来る。

近似種 雌のコマルハナバチと体色が似るが、後脚の付節が大きく湾曲する点異なる。

生息地 オオマルハナバチより低山地に生息するといわれ、常陸太田市とひたちなか市で記録されている。

生存の危機 生息地が限られ、個体を維持するには豊富な餌資源を必要とするため、環境の改変に敏感である。

特記事項

執筆者(協力者) 久松正樹

文献 11), 19), 22), 36)



撮影 久松正樹

茨城県2016 情報不足①注目種 ●●●●●

茨城県2000 対象外

環境省2014 準絶滅危惧 ●●●●●

選定理由 ③ 近年の記録は全くない。高次消費者で、環境変化の影響を受けやすい。記録された当該地区は、鹿島臨海工業地帯の開発により急激に環境が変化した。生存が危惧される。

分布状況 本州, 四国, 九州; 台湾。

形態及び生態 体長19～28mm。雌は黒色で、顔面と頭盾全体が鮮黄色で前胸背肩部が褐色、各脚の腿節中央より先、触角の一部が黄褐色である。雄は顔面両側下部と触角の一部のみが黄色である。
朽木中に巣をつくり、アシダカグモ、コアシダカグモ等を狩って房室に蓄え幼虫の餌とする。

近似種 最も大型のクモバチの一種で、他のクモバチとの区別容易。

生息地 特別地域自然財分布調査報告書によると、鹿行地区での記録が残っている。

生存の危機 大規模開発で、記録当時の環境を残す箇所はわずかとなった。

特記事項

執筆者(協力者) 久松正樹

文献 3), 12), 41), 42)



撮影 久松正樹

茨城県2016 情報不足②現状不明種 ●●●●●

茨城県2000 対象外

環境省2014 対象外

選 定 理 由 ①③ 本種は、茨城県のトタテグモ類の中では、もっとも広範にみられ、また個体数も多いが、概観すると、分布は局地的で、平地や市街化された地域では絶滅あるいは減少し、一部の社寺林や屋敷林にわずかに残っている程度になる。

分 布 状 況 本州（西限は兵庫県）。日本固有種。

形態及び生態 体長雌 12～15mm, 雄 10～13mm。頭胸部および歩脚は淡褐色ないし黒褐色、腹部は淡褐色ないし黒褐色。トタテグモ下目に属する原始的なクモで、8眼、3爪を有し、書肺は2対。上顎は強大で、馬鋏を有する。下顎の前側面は突出しない。後内疣の基部は広く離れる。平地から低山地にかけて、森林の林床や林縁の崖地に生息し、地中に15～20cmの長さの管状の穴を掘り、入り口に両開きの扉をつける。

近 似 種 エソトタテグモ（北海道に分布し、本種と生息域は重ならない）。

生 息 地 平地から低山地にかけて、良好な森林に生息する。久慈郡（八溝山、大子町）、桜川市（岩瀬町）、常陸太田市（里美）、日立市（諏訪町）、高萩市（富岡、上君田）、北茨城市（関本町、関南町）、筑波山など各地に生息する。

生存の危機 良好な森林環境を必要とし、大規模開発や森林公園の整備などの際には、地面の掘り起こしをしない、コンクリートで固めないなどの配慮が必要である。

特 記 事 項

執筆者(協力者) 小野展嗣

文 献 2), 4), 5), 9), 10), 11), 12), 13)



撮影 小野展嗣

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県 2000		対象外	
環境省 2014	●	準絶滅危惧	● ● ● ●

選 定 理 由 ①③ 開発、公園の改修などにより生息環境に影響があるほか、ムカデなどによる捕食圧も懸念される。

分 布 状 況 本州、四国、九州。日本固有種。

形態及び生態 体長雌 12～20mm, 雄 10～15mm。頭胸部は黒褐色で、歩脚はやや赤みを帯び、腹部は紫褐色、褐色あるいは黒褐色。トタテグモ下目に属する原始的なクモで、8眼、3爪を有し、書肺は2対。強大な上顎に馬鋏を有し、下顎に多数の歯状突起を備える。前内疣の基部はやや接近する。地中に比較的短い管状住居を作り、入り口に扉をつける。

近 似 種 オキナワトタテグモ、ミヤコジマトタテグモ（琉球諸島に分布）。

生 息 地 平地～山地の森林環境に生息し、市街地でも社寺林や公園、人家の庭などでみられる。場所により人為的な移入の可能性も考慮する必要がある。茨城県では記録が少なく、水戸市、下妻市、つくば市、土浦市、常陸太田市など北東部や南部にいくつかの生息地が知られている。

生存の危機 開発、公園の改修などにより生息環境に影響があるので、石垣や土手を崩したり、コンクリートで固めたりする際には注意が必要である。また、生態系の変化により増えたムカデなどの天敵による捕食圧も懸念される。

特 記 事 項 冬虫夏草のクモタケによる高率の寄生が見られることがあるが、それが個体数や生息状況にどの程度影響を与えているかは解明されていない。

執筆者(協力者) 小野展嗣

文 献 2), 3), 4), 5), 9), 14), 15)



撮影 小野展嗣

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県 2000	●	希少種	● ● ● ●
環境省 2014	●	準絶滅危惧	● ● ● ●

選定理由 ①③ 県内各地で見ついているが、それぞれの生息地の個体数はきわめて少なく、樹木の伐採の影響がきわめて大きいと考えられる。

分布状況 本州、四国、九州、南西諸島。日本固有種。

形態及び生態 体長雌雄 8～12mm。頭胸部および歩脚は黒褐色、腹部は暗紫褐色で斑紋を欠く。トタテグモ下目に属する原始的なクモで、8眼、3爪を有し、書肺は2対。上顎は強大で馬鋏を有し、下顎および下唇に多数の歯状突起を備える。第3歩脚基部に無毛の窪みがあるのが特徴。前内疣の基部はやや離れ後疣は短い。樹木の幹の上や苔むした岩の上などに長さ2～3cmの袋状の住居を作り、入り口に扉をつける。

近似種 国内に近似種はいない。

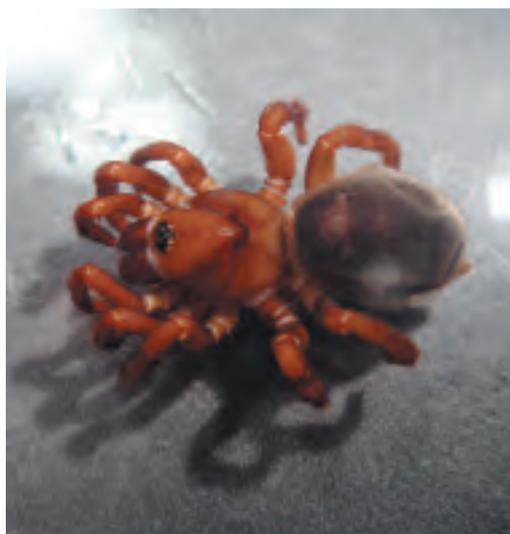
生息地 原生林、二次林を問わず広い範囲の森林環境に生息し、市街地でもみられることがある。県内各地に分布しているが記録されているのは常陸太田市（真弓山）、大子町および水戸市（渡里）。

生存の危機 大規模開発や公園の改修、とくに古木の伐採による影響が大きい。また樹皮状の地位類やコケ類をむやみにはがさないなどの注意が必要である。

特記事項

執筆者(協力者) 小野展嗣

文献 2), 3), 4), 5), 9), 10)



茨城県 2016	●	準絶滅危惧	●	●	●
茨城県 2000	●	希少種	●	●	●
環境省 2014	●	準絶滅危惧	●	●	●

選定理由 ①②③ 全国で、本種の生息に適した良好な草原環境が減少している。

分布状況 北海道、本州、四国に分布し、韓国、ロシア極東地域からも知られる。

形態及び生態 体長雌雄 4～6mm。8眼、3爪。サラグモとしては比較的大型で、雄は雌より細い。頭胸部は黄褐色で、1対の暗色の縦帯がある。腹部は灰色の地に白点が散在し、後方に数対の黒褐色の点斑がある。草地や藪に30～40cmの大型のシート網を張り、クモは網の下側に背面を下にしてとまる。

近似種 国内に近似種はいない。

生息地 里山あるいは低山地の比較的丈の長い良好な草原環境に生息する。茨城県では高萩市、常陸太田市（西金砂山、真弓山）で記録がある。

生存の危機 全国的に発見される機会が減少している。農業形態の変化により、放置された里山では、次第に暗い林が発達するので、開放的な草原の保全に努めたい。また田畑周辺のいわゆる藪環境では薬剤の散布を控えたい。

特記事項

執筆者(協力者) 小野展嗣

文献 2), 4), 5), 10)



茨城県 2016	●	準絶滅危惧	●	●	●
茨城県 2000		対象外			
環境省 2014		対象外			

選定理由 ③ 大久保の風穴における環境の悪化がただちに種そのものの絶滅に結びつくものではないが、本類の場合は基準産地から離れた個体群の保護は系統地理学上重要である。

分布状況 本州（茨城県、福島県）。日本固有種。

形態及び生態 体長雌雄 4～5mm。頭胸部および歩脚は淡黄褐色または乳白色。腹部は淡黄褐色で数対の黒褐色の点斑がある。8眼、3爪。外雌器の垂体は長く先端は丸い。雄触肢の小杯葉は大きく、特異な突起を備える。本属のクモはどれも外観がよく似ており、雌雄の生殖器を比較しないと同定は難しいが、分布域が狭いものも多く、確認された場所でおおよその見当がつく。洞窟の中の岩の隙間などに不規則網を張る。

近似種 クリコホラヒメグモ（山形県）、トネホラヒメグモ（群馬県）。

生息地 日立市の大久保の風穴 1カ所のみから記録がある。基準産地は福島県田村市滝根町の鬼穴で、そのほか入水洞およびあぶくま洞に生息する。

生存の危機 洞窟性で、鍾乳洞の観光利用や開発による環境変化は、ただちに絶滅に結びつく。

特記事項

執筆者(協力者) 小野展嗣

文献 5), 16)



撮影 小野展嗣

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県 2000		対象外	
環境省 2014		対象外	

選定理由 ①②③ 昭和 30 年代までは各地で普通にみられたが、その後ある時期に急激に生息地および個体数が減少した。良好な草地環境が開発によって失われたことと、継続的な農薬散布により餌昆虫の量および多様性が減少したことが原因と考えられている。

分布状況 本州、四国、九州、南西諸島。韓国、台湾、中国。

形態及び生態 体長雌 20～30mm、雄 5～7mm。8眼、3爪。雌の頭胸部の地は黒褐色だが、銀白色の毛が密生し、全体に灰色に見える。腹部背面には黄色と黒色の太い横縞模様がある。雄は、ひじょうに小さく、全体に黄褐色で別種のように見える。腹部の色彩や独特の斑紋から雌の識別は容易である。草原、林縁などに大きい円網を張る。

近似種 チュウガタコガネグモ。

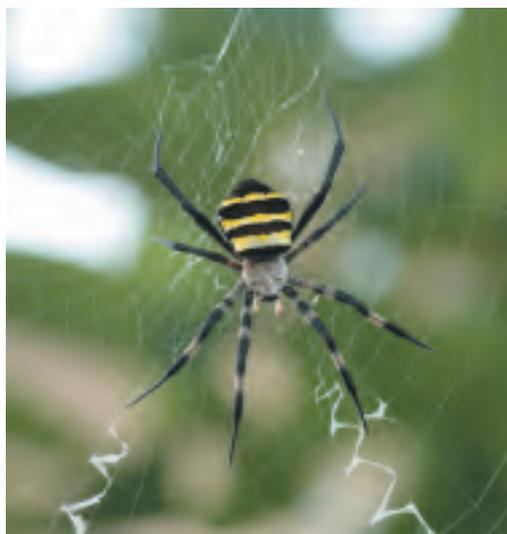
生息地 平地～低山地の開けた草原、田畑の周囲、河川敷などに生息する。北茨城市、高萩市、常陸太田市（西金砂山）、那珂市、日立市（石尊山）、水戸市、つくば市、土浦市（穴塚）、潮来市の数カ所の記録があるが、個体数は少ない。

生存の危機 本種の生息に適したいわゆる藪と称される比較的丈の長い草本による良好な草原環境が衰退したため、田畑の周囲や市街地の公園などで散見されるだけになってしまった。

特記事項 繁殖力が大きいので、餌になる大型の飛翔昆虫の保護を含めた保全策によっては回復する可能性がある。

執筆者(協力者) 小野展嗣（井上尚武）

文献 2), 4), 5), 10), 17), 18), 19), 27)



撮影 井上尚武

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県 2000		対象外	
環境省 2014		対象外	

選定理由 ①②③ 大型で、本来は湿度の保たれた良好な樹林に生息し、森林環境の指標となるクモである。市街化や開発による乾燥化に影響される。

分布状況 本州、四国、九州。日本固有種。

形態及び生態 体長雌 18～25mm、雄 15～20mm。頭胸部、歩脚、腹部ともに暗褐色ないし黒褐色の地に黒色や白色の斑紋を有する。8眼、2爪。森林内の地表や樹上に生活し、昼間は物陰に隠れ夜間に獲物を狩る。周囲に森林のある建造物内に侵入することもある。同じ科の大型の別種アシダカグモとの区別は一般には容易ではなく、誤認される場合もある。同定には雌雄の生殖器を比較する必要がある。

近似種 ヒメアシダカグモ、オガタヒメアシダカグモ（いずれも茨城県には産しない）。

生息地 平地～低山地の森林環境に生息する。茨城県での記録は比較的少なく、八溝山、高萩市、日立市（神峰山、石尊山）、常陸大宮市（尺丈山）、常陸太田市（下高倉町）、土浦市（穴塚）がある。

生存の危機 市街化や開発による乾燥化と餌環境の変化によって、全国的に絶滅の危険が増大している。

特記事項

執筆者(協力者) 小野展嗣（井上尚武）

文献 2), 4), 5), 10), 17), 18), 27)



撮影 井上尚武

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県 2000		対象外	
環境省 2014		対象外	

選定理由 ①③ 良好な樹林に生息し、市街化や開発に強く影響される。

分布状況 北海道、本州、四国、九州。日本固有種。

形態及び生態 体長雌雄 6～9mm。頭胸部および歩脚は褐色ないし濃い黄褐色で、両側はやや暗色である。腹部はベイジュないし淡黄褐色で、褐色の心臓斑および不明瞭な暗色の斑紋がある。8眼、2爪。森林の樹上や下草上に生活し、狩猟性で網を張らないが、葉に袋状の住居を作る。イツツグモとの区別は一般には難しい。

近似種 国内に近似種はいない。

生息地 平地～低山地の森林に生息し、樹木の幹や葉の上、林縁の下草の上などでみられる。茨城県の記録は八溝山、土岳山（高萩市）、尺丈山（常陸大宮市）、久慈郡太子町の数力所があるのみである。

生存の危機 生息地が少なく、個体数も多くないので、大規模な山林開発や伐採の際には十分な注意を払う必要がある。

特記事項

執筆者(協力者) 小野展嗣

文献 2), 4), 5), 10), 20)



撮影 小野展嗣

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県 2000		対象外	
環境省 2014		対象外	

3) 文献一覧

カゲロウ目

- 1) Ishiwata, S. 1996. A study of the genus *Ephoron* from Japan (Ephemeroptera, Polymitarcyidae). *Canadian Entomologist*, 128: 551-572.
- 2) 東城幸治・関根一希. 2011. アカツキシロカゲロウ *Ephoron eophilum* の羽化時季と羽化時間に関する調査研究 (カゲロウ目: シロイロカゲロウ科). *New Entomologist*, 60: 15-20.
- 3) 関根一希・岸本 亨・倉西良一・東城幸治. 2013. 関東平野にのみ棲息するアカツキシロカゲロウ *Ephoron eophilum* (カゲロウ目, シロイロカゲロウ科) の分布調査: 利根川水系以外の新産地の発見. *New Entomologist*, 62(1, 2): 21-27.

トンボ目

- 1) 荒川 正. 2013. 日立市でミヤマアカネを採集. りりぼし, (42): 67.
- 2) 二橋 亮・山中武彦・植村好延・久松正樹. 2012. 茨城県におけるトンボ目の採集・撮影記録. 茨城県自然博物館研究報告, (15): 13-38.
- 3) 軍司 平. 2013. 那珂市鴻巣にてトラフトンボを採集. りりぼし, (42): 68.
- 4) 疋田直之. 1988. 水戸市産のトンボ目数種について. りりぼし, (12): 21.
- 5) 疋田直之. 1990. 茨城県におけるネアカヨシヤンマの記録. りりぼし, (14): 25.
- 6) 廣瀬 誠. 1971. 茨城県のトンボ. おけら, (40): 79-99.
- 7) 廣瀬 誠. 1979. 茨城県のトンボ相 (茨城県のトンボ資料 第2報). 昆虫と自然, 14(6): 66-71.
- 8) 廣瀬 誠. 1980. 茨城県のヒヌマイトトンボ覚え書. おけら, (50): 22-23.
- 9) 廣瀬 誠. 1997. 羽化の刻 茨城のトンボ誌. 181 pp., 茨城虫の会.
- 10) 廣瀬 誠. 2011. ヒヌマイトトンボの舞う茨城のトンボートンボを追い続けた60年. 「茨城県自然博物館総合調査報告書ー2010年 茨城県の昆虫類およびその他の無脊椎動物の動向ー」, pp. 57-66, ミュージアムパーク茨城県自然博物館.
- 11) 廣瀬 誠. 2013. トンボ目. 「茨城県自然博物館総合調査報告書ー2012年 茨城県の昆虫類およびその他の無脊椎動物の動向ー」, pp. 11-12, ミュージアムパーク茨城県自然博物館.
- 12) 廣瀬 誠. 2014. 茨城のトンボを追って. 136 pp., 緑の手帖社.
- 13) 茨城動物研究会. 1998. 筑波山の昆虫類. 「茨城県自然博物館第1次総合調査報告書」, pp. 237-246, ミュージアムパーク茨城県自然博物館.
- 14) 茨城動物研究会. 2004. 茨城県北東地域の昆虫類: 阿武隈山地高萩市上君田滝の倉湿原のトンボ. 「茨城県自然博物館第3次総合調査報告書」, pp. 307-318, ミュージアムパーク茨城県自然博物館.
- 15) 茨城動物研究会. 2007. 茨城県北西地域の昆虫類: 八溝山のトンボ類. 「茨城県自然博物館第4次総合調査報告書」, pp. 295-310, ミュージアムパーク茨城県自然博物館.
- 16) 井上尚武. 2010. ひたちなか市でハネビロエゾトンボを採集. りりぼし, (39): 82.
- 17) 一家伴安. 2004. 小貝川でキイロヤマトンボのヤゴを採集. りりぼし, (31): 76-78.
- 18) 一家伴安. 2007. 鬼怒川と小貝川のサナエトンボ. りりぼし, (34): 36-38.
- 19) 一家伴安. 2008. 県南部の各地河川でキイロヤマトンボのヤゴを採集. りりぼし, (36): 63-64.
- 20) 美野里町教育委員会・美野里生物の会. 2005. 昆虫目録. 「みのりの自然」, pp. 262-264, 美野里町教育委員会.
- 21) 沼田 稔・倉島一也・成田行弘・渡辺 健・川俣静夫. 1974. 茨城県北部のトンボ. 瑠璃星, 2(1/2): 28-41.
- 22) 大澤昌子・廣瀬 誠. 2008. 茨城のネキトンボ. 茨城生物, (28): 55-58.
- 23) 尾園 暁・川島逸郎・二橋 亮. 2012. ネイチャーガイド 日本のトンボ. 532 pp., 文一総合出版.
- 24) 桜井 浩. 1988. 十王町いぶき山におけるトンボ2種の記録. りりぼし, (12): 22.
- 25) 桜井 浩. 1992. ネキトンボの記録. りりぼし, (17): 36-37.
- 26) 桜井 浩. 1995. 茨城県のキイロサナエ健在. りりぼし, (19): 19-20.
- 27) 桜井 浩. 1997. オオルリボシヤンマとマダラヤンマを岩間町で記録する. りりぼし, (21): 45.
- 28) 桜井 浩. 2002. 友部町でキイロヤマトンボを採集. りりぼし, (27): 67.
- 29) 桜井 浩. 2008. 小美玉市におけるコノシメトンボの記録. りりぼし, (36): 62.
- 30) 桜井 浩. 2012. 県自然博物館敷地内にアオハダトンボ. りりぼし, (41): 125.
- 31) 桜井達之・渡辺 健. 1998. 大洗町のトンボ. りりぼし, 22: 12-17.
- 32) 佐々木泰弘. 2012. 常陸太田市三鉦室山にてネキトンボ確認. りりぼし, (41): 126.
- 33) 染谷 保. 1994a. ネアカヨシ騒動記. りりぼし, (18): 30-31.
- 34) 染谷 保. 1994b. 茨城県波崎町にヒヌマイトトンボ産す. りりぼし, (18): 33.
- 35) 染谷 保. 1995. 茨城県北部山田川のキイロヤマトンボ. りりぼし, (19): 21-29.
- 36) 染谷 保・廣瀬 誠. 1980. 蜻蛉目. おけら, (50): 255-280.
- 37) 染谷 保・桜井達之・宮畑年弘・齊藤洋一・加納一信・小林文雄. 1992. 茨城県のナゴヤサナエについて. りりぼし, (17): 2-7.
- 38) 染谷 保・渡辺 健. 2010. 水戸市におけるコノシメトンボの観察事例. りりぼし, (39): 83.
- 39) 杉村光俊・石田昇三・小島圭三・石田勝義・青木典司. 1999. 原色日本トンボ幼虫・成虫大図鑑. 917 pp., 北海道大学図書刊行会.

- 40) 田辺 助. 2000. 茨城県南部のトンボ相. るりぼし, (24): 13-16.
- 41) 田辺 助. 2003. つくば市でネアカコシヤンマを確認. るりぼし, (26): 36-37.
- 42) 植村好延・久松正樹. 2008. つくば市におけるベニイトトンボ(トンボ目:イトトンボ科)の記録. 茨城県自然博物館研究報告, (11): 11-12.
- 43) 渡辺 健. 1988. 水戸市上国井町でマダラヤンマを採集. るりぼし, (12): 21-22.
- 44) 渡辺 健. 1991. 那珂町大内のトンボ資料(1987-1990). るりぼし, (16): 17-21.
- 45) 渡辺 健. 2011. 那珂市鴻巣における数種トンボの追加記録. るりぼし, (40): 63-64.
- 46) 渡辺 健. 2013. トンボ目, 「茨城県自然博物館総合調査報告書-2012年 茨城県の昆虫類およびその他の無脊椎動物の動向-」, pp. 13-14, ミュージアムパーク茨城県自然博物館.
- 47) 渡辺 健・疋田直之. 2010. 潮来市でオオモノサシトンボの生息を確認. るりぼし, (39): 82.
- 48) 渡辺 健・染谷 保. 2010. 県北山間地域におけるネキトンボの一考察. るりぼし, (39): 82.
- 49) 渡辺 健・染谷 保. 2011. 2011年のネキトンボ追加記録. るりぼし, (40): 64.
- 50) 渡辺 健・染谷 保. 2013. 2013年におけるミヤマアカネの確認場所. るりぼし, (42): 68-69.
- 51) 吉澤和徳. 2012. 生きた化石, ムカシトンボの由来. 化学と生物, 50: 840-843.
- 52) 日本のレッドデータ検索システム <http://www.jpnrdb.com/index.html> (2014年8月17日閲覧).

カワゲラ目

- 1) 根本邦宏・広瀬 誠. 1975. 茨城の水生昆虫目録 カゲロウ・カワゲラ・トビケラ. 「茨城の生物第1集」, pp. 144-145, 茨城県高等学校教育研究会生物部.
- 2) 栗田初美. 1993. カワゲラ目 Plecoptera. 「茨城県の昆虫」, pp. 36-41. 水戸昆虫研究会.
- 3) Uchida, S. and H. Maruyama. 1987. What is *Scopura longa* Ueno 1929 (Insecta, Plecoptera). A revision of the genus. Zoological Science, 4: 699-709.
- 4) 横山宣雄・磯辺ゆう・山本 茂. 1990. アミメカワゲラ科の新属新種シノピアミメカワゲラ (*Megaperlodes niger*) の山形県における分布. 第55回陸水学会要旨集, p. 65.
- 5) 稲田和久・上野哲郎・富田佳世. 1998. 岡山県のシノピアミメカワゲラ (第1報). 兵庫陸水生物, (49): 39-45.
- 6) 清水高男・稲田和久・内田臣一. 2005. カワゲラ目. 川合禎次・谷田一三(編)「日本産水生昆虫-科・属・種への検索」, pp. 237-290, 東海大学出版.
- 7) 吉成 暁. 2001. 茨城県のシノピアミメカワゲラ. 兵庫陸水生物, (53): 97-99.
- 8) 吉成 暁. 2007. 茨城県のカワゲラ相 (第1報). るりぼし, (34): 7-14.
- 9) 吉成 暁. 2008. シノピアミメカワゲラを八溝山で採集. るりぼし, (38): 76.
- 10) 今井初太郎. 2010. 福島県のトワダカワゲラ類. おけら, (65): 1-14.
- 11) 今井初太郎. 2011. ミネトワダカワゲラとトワダカワゲラの分布について. おけら, (66): 2-15.
- 12) 岸本 亨. 1997. 茨城県の河川における水生昆虫相 (1) カワゲラ目 (予報). つくば国際大学研究紀要, (3): 107-116.
- 13) 岸本 亨. 2004. トワダカワゲラ類の分布と生活史. 昆虫と自然, 39(6): 18-22.
- 14) 岸本 亨. 2007. トワダカワゲラ科に関する知見と研究の現状. 福井陸水生物会報, (14): 2-18.
- 15) 岸本 亨. 2008. カゲロウ目・カワゲラ目. 「茨城県自然博物館総合調査報告書-2007年 茨城県の昆虫およびその他の無脊椎動物の動向-」 pp. 5-6, ミュージアムパーク茨城県自然博物館.
- 16) 岸本 亨. 2010. 茨城版レッドデータブックにおけるトワダカワゲラ類の問題. おけら, (65): 15-22.
- 17) 岸本 亨. 2013. カワゲラ目. 「茨城県自然博物館総合調査報告書-2012年 茨城県の昆虫およびその他の無脊椎動物の動向-」, pp. 9-10, ミュージアムパーク茨城県自然博物館.

ガロアムシ目

- 1) 内船俊樹. 2008. ガロアムシ目の生物学: 山岳域の「生きている化石」. 昆虫と自然, 43(7): 10-13.
- 2) 田中 正. 1984. ヒメガロアムシ 八溝で発見. インセクト, 35(1): 23.
- 3) 根本邦宏. 1986. 茨城県産ガロアムシ分布に関する知見(その2). 茨城生物, (10): 23-24.

バッタ目

- 1) 井上尚武. 1989. 阿武隈山地南部でクロツヤコオロギを採集. 月刊むし, (226): 20.
- 2) 井上尚武. 1991. 直翅系昆虫(バッタ目, ナナフシ目, ゴキブリ目, カマキリ目). 高萩の動物, pp. 207-232, 高萩市.
- 3) 茨城県生活環境部編. 2000. 茨城における絶滅のおそれのある野生生物(動物編) 茨城県版レッドデータブック. 195 pp., 茨城県生活環境部環境政策課.
- 4) 井上尚武. 2004. 茨城県東北部のバッタ・ナナフシ・ゴキブリ・カマキリ類. 「茨城県自然博物館第3次総合調査報告書」, pp. 344-349, ミュージアムパーク茨城県自然博物館.

- 5) 井上尚武, 2009. 日立市とその周辺の生き物メモ 2, 茨城県立多賀高等学校紀要, (19): 59-77.
- 6) 井上尚武, 1992. 茨城の直翅類 (バッタ目), 「茨城の生物 平成4年版」, pp. 196-201, 茨城県高等学校教育研究会生物部.
- 7) 日本直翅類学会編, 2006. バッタ・コオロギ・キリギリス大図鑑, 687pp., 北海道大学出版会.
- 8) 井上尚武, 2011. バッタ目, 「茨城県自然博物館総合調査報告書ー 2010年 茨城県の昆虫類およびその他の無脊椎動物の動向ー」, pp. 13-14, ミュージアムパーク茨城県自然博物館.
- 9) 井上尚武, 2013. 昭和初期の水戸高等女学校生徒が採集した昆虫標本の目録「八月の昆虫 (水戸市附近)」について, けるん (茨城県立太田第二高等学校), (29): 1-14.
- 10) 井上尚武, 1988. ヤマチビスズとリュウキュウチビスズの交雑に関する予備的実験. ぱったりぎす, (78): 12-14.
- 11) 国土交通省霞ヶ浦河川事務所, 2007. 霞ヶ浦田村・沖宿・戸崎地区自然再生事業実施計画書【B区間】(素案), 36 pp.
- 12) 井上尚武, 2008. バッタ目, 「茨城県自然博物館総合調査報告書ー 2007年 茨城県の昆虫類およびその他の無脊椎動物の動向ー」, pp. 9-10, ミュージアムパーク茨城県自然博物館.
- 13) 井上尚武, 2009. バッタ目・ゴキブリ目・カマキリ目・ナナフシ目, 「茨城県自然博物館総合調査報告書ー 2008年 茨城県の昆虫類および無脊椎動物の動向ー」, pp. 9-10, ミュージアムパーク茨城県自然博物館.
- 14) 井上尚武, 2002. 茨城県版レッドデータブックに加えるべき種・カワラバッタ. おけら, (61): 70-77.
- 15) 廣瀬 誠・荒川 正, 2010. 茨城県那珂川中流域のカワラバッタの記録, 月刊むし, (478): 17.
- 16) 矢ノ倉 奨・山内謙吾, 2013. 常陸大宮市でカワラバッタを採集, るりぼし, (42): 69.
- 17) 松浦一郎, 1979. 日本産のコオロギ類 (7), 昆虫と自然, 14(11): 17-21.
- 18) 井上尚武, 2002. ひたちなか市・虎塚古墳の直翅系昆虫. おけら, (61): 31-33.
- 19) 井上尚武, 1985. ウミコオロギとヒロバネカントン北関東に産す, 昆虫と自然, 20(14): 7-8.
- 20) 井上尚武, 2010. バッタ目, 「茨城県自然博物館総合調査報告書ー 2009年 茨城県の昆虫類およびその他の無脊椎動物の動向ー」, pp. 15-16, ミュージアムパーク茨城県自然博物館.
- 21) 谷川正樹・金子是久・柄沢英理子, 2004. 千葉県白井市における管理形態の異なる二次草原の植物相及びバッタ目相, 千葉生物誌, (54): 1-10.
- 22) Kim, Tae-woo, 2013. Orthoptera of Korea. 381pp.

カマキリ目

- 1) 井上尚武, 1993. カマキリ目 Mantodea, 「茨城県の昆虫」, 43 pp., 水戸市立博物館.
- 2) 井上尚武, 2008. ゴキブリ目・カマキリ目・ナナフシ目, 「茨城県自然博物館総合調査報告書ー 2007年 茨城県の昆虫類およびその他の無脊椎動物の動向ー」, pp. 11-12, ミュージアムパーク茨城県自然博物館.

カメムシ目

- 1) 藤村俊彦・津谷武樹・故於保信彦, 1991. 茨城県牛久市産昆虫目録補造, 日本植物防疫協会研究所研究報告, (5): 56-99.
- 2) 成田行弘, 1993. カメムシ目 Hemiptera, 茨城県の昆虫, pp. 63-85, 水戸市立博物館.
- 3) 林 正美, 1990. ヒウラカメムシ, 茨城県で採集, Rostria, (40): 677.
- 4) 林 正美・宮本正一, 2005. 半翅目 Hemiptera, ミズムシ科, 川合禎次・谷田一三 (共編)「日本産水生昆虫科・属・種への検索」, pp. 301-319, 東海大学出版会.
- 5) 成田行弘, 1986. 茨城の陸生異翅半翅類. おけら, (35): 1-13.
- 6) 成田行弘, 1991. 自然観察会資料 アメンボ, 水戸市立博物館報, (6): 19-22.
- 7) 日浦 勇, 1980. オオツノカメムシの分布, Rostria, (32): 331-333.
- 8) 小菅次男, 1980. 茨城県のセミ類の分布について, おけら, (50): 50-64.
- 9) 成田行弘, 1992. 茨城県の水生異翅半翅類. るりぼし, (17): 35.
- 10) 勝間信之・柳田紀行, 2015. 久慈川河川敷の三日月湖で確認された貴重な水生昆虫類, 「茨城県自然博物館総合調査報告ー 2013年 茨城県の昆虫類およびその他の無脊椎動物の動向ー」, p.55, ミュージアムパーク茨城県自然博物館.
- 11) 櫻井 浩, 2013. 小美玉市のカメムシリスト, るりぼし, (42): 52-55.

アミメカゲロウ目

- 1) 櫻井 浩, 2010. 茨城県におけるアミメカゲロウ目の記録, るりぼし, (39): 43-48.
- 2) 脇 一郎, 2004. アミメカゲロウ目, 神奈川県昆虫誌, pp. 320-334.
- 3) 市田忠夫, 1992. 青森県の脈翅類, Cestra, (27): 78-117.
- 4) 田畑郁夫, 2003. 日本産クサカゲロウ成虫絵解き検索, マイナースターズ, (11): 18.
- 5) Tsukaguchi, S. 1995. Chrysopidae of Japan. ("Insecta, Neuroptera"), 223 pp., Private publication, Osaka.
- 6) 櫻井 浩, 2012. 茨城県におけるアミメカゲロウ目の記録追報, るりぼし, (41): 100-106.
- 7) 根来 尚, 2011. 富山県の脈翅類, 富山市科学博物館研究報告, (14): 23-30.

- 8) 朝比奈正二郎・石原 保・安松京三, 1965. 原色昆虫大図鑑 第3巻, p. 160, 北隆館.
- 9) 廣瀬 誠, 2007. 昆虫類, 「東海村の自然誌」, p. 237, 東海村教育委員会.
- 10) 日本のレッドデータ検索システム <http://www.jpnrdb.com> (2015年5月10日閲覧)

ヘビトンボ目

- 1) 林 文男, 2005. ヘビトンボ目(広翅目) Megaloptera, センブリ科, 川合禎次・谷田一三 共編『日本産水生昆虫 科・属・種への検索』, pp.379-383, 東海大学出版会
- 2) 柳田紀行, 2011. 茨城県におけるセンブリ科2種の記録, りりぼし, (40): 66.

コウチュウ目

- 1) 阿部光典, 1990. 茨城県八溝山およびその周辺におけるゲンゴロウ類の記録, りりぼし, (14): 23.
- 2) 阿部光典・中村俊彦, 1991. 関東地方におけるコガタノゲンゴロウの追加記録, 甲虫ニュース, (96): 5.
- 3) 市川和雄, 2006. 北茨城市においてキンイロネクイハムシを採集, りりぼし, (33): 67.
- 4) 市川和雄・公文 暁・公文保幸, 2008. 茨城県のカミキリムシ II, りりぼし, (37): 2-223.
- 5) 市毛勝義, 1988. 茨城県産甲虫分布資料 1, おけら, (55): 1-4.
- 6) 市毛勝義, 1990. 茨城県産ハンミョウ科目録, りりぼし, (14): 6-8.
- 7) 市毛勝義・大桃定洋, 1996. 茨城県産甲虫目録の補遺, りりぼし, (20): 56-72.
- 8) 今井初太郎, 1982. 採集日記より, おけら, (52): 60-64.
- 9) 大桃定洋, 1979. 茨城県南部のタマムシ(その1), 甲虫ニュース, (44): 5-6.
- 10) 大桃定洋, 1983. 筑波研究学園都市およびその周辺の甲虫相(その3, テントウムシダマシ科 Endomychidae), おとしぶみ, (12): 20-21.
- 11) 大桃定洋, 1986. 筑波研究学園都市およびその周辺の甲虫相(その4, ハムシ科 Chrysomelidae), おとしぶみ, (15): 17-25.
- 12) 大桃定洋, 1987. 筑波研究学園都市およびその周辺の甲虫相(その5, 水生食肉亜目ハムシ科 Adephaga), おとしぶみ, (16): 27-33.
- 13) 大桃定洋, 1989. 茨城県下でアカガネネクイハムシを発見, Donaciist, (3): 4.
- 14) 大桃定洋, 1991. 茨城県のテントウムシ科について, りりぼし, (16): 5-14.
- 15) 大桃定洋, 2006. アカガネネクイハムシを銚田市で採集, りりぼし, (33): 67-68.
- 16) 大桃定洋, 2011. サトウナガタマムシを茨城県・筑波山で採集, 月刊むし, (487): 42.
- 17) 大桃定洋, 2013a. 筑波山山頂(御幸ヶ原)の灯火で採集した甲虫類, りりぼし, (42): 61-62.
- 18) 大桃定洋, 2013b. 岩間町愛宕山で採集した甲虫類, りりぼし, (42): 60-61.
- 19) 大桃定洋, 2014. コウチュウ目, 「茨城県自然博物館総合調査報告-2013年 茨城県の昆虫類およびその他の無脊椎動物の動向-」, pp.31-37, ミュージアムパーク茨城県自然博物館.
- 20) 大桃定洋・久保田正秀・沼田 稔・市毛勝義・疋田直之, 1993. コウチュウ目 Coleoptera, 茨城県の甲虫, 355 pp., 水戸市立博物館.
- 21) 大桃定洋・高野 勉, 2011. 茨城県産甲虫リスト補遺(3), りりぼし, (40): 2-22.
- 22) 大桃定洋・高野 勉, 2014. 茨城県産甲虫リスト補遺(4), りりぼし, (43): 印刷中.
- 23) 大桃定洋・久松正樹, 2011. 筑波山の甲虫目録, 茨城県自然博物館研究報告, (14): 33-74.
- 24) 大桃定洋・久松正樹・中川裕喜, 2014. 筑波山の甲虫目録, 茨城県自然博物館研究報告, (17): 印刷中.
- 25) 大桃定洋・高橋敬一・西山 明, 2011. 霞ヶ浦湖畔に残ったヨシ原: 稲敷市浮島の甲虫類, 茨城県自然博物館研究報告, (14): 75-92.
- 26) 小倉健夫, 1988. 水戸市千波湖周辺の甲虫, りりぼし, (12): 8-14.
- 27) 奥島雄一, 1999. カタキンイロジョウカイとキイロジョウカイの追加記録, 倉敷市立自然史博物館研究報告, (14): 51-53.
- 28) 荻沼正昭, 1982. 「今日は」甲虫屋です, おけら, (52): 51-57.
- 29) 小山 敦, 1974. 茨城県の食糞性コガネ2種について, 瑠璃星, 2(1-2): 19.
- 30) Kasahara, S. 1988. A new *Pterostichus* (Coleoptera, Carabidae) of the subgenus *Melanius* from northeastern Kwanto, central Japan. Elytra, 16: 117-121.
- 31) 笠原須磨夫, 1983. 洪水のため河川の堤防に漂着した塵芥中のゴミムシ類(1982年, 利根川中流部と支流渡良瀬川における記録), 北九州の昆虫, 30: 185-196.
- 32) 笠原須磨夫・西山 明, 1990. 茨城県の歩行虫, りりぼし, (15): 1-62.
- 33) 木元達之助, 1996. 茨城県未記録の甲虫8科21種, 甲虫ニュース, (113): 7-8.
- 34) 記野直人・長谷川 洋, 1988. テントウムシ科3種の記録, 月刊むし, (211): 37-38.
- 35) 記野直人・長谷川 洋, 1995. ヤマトヒメメダカカッコウムシの記録, 月刊むし, (298): 16.
- 36) 久保田正秀, 1987. 1986年, ネクイハムシ類の採集記録, Donaciist, (1): 3-6.

- 37) 蔵田駿一. 2012a. 常総市周辺産の甲虫リスト(1946-1960). りりぼし, (41): 62-83.
- 38) 蔵田駿一. 2012b. 茨城県菅生沼のワタラセハンミョウモドキについて—その採集記録を検証する—. りりぼし, (41): 87-91.
- 39) 公文 暁. 2011. ベーツヒラタカミキリの新産地. りりぼし, (40): 62.
- 40) 公文 暁. 2012. 鹿行地域のカミキリムシ. りりぼし, (41): 2-61.
- 41) 公文 暁・公文保幸. 2009. 花瓶山周辺で見つかった甲虫類の記録: その2. りりぼし, (38): 2-10.
- 42) 後藤 章・西原昇吾・須田真一・角谷 拓・石井 潤・鷺谷いずみ. 2008. 準説滅危惧種 (NT) キボシチビコツブゲンゴロウ (コウチュウ目: コツブゲンゴロウ科) の新産地. 茨城県自然博物館研究報告, (9): 27-29.
- 43) 坂口春典. 1997. 奥久慈男体山でヨコヤマヒゲナガカミキリを発見. りりぼし, (21): 47.
- 44) 桜井達之. 1997. ひたちなか市のカワラハンミョウ健在. りりぼし, (21): 46.
- 45) 桜井達之. 1986. クワガタムシ科2種の記録. りりぼし, (11): 9.
- 46) 桜井 浩・疋田直之. 1987. オオイチモンジシマゲンゴロウ茨城県に産する. 月刊むし, (202): 34.
- 47) 佐々木大輔. 2013. 茨城県にてヤマトオサムシダマシを採集. 月刊むし, (508): 45.
- 48) 須田 亨. 1990. ツクバホソナガゴミムシの冬期採集例. 甲虫ニュース, (90): 6-7.
- 49) 高野 勉・大桃定洋. 2000. 茨城県産甲虫リスト. りりぼし, (23): 2-155.
- 50) 高野 勉・大桃定洋. 2005. 茨城県産甲虫リスト補遺 (1). りりぼし, (32): 35-61.
- 51) 高野 勉・大桃定洋. 2008. 茨城県産甲虫リスト補遺 (2). りりぼし, (36): 18-37.
- 52) 高野 勉・市毛勝義・大桃定洋. 1997. 茨城県産甲虫目録の補遺 (2). りりぼし, (21): 2-17.
- 53) 芳賀 馨. 1996. 筑波学園都市とその周辺の甲虫. りりぼし, (20): 2-41.
- 54) 疋田直之. 2002. 御前山村相川で採集された水生甲虫について. おけら, (61): 7-12.
- 55) 平井剛夫. 1999. 筑波山の甲虫類. 茨城県自然博物館研究報告, (2): 43-63.
- 56) 平井剛夫. 2004. オオコブスジコガネを冬季に採集. りりぼし, (31): 74.
- 57) 藤村俊彦・津谷武樹・於保信彦. 1991. 茨城県牛久市産昆虫目録補遺. 日本植物防疫協会研究報告, (5): 56-99.
- 58) 渡辺 健・染谷 保. 2013. 城里町でアイヌハンミョウを採集. りりぼし, (42): 66-67.
- 59) 沼田 稔. 1989. 茨城県のカミキリムシ. りりぼし, (13): 2-73.
- 60) 沼田 稔・進藤琢也・進藤健朗. 1993. 茨城県で発見された西日本分布型カミキリムシ3種他. 甲虫ニュース, (104): 7.
- 61) 吉富博之・疋田直之・佐藤正孝. 2002. アカツヤドROMシの分布とその生息環境—レッドデータ水生甲虫類の分布記録1—. 甲虫ニュース, (140): 9-11.
- 62) 柳田紀行. 2012. キタノツブゲンゴロウ土浦市に産す. りりぼし, (41): 118-119.
- 63) 谷野泰義. 2006. 桜川村でのオオルリハムシの記録. りりぼし, (33): 66.
- 64) 美野里生物の会. 2005. 昆虫目録. 「美野里の自然」, pp. 262-298, 美野里町教育委員会.
- 65) Hayashi, H. and H. Yoshitomi. 2014. Taxonomic treatments of two Japanese elm mid beetles, *Stenelmis vulgaris* Nomura and *Leptelmis graulisi* Sharp (Coleoptera: Elmidae, with description of their larvae. Japanese Journal of Systematic Entomology.) 20:235-244.
- 66) 上手雄貴・疋田直之. 2010. 群馬県におけるアカツヤドROMシの記録. 甲虫ニュース, (169): 6.
- 67) 吉富博之・疋田直之・佐藤正孝. 2002. アカツヤドROMシの分布とその生息環境 レッドデータ水生甲虫類の分布記録2. 甲虫ニュース, (140): 9-11.

シリアゲムシ目

- 1) 朝比奈正二郎・石原 保・安松京三. 1965. 原色昆虫大図鑑 III, 520pp., 北隆館.
- 2) 宮本正一. 1993. 日本のシリアゲムシ. インセクタリアム, 30(1): 4-9.
- 3) 桜井 浩. 2007. 茨城県のカガシボモドキ. りりぼし, (34): 2-6.
- 4) 冨永 修. 2000. カガシボモドキを探そう! (その2). 宮武頼夫さん退職記念論文集, pp. 150-158, 大阪市立自然史博物館.
- 5) 日本のレッドデータ検索システム <http://www.jpnrd.com/index.html> (2014年8月24日閲覧).
- 6) 岩崎 靖. 1983. 日本産長翅目分布一覧表. おとしぶみ, (12): 32-38.
- 7) 中村剛之. 2000. 栃木県の長翅目 (昆虫網). 栃木県立博物館研究紀要 (自然), (17): 1-18.
- 8) 桜井 浩. 2009. 茨城県のシリアゲムシ. りりぼし, (38): 17-21.

チョウ目 チョウ類

- 1) 青木直芳. 1948. オホムラサキ観察. 虫の国, 3(5/6): 10.
- 2) 青木昭次郎. 1951. 筑波産数種の蝶類について1. 虫の国, 6(5/6): 7-8.
- 3) 青木好明. 2003. 結城市・下館市とその周辺におけるオオムラサキ越冬幼虫の記録. おとしぶみ, (23): 49-50.
- 4) 青木好明. 2007. 2005年筑西市と結城市におけるツマグロキチョウの記録. おとしぶみ, (24): 35-36.
- 5) 青木好明. 2013a. 茨城県結城市のオオムラサキ. おけら, (67): 90-91.

- 6) 青木好明. 2013b. 結城市で確認したチョウ類, 茨城生物, (33): 51-60.
- 7) 青木好明. 2015. 茨城県結城市産オオムラサキの異常個体2例, おけら, (68): 125-126.
- 8) 荒川 正. 1995. 1993年の県内採集記録. おけら, (59): 67-68.
- 9) 荒川 正. 2007. ツマグロキチョウを採集. おけら, (63): 89.
- 10) 荒川 正. 2008. 常陸太田市(旧・里美村)でスジボソヤマキチョウ, スジグロチャバナセセリを採集. おけら, (64): 95.
- 11) 荒川 正. 2010. 千波湖湖畔でツマグロキチョウを採集. おけら, (65): 138.
- 12) 荒川 正. 2015. 虫を追いかけて-2014-. おけら, (68): 113-117.
- 13) 有賀俊司. 1974. ムモンアカシジミを採集する. 茨城蝶類, (6): 1.
- 14) 有賀俊司. 1985. 高萩市の蝶類. 仙湖(水戸短大付属高校), (1): 42-50.
- 15) 有賀俊司. 1986. ヒメキマダラヒカゲ再発見記. おけら, (54): 66-68.
- 16) 有賀俊司. 1991. 高萩の動物Ⅷ昆虫類チョウ目. 「高萩の動物」pp. 272-299, 高萩市.
- 17) 有賀俊司. 1993. 茨城県におけるクロミドリシジミの二つの新産地. おけら, (58): 98.
- 18) 有賀俊司. 2006. 北茨城市におけるカラスシジミの追加記録. るりぼし, (33): 63.
- 19) 有賀俊司. 2015. 北茨城市山間部でのヒメシロチョウの記録. おけら, (68): 129.
- 20) 有賀俊司・荻谷和博・川島安夫・木村安之・塩田正寛・福田敏克. 1975. ウラクロシジミの記録. 茨城蝶類, (11): 1-2.
- 21) 有賀俊司・佐々木泰弘・塩田正寛. 1986a. 阿武隈山地の蝶(1)セセリチョウ科. おけら, (54): 25-65.
- 22) 有賀俊司・佐々木泰弘・塩田正寛. 1986b. 加波山の蝶. 茨城県高等学校教育研究会生物部会誌, (50): 157-163.
- 23) 江橋芳英. 1986a. 水戸市産蝶類2種の記録. るりぼし, (11): 11.
- 24) 江橋芳英. 1986b. 花園山採集記. おけら, (54): 68-69.
- 25) 枝 重夫. 1958. 関東地方(筑波山). 新しい昆虫採集(上), 160-162.
- 26) 枝 重夫. 1959. 筑波山付近の昆虫(I)蝶類. 新昆虫, (12(2)): 30-35.
- 27) 福島 久. 1969. 花園山系の昆虫類鱗翅目. 生物界復刊, (1): 17-19.
- 28) 福島正武. 1979. 昭和53年度の虫とのつき合い. おけら, (48): 38-41.
- 29) 福島正武・渡辺重行・皆川典雅. 1971. 採集報告花園山. おけら, (39): 10-11.
- 30) 藤村俊彦・津谷武樹・於保信彦. 1991. 茨城県牛久市産昆虫目録, 補遺. 日本植物防疫協会研究所報告, (5): 94-96.
- 31) 後藤日出人. 1993. ウラゴマダラシジミの採集記録. おけら, (58): 98.
- 32) 後藤芳顕. 1979. 花貫溪谷の採集記録. おけら, (48): 56.
- 33) 波崎町教育委員会(編). 2005. 波崎の昆虫・動物一覧. 「波崎の自然」, pp. 62-64, 82, 波崎町教育委員会.
- 34) 長谷川正敏・廣瀬 誠・本山雅夫・片寄恒雄. 1950. 難台山の蝶相について. 生物界, (5(1)): 27-31.
- 35) 林 恵治. 1995. 取手市のチョウ目. るりぼし, (19): 35-37.
- 36) 日置正義. 1997. 採集記録そして回想. るりぼし, (21): 30-38.
- 37) 日置正義. 2000. もどき研究室(1999年の採集記録から). るりぼし, (24): 22.
- 38) 廣瀬 誠. 1948. 水戸の蝶だよりI. 虫の国, (3(10)): 3.
- 39) 廣瀬 誠. 1954. 茨城県の蝶類. 茨城大学生物研究会報, (2(1)): 4-11.
- 40) 廣瀬 誠. 1977. 茨城のウスバシロチョウ回想. おけら, (46): 3-10.
- 41) 廣瀬 誠. 1978. フジミドリシジミをとる. 茨城蝶類, (18): 1.
- 42) 廣瀬 誠. 1988. いわまの自然・蝶類. 「いわまの自然」, pp. 92-107, 192-194, 岩間町教育委員会.
- 43) 廣瀬 誠. 1989. 小貝川河川敷・オオムラサキ考. 下妻文化, (14): 3-6.
- 44) 廣瀬 誠. 2002. 鬼怒川・小貝川・水と暮らし. pp. 55-57, 鬼怒川・小貝川を語る会.
- 45) 廣瀬 誠・片寄恒雄. 1950. 茨城県産蝶類追加記録及訂正. 生物界, (5(1)): 33-35.
- 46) 廣瀬 誠・大山保夫. 1955. 茨城のシジミチョウ2題. 新昆虫, (8(10)): 50.
- 47) 久松正樹・鈴木成美. 1998. 菅生沼周辺の昆虫相. 茨城県自然博物館研究報告, (1): 133.
- 48) 本間敏弘. 1947. オオムラサキに就いて. 虫の国, (2(9)): 1.
- 49) 本間敏弘. 1949. 茨城県の蝶相について. 生物界, (4): 6-20.
- 50) 堀越 功. 1972. 菅生沼付近の蝶類. pp. 63-73, 自然友の会.
- 51) 堀越 功・村井 攻. 1958. 茨城県水海道市における蝶の異常分布. 新昆虫, (11(2)): 47.
- 52) 堀越 功・岡沢貞雄. 1959. オオウラギンヒヨウモンの畸型. 新昆虫, (12(3)): 52.
- 53) 堀内隆三・河田朋子. 1962. 茨大付近の蝶相. 茨城大学生物研究会報, (9): 1.
- 54) 星川清親. 1950. ヒメキマダラヒカゲ水戸で採集. 虫の国, (5(9-10)): 17.
- 55) 茨城大学生物研究会昆虫班. 1977. 岡見の蝶. 茨城大学生物研究会報, (24): 4-15.
- 56) 茨城大学生物研究会昆虫班. 1979. 男体山の蝶. 茨城大学生物研究会報, (26): 4-7.

- 57) 茨城大学生物研究会昆虫班. 1980. 茨城県のゼフィルス. 茨城大学生物研究会報, (27): 4-7.
- 58) 茨城昆虫同好会. 1964. 筑波山・勝田市・岩瀬町・御前山蝶発生状況. おけら, (4): 1-2
- 59) 茨城昆虫同好会. 1966. 勝田市でミヤマカラスシジミとれる. おけら, (25): 1
- 60) 茨城昆虫同好会事務局. 1968. ミヤマカラスシジミの新採集地. おけら, (34): 2.
- 61) 茨城昆虫同好会事務局. 1969. ヒメシロがとれた. おけら, (36): 10.
- 62) 茨城昆虫同好会事務局. 1972. 県内3頭目のウラキン採集される. おけら, (41): 24.
- 63) 飯島義克. 1996. 筑波山の蝶類(1991～1993年の調査より). 茨高教研生物部会誌, (68): 2-18.
- 64) 今井初太郎. 1969. 採集記, 勝田大島湿地. おけら, (36): 6.
- 65) 今井初太郎・渡辺重行・福島正武. 1970. 勝田市の蝶. 茨城昆虫同好会.
- 66) 今井新太郎. 1967. 採集記録(八溝山, 筑波). おけら, (29): 6.
- 67) 今井新太郎. 1971. 採集報告. おけら, (39): 14
- 68) 井上大成. 2000. 北茨城市におけるキバネセセリの記録2例. りりぼし, (24): 23.
- 69) 井上大成. 2001. 20世紀最後の5年間に茨城県内で記録したチョウ類成虫の記録. りりぼし, (26): 2-63
- 70) 井上大成. 2003. 2002年春季におけるヤマトシジミ他数種昆虫の速い記録. りりぼし, (28): 33-34.
- 71) 井上大成. 2005a. 茨城県におけるカラスシジミの追加記録. りりぼし, (32): 33-34.
- 72) 井上大成. 2005b. 北茨城市におけるキバネセセリの追加記録. りりぼし, (32): 68-69.
- 73) 井上大成. 2006. 日立市でスジグロチャバネセセリを記録. りりぼし, (33): 64-65.
- 74) 井上大成. 2007a. 21世紀最初の5年間に茨城県で確認したチョウ類成虫の記録. りりぼし, (35): 2-109.
- 75) 井上大成. 2007b. ツマグロキチョウ茨城県北部で多発. りりぼし, (34): 10-20.
- 76) 井上大成. 2007c. ミヤマカラスシジミを生瀬富士で採集. りりぼし, (34): 39.
- 77) 井上大成. 2007d. 茨城県の北部山地におけるギンイチモンジセセリ夏型の記録. りりぼし, (34): 39-40.
- 78) 井上大成. 2007e. 茨城県におけるヒメキマダラヒカゲの産地追加. りりぼし, (34): 23.
- 79) 井上大成. 2007f. 旧美和村にウラクロシジミ多産. りりぼし, (34): 40.
- 80) 井上大成. 2008. 茨城県における2006年と2007年のカラスシジミ探索の結果. りりぼし, (36): 53-54.
- 81) 井上大成. 2012. 茨城県.(一部福島県を含む)におけるギンイチモンジセセリ幼虫の採集記録. りりぼし, (41): 109-110
- 82) 井上大成. 2014. 茨城県におけるクロミドリシジミ蛹の発見例. りりぼし, (43): 83
- 83) 井上大成・後藤秀章. 2001. トラップで採集されたフジミドリシジミ. りりぼし, (25): 30.
- 84) 井上大成・濱口京子・久松正樹. 2007. 茨城県に於いてムモンアカシジミに幼虫に随伴していたアリの1種. 茨城県自然博物館研究報告, (10): 17-18.
- 85) 井上大成・田中健一. 2002. 大子・生瀬富士におけるハヤシミドリシジミとウラジロミドリシジミ成虫の記録. おとしぶみ, (22): 7-9.
- 86) 井上大成・山本勝利・久松正樹. 2009. 筑波山塊におけるクロミドリシジミの記録. 茨城県自然博物館研究報告, (12): 17-19.
- 87) 石島 篤. 1982. 筑波山の蝶類. おとしぶみ, (11): 16-20.
- 88) 石島 篤. 2001. 2000年の茨城県南西部におけるオオムラサキの記録. おとしぶみ, (21): 111.
- 89) 石島 篤. 2003. 2002年-2003年冬季の茨城県南西部におけるオオムラサキの記録. おとしぶみ, (23): 49.
- 90) 岩本吉也. 1972. 茨城県下でハヤシミドリシジミを採集・月刊むし, (13): 12.
- 91) 伊沢 真. 1995. 花貫溪谷でヒメキマダラヒカゲの幼虫を採集. おけら, (59): 68.
- 92) 梶沢 保. 1991. 新利根村でウラゴマダラシジミを採集. りりぼし, (16): 27.
- 93) 金子光司. 1936. 茨城博物学会昆虫採集会. 茨博会誌, (7): 16-19.
- 94) 神原隆夫・今井初太郎. 1968. 水戸のクロシジミ. おけら, (34): 1.
- 95) 片寄恒雄. 1950. 水戸付近の蝶相について. 生物界, 5(1): 5-12.
- 96) 加藤正世. 1931. 昆虫ノート. 昆虫世界, 35(10): 357-359.
- 97) 加藤正世. 1934. 蟬聴きの会. 昆虫界, 2(11): 568-572.
- 98) 川辺愛徳. 1998. 1997年の茨城県下でのゼフィルスの記録. おとしぶみ, (18): 5-6.
- 99) 川辺愛徳. 2000. 茨城県のゼフィルス(2)フジミドリシジミ. おとしぶみ, (20): 27-32.
- 100) 川辺愛徳. 2001. 茨城県のゼフィルスの記録. おとしぶみ, (21): 104-106.
- 101) 河田禎夫. 1948. 昆虫雑題. 虫の国, 3(5_6): 8-9.
- 102) 河田禎夫. 1950. ウスバシロチョウ今年も発生. 虫の国, 5(5): 15.
- 103) 川島保夫. 1973. 私の蝶採集ノートから. おけら, (42): 18-23.
- 104) 川島保夫. 1974. クロミドリシジミを採集する. 茨城蝶類, (5): 1-2.
- 105) 木村権一. 2011. 阿武隈山系におけるゼフィルスの記録. りりぼし, (40): 56-57
- 106) 木村権一. 2012a. チャマダラセセリ異常型の採集記録. りりぼし, (41): 111

- 107) 木村権一. 2012b. ツマグロキチョウ異常型の採集記録. るりぼし, (41): 111
- 108) 木村権一. 2012c. ツマグロキチョウ秋型の早い採集記録. るりぼし, (41): 113
- 109) 木村権一. 2012d. ひたちなか市におけるギンイチモンジセセリの記録. るりぼし, (41): 110-111
- 110) 木村権一. 2012e. ひたちなか市におけるツマグロキチョウの記録. るりぼし, (41): 112-113
- 111) 木村権一. 2012f. 常陸太田市におけるムモンアカシジミの記録. るりぼし, (41): 113-114
- 112) 木村権一. 2012g. 北茨城市におけるキバネセセリの記録. るりぼし, (41): 110
- 113) 木村信之. 1978. ウスバシロチョウ. 虫の国, 12(1): 1-2.
- 114) 木村安之. 1975. クロミドリシジミを採集する. 茨城蝶類, (9): 2.
- 115) 小林 浩. 1979. 水府村・金砂郷村採集及び調査. おけら, (48): 42-43.
- 116) 小池通正. 1976. ヒメシロチョウ第4化の記録. おけら, (45): 33.
- 117) 小池通正. 1978. 飼育の記録. おけら, (47): 30.
- 118) 小池通正. 1979. 花貫溪谷のフジミドリについて. おけら, (48): 44.
- 119) 小菅次男. 1975. 筑波山の昆虫〔II〕(茨高教研生物部会誌), (28): 47-58.
- 120) 小菅次男. 1975. 筑波山の昆虫・茨城の生物. 第1集: 173-180.
- 121) 小菅次男. 1980. 水戸市偕楽園と桜山の蝶相の変遷. おけら, (49): 11-18.
- 122) 小島正二. 1964. 筑波山付近の蝶類. 茨城県高等学校教育研究会生物部会誌(茨高教研生物部会誌), (8): 16-20.
- 123) 松本和馬・井上大成・北原 曜・後藤秀章. 1999. つくば市のクロミドリシジミ. やどりが, (183): 35-36.
- 124) 森 英明. 1980. 筑波山の蝶類(その1). おとしぶみ, (9): 20-28.
- 125) 望月和男. 2003. 境町の蝶類とその研究史. 町史研究 下総さかい, (8): 56-59.
- 126) 虫の国事務局. 1954. 絶滅か? 水海道のウスバシロチョウ. 虫の国, 9(1-2): 28.
- 127) 武藤 進. 1948. 郷土産蝶類目録I. 虫の国, 3(5-6): 12.
- 128) 永井浩行. 1978. 大島, ゼフの舞う頃. おけら, (47): 29.
- 129) 永井浩行・加藤剛広. 1982. 里美村のオナガシジミ. おけら, (52): 65.
- 130) 中村 俊. 1929. 筑波山付近の蝶類に就いて. *Lansania*, 1(5): 68-73.
- 131) 西原幸雄. 1997. 茨城県・栃木県東部のウラキンシジミの分布について. おとしぶみ, (17): 1-3.
- 132) 西原幸雄. 1998a. 常北町でウラクロシジミを採集. おとしぶみ, (18): 61.
- 133) 西原幸雄. 1998b. 内原町でウラキンシジミを採集. おとしぶみ, (18): 60.
- 134) 西山 隆. 1985. 鷲子山のウラクロシジミ. *インセクト*, 36(2): 115.
- 135) 野崎 武. 1969. 採集記録. おけら, (36): 11.
- 136) 野崎 武. 1974. ヒメシロの飼育記録. おけら, (43): 13-14.
- 137) 野崎 武. 1977. 茨城のゼファルス数種. おけら, (46): 27.
- 138) 沼田 稔. 1974. エゾミドリシジミを採集する. 茨城蝶類, (7): 1.
- 139) 荻谷和博. 1974. ウスイロオナガシジミを採集する. 茨城蝶類, (7): 2.
- 140) 荻谷和博・福田敏克・沼田 稔. 1973. 花園山系8月1日-8月4日の蝶. 月刊むし, (31): 56.
- 141) 及川浩美・松井安俊. 1995. 宍塚大池地区のチョウ 宍塚大池地域自然環境調査報告: 142-14. 宍塚の自然と歴史の会.
- 142) 大阿久義徳. 1979. 私の採集した蝶の異常型について. おけら, (48): 49-53.
- 143) 大桃定洋・石島 篤. 2003. 2002年に下妻市小貝川ふれあい公園で採集した昆虫類報告書. おとしぶみ, (23): 17-28.
- 144) 大谷津好子. 1969. 鶏足山の蝶. 生研会報, (16): 18-19.
- 145) 大山保夫. 1973. 勝田市のミヤマカラスシジミについて. おけら, (42): 12-13.
- 146) 佐野功一. 1972. 雨巻山の蝶・生研会報, (19): 30-32.
- 147) 佐々木泰弘. 1987. 小川学術参考林の蝶相. 茨高教研生物部会誌, (51): 42-46.
- 148) 佐々木泰弘. 1997. 常陸太田市の蝶 注目種. ひたちの. ひたち太田生物友の会: 77-78.
- 149) 佐々木泰弘. 2002. 小貝川オオムラサキ観察会. 茨城生物, (22): 68.
- 150) 佐々木泰弘. 2004. 常陸太田市のチョウ類リスト. ひたちの・創立30周年記念号: 79-80.
- 151) 佐々木泰弘. 2006. 常陸大宮市でカラスシジミを採集. るりぼし, (33): 63.
- 152) 佐々木泰弘. 2007. 常陸太田市のスジボソヤマキチョウの記録. るりぼし, (34): 42.
- 153) 佐々木泰弘. 2008. チャマダラセセリの求愛行動観察. おけら, (64): 44.
- 154) 佐々木泰弘. 2009. 2008年茨城県の昆虫類及び無脊椎動物の動向・チョウ類. 茨城県自然博物館総合調査報告書: 37-39.
- 155) 佐々木泰弘. 2010. 2009年茨城県の昆虫類の動向・チョウ目(チョウ類). 茨城県自然博物館総合調査報告書: 43-46.
- 156) 佐々木泰弘. 2011a. 2010年茨城県の昆虫類の動向・チョウ目(チョウ類). 茨城県自然博物館総合調査報告書: 39-41.
- 157) 佐々木泰弘. 2011b. 茨城県のヒメシロチョウ再発見. るりぼし, (40): 33-35.

- 158) 佐々木泰弘. 2012. 常陸大宮市にてオオヒカゲ採集. るりぼし, (41): 108.
- 159) 佐々木泰弘・有賀俊司・塩田正寛. 1990. 阿武隈山地の蝶(3)シロチョウ科. おけら, (56): 2-52.
- 160) 佐藤研一・塩田正寛. 2004. 日立市でスジボソヤマキチョウを記録する. るりぼし, (31): 72.
- 161) 佐藤友良. 1973. フジミドリシジミを採集する. 茨城蝶類, (1): 1-2.
- 162) 佐藤豊一. 1975. 古河の蝶類. 茨城生物, (3): 26-30.
- 163) 佐藤洋照. 1979. 私の貴蝶品目録. おけら, (48): 62-68.
- 164) 関根陽一. 1996. 茨城県におけるヒメキマダラヒカゲの記録. るりぼし, (20): 73.
- 165) 清水照雄. 1992. 茨城県北部でフジミドリ採卵. るりぼし, (17): 14.
- 166) 篠葉利夫. 1967. クロミドリシジミ採集される. 蝶と蛾, 18(1.2).
- 167) 塩田正寛. 1964. 茨城県産蝶類の4種について. インセクト, 14(2): 10-11.
- 168) 塩田正寛. 1971. カラスシジミ採集される. おけら, (39): 9.
- 169) 塩田正寛. 1973a. フジミドリシジミの記録について. 茨城蝶類, (1): 2.
- 170) 塩田正寛. 1973b. ウラジロミドリシジミを採集する. 茨城蝶類, (3): 1-2.
- 171) 塩田正寛. 1973c. カラスシジミの記録について. 茨城蝶類, (3): 2.
- 172) 塩田正寛. 1974. 久慈郡里美村でウラジロミドリシジミを採集. おけら, (43): 17.
- 173) 塩田正寛. 1976. ウスバシロチョウを採る. 茨城蝶類, (13): 1.
- 174) 塩田正寛. 1977. ウスバシロチョウ再発見の記. おけら, (46): 1-2.
- 175) 塩田正寛. 1978. 私の採集記録から. おけら, (47): 33.
- 176) 塩田正寛. 1993. 日立市小木津山の蝶群集. おけら, (58): 1-36.
- 177) 塩田正寛. 2015. 茨城県の蝶. :803pp.
- 178) 塩田正寛・久保田正秀. 1972. 茨城県産蝶類2種について. 蝶と蛾, 23(1): 24.
- 179) 塩田正寛・おもしろサイエンスクラブ. 2001. 大子産チョウ2種の記録. るりぼし, (26): 69-70.
- 180) 塩田正寛・鈴木保男・篠葉利夫. 1968. 茨城県産蝶類6種について. 蝶と蛾, 19(3/4): 111-113.
- 181) 鈴木秀広. 1977. 1976年私の採集記録から. おけら, (46): 43-44.
- 182) 鈴木成美. 1947. 水海道蝶類目録追加. 虫の国, 2(3): 1.
- 183) 鈴木成美. 1948a. ウスバシロテフを想う. 虫の国, 3(9): 2.
- 184) 鈴木成美. 1948c. 水海道にウスバシロチョウ産す. 虫の国, 号外: 1.
- 185) 鈴木成美. 1949a. 郷土産蝶類覚え書, 其の五. 虫の国, 4(6): 10-11.
- 186) 鈴木成美. 1949b. 郷土産蝶類覚え書, 其の四. 虫の国, 4(5): 6-8.
- 187) 鈴木成美. 1953. その後のウスバシロチョウ. 虫の国, 8(1): 9.
- 188) 鈴木成美. 1980. 茨城県産ウスバシロチョウの食草. おけら, (50): 75-77.
- 189) 鈴木成美. 1989. 低地産ウスバシロチョウについて. 日本の生物, 3(5): 61-67.
- 190) 鈴木成美・廣瀬 誠・塩田正寛. 1981. 茨城県産ウスバシロチョウの生態. 蝶と蛾, 31(3/4): 181-187.
- 191) 鈴木敏雄. 1997. オオムラサキのスギタニ型の記録. おとしぶみ, (17): 41.
- 192) 高橋晴彦・高橋潔. 2009. 常陸大宮市におけるカラスシジミの追加記録. るりぼし, (38): 67.
- 193) 高橋 潔. 1973. キバネセセリを採集する. 茨城蝶類, (2): 1-2.
- 194) 高橋 潔. 1974a. 茨城県産のミドリシジミ類目録. 瑠璃星, 2(1~2): 45-48.
- 195) 高橋 潔. 1974b. 八溝山のゼフィルス. 茨城蝶類, (4): 1-2.
- 196) 高橋 潔. 1974c. 和尚山のゼフィルス. 茨城蝶類, (8): 1-2.
- 197) 高橋 潔. 2003a. クロシジミの産卵植物. るりぼし, (28): 34-35.
- 198) 高橋 潔. 2003b. ひたちなか市でクロミドリシジミを採集. るりぼし, (28): 36.
- 199) 高橋 潔. 2007a. 八溝山におけるキバネセセリの古い目撃記録. るりぼし, (34): 41.
- 200) 高橋 潔. 2007b. 北茨城市におけるキバネセセリの古い記録. るりぼし, (3): 40.
- 201) 高橋 潔・高橋晴彦. 2014. ウスバシロチョウを八溝山の茨城県側で採集. るりぼし, (43): 68-69.
- 202) 高瀬仁志. 1974. 里美の蝶. かじか, (4): 95-105.
- 203) 高津裕明. 1989. オオムラサキを守る運動に期待する. 下妻文化, (14): 6-9.
- 204) 高山治佳. 1974. 私の採集記録から. おけら, (43): 14-15.
- 205) Takenari INOUE and Isamu OKOCHI. 2000. First record *Fixsenia w-album* (Lepidoptera, Lycaenidae) from Ibaraki. 蝶と蛾, 51(2): 117-118.
- 206) 竹内寧彦. 1938a. ウラクロシジミ茨城県に産す. 昆虫界, 6(49): 269.
- 207) 竹内寧彦. 1938b. 茨城県蝶類目録(追加). 虫の世界, 2(7.8): 166.

- 208) 谷 伴夫, 1933. 水戸附近の蝶. 昆虫界, 1(2): 139-143.
 209) 谷 伴夫, 1935a. 茨城県の蝶. 茨城博物同好会誌, (3): 14-22.
 210) 谷 伴夫, 1935b. 水戸附近の蝶の追加. 昆虫界, 3(13): 90-91.
 211) 立川周二, 1959. 境町の蝶相追加. サカイクシベン 創刊号: 1.
 212) 茅根重夫, 1989. オオムラサキの生息地の発見のことなど. 下妻文化, (14): 1-3.
 213) 東海村教育委員会, 2007. 昆虫チョウ類・目録 東海村の自然: 184,259-263,327-328.
 214) 鶴町 浩, 1973. ウラキンシジミ御前山で採集. おけら, (42): 26.
 215) 植村好延, 1995. 高萩のヒメキマダラヒカゲ. おけら, (59): 70.
 216) 植田洋行, 1972. 里美の蝶. かじか臨時増刊号: 49-57.
 217) 内山俊一, 1939. 茨城県の蝶類相. 虫の世界, 3(3, 4): 54-57.
 218) 山本 潔, 1986. 里美村産カンワ食のゼフィルス. るりぼし, (11): 4-5.
 219) 山本 潔, 1988. キバネセセリの記録. るりぼし, (12): 20.
 220) 山本 潔・善場荘八, 1986. ウラキンシジミ卵塊卵数の一資料. るりぼし, (11): 8.
 221) 米田 透, 1968. 採集記録 (御前山). おけら, (32): 5.
 222) 米田 透, 1977. 水府村のクロミドリシジミ. おけら, (46): 25-26.
 223) 米田 透・大阿久義徳, 1980. 茨城のゼフィルス. おけら, (50): 65-74.

チョウ目 ガ類

- 1) 林 恵治, 2008. 取手市などで採集したガ類の記録. ミュージアムパーク茨城県自然博物館 (編) 「2007年茨城県の昆虫類および無脊椎動物の動向」, pp.51-59.
- 2) 林 恵治・佐藤和明・鈴木雷太, 2012. 2011年のチョウ目(ガ類)の動向. ミュージアムパーク茨城県自然博物館 (編) 「2011年茨城県の昆虫類および無脊椎動物の動向」, p59.
- 3) 金子岳夫, 2004. 茨城県石下町でフチグロトゲエダシヤクを採集. 誘蛾燈, (177):114.
- 4) 岸田泰則編, 2011. 日本産蛾類標準図鑑1. 352 pp. 学研教育出版.
- 5) 岸田泰則編, 2011. 日本産蛾類標準図鑑2. 416 pp. 学研教育出版.
- 6) 松井安俊, 1993. チョウ目ガ類. 水戸昆虫研究会編『茨城県の昆虫』, : 238-298.
- 7) 那須義次・広渡俊哉・岸田泰則編, 2013. 日本産蛾類標準図鑑4. 552 pp., 学研教育出版.
- 8) 佐藤和明・釣巻岳人, 2009. 穴塚大池におけるガ類の記録(2003年～2008年). ミュージアムパーク茨城県自然博物館 (編) 「2008年茨城県の昆虫類および無脊椎動物の動向」 pp.53-57.
- 9) 谷野泰義, 2004. 菅生沼の昆虫 (1). るりぼし, (31):57.

トビケラ目

- 1) 中原和朗, 1914. 日本産剝石蠶科 (Limnophilidae) の研究. 動物学雑誌, 26(389): 341-357.
- 2) Kobayashi, M. 1987. Caddisflies from Shimane Prefecture in Japan. Bulletin of the Kanagawa Prefectural Museum (Natural Science), 17: 13-35.
- 3) Nishimoto, H., T. Nozaki & D. E. Ruitter. 2000. New limnephilid genus (Trichoptera) from Japan, with description of new species. Entomological Science, 3: 377-386.
- 4) 勝間信之, 2007. 茨城県常陸太田市でギンボシツツトビケラを採集. るりぼし, (34): 15-16.
- 5) Katsuma, N. 2009. A new species of the genus *Setodes* Rambur (Trichoptera, Leptoceridae) from Japan. Biogeography, 11: 41-46.
- 6) 勝間信之, 2010. トビケラ目. 「茨城県自然博物館総合調査報告書－2009年 茨城県の昆虫類およびその他の無脊椎動物の動向－」, pp. 41-42, ミュージアムパーク茨城県自然博物館.
- 7) 勝間信之, 2010. 茨城県石岡市上曾峠におけるトビケラ類成虫の記録. るりぼし, (39): 85-86.
- 8) 勝間信之, 2011. トビケラ目. 「茨城県自然博物館総合調査報告書－2010年 茨城県の昆虫類およびその他の無脊椎動物の動向」, pp. 37-38, ミュージアムパーク茨城県自然博物館.
- 9) 勝間信之, 2011. 高萩市滝ノ倉湿原のトビケラ. るりぼし, (40): 67-68.
- 10) Ito, T. N. Kuhara and N. Katsuma. 2013. The genus *Adicella* McLachlan (Trichoptera, Leptoceridae) in Japan. Zootaxa, 3635: 27-39.

ハチ目

- 1) 山根爽一・井上尚武, 1993. ハチ目 Hymenoptera. 水戸昆虫研究会 (編) 「茨城県の昆虫」, pp.197-215, 水戸市立博物館.
- 2) 栃木県, 2005. レッドデータブックとちぎ, 900 pp., 栃木県.
- 3) 平嶋義宏・森本 桂 (監), 2008. 新訂 原色昆虫大図鑑第Ⅲ巻, 654 pp., 北隆館.
- 4) 森林総合研究所 HP. <https://www.ffpri.affrc.go.jp/labs/seibut/bcg/bcg00170.html> (2014年9月1日閲覧).

- 5) 海老原史郎. 1981. 茨城県内のアシナガバチ類. 茨城県高等学校教育研究会生物部 (編)「茨城の生物 第2集」, pp. 233-238, 茨城県高等学校教育研究会生物部.
- 6) 銚田二高生物部. 1980. 銚田町周辺のアシナガバチの研究. 鹿行の自然, (2): 19-26.
- 7) 銚田二高生物部. 1981. 銚田町周辺のアシナガバチの研究 (2). 鹿行の自然, (3): 29-32.
- 8) 久松正樹・山根爽一・綿引昇二. 1986. 茨城県のドロバチ科 (Eumenidae) ハチ類. 茨城大学教育学部紀要 (自然科学), 35: 45-64.
- 9) 藤丸篤夫. 2014. ハチハンドブック. 104 pp., 文一総合出版.
- 10) 久松正樹・山根爽一. 1998. ハチ類. 「茨城県自然博物館第1次総合調査報告書」, pp. 273-275, ミュージアムパーク茨城県自然博物館.
- 11) 井上尚武. 2003. 茨城県産ハチ目の分布資料1. るりぼし, (30): 50-53.
- 12) 田仲義弘. 2012. 狩蜂生態図鑑 ハンティング行動を写真で解く. 192 pp., 全国農村教育協会.
- 13) 茨城県生活環境部. 1995. 特定動植物分布調査報告書2 茨城の特定動植物の分布 動物編 (平成5・6年). 417 pp., 茨城県生活環境部.
- 14) 久松正樹. 2006. 茨城県におけるドロバチモドキ科ハチ類 (ハチ目) 2種の新しい生息地. 茨城県自然博物館研究報告, (9): 27-28.
- 15) 久松正樹. 2008a. ハチ目. 「茨城県自然博物館総合調査報告書—2007年 茨城県の昆虫およびその他の無脊椎動物の動向—」, pp. 31-32, ミュージアムパーク茨城県自然博物館.
- 16) 久松正樹. 2001. 茨城県におけるニッポンハナダカバチ (*Bembix niponica*) の新しい生息地. 茨城県自然博物館研究報告, (4): 95-96.
- 17) 久松正樹. 2013. ハチ目. 「茨城県自然博物館総合調査報告書—2012年 茨城県の昆虫およびその他の無脊椎動物の動向—」, pp. 30. ミュージアムパーク茨城県自然博物館.
- 18) 籾倉正人・久松正樹. 2009. 茨城県つくば市におけるトモンハナバチの記録. 茨城県自然博物館研究報告, (12): 15-16.
- 19) 多田内修・村尾竜起. 2014. 日本産ハナバチ図鑑. 479 pp., 文一総合出版.
- 20) 久松正樹. 2012. ハチ目. 「茨城県自然博物館総合調査報告書—2011年 茨城県の昆虫およびその他の無脊椎動物の動向—」, pp. 41-47. ミュージアムパーク茨城県自然博物館.
- 21) 郷右近勝男. 2010. 砂浜の後退にともなう海浜性有剣ハチ類の衰退. 石井実 (監修)「日本の昆虫の衰亡と保護」, pp. 174-188, 北隆館.
- 22) 久松正樹. 2011a. 茨城県阿字ヶ浦河岸砂丘における野生ハナバチ群集の種構成と花の利用状況. 環境動物昆虫学会誌, 22: 23-32.
- 23) 久松正樹. 2011b. 茨城県美浦村陸平貝塚における野生ハナバチ群集の種構成. 茨城県自然博物館研究報告, (14): 15-25.
- 24) 久松正樹. 2003. シーボルトが収集した昆虫標本. 石山禎一・香沢宣賢・宮坂正英・向井 晃 (編)「新・シーボルト研究 I 自然科学・医学篇」, pp. 169-187, 八坂書房.
- 25) 久松正樹. 2008b. 城里町におけるウマノオバチの記録. るりぼし, (36): 66.
- 26) 久松正樹. 2010a. ハチ目. 「茨城県自然博物館総合調査報告書—2009年 茨城県の昆虫およびその他の無脊椎動物の動向—」, pp. 35-36, ミュージアムパーク茨城県自然博物館.
- 27) 久松正樹. 2010b. ウマノオバチの採集記録. るりぼし, (39): 80.
- 28) 久松正樹・川相美奈子. 2006. 茨城県におけるハチ目昆虫のいくつかの記録. 茨城県自然博物館研究報告, (9): 19-25.
- 29) 小菅次男. 2003. ウマノオバチの産卵行動の観察記録. るりぼし, (30): 54-57.
- 30) 押野 浩・久松正樹. 2002. 茨城県ではじめて記録されたウマノオバチ *Euurobracon yokahamae* Dalla Torre, 1898 (Hymenoptera, Braconidae). 茨城県自然博物館研究報告, (5): 121-122.
- 31) 久松正樹・山根爽一. 2008. 茨城県八溝山麓における野生ハナバチの種構成と花の利用様式. 昆虫 ニューシリーズ, 11: 115-127.
- 32) Hisamatsu, M. & Sô. Yamane. 2006. Faunal makeup of wild bees and their flower utilization in a semi-urbanized area in central Japan. Entomological Science, 9: 137-145.
- 33) 福井県福祉環境部自然保護課 (編). 2002. 福井県の絶滅のおそれのある野生動物 (福井県レッドデータブック, 動物編), 243 pp., 福井県福祉環境部自然保護課.
- 34) 石井英世・山根爽一. 1981. 茨城県八溝山麓における野性ハナバチの調査. 茨城大学教育学部紀要 (自然科学), (30): 45-59.
- 35) Hisamatsu, M. 2010. Species diversity and composition of wild bees observed at Mt. Tsukuba, Ibaraki Prefecture, central Japan. Japanese Journal of Environmental Entomology and Zoology, 21: 127-134.
- 36) 鷲谷いづみ・鈴木和雄・加藤 真・小野正人. 1997. マルハナバチ・ハンドブック 野山の花とパートナーシップを知るために. 49 pp., 文一総合出版.
- 37) 荒川 正. 2012. 那珂市でルリモンハナバチを採集. るりぼし, (41): 124.
- 38) 久松正樹・西野優子. 2003. 「筑波ふれあいの里」における昆虫. おとしぶみ, (23): 1-8.
- 39) 高橋誠一・羽田義任・田塾 正. 2009. 日本産ギングチバチ亜科の分布について. つねきばち, (16): 41-66.
- 40) 石川県. 2009. 改訂・石川県の絶滅のおそれのある野生生物 いしかわレッドデータブック〈動物編〉2009. 446 pp., 石川県.

- 41) 茨城県高等学校教育研究会生物部, 1971. 昭和 45 年度 自然財分布調査報告書, 106 pp., 茨城県教育委員会.
- 42) 茨城県高等学校教育研究会生物部, 1973. 昭和 47 年度 特別地域自然材分布調査報告書, 564 pp., 茨城県教育委員会.
- 43) 寺山守・久保田敏・江口克之, 2014. 日本産アリ類図鑑, 278 pp., 朝倉書店.
- 44) 井上尚武, 1981. 茨城県のアリ, 「茨城の生物 第 2 集」, pp. 224-232, 茨城県高等学校教育研究会生物部.

参照文献 (以下の文献も分布・生態などの記述において参照した)

- 上野俊一・黒澤良彦・佐藤正孝 (編著), 1985. 原色日本甲虫図鑑 (II), 514 pp., 保育社.
- 黒澤良彦・久松定成・佐々治 寛 (編著), 1985. 原色日本甲虫図鑑 (III), 500 pp., 保育社.
- 林 匡夫・森本 桂・木元新作 (編著), 1984. 原色日本甲虫図鑑 (IV), 438. pp, 保育社.
- 大林延夫・新里達也 (共編), 2007. 日本産カミキリムシ, 818 pp., 東海大学出版会.
- 大桃定洋・福富宏和, 2013. 日本産タマムシ大図鑑, 月刊むし・昆虫大図鑑シリーズ 7, 206 pp., むし社.
- 佐々治 寛, 1998. テントウムシの自然史, 251 pp., 東海大学出版会.
- 林 成多, 2012. 日本のネクイハムシ, 月刊むし・昆虫図説シリーズ 2, 95 pp., むし社.
- 森 正人・北山 昭, 1993. 図説日本のゲンゴロウ, 215 pp., 環境科学株式会社.
- 茨城県, 2000. 茨城県における絶滅のおそれのある野生生物 (動物編) 茨城県版レッドデータブック, 195 pp., 茨城県生活環境部環境政策課.
- 川井信矢・堀 肇久・河原正和・稲垣政志, 2008. 日本産コガネムシ上科図説 第 1 巻 食糞群 (普及版), 197 pp., 昆虫文献・六本脚.

3) クモ類 文献一覧

- 1) Ono, H. & E. Shinkai. 1988. Notes on the Japanese sandy-beach spider, *Lycosa ishikariana* (Araneae, Lycosidae), based upon fresh topotypical specimens. *Memoirs of the National Science Museum, Tokyo*, (21): 131-135.
- 2) 千国安之輔. 1989. 写真日本クモ類大図鑑. 308 pp., 偕成社.
- 3) 茨城県生活環境部 (編). 2000. 茨城における絶滅のおそれのある野生生物 (動物編), 茨城県版レッドデータブック. 195 pp., 茨城県生活環境部環境政策課.
- 4) 新海栄一. 2006. 日本のクモ. 336 pp., 文一総合出版.
- 5) 小野展嗣 (編著). 2009. 日本産クモ類. xvi + 738 pp., 東海大学出版会.
- 6) 井上尚武. 1991. イソコモリグモの太平洋岸における記録. *日本の生物*, 5(1): 75.
- 7) 井上尚武. 2005. 日立市とその周辺の生き物メモ. 茨城県多賀高等学校紀要, (17): 39-55.
- 8) 井上尚武. 2009a. 日立市とその周辺の生き物メモ, 2. 茨城県多賀高等学校紀要, (19): 59-77.
- 9) 茨城生物の会. 2008. 平成 19 年度 茨城県特定動植物分布調査報告書 動物編. 43 pp., 茨城県生活環境部.
- 10) 菅波洋平. 1971. 茨城県の真正蜘蛛類 1. 茨城県北部の真正蜘蛛類について. *Atypus*, (56): 14-37.
- 11) 菅波洋平. 1998. 筑波山の土壌動物, クモ類. 「第 1 次総合調査報告書」, pp. 302-305, ミュジウムパーク茨城県自然博物館.
- 12) 菅波洋平. 2001. 茨城県中央地域の土壌動物, クモ類. 「第 2 次総合調査報告書」, pp. 332-342, ミュジウムパーク茨城県自然博物館.
- 13) 菅波洋平. 2004. 茨城県北東部地域における土壌動物, クモ類. 「第 3 次総合調査報告書」, pp. 366-370, ミュジウムパーク茨城県自然博物館.
- 14) 菅波洋平. 1995. 茨城県の特定動植物の分布, 動物編. 「茨城県特定動植物分布調査報告書 2」, 31 pp., 茨城県生活環境部.
- 15) 笹岡文雄. 2006. 北関東 3 県 (群馬, 栃木, 茨城) におけるキシノウエトタテグモについて. *Kishidaia*, (89): 39-42.
- 16) Yaginuma, T. 1979. A study of the Japanese species of nesticid spiders. *Fac. Let. Rev., Otomon Gakuin University*, (13): 255-287.
- 17) 水山栄子・関由美子・沼田貞子・堀越早苗. 2009. 土浦市穴塚のクモ類. *Kishidaia*, (95): 87-96.
- 18) 菅波洋平・山根尚子・深澤由憲子・久地岡美保・薄井由美子. 1975. 石尊山の真正蜘蛛類. *Kishidaia*, (39): 9-14.
- 19) 茅根重夫. 2003. 茨城県自然博物館およびその周辺の真性クモ類. 茨城県自然博物館研究報告, (6): 45-53.
- 20) 笹岡文雄. 1998. 茨城県久慈郡大子町のクモ. *Kishidaia*, (73): 51-57.
- 21) 新海 明. 2007. ワスレナグモの全国分調査結果. *Kishidaia*, (92): 39-52.
- 22) 菅波洋平. 1992. 茨城県のクモ類 (編) 「茨城の生物」, pp. 206-211.
- 23) 井上尚武. 2009b. 茨城県のイソコモリグモ (1) 発見のいきさつ. *Kishidaia*, (96): 63-67.
- 24) 井上尚武. 2013. 津波被災後の高萩海岸のイソコモリグモ. *茨城生物*, (33): 25-28.
- 25) 井上尚武. 2015a. 茨城県のイソコモリグモ (2) 津波被災後の海岸で生息を確認. *Kishidaia*, (106): 39-41.
- 26) 井上尚武. 2015b. 茨城県におけるワスレナグモの新産地. *Kishidaia*, (106): 55.
- 27) 井上尚武. 2015c. 茨城県におけるコガネグモとコアシダカグモの記録. *Kishidaia*, (106): 57.

- 158) 佐々木泰弘. 2012. 常陸大宮市にてオオヒカゲ採集. るりぼし, (41): 108.
- 159) 佐々木泰弘・有賀俊司・塩田正寛. 1990. 阿武隈山地の蝶(3)シロチョウ科. おけら, (56): 2-52.
- 160) 佐藤研一・塩田正寛. 2004. 日立市でスジボソヤマキチョウを記録する. るりぼし, (31): 72.
- 161) 佐藤友良. 1973. フジミドリシジミを採集する. 茨城蝶類, (1): 1-2.
- 162) 佐藤豊一. 1975. 古河の蝶類. 茨城生物, (3): 26-30.
- 163) 佐藤洋照. 1979. 私の貴蝶品目録. おけら, (48): 62-68.
- 164) 関根陽一. 1996. 茨城県におけるヒメキマダラヒカゲの記録. るりぼし, (20): 73.
- 165) 清水照雄. 1992. 茨城県北部でフジミドリ採卵. るりぼし, (17): 14.
- 166) 篠葉利夫. 1967. クロミドリシジミ採集される. 蝶と蛾, 18(1.2).
- 167) 塩田正寛. 1964. 茨城県産蝶類の4種について. インセクト, 14(2): 10-11.
- 168) 塩田正寛. 1971. カラスシジミ採集される. おけら, (39): 9.
- 169) 塩田正寛. 1973a. フジミドリシジミの記録について. 茨城蝶類, (1): 2.
- 170) 塩田正寛. 1973b. ウラジロミドリシジミを採集する. 茨城蝶類, (3): 1-2.
- 171) 塩田正寛. 1973c. カラスシジミの記録について. 茨城蝶類, (3): 2.
- 172) 塩田正寛. 1974. 久慈郡里美村でウラジロミドリシジミを採集. おけら, (43): 17.
- 173) 塩田正寛. 1976. ウスバシロチョウを採る. 茨城蝶類, (13): 1.
- 174) 塩田正寛. 1977. ウスバシロチョウ再発見の記. おけら, (46): 1-2.
- 175) 塩田正寛. 1978. 私の採集記録から. おけら, (47): 33.
- 176) 塩田正寛. 1993. 日立市小木津山の蝶群集. おけら, (58): 1-36.
- 177) 塩田正寛. 2015. 茨城県の蝶. :803pp.
- 178) 塩田正寛・久保田正秀. 1972. 茨城県産蝶類2種について. 蝶と蛾, 23(1): 24.
- 179) 塩田正寛・おもしろサイエンスクラブ. 2001. 大子産チョウ2種の記録. るりぼし, (26): 69-70.
- 180) 塩田正寛・鈴木保男・篠葉利夫. 1968. 茨城県産蝶類6種について. 蝶と蛾, 19(3/4): 111-113.
- 181) 鈴木秀広. 1977. 1976年私の採集記録から. おけら, (46): 43-44.
- 182) 鈴木成美. 1947. 水海道蝶類目録追加. 虫の国, 2(3): 1.
- 183) 鈴木成美. 1948a. ウスバシロテフを想う. 虫の国, 3(9): 2.
- 184) 鈴木成美. 1948c. 水海道にウスバシロチョウ産す. 虫の国, 号外: 1.
- 185) 鈴木成美. 1949a. 郷土産蝶類覚え書, 其の五. 虫の国, 4(6): 10-11.
- 186) 鈴木成美. 1949b. 郷土産蝶類覚え書, 其の四. 虫の国, 4(5): 6-8.
- 187) 鈴木成美. 1953. その後のウスバシロチョウ. 虫の国, 8(1): 9.
- 188) 鈴木成美. 1980. 茨城県産ウスバシロチョウの食草. おけら, (50): 75-77.
- 189) 鈴木成美. 1989. 低地産ウスバシロチョウについて. 日本の生物, 3(5): 61-67.
- 190) 鈴木成美・廣瀬 誠・塩田正寛. 1981. 茨城県産ウスバシロチョウの生態. 蝶と蛾, 31(3/4): 181-187.
- 191) 鈴木敏雄. 1997. オオムラサキのスギタニ型の記録. おとしぶみ, (17): 41.
- 192) 高橋晴彦・高橋潔. 2009. 常陸大宮市におけるカラスシジミの追加記録. るりぼし, (38): 67.
- 193) 高橋 潔. 1973. キバネセセリを採集する. 茨城蝶類, (2): 1-2.
- 194) 高橋 潔. 1974a. 茨城県産のミドリシジミ類目録. 瑠璃星, 2(1~2): 45-48.
- 195) 高橋 潔. 1974b. 八溝山のゼフィルス. 茨城蝶類, (4): 1-2.
- 196) 高橋 潔. 1974c. 和尚山のゼフィルス. 茨城蝶類, (8): 1-2.
- 197) 高橋 潔. 2003a. クロシジミの産卵植物. るりぼし, (28): 34-35.
- 198) 高橋 潔. 2003b. ひたちなか市でクロミドリシジミを採集. るりぼし, (28): 36.
- 199) 高橋 潔. 2007a. 八溝山におけるキバネセセリの古い目撃記録. るりぼし, (34): 41.
- 200) 高橋 潔. 2007b. 北茨城市におけるキバネセセリの古い記録. るりぼし, (3): 40.
- 201) 高橋 潔・高橋晴彦. 2014. ウスバシロチョウを八溝山の茨城県側で採集. るりぼし, (43): 68-69.
- 202) 高瀬仁志. 1974. 里美の蝶. かじか, (4): 95-105.
- 203) 高津裕明. 1989. オオムラサキを守る運動に期待する. 下妻文化, (14): 6-9.
- 204) 高山治佳. 1974. 私の採集記録から. おけら, (43): 14-15.
- 205) Takenari INOUE and Isamu OKOCHI. 2000. First record *Fixsenia w-album* (Lepidoptera, Lycaenidae) from Ibaraki. 蝶と蛾, 51(2): 117-118.
- 206) 竹内寧彦. 1938a. ウラクロシジミ茨城県に産す. 昆虫界, 6(49): 269.
- 207) 竹内寧彦. 1938b. 茨城県蝶類目録(追加). 虫の世界, 2(7.8): 166.

- 208) 谷 伴夫, 1933. 水戸附近の蝶. 昆虫界, 1(2): 139-143.
 209) 谷 伴夫, 1935a. 茨城県の蝶. 茨城博物同好会誌, (3): 14-22.
 210) 谷 伴夫, 1935b. 水戸附近の蝶の追加. 昆虫界, 3(13): 90-91.
 211) 立川周二, 1959. 境町の蝶相追加. サカイクシベン 創刊号: 1.
 212) 茅根重夫, 1989. オオムラサキの生息地の発見のことなど. 下妻文化, (14): 1-3.
 213) 東海村教育委員会, 2007. 昆虫チョウ類・目録 東海村の自然: 184,259-263,327-328.
 214) 鶴町 浩, 1973. ウラキンシジミ御前山で採集. おけら, (42): 26.
 215) 植村好延, 1995. 高萩のヒメキマダラヒカゲ. おけら, (59): 70.
 216) 植田洋行, 1972. 里美の蝶. かじか臨時増刊号: 49-57.
 217) 内山俊一, 1939. 茨城県の蝶類相. 虫の世界, 3(3, 4): 54-57.
 218) 山本 潔, 1986. 里美村産カンワ食のゼフィルス. るりぼし, (11): 4-5.
 219) 山本 潔, 1988. キバネセセリの記録. るりぼし, (12): 20.
 220) 山本 潔・善場荘八, 1986. ウラキンシジミ卵塊卵数の一資料. るりぼし, (11): 8.
 221) 米田 透, 1968. 採集記録 (御前山). おけら, (32): 5.
 222) 米田 透, 1977. 水府村のクロミドリシジミ. おけら, (46): 25-26.
 223) 米田 透・大阿久義徳, 1980. 茨城のゼフィルス. おけら, (50): 65-74.

チョウ目 ガ類

- 林 恵治, 2008. 取手市などで採集したガ類の記録. ミュージアムパーク茨城県自然博物館 (編) 「2007年茨城県の昆虫類および無脊椎動物の動向」, pp.51-59.
- 林 恵治・佐藤和明・鈴木雷太, 2012. 2011年のチョウ目(ガ類)の動向. ミュージアムパーク茨城県自然博物館 (編) 「2011年茨城県の昆虫類および無脊椎動物の動向」, p59.
- 金子岳夫, 2004. 茨城県石下町でフチグロトゲエダシヤクを採集. 誘蛾燈, (177):114.
- 岸田泰則編, 2011. 日本産蛾類標準図鑑1. 352 pp. 学研教育出版.
- 岸田泰則編, 2011. 日本産蛾類標準図鑑2. 416 pp. 学研教育出版.
- 松井安俊, 1993. チョウ目ガ類. 水戸昆虫研究会編『茨城県の昆虫』, : 238-298.
- 那須義次・広渡俊哉・岸田泰則編, 2013. 日本産蛾類標準図鑑4. 552 pp., 学研教育出版.
- 佐藤和明・釣巻岳人, 2009. 穴塚大池におけるガ類の記録(2003年~2008年). ミュージアムパーク茨城県自然博物館 (編) 「2008年茨城県の昆虫類および無脊椎動物の動向」 pp.53-57.
- 谷野泰義, 2004. 菅生沼の昆虫 (1). るりぼし, (31):57.

トビケラ目

- 中原和朗, 1914. 日本産剝石蠶科 (Limnophilidae) の研究. 動物学雑誌, 26(389): 341-357.
- Kobayashi, M. 1987. Caddisflies from Shimane Prefecture in Japan. Bulletin of the Kanagawa Prefectural Museum (Natural Science), 17: 13-35.
- Nishimoto, H., T. Nozaki & D. E. Ruitter. 2000. New limnephilid genus (Trichoptera) from Japan, with description of new species. Entomological Science, 3: 377-386.
- 勝間信之, 2007. 茨城県常陸太田市でギンボシツツトビケラを採集. るりぼし, (34): 15-16.
- Katsuma, N. 2009. A new species of the genus *Setodes* Rambur (Trichoptera, Leptoceridae) from Japan. Biogeography, 11: 41-46.
- 勝間信之, 2010. トビケラ目. 「茨城県自然博物館総合調査報告書-2009年 茨城県の昆虫類およびその他の無脊椎動物の動向-」, pp. 41-42, ミュージアムパーク茨城県自然博物館.
- 勝間信之, 2010. 茨城県石岡市上曾峠におけるトビケラ類成虫の記録. るりぼし, (39): 85-86.
- 勝間信之, 2011. トビケラ目. 「茨城県自然博物館総合調査報告書-2010年 茨城県の昆虫類およびその他の無脊椎動物の動向」, pp. 37-38, ミュージアムパーク茨城県自然博物館.
- 勝間信之, 2011. 高萩市滝ノ倉湿原のトビケラ. るりぼし, (40): 67-68.
- Ito, T. N. Kuhara and N. Katsuma. 2013. The genus *Adicella* McLachlan (Trichoptera, Leptoceridae) in Japan. Zootaxa, 3635: 27-39.

ハチ目

- 山根爽一・井上尚武, 1993. ハチ目 Hymenoptera. 水戸昆虫研究会 (編) 「茨城県の昆虫」, pp.197-215, 水戸市立博物館.
- 栃木県, 2005. レッドデータブックとちぎ, 900 pp., 栃木県.
- 平嶋義宏・森本 桂 (監), 2008. 新訂 原色昆虫大図鑑第III巻, 654 pp., 北隆館.
- 森林総合研究所 HP. <https://www.ffpri.affrc.go.jp/labs/seibut/bcg/bcg00170.html> (2014年9月1日閲覧).

- 5) 海老原史郎. 1981. 茨城県内のアシナガバチ類. 茨城県高等学校教育研究会生物部(編)「茨城の生物 第2集」, pp. 233-238, 茨城県高等学校教育研究会生物部.
- 6) 銚田二高生物部. 1980. 銚田町周辺のアシナガバチの研究. 鹿行の自然, (2): 19-26.
- 7) 銚田二高生物部. 1981. 銚田町周辺のアシナガバチの研究(2). 鹿行の自然, (3): 29-32.
- 8) 久松正樹・山根爽一・綿引昇二. 1986. 茨城県のドロバチ科(Eumenidae)ハチ類. 茨城大学教育学部紀要(自然科学), 35: 45-64.
- 9) 藤丸篤夫. 2014. ハチハンドブック. 104 pp., 文一総合出版.
- 10) 久松正樹・山根爽一. 1998. ハチ類. 「茨城県自然博物館第1次総合調査報告書」, pp. 273-275, ミュージアムパーク茨城県自然博物館.
- 11) 井上尚武. 2003. 茨城県産ハチ目の分布資料1. るりぼし, (30): 50-53.
- 12) 田仲義弘. 2012. 狩蜂生態図鑑ハンティング行動を写真で解く. 192 pp., 全国農村教育協会.
- 13) 茨城県生活環境部. 1995. 特定動植物分布調査報告書2 茨城の特定動植物の分布 動物編(平成5・6年). 417 pp., 茨城県生活環境部.
- 14) 久松正樹. 2006. 茨城県におけるドロバチモドキ科ハチ類(ハチ目)2種の新しい生息地. 茨城県自然博物館研究報告, (9): 27-28.
- 15) 久松正樹. 2008a. ハチ目. 「茨城県自然博物館総合調査報告書—2007年茨城県の昆虫およびその他の無脊椎動物の動向—」, pp. 31-32, ミュージアムパーク茨城県自然博物館.
- 16) 久松正樹. 2001. 茨城県におけるニッポンハナダカバチ(*Bembix niponica*)の新しい生息地. 茨城県自然博物館研究報告, (4): 95-96.
- 17) 久松正樹. 2013. ハチ目. 「茨城県自然博物館総合調査報告書—2012年茨城県の昆虫およびその他の無脊椎動物の動向—」, pp. 30. ミュージアムパーク茨城県自然博物館.
- 18) 籾倉正人・久松正樹. 2009. 茨城県つくば市におけるトモンハナバチの記録. 茨城県自然博物館研究報告, (12): 15-16.
- 19) 多田内修・村尾竜起. 2014. 日本産ハナバチ図鑑. 479 pp., 文一総合出版.
- 20) 久松正樹. 2012. ハチ目. 「茨城県自然博物館総合調査報告書—2011年茨城県の昆虫およびその他の無脊椎動物の動向—」, pp. 41-47. ミュージアムパーク茨城県自然博物館.
- 21) 郷右近勝男. 2010. 砂浜の後退にともなう海浜性有剣ハチ類の衰退. 石井実(監修)「日本の昆虫の衰亡と保護」, pp. 174-188, 北隆館.
- 22) 久松正樹. 2011a. 茨城県阿字ヶ浦河岸砂丘における野生ハナバチ群集の種構成と花の利用状況. 環境動物昆虫学会誌, 22: 23-32.
- 23) 久松正樹. 2011b. 茨城県美浦村陸平貝塚における野生ハナバチ群集の種構成. 茨城県自然博物館研究報告, (14): 15-25.
- 24) 久松正樹. 2003. シーボルトが収集した昆虫標本. 石山禎一・香沢宣賢・宮坂正英・向井 晃(編)「新・シーボルト研究 I 自然科学・医学篇」, pp. 169-187, 八坂書房.
- 25) 久松正樹. 2008b. 城里町におけるウマノオバチの記録. るりぼし, (36): 66.
- 26) 久松正樹. 2010a. ハチ目. 「茨城県自然博物館総合調査報告書—2009年茨城県の昆虫およびその他の無脊椎動物の動向—」, pp. 35-36, ミュージアムパーク茨城県自然博物館.
- 27) 久松正樹. 2010b. ウマノオバチの採集記録. るりぼし, (39): 80.
- 28) 久松正樹・川相美奈子. 2006. 茨城県におけるハチ目昆虫のいくつかの記録. 茨城県自然博物館研究報告, (9): 19-25.
- 29) 小菅次男. 2003. ウマノオバチの産卵行動の観察記録. るりぼし, (30): 54-57.
- 30) 押野 浩・久松正樹. 2002. 茨城県ではじめて記録されたウマノオバチ *Euurobracon yokahamae* Dalla Torre, 1898 (Hymenoptera, Braconidae). 茨城県自然博物館研究報告, (5): 121-122.
- 31) 久松正樹・山根爽一. 2008. 茨城県八溝山麓における野生ハナバチの種構成と花の利用様式. 昆虫 ニューシリーズ, 11: 115-127.
- 32) Hisamatsu, M. & Sô. Yamane. 2006. Faunal makeup of wild bees and their flower utilization in a semi-urbanized area in central Japan. Entomological Science, 9: 137-145.
- 33) 福井県福祉環境部自然保護課(編). 2002. 福井県の絶滅のおそれのある野生動物(福井県レッドデータブック, 動物編), 243 pp., 福井県福祉環境部自然保護課.
- 34) 石井英世・山根爽一. 1981. 茨城県八溝山麓における野性ハナバチの調査. 茨城大学教育学部紀要(自然科学), (30): 45-59.
- 35) Hisamatsu, M. 2010. Species diversity and composition of wild bees observed at Mt. Tsukuba, Ibaraki Prefecture, central Japan. Japanese Journal of Environmental Entomology and Zoology, 21: 127-134.
- 36) 鷺谷いづみ・鈴木和雄・加藤 真・小野正人. 1997. マルハナバチ・ハンドブック 野山の花とパートナーシップを知るために. 49 pp., 文一総合出版.
- 37) 荒川 正. 2012. 那珂市でルリモンハナバチを採集. るりぼし, (41): 124.
- 38) 久松正樹・西野優子. 2003. 「筑波ふれあいの里」における昆虫. おとしぶみ, (23): 1-8.
- 39) 高橋誠一・羽田義任・田塾 正. 2009. 日本産ギングチバチ亜科の分布について. つねきばち, (16): 41-66.
- 40) 石川県. 2009. 改訂・石川県の絶滅のおそれのある野生生物 いしかわレッドデータブック<動物編> 2009. 446 pp., 石川県.

- 41) 茨城県高等学校教育研究会生物部, 1971. 昭和45年度自然財分布調査報告書, 106 pp., 茨城県教育委員会.
- 42) 茨城県高等学校教育研究会生物部, 1973. 昭和47年度特別地域自然材分布調査報告書, 564 pp., 茨城県教育委員会.
- 43) 寺山守・久保田敏・江口克之, 2014. 日本産アリ類図鑑, 278 pp., 朝倉書店.
- 44) 井上尚武, 1981. 茨城県のアリ, 「茨城の生物第2集」, pp. 224-232, 茨城県高等学校教育研究会生物部.

参照文献 (以下の文献も分布・生態などの記述において参照した)

- 上野俊一・黒澤良彦・佐藤正孝 (編著), 1985. 原色日本甲虫図鑑 (II), 514 pp., 保育社.
- 黒澤良彦・久松定成・佐々治 寛 (編著), 1985. 原色日本甲虫図鑑 (III), 500 pp., 保育社.
- 林 匡夫・森本 桂・木元新作 (編著), 1984. 原色日本甲虫図鑑 (IV), 438 pp., 保育社.
- 大林延夫・新里達也 (共編), 2007. 日本産カミキリムシ, 818 pp., 東海大学出版会.
- 大桃定洋・福富宏和, 2013. 日本産タマムシ大図鑑, 月刊むし・昆虫大図鑑シリーズ7, 206 pp., むし社.
- 佐々治 寛, 1998. テントウムシの自然史, 251 pp., 東海大学出版会.
- 林 成多, 2012. 日本のネクイハムシ, 月刊むし・昆虫図説シリーズ2, 95 pp., むし社.
- 森 正人・北山 昭, 1993. 図説日本のゲンゴロウ, 215 pp., 環境科学株式会社.
- 茨城県, 2000. 茨城県における絶滅のおそれのある野生生物 (動物編) 茨城県版レッドデータブック, 195 pp., 茨城県生活環境部環境政策課.
- 川井信矢・堀 肇久・河原正和・稲垣政志, 2008. 日本産コガネムシ上科図説 第1巻 食糞群 (普及版), 197 pp., 昆虫文献・六本脚.

3) クモ類 文献一覧

- 1) Ono, H. & E. Shinkai. 1988. Notes on the Japanese sandy-beach spider, *Lycosa ishikariana* (Araneae, Lycosidae), based upon fresh topotypical specimens. *Memoirs of the National Science Museum, Tokyo*, (21): 131-135.
- 2) 千国安之輔. 1989. 写真日本クモ類大図鑑. 308 pp., 偕成社.
- 3) 茨城県生活環境部 (編). 2000. 茨城における絶滅のおそれのある野生生物 (動物編), 茨城県版レッドデータブック. 195 pp., 茨城県生活環境部環境政策課.
- 4) 新海栄一. 2006. 日本のクモ. 336 pp., 文一総合出版.
- 5) 小野展嗣 (編著). 2009. 日本産クモ類. xvi + 738 pp., 東海大学出版会.
- 6) 井上尚武. 1991. イソコモリグモの太平洋岸における記録. *日本の生物*, 5(1): 75.
- 7) 井上尚武. 2005. 日立市とその周辺の生き物メモ. *茨城県多賀高等学校紀要*, (17): 39-55.
- 8) 井上尚武. 2009a. 日立市とその周辺の生き物メモ, 2. *茨城県多賀高等学校紀要*, (19): 59-77.
- 9) 茨城生物の会. 2008. 平成19年度 茨城県特定動植物分布調査報告書 動物編. 43 pp., 茨城県生活環境部.
- 10) 菅波洋平. 1971. 茨城県の真正蜘蛛類 1. 茨城県北部の真正蜘蛛類について. *Atypus*, (56): 14-37.
- 11) 菅波洋平. 1998. 筑波山の土壌動物, クモ類. 「第1次総合調査報告書」, pp. 302-305, ミュジウムパーク茨城県自然博物館.
- 12) 菅波洋平. 2001. 茨城県中央地域の土壌動物, クモ類. 「第2次総合調査報告書」, pp. 332-342, ミュジウムパーク茨城県自然博物館.
- 13) 菅波洋平. 2004. 茨城県北東部地域における土壌動物, クモ類. 「第3次総合調査報告書」, pp. 366-370, ミュジウムパーク茨城県自然博物館.
- 14) 菅波洋平. 1995. 茨城県の特定動植物の分布, 動物編. 「茨城県特定動植物分布調査報告書2」, 31 pp., 茨城県生活環境部.
- 15) 笹岡文雄. 2006. 北関東3県 (群馬, 栃木, 茨城) におけるキシノウエトタテグモについて. *Kishidaia*, (89): 39-42.
- 16) Yaginuma, T. 1979. A study of the Japanese species of nesticid spiders. *Fac. Let. Rev., Otomon Gakuin University*, (13): 255-287.
- 17) 水山栄子・関由美子・沼田貞子・堀越早苗. 2009. 土浦市穴塚のクモ類. *Kishidaia*, (95): 87-96.
- 18) 菅波洋平・山根尚子・深澤由憲子・久地岡美保・薄井由美子. 1975. 石尊山の真正蜘蛛類. *Kishidaia*, (39): 9-14.
- 19) 茅根重夫. 2003. 茨城県自然博物館およびその周辺の真性クモ類. *茨城県自然博物館研究報告*, (6): 45-53.
- 20) 笹岡文雄. 1998. 茨城県久慈郡大子町のクモ. *Kishidaia*, (73): 51-57.
- 21) 新海 明. 2007. ワスレナグモの全国分調査結果. *Kishidaia*, (92): 39-52.
- 22) 菅波洋平. 1992. 茨城県のクモ類 (編) 「茨城の生物」, pp. 206-211.
- 23) 井上尚武. 2009b. 茨城県のイソコモリグモ (1) 発見のいきさつ. *Kishidaia*, (96): 63-67.
- 24) 井上尚武. 2013. 津波被災後の高萩海岸のイソコモリグモ. *茨城生物*, (33): 25-28.
- 25) 井上尚武. 2015a. 茨城県のイソコモリグモ (2) 津波被災後の海岸で生息を確認. *Kishidaia*, (106): 39-41.
- 26) 井上尚武. 2015b. 茨城県におけるワスレナグモの新産地. *Kishidaia*, (106): 55.
- 27) 井上尚武. 2015c. 茨城県におけるコガネグモとコアシダカグモの記録. *Kishidaia*, (106): 57.

7 その他無脊椎動物

1) 概要

本改訂版では「その他無脊椎動物」として、淡水・汽水性の動物群と陸生巻貝類とを取り上げた。平成12年版と異なるところは、対象に汽水域を加えたことである。茨城県には平成27年5月にラムサール条約湿地に登録された潤沼の他、茂宮川河口干潟（日立市）の汽水域が残されていて、そこには貴重な動物種が生息している。これらの海近くの平地水域は農業や工業発展、都市化などによる開発の対象地域となりやすく、常に注目している必要がある。今回対象にした動物群は8つの動物門にわたり、前回の5動物門（海綿動物門、扁形動物門、苔虫動物門、軟体動物門、節足動物門甲殻類）に刺胞動物門と紐形動物門、環形動物門を新たに加えた。取り上げた種数は85種で、前回の16種の5倍以上である。これは、汽水種の多くがいずれかのカテゴリーに該当したことに加え、研究者の地道な努力により、筑波山系と八溝山系を中心とした陸生巻貝の知見が飛躍的に増えたことの2つが大きく寄与している。

一方、ランクの構成について前回と比較すると、前回の16種のうち絶滅危惧Ⅱ類相当以上は3種のみであったが、今回は情報不足種を除く62種中34種と半数以上となった。また、前回の16種のうち、5種はランクが上がり、同一ランクは7種だった。なお、今回は4種を対象から削除したが、いずれも分類学的な問題に起因するものであり、個体群の回復によるものではない。具体的には、カントウベッコウはヒラベッコウの誤同定と考えられ、これまでのところ本種の県内での分布は確認されていない。ヒタチチリメンカワニナはチリメンカワニナのシノニムとなり、県内での一定数の生息が確認されている。マメシジミとニホンマメシジミは、その他のマメシジミ類を含めて同定がきわめて困難な貝類で、種としての情報の確定が困難である。しかしながら、マメシジミ類はその生息状況に留意する必要がある分類群であることには変わりがない。

これらの結果は、県内ではとりわけ潤沼や河口干潟の汽水域および筑波・八溝山系における生物多様性の危うさを明確に示し、環境保全の必要性を強く示している。

（森野 浩）

○海綿動物門

茨城県の淡水・汽水海綿に関しては、これまで7属12種が報告されている。国内では現在までに11属25種の淡水・汽水海綿が記録されているので、その約半数が本県に分布していることになる。なかでも、汽水性のシロカイメンは県外では宍道湖（島根県）や東郷湖（鳥取県）で報告されているが、本県では潤沼でのみ生息が確認されている。また、ヨコトネカイメンは横利根川で発見された群体を基に1983年に新属新種として記載されたが、その後、本県では生息が確認されていない。なお、本種は舟川河口近くの宍道湖でも報告されている。この他、近年、本県では初記録となるツツミカイメンとマツモトカイメンが、それぞれ横利根川と笠間市の用水路から確認されている（未発表）。

（池澤広美）

○刺胞動物門

我が国の汽水域からは3種のヒドロ虫類（刺胞動物）が知られているが、潤沼水系にはそのうちの1種、エダヒドラが産する。しかし、本種は1990年代以降の情報がなく、今後の調査が必要である。

（森野 浩）

○扁形動物門

本県の淡水性プラナリア類については、現在までに、カズメウズムシ、ミヤマウズムシ、ナミウズムシ、アメリカナミウズムシ、カントウイドウズムシ、サンカクウミウズムシの6種が確認されている。カズメウズムシは山地性で本県では八溝山にのみ生息が確認されている。ミヤマウズムシも山地性で八溝山や筑波山で見られるが、数は減少している。ナミウズムシは平地性で本県に広く生息しているが、

水環境の悪化でやはり減少傾向にある。カントウイドウズムシは地下水性のプラナリアで、現在のところ、常総市（旧水海道市）の浅井戸が唯一の生息確認場所である。それらに対し、外来種のアメリカナミウズムシは水の汚染に強く、現在、利根川水系の河川や用水で分布を拡大している。また、近年、海水および汽水にも生息するサンカクウミウズムシが潤沼から確認されている（未発表）。

（茅根重夫）

○紐形動物門

我が国からは4種の汽水性ヒモムシ類が分布するが、そのうち3種が潤沼から報告されている。しかし、それらは最初の報告以後まったく記録がなく、現状が不明で今後の調査が必要である。

（森野 浩）

○軟体動物門（巻貝類）

本県は、これまで貝類の専門家や愛好家が少なかったため、一部の限られた分類群と地域を除いては陸産貝類・淡水産貝類の調査が他県よりも遅れていた。微小種を中心として県内の貝類相の全容が掴めなかったばかりでなく、経時変化を比較するデータが無いため人為的影響も評価し難い状況であった。今回の改訂では、近年の調査成果をもとに初版の10種から58種へと掲載種を大幅に増加させるとともに、掲載種のカテゴリーも一部変更した。

かつて本県では低地に点在する湖沼群を中心として、今や稀少となってしまった多様な淡水貝類が生息していた。例えば、霞ヶ浦周辺では人々のくらしと淡水棲貝類は密接な関係にあり、カラスガイなどイシガイ類やマシジミが昭和40年代の初めまで食料や肥料として供されていたばかりでなく、釘の素材とともされ、さらにオオタニシやマルタニシの殻は霞ヶ浦周辺の「人形細工」の素材として利用されていたほど産出していた。また、今や国内の多くの地域でレッドデータブックに掲載されているマメタニシやナガオカモノアラガイは、19世紀後半に土浦市をタイプ産地として記載された。湖沼の周囲に豊かな湿地が広がっていた当時、これらは普通種であったことだろう。

しかし、江戸時代以降の開田や昭和初期より始まった干拓事業、そして水質汚染などの環境変化によって、往事を忍ばせる貝類は悉く姿を消してしまった。例えば、マメタニシは利根川を除いて近年は確定的な記録が知られておらず、オオタニシも同様に笠間市・小美玉市以外での決定的な分布情報が無い。水田などに多くみられたマルタニシは近年回復傾向にあるものの、多くの産地でヒメタニシに置き換わり、どこでも見る事ができるものではなくなってしまった。

生息環境の人工改変による被害者として最たる例は、今回新たに「絶滅」として掲載したカタヤマガイ（ミヤイリガイ）である。本種は「不治の病」として恐れられた日本住血吸虫の中間宿主であるため、山梨県や広島県など有病地では大規模な撲滅作戦が国家的プロジェクトによって展開された。火炎放射器での焼却や殺貝剤の散布は言うに及ばず、生息地の水路がコンクリート三面張りへと変更された結果、現在では国内のごく一部の地域を除いて姿を消した。本県でも昭和40年代まで日本住血吸虫による被害があったことはもちろん、カタヤマガイが利根川や小貝川の周辺に生息していたことは、意外や知られていない。

淡水棲貝類の生息環境は、人為的影響ばかりでなく、移入種による生態系改変の危機にも曝されている。かつて水流の弱い小川に広くみられたモノアラガイは、水質悪化のみならず、おそらくハブタエモノアラガイや未同定の移入種に駆逐された結果、ほとんど姿を見ることがなくなった。県南部では、近年爆発的に増加しているスクミリンゴガイとタニシ類とのニッチ競合が懸念されるほか、利根川水系に侵入したカワヒバリガイも動向に注意しなくてはならない。移入種の影響が比較的穏やかな県北部においても近年、日立市でニュージーランド原産のコモチカワツボが確認されるなど、県下全域が移入種の浸潤に脅かされている。

微小な淡水棲貝類としては、水戸市の井戸より得られた地下水系に生息するイマムラミジンツボの行方が気掛かりである。1961年に記載されて以来一切の記録がなく、微小なため見過ごされている可能

性が高いとはいえ、絶滅寸前あるいは絶滅した可能性もあるので、地下水系の保全も忘れてはならない。汽水域の分布に限られる本県において、汽水棲貝類は数少ないものの、カワザンショウ類など多くの種類を今回新たに掲載した。ヒラドカワザンショウは日立市の茂宮川河口でのみ知られ、ヨシダカワザンショウ、クリイロカワザンショウ、ヒナタムシヤドリカワザンショウ、そしてミズゴマツボは利根川下流鹹水域などの限られた範囲で記録があるに過ぎない。同様に鹹水域の砂泥底に生息するカワグチツボは、これまでのところ潤沼東部域でしか知られていない。生貝の個体数も数少なく、動向に留意すべきである。鹹水から淡水域に生息する種類として特筆すべきは、本県が分布の北限となるイシマキガイである。大北川、潤沼、那珂川、利根川で確認されているものの、いずれの産地でも個体数は少ない。内湾奥の潮間帯上部にのみ生息するサビシラトリは、茂宮川河口に形成された干潟からのみ知られる。これらの貝類が生活するには、そもそもの範囲が限定される汽水環境に干潟とヨシ原が存在することが不可欠であるため、河川改修などの改変でこれらを失わないよう保全することが肝要である。

陸産貝類は筑波山とその周辺を除いて知見が限られ、全容が把握されているとは言い難い。しかし、筑波山系から八溝山系を経て阿武隈山地に至る山地とそれ以外の平地では、それぞれ陸産貝類相が異なり、かつ南方系と北方系の種類が混在することで特徴づけられる（南方系のほうが卓越する）。本県の陸産貝類は人為的要因によって劇的に減少したものは少ないが、開発による自然林の減少や植生遷移による生息環境の消滅などの危機に直面している。

主に山地の照葉樹林に棲むヤマタニシは分布の北限域にあり、県内の山地に広く分布するが個体数は少ない。平地の社寺林などに見られるナミコギセルや城里町から知られるマルナタネ、そして常陸太田市周辺に局地的に見られるレンズガイも同様に分布の北限である。一方、北茨城市の山間部から知られるエゾヒメベッコウは分布の南限で、個体群は小さい。ゴマガイは他県ではむしろ普通種の範疇であるものの、茨城県では産地が極めて限られ、僅かな個体が見られるに過ぎない。

生息環境あるいは産地ごとに目を向ければ、鹿嶋市・神栖市の海岸林に局地的に生息するスナガイが注目される。本種は近年本県での分布が確認され、分布の北限にあたる。産地では多産するものの生息域が極めて狭く、現在知られる産地が攪乱されるとすぐさま絶滅の危機に瀕するであろう。石灰岩地帯に固有種が多いことは良く知られるが、茨城県には規模の大きな露頭が無いことから、注目すべき種類は分布していないと思われてきた。しかし近年の調査により、岡山県の石灰岩地帯の固有種とされてきたヤセキセルモドキが日立市から記録された。また、石灰岩洞窟内にのみ生息し、洞窟ごとに別種の可能性が指摘されているホラアナゴマオカチグサは日立市のみならず、笠間市の小規模露頭からも確認された。これらの種類はもともと分布域が狭く、僅かな環境改変でも消滅する恐れがある。県内の石灰岩地帯からは保全すべき希少種が発見される可能性があり、詳細な調査が必要である。このほか、礫の転がる山地の沢沿いの斜面に生息するムシオイガイやヤマキサゴは生息環境が特殊であり、特にムシオイガイは筑波山系と県北部の限られた範囲でしか知られていない希少種である。

筑波山山頂にのみ分布するツクバビロウドマイマイは発見例が数少ない希少種（亜種）であり、現在のところ本県に固有な唯一の陸産貝類である。ハブタエギセルは筑波山系がその産地として良く知られるが、八溝山系・阿武隈山系のブナ林にも点々と分布する準固有種である。近年は筑波山での個体数が減少傾向にあり、植生変化とマニアによる採集圧が原因として考えられる。筑波山系と八溝山系の間中に位置する山塊は、陸産貝類の調査が最も遅れている地域であり、今後の精査によって未知の希少種が発見される可能性がある。

なお、シタラ科とベッコウマイマイ科の各種は分類上の問題を含む種が含まれているため精査が必要であるものの、個体数が少ないなどの理由からその多くを掲載した。

(芳賀拓真)

○軟体動物門（二枚貝類）

県内の淡水域には5科14種の在来淡水二枚貝類が報告されている。県南部の霞ヶ浦や北浦、その流入河川を中心に、かつてはヨコハマシジラガイ、マツカサガイ、ドブガイ類、カラスガイが数多く生息

していた。しかし、現在では生息地の護岸化や埋め立て等の開発行為、森林伐採による土砂の流入など、生息環境は大きく変化しており、二枚貝類は各地で激減した。内湾奥の潮間帯上部に生息するサビシラトリは、茂宮川河口に形成された干潟のみから知られる。また、環境の変化に伴い、二枚貝幼生（グロキジウム）の寄生する魚類も減少し、マニアによる採集圧も、二枚貝類に大きな影響を与えている。県北部の山間溪流の一部にはカワシンジュガイが生息するが、土砂の流入やグロキジウムの寄主であるヤマメが減少し、個体数が多いとはいえない。

(稲葉 修)

○環形動物門

潤沼水系に産する3種の環形動物（多毛類）を取り上げた。うち2種は現状不明種で、シダレイトゴカイ *Notomastus* sp. は個体数は少なくないが分類上の問題があるため現状不明種とした。一方、ドロオニスピオは最初の発見以後、記録がなく、今後の調査が必要である。イトメは潤沼の下流域のヨシ原の底泥に生息するが、近年のヨシ原の荒廃は潤沼および北関東で著しく、今後個体数が激減する可能性が高い。なお、潤沼には汽水性貧毛類が産するが、分類学的研究は進んでいない。

(森野 浩)

○節足動物門（甲殻類）

甲殻類はワラジムシ目（等脚目）、ヨコエビ目（端脚目）、エビ類・カニ類（十脚目）を対象とした。ワラジムシ類は本県の淡水・汽水に4種程度分布しているが、ここでは、フタマタスナウミナナフシを注目種として掲載した。本種は、霞ヶ浦から最初に報告され、それ以降の調査記録がない。ヨコエビ類では7種が記録されているが、そのうち5種は汽水産である。ヒヌマヨコエビはその1種で成体の生息場所が潤沼のヨシ原の一部に限定されている。今回の掲載種以外にもタナイス類、クーマ類など小型の甲殻類が潤沼には産する。これらの種についても今後生息場所と個体群への留意を続けていく必要がある。

エビ類については、アメリカザリガニを除くと、これまでヌマエビ科4種、テナガエビ科2種の合計6種が報告されている。そのうち、ヌマエビ科のヌカエビはかつて県南・県西地域でも確認されていたが、現在では久慈川や那珂川など主に県北の河川に生息するのみである。また、ミゾレヌマエビは比較的近年になって生息が確認された種で、那珂川その他、潤沼や北浦などで生息が確認されているが、本県での採集記録は非常に少ない。さらに、文献記録はあるものの、標本が不在で本県での生息の有無が不明であったヌマエビが、近年、那珂川など数カ所で確認されている（未発表）。なお、本県はミゾレヌマエビおよびヌマエビの太平洋側での分布の北限にあたる。今後、調査が進むにつれ、外来種も含めた本県の淡水エビ類相の実態が明らかになってくるものと考えられる。

カニ類は12種が本県の汽水域から報告されている。そのうち8種を掲載した。そのほとんどは茂宮川の河口干潟に分布する。この場所での各カニ類の生息場所は極めて限定されていると同時に、千葉県など近隣の地域でも多くが保護生物の指定を受けていることから、他地域からの新規個体の十分な供給は困難な状況にあると推定される。

(池澤広美・森野 浩)

○苔虫（外肛）動物門

日本産淡水コケムシ類に関しては、これまで被喉綱6科23種、裸喉綱3科3種、合計9科13属26種が報告されているが、本県から記録があるのは被喉綱5科13種、裸喉綱2科2種の合計15種である。そのうち、ヒメテンコケムシ科のカンテンコケムシはこれまで群体塊や休芽が横利根川や砂沼（下妻市）など数カ所で確認されており、また、同科のヒメテンコケムシも群体塊や休芽が砂沼や不動谷津池（笠間市）などで報告されている。しかし、いずれの種も近年の確認例がなく、生息環境の悪化等による絶滅が危惧される。

(池澤広美)

2) 対象種の解説

カテゴリー別に分類した 85 種（絶滅危惧 62 種，情報不足 23 種）について，以下に門ごとに解説する。

選定理由 ①③ 茨城県内における分布は涸沼に限られており、地盤沈下による塩分濃度の変化などで生息環境が変化している。

分布状況 茨城県（涸沼）、鳥取県（東郷湖）、島根県（宍道湖）。国外ではインド（ムンバイ）、アフリカ（カイロ）、ノツシベ島（マダガスカル北西）、オーストラリア、南アメリカ、東南アジア。

形態及び生態 海綿体はなめらかな殻層状または塊状で、緑灰色、黄色または灰色。その表面には小孔が多数あり、ここから水中の微生物や有機物を取り込んで餌とする。体内には微小な骨片（骨格骨片、遊離小骨片、芽球骨片）が多数存在する。海綿体は杭や沈木の枝など、他物の表面上で固着生活を営む。夏に有性生殖で繁殖し、秋に黄色または褐色の球状の芽球（直径約 0.3 ~ 0.8mm）を多数形成し、芽球の状態越冬する。

近似種 骨片の形態において、ヌマカイメンと類似した点もみられるが、本種は汽水域のみ、ヌマカイメンは淡水域にのみ産するなど生息地に違いがある。

生息地 流れの緩やかな汽水域に生息する。国内では本県（涸沼）、鳥取県（東郷湖）、島根県（宍道湖）でしか報告されていない。特に、涸沼は 1936 年に本種が国内で初めて採集された場所である。

生存の危機 富栄養化による水質悪化や地盤沈下による塩分濃度の変動などの影響を受ければ、県内の個体群は激減する危険がある。

特記事項 分布が限定されている上、生息環境が変化している。[島根県：準絶滅危惧、鳥取県：その他の重要種]

執筆者(協力者) 池澤広美・茅根重夫(益田芳樹)

文献 1), 2), 3), 4), 7), 8)



海綿体



遊離小骨片 スケール：10µm



芽球骨片 スケール：10µm

上:涸沼, 1999年10月12日, 撮影 池澤広美
下:宍道湖, 撮影 益田芳樹

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	●	●	●
茨城県 2000	●	希少種	●	●	●
環境省 2014		対象外			

選定理由 ①②③ 茨城県内における分布は局地的である上、生息地は富栄養化しやすく、人為的な環境改変がされやすい場所である。

分布状況 茨城県（横利根川）、島根県（宍道湖）。国外ではイタリア。

形態及び生態 海綿体は塊状で、緑がかったクリーム色。その表面には多くの不規則な低い突起が見られる。体内には微小な骨片（骨格骨片、芽球骨片）が多数存在する。特に、枝分かれのある芽球骨片をもつことが本種の特徴である。海綿体は護岸壁、杭、沈木の枝、船底など、他物の表面上で固着生活を営む。夏に有性生殖で繁殖し、秋に球状の芽球（直径約 0.4 ~ 0.5mm）を多数形成し、芽球の状態越冬する。

近似種 近似種はいない。

生息地 流れの緩やかな淡水域・汽水域に生息する。1983 年に渡辺洋子氏によって横利根川で初めて採集され、新属新種として記載されたが、以後、茨城県内の記録はない。舟川河口域近くの宍道湖では一度だけ確認されている。

生存の危機 富栄養化による水質の悪化やその他の大きな環境変化があれば、県内の個体群は絶滅する可能性がある。

特記事項 新種として発表されて以来、採集記録がない。[島根県：準絶滅危惧]

執筆者(協力者) 池澤広美・茅根重夫(益田芳樹)

文献 3), 5), 6), 7)



芽球骨片 スケール：10µm



芽球骨片 スケール：10µm

舟川河口域近くの宍道湖, 1990年7月14日, 撮影 益田芳樹

茨城県 2016	●	情報不足②現状不明種	●	●	●
茨城県 2000	●	希少種	●	●	●
環境省 2014		対象外			

選定理由 ① 酒沼で1966年に記録があり、1990年初頭には下酒沼川でも確認されているが、近年の情報がない。

分布状況 高知県（浦戸湾）、茨城県（酒沼）。

形態及び生態 よく成長した群体は高さ65 mmに達し、第3側枝まで分岐。若い群体はほとんど分岐せず高さ10数mmまでのヒドロ茎がヒドロ根上に直立。ヒドロ根は直線状に匍匐しおおむね直角に分岐する。ヒドロ茎の周皮は淡褐色、ヒドロ花は紡錘形、乳白色。触手は糸状、長さ2～4mm、10～30本がヒドロ花上に配列。刺胞は貫通刺胞と巻刺胞の2種で、ともに長洋梨型。

近似種 マシコエダヒドラとはヒドロ茎の輪節の数が多くことで区別される。

生息地 酒沼湖内と下酒沼川の沈水枯茎葉、係留サオや浮タイヤなどに着生。

生存の危機 富栄養化による水質悪化や地盤沈下による塩分濃度の変動などの影響を受ければ、県内の個体群は激減する危険がある。

特記事項 汽水に出現する希少な種としてとりあげた。

執筆者(協力者) 森野 浩

文献 1), 2)



酒沼, 1991年, 撮影 藤元香世

茨城県 2016 情報不足@現状不明種 ●●●●

茨城県 2000 対象外

環境省 2014 対象外

選 定 理 由 ①③ 茨城県内での分布が局地的で生息数も少ない。

分 布 状 況 北海道から九州中部まで分布。国外では朝鮮半島，ロシア沿海州，中国東北部に分布。

形態及び生態 体長は 10～20mmで，頭部先端部は平らでやや波状。目は少し後方に位置する。体色は黒色味を帯びる。再生力は比較的強い。低水温の湧水に多い。

近 似 種 ナミウズムシ

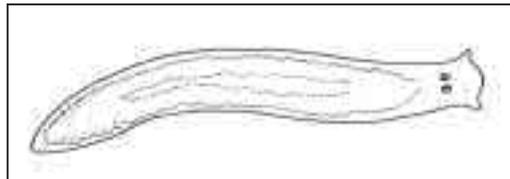
生 息 地 県内では八溝山と筑波山に生息。八溝山では溪流の上流部に，筑波山では裏筑波の源流域で確認されている。

生存の危機 樹木の伐採等により生息地の植生が悪化すると，生息が危ぶまれる。

特 記 事 項 分布が局所的で，個体数が減少している。[埼玉県：絶滅のおそれのある地域個体群，群馬県，鳥取県：準絶滅危惧，兵庫県：要調査種]

執筆者(協力者) 茅根重夫

文 献 2)



上：八溝山，撮影 茅根重夫：
下：原図，茅根重夫

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県 2000		対象外	
環境省 2014		対象外	

選定理由 ②③ 涸沼で1966年に発見され、1970年に新属新種として記載された。その後の涸沼からヒモムシ類の報告があるが本種であるかは不明。

分布状況 茨城県（涸沼）。

形態及び生態 生時淡水に入ると体前部で周期的な蠕動運動をしめす。伸長時の体長12cm、体幅1mm、収縮時は体長5cm、体幅2mm。前端は丸みを帯び、後端はとがる。頭溝は頭部の両側方を縦走する。眼点を欠く。尾毛状突起もつ。体は明るい黄褐色、収縮すると暗くなる。吻鞘は背側中央に沿って体の後端に達する。吻は吻鞘内で折れたたまれ、体の中央部に至る。保存状態下で体には20の環状のくびれがあらわれる。

近似種 チビクスイヒモムシ・ヒメクスイヒモムシとは眼点・頭溝で区別される。

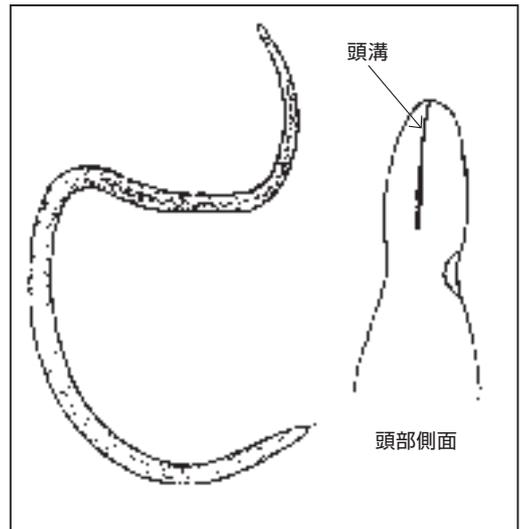
生息地 涸沼湖底の底泥。

生存の危機 個体数は多くない。富栄養化による水質悪化や地盤沈下による塩分濃度の変動などの影響を受ければ個体群は絶滅する危険がある。

特記事項 涸沼を模式産地とする新属・新種として記載された。汽水に産する希少な種としてとり上げた。

執筆者(協力者) 森野 浩

文献 1), 2), 3)



原図, 岩田文夫

茨城県2016 情報不足②現状不明種 ●●●●●

茨城県2000 対象外

環境省2014 対象外

選定理由 ②③ 涸沼で1966年に発見され、1970年に新属新種として記載された。その後の涸沼からヒモムシ類の報告があるが本種であるかは不明。

分布状況 茨城県（涸沼）。

形態及び生態 体は小さく細い。体長約8mm。頭部と頸部の間は1対の頭溝を除いてくびれ等を欠く。眼点は3集団を形成、頭部の前側方に1対と頭部後方を横断する1集団からなる。体色は黄褐色。吻鞘、歧腸、生殖巣が表皮を通して確認できる。保存状態下では腸管の部分は前体部より幅広い。

近似種 ヒヌマヒモムシ・ヒメクスイヒモムシとは眼点・頭溝で区別される。

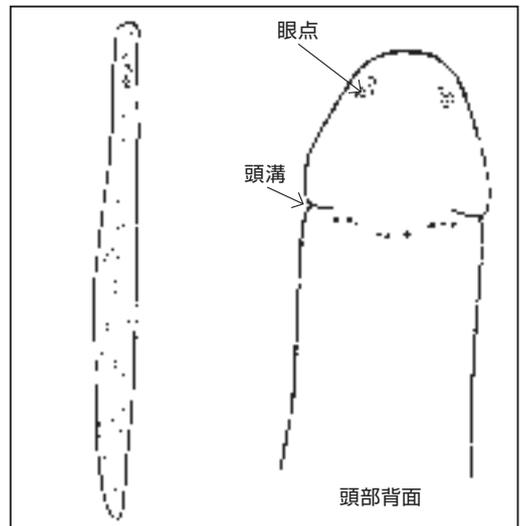
生息地 涸沼湖底の底泥。

生存の危機 個体数は多くない。富栄養化による水質悪化や地盤沈下による塩分濃度の変動などの影響を受ければ個体群は絶滅する危険がある。

特記事項 涸沼を模式産地とする新属・新種として記載された。汽水に出現する希少な種である。

執筆者(協力者) 森野 浩

文献 1), 2), 3)



原図, 岩田文夫

茨城県2016 情報不足②現状不明種 ●●●●●

茨城県2000 対象外

環境省2014 対象外

選定理由 ②③ 涸沼で1966年に発見され、1970年に新属新種として記載された。その後の涸沼からはヒモムシ類の報告があるが本種であるかは不明。

分布状況 茨城県（涸沼）。

形態及び生態 伸長時の体長4cm、体幅1.5mm、収縮時は体長1.5cm、体幅3mm。頭部は頸部より少し幅広く、ヘビの頭状。背面に2対のV字型の頭溝あり。眼点は4集団をなす。各集団は4～5個の眼点からなる。体色は前体部が赤みがかり、全体はオリーブ色を帯びる。オリーブ色の帯が体の両側を頸部から後端まで走る。吻鞘は体後端に達する。

近似種 ヒヌマヒモムシ・チビキスイヒモムシとは眼点・頭溝で区別される。

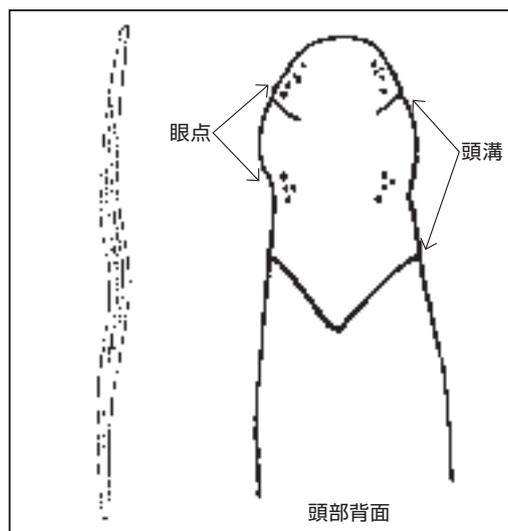
生息地 涸沼湖底の底泥。

生存の危機 個体数は多くない。富栄養化による水質悪化や地盤沈下による塩分濃度の変動などの影響を受ければ、個体群は絶滅する危険がある。

特記事項 涸沼を模式産地とする新属・新種として記載された。汽水に出現する希少な種としてとり上げた。

執筆者(協力者) 森野 浩

文献 1), 2), 3)



原図, 岩田文夫

茨城県2016 情報不足②現状不明種 ●●●●

茨城県2000 対象外

環境省2014 対象外

選定理由 ①②③④ かつて利根川とその支流で記録され、旧五霞町以東120km近くまでの範囲に棲息していたが、現在では絶滅したと考えられる。

分布状況 本州(千葉県、山梨県、静岡県の一部・東京、埼玉、岡山、広島では絶滅)と九州(福岡・佐賀では絶滅)に不連続的に分布。日本固有種。

形態及び生態 殻長7mm程度、塔形で細長く、螺塔は高い。縫合は深い。殻質やや厚く、黄褐色～赤褐色で鈍い光沢がある。外唇は殻口直前で肥厚してクレスト状になり、黒みがかかる。黄色半透明で少旋型の蓋を持つ。淡水域の半水棲種で、扇状地下流域や低地に作られた水田周辺の手掘り水路水際の湿った泥上、あるいはその直上部に生じた植生中に棲息する。本種は日本住血吸虫の中間宿主となるため、大正時代～昭和後期に流行地で水路のコンクリート化や殺貝剤の散布、棲息場所の焼却等の「撲滅作戦」が実施され、国内の殆どの地域で絶滅した。

近似種 近年県内への移入が確認された外来種のコモチカワツボに類似するものの、本種はより大きく細長く、殻口外唇が肥厚することから容易に区別される。

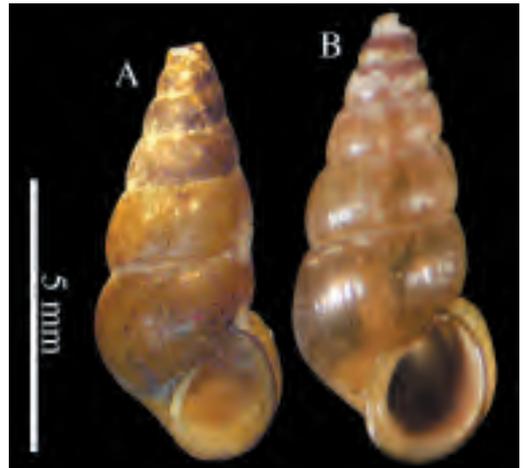
生息地 県内絶滅。

生存の危機 湖沼開発、河川開発、湿地開発、土地造成、川相変化、水質汚濁、化学汚染、産地の局限、人為捕獲(駆除)。

特記事項 本県では大規模な撲滅作戦は実行されなかったようであるが、1950年代の干拓事業によって棲息困難となり、1970年代までに絶滅に至ったと考えられる。近年の調査によっても一切発見されず、絶滅したと考えるのが妥当である。[千葉県・静岡県:絶滅危惧I類, 他:指定都道府県5]

執筆(協力)者 芳賀拓真・池澤広美(亀田勇一・倉持利明・外山健夫)

文献 12), 13), 14), 15), 39)



A: 稲敷市六角(外山健夫氏採集, 1968年) 撮影 池澤広美

B: 山梨県韮崎市, 撮影 芳賀拓真

茨城県 2016	● ● ● ● ●	絶滅
茨城県 2000		対象外
環境省 2014	● ● ● ● ●	絶滅危惧I類

選定理由 ①②③ 棲息地が限定される上に個体数が少なく、棲息環境の悪化により近年の減少が著しい。

分布状況 茨城県以南～沖縄。国外では中国南部、朝鮮半島。

形態及び生態 殻径20mm程度、卵型。殻質厚く、堅固。殻表はほぼ平滑、黄土色～緑褐色の殻皮に覆われて光沢があり、小さな三角斑をちりばめる。螺塔は僅かに突出するが、老成個体では浸食されて消失していることが多い。蓋は石灰質で厚く灰白色、内面下部に突起がある。汽水棲・淡水棲。河川の汽水域～下流部淡水域において、礫等の基質に附着して棲息する。両側回遊性で、浮遊幼生は海に下る。河口に再加入の後、成長に従い上流域に遡上する。

近似種 県内に分布する種で似るものは無い。

生息地 利根川下流域、那珂川下流域、下湊沼川、北茨城市大北川河口から記録がある。大北川河口では1997年以後得られておらず、那珂川等でも個体数が少ないとされる。

生存の危機 河川開発、川相変化、水質汚濁、化学汚染、産地の局限。

特記事項 本県は本種の太平洋岸最北分布域である。生存基盤が脆弱で棲息数の減少が顕著であるため、今回新たに掲載した。[千葉県・東京都:絶滅危惧I類, 他:指定都道府県12]

執筆(協力)者 芳賀拓真

文献 2), 4), 5), 7), 33), 35), 36)



那珂川河口(大洗町), 撮影 芳賀拓真

茨城県 2016	● ● ● ● ●	絶滅危惧I A類
茨城県 2000		対象外
環境省 2014		対象外

選定理由 ①②③ 県内の僅か2ヵ所にのみ分布し、個体数が極めて少ない。

分布状況 本州（岩手県以南）、四国、九州、沖縄。

形態及び生態 殻長2mmに満たない微小種。殻は円錐形、白色半透明のガラス質で薄く、脆い。殻表は平滑で成長線のみがある。螺管は膨れ、縫合は深い。臍孔は開口する。軟体部に色素を欠き、白色半透明。黄色半透明で薄い、少旋型の蓋を持つ。常時安定した温度・湿度が維持される陸上石灰岩洞窟の奥部にのみ棲息する真洞窟性貝類である。湿った洞窟面を匍匐するが、洞窟内壁のクレバス等の間隙を本来の住処とするため、生貝の発見は困難である。本種は洞窟系ごとに独立種であり、複数種が存在することが明らかにされつつある。

近似種 県内に分布する種で似るものは無い。

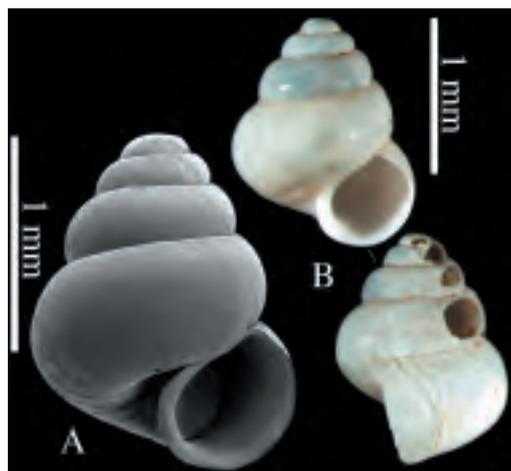
生息地 日立市の鍾乳洞内及び笠間市吾国山の石灰岩露頭のみ。吾国山では1個体の死殻が得られたに過ぎず、日立市でも減少傾向にあると思われる。

生存の危機 洞窟環境の改変、石灰採掘、河川開発、土地造成、水質汚濁、乾燥化（湧水枯渇）、産地の局限、人為捕獲（マニアによる採集）。

特記事項 近年の調査により本県での分布が明らかとなったが、生存基盤が極めて脆弱であるために、今回新たに掲載した。[群馬県：絶滅危惧I類、他：指定都道府県数15]

執筆者(協力者) 芳賀拓真（亀田勇一）

文献 3), 34)



A：日立市，撮影 亀田勇一；
B：笠間市吾国山，撮影 芳賀拓真

茨城県2016 ●●●●● 絶滅危惧I A類 ●

茨城県2000 対象外

環境省2014 ●●●●● 絶滅危惧I類 ●

選定理由 ①②③ 県内では涸沼が唯一の棲息地であり、個体数がかなり少ない。

分布状況 北海道北部から九州。国外では朝鮮半島、中国大陸、ロシア沿海州。

形態及び生態 殻長4mm、殻径2mmと小型でやや太く、細長い巻貝。縫合のくびれは大きい。殻表は黄褐色の殻皮に覆われ、微細な螺肋が多数ある。産地によっては沈着した酸化物で黒くなったり、殻頂が浸食されたりする。内湾奥部にそそぐ河口汽水域の干潟の砂泥底、軟泥底表層を匍匐。

近似種 県内に分布する種で似るものは無い。

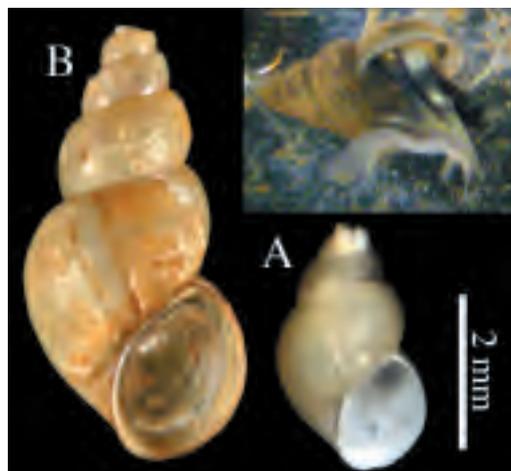
生息地 涸沼の大貫地先の塩生湿地。個体数はかなり少ない。

生存の危機 湖沼開発、河川開発、湿地開発、土地造成、川相変化、水質汚濁、化学汚染、産地の局限。

特記事項 近年の調査により本県での分布が明らかとなったが、生存基盤が極めて脆弱であるため、今回新たに掲載した。[日本ベントス学会：準絶滅危惧、千葉県：一般保護生物]

執筆者(協力者) 森野 浩・芳賀拓真（中山聖子・佐藤慎一・根本隆夫）

文献 37)



A：大洗町（涸沼），撮影 芳賀拓真；
B：生態写真：石川県七尾市，
2008年5月10日，撮影 芳賀拓真

茨城県2016 ●●●●● 絶滅危惧I A類 ●

茨城県2000 対象外

環境省2014 ●●●●● 準絶滅危惧 ●●●●●

選定理由 ①③ 県内では僅か1ヵ所の極めて狭い範囲に分布し、個体数も極めて少ない。

分布状況 岡山県高梁市・新見市、新潟県糸魚川市の石灰岩地のみ。

形態及び生態 殻長35mm程度。縫合は浅く、殻表は淡茶褐色で弱い光沢を持つ。陸棲で、石灰岩露頭の周辺にのみ棲息する。

近似種 後掲のキセルモドキに似るが、本種はより細く、螺層の膨らみが弱い。

生息地 日立市の石灰岩露頭にのみ見られる。分子系統学的検討により、東日本にも分布することが明らかとなった(亀田勇一氏、私信)。

生存の危機 石灰採掘、森林伐採、山林開発、林相変化、産地の局限、人為捕獲(マニアによる採集)。

特記事項 近年の調査研究により本県での分布が明らかとなったが、生存基盤が極めて脆弱であるため、今回新たに掲載した。[指定都道府県1:岡山県]

執筆者(協力者) 芳賀拓真(亀田勇一)

文献 18), 19)



日立市, 撮影 芳賀拓真

茨城県2016 ●●●●● 絶滅危惧I A類 ●

茨城県2000 対象外

環境省2014 ●●●●● 絶滅危惧I類 ●

選定理由 ①③④ 筑波山山頂付近にのみ分布する。棲息範囲が極めて狭いうえ、個体数も極めて少ない。

分布状況 茨城県(筑波山)のみ。

形態及び生態 殻径12mm程度、螺塔はほぼ扁平で平巻状。体層は非常に大きく、殻長のほぼ全長を占める。殻質薄く脆弱、淡黄褐色。殻表全面は微細な鱗片状の殻毛で覆われる。成貝でも外唇は肥厚しない。蓋を欠く。

近似種 ビロウドマイマイと似るが、本種は螺塔がほぼ扁平であり、殻毛が鱗片状であることから区別できる。

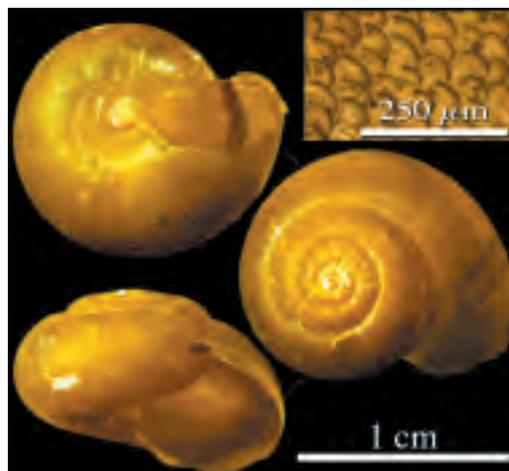
生息地 筑波山山頂付近をタイプ産地とする本県固有亜種で、落葉広葉樹林の落葉中や倒木下において見られる稀産種である。

生存の危機 森林伐採、山林開発、林相変化、産地の局限、人為捕獲(マニアによる採集)。

特記事項 分類上の問題があり、他種の変異個体群と見なされる可能性がある。近年は発見例が少なく、森林環境の変化により絶滅の危機がさらに高まっていると考えられることから、カテゴリーを変更した。

執筆者(協力者) 芳賀拓真・坂寄 廣・池澤広美(亀田勇一・秋山昌範・堤 徳郎・川名美佐男)

文献 2), 25), 29), 31), 32), 38)



筑波山(つくば市), 撮影 池澤広美

茨城県2016 ●●●●● 絶滅危惧I A類 ●

茨城県2000 ●●●●● 希少種 ●●●●●

環境省2014 ●●●●● 絶滅危惧II類 ●●●●●

選定理由 ①③ 棲息地が限定的で個体数も少ない。

分布状況 沖縄を除く国内各地。国外ではクリル諸島。

形態及び生態 殻は微小で、殻長 3mm 程度、太短い樽形で下膨れ状。殻質薄く、濃い赤褐色で半透明。殻表は光沢がある。螺管は丸く、殻頂はドーム形。殻口外唇は反転し、中程に湾入部がある。殻口内に多数の歯状突起を持つ。蓋を欠く。陸棲で、緩やかな流水域ないし止水域の用水路、水田、湖沼、湿原において、常に湿った水際の植生や落葉、転石に付着して棲息する。

近似種 後掲のヤマトキバサナギに似るが、本種は太短いことで区別できる。

生息地 大子町、土浦市の水田及び湿地から、少数個体が確認されているに過ぎない。本県では稀産である。

生存の危機 河川開発、湿地開発、土地造成、川相変化、水質汚濁、化学汚染、産地の局限。

特記事項 近年の調査により本県での分布が確認されたが、稀産であり、生存基盤が脆弱であることから、今回新たに掲載した。[千葉県・群馬県：絶滅危惧Ⅰ類、他：指定都道府県 14]

執筆者(協力者) 芳賀拓真

文献



土浦市, 2014年5月1日, 撮影 芳賀拓真

茨城県 2016 ●●● 絶滅危惧ⅠB類 ●●

茨城県 2000 対象外

環境省 2014 ●●● 絶滅危惧Ⅱ類 ●●●

選定理由 ①③ 棲息環境が特殊であるため産地が限定的で、個体数もかなり少ない。

分布状況 本州（福島県南部～福井県）、伊豆諸島。

形態及び生態 殻径 4mm 程度、低い円錐形、殻質やや厚い。殻表は全面が細かく明瞭な縦肋で刻まれるが、生時は泥等の付着物で覆われ、認識し難い。殻口は丸く、肥厚し、下に傾く。角質で黒みがかった、やや厚い多旋型の蓋を持つ。殻口附近の体層縫合下に、細長い隆起部を生じる。陸棲で、山地の保存良好な、小礫を含む湿潤な広葉樹林床にのみ棲息し、落葉や礫間に見られる。

近似種 県内に分布するもので似るものは無い。

生息地 筑波山系、八溝山系、阿武隈山系に分布する。

生存の危機 森林伐採、山林開発、林相変化。

特記事項 稀産であり、生存基盤が脆弱と考えられることから、今回新たに掲載した。[群馬県：絶滅危惧Ⅰ類、他：指定都道府県 3]

執筆者(協力者) 芳賀拓真(堤 徳郎・川名美佐男・池澤広美)

文献 2), 7)



桜川市, 2015年11月30日, 撮影 芳賀拓真

茨城県 2016 ●●● 絶滅危惧Ⅱ類 ●●●

茨城県 2000 対象外

環境省 2014 対象外

選定理由 ①③ 県内の1ヵ所でのみ確認されているに過ぎない。ヨシ原環境の悪化により、絶滅の危険が増大していると考えられる。

分布状況 東北～九州、四国。

形態及び生態 殻長8mm程度、螺塔のやや高い円錐形。この類としては大型。体層は大きく、縫合はやや深い。殻質やや厚く、黄褐色～茶褐色、色帯が現れることが多い。混棲することもあるカワザンショウに酷似するが、本種は殻色がやや明るいこと、軸唇の赤みが強いこと、周縁が弱く角張る傾向にあることなどから区別される。中間的な個体もあり、鑑定には生殖器形態を確認することが必要である。角質少旋型の蓋を持つ。内湾・河口域の汽水棲で、干潟の潮間帯に生じたヨシ原に棲息する。

近似種 カワザンショウ（上記参照）。カワザンショウは礫底でも棲息するが、本種は軟らかい底質を好む。

生息地 日立市茂宮川河口干潟のヨシ原にのみ分布する。

生存の危機 河川開発、湿地開発、土地造成、水質汚濁、化学汚染、産地の局限。

特記事項 近年の調査で本県での分布が確認されたが、生存基盤が脆弱であることから、今回新たに掲載した。類似種カワザンショウとの区別には慎重を要するため、県内における棲息状況の再検討が必要である。[指定都道府県4]

執筆者(協力者) 芳賀拓真(福田 宏)

文 献



日立市, 撮影 福田 宏

茨城県2016	●●●●	絶滅危惧Ⅱ類	●●●●
茨城県2000		対象外	
環境省2014		対象外	

選定理由 ①③ 棲息地が極めて限定されていることと個体数密度の低さから、生存の危機は比較的高いと判断される。

分布状況 陸奥湾～種子島。

形態及び生態 殻は微小で、殻長4.5mm、円錐形をしている。黒っぽい栗色で光沢がある。臍孔は閉じる。軟体の頭部～腹足の背面が常に漆黒色で、臍面はオリーブ色であることから、頭部～腹足の背面が無色または黒色で、臍面は白色であるキントイロカワザンショウ等と区別される。内湾奥部河口汽水域のヨシ原内やその周囲の泥底・砂泥底表層や転石・漂着物の下などに生息。

近似種 キントイロカワザンショウ等（上記参照）。

生息地 利根川ワンド（神栖市）と日立市茂宮川河口干潟。

生存の危機 河川開発、湿地開発、土地造成、水質汚濁、化学汚染、産地の局限。

特記事項 近年の調査により本県での分布が確認されたが、生存基盤が脆弱であるため、今回新たに掲載した。[日本ベントス学会：準絶滅危惧、千葉県：一般保護生物]

執筆者(協力者) 森野 浩・中山聖子・芳賀拓真(福田 宏)

文 献 37)



日立市, 撮影 福田 宏

茨城県2016	●●●●	絶滅危惧Ⅱ類	●●●●
茨城県2000		対象外	
環境省2014	●●●●	準絶滅危惧	●●●●

選定理由 ①③ 棲息地が極めて限定的であり、かつ個体数もかなり少ない。

分布状況 本州（青森県以南）、四国。

形態及び生態 殻径 4mm程度、低い円盤形、左巻。殻質薄く、黄褐色、半透明で弱い光沢がある。螺管は太い。殻頂が広く深く窪み、殻底が低く膨らむことで同属の他種と区別される。蓋を欠く。淡水棲で、湿地の浅い止水域に棲息し、水草等に付着する。

近似種 ハブタエヒラマキに似るが、殻底の形状で区別できる。

生息地 近年、土浦市の湿地で分布が確認された。本県では稀産である。

生存の危機 河川開発、湿地開発、土地造成、川相変化、水質汚濁、化学汚染、産地の局限。

特記事項 近年の調査により本県での分布が確認されたが棲息密度が低く稀産であり、生存基盤が脆弱と考えられることから、今回新たに掲載した。県内の分布は過小評価されている可能性があり、環境良好な湿地を対象とした調査が必要である。調査により新産地が発見される可能性がある。[群馬県・千葉県：絶滅危惧Ⅰ類、他：指定都道府県 9]

執筆者(協力者) 芳賀拓真(堤 徳郎・川名美佐男・吉村武雄・池澤広美)

文献



土浦市, 2014年5月1日, 撮影 芳賀拓真

茨城県 2016	● ● ●	絶滅危惧Ⅱ類	● ● ●
茨城県 2000		対象外	
環境省 2014	● ● ●	絶滅危惧Ⅱ類	● ● ●

選定理由 ①②③④ 棲息地が限定的であり、環境変化などによって近年個体数が減少している。

分布状況 茨城県、栃木県東北部、福島県南東部。

形態及び生態 殻長 18mm程度、やや長い紡錘形、左巻。殻質やや厚く、堅固。殻表は布目状となり、光沢が強い。体層と次体層の膨らみはほぼ同じ。殻口は斜位で、成貝では肥厚し反転する。殻口に上板、下板、下軸板が現れるが、下軸板は不明瞭。腔襞は主襞と上腔襞が明瞭だが、月状襞は不明瞭。蓋を欠く。陸棲で、主にイヌブナ林等、亜高山帯の保存良好な落葉広葉樹林床に棲息し、落葉あるいは倒木下に見られる。

近似種 県内に分布する種で似るものは無い。

生息地 筑波山をタイプ産地とする本県の準固有種である。筑波山系、八溝山系、阿武隈山系の山地に点々と棲息する。近年、笠間市でも確認された。多産地もあるものの、個体数は概して少なく、県北部では寧ろ稀産である。

生存の危機 森林伐採、山林開発、林相変化、産地の局限、人為捕獲（マニアによる採集）。

特記事項 環境変化により個体数が減少しており、絶滅の危機がさらに高まっていると考えられることから、カテゴリーを変更した。[栃木県：絶滅危惧Ⅱ類、指定都道府県 2]

執筆者(協力者) 芳賀拓真・坂寄 廣・池澤広美(秋山昌範・堤 徳郎・川名美佐男)

文献 1), 2), 3), 7), 20), 21), 22), 23), 24), 25), 26), 27), 28), 29), 32), 41), 43)



A-B：つくば市筑波山，C：北茨城市，
撮影 芳賀拓真；
生態写真：筑波山山頂，2010年10月6日，
撮影 池澤広美

茨城県 2016	● ● ●	絶滅危惧Ⅱ類	● ● ●
茨城県 2000	● ● ●	希少種	● ● ●
環境省 2014	● ● ●	絶滅危惧Ⅱ類	● ● ●

選定理由 ①③ 県内の分布は極めて限定的であり、個体数が少なく棲息密度も低い。棲息環境が特殊であり、環境改変による絶滅が危惧される。

分布状況 本州（南関東～島根県）、南九州。連続せず局所的な分布をする。

形態及び生態 殻径 12mm程度、低い算盤玉形。縫合は浅い。殻質やや薄く、淡黄褐色。殻表は不規則な成長脈があり、光沢を持つ。周縁に太く鋭い稜角を巡らす。臍孔は狭く開口する。蓋を欠く。陸棲で、里山～山地の広葉樹林ないし遷移林の縁辺の落葉中に棲息する。やや乾燥した開けた環境を好む。

近似種 県内に分布する種で似るものは無い。

生息地 常陸太田市及び笠間市周辺からのみ記録されている稀産種である。

生存の危機 森林伐採、山林開発、林相変化、土地造成、産地の局限、人為捕獲（マニアによる採集）。

特記事項 本県は本種の分布北限と思われる。近年の調査により本県での分布が確認されたが稀産であり、生存基盤が脆弱であると考えられることから、今回新たに掲載した。[埼玉県：絶滅、他：指定都道府県 7]

執筆者(協力者) 芳賀拓真・池澤広美（堤 徳郎・川名美佐男・吉村武雄）
文献 2), 30)



常陸太田市, 撮影 芳賀拓真
生態写真: 2014年10月25日,
撮影 池澤広美

茨城県 2016 ●●● 絶滅危惧Ⅱ類 ●●●

茨城県 2000 対象外

環境省 2014 ●●● 絶滅危惧Ⅱ類 ●●●

選定理由 ①③ 棲息地が極めて限定的であり、個体数もかなり少ない。

分布状況 本州全域。

形態及び生態 殻径 4mm程度、算盤玉形。縫合は浅い。殻質薄く、淡褐色で半透明。周縁に鋭い稜角を持つ。その稜角より上部の殻表は、密な成長脈で刻まれる。生時は殻表が泥等を付着させていることが多い。蓋を欠く。陸棲で、山地の自然度の高い広葉樹林床の落葉中に棲息するが、個体密度は低い。

近似種 後掲のヒメカサキビに似るが、本種は周縁角より上部に明瞭な成長脈があることで区別できる。

生息地 八溝山系。本県では稀産である。

生存の危機 森林伐採、山林開発、林相変化、産地の局限。

特記事項 近年の調査により本県での分布が確認されたが、生存基盤が脆弱と考えられることから、今回新たに掲載した。[埼玉県・群馬県：絶滅危惧Ⅰ類、他：指定都道府県 11]

執筆者(協力者) 芳賀拓真

文献

茨城県 2016 ●●● 絶滅危惧Ⅱ類 ●●●

茨城県 2000 対象外

環境省 2014 ●●● 準絶滅危惧 ●●●

選 定 理 由 ①③ 棲息地が限定的であり、個体数が概して少ない。近年、個体数の減少が見られる。

分 布 状 況 本州全域、四国、九州北部。

形態及び生態 殻径 10mm程度、低い算盤球型、体層が大きい。殻質やや厚く、堅固、淡褐色の殻皮を被る。殻表は、ほぼ平滑なものから縦肋がでるものまであり、殻色も黄～赤色のものがあり、個体群により変異が激しい。殻口は半月形、成貝では厚く肥厚し、内唇は滑層となる。やや石灰化した淡赤褐色の蓋を持つ。陸棲で、山地の自然度の高い、小礫を含む湿潤な広葉樹林床に棲息し、落葉や礫間で見られる。

近 似 種 県内に分布する種で似るものは無い。

生 息 地 筑波山系、八溝山系、阿武隈山系の山地に広く点々と分布する。日立市の石灰岩地では例外的に多産する。

生存の危機 森林伐採、山林開発、林相変化、産地の局限。

特 記 事 項 個体数の危機は大きくはないと考えられるものの、近年個体数の減少が見られるため、今回新たに掲載した。[東京都：絶滅危惧Ⅱ類、指定都道府県 8]

執筆(協力)者 芳賀拓真・坂寄 廣

文 献 1), 2), 3), 7), 20), 23), 29), 41), 42), 43)



日立市, 撮影 芳賀拓真;
生態写真: 北茨城市, 2013年11月25日,
撮影 芳賀拓真

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県 2000		対象外	
環境省 2014		対象外	

選 定 理 由 ①③ 棲息地が限定的であり、個体数が概して少ない。近年、個体数の減少が見られる。

分 布 状 況 本州(福島県南部以南)、四国、九州。国外では韓国南部(済州島)。

形態及び生態 殻径 18mm程度、円錐形。螺層は膨らみ、丸い。殻質やや厚く、殻表は平滑で茶褐色、縞状模様が現れる。殻口は肥厚し、丸い。臍孔は深く、広く開く。角質で多旋型の蓋を持つ。生時は泥等の付着物で覆われることが多い。陸棲で、里山～山地の自然度の高い、湿潤な広葉樹林床の落葉間に棲息する。

近 似 種 県内に分布する種で似るものは無い。

生 息 地 筑波山系、八溝山系、阿武隈山系に分布する。石灰岩地では例外的に多産する。

生存の危機 森林伐採、山林開発、林相変化。

特 記 事 項 茨城県は本種の分布の北限域である。生存の危機は大きくないと考えられるものの、もともと棲息個体数が少ないなかで近年減少傾向にあるため、今回新たに掲載した。[指定都道府県 3]

執筆(協力)者 芳賀拓真・坂寄 廣(川名美佐男・堤 徳郎・池澤広美)

文 献 1), 2), 3), 7), 20), 23), 29), 41), 43)



笠間市, 撮影 芳賀拓真

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県 2000		対象外	
環境省 2014		対象外	

選定理由 ①③ 棲息地が限定的で、個体数も極めて少ない。

分布状況 本州全域、四国北部。

形態及び生態 殻は微小で、殻長3mm程度、右巻きで細長い円柱形。螺塔は円錐形。終層は次体層より細い。殻質やや薄く、白色～赤褐色。殻表は全面が細かな鱗状の縦肋で覆われ、後方で細くなる。殻口は丸く、肥厚する。体層内面の腔壁はごく短く、内唇に軸歯がある。角質の薄い蓋を持つ。陸棲で、自然状態が良好に保全された山地の、湿潤な広葉樹林床に棲息し、落葉や礫間に見られる。

近似種 イブキゴマガイに似るが、本種は小型で、螺塔が太く、さらに殻口もやや肥厚する程度で二重にならず、腔壁が短いことから区別できる。

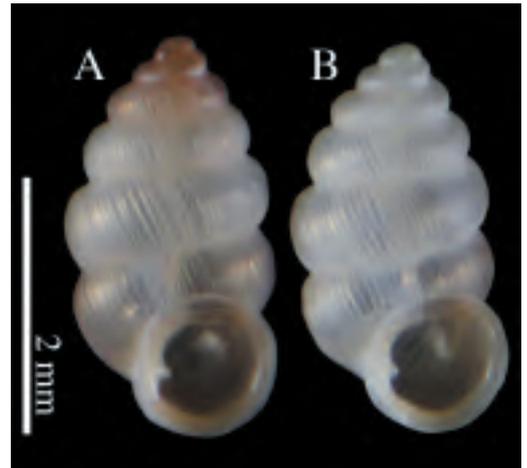
生息地 阿武隈山系などの山林に分布する。

生存の危機 森林伐採、山林開発、林相変化。

特記事項 生存の危機は大きくないと考えられるものの、本県では産地、個体数ともに極めて限定的であり、そもそも稀産種であると考えられることから、今回新たに掲載した。[指定都道府県無し]

執筆者(協力者) 芳賀拓真(亀田勇一)

文献 2), 7)



北茨城市, 撮影 芳賀拓真
A: 雄; B: 雌

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県 2000		対象外	
環境省 2014		対象外	

選定理由 ①②③④ 県内各地で記録されてきたが、産地、個体数ともに極端に減少している。

分布状況 国内各地。

形態及び生態 殻長40mm程度、円錐形。螺塔はやや高い。殻質薄く、濃褐色～黄緑色の殻皮で覆われ、光沢がある。螺層はよく膨らみ、周縁は丸い。縫合は深い。成貝の殻口はやや肥厚し、黒色に縁取られる。同心円型で角質の蓋を持つ。胎生。淡水棲で、止水域ないし流れの弱い河川、用水路、湖沼、水田等の泥底に棲息する。

近似種 後掲のオオタニシを参照。

生息地 上記参照。

生存の危機 湖沼開発、河川開発、湿地開発、土地造成、乾田化、川相変化、水質汚濁、化学汚染、産地の局限、人為捕獲(食用・鑑賞用)。

特記事項 県南部においては移入種であるスクミリンゴガイとの競合による激減も考えられる。近年の産地、個体数の減少が顕著であり、生存の危険が増大していることから、今回新たに掲載した。[群馬県・東京都: 絶滅危惧Ⅰ類, 他: 指定都道府県 27]

執筆者(協力者) 芳賀拓真・桐原幸一

文献 2), 4), 6), 7)



那珂市, 撮影 芳賀拓真

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県 2000		対象外	
環境省 2014	● ●	絶滅危惧Ⅱ類	● ● ● ●

選定理由 ①③ 棲息地が限定されていることと棲息地環境の不安定さから将来的に個体群の減少が危惧される。

分布状況 本州（陸奥湾以南）～九州の太平洋岸、瀬戸内海、九州西岸。

形態及び生態 殻は微小で、殻長 3.5mm。カワザンショウの仲間では螺塔が高く螺層のふくらみと縫合のくびれは弱く、殻表の光沢は強く、色彩は明瞭。内湾奥部河口汽水域のヨシ原内やその周囲の泥底・砂泥底表層や転石・漂着物の下などに生息。

近似種 ムシヤドリカワザンショウに似るが、本種はやや大型で螺塔が高く、螺層の膨らみとくびれが弱く、殻表は光沢が強く色彩もより鮮明であることから区別できる。

生息地 利根川河口域、利根川矢田部地区、茂宮川河口干潟。

生存の危機 河川開発、湿地開発、土地造成、水質汚濁、化学汚染、産地の局限。

特記事項 近年の調査により本県での分布が確認されたが、生存基盤が脆弱と考えられることから、今回新たに掲載した。[日本ベントス学会：準絶滅危惧]

執筆者(協力者) 芳賀拓真・森野 浩(福田 宏)

文献 37)



日立市, 撮影 福田 宏;
生態写真, 神栖市, 2014年5月1日,
撮影 芳賀拓真

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県 2000		対象外	
環境省 2014	●	準絶滅危惧	● ● ● ●

選定理由 ①②③ 棲息条件の悪化により産地・個体数ともに減少している。

分布状況 国内各地。国外では中国大陸、台湾、朝鮮半島、サハリン南部、クリル諸島南部。

形態及び生態 殻径 6mm程度、扁平な円盤形、左巻。殻質薄く、淡黄色～褐色、半透明。殻頂、殻底ともにやや窪む。殻表はほぼ平滑。生時は付着物で覆われることが多い。体層周縁に角を持つことが多い。蓋を欠く。淡水棲で、溜池、湿地、水田等の止水域の浅所に棲息し、水草等に附着して見られる。

近似種 ヒメヒラマキミズマイマイやトウキョウヒラマキ等、複数の近似種があり、鑑定には注意を要する。

生息地 主に県北部に分布する。小貝川においても知られる。

生存の危機 湖沼開発、河川開発、湿地開発、土地造成、川相変化、水質汚濁、化学汚染、産地の局限。

特記事項 生存の危機はさして大きくないと考えられるものの、近年、産地と個体数の減少が顕著であるため、今回新たに掲載した。[東京都・千葉県：絶滅危惧Ⅰ類、他：指定都道府県 13]

執筆者(協力者) 芳賀拓真

文献 33)

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県 2000		対象外	
環境省 2014		情報不足	● ● ● ●

選 定 理 由 ①③ 棲息地が限定的である。

分 布 状 況 国内各地。国外では東アジア、中国大陸、台湾、朝鮮半島。

形態及び生態 殻径 8mm程度、扁平な円盤形、左巻。殻質やや薄く、赤褐色、半透明で光沢がある。周縁は丸い。殻頂は深く窪み、臍孔状。殻底はやや窪む。体層内面に3~4個の襞状突起を放射状に配置する。蓋を欠く。淡水棲で、主に低地の溜池、湿地、水田等の浅い止水域に棲息し、水草等に付着する。

近 似 種 レンズヒラマキに似るが、これは県内からの記録はない。

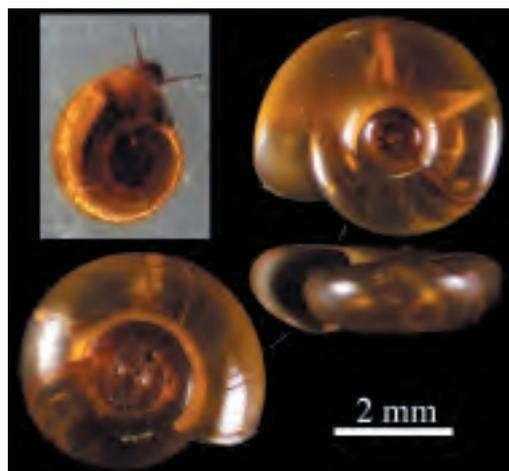
生 息 地 県北部の低地に分布するが、稀産である。利根川下流域からも記録されている。

生存の危機 湖沼開発、河川開発、湿地開発、土地造成、川相変化、水質汚濁、化学汚染、産地の局限。

特 記 事 項 近年の調査により本県での分布が明らかとなったが、生存基盤が脆弱と考えられることから、今回新たに掲載した。追加調査により新産地が発見される可能性がある。[群馬県・東京都：絶滅危惧Ⅰ類、他：指定都道府県 13]

執筆(協力)者 芳賀拓真 (川名美佐男・堤 徳郎・池澤広美)

文 献 33)



北茨城市, 2013年11月20日, 撮影 芳賀拓真

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	●	●	●
茨城県 2000		対象外			
環境省 2014	●	準絶滅危惧	●	●	●

選 定 理 由 ①②③ 県南部の低地にある湿地・水田を中心に記録があるが、産地・個体数ともに減少していると考えられる。

分 布 状 況 国内各地。国外では朝鮮半島。

形態及び生態 殻長 10mm程度、細長い卵形。体層は大きく、殻頂は小さい。殻質薄く脆弱、淡黄褐色で半透明。殻表は明瞭な成長脈が刻まれ、光沢がある。蓋を欠く。陸棲種で、低地の緩やかな流水域ないし止水域の用水路、水田、湖沼、湿原の水際に生じた植生中に棲息する。人工物の壁面やヨシ類の茎を登る。

近 似 種 オカモノアラガイに類似するが、本種は小型で細長いため区別できる。

生 息 地 土浦市、かすみがうら市、神栖市で記録がある。

生存の危機 湖沼開発、河川開発、湿地開発、土地造成、川相変化、水質汚濁、化学汚染。

特 記 事 項 タイプ産地は土浦市(原記載では「Tsuchiura, Hitachi」と記述)。生存の危機はさして大きくはないと考えられるものの、近年、産地と個体数が減少していると考えられることから、今回新たに掲載した。[群馬県：絶滅危惧Ⅰ類、他：指定都道府県 23]

執筆(協力)者 芳賀拓真・坂寄 廣 (堤 徳郎・川名美佐男・吉村武雄・池澤広美)

文 献 1), 2), 7), 16)



土浦市, 2014年5月1日, 撮影 芳賀拓真

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	●	●	●
茨城県 2000		対象外			
環境省 2014	●	準絶滅危惧	●	●	●

選定理由 ①③ 県内に広く点々と分布するが、産地は限定的である。石灰岩地を除いて棲息密度は概して低い。

分布状況 北海道南西部、本州、四国、九州。

形態及び生態 殻長 30mm程度、細長い円筒形で、右巻、殻頂にかけて急に細くなる。縫合は浅い。殻質やや薄いが堅固、汚白色～淡褐色。殻表は成長脈で刻まれる。成貝の外唇は肥厚し、反転する。蓋を欠く。陸棲で、主に山地の広葉樹林床に棲息し、特に礫が転がるガレ場を好む。個体密度は低い。

近似種 前掲のヤセキセルモドキを参照。

生息地 筑波山系、八溝山系、阿武隈山系の山地。

生存の危機 森林伐採、山林開発、林相変化、産地の局限。

特記事項 生存の危機はさして大きくないと考えられるものの、近年、産地と個体数が減少していると考えられることから、カテゴリーを変更した。[千葉県：絶滅危惧Ⅱ類、他：指定都道府県 15]

執筆者(協力者) 芳賀拓真・坂寄 廣・池澤広美 (川名美佐男・堤 徳郎)

文献 1), 2), 29), 32), 41), 43)



北茨城市, 2013年11月25日, 撮影 芳賀拓真

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	●	●	●
茨城県 2000	●	希少種	●	●	●
環境省 2014					対象外

選定理由 ①③ 県内に広く点々と見られるが、産地は限られ、個体群は小さい。

分布状況 本州 (青森県～長野県・石川県) のみ。

形態及び生態 殻長 10mm程度、細長い紡錘形、左巻。殻質薄く、淡黄色～淡褐色、半透明。殻表は明瞭な縦肋で刻まれ、強い光沢を持つ。成貝の殻口は弱く肥厚する。殻口には上板が現れるが、下板と下軸板は唇縁に現れない。腔襞は主襞と上腔襞が明瞭だが、月状襞は不明瞭。蓋を欠く。陸棲で、山地の落葉広葉樹林床の倒木下、あるいは樹洞の腐葉土中に棲息するが、個体密度は概して低い。

近似種 県内に分布する種で似るものは無い。

生息地 筑波山系、八溝山系、阿武隈山系。

生存の危機 森林伐採、山林開発、林相変化、産地の局限。

特記事項 生存の危機はさして大きくはないと考えられるものの、近年、産地と個体数が減少していると考えられることから、今回新たに掲載した。[千葉県：絶滅危惧Ⅰ類、他：指定都道府県 4]

執筆者(協力者) 芳賀拓真・坂寄 廣 (川名美佐男・堤 徳郎・池澤広美)

文献 1), 2), 7), 20), 21), 23), 29), 41), 43)



日立市, 撮影 芳賀拓真;
生態写真: 北茨城市, 2013年11月17日,
撮影 芳賀拓真

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	●	●	●
茨城県 2000					対象外
環境省 2014					対象外

選定理由 ①③ 県内各地の主に山地に分布する。まとめて見られることもあるが、産地が限定的であり、個体数も概して少ない。

分布状況 本州（広島県・鳥取県以北）、北海道南西部。

形態及び生態 殻長13mm程度、細長い塔型で、左巻。殻質やや厚く、茶褐色。殻表は明瞭な成長脈で刻まれ、光沢は弱い。成貝の殻口は肥厚して体層から突出し、強く反転する。殻口には上板が明瞭だが、下板と下軸板は唇縁に現れない。上板の直上の唇縁は湾入する。腔壁は主壁、上腔壁、下腔壁からなる。蓋を欠く。陸棲で、海岸林～山地の広葉樹林床の落葉・倒木下、あるいは樹洞の腐葉土中に棲息する。

近似種 後掲のナミコギセルに似るが、殻口が突出すること、螺管が狭いことで区別できる。

生息地 上記参照。

生存の危機 森林伐採、山林開発、林相変化、産地の局限。

特記事項 生存の危機はさして大きくないと考えられるものの、近年、産地と個体数が減少していると考えられることから、今回新たに掲載した。[埼玉県：絶滅危惧Ⅰ類、他：指定都道府県6]

執筆者(協力者) 芳賀拓真

文献 2), 7), 20)



北茨城市, 2013年11月20日, 撮影 芳賀拓真

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県 2000		対象外	
環境省 2014		対象外	

選定理由 ①③ 主に県北部以外の平野部に分布する。まとめて見られることもあるが、産地は限定的で、個体数も概して少ない。

分布状況 本州（関東～広島県東部）、四国東部。

形態及び生態 殻長15mm程度、細長い塔型で、左巻。殻頂は急激に細くなる。殻質やや厚く、黄褐色～茶褐色。殻表は弱い成長脈で刻まれ、光沢を持つ。成貝の殻口は肥厚、反転する。腔壁の形状・配置はオオタキコギセルに似るが、本種の下腔壁は小さく瘤状であり、また本種は殻口が突出せず、成長脈が弱いことで区別できる。蓋を欠く。陸棲で、海岸林～山地の落葉広葉樹林内の落葉・倒木下、樹洞の腐葉土中、あるいは耕作地の植生中に棲息する。

近似種 前掲のオオタキコギセルを参照。

生息地 上記参照。

生存の危機 森林伐採、山林開発、林相変化、産地の局限。

特記事項 生存の危機はさして大きくないと考えられるものの、近年、産地と個体数が減少していると考えられることから、今回新たに掲載した。[徳島県：絶滅危惧Ⅰ類、他：指定都道府県5]

執筆者(協力者) 芳賀拓真・坂寄 廣（川名美佐男・堤 徳郎・池澤広美）

文献 1), 2), 7), 41), 43)



常陸太田市, 撮影 芳賀拓真

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県 2000		対象外	
環境省 2014		対象外	

選定理由 ①②③ 八千代町はじめ県内各地の主に里山に局地的に分布する。まとめて見られることもあるが、個体数が概して少ない。

分布状況 北海道、本州（鳥取以北）、四国（高知・徳島）、伊豆諸島。国外では朝鮮半島、沿海州、環北極圏。

形態及び生態 殻径 7mm程度、螺塔が低く、円盤形。縫合は深い。殻質薄く、茶褐色～赤褐色。殻表は明瞭な成長肋で刻まれる。周縁に弱い明瞭な角がある。臍孔は広く深い。殻口は肥厚せず、単純。蓋を欠く。陸棲で、屋敷林・里山～山地の林内ないしその縁辺の、日陰に面した倒木や礫下に棲息する。

近似種 県内に分布する種で似るものは無い。

生息地 上記参照。

生存の危機 森林伐採、山林開発、林相変化、土地造成、産地の局限、温暖化。

特記事項 本県では里山・平野林でのみ見られ、山地では確認されていない。生存の危機はさして大きくないと考えられるものの、近年、産地と個体数が減少していると考えられることから、今回新たに掲載した。[鳥取県・徳島県・高知県：絶滅危惧Ⅰ類、他：指定都道府県 7]

執筆者(協力者) 芳賀拓真・坂寄 廣（川名美佐男・池澤広美・堤 徳郎）
文献 1), 2), 41)



北茨城市, 撮影 芳賀拓真

茨城県 2016 ● 準絶滅危惧 ● ● ● ●

茨城県 2000 対象外

環境省 2014 絶滅のおそれのある地域個体群(近畿地方以西)

選定理由 ①③ 県内全域に分布するが、分布は局地的で、個体数が極めて少ない。

分布状況 本州（関東北部以南）、四国、九州、沖縄。国外では韓国、済州島。

形態及び生態 殻は微小で殻径 2mm程度、円錐形。縫合は深い。殻質薄く、淡褐色で半透明。周縁は角張る。周縁より上部に 3本の明瞭な螺肋を持つ。蓋を欠く。陸棲で、海岸林～山麓に形成された広葉樹林床の落葉中に棲息する。

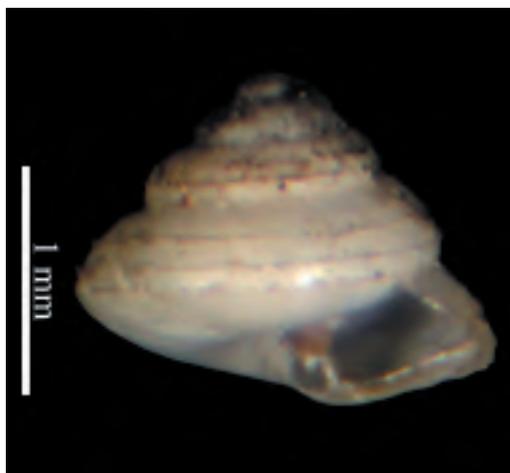
近似種 コシタカシタラに似るが、本種は螺塔が低く、縫合が明瞭に括れ、殻表に 3本の強い螺脈を巡らすことから区別できる。

生息地 上記参照。

生存の危機 森林伐採、山林開発、林相変化、産地の局限。

特記事項 本県は本種の分布北限と思われる稀産である。近年の調査により本県での分布が明らかとなったが、生存基盤が脆弱と考えられることから、今回新たに掲載した。[千葉県・埼玉県・群馬県・栃木県：絶滅危惧Ⅰ類、他：指定都道府県 9]

執筆者(協力者) 芳賀拓真・坂寄 廣
文献



日立市, 撮影 芳賀拓真

茨城県 2016 ● 準絶滅危惧 ● ● ● ●

茨城県 2000 対象外

環境省 2014 ● 準絶滅危惧 ● ● ● ●

選定理由 ①③ 棲息地が限定的で、個体数が少ない。

分布状況 北海道南西部，本州（福島県以南），九州。

形態及び生態 殻長 4mm 程度，螺塔が高く，円錐形。縫合は浅い。殻質極めて薄く，脆弱，淡黄褐色で半透明。殻表は平滑で，強い光沢を持つ。周縁に明瞭な稜角を持つ。蓋を欠く。陸棲で，山地の広葉樹林床の落葉中に棲息するが，個体密度は低い。

近似種 カサキビに似るが，本種はより螺塔が高く下膨れで，より丸みを帯び，かつ周縁角が弱いことで区別される。

生息地 筑波山系，八溝山系，阿武隈山系に分布する。

生存の危機 森林伐採，山林開発，林相変化，産地の局限。

特記事項 近年の調査により本県での分布が明らかとなったが，生存基盤が脆弱と考えられることから，今回新たに掲載した。[千葉県：絶滅危惧Ⅰ類，他：指定都道府県 7]

執筆者(協力者) 芳賀拓真・坂寄 廣・池澤広美 (堤 徳郎)

文 献



大子町，撮影 池澤広美

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	●	●	●
茨城県 2000		対象外			
環境省 2014	●	準絶滅危惧	●	●	●

選定理由 ①③ 県内の広範囲に分布するが，産地・個体数ともに少数である。

分布状況 本州（福島県以南），四国，九州。

形態及び生態 殻は微小で殻径 3mm 程度，算盤玉形。縫合は浅い。殻質極めて薄く，脆弱，茶褐色で半透明。殻表は平滑で，弱い光沢を持つ。周縁に明瞭な稜角を持つ。蓋を欠く。陸棲で，里山・平野林の自然度の高い広葉樹林床の落葉中に棲息するが，個体密度は低い。

近似種 前掲のスジキビに似るが，本種は周縁角より上部に成長脈が無いため区別できる。

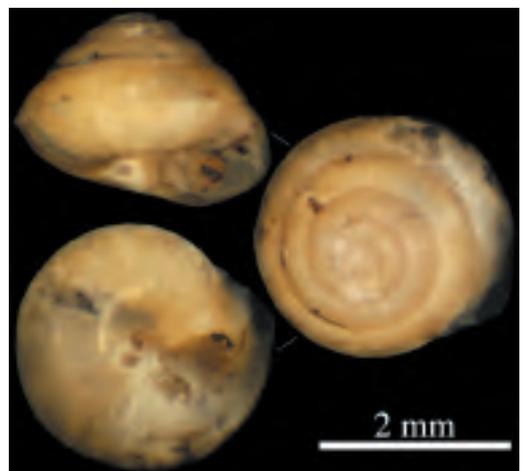
生息地 上記参照。

生存の危機 森林伐採，山林開発，林相変化，産地の局限。

特記事項 生存の危機はさして大きくはないと考えられるものの，個体数が少なく生存基盤が脆弱であり，環境変化による減少が懸念されることから，今回新たに掲載した。[千葉県：絶滅危惧Ⅰ類，他：指定都道府県 7]

執筆者(協力者) 芳賀拓真・坂寄 廣

文 献 1), 2), 43)



つくば市，撮影 芳賀拓真

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	●	●	●
茨城県 2000		対象外			
環境省 2014	●	準絶滅危惧	●	●	●

選定理由 ①③ 棲息地，個体数ともに数少ない。

分布状況 本州（福島県以南），四国，九州。

形態及び生態 殻は微小で殻長 2mm 程度，螺塔がやや高い円錐形。縫合は深く，螺管は膨らむ。殻質極めて薄く，脆弱，黄褐色でやや透明。殻表は微細な成長脈で覆われ，鈍い光沢を持つ。周縁にはごく鈍い角があるが，丸い。蓋を欠く。陸棲で，山地の自然度の高い広葉樹林床の落葉中に棲息するが，個体密度は低い。

近似種 オオウエキビに似るが，本種のほうが小型で，周縁角が鈍いことで区別できる。

生息地 筑波山系，八溝山系，阿武隈山系。

生存の危機 森林伐採，山林開発，林相変化，産地の局限。

特記事項 近年の調査により本県での分布が明らかとなったが，生存基盤が脆弱であるため，今回新たに掲載した。[埼玉県：絶滅危惧Ⅰ類，他：指定都道府県 5]

執筆者(協力者) 芳賀拓真

文 献



北茨城市，撮影 芳賀拓真

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	●	●	●
茨城県 2000		対象外			
環境省 2014	●	準絶滅危惧	●	●	●

選定理由 ①③ 棲息地，個体数ともに数少ない。

分布状況 本州（中国地方），四国，九州。

形態及び生態 殻は微小で殻径 2.5mm 程度，円錐形。縫合は深く，螺管は膨らむ。殻質薄く，脆弱，淡褐色でやや透明。体層は大きく，殻長の約 2/3 を占める。周縁にごく弱い角を持つ。臍孔は開き，この類としては広い。蓋を欠く。陸棲で，山地の自然度の高い広葉樹林床の落葉中に棲息するが，個体密度は低い。

近似種 ハリマキビに似るが，本種は小型で，螺管が膨らみ，臍孔が広いことで区別できる。

生息地 筑波山系，八溝山系，阿武隈山系。

生存の危機 森林伐採，山林開発，林相変化，産地の局限。

特記事項 近年の調査により本県での分布が明らかとなったが，生存基盤が脆弱であるため，今回新たに掲載した。[岡山県：準絶滅危惧，他：指定都道府県 2]

執筆者(協力者) 芳賀拓真

文 献



笠間市，撮影 芳賀拓真

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	●	●	●
茨城県 2000		対象外			
環境省 2014	●	準絶滅危惧	●	●	●

選定理由 ①③ 産地が限定的であり、棲息密度が低い。

分布状況 本州（北関東～静岡県）。

形態及び生態 殻径 13mm程度、低い円錐形。体層は大きい。殻質薄く、殻表は鱗片状突起を伴った、黄褐色の殻皮で覆われる。縫合はやや深い。螺管は丸く、周縁に明瞭な稜角を巡らす。臍孔は広く開き、深い。成貝の殻口は肥厚し、反転する。蓋を欠く。陸棲で、亜高山帯の自然度の高い落葉広葉樹林内やその縁辺に生じたササ類植生中の落葉下に棲息する。

近似種 カドコオオベソマイマイ等、同属の近似種が多いが、本種はより大きく、殻皮に密な鱗片状突起をもつことで区別できる。

生息地 筑波山系、八溝山系、阿武隈山系に広く点々と見られる。

生存の危機 森林伐採、山林開発、林相変化、産地の局限。

特記事項 生存の危機はさして大きくないと考えられるものの、個体数が少なく生存基盤が脆弱であり、環境変化による減少が懸念されることから、今回新たに掲載した。本種を含む *Aegista* 属は分類上の問題があり、種名は検討の余地がある。[群馬県：絶滅危惧Ⅰ類、他：指定都道府県 2]

執筆者(協力者) 芳賀拓真（川名美佐男・堤 徳郎・池澤広美）

文献 2)



北茨城市, 撮影 芳賀拓真

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	●	●	●	●
茨城県 2000		対象外				
環境省 2014	●	準絶滅危惧	●	●	●	●

選定理由 ①③ 近年、県北部と県南部の低地に分布することが確認されたが、産地は限定的である。

分布状況 本州全域、四国、沖縄。

形態及び生態 殻径 10mm程度の扁平な円盤形、左巻。殻質薄く、淡い黄褐色で半透明。殻表は光沢がある。殻頂、殻底ともにやや窪む。ヒラマキミズマイマイと酷似するが、本種のほうが大きく、体層周縁に毛状の殻皮を備えた明瞭な強い角を持つことで区別される。淡水棲で、主に低地の溜池、湿地、水田等の止水域の浅所に棲息し、水草等に付着して見られる。

近似種 前掲のヒラマキミズマイマイを参照。

生息地 上記参照。

生存の危機 湖沼開発、河川開発、湿地開発、土地造成、川相変化、水質汚濁、化学汚染、産地の局限。

特記事項 鑑定が困難なため見落とされがちであり、県内の分布状況の全容は明らかではない。今後の精査により追加産地が見出される可能性があるものの、本種の棲息環境が平穏とはいえないことから、今回新たに掲載した。[千葉県：絶滅危惧Ⅰ類、他：指定都道府県 5]

執筆者(協力者) 芳賀拓真（川名美佐男・堤 徳郎・池澤広美）

文献



神栖市, 2014年5月1日, 撮影 芳賀拓真

茨城県 2016	●	情報不足①注目種	●	●	●	●
茨城県 2000		対象外				
環境省 2014	●	情報不足	●	●	●	●

選定理由 ①③ 県北部の山間部に分布することが近年確認されたが、産地は限定的である。

分布状況 国内各地。

形態及び生態 殻は微小で、殻径3mm程度の扁平な円盤形、左巻。殻質薄く、黄褐色で半透明。生時は厚い沈着物で覆われることが多い。蓋を欠く。淡水棲で、溜池、湿地、水田等の浅い止水域に棲息し、水草等に付着する。

近似種 前掲のヒラマキミズマイマイに似るが、同程度の大きさの個体を比較した場合、本種は螺管が狭く巻数が多いことで区別できる。

生息地 上記参照。

生存の危機 湖沼開発、河川開発、湿地開発、土地造成、川相変化、水質汚濁、化学汚染、産地の局限。

特記事項 鑑定が困難なため見落とされがちであり、県内の分布状況の全容は明らかではない。今後の精査により追加産地が見出される可能性があるものの、本種の棲息環境が平穏であるとは言い難いことから、今回新たに掲載した。[香川県：絶滅危惧Ⅰ類、他：指定都道府県2]

執筆者(協力者) 芳賀拓真

文献



北茨城市, 撮影 芳賀拓真

茨城県 2016 情報不足①注目種 ●●●●●

茨城県 2000 対象外

環境省 2014 情報不足 ●●●●●

選定理由 ①②③ 牛久市で記録があるほか、大子町、那珂市でも採集されているものの、産地は限定的である。

分布状況 関東地方(茨城、埼玉、東京、神奈川、山梨)。

形態及び生態 殻長8mm程度、卵形。体層は大きく卵形、殻頂は小さい。殻質薄く脆弱、淡褐色で半透明。殻表は成長脈で刻まれ、弱い光沢がある。蓋を欠く。同所的に産するヒメオカモノアラガイとは殻での区別は困難で、鑑定には解剖学的検討が必要である。陸棲種で、低地の緩やかな流水域ないし止水域の用水路、水田、湖沼、湿原の水際に生じた植生中に棲息する。

近似種 ヒメオカモノアラガイとは生殖器の形態が顕著に異なり、本種は、膈盲管を持つことで区別できる。

生息地 県内各地に広く分布する可能性があり、今後の精査が必要である。

生存の危機 湖沼開発、河川開発、湿地開発、土地造成、川相変化、水質汚濁、化学汚染。

特記事項 生殖器形態の検討が種鑑定に必須なため、本種の存在が見過ごされていると思われる、県内の分布状況の全容は明らかではない。今後の精査により追加産地が見出される可能性があるものの、本種の棲息環境が平穏であるとは言い難いことから、今回新たに掲載した。[群馬県：絶滅危惧Ⅰ類、他：指定都道府県2]

執筆者(協力者) 芳賀拓真

文献 17)



那珂市, 2014年5月23日, 撮影 芳賀拓真

茨城県 2016 情報不足①注目種 ●●●●●

茨城県 2000 対象外

環境省 2014 絶滅危惧Ⅱ類 ●●●●●

選定理由 ①③ 棲息地が限定的であり、個体数が少ない。

分布状況 本州（関東以南）、四国、九州、沖縄、伊豆諸島。

形態及び生態 殻は微小で、殻長 2mm 程度、球形。螺管は急激に太くなり、体層が極めて大きい。縫合は浅い。殻質薄く、甚だ脆弱。殻表は不規則な粗い成長脈で刻まれ、淡黄色。殻口は丸い。蓋を欠く。陸棲で、平野の主に広葉樹や柑橘樹の樹幹上に棲息する。これらの直近の落葉中에서도見つかることがある。

近似種 県内に分布する種で似るものは無い。

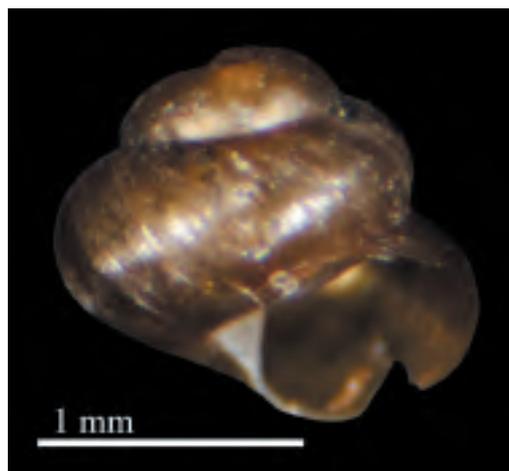
生息地 近年、城里町から死殻 1 個体のみが採集されたに過ぎない。

生存の危機 森林伐採、山林開発、林相変化、土地造成、産地の局限。

特記事項 本県は本種の分布の北限域であり、もともと個体数が少ない可能性がある。微小であるうえ棲息環境が特殊であることから、県内の分布の全容は明らかでなく、新産地の発見される可能性もある。[群馬県：絶滅危惧Ⅰ類、他：指定都道府県 3]

執筆者(協力者) 芳賀拓真

文献



栃木県佐野市、撮影 芳賀拓真

茨城県 2016 情報不足①注目種 ●●●●●

茨城県 2000 対象外

環境省 2014 対象外

選定理由 ①③ 棲息地が限定的で、個体数が概して少ない。

分布状況 本州全域。

形態及び生態 殻径 7mm 程度、低い円盤状。螺塔は低い。体層は非常に大きい。殻質薄く、淡黄褐色で半透明。殻表はほぼ平滑で、絹のような光沢を持つ。縫合はやや浅く、螺管は膨らむ。蓋を欠く。陸棲で、亜高山帯の自然度の高い落葉広葉樹林床に棲息し、落葉中や倒木下に見られる。

近似種 ヒラベッコウ・ニッコウヒラベッコウに似るが、本種は撫で肩とならないことで両者から区別できる。下記も参照。

生息地 筑波山系、八溝山系に分布する。筑波山では例外的に多産する。

生存の危機 森林伐採、山林開発、林相変化、産地の局限。

特記事項 本種を含む *Nipponochlamys* 属は分類上の問題があり、複数種が含まれている可能性がある。ともあれ、本県では産地・個体数ともに限定的であり、保全対象とすべきであることから、今回新たに掲載した。[埼玉県：絶滅危惧Ⅱ類、他：指定都道府県 4]

執筆者(協力者) 芳賀拓真（川名美佐男・堤 徳郎・池澤広美）

文献 2), 29)



つくば市筑波山、2011年 10月 31日、
撮影 芳賀拓真

茨城県 2016 情報不足①注目種 ●●●●●

茨城県 2000 対象外

環境省 2014 情報不足 ●●●●●

選定理由 ①③ 棲息地が限定的で、個体数が概して少ない。

分布状況 北海道、本州（茨城県以北）。

形態及び生態 殻径 7mm程度、低い円盤状。ハクサンベッコウに酷似するが、本種は殻色が濃く赤褐色半透明であり、螺塔がやや高く、螺管の拡大率がより大きいことで区別できる。陸棲で、亜高山帯の自然度の高い落葉広葉樹林床に棲息し、落葉中や倒木下に見られる。湿地や沢沿いなど、湿度の高い環境を好む。

近似種 上記参照。

生息地 阿武隈山系に局地的に分布する。産地ではまとまって見られることもあるが、個体数は概して少ない。

生存の危機 森林伐採、山林開発、林相変化、産地の局限、温暖化。

特記事項 茨城県は本種の分布の南限界と思われる。本種を含む *Nipponochlamys* 属は分類上の問題があり、複数種が含まれている可能性がある。ともあれ本県では産地・個体数ともに限定的であり、保全対象とすべきであることから、今回新たに掲載した。[指定都道府県無し]

執筆者(協力者) 芳賀拓真

文献 3), 24)



北茨城市, 2002年10月27日, 撮影 芳賀拓真

茨城県 2016 情報不足①注目種 ●●●●●

茨城県 2000 対象外

環境省 2014 情報不足 ●●●●●

選定理由 ①③ 棲息地が限定的であり、棲息密度が低い。

分布状況 本州（福島県南部～信越地方）。

形態及び生態 殻径 8mm程度、やや高い円錐形。螺塔はやや高く、縫合は深く、螺管は膨らむ。体層は大きく、殻長の約 2/3 を占める。殻質薄く、淡赤褐色で半透明。殻表はほぼ平滑で強い光沢がある。蓋を欠く。陸棲で、亜高山帯の自然度の高い落葉広葉樹林床に棲息し、落葉中や倒木下に見られる。

近似種 下記参照。

生息地 阿武隈山系、筑波山系に見られる。

生存の危機 森林伐採、山林開発、林相変化、産地の局限。

特記事項 本種を含む *Japanochlamys* 属は分類上の問題があり、クイロベッコウ等の複数種が含まれている可能性がある。複数種が含まれていたとしても、本県では産地・個体数ともに限定的であり、保全対象とすべきであることから、今回新たに掲載した。[指定都道府県無し]

執筆者(協力者) 芳賀拓真

文献 3)



北茨城市, 2013年11月9日, 撮影 芳賀拓真

茨城県 2016 情報不足①注目種 ●●●●●

茨城県 2000 対象外

環境省 2014 情報不足 ●●●●●

選定理由 ①③ 棲息地が限定的であり、棲息密度が低い。

分布状況 本州（福島県南部以南）、四国、九州。

形態及び生態 殻径 9mm程度、低いドーム状。螺塔は低い。体層は非常に大きい。殻質薄く、淡黄褐色で半透明。殻表は平滑で強い光沢を持つ。縫合は浅く、螺管は膨らむ。体層の上部はなだらかに下降し、周縁は丸い。蓋を欠く。陸棲で、里山～山地の自然度の高い広葉樹林床に棲息し、落葉中や倒木下に見られる。

近似種 後掲のニッコウヒラベッコウを参照。

生息地 筑波山系及び県北部に分布する。

生存の危機 森林伐採、山林開発、林相変化、産地の局限。

特記事項 茨城県生活環境部環境政策課（2000）、坂寄（1992）および坂寄（1987a）の「カントウベッコウ」は本種あるいはニッコウヒラベッコウと思われる。後掲のニッコウヒラベッコウとともに同定が混乱していると思われるが、本県では産地・個体数ともに限定的であり、保全対象とすべきであることから、今回新たに掲載した。[埼玉県：絶滅危惧Ⅱ類、他：指定都道府県 6]

執筆者(協力者) 芳賀拓真

文献 1), 2), 20), 29), 32), 41)



北茨城市, 撮影 芳賀拓真

茨城県 2016 情報不足①注目種 ●●●●●

茨城県 2000 対象外

環境省 2014 情報不足 ●●●●●

選定理由 ①③ 棲息地が限定的であり、棲息密度が低い。

分布状況 関東地方北部（茨城・栃木・群馬各県）。

形態及び生態 殻径 8mm程度、低いドーム状。ヒラベッコウに酷似するが、本種は螺管の拡大率が大きく、体層上部が急激に下降する「撫で肩」で、最大殻径の位置がより下部にあることで区別される。陸棲で、山地の自然度の高い落葉広葉樹林床に棲息し、落葉中や倒木下に見られる。

近似種 上記参照。前掲のヒラベッコウとは生殖器の形態で明確に区別される。

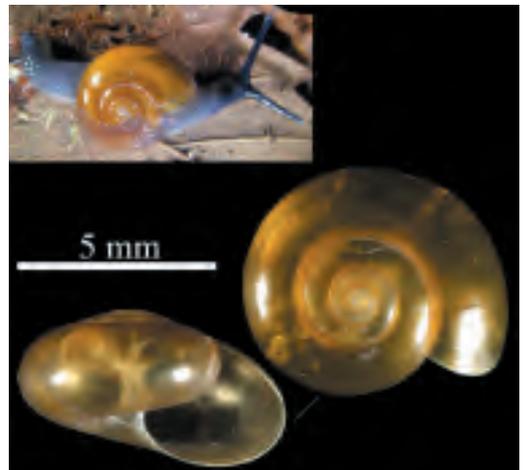
生息地 筑波山系、八溝山系、阿武隈山系に分布する。

生存の危機 森林伐採、山林開発、林相変化、産地の局限。

特記事項 前掲のヒラベッコウとともに同定が混乱していると思われるが、本県では産地・個体数ともに限定的であり、保全対象とすべきであることから、今回新たに掲載した。[群馬県：絶滅危惧Ⅰ類、他：指定都道府県 2]

執筆者(協力者) 芳賀拓真

文献 2), 26)



つくば市筑波山, 2011年10月31日, 撮影 芳賀拓真

茨城県 2016 情報不足①注目種 ●●●●●

茨城県 2000 対象外

環境省 2014 情報不足 ●●●●●

選定理由 ①②③④ かつては県内各地に広く分布し、霞ヶ浦周辺では食用のほか人形細工の材料として利用されるほど多産したが、農薬の影響等で激減し、現在では棲息地が極めて限られる。

分布状況 沖縄を除く国内各地。北米等に移入個体群がある。

形態及び生態 殻長60mm程度、円錐形、螺塔は高い。殻質薄く、褐色～黒褐色の殻皮で覆われ、光沢がある。螺管はやや膨らみ、周縁が角張る。同心円型で角質の蓋を持つ。胎生。淡水棲で、止水域ないし流れの弱い小川、用水路、溜池、水田、湿地等の泥底に棲息する。かつては日本各地で普通に見られたが、今や東北・北海道を除く地域では稀産種である。

近似種 前掲のマルタニシと酷似するが、周縁が角張ること、(保育する) 幼貝の殻長は殻径より長いことで区別できる。

生息地 近年は水戸市周辺や笠間市、そして小美玉市で記録があるに過ぎず、現存する個体群は極めて限られる可能性が高い。

生存の危機 湖沼開発、河川開発、湿地開発、土地造成、川相変化、水質汚濁、化学汚染、産地の局限、人為捕獲(食用・鑑賞用)。

特記事項 マルタニシより本種のほうが湧水の流れ込むような、温度変化の少ない、汚染されていない水質を好み、共産することはない。近年、霞ヶ浦産と思われる新鮮な死殻が大量に発見され、生息域の精査が必要となったため、県内の分布状況は明らかとは言えない。[群馬県・東京都：絶滅危惧Ⅰ類、他：指定都道府県18]

執筆(協力者) 芳賀拓真・桐原幸一・池澤広美(須賀英明)

文献 2), 4), 6), 7)



笠間市, A:成貝;B:幼貝, 撮影 芳賀拓真
生態写真, 2014年10月17日, 撮影 池澤広美

茨城県2016 情報不足②現状不明種 ●●●●●

茨城県2000 対象外

環境省2014 準絶滅危惧 ●●●●●

選定理由 ①③ タイプ産地である水戸市の地下水系からタイプシリーズの3個体が得られたに過ぎない稀産種である。

分布状況 茨城県(水戸市)。

形態及び生態 殻は微小で、殻長1.5mm程度。塔形で、殻頂で急激に細くなる。殻質薄く、半透明。縫合は明瞭で、殻頂は丸い。殻口は卵円形。臍孔は裂け目状で狭く開く。角質少旋型の蓋を持つ。淡水棲で、地下水系にのみ棲息する。

近似種 ホソミジンツボ、クルイミジンツボに似るが、外形から区別される。

生息地 上記参照。

生存の危機 土地造成、水質汚濁、化学汚染、地下水利用、産地の局限。

特記事項 原記載以降、一切の記録が無く、絶滅寸前もしくは絶滅した可能性もある。クルイミジンツボと同種ともされる。

執筆(協力者) 芳賀拓真(長谷川和範・国立科学博物館)

文献 8)



水戸市(ホロタイプ 国立科学博物館蔵),
撮影 長谷川和範

茨城県2016 情報不足②現状不明種 ●●●●●

茨城県2000 対象外

環境省2014 対象外

選定理由 ①②③ 北茨城市, 水戸周辺, 霞ヶ浦, 利根川から記録されているが, 利根川を除き再発見されていない。

分布状況 本州(茨城県以南), 四国北部。

形態及び生態 殻長6mm程度で紡錘形, 螺塔は高い。殻は厚く堅固, 青灰色で光沢があるが, 往々にして沈着物で覆われる。殻表は7本程度の螺脈を持つが, その強弱は個体群によって変異が激しい。殻口外唇は肥厚する。石灰化した同心円型の蓋を持つ。淡水棲で, 主に平野部の湖沼, 水田, 用水路の礫底や泥底等に棲息する。

近似種 県内に分布するもので似るものは無い。

生息地 上記参照。

生存の危機 湖沼開発, 河川開発, 湿地開発, 土地造成, 川相変化, 乾田化, 水質汚濁, 化学汚染, 産地の局限。

特記事項 土浦市真鍋(原記載では「Manabe.Hidachi」と記述)をタイプ産地とする。本種は肝吸虫の中間宿主であるため, かつての有病地で詳細な分布調査がなされている。井出(1936)は霞ヶ浦で少産と述べ, 実川(1953)も利根川周辺で少産としており, 本県の個体群は戦前に激減したと考えられる。近年本種が再発見された利根川周辺を精査する必要があるため, 本県での分布状況の全容は明らかではない。[千葉県・東京都・群馬県:絶滅危惧Ⅰ類, 他:指定都道府県14]

執筆者(協力者) 芳賀拓真(亀田勇一)

文献 9), 10), 11), 33), 40)



滋賀県琵琶湖, 撮影 芳賀拓真

茨城県2016 情報不足②現状不明種 ●●●●●

茨城県2000 対象外

環境省2014 ●●●●● 絶滅危惧Ⅱ類 ●●●●●

選定理由 ①②③ 棲息地が局限されるうえ, 個体数が極めて少ないと考えられる。

分布状況 北海道, 本州, 四国。国外では沿海州南部, サハリン, クリル諸島南部。

形態及び生態 殻は微小で, 殻長1.5mm程度, 螺塔の高い蝸形。殻質薄く, 淡茶褐色。螺層は膨らみ, 縫合は深い。殻口外唇は反転し, 殻口内に複数の歯状突起を持つ。蓋を欠く。陸棲で, 山地の溪流沿い, あるいは石灰岩地帯の広葉樹林床の落葉間に棲息するが, 個体密度が極めて低い稀産種である。

近似種 前掲のナタネキバサナギに似るが, 本種はより膨れ, 縫合が深く殻表が粗いことから区別できる。棲息環境も異なる。

生息地 筑波山神社境内から1個体のみ得られているが, その後再発見されていない(上島 励氏, 私信)。

生存の危機 森林伐採, 山林開発, 林相変化, 乾燥化, 産地の局限。

特記事項 微小なうえに個体数が少なく, かつ鑑定が困難であるため新産地が発見される可能性もあり, 県内の分布状況の全容は明らかではない。[群馬県:絶滅危惧Ⅰ類, 他:指定都道府県9]

執筆者(協力者) 芳賀拓真

文献



愛知県岡崎市, 撮影 西 浩孝

茨城県2016 情報不足②現状不明種 ●●●●●

茨城県2000 対象外

環境省2014 ●●●●● 絶滅危惧Ⅱ類 ●●●●●

選定理由 ①②③④ 県内での分布が局所的。生息環境の変化により激減している。

分布状況 北海道から本州。国外では北極圏を中心とする北半球北部。

形態及び生態 殻は長卵形で、背縁は前方に傾斜する。殻長は最大 15cm ほど。河川の砂礫底に生息し、グロキジウム幼生はヤマメ（本州西部はアマゴ）に寄生する。

近似種 コガタカワシンジュガイの殻長は 10cm を超えず、背縁は丸い。幼生の寄主はイワナ。

生息地 県北部の大北川水系と鮫川水系に生息。ただし、河川内での雌雄の群れはほとんどみられず、毎年繁殖が成功しているか不明である。特に大北川個体群は危機的な状況にあると思われる。

生存の危機 森林伐採によるシルトの流入、グロキジウムが寄生するヤマメの乱獲など。

特記事項 生息環境の悪化により県内で減少している。[栃木県：絶滅危惧Ⅰ類、本州 11 県で絶滅危惧指定]

執筆者(協力者) 稲葉 修・諸澤崇裕・桐原幸一

文献 1), 2), 3), 4), 5), 6), 7), 8)



茨城県北部, 2014年6月22日, 撮影 諸澤崇裕

茨城県 2016 ●●●●● 絶滅危惧ⅠA類 ●

茨城県 2000 ●●●●● 絶滅危惧種 ●

環境省 2014 ●●●●● 絶滅危惧Ⅱ類 ●●

選定理由 ①②③④ 環境の変化により、県内で激減していると思われる。

分布状況 日本各地。国外ではシベリア、中国、台湾など。

形態及び生態 殻は長卵形。大型であるが殻は薄い。殻頂の両側背縁に翼状突起がある。稚貝は後背縁の翼状突起が発達している。擬主歯はなく、後側歯が両殻にみられる。河川下流域や溜池、湖沼の泥底、砂泥底に生息。

近似種 ドブガイ類とは殻の形が異なる。

生息地 菅生沼、霞ヶ浦、北浦、水戸市千波湖などから記録されているが、どの生息地でも激減している。千波湖では近年確認できない。

生存の危機 生息地の環境悪化とマニアの採集圧が個体群激減の要因と考えられる。

特記事項 生息環境の悪化により県内で減少しているためカテゴリーを変更した。[千葉県：最重要保護 A, 埼玉県：絶滅危惧Ⅱ類, 群馬県・東京都：絶滅危惧Ⅰ類, 栃木県：情報不足]

執筆者(協力者) 稲葉 修・諸澤崇裕・桐原幸一

文献 3), 4), 10), 11)



霞ヶ浦, 1998年4月17日, 撮影 池澤広美

茨城県 2016 ●●●●● 絶滅危惧ⅠA類 ●

茨城県 2000 ●●●●● 危急種 ●●

環境省 2014 ●●●●● 準絶滅危惧 ●●●●●

選定理由 ①④ 県内の生息地の多くで環境が変化し、それに伴い減少している。マニアによる採集圧も減少理由の一つと考えられる。

分布状況 日本固有種。北海道を含む東日本に分布。

形態及び生態 殻は長卵形で後縁はやや尖る。殻頂付近の様子はゴマ粒状。成長とともに殻頂は前方に位置するようになる。殻長は最大で7cmほど。河川や水路、溜池の砂礫底に生息する。グロキジウム幼生はコイ科やハゼ科魚類に寄生する。

近似種 オトコタテボシガイに似るが、分布域は重ならない。

生息地 利根川水系、那珂川水系、久慈川水系間の水路や溜池などで生息が確認されている。マツカサガイ同様、県内各地で減少している。

生存の危機 生息地の護岸工事や水質悪化などによる減少。また、それら環境の変化によるグロキジウム寄生魚類の減少。マニアによる採集圧。

特記事項 前回RDB作成時は県内での棲息状況が不明であったため今回新たに掲載した。[埼玉県：準絶滅危惧、栃木県：絶滅危惧Ⅰ類、千葉県：要保護生物]

執筆者(協力者) 稲葉 修・諸澤崇裕・桐原幸一

文献 3), 4)



那珂川水系, 2014年2月15日,
撮影 諸澤崇裕

茨城県2016 ●●● 絶滅危惧Ⅱ類 ●●●

茨城県2000 対象外

環境省2014 ●●● 準絶滅危惧 ●●●

選定理由 ①⑤⑥ 環境の変化による減少だけでなく、外来種に置き替っており、県内における個体群は危機的と思われる。

分布状況 本州、四国、九州。日本固有種。

形態及び生態 外層の色は黄色から褐色で、外層の光沢はあまり見られない。内層は全体的に白色から薄紫色で腹縁に近づくにつれ紫色が濃くなる。殻長は突出しない。河川の中下流や農業水路などの砂礫底に生息する。

近似種 タイワンシジミに似ており、外見での識別は難しい。

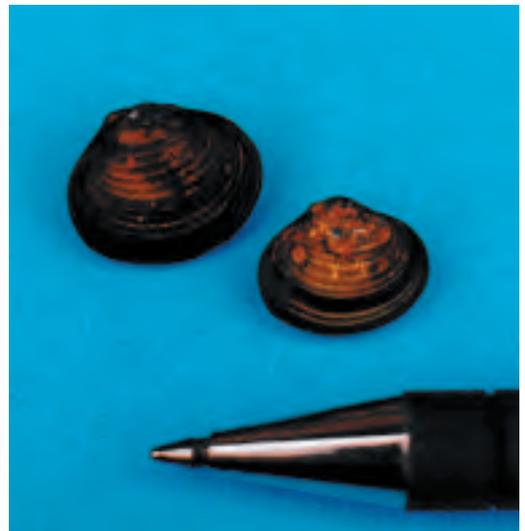
生息地 県内各地に生息しているが、近年はタイワンシジミに置き替っている場所もある。

生存の危機 素掘り水路の改修工事の影響、生活排水からの外来シジミ幼貝の流下・侵入により、競合・交雑が考えられる。

特記事項 交雑可能な外来シジミ類の増加、分布拡大により県内個体群が危機的であると考えられるため今回新たに掲載した。[千葉県：最重要保護生物]

執筆者(協力者) 稲葉 修・諸澤崇裕・桐原幸一

文献 3), 7)



那珂市, 撮影 稲葉 修

茨城県2016 ●●● 絶滅危惧Ⅱ類 ●●●

茨城県2000 対象外

環境省2014 ●●● 絶滅危惧Ⅱ類 ●●●

選定理由 ①④ 県内の生息地の多くで環境が変化し、それに伴い減少している。マニアによる採集圧も減少理由の一つと考えられる。

分布状況 日本固有亜種。北海道、本州、四国、九州に分布。

形態及び生態 殻は長卵形。擬主歯と後側歯が右殻に1つ、左殻に2つ。右殻の擬主歯は薄く板状。殻長は最大で9cmほど。河川や水路の砂礫底などに生息する。グロキジウム幼生はコイ科やハゼ科魚類に寄生する。

近似種 小型のドブガイ類に似ることがあるが、擬主歯の有無などで識別できる。

生息地 久慈川水系から利根川水系で確認。県北部では少なく、霞ヶ浦と北浦、その流入河川に多い傾向にある。ただし、近年は減少している。霞ヶ浦・北浦の個体は殻長6cm以下が多い。

生存の危機 生息地の護岸工事や水質悪化などによる減少。また、それら環境の変化によるグロキジウム寄生魚類の減少。マニアによる採集圧。

特記事項 県内全域、特に主要な生息地である利根川水系において激減したため今回新たに掲載した。[千葉県：一般保護生物、埼玉県：準絶滅危惧、栃木県：情報不足]

執筆者(協力者) 稲葉 修・諸澤崇裕・桐原幸一

文献 3), 4), 10)



那珂市, 撮影 稲葉 修

茨城県 2016	準絶滅危惧
茨城県 2000	対象外
環境省 2014	対象外

選定理由 ①④ 県内の生息状況ははっきりしていないものの、他のイシガイ科二枚貝類と同様に減少の可能性が否定できない。

分布状況 日本各地。国外ではシベリア、朝鮮半島、中国など。

形態及び生態 殻は中型の長卵形で、薄く、膨らみがある。殻頂は背縁のほぼ中央にある。背縁と腹縁は平行に走る。擬主歯と後側歯はない。フネドブガイ型とタネドブガイ型の2タイプがあり、フネドブガイ型では殻頂部が背縁より高く盛り上がるが、タネドブガイ型では背縁より高く盛り上がらない。

近似種 ドブガイ類に似る。

生息地 県北部、霞ヶ浦・北浦周辺。

生存の危機 生息地の護岸工事や水質悪化などによる減少やマニアによる採集圧が減少要因と考えられる。

特記事項 県内での生息状況が分りつつあり、他のイシガイ科二枚貝同様に生息環境悪化の影響を受けているため県内全域、特に主要な生息地である利根川水系において激減したため今回新たに掲載した。[山口県：絶滅危惧 I A 類、福井県：要注目]

執筆者(協力者) 諸澤崇裕・稲葉 修・桐原幸一

文献 9)



霞ヶ浦流入河川, 2012年5月3日, 撮影 諸澤崇裕

茨城県 2016	情報不足①注目種
茨城県 2000	対象外
環境省 2014	対象外

選定理由 ①③ 生息地が限定され、改変のおそれがある。生殖群泳が1950年代に明らかにされた。現在でも出現しているが、その量的変動はよくわかっていない。

分布状況 北海道～沖縄。国外では極東ロシア、朝鮮半島。

形態及び生態 最大体長21cm前後、いぼ足を含めた体幅約5mm、剛毛節200内外、体前部は蛍光をもった黒褐色、体後部は深紅色、前口葉はやや六角形で前半に縦線がある。眼は2対。吻には小顎片がなく柔軟な小突起をもつ。その配列は第1区に1個、2区に1～6個、第3区に8個、第4区に13～15個。針状複剛毛と短複剛毛を備える。河川汽水域のヨシ原などの砂泥底に穴居。おもに10月から11月の大潮の日没後満潮直後に生殖変態した部分（「バチ」）が離れて泳ぎだし水中で放卵放精する。ほとんどの新生個体は翌年性成熟し死亡する。

近似種 ゴカイ類は吻に小顎片を多数もつ。

生息地 涸沼の下流域、ヨシ原の泥底に深く穿孔して生息。

生存の危機 涸沼におけるヨシ原の減少から個体群は小さな規模で維持しているものと思われる。生息場所の減少・劣化が懸念される。

特記事項 汽水に産する希少種としてとり上げた。[日本ベントス学会：準絶滅危惧、宮城県：準絶滅危惧]

執筆者(協力者) 森野 浩 (山西良平)

文献 1), 2), 7)



東京湾, 撮影 小松浩典

茨城県2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県2000		対象外	
環境省2014		対象外	

選定理由 ③ 生息地が限定されている。分類学的研究が必要である。

分布状況 涸沼以外の分布については分類研究による種の確定が必要である。

形態及び生態 汽水域の砂泥底に生息。涸沼の本種は *N. latericeus* Sars とされていたが、それとは異なる複数の小型種が全国から報告され、涸沼産の種はそのうちの一種と思われる。体は赤褐色で体後部は淡い。体は前後両部にわかれて、前部は12剛毛節からなる。頭部は円錐形で後縁には斜めに多数の眼点が散在する。囀口節は2環輪からなり剛毛をもたない。体前部の背腹両足枝は有翼状剛毛束のみをもつ。体後部の両足枝は楕円形の隆起体で、被囊鉤状剛毛をもつ。鰓は小突起に退化し、背足枝の両側にある。

近似種 複数の近似種が出現するものの、区別点については今後の研究をまつ必要がある。

生息地 涸沼湖盆。

生存の危機 涸沼湖底に一定の密度で出現、さしあたっての生存の危機は大きくはない。

特記事項 近似種とのちがいなど不明の点が多い。

執筆者(協力者) 森野 浩

文献 1), 6), 7)

茨城県2016	●	情報不足②現状不明種	● ● ● ●
茨城県2000		対象外	
環境省2014		対象外	

選定理由 ② 本種は1966年に潟沼から記録されたが、その後の調査では確認されていない。

分布状況 北海道から九州の内湾。国外ではインド太平洋沿岸域。

形態及び生態 最大体長22mm、第5体節の幅は2mm。生時の体色は黄褐色。口前葉の前端は強く二分する。肉冠は第3剛毛節の後端に達する。後頭触手は存在する。4個の眼は台形にならぶ。鰓は第7剛毛節から体の中央部まで存在。第1体節は長い腹足剛毛のみ。第5剛毛節の変形剛毛群はJ字状に配列。尾節は盤状で背面がへこみ、1対の短い突起をもつ。日本各地の汽水域に豊富に出現。底泥堆積物の表面を素早くほふく移動し、底質間隙や堆積物中に素早く身を隠す。

近似種 オニスピオでは第5変形剛毛群はU字状に配列。

生息地 潟沼の湖底部。

生存の危機 最初の記録から約半世紀にわたって記録がないことから、少なくとも個体群は極めて限られていて、絶滅の危機に直面している可能性がある。

特記事項 個体数が少なく現状について不明である。

執筆者(協力者) 森野 浩 (大越和加)

文献 3), 4), 5)



宮城県浦生干潟, 撮影 近藤智彦(大越和加)

茨城県2016 情報不足②現状不明種 ●●●●

茨城県2000 対象外

環境省2014 対象外

選 定 理 由 ②③ 生息場所は極めて限定され、開発などで消滅する可能性がある。

分 布 状 況 北海道～九州、奄美大島、沖縄島。国外ではサハリン、朝鮮半島、中国大陸、ベトナム。

形態及び生態 甲長 15mm、甲幅は 17mm、茶褐色で横に長い六角形の甲を持つ。甲は中央を横切る稜によって前後に分かれる。干潟の泥の中に穴を掘って生息する。河川汽水域の泥質干潟や周辺の溝筋に生息。活動は夜間の冠水下でおこなう。

近 似 種 近似種のクマノエミオスジガニは本種より甲が縦長で歩脚に白っぽい縞模様があり、宮崎県、長崎県、三重県などに記録が限られる。

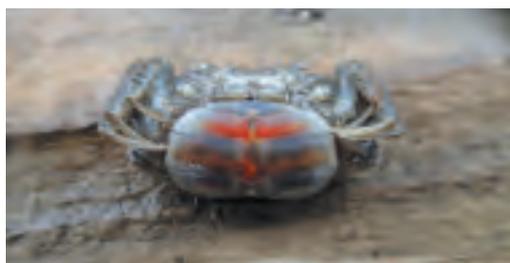
生 息 地 涸沼水系、関根川河口域（高萩市）の限られた干潟に出現。

生存の危機 限定された生息場所と開発の恐れ、近隣県における個体群の減少から、個体群の供給も困難で、生存の危機は大きいものと判断される。

特 記 事 項 汽水域に分布する希少種である。[千葉県：最重要保護生物、日本ベントス学会：絶滅危惧Ⅱ類]

執筆(協力)者 森野 浩・中山聖子

文 献 7), 9)



涸沼, 2014年6月28日, 撮影 池澤広美

茨城県 2016 ●●● 絶滅危惧ⅠA類 ●●

茨城県 2000 対象外

環境省 2014 対象外

選 定 理 由 ③ 近年になって生息が確認された種で、生息地が限定されている。

分 布 状 況 太平洋側は茨城県以南、日本海側は京都以南、四国、九州、対馬、奄美大島、沖縄本島、西表島。

形態及び生態 成体は体長 40mmに達する。生時の体色はほぼ透明で、赤褐色、黄色、白色の小さな斑紋がある。眼上棘をもつ。額角は細長く、上縁はまっすぐで、16～31本の歯をもち、眼窩後縁より後方に2～4本の歯がある。小卵多産。海に流入する河川に生息し、幼生は汽水域で生活し、稚エビに変態して川を遡る両側回遊を行う。

近 似 種 本種はヌカエビと似るが、額角の歯の数や位置等で区別される。

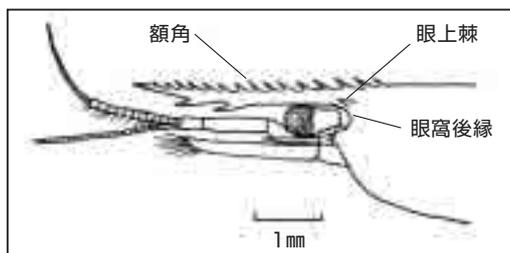
生 息 地 河口から河川の上流まで生息する。本県では、1970年代に霞ヶ浦で生息記録があるが、標本不在のため長年、詳細が不明であった。近年、那珂川、利根川河口近くのワンド、御前山の皇都川、涸沼流入河川の若宮川で生息が確認されている。

生存の危機 河口や河口付近のワンドは埋め立て等で自然が壊されやすい。

特 記 事 項 茨城県は太平洋側での分布の北限にあたり、生息地が少ない。[千葉県：要保護生物、滋賀県：希少種、京都府：絶滅危惧種、岡山県：留意]

執筆(協力)者 池澤広美・茅根重夫(駒井智幸・加納光樹・金子誠也)

文 献 3), 4), 12), 13), 14)



上:御前山, 2014年11月6日, 撮影 池澤広美
下:原図 茅根重夫

茨城県 2016 ●●● 絶滅危惧Ⅱ類 ●●●

茨城県 2000 対象外

環境省 2014 対象外

選 定 理 由 ②③ 生息地が限定され、個体群は極めて小さい。東京以北では個体群が大きく減少している。宮城県では絶滅が危惧される状態にある。

分 布 状 況 青森、宮城から沖縄。国外では朝鮮半島、中国、台湾。

形 態 及 び 生 態 甲長 40mm, 甲幅 50mm程度。甲は丸みを帯びた四角形、前後に湾曲する。甲の中央に溝がある。甲は紫を帯びた褐色でハサミ脚はさらに紫色が明瞭。河口域のヨシ原に大きな巣穴をつくって生息し、ヨシを食べる。夜行性。

近 似 種 近似種のアシハラガニよりも甲が丸く、紫色が強い。

生 息 地 茂宮川河口域の比較的上流域の狭い場所に非常に低密度で生息する他、鮎川でも確認されている。

生 存 の 危 機 生息地の限定と極めて小さな個体群であること、近県での個体群の減少から、茂宮川河口域が改変をうけヨシ原が減少すると個体群の維持は困難と考えられる。

特 記 事 項 汽水域に分布する希少種である。[千葉県：消息不明・絶滅生物, 日本ベントス学会：準絶滅危惧]

執筆者(協力者) 森野 浩・桐原幸一(中山聖子)

文 献 9), 10), 11)



上：茂宮川, 撮影 井上久夫；

下：茂宮川, 2013年9月22日, 撮影 中山聖子

茨城県 2016 ●●● 絶滅危惧Ⅱ類 ●●●

茨城県 2000 対象外

環境省 2014 対象外

選 定 理 由 ①③ 生息場所が限定され、個体群も小さい。生息場所が開発行為で影響を受けやすく、脆弱である。

分 布 状 況 陸奥湾以南～種子島。国外では朝鮮半島、中国大陸北部。

形 態 及 び 生 態 甲長 30mm, 甲幅 40mm程度まで。甲は横長で四角い。眼柄が非常に長く、干潟では目を立ち上げる。泥質干潟の中・低潮帯に生息。オスのディスプレイではハサミ脚が眼まで上がるが開かれず、下にさがる。繁殖期は春から秋。

近 似 種 近似種のおサガニは本種より甲が横長で赤黒く、ハサミ脚に多数の顆粒がある。

生 息 地 茂宮川河口域の比較的上流域の狭い泥質干潟に低密度で生息。

生 存 の 危 機 生息地の限定と小さな個体群、近県での個体群の減少から、茂宮川河口域が改変をうけると個体群の維持は困難と考えられる。

特 記 事 項 特定の汽水域に出現する希少種である。[千葉県：一般保護生物, 日本ベントス学会：絶滅の恐れのある地域個体群(種子島), 東京：留意種]

執筆者(協力者) 森野 浩・桐原幸一・中山聖子

文 献 9), 11)



上：茂宮川河口域, 撮影 小池 渉；

下：岡山県笠岡市, 撮影 池澤広美

茨城県 2016 ●●● 絶滅危惧Ⅱ類 ●●●

茨城県 2000 対象外

環境省 2014 対象外

選定理由 ①③ 生息場所が限定され、個体群も比較的小さい。河川改修等でその場所が悪化する恐れがある。

分布状況 北海道～琉球。国外では台湾、中国北部。

形態及び生態 甲長 9mm, 甲幅 10mm程度まで、甲は丸く、背面が膨らみ、全体に淡褐色でつやがあり、ハサミ脚、歩脚、胸節は紫色を帯びる。ハサミ脚は左右相称で、細長く、両指の先端は鋭い。内湾や河口干潟の砂質、砂泥底に巣穴を掘り集合して生息、ハサミ脚で器用に砂団子を作る。

近似種 近似種のみナミコメツキガニは国内では種子島以南に分布。

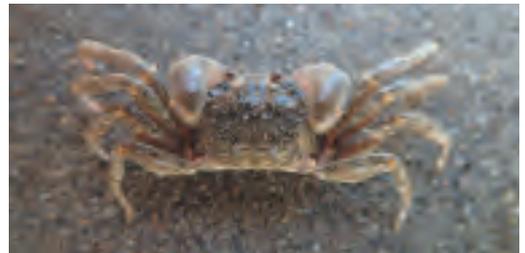
生息地 茂宮川河口干潟の潮間帯上部、砂泥底に生息。

生存の危機 河川改修による水路の変更や砂の供給の変容によって個体群が激減する恐れがある。

特記事項 汽水域の狭い生息域に出現する希少種である。[千葉県：一般保護生物、東京都：留意種]

執筆者(協力者) 森野 浩・桐原幸一(中山聖子)

文献 9), 11)



茂宮川河口域、撮影 上:小池 渉;
下:池澤広美

茨城県 2016	● ● ●	絶滅危惧Ⅱ類	● ● ●
茨城県 2000			対象外
環境省 2014			対象外

選定理由 ①③ 生息地が限定され、個体群は小さい。茂宮川干潟は河川改修などで消滅する可能性がある。

分布状況 本州(宮城県以南)～九州、奄美大島、沖縄島、西表島。国外では朝鮮半島。

形態及び生態 甲長 7mm, 甲幅 10mm程度まで。甲は横長で六角形に近い。背面がやや膨らみ、短毛がある。全体に淡青色褐色で光沢があり、胸の部分は青色を帯びる。ハサミ脚は左右相称で短く白い。内湾や河口干潟の泥質底に巣穴を掘り、集合して生息。泥から有機物をこしとり泥団子をつくる。オスはハサミ脚をリズミカルに上下する。

近似種 近似種のみハラグレチゴガニは国内での分布が九州有明海に限られる。

生息地 茂宮川河口干潟の潮間帯下部に生息。

生存の危機 茂宮川河口域はこれまで幾度か改修工事の対象となってきた。チゴガニの生息場所としては不安定で、個体群は常に致命的な影響を受ける恐れがある。

特記事項 汽水域に限られた生息域に出現する希少種である。[千葉県：一般保護生物、東京都：留意種、日本ベントス学会：奄美大島以南の個体群は、絶滅の恐れあり]

執筆者(協力者) 森野 浩・桐原幸一(中山聖子)

文献 9), 11)



茂宮川河口域、撮影 上:小池 渉;
下:池澤広美

茨城県 2016	● ● ●	絶滅危惧Ⅱ類	● ● ●
茨城県 2000			対象外
環境省 2014			対象外

選 定 理 由 ①③ 生息地が限定されている。生息環境の悪化のおそれがある。

分 布 状 況 岩手県～熊本県。日本固有種。

形態及び生態 最大体長 17mm。第一触角は第二触角より長く、目は大きい。腹節背面後縁に少数の毛、尾節背面後縁には棘を備える。第三尾肢の内肢は外肢の1/3の長さ。汽水湖及び河口域の落ち葉の下などに生息、繁殖期は冬季から初春。

近 似 種 近似種のアゴトゲヨコエビは腹節背面の後縁に多数の毛を備えることで区別される。

生 息 地 涸沼のヨシ原や湖岸の波打ち際の堆積物の下。大北川河口。

生存の危機 生息地が限定されていることと生息環境改変・悪化の恐れから危機が存在するものと判断される。

特 記 事 項 汽水域に出現する希少種である。[日本ベントス学会：準絶滅危惧]

執筆(協力)者 森野 浩

文 献 1), 9)



涸沼, 撮影 森野 浩;
交接中の雄(上)と雌(下)

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県 2000		対象外	
環境省 2014		対象外	

選 定 理 由 ① 本県での生息域は狭まっており、生息数も減少している。

分 布 状 況 太平洋側は青森県から愛知県、日本海側は青森県から島根県、滋賀県の琵琶湖。日本固有種。

形態及び生態 成体は体長約30mm。生時の体色は透明で、白色、灰色、薄茶色などの小さな斑紋がある。眼上棘をもつ。額角は細長く、上縁はまっすぐで、6～20本の歯をもつが、眼窩後縁より後方には通常、歯はない。大卵少産または中卵中産。陸封型で、一生を淡水域で過ごす。

近 似 種 本種はヌマエビと似るが、額角の歯の数や位置等で区別される。

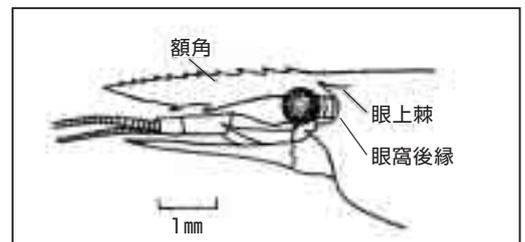
生 息 地 湖沼や河川の中流・上流域に生息する。本県では、1993年以前は霞ヶ浦や県南西部でも確認されていたが、近年の報告例はない。近年は久慈川や那珂川など主に県北の河川の中流・上流域で生息が確認されている。

生存の危機 汚染の少ない環境を好む種のため、護岸工事や生活排水の流入により生存が危ぶまれる。また、外来魚による捕食圧も懸念される。

特 記 事 項 分布が限定されており、生息数も減少傾向にある。当初はヌマエビの一亜種とされていたが、現在は別種とみなされている。[千葉県：要保護生物、埼玉県：絶滅危惧Ⅱ類、群馬県：準絶滅危惧、栃木県：要注目、東京都：留意種]

執筆(協力)者 池澤広美・茅根重夫(駒井智幸)

文 献 3), 4), 5), 6)



上：久慈川, 撮影 池澤広美
下：原図, 茅根重夫

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県 2000	●	希少種	● ● ● ●
環境省 2014		対象外	

選定理由 ③ 本県では近年になって生息が確認された種で、生息地が限定されている。

分布状況 太平洋側は茨城県以南、日本海側は新潟県以南、四国、九州、奄美大島、久米島、石垣島、西表島。国外では韓国。

形態及び生態 体長は30mm前後で、体色は透明または淡褐色で、白色、赤褐色、黄色の小さな斑紋がある。眼上棘はない。額角は細長く、まっすぐかやや上向きに反り、第1触角の柄部先端をわずかに超える。上縁の歯は12～30本で、下縁には3～22本の歯がある。上縁の先端には他と離れた歯が存在する。小卵多産。海に流入する河川に生息し、幼生は汽水域で生活し、稚エビに変態し、川を遡る両側回遊を行う。

近似種 本種はヌマエビとヌカエビに似るが、眼上棘がない点で区別される。また、ヤマトヌマエビは額角上縁の歯が先端まで連続している点で本種と異なる。

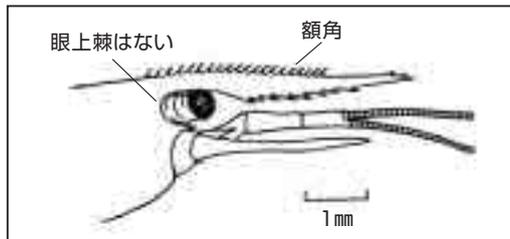
生息地 県内では那珂川千代橋下、北浦、涸沼および利根川河口付近のワンドで確認されている。

生存の危機 河口や河口付近のワンドは埋め立て等で自然が壊されやすい。

特記事項 生息地が限定されている。[千葉県：最重要保護生物、兵庫：Bランク]

執筆者(協力者) 池澤広美・茅根重夫(駒井智幸)

文献 3), 4)



上：涸沼，撮影 茅根重夫；
下：原図，茅根重夫

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県 2000		対象外	
環境省 2014		対象外	

選定理由 ②④ 霞ヶ浦・北浦、などで減少傾向にある。

分布状況 北海道から九州、南西諸島。国外ではロシア極東、韓国、中国南部、台湾。

形態及び生態 甲長50mm、甲幅55mm程度。川に産するカニの中では大型種である。ハサミ脚に濃い毛束を備える。甲はやや後方に広がった四角形をしており、甲面中央に1本の稜線、側縁部には棘が3対ある。成体は河川上流域に生息し、繁殖期になると河口域から海岸域に下降し、交尾・産卵する。ゾエア幼生は沿岸域でプランクトン生活をおこない、メガローパ幼生になると河口域に遡上する。稚ガニになってからさらに上流に遡上し、成長を重ねる。

近似種 近似種のチュウゴクモクズガニは側縁部に4対の棘をもつことで区別される。オガサワラモクズガニは小笠原諸島に分布。

生息地 関根川河口、茂宮川河口、那珂川水系、利根川下流部(河口堰より下流部)、涸沼水系など。

生存の危機 主要な生息地で強い採捕圧があることと、霞ヶ浦、北浦では個体群の減少傾向があることから、将来的に生存の危機のおそれがある。

特記事項 成体は汽水域から河川中流域に分布し、強い採捕圧をうけている。[千葉県：一般保護生物、埼玉県：準絶滅危惧、栃木県：要注目、群馬県：情報不足、東京都：留意種]

執筆者(協力者) 森野 浩・中山聖子(駒井智幸)

文献 8), 11), 15)



茂宮川, 2004年6月6日, 撮影 池澤広美

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県 2000		対象外	
環境省 2014		対象外	

選定理由 ①③ 生息地が限定されている。生息地の環境が改変をうけ、悪化するおそれがある。

分布状況 青森県～九州。国外では朝鮮半島、中国大陸沿岸、台湾。

形態及び生態 甲長 30mm, 甲幅 35mm程度。ハサミ脚が顕著に赤くなる。甲は四角形で背面は平滑で光沢がある。甲の側縁に切れ込みはない。歩脚の上縁及び下縁に短毛が列生する。干潟の後背地のヨシ原や陸側の土手や松林などの山林を生息地とする。夏季の繁殖期には抱卵したメスが幼生をかえすため、大潮の夜に海辺まで降りてくる。

近似種 近似種のベンケイガニは甲の側縁に二対の棘をもつ。

生息地 茂宮川河口、那珂川、利根川下流部（神栖市）。

生存の危機 差し迫った危機はないが、将来的に生息地が改変を受けて悪化するおそれがある。

特記事項 汽水域の陸地側に分布し、近隣地方では保護が必要とされている。[千葉：一般保護生物, 日本ベントス学会：絶滅の恐れのある地域個体群（東北地方）]

執筆者(協力者) 森野 浩・中山聖子

文献 9), 11)



茂宮川河口域, 2007年8月1日, 撮影 池澤広美

茨城県 2016	●	準絶滅危惧	● ● ● ●
茨城県 2000		対象外	
環境省 2014		対象外	

選定理由 ③ 2000年の報告以来記録がなく、国内・湖内での分布状況は不明。

分布状況 日本（霞ヶ浦）。

形態及び生態 体長約 10 mm, 背面は白色に不規則な模様をもつ。眼は 15 個の個眼からなる。第二触角の先端の節は明瞭、雄第二腹肢の交尾針は2叉型、胸脚の剛毛が長い。霞ヶ浦の沿岸砂泥底に生息。

近似種 ムロミウミウミナナフシ、ヒゴウミナナフシとは雄第二腹肢の内肢などで区別される。

生息地 霞ヶ浦（西浦）、麻生町島並沖の砂泥底。

生存の危機 霞ヶ浦の湖岸・沿岸環境は改変を受けてきた。本種の生息環境は安定していない。

特記事項 最近発見された希少種である。

執筆者(協力者) 森野 浩

文献 2)



霞ヶ浦（富山市科学博物館蔵）、
撮影 森野 浩・根来 尚

茨城県 2016	●	情報不足①注目種	● ● ● ●
茨城県 2000		対象外	
環境省 2014		対象外	

選 定 理 由 ③ 生息地が限定されている。

分 布 状 況 関東以南。国外では南西諸島から東南アジア。

形態及び生態 甲長 23 mm, 甲幅 26 mm 程度。甲は四角形, 前側縁にはっきりした歯があり, 眼窩の外歯とあわせて2本の歯をもつ。甲は褐色, 短い毛束が散在し, 後半の側縁から5~6本の線が走る。河川河口域などに生息し陸域で活動する。

近 似 種 近似種のフタバカクガニモドキは国内では宮古島以南に分布しハサミ先端が赤色になる。

生 息 地 茂宮川河口, 那珂川河口 (旧常澄村)。

生存の危機 生息地が限定されている。生息地環境が改変をうけるおそれがある。

特 記 事 項 本種は南方種であるが, 近年東京湾周辺で確認例が増えている。茂宮川は分布の最北端の可能性はある。分布が北上している可能性があり, その動態を今後注目する必要がある。

執筆(協力)者 森野 浩・中山聖子

文 献 8)



茂宮川, 2010年5月18日, 撮影 中山聖子

茨城県 2016 情報不足①注目種 ●●●●

茨城県 2000 対象外

環境省 2014 対象外

3) 文献一覧

海綿動物門

- 1) 益田芳樹. 2006. 日本産淡水海綿の概説および日本産の種について. タクサ 日本動物分類学会誌, (20): 15-22.
- 2) 佐々木信男. 1973. 本州中部(関東, 中部, 近畿各地方)産の淡水海綿について. 水大研報, 21: 301-317, 6 pls.
- 3) 益田芳樹・佐藤國康. 1990. 宍道湖及びその周辺の淡水海綿について. 川崎医会誌一般教, (16): 67-82.
- 4) 茅根重夫・池澤広美・益田芳樹. 2008. 淡水海綿類. 「茨城県自然博物館総合調査報告書ー2007年茨城県の昆虫およびその他の無脊椎動物の動向ー」, pp. 61-62, ミュージアムパーク茨城県自然博物館.
- 5) Manconi, R. & R. Pronzato. 1996. Geographical distribution and systematic position of *Sanidastra yokotonensis* (Porifera:Spongillidae). Bulletin de Institut Royal des Sciences Naturelles de Belgique, Biologie 66:219-225.
- 6) Volkmer-Ribeiro, C. & Y. Watanabe. 1983. *Sanidastra yokotonensis*, n. gen. and n. sp. of freshwater sponge from Japan. Bulletin of the National Science Museum, Tokyo, Ser. A, 9: 151-159.
- 7) 鳥根県環境生活部自然環境課. 2014. 改訂 しまねレッドデータブック 2014 動物編〜鳥根県の絶滅のおそれのある野生動物〜. 318 pp., 鳥根県環境生活部.
- 8) 鳥取県生活環境部公園自然課. 2012. レッドデータブックとっとり改定版ー鳥取県の絶滅のおそれのある野生動物ー. 337 pp., 鳥取県生活環境部.

刺胞動物門

- 1) 岡田 要・内田清之介・内田 亨. 1965. 新日本動物図鑑 [上]. 679 pp., 北隆館.
- 2) 菊池泰二・菊池昶史. 1967. 茨城県潤沼の底生動物相, その春季相について. 日本生態学会誌, 17: 63-69.

扁形動物門

- 1) 奥川一之助. 1973. 扁形動物: 渦虫類. 上野益三(編). 「日本淡水生物学」, pp. 207-249, 図鑑の北隆館.
- 2) 茅根重夫. 2009. 茨城県産淡水・汽水性プラナリア類. 「茨城県自然博物館総合調査報告書ー2008年茨城県の昆虫類および無脊椎動物の動向ー」, pp. 69-72, ミュージアムパーク茨城県自然博物館.
- 3) Ijima, I. & T. Kaburaki. 1916. Preliminary descriptions of some Japanese triclad. Annotationes Zoologicae Japonenses, 9: 153-171.
- 4) 川勝正治・堀越 功. 1966. カントウイドウズムシの再発見. 遺伝, 20(10): 13-16.
- 5) 川勝正治. 1993. 希少種カントウイドウズムシ. 上野俊一(編). 「滅びゆく日本の動物 50 種」, pp. 166-168, 築地書館.
- 6) 常陽銀行. <http://www.joyobank.co.jp/news/> (2014年3月24日閲覧).
- 7) 茅根重夫. 2014. カントウイドウズムシの保護. 菅生沼 News (243): 2-3, 菅生沼に親しむ会.

紐形動物門

- 1) Iwata, F. 1970. On the brackish water nemerteans from Japan, provided with special circulatory and nephridial organs useful for osmoregulation. Zoologischer Anzeiger, 184: 133-154.
- 2) 菊池泰二・菊池昶史. 1967. 茨城県潤沼の底生動物相, その春季相について. 日本生態学会誌, 17: 63-69.
- 3) Nanami, A., H. Saito, T. Akita, K. Motomatsu & H. Kuwahara. 2005. Spacial distribution and assemblage structure of macrobenthic invertebrates in a brackish lake in relation to environmental variables. Estuarine, Coastal and Shelf Science, 63: 167-176.

軟体動物門(巻貝類)

- 1) 坂寄 廣. 1992. 茨城の陸産貝類. 茨城県高等学校教育研究会生物部(編)「茨城の生物 第3集」, pp. 230-235, 茨城県高等学校教育研究会生物部.
- 2) 財団法人自然環境研究センター. 2010. 陸産及び淡水産貝類. 財団法人自然環境研究センター(編)「自然環境保全基礎調査 動物分布調査 日本の動物分布図集」, pp. 723-1015, 平凡社.
- 3) 芳賀拓真. 2012. 貝類. 稲葉 修(編)「阿武隈高地の生き物たち」, p. 15, 南相馬市博物館.
- 4) 叶野勝雄編. 1995. 茨城県及び鹿島灘周辺地域産軟体動物目録. 88 pp., 著者自刊.
- 5) 田代美穂・富山清升・森野 浩. 2001. 潤沼水系におけるカワザンショウガイの分布と各地域集団の個体群構造. Venus, 60: 79-91.
- 6) 叶野勝雄. 1981. 茨城県産有殻軟体動物(貝類)相について. 茨城県高等学校教育研究会生物部(編)「茨城の生物 第2集」, pp. 296-309, 茨城県高等学校教育研究会生物部.
- 7) 環境省自然環境局生物多様性センター. 2002. 財団法人自然環境研究センター(編)「生物多様性調査 動物分布調査(陸産及び淡水産貝類) 報告書 上巻/2分冊の1」, 655 pp., 環境省自然環境局生物多様性センター.
- 8) 波部忠重. 1961. 地下水産の2新巻貝. Venus, 21: 274-278.
- 9) 井出 潔. 1936. 茨城県下ニ於ケル肝臟「ガストマ」ノ分布ニ就テ. 細菌學雜誌, 487: 608-619.
- 10) Pilsbry, H. A. 1901. New Japanese marine, land and fresh-water Mollusca. Proceedings of the Academy of Natural Sciences of Philadelphia, 53: 385-408, pls. 19-21.
- 11) 実川 渉. 1953. 利根川下流地方に於ける肝吸虫症の疫学的研究. 千葉医学会雑誌, 29: 25-32.

- 12) Ritchie, J. S., G. W. Hunter, K. Nagano, & C. Pan. 1953. The distribution of the snail *Oncomelania nosophora*, intermediate host of *Schistosoma japonicum*, along the Tone River, Japan. *The American Journal of Tropical Medicine and Hygiene*, 2: 915-925.
- 13) 宮川米次・溝淵忠雄, 1914. 茨城縣下ニ於ケル日本住血吸蟲病の蔓延ニ就テ. *医事新聞* 893(80): 1-5.
- 14) 安羅岡一男・入江勇治. 1986. 利根川および荒川水系における日本住血吸虫症流行の消長. *公衆衛生*, 50: 699-702.
- 15) 小林照幸 (編). 1998. 死の貝. 240 pp., 文藝春秋.
- 16) Pilsbry, H. A. 1901. New land Mollusca from Japan and the Loo Choo Islands. *Proceedings of the Academy of Natural Sciences of Philadelphia*, 32: 344-353.
- 17) Ueshima, R. 1995. Rediscovery of *Neosuccinea kofui* Patterson, 1971 with notes on the taxonomic position of "*Succinea*" *lyrata* Gould, 1859 and "*S.*" *horticola* Reinhardt, 1877. *Venus*, 54: 161-173.
- 18) 岡山県環境文化庁自然環境課 (編). 2010. 岡山県版レッドデータブック 2009 絶滅のおそれのある野生生物. 416 pp., 岡山県環境文化庁.
- 19) 東 正雄 (編). 1995. 原色日本貝類図鑑 増補改訂版. xvi + 345 pp., 80 pls., 保育社.
- 20) 反田栄一. 1973. 八溝山地の陸貝 2, 3 について. *かいなかま*, 7(3): 7-12.
- 21) 湊 宏. 1984. 筑波山のキセルガイ類. *ちりぼたん*, 14(4): 89-91.
- 22) 湊 宏. 1989. 茨城県北部のハブタエギセル. *ちりぼたん*, 20(3): 55-56.
- 23) 小松茂美. 2003. 筑波山の陸産貝類 — その 2 —. *ひたちおび*, (92/93): 44-45.
- 24) 河辺訓受. 2006. 北茨城にハブタエギセルを求めて. *ひたちおび*, (104): 18-21.
- 25) 芳賀和夫. 1988. 筑波山の動物. *日本の生物*, 2: 35-41.
- 26) 栃木県. <http://www.pref.tochigi.lg.jp/shizen/sonota/rdb/> (2014 年 9 月 26 日閲覧).
- 27) 稲葉 修 (編). 2013. 平成 25 年特別展 福島に生きる. 「福島県の野生生物とナチュラリストたち」, 19 pp., 南相馬市博物館.
- 28) Martens, E. von. 1877. Eine Uebersicht über die von den Herren Dr. Fr. Hilgendorff und Dr. W. Dönitz in Japan gesammelten Binnenmollusken. *Sitzungsberichte der Gesellschaft Naturforschender Freunde zu Berlin*, 1877: 97-123.
- 29) 河辺訓受・大久保院司. 2008. 筑波山陸貝観察調査会報告. *ひたちおび*, (109): 36-37.
- 30) 大谷ジャーメンウィリアム・石田未基・西 浩孝. 2004. レンズガイ島根県に産す. *ちりぼたん*, 35(2): 47-48.
- 31) Sorita, E. 1986. Studies on species of the genus *Nipponochloritis* Habe, 1955 from mainly Kanto District, Honshu, Japan—1. A new subspecies of *Nipponochloritis pumila* (Gude, 1902) and a new subspecies of *N. bracteatus* (Pilsbry, 1902). *Venus*, 45: 99-108.
- 32) 茨城県生活環境部環境政策課 (編). 2000. 茨城における絶滅のおそれのある野生生物 (動物編) 茨城県版レッドデータブック. 195 pp., 茨城県生活環境部環境政策課.
- 33) 独立行政法人 水資源機構 (編). 2012. 利根川河口堰定期報告書. 330 pp., 独立行政法人水資源機構.
- 34) 亀田勇一・川北 篤・加藤 真. 2008. 「ホラアナゴマオカチグサ」は洞窟ごとに別種である. 日本貝類学会創立 80 周年記念大会 (東京) 研究発表要旨. *Venus*, 67: 99.
- 35) 芳賀拓真・池澤広美. 2012. 叶野コレクションが示す茨城県沿岸の貝類相. 日本貝類学会平成 24 年度大会 (東京) 研究発表要旨. *Venus*, 71: 126.
- 36) ミュージアムパーク茨城県自然博物館 (編). 2012. 第 55 回企画展 不思議いっぱい! 貝たちの世界 — 蝸牛から鳥賊・蛸まで —. 38 pp., ミュージアムパーク茨城県自然博物館.
- 37) 日本ベントス学会 (編). 2012. 干潟の絶滅危惧動物図鑑 — 海岸ベントスのレッドデータブック. 285 pp., 東海大学出版会.
- 38) 早瀬善正・多田 昭. 2010. 関東地方に分布するピロウドマイマイ属. *かきつばた*, (35): 19-27.
- 39) 二瓶直子・浅海重夫. 1972. 日本住血吸虫症の医学地理学的研究 — ミヤイリガイの分布を規定する地形・土壌要因について (1) —. *地理学評論*, 45 (6): 391-410.
- 40) 横田 謙. 1985. 小林晴治郎博士回顧録 (3) 伝研・北研時代. *目黒寄生虫館ニュース*, 159:2-5
- 41) 坂寄 廣. 1987a. 茨城の陸産貝類 (1), *茨城生物*, (11): 52-53.
- 42) 坂寄 廣. 1987b. 茨城の陸産貝類, 私のフィールドノートより - III -, 陸産貝類と大型土壌動物の調査結果について -, *茨城県立土浦第三高等学校紀要*, (5): 17-21.
- 43) 坂寄 廣. 1989. 茨城の陸産貝類 (3). *茨城生物*, (13): 3-5.

軟体動物門(二枚貝類)

- 1) 茨城県生活環境部. 1995. 茨城県特定動植物分布調査報告書 2, 茨城県の特定動植物の分布 動物編 (平成 5・6 年). 417 pp., 茨城県生活環境部.
- 2) 稲葉 修. 1996. 阿武隈高地のカワシンジユガイ - 新発見地と保護について -. *茨城生物*, (17): 20-22.
- 3) 稲葉 修. 1999. 茨城県の在来淡水二枚貝類. *茨城生物*, (19): 25-39.
- 4) 茨城県生活環境部環境政策課 (編). 2000. 茨城における絶滅のおそれのある野生生物(動物編), 茨城県版レッドデータブック. 195 pp., 茨城県生活環境部.
- 5) 財団法人自然環境研究センター (編). 2002. 「生物多様性調査. 動物分布調査(陸産及び淡水産貝類) 報告書上巻/ 2 分冊の 1」. 655 pp., 環境省自然環境局生物多様性センター.

- 6) 稲葉 修. 2003. 阿武隈高地におけるカワシンジュガイの成長量, 野馬追の里原町市立博物館研究紀要, (6): 55-60.
- 7) 財団法人自然環境研究センター(編), 2010. 「陸産及び淡水産貝類」. 自然環境保全基礎調査, 動物分布調査, 日本の動物分布図表, pp. 723-1015, 平凡社.
- 8) 稲葉 修. 2012. 茨城県のカワシンジュガイ. 茨城生物, (32): 2-8.
- 9) 近藤高貴. 2008. 日本産イシガイ目貝類図譜. 日本貝類学会特別版出版物, 第3号, v+69 pp.
- 10) 萩原富司. 2014. 霞ヶ浦に接続する余郷入り導水路におけるイシガイ科二枚貝の生息状況: 浚渫土砂からの推定. 伊豆沼・内沼研究報告, 8: 57-66.
- 11) 沼澤 篤・大久保裕司・萩原富司・浜田篤信. 1994-1995. 霞ヶ浦・北浦における貝類生息調査報告, 6・7号, PP. 105-113.
- 12) 環境を創る日立市民会議(編), 1993. 日立の磯の動植物, 239 pp., 日立市役所.
- 13) 日本ベントス学会(編), 2012. 干潟の絶滅危惧動物図鑑—海岸ベントスのレッドデータブック. 285 pp. 東海大学出版会.

環形動物門(多毛類)

- 1) 日本ベントス学会(編), 2012. 干潟の絶滅危惧動物図鑑. 285 pp. 東海大学出版会.
- 2) 菊池昶史. 1959. イトメ *Tylorrhinchus heterochaetus* Quatrefages の生態学的研究 I. 茨城県潤沼における生殖群泳. 茨城大学理学部紀要(自然科学), 9: 25-37.
- 3) Sato-Okoshi, W. 2000. Polydoridae species (Polychaeta: Spionidae) in Japan, with descriptions of morphology, ecology and burrow structure. 2. Non-boring species. Journal of the Marine Biological Association of the United Kingdom, 80: 443-456.
- 4) 菊池泰二・菊池昶史. 1967. 茨城県潤沼の底生動物相, その春季相について. 日本生態学会誌, 17: 63-69.
- 5) 内田紘臣. 1992. 環形動物多毛綱. 西村三郎(編著) 原色検索日本海岸動物図鑑 [I], pp. 310-373, 保育社.
- 6) Nanami, A., H. Saito, T. Akita, K. Motomatsu & H. Kuwahara. 2005. Spatial distribution and assemblage structure of macrobenthic invertebrates in a brackish lake in relation to environmental variables. Estuarine, Coastal and Shelf Science, 63: 167-176.
- 7) 環境省自然環境局生物多様性センター. 2007. 第7回自然環境保全基礎調査. 浅海域生態系調査(干潟調査) 報告書. 235 + 99pp. + CD, 富士宮.

節足動物門(甲殻類)

- 1) Morino, H. 1993. A new species of the genus *Jesogammarus* (Amphipoda: Anisogammaridae) from brackish waters of Japan. Publication of Itako Hydrobiological Station, 6: 9-16.
- 2) Nunomura, N. & M. Hagino. 2000. A new species of the genus *Cyathura* from the Lake Kasumigaura, Ibaraki Prefecture, Middle Japan. Bulletin of Toyama Science Museum, 23: 5-9.
- 3) 豊田幸詞・関慎太郎(著)・駒井智幸(監) 2014. 日本産淡水性・汽水性甲殻類 102 種 「日本の淡水性エビ・カニ」, 255 pp., 誠文堂新光社.
- 4) 浜野龍夫. 1996. 川エビの生活と魚道—稚エビは夜中に海からあがってくる—. 多自然研究, (7): 5-9.
- 5) 茅根重夫・池澤広美・今村 敬. 2010. 茨城県における淡水エビ類(甲殻綱, 十脚目, ヌマエビ科・テナガエビ科)の分布記録. 茨城県自然博物館研究報告, (13): 85-92.
- 6) 林 健一. 2007. 日本産エビ類の分類と生態 II. コエビ下目(1). 292 pp., 生物研究社.
- 7) 千葉県環境生活部自然保護課. 2011. 千葉県の保護上重要な野生生物—千葉県レッドデータブック— 動物編 2011年改訂版. 538 pp., 千葉県環境生活部.
- 8) 三浦知之. 2008. 干潟の生き物図鑑. 197 pp., 南方新社, 鹿児島.
- 9) 日本ベントス学会(編), 2012. 干潟の絶滅危惧動物図鑑—海岸ベントスのレッドデータブック. 285 pp., 東海大学出版会.
- 10) 三宅貞祥. 1983. 原色日本大型甲殻類図鑑 II. 186 pp., 保育社.
- 11) 井上久夫・叶野勝雄・鴨川 充・高塩 修・日賀野晴彦・池澤広美・森野 浩. 2009. 茨城県茂宮川河口干潟および沖合の海産無脊椎動物. 茨城県自然博物館第4次総合調査報告書, pp. 431-462, ミュージアムパーク茨城県自然博物館.
- 12) 建設省霞ヶ浦工事事務所・水資源開発公団霞ヶ浦開発建設所. 1973. 霞ヶ浦生物調査報告書. 191 pp., 建設省霞ヶ浦工事事務所・水資源開発公団霞ヶ浦開発建設所.
- 13) 日本河川協会. 1972. 霞ヶ浦生物調査中間報告.
- 14) 津田松苗(編). 1975. 日本湖沼の診断—富栄養化の現状—. 232 pp.
- 15) 小林 哲. 2011. モクズガニ類の侵略の生物学—I. モクズガニ類の分類学: 侵略的外来種チュウゴクモクズガニと日本の在来種モクズガニ. 生物科学, 63: 42-54.

苔虫動物門

- 1) 織田秀実. 1990. 日本の淡水コケムシ. 日本の生物, 4: 50-57.
- 2) 広瀬雅人. 2012. 日本産淡水コケムシ類の分類と同定. タクサ(日本動物分類学会誌), (33): 17-32.
- 3) 広瀬雅人・池澤広美・兼子尚知・馬渡峻輔. 2006. 茨城県の淡水コケムシ—分布と水質—. 茨城県自然博物館研究報告, (9): 31-46.

和名索引

[ア]

アイシマトビケラ	239
アイヌハンミョウ	189
アイノミドリシジミ	223
アオシギ	74
アオスジクモバチ	250
アオバズク	58
アオハダトンボ	139
アオヘリアオゴミムシ	181
アオマダラタマムシ	188
アオヤンマ	143
アカアシシギ	67
アカウミガメ	85
アカエゾゼミ	166
アカガネクイハムシ	205
アカショウビン	50
アカツキシロカゲロウ	130
アカツヤドロムシ	182
アカテガニ	317
アカハライモリ	93
アカヒレタビラ	105
アサカミキリ	183
アシナガミゾドロムシ	193
アズキヘリカメムシ	163
アズマヒキガエル	95
アブクマホラヒメグモ	255
アマクサヤドリコハナバチ	246
アマサギ	64
アヤホソバヒメカゲロウ	177
アリアケモドキ	312
アリスイ	80

[イ]

イカルチドリ	65
イシガイ	309
イシハラカメムシ	164
イシマキガイ	281
イソコモリグモ	252
イチモジヒメヨトウ	229
イドミミズハゼ	118
イトメ	310
イナゴモドキ	160
イヌワシ	57
イマムラムシ	304
イワヒバリ	51

[ウ]

ウスイロオナガシジミ	223
ウスズミカレハ	233
ウスバアゲハ (ウスバシロチョウ)	212
ウスバカマキリ	161
ウスミモンキリガ	236
ウズラ	62
ウツセミカジカ	108
ウマノオバチ	245

ウミガラス	79
ウメムラシタラ	296
ウラキンシジミ	220
ウラギンスジヒョウモン	221
ウラクロシジミ	224
ウラゴマダラシジミ	224
ウラジロミドリシジミ	216

[エ]

エグリゴミムシ	201
エサキアメンボ	165
エゾアカヤマアリ	244
エゾヒメベッコウ	302
エゾミドリシジミ	225
エダヒドラ	276
エドハゼ	114
エナクリイロベッコウ	302

[オ]

オオアカゲラ	70
オオイチモンジシマゲンゴロウ	184
オオウスバカゲロウ	177
オオウラギンヒョウモン	211
オオキトンボ	131
オオクサキリ	153
オオクチフトカメムシ	173
オオクワガタ	189
オオコブスジコガネ	188
オオジシギ	49
オオシロテンクチバ	236
オオセスジイトトンボ	133
オオセッカ	59
オオソリハシシギ	67
オオタカ	76
オオタキコギセル	295
オオタニシ	304
オオチャイロハナムグリ	190
オオチャバネヨトウ	229
オオツノカメムシ	175
オオネクイハムシ (オオミズクサハムシ)	192
オオハシシギ	66
オオヒカゲ	227
オオヒシクイ	51
オオヒラタトックリゴミムシ	182
オオマルハナバチ	248
オオミズスマシ	199
オオムラサキ	222
オオモノサシトンボ	134
オオヨシゴイ	48
オオヨシノボリ	113
オオルリハムシ	192
オオワシ	56
オグロシギ	75
オシドリ	72
オジロワシ	50

オゼイトトンボ	140
オツネトンボ	135
オナガシジミ	225
オナガミズアオ	234
オビヒメコメツキモドキ	197

【カ】

カイツブリ	73
ガガンボモドキ(ヤマトガガンボモドキ)	210
カジカ	113
カジカガエル	94
カスミササキリ	154
カズメウズムシ	277
カタビロハムシ	208
カタヤマガイ (ミヤイリガイ)	281
カッコウ	54
カネコトタテグモ	253
カミヤコガシラミズムシ	184
ガムシ	193
カヤコオロギ	158
カヤネズミ	42
カラスガイ	306
カラスシジミ	213
ガロアムシ	152
カワアイサ	73
カワアナゴ	117
カワグチツボ	282
カワシンジュガイ	306
カワネズミ	38
カワヤツメ	115
カワラバッタ	156
カンテンコケムシ	319
カントウイドウズムシ	277

【キ】

キアシナガバチ	246
キイトトンボ	140
キイロサナエ	145
キイロジョウカイ	203
キイロテントウダマシ	206
キイロヤマトンボ	138
キシノウエトタテグモ	253
キスジウスキヨトウ	235
キセルモドキ	294
キトンボ	135
キノボリトタテグモ	254
ギバチ	107
キバネセセリ	214
キベリクロヒメゲンゴロウ	198
キベリマルクビゴミムシ	194
キボシチビコツブゲンゴロウ	186
キボシツブゲンゴロウ	200
キリアイ	55
ギンイチモンジセセリ	219
キンイロネクイハムシ	208

キントキクサカゲロウ	176
キンブナ	111
ギンボシツツトビケラ	238

【ク】

クシヒゲカゲロウ	176
クズハキリバチ	250
クツワムシ	154
クマタカ	57
クリイロカワザンショウ	286
クルメサヨリ	112
クロゲンゴロウ	199
クロサギ	53
クロサンショウウオ	92
クロシジミ	213
クロツヤコオロギ	153
クロツラヘラサギ	54
クロマルハナバチ	251
クロミドリシジミ	226

【ケ】

ケイマフリ	79
ケスジドロムシ	196
ケリ	74
ゲンゴロウ	185
ゲンジボタル	202

【コ】

コアジサシ	68
コアシダカグモ	256
コウフオカモノアラガイ	300
コウベツブゲンゴロウ	195
コエゾゼミ	166
コオイムシ	168
コオナガミズスマシ	196
コガタコオロギ	157
コガタノゲンゴロウ	183
コガネグモ	255
コキマダラセセリ	219
コクガン	52
ゴクラクハゼ	104
コケラマイマイ	299
コサメビタキ	81
コシアカツバメ	71
ゴジュウカラ	60
コジュリン	72
コテングコウモリ	37
コノシメトンボ	146
コノハズク	58
コバネアオイトトンボ	132
コブヤハズカミキリ	180
ゴマガイ (ウゼンゴマガイ)	291
コマドリ	61
コミズスマシ	185
コメツキガニ	314

コヨシキリ	60	タナゴ	105
		タマシギ	55
[サ]		[チ]	
サイジョウハムシドロバチ	241	チゴガニ	314
ササゴイ	53	チビアオゴミムシ	194
サシゲチビタマムシ	205	チビクスイヒモムシ	279
サシバ	69	チャイロクチプトカメムシ	174
サトウナガタマムシ	209	チャマダラセセリ	214
サビシラトリ	307	チュウヒ	56
サラサヤンマ	143	チョウモウコヒゲナガトビケラ	240
サンカノゴイ	52		
サンショウクイ	71	[ツ]	
[シ]		ツキノワグマ	41
シダレイトゴカイの一種	310	ツクバハコネサンショウウオ	91
シノビアミメカワゲラ	151	ツクバヒロウドマイマイ	283
シマドジョウ	111	ツクバホソナガゴミムシ	200
シモフリクチプトカメムシ	169	ツチガエル	95
ジュウイチ	64	ツバメチドリ	68
ジュズカケハゼ	109	ツマグロキチョウ	216
ジョウザンミドリシジミ	221	ツヤヒメオオキノコ	206
ショウリョウバッタモドキ	159	ツルシギ	75
シラコバト	48		
シロウオ	108	[テ]	
シロカイメン	275	テラニシクサアリ	249
シロスジフデアシハナバチ	247		
シロスジフトハナバチ	244	[ト]	
シロチドリ	65	トウキョウサンショウウオ	93
シロマダラ	86	トウキョウダルマガエル	96
		トウキョウヒラマキ	299
[ス]		トゲアリ	245
スギハラクモバチ	251	トモエガモ	62
スジキビ	289	トモンハナバチ	243
スジグロチャバネセセリ	220	トラフトンボ	146
スジトビケラ	240	ドロオニスピオ	311
スジボソヤマキチョウ	215	トワダカワゲラ	150
スナガイ	284		
スナメリ	40	[ナ]	
スナヤツメ北方種	106	ナガイツツグモ	256
スネケブカヒロコバナカミキリ	204	ナガオカモノアラガイ	293
		ナカボシカメムシ	173
[セ]		ナガレエグリトビケラ	239
セアカオサムシ	201	ナギサスズ(ウミコオロギ)	158
セイタカシギ	66	ナゴヤサナエ	145
セグロイナゴ	159	ナタネキバサナギ	285
セスジイトトンボ	141	ナナホシクサカゲロウ	178
セスジガムシ	187	ナミコギセル	295
ゼニタナゴ	102	ナミルリモンハナバチ	248
[タ]		[ニ]	
タカキビ	297	ニシン湖沼系群	102
タカチホヘビ	85	ニッコウイワナ	103
タカネトンボ	137	ニッコウヒラベッコウ	303
タガメ	171	ニッポンハナダカバチ	243
タゴガエル	94	ニトベギングチ	249

ニホンイシガメ	86
ニホンイトヨ	116
ニホンウナギ	110
ニホンカモシカ	42
ニホンスッポン	87
ニホンモモンガ	39
ニホンリス	39

[ヌ]

ヌカエビ	315
ヌマエビ	312

[ネ]

ネアカヨシヤンマ	136
ネキトンボ	147
ネグロアツバ	237
ネスジシャチホコ	230

[ノ]

ノコバアオシヤク	232
ノジコ	81

[ハ]

ハイタカ	80
ハクサンベッコウ	301
ハコネサンショウウオ	91
ハスオビアツバ	231
ハチクマ	69
ハッチョウトンボ	148
パツラマイマイ	296
ハナサラゲモ	254
ハネナシアメンボ	168
ハネビロエゾトンボ	137
ババアメンボ	162
ハブタエギセル	288
ハマガニ	313
ハマシギ	76
ハマスズ	155
ハヤシミドリシジミ	217
ハヤブサ	70
ハラナガハムシドロバチ	242
ハラビロトンボ	148
ハリサシガメ	167
ハルゼミ	171
バンダイハコネサンショウウオ	92

[ヒ]

ヒウラカメムシ	167
ヒクイナ	49
ヒゼンキビ	298
ヒナコウモリ	41
ヒナタムシヤドリカワザンショウ	292
ヒヌマイトトンボ	134
ヒヌマセトトビケラ	238
ヒヌマヒモムシ	279

ヒヌマヨコエビ	315
ヒバカリ	87
ヒメアカネ	139
ヒメアマツバメ	78
ヒメウ	63
ヒメカサキビ	297
ヒメカレハ	234
ヒメキイロマグソコガネ	186
ヒメクスイヒモムシ	280
ヒメギセル	294
ヒメキマダラヒカゲ	222
ヒメシジミ	217
ヒメシロチョウ	212
ヒメテンコケムシ	319
ヒメハリマキビ	298
ヒメハルゼミ	170
ヒメヒラマキミズマイマイ	300
ヒメビロウドカミキリ	181
ヒメマダラナガカメムシ	172
ヒモハゼ	110
ヒョウモンモドキ	211
ヒラドカワザンショウ	286
ヒラベッコウ	303
ヒラマキミズマイマイ	292
ヒラマキモドキ	293
ビリンゴ	114
ヒロオビシリアゲ	210

[フ]

フジミドリシジミ	226
フタテンカメムシ	164
フタテンツブリガ	231
フタバカクガニ	318
フタマタスナウミナナフシ	317
フチグロトゲエダシヤク	233
フトハサミツノカメムシ	170
フネドブガイ	309
フライソニアミメカワゲラ	150

[ヘ]

ベーツヒラタカミキリ	191
ベッコウトンボ	132
ベニイトトンボ	133
ベニモンマキサシガメ	172
ヘリカメムシ	163

[ホ]

ボウズハゼ	117
ホオアカ	61
ホシチャバネセセリ	215
ホシトガリハナバチ	247
ホッケミズムシ	162
ホトケドジョウ	107
ホラアナゴマオカチグサ	282
ホンドオコジョ	43

[マ]			
マエアカヒトリ	228	ヤマタニシ	290
マエジロシヤチホコ	230	ヤマトアシナガバチ	241
マサゴハゼ	104	ヤマトオサガニ	313
マシジミ	308	ヤマトオサムシダマシ	209
マダラヤンマ	144	ヤマトキバサナギ	305
マツカサガイ	307	ヤマトスナハキバチ	242
マツムシ	157	ヤマトセンブリ	179
マミジロ	77	ヤマトタマムシ	202
マメタニシ	305	ヤマトヒメメダカカッコウムシ	203
マルガタゲンゴロウ	195	ヤマトマダラバツタ	156
マルケシゲンゴロウ	197	ヤマネ	38
マルタニシ	291	ヤママユ	235
マルチビゲンゴロウ	198	ヤマメ無斑型	103
マルナタネ	301	ヤリタナゴ	106
		[ユ]	
[ミ]		ユビナガコウモリ	37
ミズコハクガイ	288	ユミモンクチバ	237
ミズゴマツボ	287	[ヨ]	
ミゾゴイ	77	ヨコトネカイメン	275
ミゾレヌマエビ	316	ヨコハマシジラガイ	308
ミツシロモンノメイガ	232	ヨコヤマヒゲナガカミキリ	191
ミツバヤツメ	115	ヨシゴイ	63
ミツモンケンモン	228	ヨシダカワザンショウ	284
ミナミメダカ	112	ヨタカ	78
ミミズハゼ	109	ヨツボシカミキリ	187
ミヤケミズムシ	165	ヨツボシカメムシ	169
ミヤコタナゴ	116	ヨツボシトンボ	149
ミヤマアカネ	147	[リ]	
ミヤマウズムシ	278	リスアカネ	138
ミヤマカラスシジミ	218	リュウキュウチビスズ(ヤマトチビスズ)	155
ミヤマダイコクコガネ	190	[ル]	
		ルリナガクチキ	207
[ム]		ルリボシヤンマ	144
ムカシトンボ	142	[レ]	
ムササビ	40	レンズガイ	289
ムシオイガイ	285	[ワ]	
ムスジイトトンボ	141	ワスレナグモ	252
ムナグロチャイロテントウ	207	ワタラセハンミョウモドキ	180
ムモンアカシジミ	218	ワタラセミズギワアリモドキ	204
[メ]			
メガネサナエ	131		
[モ]			
モイワサナエ	136		
モートンイトトンボ	142		
モクズガニ	316		
モノアラガイ	287		
モンキツノカメムシ	174		
[ヤ]			
ヤセキセルモドキ	283		
ヤマキサゴ	290		
ヤマセミ	59		

茨城における
絶滅のおそれのある野生生物
動物編

2016年改訂版
(茨城県版レッドデータブック)

発行	平成28年3月
編集・発行	茨城県生活環境部環境政策課 〒310-8555 水戸市笠原町978番6 TEL. 029-301-1111 (代表)
印刷所	山三印刷株式会社 〒311-4153 水戸市河和田町4433-33 TEL. 029-252-8481

